
妹の異世界譚

ポンカス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹の異世界譚

【Nコード】

N27201

【作者名】

ポんカス

【あらすじ】

大学二年生（本来は三年生。留年一年目）の城山仁は、突然異世界に召還される。精霊と呼ばれる未知の生物が存在する世界で、仁は「フロイライン」と言う名の犯罪組織と戦うことを依頼される。それを洩々ながら了承した仁は妹、奈々華と合流する。仁と奈々華の関係は、三年前から気まずい状態になっていたのだが、成り行きで一つの部屋に同居することになる。仁は心労と、戦闘の果てに妹とどう向き合っていくのか。「兄の異世界譚」よりも長くて暗い話です。

序章 第一話：招聘

視界が徐々に色を取り戻し始めると、仁の目の前に建物が見えた。ヨーロッパの古城を思わせる荘厳な建物。岩を幾重にも積み重ねて造られている。

仁が首を上に向けないと全貌は把握しきれない大きさで、天辺の方は尖塔になっている。

辺りを見回しても、良く手入れされた芝生が一面に広がっていて、遠くに木立が見えるだけ。

遙か後方には黒い荘厳な門扉が閉じられている。何者の進入も外出も拒むような意思すら感じられるようだった。どうやら城の中庭らしいと、仁はあたりをつけた。

家の近所のコンビニで雑誌を立ち読みしていた仁は、突然エレベーターに乗ったような浮遊感と視界が白むのを感じて、気が付くところになっていた。しかし、神隠しのような異常事態にも仁はさして慌てた風はなかった。

仁は三年前にも同じような現象を体験したことがあった。

仁のいた世界とは似ても似つかない世界。宗教国家として存在する日本。

全く違う分岐を遂げ、全く違う時間軸を推移していく異世界。嘘のような本当の話。

仁は軽い足取りで、城の中門らしき木戸を目指して歩き出した。

木戸をくぐると、石造りの建物独特のひんやりした空気が仁を包んだ。

左右を見回しても遙か彼方まで続く石の壁と廊下。廊下には赤い絨毯が敷き詰められている。人の気配はおろか、動物の気配さえ感じられなかった。

「誰ぞ、誰ぞおらぬか？」

「申し訳ありません。出迎えが遅れました」

仁のふざけた問いに答える声。弾かれたように後ろを振り返った仁の目に、壮年の女性が映った。真っ白な頭と、若い頃はさぞ美人だったろうと思わせるような顔の造形。老婦人という言葉が似合いそうな女性だった。

「びっくりさせないで下さい。死んだらどうするんですか？」

仁は減らず口が様になる男だった。

「重ねて、申し訳ありません。私、木室カエデと申します。城山仁さんですね？」

仁が首肯すると、こちらですと、木室と名乗った老婦人が廊下の左手に向かって歩き出した。

「どこに行くんですか？」

「学園長室でございます」

木室は顔だけ振り返って言った。

「学園長？」

「はい。当学園は、数多くの優秀な精霊使いを輩出している精霊魔術学園です」

「せいれいまじゅつ……」

流石の仁もまさか魔法だとか精霊だとか、非科学的な単語は想定していなかったらしく、阿呆のように口を開けていた。

廊下を左手に三十分ほど歩くと、行き止まりにぶちあたった。

その右手にやはり石造りの階段がある。

木室という人物は非常に気持ちの良い対応をする人間で、仁も不平を漏らすことはなかった。

三階に上がると、これまでとは打って変わって金色の絨毯の敷かれた廊下が広がっていた。

その中央あたり、一際高級感漂う黒塗りの木扉があった。

真鍮のドアノブの下に輪っかがついている。それを持って木室が学

園長室のドアを叩いた。

「城山様をお連れしました」

「入れ」

中からくぐもった女の声が聞こえてくる。仁はさほど緊張した様子もなく、木室に続いて学園長室に吸い込まれていった。

序章 第二話：世界（前書き）

第二段落以降、宗教上の事情などから、一部不快な思いをされる方がいらっしやるかも知れません。また即興で組み立てた設定です。で、あまり深く考えずに読んで頂けると幸いです。

あくまでもフィクションですので、ご容赦いただきますようお願いします。

序章 第二話：世界

学園長と言うからには、威厳たっぷりな壮年の男性を仁は思い浮かべていた。

三十畳ほどの部屋には、壁に鹿の剥製やどこが芸術的なのかもわからない壺。嫌味にならない程度に洗練された調度品の数々を目の端に捉えながら、仁は部屋の中央に置かれた黒い牛革のソファに座っている女性に顔を向けていた。

「城山仁だな？」

キレイに整った顔立ちは、どこか冷たい印象を受ける。歳の頃は仁と同じくらいか。仁が黙って首肯する。

「あんたが俺を呼んだのか？」

「そうだ…… 君に倒して欲しいヤツがいる」

女性がそう言って足を組みなおす。心もち体を前に乗り出した。

「イヤだ」

「ど…… どうしてだ？ と言うかまだ詳しい話もしていないうちから……」

「断るって言ってんだ。どうして俺が見ず知らずのあんたの頼みを聞かなくちゃいけない？」

まさかいきなり断られるとは思っていなかったらしく、狼狽する女をよそに仁は涼しげに言葉を紡ぐ。

「君はこの学園に入学し、精霊魔術を学んだ後……」

「だから断るってんだろ。こっちは大学留年決まってんだよ。今度は高校生からやり直せって言うんか？ 人生ゲームやってんじゃねえんだよ。チクショウ！」

本室の話によると、この学園は小中高一貫らしい。

「……報酬はそちらの言い値を用意しよう」

女が静かに言った言葉に、仁は減らず口を噤んだ。言い値を出すとは、かなりののっぴきならない事態に追い込まれているということだ。

仁の実力を正當に評価しているとも言える。

「わかったよ……。話だけでも聞こうか」

鼻から溜息を漏らした仁はやっと真剣な表情を作った。

今から二百年ほど前、世界で最初の魔術師が顕現した。名をアル・イヴン・サウードと言う。

彼は名前で察するのとおり、サウジアラビアの生まれで、敬虔なムスリムだったらしい。

幼少時から卓越した頭脳と、奇妙な術を操ることが出来、神童と謳われる。

サウードが十五歳のとき、イスラエルでアラブ側の大きな暴動が起こる。後に第五次インティファダと呼ばれるものだった。イスラエルがこれを武力で弾圧したのだが、これが数千人規模の死者、行方不明者を出す凄惨なものだったそうだ。

サウードは大きな衝撃を受けた。

既に形骸化していたPLOはおろか、アラブ諸国が何の支援も介入もしなかったからである。

同胞が異教徒に無残に殺されていくのをただ傍観しているだけ。

サウードは絶望し……。自分が腐敗したイスラーム世界を変えることを決意した。

まず、彼は王家に取り入った。元々地方の名家で生まれた彼は、十六の頃に王族の第五王妃と結婚する。

その卓越した頭脳を王は気に入り、次第に国政にまで彼に影響力を持たせるようになる。

宰相に近いポストに上り詰めた彼は、この時まだ十八の若さだった。その年、彼はある大きな演説を行う。歴史を変える大きな演説。

残念ながら原文はイスラーム圏の国の伝記にしか残っていないらしいが、概容はこうだ。

「我々の同胞であるところの、パレスチナの民が大いに苦しんでいる。諸君奮起せよ。」

激怒せよ。覚醒（啓発？）せよ。彼等は何一つとして、責められ、殺され、蹂躪されるようなことはしていない。全てはイスラエル側の義のない暴虐だ。ならばどうするべきか？

立ち上がれ。国益や、宗派など何の関係があるのか？同胞の敵は我等……イスラームの敵だ」

こうして始まった最悪の戦禍、第五次中東戦争（最後の中東戦争などと呼ばれる）。

イスラエルを支援したアメリカを始めとする先進各国は、サウード率いるアラブ連合軍に後塵を拝することとなる。彼の操る不可思議な術は、最先端の科学技術の粋を集めた兵器をもとせず、世界に大きな衝撃を与えた。

戦局に一筋の光が差したのは、戦争が始まって十年が経過した頃だった。

世界で二人目の魔術師、中谷慎二。なかやしんじ日本人だった。彼については実はほとんど素性が知れていない。

彗星のごとく現れた彼は一瞬のうちに戦局を五分に戻し、サウードとの一騎打ちに全てが委ねられることとなった。

彼等の異能の闘いは、三日三晩続いたという記録が残っている。

結果だけ記すと、彼等は相討った。双方が死亡、残されたのは焦土と化した世界。

そして中谷の残したく精霊の門と呼ばれる不思議な大岩。

二人の天才ほどの素養がなくても、ある程度の才能を持つ人間が精霊と契約するための補助装置。世界各地にそれと、多くの精霊魔術師が生まれることとなった。

序章 第三話：同居人

それから世界は科学技術と、精霊によってもたらされる魔法の力で目覚しい復興と発展を遂げた。

朝鮮戦争と、それに伴う戦争特需によって日本経済は復興の道を歩んだ。戦争と発展の相関は仁が知る限りでも枚挙に暇がない。だがしかし、新しい力は世界の発展に寄与するだけでは収まらない。皆が皆正しい倫理観を持つとは限らない。人を傷つけることにその力を利用する者が現れるのは必然。

「魔術師による犯罪集団…… フロイライン」

「そう。世界中が血眼になって捜しているにも関わらず、未だ足跡はつかめない」

女が難しい顔をして言う。

「幹部クラスになると、国連から多大な懸賞金をかけられている国際犯罪者だ」

仁は事情が飲み込んでいるのか、いないのか、後ろ頭を掻きながらつまらなさそうな顔で聞いている。

「その内の一人、煉獄のJ・J・ヒューイット」

それが仁の標的だった。名前だけ見るとアメリカ人か。

「恐らく偽名だと思うが……」

「まあとにかく、ソイツをぶっ飛ばせばいいんだろ？」

仁の声には全く気負いは感じられない。女は黙って首肯した。

「それじゃあ、やってくれるんだな？」

「まあ…… やれるだけやってみるさ」

初めてやるゲームの話でもしているような気軽さ。女は少し不安そうに眉を寄せた。

「それじゃあ、君の部屋は二階の一番左奥だ」

交渉が終わり、仁はとりあえずの部屋をあてがわれることになった。

どうもこの学園は全寮制らしく、他の生徒との相部屋になるとのこと。

「なあ…… 個室にならねえか？ 特待生とか何とか言っ

仁はさっきからそんなことばかりを言っている。彼の人生の中で、他人と同室で暮らすのは初めての経験なのだから無理もないのだが……

「ダメだ。君だけ特別扱いするわけにもいかない。君にはあくまでも一高校生として振舞ってもらう」

学園長の返事はその一点張りだった。ちなみに彼女の名は「坂城遊さかきゆ庵あん」と言うらしい。

「奇特にも君のようなオールドルキーと同室でも構わないと言ってくれる者がいただけ僥倖だろう？」

「俺だって好きでそんななったわけじゃないんだけどなあ」

言いながらも仁の頭は、まだ見ぬ同居人についてあれこれ想像を巡らせていた。

「とにかく、もう着いた。私は忙しいのでこれで失礼するから…… 仲良くやるんだぞ」

坂城はそれだけを言い残し、元来た道に戻っていく。背を向けたまま、ひらひらと手の平を振っている。

仁は溜息を一つ吐くと、目の前の扉を見た。

二階部分は、丸々生徒達の寮としてあてがわれているらしく、ここまで没個性の質素な扉がいくつも並んでいるのを仁は見ていた。茶色い木の扉と同質のドアノブ。

緩慢な手つきで、仁はそれを捻って戸を開けた。鍵はかかっていたなかった。

仁の視界に飛び込んできたのは、廊下と変わらない石造りの壁。キレイに整えられた家具の数々。

部屋の中央、ピンクのカーペットの真ん中に少女が座っていた。

艶やかな黒髪は腰のあたりで、軽くウェーブがかかっている。細く

高い鼻梁に、見開かれた綺麗な二重の双眸。小さな唇には薄くピンクがかったルージュが引かれている。

「君……俺の妹に似てるね」

序章 第四話：岩

「お兄ちゃん……」

どうやら他人の空似なんて馬鹿げた線は消えたらしい。少女、奈々華は躊躇^{ななか}いがちに仁に言葉をかけた。

「……」

何とも言えない空気。仁は怒ったように表情を失っている。一方の奈々華も何か言いかけて、口を開いては結局何も言葉を発することなく、閉じる。丸々三十秒以上沈黙が続いた。

「どうして、ここに居るんだ？」

先に口を開いたのは仁の方だった。責めるようなトーンにならないように、氣遣っているような雰囲気があった。だけど優しく問いかけていると言うには、ぎこちなさがある。

「……私も悪い魔法使いを倒すのに協力して欲しいって……」

奈々華も仁と同じような説明を受けた様子。仁が、そうかとだけ呟くと再び沈黙が訪れた。

「……」

「同室……」

「え？」

「同室でいいのか？」

仁は懐からタバコを取り出して、箱を開けることもなく、またしまった。

「うん…… お兄ちゃんは…… イヤ？」

「君がいいってんなら…… いいんじゃないか？」

仁は目を閉じて、眉間のあたりを掻きながら答えた。快諾には程遠い態度だった。

「仁さん、奈々華さん」

第三者の声が、部屋の戸をノックする音とともに聞こえてきた。そ

う言えばノックするのを忘れたな、と思って、仁はその理由に行き着いた。部屋の窓から外を見る。どう見ても昼時だ。

「準備が出来次第、私について来て下さい」

ドアを開けて覗いたのは、木室だった。多分構内を案内してくれるのだろう。

「俺はともかく、奈々華ちゃんは……」

「私も昨日来たばかりで、お兄ちゃんも呼ぶっていうから」

その時に一緒に回るつもりでいたということか。

「それで授業も受けてなかったのか…… ていうか授業ってあるんですよね？」

最後は木室に顔を向けて、仁が確認する。学園というからにはあるのだろうが、精霊魔術を学ぶというのがどういことなのか、さっぱり分からない。

「はい、ございます。今から行っていたくのは、その授業に出るための下準備の為の場所です」

下準備？ と鸚鵡返しの仁と奈々華を余所に、木室はただ黙って廊下を歩き始めた。

連れて来られたのは、学校の敷地の裏側。裏庭と呼ぶべき場所だろうか。

中庭と同じように芝生が生い茂り、飛び飛びに石畳が続いている。その一番奥に、大きな岩があった。仁の腰辺りまでありそうだ。封印の効力でもあるのだろうか、お札のようなものが貼られている。

「アレは？」

奈々華が当然の疑問を口にする。

「精霊の居る世界と、こちらの世界を結ぶ…… まあ、パワースポットのようなものと解して頂ければ」

「下準備ってのは、まさかその精霊と交信しろってことですか？」

仁の疑問には、何も答えずに木室が目を瞑る。

次の瞬間、木室の傍に小さな馬が現れた。背格好は木室の膝辺りま

でしかない。仁も奈々華も吃驚して口を大きく開いている。常人よりある程度、非科学的な現象に耐性のある二人をしても、突然の出来事に脳が事態を把握するのに時間を要した。

「雷馬らいばと呼ばれる精霊です」

体色は普通の馬と変わらない。茶色い肌に、茶色いタテガミまである。面長の顔も同様。ただ小さいだけ。

「先程のご質問の答えがまだでしたね…… ご明察です。あなた方には、このような精霊と契約をしていたかどうかになります」

仁と奈々華は何と言っているかわからず、木室の顔を見つめていた。

序章 第五話…精霊

木室の話では、素養のある者が岩に触れて念じると、その人間の本質に合った精霊がこちらの世界に顕現すると言うことだった。岩については様々な研究が行われているが、未だ万人を納得させられるような説明を得るには至っていないらしい。

奈々華が最初にやってみることになった。二人は素養があるとの、木室の弁ではあったが、奈々華はかなり緊張した面持ちで、言われた通り、大岩に向かい合った。

岩の表面に手を置く。

岩がぼんやりと白く光りだして……

やがて大きく光ったかと思うと、次の瞬間には岩は何事もなかったかのように、再び元のようになった。

「あれ…… 終わり？」

もっと何か、と言いかけて奈々華は口を開いたまま固まってしまった。

奈々華の傍に見たこともない生物が座っていた。

一見すると、白い猫。しかしどうしようもなく、仁や奈々華の知る猫とはかけ離れていた。

背中に体長ほどある、黄金の翼が二枚生えている。眩しいばかりに輝く翼をはためかせ、猫は優雅に毛繕いを始める。

「ゴールドシャムですね。素晴らしい」

木室だけが状況を冷静に捉えている。ゴールドシャムというのが、この猫、もとい精霊の名前らしかった。

「カワイイ……」

鳥のように、体毛の生えた翼を有する猫に奈々華はそっと近づく。

「かわいいのか、それ？」

小声で呟く兄の声が聞こえないのか、無視しているのか、奈々華は

そつとその猫を抱き上げた。

「はじめまして。あんたがあたしのご主人様だね？」

その声は仁のものでも、奈々華のものでも、木室のものでもない。キヤーと大きな悲鳴を上げて、奈々華が猫を放り出した。猫は空中で一回転すると、華麗に芝生の上に着地する。

「やれやれ……随分手荒じゃないか」

最早仁と奈々華の勘違いではない。やはり、口を動かして喋っているのは猫だった。

「最近の猫は喋るのか？」

この状況で軽口を叩けるほどに、冷静なのは仁。

「ゴールドシャムほどの精霊なら人語を解しますよ。知能の発達した精霊は人の言葉を理解するものもいるのです」

へえ、と感心したように頷く仁をよそ目に、奈々華はぺたんとその場にお尻をついた。

「意外に簡単なんだな」

仁はそんな感想を、独り言のように漏らした。岩に手を置いただけで、精霊が向こうからやってくる。

もっと儀式めいたものを想像していた仁は少し肩透かしを食らったようだった。

「簡単じゃないよ……びっくりして死ぬかと思った」

まだ奈々華は自分の精霊と少し距離を置いて立っている。

「仁さん」

木室が目で合図する。次は仁の番だ。

奈々華がしたのと同じように、仁もおもむろに岩に手を当てた。

「俺もカワイイのが出てくるんだろうか……」

「仁さん、集中して下さい」

木室の注意が飛んで、仁はバツが悪そうに顔を顰めて、それから目を閉じて岩に向かって念じた。

「俺の代わりに馬車馬のように働いてくれるヤツ出て来い！」

岩が黒く、大きな光を帯び始める。光と言う表現より闇が広がっていくような……

一際大きく輝いた後、光は立ち消えた。その後に残されていたモノに三人の目は釘付けになった。

赤い巨大な体躯。身の丈は三メートルはあるんじゃないだろうか。筋骨隆々の体に、太い丸太のような手足。体の作り自体は人と同じ二本の手と二本の足。三人が仰ぎ見るように首を空に向けた先に顔がある。鋭い牙が覗く口は血を吐くように赤い。憤怒のまま固まったような双眸は恐ろしいの一言。

仁と奈々華が知る語彙を用いて、一言で表すと……鬼。

「なんか俺のだけ違うな……」

序章 第六話：刀鬼

「むらくものかみかねいえ村雲守兼家 細の太刀」

鬼が想像外に流暢な日本語で呟いた。と言っても三メートルはゆうに越えるであろう体の天辺、口の動きから判断出来たわけではなく、野太い、この場に居る誰のものでもない声から推察しただけ。

「刀鬼…… ですね」

解説を入れた木室の声は少し震えている。

「トウキ？」

登記、投棄、冬季…… 仁は思案顔で聞き返した。

「刀に宿る鬼のことです。宿る刀は全て、世間一般では妖刀と呼ばれる部類のものだと……」

「妖刀……」

「ええ、特に村雲守と言えは…持つ者を狂気に至らしめると言われる妖刀中の妖刀」

木室はそこまで言うのと、あごに手を当て、まさかこんなとか、あの方に報告しなければとか、ぶつぶつと呟いている。

「お兄ちゃん……」

奈々華が不安そうな顔をするのも無理はない。妖刀、しかもかなりいわくつきのもの。心配ないよと、仁は笑って見せた。

「主よ…… 我と契約なされ」

鬼が巨体を動かし、片膝を立ててその場に跪く。そしてそのまま仁に向かって首を垂れた。

「契約？」

「そう、契約」

仁はその闇の眷属の巨体を見下ろしていた。奈々華が息を飲む。

「どうすればいいんだ？」

「我にこの世界に存在する証としての名を…」

木室もかろうじて頷いた。どうやら精霊との契約は、契約主が精霊に名をつけることで成立するらしい。

「そうだな…… 村雲とかでいいんじゃないの？」

「村雲…… 我の名は村雲。それで主との契約は満たされる」
そう言った瞬間、鬼の体が霧のような黒い闇に包まれた。

その霧が晴れると、芝生の上に仁の腰ほどまでであろうかという太刀が落ちていた。

黒い柄に黒い鞘。尋常ならざる空気を纏っている。

仁はその刀に何も感じないのか、ひょいと持ち上げると鞘に仕舞ったまま一、二度それを振るう。ぶんぶん大きな音を立てる刀は、まるで禍々しい声で鳴いているかのように奈々華には思えた。

「ふうん、結構使い易そう」

特に感慨もなく、仁はその刀をズボンのベルトに引っ掛けた。

木室の説明は以下のようなものだった。

精霊は六つの属性に分類される。それぞれ召還時に光る岩の色で判断する。また最初に呼応した精霊の属性はそのまま、その精霊魔術師の主属性となる。

赤…炎を司る。尽きせぬ情熱を持つ者。偏執と憤怒。

青…水を司る。常に冷静な心を持つ者。強かさと理性。

緑…風を司る。飄々として掴みどころのない者。自我と応変。

黄…雷を司る。穏やかな心に鋭い何かを持つ者。厭世と達観。

白…光を司る。常に希望を絶やさぬ者。慈愛と自愛。

黒…闇を司る。欺瞞と憎悪の中に生きる者。カリスマと暴力。

下に行くほど、珍しい。つまり相性が合致する者が少なく、黒魔術師は現在世界に一人もいないそうだ。

何はともあれ、仁と奈々華の精霊召還及び契約は終了し、奈々華は件の猫に＜シャルロット＞と名付けた、解散とあいなった。

序章 第七話：熱

大変だったね、と奈々華が呟いた。現在奈々華と兄の仁は自室へと戻っていた。

「……君はあんまり、この刀好きじゃないみたいだね」

仁は、腰から壁際に立てかけられた日本刀を見つめながら言った。相変わらずあまり手に取りたい雰囲気のものではない。鬼が宿る刀。奈々華もその刀に視線を合わせ、すぐに逸らした。

二人はテーブルに向かって互いに顔が見える位置に座っている。

異世界への召還、精霊との契約、色んなことが立て続けに起こって、やっと人心地つける状態のはずではあったのだが……

「好きとか、嫌いとかじゃなくて…… その」

奈々華は煮え切らない表情で、手元に抱いた猫、シャルロットの首のあたりを撫でた。

「気味の悪い刀だね。あたしはあんまり好かないよ」

その猫が首を伸ばし、テーブルの向こうから仁を覗いたかと思うと、ぱつぱつと斬って捨てる。どうもシャルロットは、ずばずばと物を言うタイプらしい。仁は猫に苦笑を返した。

「でも…… 精霊って何なんだろう？」

奈々華の素朴な疑問。

「何もクソも、あたし達から言わせれば、あんた達人間で何なんだろうって質問と同じくらい、答えられるものでもないよ」

シャルロットのもっともな返答。仁は我関せずといった顔で立ち上がる。観音開きの出窓を開け放つと、懐からタバコとライターを取り出した。

「なんだいアレ…… 感じ悪いね」

ジッポライターの石を擦る音が返ってきただけだった。

「動物裁判って知ってるかい？」

タバコも半分ほど消化した頃、仁が突然口を開いた。もう話は終わってしまったと思っていた奈々華は、驚いて仁の背中を見つめた。

「中世のキリスト世界ではさ…… 動物にも責任能力を負わしていたんだよ」

タバコをまた一口、不味そうに顔を顰めた。

「実際に有罪判決が出た豚とかさ」

「そうなんだ……」

奈々華には仁が言わんとしていることがさっぱり見当もつかなかったが、会話を止めたくないというように、縋るような表情で相槌を打った。

「ひょっとしたら…… 昔はいたのかもね。喋る動物とか」

奈々華はここまで聞いて、やっと得心がいった。小さく頷いて、そうかもと返した。

そんな世界が、多様な進化を遂げた動物が、時には人語を理解する動物がいる世界。つまりは仁たちから見たこの異世界の更に異世界から、そういった動物を召還しているのではないか。それらを精霊と呼んでいるのではないか。仁はそう言いたいのだ。

「きつとそうだよ！」

奈々華は嬉しかった。仁は自分との会話を拒んでいたのではなく、考えを整理して、言葉を選んでいただけだったのだ。そう思うと、知らず声が弾んだ。タバコを棧に擦り付けて消した仁が振り返る。

「まだわかんないよ…… あくまで仮説だ」

嬉しそうに笑う妹の顔を見て、仁は髪に手櫛を入れながら苦笑していた。

「お兄ちゃんがそう言うなら…… きつとそうだよ」

短絡的、の一言で片付けるには奈々華の目は少し熱を帯びすぎていた。

第一章 第八話…クラス

第一章…世界の在り様と赤の生き様

「21にもなって高校生か……」

死にたい、と仁は力なく笑っている。

「仁、気持ち悪い笑い方してないで、自己紹介をしろ」

坂城は容赦ない。先に自己紹介を済ませた奈々華が楽しそうに笑っていた。

教卓の前に立つ仁と奈々華の前には、期待と不安が入り混じった表情の同級生。二人に視線を送っている。二人が編入することになったのは、この学園の高等部一年三組。ちなみに十クラスあるらしいが、編入生というのは非常に珍しいそうだ。学校制度は大方仁たちのいた世界のそれと変わらないらしく、皆十六か十五歳。仁の五つ、六つ年下。

「城山仁です。えっと、主属性は黒。今紹介した奈々華の兄になります。皆さんよろしく願います」

奈々華とは双子と言う設定らしい。朝剃ってきたアゴヒゲも、顔の成熟具合も、全体から醸し出されるダメ人間のオーラも…… 全てにおいて無理があると、仁も奈々華も内心思っていた。クラスの面々に明らかな動揺が走る。

ざわざわと、各自近くの席の者と会話を交わしている。てっきり仁と奈々華が双子という件、仁の年齢についてのことを話しているのかと思えば、端々に聞こえてくる囁き声の内容は仁の主属性についてだった。

「珍しいからな。仕方ない。私も木室から報告を受けた時は正直耳を疑ったよ」

坂城が小声で仁と奈々華に話しかける。

「静かに!!」

坂城が続けざまに、今度はクラスの生徒に向かって大声を張り上げた。鶴の一声と言わんばかりに、静まり返る生徒達を見て、仁はへと感心したような声を出した。学園長自ら二人の紹介の場に立ち会うという雑務を買って出たのは、こういうわけだったのだ。これくらいの年頃の少年少女を一喝で黙らせるとは、よほど信望があるのだろう。

「仁、奈々華…… 一番後ろに席を用意してる」

教室の後方、二つだけぼつんとある空席を指差す。

「出来るな、お前。一番後ろは途中退席しやすいんだよな」

「私の授業でそんなことしてみろ…… 殺すからな？」

へらへらと笑っていた仁も、坂城の目が本気だったので、そのまま固まってしまった。

精霊魔術師達は、その属性によって適した職業に就き、社会に貢献していく。

黄は電力、赤は火力、緑は風力、青は水力…… ダイナモ代わりになったり、新しい技術発展に大きく寄与する。従来の科学技術と、魔法の力が相互に噛み合いながら、世界をより高次へと日々運んでいく。

その中でも、白は医療分野で多大な需要を生み出している。

「私、こっちだったらすぐに就職出来そうだね」

仁の隣の席、奈々華が小さく呟いた。ちらりと仁を見遣る。独り言ではなく、仁に反応を求めているのは明白だった。

「……」

仁はこの世界の仕組みを貪欲に聞き入っていた。聞けば、手触りも見えた目も石にしか見えないこの学園の建物も、その材質は実際は違い、精巧に似せて作られているものらしい。

技術レベルは仁たちのいた世界よりも格段に上なのだということが

わかり、仁は探求欲を強く刺激されていた。教壇の上、教鞭を振るう坂城も、彼の想像外の真摯さに感心したように口をすばめている。

「お兄ちゃんは珍しい属性らしいから、難しいかもね」

「……ん、ああ。そうだね」

偶然噛みあった会話は奈々華の望むものではなかった。

第一章 第九話…軽口

放課を待たずに、仁は教室を抜け出していた。

奈々華には多くの質問が飛び交う中、仁に寄ってくる者は一人もいなかった。

「転校生とか、もっとちやほやされるもんじゃねえのか？」

トイレの個室に引きこもり、タバコをふかす。彼自身それを望んでいるわけでもなかったが、こうもあからさまだと少し気が悪いのも事実。ゆらゆらと立ち上る白い煙を見つめながら、ぼんやりとこれからのこと、これまでのことを思った。

自分が倒すべき相手、煉獄の二つ名を冠する凶悪犯罪者。J・J・ヒューイット。優れた魔術師には二つ名が付くのが慣例だそうだ。

しかし、所在も掴めない相手をどうやって倒せというのか。本当に昨日今日こちらに来て、右も左もわからない自分がソイツを倒せるのか。奈々華はどうして、何もなかったように自分に接してくるのだろうか。

精霊と言う未知の生き物、奈々華よりも年の離れた同級生との学園生活。

妹である奈々華とも上手くいっていないのに、どうやって折り合いをつけていけと言うのか。

しかも、自分の珍しい属性のこともあってか、出だしは最悪。

どうして奈々華と同じ部屋で過ごさなきゃいけないのか。どうしてあの子はそれで良いと言ったのか。

タバコの煙が予期せぬタイミングで気管に入って、大きくむせる。ひとしきり咳をすると、痰をからませた唾液を便所の壁に吐きかけた。

「主は、妹が嫌いなのか？」

仁は喋る刀を手に、学園の中庭を突き進んでいた。授業に出る気に

もならず、この学園の外がどうなっているのかを見に行くつもりなのだ。木々が風に揺れて葉を擦り合わせる音がそこかしこから聞こえてくる。

「……別に。アイツは俺のこと嫌いかもしれないけどね」

「では、苦手なのか？」

「そうだね。苦手ってのが一番しつくりくるかもね」

さっきから仁の返答はまるで、他人事。芝生を踏んでは進むスニーカーの先を見つめながら気のない声。

「何かあったのか？」

村雲は鬼の姿と、刀の姿両方を自在にかたちどる。刀の状態でも会話は出来るらしい。

「まあ、ちょっとね……」

校門が見えてきた。以前仁が見たままの姿。仁の背丈ほどもある大きな黒い門扉。冷たい鉄の門番はその体を固く閉じている。

仁は助走をつけると、羽根でもついているように軽やかに、ポーンと門の天辺あたりに飛びついた。そのまま両腕の腕力だけで、門を登りきる。

「……三年前、俺は人を殺した」

門の向こう側に飛び降り、片膝をついて着地した。体と同じく軽いトーンだった。

「ほう」

「事故だったんだけどね。剣道の交流試合でね……俺の突きに、逃げずに踏み込んできた。用心たれを貫いて、相手の喉も潰した」

「それで？」

「俺の周りからは誰もいなくなった……奈々華も含めてね」
それだけだよ、と呟いて仁は膝についた土を手で払う。

立ち上がった仁は、もう今までの会話など忘れたように、丘の下へと続くアスファルトの車道に向かって真っ直ぐに歩き出していた。

第一章 第十話..新友

奈々華は、昼休みになる頃には既に何人か、気の合いそうな級友を見つけていた。

しかし楽しそうに笑う傍ら、時折寂しそうな顔をした。隣の席、二時間目が始まる前に仁は姿を消していた。城山兄妹では、奈々華の方が容姿も人あたりも仁より上だ。そして真面目さも。

「お兄さん、どっか行っちゃったね」

奈々華に声をかけたのは、目黒春。可愛らしい顔立ちの少女だが、歯並びが悪いのを気にしているのか、笑う際には口元を手で隠す。最も気が合いそうだと、奈々華が思った少女だ。

「うん…… あんまり真面目じゃないから」

寂しげに笑う奈々華には、男女問わず相手を惹きつけるものがあつた。何とか元気付けてやりたいと思わせるような魅力が。

「……ねえ、奈々華ちゃんの猫、また触っていい？」

目黒はシャルロットを大層気に入っていた。元々猫好きとのこと。

「うん、シャル。おいで」

奈々華が足元で丸まっているシャルロットを持ち上げる。目黒はそれを受け取ると、頭や喉を撫で回す。

「お兄さん……黒魔術師なんだね？」

奈々華の憂いを帯びた顔がちらついて、目黒は遠慮がちに尋ねた。

「そんなに珍しいんだ？」

「うん。それもあるけど、適性がね……」

「そうだね…… あんまりいい感じのことは書かれてなかったね」教科書には、それぞれの属性に適した性質や、性格が事細かに書かれている。黒の精霊魔術師の適性を持つ人間のそれは、好印象とは言い難い内容だった。

「お兄ちゃん、本当にどこ行っちゃったんだろう？」

奈々華は、精一杯軽い調子の声を出そうとして、失敗した。

どこの世界にも、ギャンブルというものは存在する。

世界で初めてのサービス業とも言われる風俗店と肩を並べるほどに普遍的な業種といってもいいかもしれない。仁は街に降りてきて、最初に目に付いた「雀荘」という二文字に、思わず雑居ビルの階段を上った。お金は坂城から仕事の前金として、当面の生活費には事欠かないほどに貰っていた。

「最後のは、抜いてくれたの？」

今は丁度仁と同じ卓を、同じタイミングで抜けた男と階段を下りていた。その男が軽薄な笑いを顔に浮かべ、仁に尋ねる。キレイな二重と、若者然とした整えられた眉。二十代にも四十代にも見えた。

「上家にトップ取られるよりは……」

男の名前は近藤きんどうと言うらしい。本名かは知らないが。

「そっか。まあ現張りとは言え、出てくる牌じゃないからな」

そうじゃないかと思った、と近藤が少年のような屈託のない笑顔を見せた。

「パチンコとか、馬とかはやるの？」

「やりますね」

答えてから、仁はしまったという表情を作る。こちらに来てまだ浅いの、深く突っ込まれるとややこしいことになると思い出したようだ。麻雀は仁の知るものと差異はなかったものの、こちらで流行っているパチンコ台の性能とか、馬の名前とかはちんぷんかんぷんだろう。

「そうか……じゃあまた今度、一緒に打ちに行こうか？」

社交辞令ではなさそうだった。雀荘には意外に人懐っこいおっさんがいるのも、仁の世界と変わらなかった。

「ええ、是非」

仁にとっても、友人が出来るのはありがたいことだった。特に趣味を共有出来る友人は願ってもない。

階段の下で近藤と別れた仁は、当面の不安や迷いを一時忘れて、再び街の散策に出向くのだった。

第一章 第十一話：古代竜

それは五時間目の授業中のことだった。

砲弾でも落ちたような轟音と地響きに、奈々華は椅子から転げ落ちそうになった。

机にしがみつくようにして、辛うじて体勢を保った奈々華は目を見開いて辺りを見回す。級友のほとんどが、奈々華と同じようにして転倒を免れていたが、その表情は皆恐怖と不安に固まっていた。

「な、何？ どうしたの？」

わけがわからずうろたえる奈々華の足元で、シャルロットが歯を剥き出しにして窓の外を睨んでいた。

「来た……」

近くの席の男の子が、うわ言のように呟く。

次の瞬間、耳をつんざくような大きなうなり声が聞こえてくる。何か大きなものが、抗いがたいものが、その怒りを咆哮している。奈々華は総毛立つのを感じて、窓の外に視線を送った。

「来たな…… 仁は？」

坂城が校舎内を、風のように走りながら背後の木室に声をかけた。舌をかむのではないかと言う程のスピードで階段目掛けて疾走する。

「それが…… 二時間目には校舎内には確認できず……」

坂城の舌打ちが廊下に響く。だが足は緩めない。階段に差し掛かり、二段飛ばしで駆け下りる。

「仕方ない。私達だけで迎撃するぞ！」

瞬く間に一階に辿り着いた二人は、スピードそのまま、中庭へと続く木戸を蹴破らん勢いで、くぐった。

この時、中庭で轟音がしてから、一分を要していなかった。

古代竜。精霊の世界でも一目も二目も置かれる、上級精霊。

その赤き体、＜古代竜・赤＞と呼ばれる大物。J・J・ヒューイットの使役する精霊の中でも、一、二を争う強力な精霊だった。

名の通り、血のように赤い体は全長二十メートルを越す圧巻の風貌。全身を覆う硬い鱗には、並大抵の攻撃では傷一つつけることはかなわない。巨大な顔には、怒り狂ったようにぎらついた双眸と肉食獣特有の鋭い歯の並ぶ口。見る者に、畏怖と神々しささえ感じさせる。充血したような赤い目で坂城達を見つけ、また一つ大きな咆哮を上げる。

ビリビリと校舎の窓が小刻みに震える。常人なら射すくめられて、その場を動くことさえ出来ないだろう。

だが坂城も木室もその敵とあいまみえるのは初めてではない。増して腐っても二つ名を冠する魔術師。坂城は顎を引いて、巨大な敵を睨みつけた。

「行くぞ!!」

声には否が応でも気迫がこもっていた。

「何かえらいことになってんな」

散々遊び倒して、帰って来た仁が見たのは、坂城や木室を始めとする教職員が、仁の知る竜そのままの姿の巨大な生物に魔法を打ち込んでいるところだった。坂城が青い小さなトカゲのような生き物を従え、手の先から氷の弾を飛ばしている。木室は坂城の後方、何か眩きながら、竜の近くに雷を落とすが、間一髪でかわされる。

「主よ！ 我を抜きなされ！」

村雲が戦いの空気に触発されたのか、声を弾ませる。

「中々出にくい雰囲気なんだけどな……」

ぽりぽりと頬を掻く仁は、超常の戦いに臆した風もない。

「主！」

「わかったよ。わかりましたあ。行きゃいんだろ、行きゃ」

仁が村雲を鞘から抜くと、妙にぎらついた刀身が夕陽を取り込み、

人を斬ったように赤く輝いた。

第一章 第十二話：ドラゴンスレイヤー

竜が一際大きな鳴き声を上げた。苦痛と、それを自分に与えた者への猛々しい怒りがこもっている。ぎゃあああ、と言う周囲の人間の鼓膜を破らんばかりの怒声に、仁は顔を顰めた。

竜の翼には背中側には鱗があるものの、腹の側は柔らかそうな皮があるだけ。仁は背後から翼の下に潜り込むと、その部分を村雲を振るって斬り上げた。赤い皮膚から、赤い血液が滴る。

芝生が塗料でも塗ったように赤く染まった。

「おうおう、お怒りですね」

竜が仁の姿を見つけると、尖った牙の生え揃った口を開き、炎の息を吐いた。大道芸で見るよりも遙かに高温で、長く連なった炎の河。仁は涼しい顔でそれを数歩横にそれただけでかわす。最小限の動き。仁が先程までいたあたりの芝生は燃えカス一つ残さず、後には焦土が見えるだけ。

奈々華は落ち着きなく、教室の窓から中庭の様子を見ていた。

仁が闘っている。自分の体の何十倍もある巨大な竜に果敢に立ち向かっている。

「奈々華ちゃん！ ダメだよ！」

辛抱たまらず階下に向かうと、踵を返した奈々華を目黒が止めた。腕を掴んで離そうとしない。

「でも！」

「先生が言ってたでしょう？ ここを動いちゃダメだって！ それに……奈々華ちゃんが行ったところで」

奈々華は顔を俯かせて、大人しくなった。目黒の言うとおりで。例えば奈々華があの場合にいたところで、何一つ仁の手助けは出来ない。どころか、きつと足を引っ張るだけだ。

「……私はまた、見てるしか出来ないんだね」

目黒が手を離れた時には、奈々華は今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「ちょっと本気を出そうか」

仁がそう言って、いつものような軽薄な笑みを浮かべると、立ち消えた……。ようにその場にいた人間には見えた。仁はただ移動しただけだった。人の能力の限界を超えた脚力。

仁が現れたのは、竜の翼の上。平均台のような狭さだが、器用にしっかりと立っている。

ガキン！

金属がぶつかり合うような嫌な音を立てて、竜の首の辺りの鱗が数枚剥げる。仁が再び尋常ならざる速さで斬りつけたのだった。今は竜の肩のあたりに悠然と立っている。

「ぎゃあああ」

竜の二度目の悲鳴。翼を動かし、飛び上がって仁を振り落とそうとするが、先程の翼への斬撃が効いているのか、その巨体は小さく宙に浮いただけで、すぐに地面に墜ちた。左の翼からの出血が加速して、再び芝生に赤い塗料を撒き散らした。

「何だ、ふがない。村雲！ 一発で決めろよ！」

仁の口調はあくまでも、友人をなじるようなトーン。竜の肩に乗っている男のそれとは思えない緊張感のなさだ。

次の瞬間、仁の目の色が変わる。軽薄な男から、捕食者へと変貌する。

腕を最大限体に引きつけたかと思うと、目にも留まらぬ速さでそれを伸ばした。

刀が突き刺さったのは、竜の首。先程の攻撃で鱗が剥げ落ち、剥き出しになった皮膚に、深々と刀が食い込んでいる。そして、それを一気に引き抜いた。

仁はひよいとジャンプして地面に降り立つと、刀を二、三度斜めに空を切らせた。

噴水の比ではない。竜の首からは真っ赤な鮮血が勢い良く噴出している。赤い雨と言った方がいい。それもゲリラ豪雨のように、ひっきりなしに空に吹き上げては地上に落ちてくる赤い雫。辺りの芝生には赤い水溜りが次々出来上がる。

竜が断末魔の悲鳴を上げながら、壊れたスプリンクラーのようにしゅっちゃんかめっちゃんか炎を吐きまくる。目には凄絶な憤怒を滲ませ、この世の全てを焼き尽くさないと気が済まない。暴君の最期だ。

炎は仁をかすりもせず、ただ芝生を焦がすだけ。自身の血で潤った芝生がジュッと音を立ててそこかしこで燃え盛る。

やがて竜は目に憎悪をたたえたまま、事切れる。ドスンと大きな音を立てて、首から地面に突っ込んだ。

第一章 第十三話…人非人

坂城も木室も他の教職員も、皆その場から動けずにいた。全員の視線はある一点に集結していた。

城山仁。彼等が全員で死力を尽くして、追い払うだけで手一杯だった古代竜・赤。それをたった一人で、十分とかからずに倒してしまっただけだから無理もない。全員が言葉もなく、その功労者を見つめていた。

仁は髪から滴る竜の返り血を鬱陶しそうに、手の甲で拭った。仁の風貌は今すぐ大きな駅の前でパフォーマンスでも出来そうなくらい真っ赤に染められていた。シャツも、ズボンも顔でさえも、全身隈なく返り血を浴びている。手で前髪を後ろに流しながら、仁は校舎のほうへとゆっくり歩を進める。

「主よ…… 見事な戦いぶりであったぞ」

軽く血振るいしただけで鞘に収められた村雲が、感慨深げに言った。「……んなことより、早く風呂に入りてえよ。ちよつと遊んで帰って来たらこれだもんなあ」

何度拭っても顔に垂れてくる血を乱暴に拭いながら、仁は歩を早める。段々と教職員達が固まっている内門に近づいていく。職員達は大名行列でも通すように、左右に散った。

仁は敢えて、誰とも目を合わせなかった。自分に向けられるこの視線がどう言った類のものか十分すぎるほどわかっていた。仁は軽く教職員達に会釈をして、その間を通して校舎の中に消えた。

「化け物……」

誰かが言った言葉は、竜の死骸と、ちよつとした池のような血溜りの広がる中庭を見つめるだけの坂城の耳に届くことはなかった。

「お兄ちゃん!!」

奈々華が、自室のドアをけたたましい音と共に押し開けた。
シャワーを浴びてすっかり肌色を取り戻して、一服していた仁は驚いてソファから飛び起きた。

「うわ! どうした!?!」

「どうしたじゃないよ! どこか怪我してない?」

奈々華の目が赤い。声も少し涙ぐんでいた。仁の傍に駆け寄ると、体を隅々まで見回す。

「大丈夫だよ…… あんなトカゲにやられようもねえ」

鷹揚に答えた瞬間、奈々華が仁に抱きついた。しがみつくように、しっかりと仁の背で両手を組む。

ぎゅうぎゅうと鯖折寸前まで、仁の体を締め上げる。

「よかった…… よかった」

仁は奈々華の頭に手を伸ばしかけて…… その手を所在無く宙に泳がせた。

「……」

「私、何も出来なくて……」

奈々華の悔恨は、三年前とオーバーラップしていた。ぐずぐずと泣きじゃくる奈々華を仁はただぼんやりと、他人事のように見つめる。

「お兄ちゃんが怪我しちゃったら…… 危ない目に遭うのは……」

嗚咽が混じり、聞き取りにくい奈々華の霞むような声に、仁は眉を寄せて苦しそうな表情を作った。

「心配要らないよ…… 大丈夫」

そんな言葉しか仁の口からは出てこなかった。それに憤りを感じている風でもなかった。

「次も大丈夫なんて保証はないよ……」

「……まあ、大丈夫さ」

淡々とした口調。大丈夫の一点張り。奈々華の力強い抱擁に、仁が耐え切れず、そこから抜け出すように身動ぎした。わずかな間。

「……ごめん、痛いよね」

奈々華はゆつくりと、仁の体を離れた。

第一章 第十四話：鼎談

話がある、と坂城に呼び出された仁は、学園長室に来ていた。

相変わらず、生徒達のタコ部屋とは一線を画す高級な家具や調度品を眺めながら、呼び出しておいて何も喋らない学園長に無言の圧力をかけた。

「……正直、君のことは怖いと思ったよ」

坂城がその圧力に屈して、懺悔でもするように独白しだした。

「そんなことはどうでもいいんだよ。聞きたいことがある」

「そうだろうな……」

「どうして敵はここを狙ってくるんだ？」

断りもなしに、仁は坂城の対面のソファーに腰掛ける。坂城がぴくりと動いて、心持ち上半身を背もたれにやった。

「岩だ」

簡潔な答え。にもかかわらず、仁は何かを得心したようだ。なるほど、と顎のあたりに手を当ててソファーに挟まれた、黒漆のテーブルに視線を落とした。

「面白いテロ活動だな…… 若い芽を摘む、か」

「奴等にとって…… いや、魔術師にとって脅威と成り得るのは魔術師だけ」

あの不思議な大岩がなければ、魔術師は新たに精霊と契約することは出来ない。敵の増援、才能ある魔術師の出現を防ぐ。理にはかなっているが、地味だという印象は拭えない。

「既に日本にある十五の大岩の内、十が奴等によって破壊された」
坂城は立ち上がって、奥の事務機の引き出しから、一枚の紙を取り出して戻ってきた。日本地図だった。

地図には青い丸印が所々記されている。全部で十五。これが大岩だとすぐに仁は悟った。

大岩のある場所には、大抵精霊魔術師専門の学園が建っていた。そ

れ以外でもやはり魔術師関連の研究施設がある。坂城が次々、大岩の青丸を上から黒いボールペンで消していく。

残ったのは五個。東京のあたりにある大岩にまたボールペンで三角をつけた。

「現在攻撃を受けているのは、ここ。つまり我が私立中谷精霊魔術学園……」

「攻撃を受けているというのだから、どこかしらに援助を申し出ることは出来ないのか？」

仁の言葉に坂城は目を瞑り、肩をすくめただけだった。

「あまり、フロイラインに目を付けられるようなことをしたがる向こう見ずはこの世界に多くないんだ」

どうも仁が想像していた以上に、フロイラインというのは強力な組織らしい。正義が歪むほどに。

「……敵の居場所を特定出来ないのか？」

仁が唇を一度舐めて、話を変えた。

「難しい。奴等ほどの魔術師になると、遠隔地から精霊を操ることが可能だ…… 現に今回も前回もヒューイットの姿はついぞ見当たらなかった」

さすがに日本国内にいるとは思うんだが、とバツが悪そうに付け足す。仁がジッポライターの蓋を開けるピンという音が妙に大きく聞こえた。タバコの手から流れる細い煙が坂城の傍まで流れ、不満そうに目を細めた。

「……最初の話なんだがな、正直君は捨て駒程度に考えていた」

「まあ、だろうね」

言い値とは、上手くいけば勿論払うに値する働きをしたということだが、同時に失敗するとタカを括っているとも取れる。長くなった仁のタバコの灰を見て、坂城が仕方なさそうにアルミの灰皿を用意する。

「それが…… 思わぬ収穫だ」

相手の気分を損ねかねない、とは考えないのだろうか。坂城は平然と云ってのける。

「まあ、やれるだけやるさ」

まだ長いタバコを坂城の用意した灰皿に押し付けて、仁は立ち上がった。決して自信に満ちた発言をしない仁であったが、今の坂城にはどうしようもなく頼もしく見えた。

第一章 第十五話：尽きせぬ恋慕

「何なんだい！ あいつ！ 感じ悪いったりやありゃしない」

奈々華の周りを、落ち着きなくグルグル回りながらシャルロットは、仁への罵倒を続けていた。

「まあまあ」

「まあまあ、じゃないよ！ あんた、アレでいいのかい！？」

今度は宥めに入った奈々華にまで、その鋭い金色の双眸を向ける。かなりの剣幕だ。

「……仕方ないんだよ」

奈々華は自分が座るピンクのクッションの上に、悲しげに目線を落とした。長い睫毛が大きな目にかかるのを、シャルロットは我がことのように心を痛めながら見ていた。

悲しいとき、辛いとき、嫌なとき、嬉しいとき、楽なとき、楽しいとき。

いつもあの人は傍にいてくれた。

時には優しく手を差し伸ばし、時には優しく大切なことを教えてくれた。

あの人のことが好きで好きでたまらなかった。そしてその想いは今も……

なのに、あの人が辛いとき共にいてあげることが出来なかった。

救いを求めて、伸ばされた手を弾き落とした。

今度は自分が助ける番だったのに。自分が傍にいてあげる番だったのに。

あの人から貰った大切なことを、大切な想いを、今度は自分が教えてあげなきゃいけなかったのに。

あの人のことが欲しくて欲しくてたまらなかった。夜も眠れなかった……

三年経った。

いつもいてくれたあの人がいない生活にも、慣れてしまった。なのに、誰かを好きになることはなかった。

あの人への罪悪感？違う。

あの人以上の人を見つけれないから。あの人以上に暖かい居場所を見つけれないから。

いや、もう分かっているんだ。

あの人以上に、自分が安心できる、自分がありのままでいられる、自分が愛せる人がいないってこと。

「奈々華、奈々華」

シャルロットの気遣わしげな声に、奈々華は我に帰った。主人の横にちょこんと座り、その様子を見上げていた。まるで人間の表情のように、眉間に皺を作っていた。

「シャル。ごめん。ちょっとブーツとしてただけだから……」

強がり。カラ元気。気丈。奈々華の頭をそんな言葉が駆け巡った。

「なあ…… あんたひょっとして、仁のこと？」

「うん。好きだよ。世界中の誰よりも……」

本当。本音。真実。

隠す意味もない。隠しようもない。隠したくもない。

奈々華はシャルロットの頭を優しく撫でた。ゴロゴロと猫そのままの鳴き声で答えてくる。

「私はね…… あの人に愛してもらう資格はないんだよ」

「どういう意味なんだい？」

「あの人は、私に触れないんだよ」

「だから何の話だい？」

「でもね…… 諦められないんだよ。忘れろなんて無理なんだよ」
静かな口調。静か過ぎる口調。語る内容が紛れもない真実だと、否
が応にもわかる。

奈々華の目は、憂いを帯びて儚げに見える。同時に、それでも勇ま
しく、覚悟を宿していた。

第一章 第十六話：行方

「ちょっといい？」

仁が振り向くと、髪を茶色に染めた化粧の濃い少女が腕を組んで立っていた。周囲には他に誰もいない。自分を人差し指で指して、俺？ と目線を送る。仁は学園長室から出て、廊下を進んでいるところだった。

「そう、アンタ。見てたわよ。強いよね？」

挑戦的に歪められた口元が、小生意気な印象を与える。

「それはどうも……」

「丁度暇してたのよ。授業もなくなったし」

古代竜の襲撃によって、授業はなくなった。あつたとしても、真面目に授業に出そうな風貌ではないが。

「あたしは、なめかたゆうな行方夕菜」

「行くの行に、方向の方かな？」

「そうね。意外に博識なのね」

さもつまらなそうに、行方と名乗った少女が自分の手先を見つめながら答える。

「茨城かどっかにそういう地名があったろ？ まあいい。用件は？」

行方はその質問には答えずに、自分のスカートのポケットから紙を取り出した。一丁前に名刺の風だった。新聞部、部長。二年四組行方夕菜とある。

「新聞部、部長……」

「そう。聞きたいことがあるのよねえ」

そう言って、また気に入らない笑みを浮かべる。聞きたいことの予想は大体、つく。

仁が何故一般生徒であるにも関わらず、古代竜との闘いに駆り出されたのか。

何故斃しえたのか。主属性黒という非常に珍しい魔術師。

「ずばり、アンタ歳偽ってるでしょ!!」

「それかよ!」

完全に予想外の指摘に、仁は呆れてしまっていた。

「他のは聞いても答えてくれそうにないしね」

「まあ、口止めされてっからな」

「へえ、誰に?」

しばらく考えた後、仁は後方の学園長室を見やった。

「成るほど。歳のことも、学園長に?」

行方は再びポケットに手をつ突っ込むと、メモ帳のようなものを引っ張り出して、何かを書き込み始めた。

しかし、仁は行方の前に手の平を突き出して、拒絶の意思を表しただけだった。

「残念だが、これ以上は俺が怒られる」

これでもサービスしてやったほうだ、と行方に背を向けると、そのまま階段を目指して歩き出した。

行方は慌てて、その背を追っかける。

「待ってよ! 分かったわよ。もうアンタが怒られそうなことは聞かないから。お話ししよう?」

「……俺に何のメリットがある?」

「うわ、冷た! こんな可愛い子が声かけてんのに。ゲイ?」

「可愛い?」

「そこを疑問系で返してくるか……」

「……」

「ねえ、古代竜ってやっぱり怖かった?」

「……」

「やつつけた時はどうだった? 楽勝って感じ?」

「……」

黙って階段を下りる仁と、それを追いかけながら、雨霞と質問を投げかける行方。

「ねえ、無視しないでよ」

「……」

「妹さんと住んでんだってね。よ！ シスコン！」

「……」

仁たちの居住スペースである、二階へと辿り着いた。廊下の壁にもたれかかり、仁はタバコを取り出した。寸分の躊躇いもなく、未成年しかない学園の廊下で火を点ける。

「ちよっと！ マズいっしょ！」

「……うるせえな。俺は吸ってもいいんだよ。部屋の中じゃ吸い辛いんだから、黙って俺にニコチンを吸わせろ」

「吸ってもいいって…… アンタやっぱり成人してんの？」

「そうだよ。こんだけ喋ってやったんだから、どっか行け」

その場に蹲るようにして座ると、しっしと手の平を行方に振った。行方の粘り勝ちだった。

「ううん。まあ今日のところは引き上げてやるわ。初っ端から嫌われても今後に影響するしね」

じゃあね、と歳相応に屈託のない笑みを残して、行方は廊下の中頃、自分の部屋に消えていった。

「アイツ…… あれで嫌われてないつもりか？」

その背中を見つめながら、仁は長くなったタバコの灰を廊下に落とした。

第一章 第十七話：晚餐

仁が部屋に戻ると、奈々華が出迎えてくれた。

簡素な造りのテーブルの上には、既に夕飯の用意が出来上がっている。二人分の食器に、白米と味噌汁、鳥の唐揚げとシーザーサラダ。奈々華が用意したものだった。

「……俺の分まで作ってくれたのか？」

コクリと頷いて、ニコリと笑う奈々華。

「凄いんだよ、ここ。紙に書いた食材を、すぐに配達してくれるんだ。風魔法でびゅーんって」

「……」

「そういう業者さんがいるみたい。街まで行かなくてもいいなんて便利だけど、運動不足になりそう」

身振り手振りをまじえて、奈々華が楽しそうに話す。

「……今日はありがたく頂戴するけど、明日からは俺の分は無理して作らなくてもいいよ？」

食堂もあるみたいだし、と自分が座る床を指差した。一階には学生食堂があるらしい。

「……」

「金のことなら気にしないで。第一俺たちは好き好んでここに来たわけじゃないんだし、あんまり負担になるようなことは……」

仁は奈々華に坂城から貰った金を半分渡してあった。

「負担だなんて思ってないよ。それに……お兄ちゃんが貰ったお金ってだけじゃなくて。お兄ちゃんはこの場所を守ってくれてるんだから、これくらいは……」

この学園を守るということは、必然学園に住む人間を守るということでもある。

「まあ、それなら……遠慮なくいただきます」

仁は顔の前で手を合わせて、箸を取った。

昼間の散策で、仁はいくつか覗いてみようと思った場所があった。その一つ、＜六ちゃんのパール＞と看板を出した飲み屋の暖簾をくぐった。打ちっぱなしのコンクリートの雑居ビルの一階に入っているテナントで、店の中も同じように殺風景な灰色の壁。床には木目のタイルが敷き詰められていて、仁が歩く度こつこつと無機質な音を立てた。

そこまで広くない店内にはカウンター席とテーブル席。それぞれ五つくらい。店員は見る限り一人だけ。接客に追われていて、好きな席に座って構わないとだけ仁に告げた。

カウンター席に見知った顔を見つけた。近藤だ。青いシャツに、黒のジーンズ。相変わらず、年齢が特定しにくい風貌だ。仁の視線に気付いて軽く手を上げる。

「やあ、城山君。よく会うね」

店の端に遠慮がちに置かれたカウンターに近づくと、仁は挨拶を返して、隣に座った。カウンターの向こう、白髪の男性がいらっしやいませと、好々爺らしい笑みを見せた。六ちゃんかもしれない。

「お仕事の帰りですか？」

「……まあ、そんなところだ」

手元には氷の入ったグラスに茶色い酒。ウイスキーだ。随分呑んでいるのか、近藤の息には多分にアルコールが含まれていた。

「お疲れ様です。こちらにはよく？」

「うん。週に二回くらいは来るかな。まあ、来始めたのは二ヶ月くらい前からだけど」

はは、と人懐っこく笑う。会話を一しきり待って、マスターが仁に注文を聞いてきた。ああと唸ってから、仁は近藤と同じものをお願いした。

「あの雀荘ですか？」

「そうだね……」

それっきり会話が少し止まった。昼間にプラプラしていたり、かと思ったら日付が変わる頃に酒場で一人酒。近藤の職業について仁は少し興味を抱いたが、尋ねるような無粋はしなかった。

「城山君は学生？」

また一口、グラスに口をつけてから近藤が尋ねる。ええ、と頷いてから仁も出されたウイスキーを口に含んだ。

「ここの、美味いだろ？」

仁が再び首を縦に振ると、近藤は自分が褒められたわけでもないのに、嬉しそうに笑った。本当のところ、酒の味についてはよくわからないのだが、その笑顔を見て仁も照れたように笑い返した。

第一章 第十八話：甘え

宴もたけなわというには二人きりでは寂しいものがあったが、仁と近藤は主にギャンブルの話で盛り上がった。酒も進み、二人とも少し呂律が怪しくなってきたころだった。

「何か悩み事があるのかい？」

何の前ぶりもなく、近藤が目だけを仁に向けて言った。

「どうして？」

「……俺の勝手な人間観察なんだけどさ、君はそこまで明るい人間じゃないだろう？」

失礼な物言いだ、仁は酒を呑む手を止めた。

「どうですかね…… 自分じゃわからんもんです」

ぽりぽりと顎の辺りを掻きながら、近藤から目を逸らした。

「……ちよっ 厄介な仕事を安請け合いしてしまったんですよ」

男二人のうわべだけの会話が何時間も続くわけもなく、場がしばしの沈黙に包まれていた時だった。空気に耐え切れなくなったわけでもなく、仁は少しさっきの会話をぶり返してみようと思った。

「学生じゃなかったのかい？」

茶化す。誠実さに欠けるようにも感じられるが、大人らしい対応にも感じられる。

「スーツ着てやるようなんじゃない…… 友達の頼みごとに近いかな」

「ふうん。断れないのか？」

近藤がテーブルに置いたタバコを一本取り出す。かちつと百円ライターの音。一口吸った近藤が白い息を吐き出した。

「残念ながら……」

「じゃあやるしかないな」

近藤の返事は早かった。いつもの柔和な笑みもなく、ただ自分の指

先に絡みつく副流煙を眺めている。

「断れないってことは、その友達はよっぽど困ってんだろ？ それを一度引き受けちゃったら……やるしかねえだろ」

「……」

「歯あ食いしばってでも……それが道理ってもんだ」

近藤がちらりと店の掛け時計を見た。閉店の三時まであと三十分だった。それまで無言で酒やつまみを作り続けていたマスターが、何とも言えない表情を作った。

「そう……ですね」

二人を除けば店内の最後の客である若い男性二人が、奥のテーブルから立ち上がった。

仁は少し冷える夜風を向かいから受けながら、火照った体を学園に向けて動かしていた。徐々に街のネオンの光が淡くなっていく山道を、言葉もなく歩き続ける。ガードレールで敷居された道の両脇には木立が思い思いの方向に枝を伸ばしている。

自分でも何で近藤に内心を吐露したのかわからずにいた。顔を合わせたのは今日で二度目。他人も他人。

第一、あれが自分の本心だとも思いたくなかった。何と女々しい。近藤の言葉にぐうの音も出ない。

ざしゅざしゅと、スニーカーがアスファルトの路面を擦る音をどこか遠い世界の音のように聞きながら、仁は夜闇のような心の中を探って……一つ思い当たった。思い当たってしまった。

「優しい言葉をかけて欲しかったんだな」

敢えて言葉に出した自分の未熟に、仁は唇を噛んで耐えた。

鱗を斬りはがし、肉に食い込む感触。噴出す生暖かい、自分が奪った生命。

圧倒的な疎外。自分とは異質なモノを見る目。救世主を待つあまりの理不尽。

味方ではなくなった者との生活。最早交わることのない兄妹の道。

「たった一日でこれじゃあ、明日には胃に穴が開くな……」

鼻から自嘲の息を漏らし、ガードレールに思いっきり拳を叩きつけた。

第一章 第十九話：孤立

ここ、私立中谷精霊魔術学園の高等部は最初の一年で、小中と習ってきた精霊魔法全般に通ずる基礎を反復する。二年目以降は開講される授業の中から、自分の主属性などを鑑みて、学生自身が授業を選択して時間割を組み立てるという、大学のようなシステムになっている。一年生に編入した仁と奈々華は当然、毎日朝から夕方までクラスメイトと肩を並べて勉強しなければならないのだが……

奈々華は仁を起こすのを諦めた。

二段ベッドの下段、息をしていなかったら死んでいるのではないかと思うほど、深い眠りにについている仁は、奈々華が再三揺すつても大声を出しても目を覚ますことはなかった。

「私行くよ？」

当然仁から返事はなく、ぴくぴくと眉の辺りが動いただけだった。

奈々華は小さく溜息を吐いて……それから一転、緊張したように顔を硬直させた。

「……起きないから悪いんだからね」

そっとまたベッドの脇に腰掛けると、顔を仁の顔に近づける。そのままそっと自分の唇と仁の唇を合わせた。重なっていたのはほんの一瞬。ゆっくりと名残惜しそうに顔を上げた奈々華は、行って来ますと残して部屋を後にした。

奈々華が自分の教室に着くと、教室の和やかな空気が不自然に止まった。奈々華の視線から意図的に数人のクラスメイトが目を逸らした。またぎこちなく友達同士で会話が始まる。

奈々華には何となくわかっていて、仁の得体の知れない、異常な強さ。皆仁と古代竜との戦闘を見ていたのだ。まるで盗っ人のように

周囲に視線を配りながら目黒が奈々華に近づいてくる。

「おはよう」

何も気付いていないかのように、奈々華が自然に挨拶をすると、やぎこちない笑みを浮かべて挨拶を返してきた。

「えっと…… ごめんね。皆小学校から一緒だからか、新参には結構厳しいんだ、この学校」

随分言葉を選んだようだが、あまり成果はあがらなかった。目黒は案外口下手なのかもしれない。

「ああ、気にしてないよ。気にかけてくれてありがとう」

朗らかに笑う奈々華からは本当に気にした様子は窺えなかった。

「ううん。その…… お兄ちゃんがやったことで、奈々華ちゃんは何の関係もないのに……」

「それどういう意味？」

笑みが消えた。整った顔が無表情を作ると、迫力がある。

「え？ えっと……」

「春ちゃんも、お兄ちゃんのこと良く思っていないの？」

囁くような声量は、首を縦に振ったらどうなるかわかっているな、という警告を兼ねているようだった。

目黒は慌てて顔の前で両手を振る。彼女の怯えたような表情を見て、奈々華はやっと無表情を壊して、気まずそうな顔を作った。

「そんなことはないよ…… わ、私はただ……」

ごめんと小さく呟いて、目黒の脇を通って奈々華は自分の席へと歩き出す。

「お兄ちゃんはこの学園を、私達を守ってくれたんだよ…… なのにこんな扱ってないよ」

第一章 第二十話：怒られし者

「どうして、今日は来なかったんだ？」

坂城の顔には一片の穏やかさもなく、目にも声にも隠し切れない憤怒が滲んでいた。

夕方、校内放送で呼び出された仁は、坂城の待つ学園長室に来ている。そして彼女の第一声がこれだ。

「眠たかったから」

仁は特に悪びれる様子もなく、首のあたりに手をやりながら答える。

「ふざけているのか？」

「ふざけちゃないさ。本当のことだ」

「……そりゃそうだろうな。午後の十一時頃に出かけて、夜中の三時過ぎに帰ってくれば、昨日の疲れもあるだろうしな……」

そこまで言って、坂城は拳をテーブルに叩きつけた。テーブルの上に無造作に置かれていたボールペンが小さく跳ねる。

「校則違反だ！ わかっているのか？ 君は校則を破り、あまつさえ授業をさぼったんだ！」

「……ちゃんと敵の精霊は倒したんだし、いいだろ？ 仕事はやってんだ」

「いつ私が精霊を、敵を倒すだけが仕事だと言った？ 君は学生に扮して、なおかつ敵を倒すという、そういう契約だろう？ それを込んでの言い値だ！」

剣幕は収まる様子を見せない。坂城がまた拳を握ったのを見て、仁は軽く身構えたが、今度はテーブルに叩きつけるようなことはしなかった。代わりに血管が浮き出るまで強く握った拳を腿に食い込ませる。

「……校務員とかはないのか？」

「うちの校務員は、魔術師以外の人間に開放している。無断で外出する君を見つけたのもその内の一人だ」

搾り出すような声で坂城が答える。

「仮に君にそういう仕事を与えたとして、真面目に勤務に励むとも思えんがな……」

「……」

「当初から嫌がっていた君に、学生としての生活を強いたこちら側にも全く落ち度がないとは言えんが、そういう内容で応じた君にはもっと自覚を持ってもらいたい」

「……」

坂城は何とか理性を取り戻したようだが、仁の顔からは事態をあまり真剣に捉えている様子は窺えない。

ただ黙って、坂城の顔を見つめているだけだった。

「最初の一日は一時間目出ただけで、あとはサボリ。今日に至っては完全な無断欠席」

幾ばくか声量は小さくなったものの、未だ声には怒りがこもっている。

「……こんなことを言わせなくてくれ。君には感謝しているんだ。

少なくとも我々が束になっても敵わない古代竜を倒してくれた。その功績は私は素直に評価している。捨て駒のように扱おうとしていた負い目も多分に感じている」

言葉の最後の方は少し涙ぐんでいて、言い終わると坂城はぽろぽろと涙を零してしまった。情けないやら悔しいやら悲しいやらで、子供がするように口を固く結んだまま。

「俺は元来ダメなんだよ。別に君への当てつけとか、君を困らせてやるつもりはなかったんだよ」

仁もまた、友達を泣かしてしまった小学生のように困りきった様子で言葉をかけた。両手で目元を拭う坂城は、俯いたまま仁の言葉を聞いていた。

「悪かったよ。泣かないでよ。頑張ってみるからさ」

なるだけ優しく語りかけたが、結局今日はもう帰っていいと言っただけで、坂城が泣き止むことはなかった。

第一章 第二十一話：叱られし者

学園長室を後にした仁は、またもや廊下で会いたくない人物に出会った。

「おっす。何か怒られたみたいね」

「……またお前か」

行方がにやにやと気色の悪い笑みを浮かべながら、仁の方に歩み寄ってくる。話せ、話せと目で訴えかけている。相変わらず肌の原色を留めていない紫のアイシャドウに仁はうんざりした視線を返した。

「昨日のサボりと今日の無断欠席をな……」

幾つか情報を撒かないと、行方はテコでも動かないのを昨日一日で十分に理解させられた仁は存外あっさり折れた。廊下に敷かれた高級な絨毯の模様に視線を落しながら吐き捨てるように喋った。

「あちゃ。アンタそういうことするタイプ？」

声ほどに行方の表情は吞気ではなかった。

「何だ、お前まで俺に説教か？」

「まあねえ。また色々聞こうと思ったけど、やめた。何でそういうことしたの？」

「昨日夜更かししてね」

「それは今日のことでしょう？　じゃあ昨日は？」

ずいっと更に仁に詰め寄る。気圧されて仁が一步、二歩たたらを踏むように後ずさった。

「……」

「あたしなりに色々調べさせてもらったんだよねえ、アンタのこと。クラスで浮いてるそうじゃん？　まさか僕友達が出来ないの。辛いから逃げ出したの。なんて言うんじゃないでしょうね？」

「……」

「ガキ」

鼻で笑う行方に、仁は一瞬視界が点滅するような怒りを覚えた。

「俺よりガキに言われたくねんだよ」

「アンタさあ…… どういう経緯があったか知らないけど、納得してこの学生になったんでしょ？ そのくせ、ちょっと嫌なことがあったら逃げ出すんだ？ ガキ以外の何者でもないわよ！」

仁の舌打ちが誰もいない廊下に響く。だが行方は仁の反論を待ってはくれない。

「いい？ この学園はレベルの高い魔術師が揃う名門なの。皆魔術の実力を日々磨くことだけを考へてる。毎年の進級試験に落ちて、退学していく子もいるの。つまり…… アンタはやっかまれてるのよ」

「だから何だよ？」

「魔術の実力が伴わないヤツに向けられる軽蔑に較べれば、何てことはないってことよ」

行方が手の平を天に向ける。理解に苦しむとでも言いたげな態度。

「……そんなの聞いてねえよ。ただ学生生活やってりゃいいんだと思ってる……」

「だからガキって言ってんの！ 皆より優位なんだから、男ならガチャガチャ言ってるでドーンと構えるくらいの度量を見せたらどうなの？」

「さっきから言いたいこと言いやがって……」

「アンタの行動は学園全体の士気に関わるのよ。第一アンタ自分から歩み寄ろうとした？ 聞いてなかった？ 属性が皆と違うから？」

「甘えてんじゃないわよ！」

仁の反論が追いつかないほどに、行方はまるで原稿でも読むようにすらすらと罵倒の言葉を容赦なく浴びせる。

「ガキ。ほんとガキ！ どうせ自分は古代竜を倒したから、ちょっと我が侂やっても大丈夫だとか思ってるんでしょ？」

いーっと歯を見せていやいやをする。

「……」

すっかりやり込められた仁を見て、行方は下唇を突き出して、やれ

やれと頭を振る。

「まあ、アンタには感謝してないこともないからこういうこと言ってるのよ。優しいところもあるしね。本当に救いようのないヤツだったら無視するし」

「……」

「はあ、あたしってばお節介だな」

「ちょっと考えてみるよ。お前が俺のことと思って言ってくれてんのは分かったし。その…… ありがとう」

いくらか頭も冷え、先程の坂城に続いて行方にまで忠告を受けて、仁も思うところがあった。行方に向かって小さく頭を下げる。

「……っ！ けなされて礼言うとか、マゾか！」

行方は気恥ずかしくなったのか、厚いファンデーションの上からでも分かるほどに顔を上気させて、階段の方に走って行った。

第一章 第二十二話…殊勝

「今日は出かけないの？」

奈々華が夕食後、仁に遠慮がちに尋ねた。仁はテーブルの前に座ったきり、テレビを漫然と眺めている。テレビやギャンブルやインターネットだとか、娯楽が仁のいた世界と大差ないのは、彼にとっては唯一の救いと言ってもよかった。

「うん…… 実は坂城に注意されてね」

「そうなんだ。確かに学園長さん、授業中も不機嫌そうだった」

奈々華がこじんまりとした台所から返す。仁と奈々華が住む、他の学生達の部屋もそうだが、この部屋には玄関を開けてすぐに、靴を脱ぐたたきがあって、居間の様な六畳一間。たたきの横のスペースに簡素な台所が位置している。居間の中央にはテーブル、壁側に二段ベッド。家具は最低限。反対の壁にテレビが置かれていて、その隣に洋服箆笥。台所の隅に小さな冷蔵庫があるだけだった。

「ん？ アイツ初日だけじゃないのか？」

奈々華の話では今日も授業を行ったことになる。学園長という役職にあらざるフットワークの軽さだ。

「多分責任を感じてるんだよ。巻き込んだのは自分だし」

「なるほど……」

彼女なりの仁たちへの気遣いが無碍にされたというやりきれなさもあったのか。

「それに言いたくないけど、クラスの皆も……」

奈々華はそこまで言って、口を閉じた。クラスメイトたちの冷たい対応は、やっかみ半分、行方の言ったように調和を乱す者への反感半分。

「そうだね…… 明日は行くとするよ」

テレビから切った真剣な視線を急に向けられたものだから、奈々華は皿を取り落としそうになった。

翌朝、一日ぶりに教室に足を踏み入れた仁は歳の離れた同級生たちの特異な視線を感じ、奈々華にも同質のものが向けられていることに気付いた。気付いて愕然とした。友達と話しながらだったり、さりげない風を装ってはいるが、実際には彼女等の関心は城山兄妹のことで九割がた占められているようだった。

「お兄ちゃん、昨日のノート」

クラスメイト達の視線を受けても、奈々華は仁を気遣ってか、はたまた本当に気にしていないのか、部屋で見せると変わらない笑顔を、自筆のノートを添えて仁に向けた。表紙に“城山奈々華”と丸っこい字で自分の名前を書いている。

札を言っただけを受け取った仁は、パラパラと頁を捲る。

内容はほとんど、頭の中を右から左。仁は奈々華にかける言葉がなかった。

ごめん。また俺のせいで。

それはきつと彼女の優しさに水を差す。野暮であり、本質からずれた言葉。

「苦労したんだよ。何せ全然馴染みのない言葉だし。学園長さんは丁寧に説明してくれたけど」

ノートの端には、キレイにまとめられた語句説明のようなものが付いていた。奈々華は仁の去った教室で一人、誰にも頼ることも出来ず、必死にノートを取り、内容を理解しようと奮闘していたのだ。

「……俺は本当にダメなのかもしれない」

口元に手を当て、いつになく真剣な表情に、奈々華は苦笑を返した。きっと昔なら、今頃そんなこと気付いたの、なんて茶化せたのだろうけど、今の奈々華にはそれは出来なかった。

第一章 第二十三話：浮沈

こちらに来て初めての休日を、仁はやはり奈々華に起こされることでスタートさせた。

寝ぼけ眼を擦りながら、むくりと体を起こすと、礼と朝の挨拶を妹に言う。そこで仁ははっきりしてきた視界に初めて奈々華を捉えた。「ん？　どこか出かけるのか？」

奈々華は平日と変わらず、薄く化粧していた。彼女はいつも、行方のようにけばけかしいものではなく、ナチュラルメイクと言うのか、慎ましくした。

「え？　どこか連れて行ってくれるの？」

その薄い化粧に彩られた顔を花咲くように輝かせる。

「……会話が成り立ってないぞ。君はどこかに行く予定があるから、メイクしてんじゃないのか？」

言い切って、仁はいつも奈々華が家でも化粧をしていたのを思い出した。尤も、それについて今まで言及したこともなく、それも含めて少しの隔絶ですっかり忘れていたのだが。案の定奈々華が首を傾げて、否定の言葉を紡いだ。女はいつ何時も……　というヤツか。

「お兄ちゃんはどこか行くの？」

部屋の掛け時計は、午前の十時を指していた。

「うん、そうだな……　街に行こうかと思う」

立ち上がった仁は、テーブルに置いたタバコを手に取り、窓際まで行って一本火を点けた。

ぽんと窓の真ん中を押すと、少し肌寒い秋の風が室内に吹き込んだ。「……私も行っている？」

学園の校則では、休日及び平日の午後八時までは学生の敷地外への外出は許可されている。真面目と言おうか、つまらないと言おうか、それでもこの学生はあまり外出しないらしいが。窓の外の風景を眺めながら、寝起きの一服を満喫していた仁は、諦めたように目を

閉じて…… 了承した。

「あんたたち良好じゃないか？」

二人の会話に起こされたのか、奈々華のベッドの中で眠っていたシヤルロットが囁きだした。すぐに用意の済んだ仁は部屋の外で、年頃の子の支度を首を長くして待っているところだった。

「……日常会話はね」

あれやこれやと服を合わせては、うんうん唸る片手間に乱雑な答え。

「あんたが家で化粧してんのも、アイツのためだろ？ 健気だねえ」

「難儀だよ。かわいいって言って欲しい人が同じ部屋にいるんだから」

同棲している恋人同士なら事情も違うのだろうが、未だ恋愛対象として見てもらえないどころか、距離を置いて接してくる思い人なのだから手は抜けない。やっと決めたのか、丈の長いスカートと、ベージュのジャケットをテーブルの上に置いた。

「久しぶりだな…… お兄ちゃんと一緒にお出かけかあ」

ふふふと、ジャケットの下に着るブラウスを顔に押し付けて嬉しさを抑えきれずに笑う。

「本当頭が下がるよ、あんな甲斐性なしのどこがいいんだか」

奈々華は浮かれていた。仁と一緒に歩く道。山と言ってもいいような丘から、街へと下る斜面状のアスファルトを仁の背を見つめながら、下っていた。幅の広く、服の上からでもその逞しさが窺える筋肉質の背中。本人はあまり長所とは思っていないようで、だぼっとした服をよく着ているが。周囲の木立から聞こえてくる鳥の囀りさえも、自分達を祝福してくれているように思えてならない。

「……大丈夫かい？」

少し遅れている奈々華を、止まって待つ仁が柔和な笑みを浮かべる。
「大丈夫！」

遅れていたのは、兄の背中に見惚れていたからだとは口が裂けても言えないけれど……。それでも奈々華は上機嫌だった。小走りに仁の傍まで追いつく。奈々華が追いつくのを待って仁が尻のポケットから財布を取り出して、中身を確認し始める。

「何か買い物するの？」

「ああ……。坂城には迷惑をかけたからな。何かお詫びにね」

それを聞いた瞬間から、街に着くまで奈々華の口数は極端に減ってしまった。

第一章 第二十四話：街

学園のある丘は、どうも都会の一等地で都市計画に組み込まれず、原型を留めている唯一の場所であると奈々華にも分かった。まるで仏閣のように暗黙の了解で不可侵とされているようだ。丘陵を下る斜面で、休日ということもあってか、自然景観を楽しもうと訪れた数人の観光客とすれ違った。

丘の、ほとんど山と言ってもいいような規模だが、麓に広がる街は中谷区なかやくと言って、かの英雄の名を冠しているかなりの歓楽街。丘の木立に負けまいと、高層ビルや商業ビルが立ち並び、鳥の囀りの変わりに、行き交う人々の喧騒が街を彩っていた。

「どこに行くの？」

はぐれてしまう、というほどの人波ではないが、油断していると仁の背中を見失いそうだ。

「……ううん。そうだな」

今二人がいる中谷中央通というのがメインストリートで、一本の大きな幹だとすると、そこから幾つもの枝が左右に伸びているのが、それぞれ何何通りと名づけられて、店や会社が入ったテナントビルが立ち並ぶ。仁はその内の一本、麓から見ると三番目の左の枝、曲がり角に視線をやった。その通りは、割合多く若者向けのブティックや古着屋が軒を連ねている。どうやら仁は坂城に被服や装飾品の類を贈ろうと考えているようだ。

「無難にネックレスとかかな……」

「……ポケットティッシュとかでいいんじゃない？」

通りには、新規オープンを控えるどこかのパチンコ屋の宣伝にと、ティッシュを配る若者が数人、思い思いに散らばって行き交う人々に渡している。そのアルバイト達に視線をやりながら、いいわけないだろと仁が苦笑いを浮かべた。

結局坂城へのプレゼントは、洋菓子の詰め合わせを選んだ。行列が出来ている菓子店なら、それなりの味だろうと安直に考え、人だかりの出来たケーキ屋に一時間並んで手に入れたものだ。奈々華まで一緒に並ばせてしまったものだから、自分も並ぶと言ってきかなかった、お返しに彼女の買物にも付き合うことになった。

「……元氣だなあ」

ガラス張りの店内は、路地からでも様子が見える。奈々華は女性店員と仲良く服を選んでいる。

「元氣ですなあ」

女の子向けの服屋に入るのは気が引けて、外で待っている仁の独りに答える声。いつの間にか、腰に妖刀があった。

「部屋に置いてきたはずなんだが……」

「我と主は一心同体。主が望めば、我が望めば、いつでも主の傍に馳せ参ずることが出来るのだ」

精霊とは改めて不思議な生き物らしい。

「へえ。簡単に言うとか寂しかったわけだ？」

「無用心ゆえ……」

意地の悪い笑みを浮かべた仁に、にべもない返事を返して、村雲は急に低い声を出した。

「我にはどうも、主が妹殿に嫌われているようには見えないのだが」仁がちらりと村雲に視線を落として、また上げた。

「俺にも見えないね…… あの子が何を考えているのか俺には、もう分からないよ」

恐らくは紛れもない本心。手の平を天に向けて、首をしきりに振る。

なおも村雲は言葉を重ねようとしたが、丁度奈々華がいくつかの袋を抱えて店から出てきた。お待たせ、お帰りと味気ない挨拶を交わす兄妹を、仁の腰から観察するように見守っていた。

第一章 第二十五話…誤解

「あれ？ 城山君か？」

背後からの声に、家路へと就いていた兄妹はほぼ同時に振り返った。仁は予想通り、奈々華は誰だ、といった表情。近藤が苦笑を浮かべて立っていた。

「はは、こんにちは。よく会いますね」

奇遇。仁と近藤はよほど縁があるようだ。苦笑を交し合う大人達を、奈々華が不思議そうに見つめた。

「ああ、奈々華ちゃん。この人は近藤さん。数日前に知り合った人だよ」

仁はさも説明しづらそうに、言葉を選んで紹介した。友達と言うには浅く、知り合いと言うには深い。

「こんにちは。しかし、城山君にこんな可愛い彼女さんがいるとは知らなかったな」

「彼女……」

奈々華が近藤の言葉を繰り返す。呆氣にとられているようで、よく見ると口元は緩んでいた。

「……妹ですよ」

「そうなのかい。それは失礼しました」

「いえ、お気になさらずに……」

「……」

気まづくなったのか、元々用事があったのか、挨拶を済ますと、近藤は邪魔しちや悪いと理由をつけて、足早にもと来た道を引き返していった。

「彼女だって……」

奈々華が仁の顔を見上げる。二人の身長差は二十センチ強。だが難しい顔をしているのは仁のほうだった。

「俺たち兄妹は似てないからね」

無理もない、と仁が溜息を吐く。何が楽しいのか、奈々華はふふふと含み笑いを返した。

「嫌な気持ちにさせちゃったかな？」

仁が恐る恐るといった体で、奈々華の顔を見る。奈々華は笑っていた。いくら自分の知り合いとは言え、近藤が誤解したことについて仁に何ら落ち度はない。

「そんなことないよ！ 私は大丈夫」

ほっとしたように仁も笑った。

後から思えば、性急が過ぎたのだろうが、奈々華は今ならいけるかもしれないと思った。

そつと仁の手に、自分の手を絡めようと、左手を伸ばした。

指先が触れ合う。

仁が弾かれたように自分の右手を引っ込めた。

「ゴメン！」

触れてはいけないものに、触れてしまった。奈々華は自分に触られたくないと……本気で思っている。

「……」

先程までの和やかな雰囲気は、霧散するように一瞬で跡形もなく消え去った。少し距離を取るように、仁が歩く速度を上げて、奈々華を後方にやる。上着のポケットに突っ込まれた仁の右手を見つめながら、奈々華は自分の軽率を呪った。

同時に仁に対するやり場のない怒りもこみ上げる。

どうしてそうなるの？

私が触られるのを嫌がっているなんて、本気で思ってるの？

私は…… 私は……

いつだって、いくらだって、この人に触れていたい。

この人の手の温もりを、私を包んでくれる優しさを感じていたい。

勉強だってした。お兄ちゃんは頭の悪い人があんまり好きじゃないから。

料理だって頑張った。お兄ちゃんは味付けが下手だから。料理の出来るお嫁さんを貰わなきゃなんて冗談混じりに言ってもいた。

服だって、髪型だって……全部お兄ちゃんの好みに合わせてる。

何が足りないの？

何がいけないの？

兄妹だから？

……私がお兄ちゃんを拒絶してしまったから？

手を繋いで欲しい。抱きしめて欲しい。キスして欲しい。

それは全部かなわないのかなあ？

固く引き結んだ唇。必死に堪えても、奈々華の目からは涙が一筋頬を伝った。

第一章 第二十六話：巨人の顎門

巨人の心臓部、小さな核があった。丸いテニスボール大の溶岩のような色をした核。

あそこから巨人を形作る炎が生み出されているのだと、坂城はあたりをつけていた。手足や胴体、頭など骨や肉があるわけではなく、炎が構成しているだけだ。

「あの核を叩けば……」

坂城の傍に控える、青いトカゲのような生物、彼女の主精霊水棲トカゲの＜メイスン＞も同意見だった。

「メイスン。相性はいいのだから、仁が戻るまで耐え切るぞ」
静かに闘志を声にこめ、坂城は巨人にメイスンを向かわせた。

自然の摂理として火は水に弱い。そのはずだったのだが……

炎の勢いは強く、坂城の両の手から放たれる水の弾、氷の弾は、巨人の体に触れた瞬間蒸発して、水蒸気を立てるだけの装置と化している。メイスンにとっても同じことが言える。炎の拳や蹴りを水の膜を張って凌ぐだけ。それすらも、高さや質量のある拳が当たる度によりけるようにして後退する。万全の防御とはとても言えない。防戦一方だった。

「くそ！ 勢いが強すぎる」

彼我の実力差を認めざるを得ない。赤の魔術師は、青の魔術師を凌ぐには倍近い実力差が必要だと言われている。なのにこの体たらく。少々の火ならば消せるのだが、あまりにも勢いよく燃え盛る炎の前では坂城の攻撃は水鉄砲に等しい。

「こんな屈辱……」

言い切るが早いか、メイスンの体が巨人の強烈な蹴りを受けて宙に舞い上がる。ぼたっと小さな音を立てて芝生の上に落ちたメイスンは、その鱗の所々が黒く変色している。防御を破られて火傷を負っ

ていた。

自分の精霊を心配する間もなく、巨人が坂城に向き直った。周囲の空気を陽炎で歪めながら、猛然と走り来る。

精霊を失い、成す術もなく、坂城は瞼を閉じた。

あまりにも情けない最期。結局仁が来るまでの間も保たなかった。頬を一筋の涙が伝う。

何が日本最高の青魔術師だ！ 拔群の相性を誇る赤魔術師に赤子のように屠られる。

何が史上最年少の学園管理者だ！ 背後に大勢の未来ある学生を残して自分は散る。

悔しい。情けない。怖い。

「……風？」

突如、誰かに掴まれた感触。坂城の体は宙に浮いた。

「ぼーっと突っ立ってたら危ないよ？」

聞きなれた声。眠たげな細い目と、それを覆うような長い前髪。仁は坂城の背中と膝裏に手を当てて抱き上げ、巨人の拳を間一髪かわしていた。

「仁！ 遅いぞ」

口ほどには怒りは無い、穏やかな顔。まるで恋人に出会ったように安心しきった表情。既に心の中では死への恐怖も、屈辱も霧散していた。

「ゴメンな。怖かったろ？ もう大丈夫だから」

子供にかけるような優しい声音、手つきでゆっくりと芝生の上に坂城を下ろす。巨人は一瞬何が起こったのかわからず、きよろきよろと顔を回したが、二人の姿を見つけると血気盛んに両拳を突き合わせた。

「……さてと、反撃開始かな」

仁の双眸が妖しく光った。

第一章 第二十七話：矜持と一陣の風の狭間

「仁！ ヤツの核が心臓の辺りに見えるか？」

坂城の言葉に、仁は首だけで答えた。巨人の拳を軽く刀でいなして、体を横に流す。すぐさま炎の拳が張り替えられたばかりの芝生を燃やした。高熱と運動量で仁の顎から汗が滴る。

「どうすればいい！？ 実体がなけりゃ斬れないぞ？」

仁の刀は炎の体を通すことは出来ない。鉄も高温の炎の前ではゼリ―のようにふにゃふにゃになってしまう。体は酔狂ではなく、このことを計算に入れた鎧の役割を担っているのだった。

今度は蹴り。既に焦土と化した地面から、足の部分を仁に向けて勢いよく蹴り上げる。

二、三バックステップ。ちりと仁の前髪の毛先が火の粉に焼かれる音がした。

「……時間を稼いでくれ」

「何をするんだ？」

意思も口もない巨人が、両手を広げ、顔を天に向ける。咆哮しているようで、坂城は背中に冷たい汗が流れるのを感じた。

「避ける！！」

巨人の頭が振られ、その頭の部分が炎の塊となって、仁目掛けて一直線に飛ぶ。

坂城の言葉に機敏に反応した仁が、辛うじて芝生の上を転がりながらかわす。

クソ！ と悪態をつきながら立ち上がる。立ち上がったときには、頭の部分がトカゲの尻尾のように容易く再生されていた。一撃でも当たれば灰になってしまう攻撃を避け続ける。精神力のいる作業。おまけに

核を壊さない限り、今見る限りでは無限に炎は生成される。

「……大精霊魔法を唱える。洪水をやツにぶつけるんだ。炎の体が

消えた瞬間を狙ってくれ！」

「大精霊魔法？」

「説明はあとだ！！ ほら、また来るぞ！ とにかく時間を稼いでくれ」

今度は頭だけではなく、両手の部分の炎も空中で重なり、一つの大きな炎の砲弾となって、仁に襲い掛かる。またしても地面に這いつくばる仁が、坂城のほうに視線をやると、坂城の体は青く輝いていた。

目を閉じて、自身の神に祈りを捧げるように口を動かしている。

仁は瞬時に坂城が詠唱とやらを始めたのだと気づき、巨人に向かって手を振った。

「こっちだよ。お兄さんと一緒にあそぼうよ」

人語を理解しないようだが、挑発されたことだけはわかるのか、巨人が猛然と仁に向かって体当たりを繰り返す。闘牛士よろしくそれを横っ飛びでかわした仁が、なおも巨人に向かって手を振る。刀を鞘に納めて、すっかり回避だけに専念していた。

「お早く頼むぜ？」

少し縮れた前髪を軽くいじりながら、仁は集中の中にいる坂城に呟いた。

「水よ、我等に生命と叡智を与えたもう大いなる自然の恵みよ。今一度静かなる怒りを、猛威に込めて解き放て！！」

祝詞の最後は、猛々しく勇ましく。

坂城の全身が一度まばゆいばかりの青い光に包まれたかと思うと……坂城の前方数メートル先、突如発生した大質量の津波が巨人目掛けて押し寄せる。荒れ狂う水の壁。透明のはずが、向こう側も見渡せない圧倒的水量。

距離を取っていた仁にはかすりもせずに、巨人の体を飲み込んでしまった。

津波のようで、鉄砲水のように鋭く

「今だ!!」

我に帰った坂城の大声よりも早く、津波が引いたその瞬間に合わせて、仁は駆け出していた。

宙にぽかんと間抜けに浮いた小さな球体目掛けて…

カッコつける余裕さえあった。

くるりと一回転体を捻り、抜刀した村雲を思いっきり水平に振るった。

バシユ!!

鋭い音をあたりに残し、球体は真つ二つに分かれ、それぞれが地面に落ちた。固まったマグマのように色を失い黒ずんだまま、うんともすんとも言わなくなった球体を仁が、坂城が見つめた。

「やるじゃんよ!」

先に口を開いたのは仁。少年のように明るい笑顔を坂城に向ける。

「君のおかげだ」

素直に感謝を述べる坂城は、胸に手を当て、先ほどの詠唱の時のように目を瞑った。

まるで、大切なものがそこにあるかのように…

キンッと刀を鞘に納める音すらも心地良いと言わんばかりに、目を開いた坂城は優しく、仁が見たこともないような顔で微笑んでいた。

第一章 第二十八話…キンモクセイ

仁がこの世界に来て、一週間が経過した。

徐々に学園生活や、自分の腰についた相棒、坂城や行方のあしらい方、様々なことに慣れてきていた。相変わらず同級生達との関係は良好とはいえず、奈々華ともあまり話が弾むようなこともなかったが、それでも仁はある程度この世界でやっていく自信を手に入れていた。

いくつか分かったことがある。

焦土と化した世界を仁の知るような文明水準まで差し戻したのは、他でもなくその元凶となった精霊魔術による。特に半永久的に発電し続ける装置としての黄の精霊魔術師の貢献は特筆すべきものがある。リニアカーの導入や、製鉄業においての電力炉の台頭は、製鉄や発電の際の二酸化炭素排出をゼロにし、温暖化対策もバッチリだ。

授業が終わり、何の気なしに裏庭のほうへ足を伸ばした仁は、その黄魔術師に出くわした。彼女は何をするでもなく、一人外の空気を満喫しているようだった。

「目覚しい活躍ですね」

相変わらずの穏やかな笑みは、仁の心までも和ませた。謙遜を述べると、木室はまた笑みを深くする。

「学園長もお喜びですよ。最近、仁がどうした、仁がこうしたと貴方の話ばかりです」

「……そうですか。気に入ってもらえて良かったです」

近くに植えられているのか、キンモクセイの芳香が風に乗って、二人の鼻を楽しませた。

「やっぱり女の子は、窮地に駆けつける勇者様がいいんですかね？」
まだその話、と仁は口を挟みかけたが、木室は悪戯っぽく笑ってい

た。彼女でも軽口を叩いたりするんだな、と仁もまた嬉しそうに微笑む。

「僕が外出するときに限って、精霊が襲ってくるもんですから、あいう構図になるんです」

二人が話しているのは、先日学園を襲った炎の巨人を迎撃した件だ。

「……本当に間が悪い」

「……そうですね」

二人の表情は先程までの柔らかいものではなかった。間が悪い。本当にそんな偶然が重なるものか……

「また会いに行ってるのかな？」

授業を終えて先に自室に戻った奈々華は、テーブルに着くなり浮かない表情で言った。自分の精霊に向けて言ったのか、それとも自身自身に向けて言ったのか、判断がつかなかった。シャルロットは自分に向けられた言葉だと思ったようで、テーブルの下から這い出て、奈々華を見上げた。

「……学園長のところにかい？」

仁は件の巨人の迎撃以降、坂城との関係を良好にしており、特に用がなくても世間話をしに学園長室に行くこともあった。お詫びに持っていた洋菓子を大いに喜んで食べてもらえた、と嬉しそうに話す仁と坂城の仲直りについての首尾も奈々華は顔で笑って、心で泣いて……聞き及んでいた。

「嫉妬……」

文章でなく単語が返ってくる。うわ言のようでもあった。

「あれだけ豪快に助けてやりゃ、誰も悪い気はしないしね」

坂城の仁に対する態度も、軟化の一途を辿っているのを奈々華は感じていた。その精霊であるシャルロットも然り。

「……それにしてもアイツもてるんだね」

ひょいっと窓枠の棧に飛び乗ったシャルロットが、窓の外に顔を向

けた。秋空に薄く垂れ込んだ雲が夕陽を取り込んで鈍いオレンジ色をしているのが見える。遠くの方で、死に場所を探すツクツクボウシが鳴いていた。奈々華が徐に口を開いた。

「欠点は数え切れないほどあるけど……それを補って余りあるほど、優しくて強い人だから」

シャルロットが首を回して見た奈々華の表情は、どこか晴れやかで、手前味噌でも並べるように誇らしげだった。見えていて胸が苦しくなった。

第一章 第二十九話：世捨て人

次はこちらでの生活におけるインフラを整備しないと、いけなかった。

差しあたって急を要するものとして、携帯電話が上げられる。前回、前々回と何とか間に合ったものの、このまま相手が仁の居ぬ間に学園を襲うようだと、後悔する事態になるかもしれない。文明の利器を活用しない手はなかった。

「悪いな、付きあわせちゃって」

廊下でプラプラしている行方を見つけて、仁は街まで買い物に付き合わせた。何となく携帯に詳しそうだという理由もあったが、あまり役には立たなかった。

「まあ、暇だったし。いいわよ」

交換条件に出した、夕飯を奢るという約束の後、行方は調子良くついて来た。結局景気良く飯を食わせただけ。相変わらずの雑踏に辟易気味の仁は、早く帰りたくて少し足を早く動かしていた。

「……でも、こんなとこ学園長先生に見られたら大変ね」

街の中心部に向かう人々に逆行するように丘に向かう二人。慣れているのか、道脇を進む行方が涼しい顔で言った。どうして？ と視線で尋ねる仁に、意地の悪そうな笑みを返す。

「授業中に見つめ合う二人。有名だよ？ 炎の巨人の件もあるし」

確かに、最近坂城は自分が受け持つ一年三組の授業中、仁のほうに視線をやりながら進めることが多くなった。視線に気付いた仁が微笑み返すと、慌てたように視線を逸らしたり、黒板にわざとらしく向き直ったり。

「最近真面目に出てるから、珍しいんだろ」

「うわ、余裕。何かむかつくな」

行方が大袈裟におどけるもんだから、隣を歩く仁があおりを受けて通行人と肩がぶつかった。

「……それにしても、うちのクラスの連中は陰険すぎるな。影で何言われるかわかったもんじゃない」

「まあね…… それでも出てるのは、やっぱり妹さんのおかげかな？」

茶化すように言った行方は、仁の無表情に口を閉じざるを得なかった。

「……あの子にはいつも迷惑をかけてばかりだ」

行方は仁の横顔が一瞬翳るのを見た。

行方と別れた後、いつまでも仁は中庭の片隅でタバコをふかしていた。日の落ちた中庭は所々まだ芝生が剥けている。巨人との戦いの爪跡。まるでその場所だけ、ぽっかりと地面の奥底まで続く穴が開いているような錯覚を覚える。深く、暗く、空ろな……

「戻らんのか？」

腰にぶら下げた村雲が声を発した。仁は用心のため、最近は村雲を持ち歩くようにしていた。

「……」

「妹が心配しているんじゃないのか？」

「……さあね」

「あんなに可愛いらしい妹に懷かれて、坂城殿とも関係は良好なのだろう？ クラスの対応は冷たいが、それなりに楽しそうにしてもよいのではないか？」

村雲の言うとおり、仁の生活はそれなりに恵まれているように、傍目からは見えた。

「……楽しそうに見えるか？」

力なく笑う仁の口から、千切れた白い煙が零れた。

「俺が望んだものじゃないよ」

吐き捨てるように言い切った仁を見ると、村雲はかける言葉を失った。

「……随分と久しぶりなんだ。こんなに人と触れ合うのは」

「……」

「三年間、一人だった。俺が望んだんだ」

フィルターまで燃え進んだタバコを踏み消すと、また新しいものに火を点ける。

「……楽しくないことはないよ。でもそれ以上に、鬱陶しくて、虚しいだけ」

第一章 第三十話：食い違う意図

いくらなんでも夜の十時に就寝しているというのは、仁への当てつけの意味が強かった。仁が部屋に帰りついた時には、奈々華は電気を消して二段ベッドの上でわざとらしく寝息を立てていた。電気を点けても一向に動く気配を見せない。

「……ただいま」

返事はやほりない。

「携帯を買っていたんだ。それで遅くなった……」

テーブルの上には、仁の分の夕食がキレイにラップをかけられた状態であった。親子丼のようだ。

「君の分も勝手だけど用意した…… 無いと何かと不便かと思って」起きているんだろう？ とは言わない。ただ壁に向かって独り言を言うように仁は話し続けた。

「……誰と？」

すると返事が返ってきた。眠たげな、不満げな声。いつもとは逆の構図。

「行方だ。二年の……」

「知ってる。私のところにも来たよ」

相変わらず、ベッドの上から。顔も壁に向けたまま。

「アイツ、君のことまで嗅ぎ回ってるのか……」

或いは奈々華個人ではなく、仁の妹だからか。不機嫌そうに顔を顰めた仁は、そのまま手に持った携帯電話が入った紙袋をテーブルの上に置いた。

「……節操なし」

ぼつりと呟いた言葉は、仁の耳にもきちんと聞こえていた。

「そういうんじゃないんだが」

携帯に詳しそうだから呼んだんだと、言い訳を並べる仁をやっと奈々華がベッドの上から見下ろした。てつきり怒り心頭といった顔を

していると思っただ仁は泡を食った。今にも泣きそうな顔。苦痛に耐える顔。

またやってしまったと思った。

仁がほったらかしている間、彼女は一人だったのだ。友達も家族もない新しい世界で、奈々華の味方は仁だけなのだ。いくら疎遠になったとは言ってもたった一人の家族なのだ。それが、肝心の味方は新しく出来た友人と遊び回っている。

「……ゴメン」

仁はただ謝るしかなかった。ただもう、奈々華のそんな表情を見たくなかったのだ。

「……」

「これからは気を付けるよ。なるだけ君を一人にしないようにする。この学園にいる限り安全ってわけでもないのにな…… 軽率だったよ」

「……本当？」

きつく結ばれた奈々華の唇がほんの少し緩んだ。それでもまだ仁の言葉を信用しきれずにいる。

「本当だ」

「じゃあ、明日から街に行くときは必ず連れて行って？」

半身を起こして、奈々華が真っ直ぐな目を仁に向ける。彼女の望みは仁の予想していなかったものだった。気圧されたように、ああと頷く。

「約束だよ！」

そんなことで君の気持ち晴れるなら…… 仁は黙って首を縦に振った。

「携帯見せて！ 私もあるんでしょう？」

さっきまでの陰鬱な雰囲気は秋の夜空に吸い込まれてしまったようだ。ベッドから飛び降りんばかりの勢いでテーブルに着いた奈々華が袋をガサガサと漁る。黒い携帯とピンクの携帯。後者を手にとつて、輝くような笑顔を仁に向ける。

「ありがとう！」

「……ああ」

街に連れて行ってやると言えば喜び、携帯電話を新しいオモチャでも見るように撫でまわす。

まだまだ子供だな、と頬を緩めた仁はあまり深く考えていなかった。街に行く時間まで奈々華と一緒にいるということは、ほぼ二十四時間、風呂とトイレ以外は常に一緒にいることになるのだと……

第一章 第三十一話：はぐれ精霊

前日、夜遅くまで熱にうかされたように饒舌に話しかけてくる奈々華の相手をしていた仁は、半分眠りかけていて、今から一体何をするのかよく分かっていなかった。

「はぐれ精霊だって…… どんかな？」

仁の隣の席、十年来共に暮らしているというのに、未だ新しい友達に話しかけるように嬉々としている奈々華はちゃんと聞いていたようだ。

「はぐれ精霊？」

ガタガタとクラス総勢数十人が次々に椅子を引いて立ち上がる音にして、仁はようやく今日の授業がこの教室で行われるものじゃないと気付いた。

「聞いてなかったの？ 今から裏庭の奥にある森の中に入って行っ
てはぐれ精霊を捕まえるんだよ？」

もう仕方ないな、と口ではブーたれているにも関わらず、奈々華の頬は緩みっぱなしだった。

精霊魔術師が、必ずしも召還した精霊を気に入るとは限らない。そういう場合、速やかにもといた世界に送り返すのが掟だが、実際に使役してみて気に入らないというケースもある。そういった場合にも、近くの大岩や所定の研究機関に行けば、返すことが出来るのだが……

全ての人間に倫理やルールを徹底するというのは難しいことであって、当然横着をして精霊との契約を解いて、契約の解除は一定期間精霊に定めた名前を呼ばないことでなされる、放置する輩もいる。

また、不慮の事故などで主人を失う精霊もいる。

そういった精霊をくはぐれ精霊＞と言う。

はぐれ精霊は、その楔を解かれ、この世界で自由に行動する。中には物を壊したり、人に危害を加えるモノまでいるので、ここ私立中谷精霊魔術学園では定期的にそれらを捕縛、送還することになっている。

「学生ボランティアってやつだな」

授業の形を取っているが、そういうことだった。二人一組ではぐれ精霊の搜索に当たれとの指示だったが、仁が気付いたときには、まるで予定調和のように奈々華とペアになっていた。

「うん！ 頑張ろうね」

微妙に会話がかみ合わない。面倒くさそうな仁と、仁とペアなら何でもいゝ奈々華。

大岩の裏から踏み込んだ森は、程よく葉っぱの落ちた広葉樹が立ち並び、随分先まで見渡せた。随分先まで同じ光景。絨毯のように落ち葉の広がる地面と、茶色い木立。

「何の変哲もない森に見えるんだけど、本当にこんなところにそのはぐれ精霊とやらいゝのか？」

モミジのような形をしたユリノキの広い葉っぱをぱりぱりと踏み鳴らしながら、仁は木立の間を進む。＜はぐれ精霊狩り＞はこれが初めてじゃないのか、勝手知ったるといった雰囲気クラスメイト達とはとっくに見えなくなっていた。

「何でも大岩の近くまでは来れるんだけど、そこからは近づけないんだって。だからここらへんにゐるのは間違いないよ」

「ふうん。何か可哀想だな」

そう言うと本当に悲しげな顔を作る仁を、奈々華も同情を禁じえないといった、それでもどこか締まりのない顔をして見つめた。憎まれ口ばかり叩く仁は実は誰よりも優しい。奈々華は嬉しくなって、時間が止まればいいのと思った。

イテツという仁の小さな悲鳴がそれを終わらせた。

仁の右頬に小さな引っかけ傷があった。少し血も滲んでいる。仁の

すぐ傍、ピーターパンのような小人が空に浮かんでいる。背中にはトンボのような羽があり、のっぺりとした顔の作りをしている。

「……アレは＜風の子供＞だね」

今まで大人しく奈々華の腕の中で眠るように丸まっていたシャルロットが顔を上げた。

「風の子供？」

「文字通り緑の精霊さ。下級精霊だから言葉は通じないし、知能もそんなに高くない。イタズラ好きな奴等さ。放って置いてもそんなにヒドイ悪さはしないんだけど……」

シャルロットの視線の先には、木立ちの上の方まで浮かび上がったその＜風の子供＞を見上げる仁がいた。

「この野郎！　ちよっとぶっ殺してやるから、降りて来い！」

あらん限りの罵声を浴びせて、近くの木に登り始める仁。

「……可哀想だよ」

第一章 第三十二話…垣間見る狂気

ぶつ殺すこともなく、両手で子犬でも持つように＜風の子供＞を捕まえた仁は奈々華と共に、森の入り口まで戻った。そこには社やしろ教諭が待っている。生徒達が捕まえてきた精霊をあるべき場所に戻す作業と、不測の事態に備えているのだった。

「風の子供か…… 意外に地味な精霊を捕まえてくるんだな」

社という中年の男。全体的に痩身で、少し薄くなり始めた生え際と、神経質そうに吊り上った目。フレームのないシャープな眼鏡も近寄りがたい雰囲気醸し出すのに一役買っている。仁に対してはあまり好意的とは言えない。

「……地味とか派手とかあるんですか？」

社は仁の質問には答えず、顔にある小さな引っかけ傷を見つけて、嫌らしく口の端を吊り上げた。

「何だ？ お前の妹は治癒も使えないのか？ それとも治してもらえないのか？」

「治癒……」

「白の魔術師の基本だろうが」

ふんと笑みを濃くする。引き攣ったような顔は素直に醜かった。

「私……」

奈々華は未だ精霊を使役した魔法も、その力を借りて発動させる魔法も使ったことがない。仁の顔色を窺うように不安げに眉を寄せた。奈々華に笑いかけて、社に向きなおると不機嫌を隠そうともせず、目を細める。

「おい、いい加減にしねえと叩き潰すぞ。嬉しそうにハゲやがってハゲてる場合じゃねえぞ、コラ」

「お前……！」

社の声は怒りに打ち震え、あまりの屈辱に二の句を継げない。仁は捕まえた風の精霊を、そんな状態の社に投げつけるようにして渡し

て、踵を返した。奈々華も同じように身を翻す。

「待て！ まだ話は……」

そこまで言いかけて、社は顔を硬直させた。顔だけ振り返った仁を見ると、瘡おこりにでもかかったように身を震わせる。感情の欠片も見えない、蠟人形のような無表情。

仁の脳裏には社の細首を斬り落とすイメージが再生されていた。社が精霊を呼び寄せる間もなく、踏み込みながら抜刀して、首と胴体を切り離す。腕に聞いても、足に聞いても快い返事しか返ってこない。あんな貧弱な首なら片手で事足りる。

「……お兄ちゃん」

優しく諭すような声音で、仁に先を促した。仁はゴミでも見るような目で社に一瞥くれると、再び森へと歩を進める。

「化け物兄妹め……」

丸々一分を要してようやく口がきけるようになった社は、吐き捨てるように負け惜しみを言った。

「ありがとう。お兄ちゃん、私のために怒ってくれたんでしょ？」
幹の間を軽快に、舞うように足を運ぶ奈々華は、仁の前に回りこんでその顔を見上げる。嬉しさを隠し切れず、念願のオモチャを買ってもらった子供のように笑っている。

「あのハゲは元々気に入らなかったんだよ。自分じゃ何も出来ないくせに、嫉妬ばかりする」

そういう人間が俺は大嫌いなんだ、と苦い思い出を噛みしめるときのような顔で言った。曖昧な表情でそれを見ていた奈々華が、仁の頬に目をとめた。

「ねえ。治してみようか？」

そう言う仁の答えも待たず、シャルロットを抱えて、何やら口を動かし始めた。囁くような声量は聞き取れず、どうやら詠唱してい

るのだとだけ仁は分かった。やがて奈々華の体をぼんやりと白い光が包みだす。

坂城のときに見た発光。どうやら発動する魔法の属性に応じて、体を覆う光の色も変わるようだ。

「白よ。偉大にして無謬の神が成せる業よ。我にその大いなる慈愛を分け与え、我が愛するものの痛みを取り払え」

その部分だけが聞き取れて、奈々華の体が一際大きな白に包まれて、元に戻った。

仁が試しに自分の頬を触ってみると傷はキレイさっぱり、最初からなかったかのようになくなっていた。えへへと得意そうに笑う奈々華。

「何となくやり方は分かってたんだけど…… ちょっと照れくさくて」

わが愛するもの。そんなフレーズを思い出して、仁は困ったように首の後ろを掻いた。

第一章 第三十三話：踊る会議

いい感じだ。さすがにいい感じだ。どんなに悲観的に見ても、悪い方向には転がっていない。

たまには外でタバコを吸ってくるという仁を部屋から送り出し、恒例となった「仁との距離を縮めようの会」はいつもの面子、奈々華とシャルロットだけだが、いつもの場所で開かれていた。開始早々にやけっぱなしの奈々華は、シャルロットに抱きついたり、クツシヨン顔を顔にかぶせて悶絶したりと忙しない。

「まあ、良かったね」

その余りの喜びぶりに、シャルロットはそんな言葉しか浮かばない。うん！ と力一杯頷く奈々華を少し冷めた目で見える。

「しかも私を庇ってくれたんだよ！！」

「そうだね」

口では自分が気に入らないから、なんて言っていたが、奈々華には分かる。アレは奈々華を氣遣ってくれたのだ。もし包み隠さず、お前を守るためだなんて仁が口走っていたら、奈々華の転げまわるス皮ードは今の比ではなかっただろう。

「それにしても、アイツあほだろ」

仁は簡単に奈々華と二十四時間一緒にいるという条件を呑んでしまった。氣付いた様子もない。何度か約束を履行して始めて氣付くのだろう。

「いいの！ お兄ちゃんがあほな分、私がしっかりすればいいんだから」

まさにベストカップル！ とまた悶絶を始める。

「アンタも十分あほだよ」

学園長室。アルミだかスチールだかの安っぽい灰皿にタバコを押し

付けた仁が、ゆっくりと口に残った煙を吐き出した。ソファアの対面に座る美女に眠たげな目を向ける。

「どうだった？ はぐれ精霊狩りは？」

「知ってるくせに……」

全ての課外授業の詳細、特に仁と奈々華は重要人物であるため、その行動は逐一下から報告を受けていると以前坂城が自分で仁に話していた。

「あまり人に実害を加える精霊じゃないんだがな」

彼女が言っているのは、風の子供のこと。アゴに手を当てて、わざとらしく考え込むフリをする。最近になって仁はこれが彼女の癖なのだと分かった。このことについても彼女なりの答えは出ているらしい。

「……黒の魔術師は嫌われ役なんだ」

仁の予想通りでもあったのか、その表情に変化はない。頬杖をついて、壁に突き刺さった鹿の頭部の剥製を虚ろな目で見ていた。

「社についてもあまりイジメないでくれ」

そんな仁の様子に構うことなく、くすくすと含み笑いをする。

「あれは、中谷に心酔していてな。でも黒の素養がなくて仕方なく縁を取った」

「ふうん」

「やっかみだよ。いい加減慣れろ」

仁に常につきまとう羨望と嫉妬。坂城が不思議そうに首を傾げた。

「本当のことを言わないのか？ 奈々華をかばったんだろ？」

「……」

「おかしい男だな。兄妹愛を恥ずかしがる歳でもないだろう？」

坂城が今度は本当に分からないといった表情で、仁の顔を覗きこむように身を乗り出した。

「……社の件、気をつけるよ」

何が気に障ったかも分からないまま、坂城は慌てて話題を変えた。変えたつもりがまだ奈々華の話だった。

「それにしても、奈々華もかなり優秀だな」

「……どうして？」

「君は特殊だが、普通は精霊を召還して、一週間やそこらでまともな魔法は使えない。まずは精霊との同調を深めてだな……」

「そんなことまで調べてんのか」

口調に棘はない。しかし、相変わらず焦点の合わない視線を壁に送りながら出る抑揚のない声は、どうしようもなく聞く者を不安にさせた。奈々華が魔法を使ったことまで知っている。本当に逐一。

坂城は失言だったのかと、続く言葉を引っ込めて、ひたすら自分に合わない仁の目を見つめていた。

第一章 第三十四話…今夜は肉じゃが

「言われれば買い物くらい俺一人でしてくるよ?」

苦笑混じりに、奈々華に苦言を漏らした仁は、それでも奈々華の歩幅に合わせながら歩いていった。

「一緒に行く約束だよ?」

それを言われれば、仁は黙るしかないのだが、仁の気持ちもわかる。大学生の兄と高校生の妹が仲良く夕飯の買い物連れ立ってするというのは、あまり一般的ではない。頼めば買ってくるし、自分で行くにしても一人で事足りる。都会らしいお洒落な雰囲気、食料品の店内を同棲カップルよろしく、仲睦まじくねり歩く。高級食材や、どんな風味を付け足すのかも分からない横文字の香辛料も並んでいる。

「何が食べたい?」

そういう台詞もカップルのそれみたいだと意識すると、自然と奈々華は頬が緩むのだった。

「……なんでも」

不思議な形をした野菜を手に取りながら、やつつけない返事。

「何でもは困るよ」

これはお母さんみたい。

「……じゃあ肉じゃが、かな」

その野菜を棚に戻して、今度は慣れ親しんだジャガイモを見つけた仁が答えた。

「そういえば…… 坂城が褒めてたよ。君も優秀だって」

間のつなぎに選んだ話題は、大して仁が話したいわけでもないのに、地雷を踏むことになった。

「……昨日、タバコ吸いに行くって言って、学園長さんのところ行ってたの?」

まるで憎き親の仇でも見るように、奈々華は顎を引いて、仁を睨み

つけた。

「いや、その。プラプラしてたら、捕まっただよ」

「……」

「本題はそこじゃなくて…… 治癒は、白の魔術師の基本魔法らしいけどさ、その詠唱で君の体が光に包まれただろ？ アレは魔術師としての才覚が優れているってことで……」

「……」

「……まあ、何と言うかこれからは君に迷惑かけないように、なるだけ怪我しないようにするよ」

奈々華の聞きたい言葉ではなかった。

「あれは……」

この場所に似つかわしくないと言ったら失礼か。仁が果物が置いてあるコーナーに差し掛かったあたり、見知った背中を見つけた。マングローを手に取りにらめっこしている。渡りに船。

「近藤さん！」

振り返った男は、仁を見つけると何日かぶり、とよくわからない挨拶を返した。

「やあ。今日も兄妹でお出かけかい？ 仲がいいんだね」

仁が答えるのを遮るように、奈々華がはいと大きな声で答えた。

「二人とも学校の帰りかい？」

柔和な笑みを浮かべて、奈々華と仁の顔を交互に見る。仁は難しい顔をしていた。何か気の利いたことを言おうとしているのかもしれない。

「……ええ。近藤さんは今日はお休みですか？」

仁の口からは結局月並みな言葉しか出ない。近藤は、休み休みと子供のようには繰り返した。

「近藤さん、番号交換しませんか？」

仁がポケットから乱暴に携帯電話を引っ張り出した。買った当初のまま、ストラップも傷の一つもついていない黒いフォルム。快諾し

た近藤がさっそく自分のものを取り出して、仁の携帯と赤外線通信しだす。

「買ったの？」

「……ええ」

無事に両者の携帯の画面に登録確認が映し出された。

「ええっと」

近藤の視線の先には奈々華。大の男二人がスーパーの中でアドレス交換をするという物悲しい光景を目の当たりにしていた奈々華は、先程の不機嫌がまだ直っていないらしい。

「私はお気遣いなく。兄に男性と番号を交換してはいけないと言われてますので」

それだけを言うと言とプイと仁の視線から顔を逸らした。

「ええ？」

とんだ仕返しだ。

「そうか…… 仲が良いんだね」

案の定仁を変態認定したように、近藤が気まずげに二人から距離を取る。またも都合の良い言葉、邪魔しちゃ悪い、を連呼しながら、誤解を解こうとする仁を振りほどき、近藤は店を後にした。

第一章 第三十五話…箴言とフィルター

「ああいう心に来る仕返しはやめようぜ？」

「先にやったのはそっちじゃん」

「何の話だよ？」

「……別に」

店を出てすぐに始まった二人の言い合いは、平行線を辿っていた。変なこと言うな、から始まって、そっちが悪い、に終わる。仁は自分の不実について一向に気付かないのだから、気付いたら気付いたで問題なのだが、解決を見るのは難しい。ただ最初は、奈々華に魔法を使わせた自分の失態を責められているのかと謝れば、そうじゃない。坂城と会ったことが、嘘をつかれたようで気に入らないからかと思えば、どうもそれだけではない。完全にお手上げの仁は段々、熱くなってくるのを感じていた。

「だから何で怒られなきゃいけないんだよ」

「……」

いざ理由を尋ねても、明確な答えは返ってこない。

「どうせ、本当は騙したと思ってんだろ。違うからな。マジでたまに見つかったただだ」

「それもあるけど……」

「大体俺が外でタバコ吸おうが、学園長室でタバコ吸おうが勝手だろうが」

口に出して初めて、仁は自分が失言を吐いたのだと気付いた。奈々華の目から涙が零れたから。

「そんなこと…… 言ったら」

「……」

そんなこと言ったら、家族は成り立たない。お互いを構い合い、お互いを知り合い、お互いを慰め合う、お互いを咎め合う。お互いが味方たりえる。だから家族なのだ。希薄になっていた兄妹の絆を取

り戻そうと、歩み寄っているんじゃないかと、仁にも最近になって奈々華の行動に答えを見出しつつあった。

俯いたきり、体を震わせる奈々華に、仁は手を伸ばした。

奈々華の頭に触れかけたそれが、掴んだのは虚ろな空気だけだった。それを頭上で感じていた奈々華が、弾かれたように仁に背を向け、走り出す。女の子にしては速い足を回して、あっという間に見えなくなる。奈々華とすれ違った通行人が、訝しげに振り返った。

「……追わなくていいのか？」

今まで黙って刀を演じていた鬼が平坦な声を出した。

「街中では話しかけなくなって言ってるんだろ」

仁も負けず劣らず、感情の読み取れない声だった。

「……俺が追って行っても何も出来ないさ。アイツが怒ってる理由さえわからないんだから」

「感情というのは難しいな。心にフィルターをかける」

「どういう意味だよ」

ズボンのポケットからクシャクシャになったソフトパックのタバコを取り出しながら、大して興味もなさそうに聞いた。歩道の端に「路上喫煙禁止」の横断幕が見えた。

「案外第三者の方が、物事の本質を見抜きやすかったりするということだ」

「お前はわかるってのか？ 是非ご教示願いたいところだな」

そんなバカな、とわざとらしく口の端を吊り上げる。

「……それは我から聞くことではない。自分で気付くか、或いは妹殿が話してくるのを待つべきだ」

その答えを、ふんと鼻先で笑った仁がジッポライターの蓋を親指で押し開けた。

「主よ。過去に主等兄妹に何があったかは知らぬが、あまり一つの考えに固執しているといつか困るのは主ぞ？ ゆめゆめ忘れてくれ

る
な
」

第一章 第三十六話…死線

狼ともハイエナともつかない、四速歩行の動物を模しているようだった。コアはどてっばら辺りに浮いている。そこから炎が生み出され、四本の足と、頭、胴体を形成している。前回の巨人と同じ精霊^{まがたま}・禍玉・赤。無限に炎を生成する装置として、科学の躍進に寄与する精霊。武器として転用した場合の恐ろしさは、坂城が身をもって承知していた。

「……とりあえず、仁には連絡を入れておいた。戻るまで耐え忍ぶぞ」

坂城は先程の仁との会話を思い出していた。少し引かかる言い方。首を振ってそれを頭から追い出すと、目前に迫るイヌ科の炎に照準を合わせて、詠唱を始めた。

攻守共にバランスの取れた戦法。

坂城の水棲トカゲ、木室の雷馬が相手の動きを止めて、後ろに控える精霊魔術師の集団、教員達が順々に詠唱を始める。半分が防御に備えて待機。二人の精霊が受け切れなかった炎が詠唱中の無防備極まりない仲間達を直撃することのないように目を凝らす。半分が攻撃。精霊と仲間を信じてただひたすらに精神を統一し、詠唱を行い、魔法を繰り出す。

最初は上手くいっていた。

だが、徐々に最前線の精霊たちの体に火傷が目立つようになり、後方まで炎が飛んで来る率が高まってくる。防御に回る人間の数が、攻撃側を上回り、戦闘開始三十分もしないうちに手数が圧倒的に足りなくなっていた。もう目を瞑っているのは坂城と、木室二人。

「クソ…… 城山は何をしてるんだ」

防御の要としてチームを牽引する社が、汗でずれる眼鏡を直しながら悪態をついた。

また一人、炎を受けきれずにもんどりうって地面を転がっていく。敵の口から吐き出される炎の弾丸。もう雷馬の方は芝生の上に転がったまま、ピクリとも動かない。水棲トカゲの方も時間の問題といった様子。魔術師達に降りかかるそれらは今や霰のように間断ない。最も後方にいる救護班、と言っても白の魔術を教える新居あらいと言う教師一人だが、に運び込まれる教師達は、皆一様にヒドイ火傷を負っている。

メイスンの体が衝撃に耐え切れず、芝生の上を回転しながら教師達の最前列に突っ込んだ。

倒れ伏したまま動くことが出来ない。炎の獣が勝ち鬨でもあげるように、天に向かって口を大きく開くのが見えた。遊んでいる。遊ばれている。教師達の間絶望が蔓延し始める。皆の戦慄が坂城にも伝わり、何かを叫ばないと、自分も飲み込まれそうだった。

「皆！ 士気を保て！ まだ諦めるな！」

しかし、教師達は顔を上げない。炎の獣がゆっくりと教師の一団に向かって歩を進める。目と口を形作る炎が揺れ、いみじくも禍々しく笑っているようだった。

「クソ！ 仁……」

獣の動きが止まった。ピタリと。ビデオテープの停止ボタンを押したように、メデューサにでも睨まれたように全く動かなくなった。地面につけかけた片足が宙に浮いたまま。

「な、何が起こったの？」

本室ほどの経験豊富な魔術師にも納得のいく説明がつかない事態。困惑する教師達を余所に、獣は教師達の一団が控える中門の手前、芝生の切れ目あたりでなおも止まったままだ。

次の瞬間、獣の姿を形作っていた炎は跡形もなく消えた。宙に禍玉だけが浮いているだけ。

その黒ずんだ球体も、坂城たちが反応する間もなく、一度大きく浮

かび上がると、学園の外へと飛び去っていった。後に残されたのは
困惑と安堵の入り混じった表情を揃える学園の教師達だけだった。

第一章 第三十七話：DM少女

自治体に委託された業者の男性に路上喫煙の罰金として、二万円を財布から取り出しているとき、仁は自分の携帯の着信音を聞いた。

一昨日買った彼の携帯の番号を知っているのは、妹の奈々華と坂城、購入時に教えた行方と、先程交換した近藤だけ。仁が男性に、もうしませんと謝りながら携帯を開くと、ディスプレイには坂城遊庵と出ている。

「もしもし」

「仁！ 敵だ！ すぐに戻ってくれ！」

敵襲。やはり今回も仁の留守中だった。逼迫した坂城の声音から、あまり時間の余裕はなさそうだ。

「……」

「聞いているのか!？」

「聞ってるよ。そっちには戻らないかも知れん」

「な、何だと!!」

仁が携帯を耳から大きく離れた。

「落ち着け。心配はいらん」

「どこがどう……」

「本体を叩くんだよ」

電話口の坂城が息を飲む音が響いた。仁は涼しい顔でこう締めくく

る。

「何も心配いらねえよ。あんた等の悪いようにはしない」

電話を切った仁は、緩慢な動きでそれをポケットにしまうと、首を一、二度鳴らして歩き始めた。

「私が悪いことはわかってるんだ」

ポツポツと弾き語りでもするように、奈々華は胸の内を、胸に抱え

たシャルロット相手に吐露していた。

「……まあ、普通は兄貴の交友関係にいちいち口出す妹はいないからね」

わかれと言うほうが無理だし、わかってももらえても今の状態では九分九厘玉砕だ。

「でもさ…… もうちよつと」

「もうちよつと何さ？」

学園へと続く丘の途中、アスファルトに木の実や落ち葉が転がる道を一人と一匹は途方に暮れたように登っていた。いくら気まづくても、この世界に奈々華の帰る場所は、仁もやがて帰ってくるあの部屋しかないのだ。以前は祝福しているようにさえ思えた鳥の囀りを、奈々華は自分を嘲笑しているように感じながら聞いていた。

「もうちよつと……」

「優しくして欲しい？ 自分の想いに気付いて、愛して欲しい？」
自分を抱く奈々華を見上げる。目には挑発するような色が浮かんでいた。

「……」

「自分だけを見て欲しい？」

「……そうよ。そうよ？ 何が悪いの？」

「……」

「私はお兄ちゃんが好きなの！ 法律なんて関係ない！ お兄ちゃんじゃなきゃ嫌なの！ それをお兄ちゃんにも求めて何が悪いの？ 同じように思って欲しくて何が悪いの！？」

怒鳴るような声量で思いのたけをぶちまけた奈々華は、肩で息をしている。近くの木にとまっていた野鳥が驚いたように飛び去って行った。

「それだけ吼えりゃ上等さ！ また明日から頑張るこったね。仲良くなるには喧嘩は必須だよ」

アタシも応援してるよ、と丸い手を小さく握ってみせる。わざと怒らせて、激励に変える。最初のうちは中立的な立場を取っていたシ

ヤルロットも、奈々華の思いに触れ、その一応援者となる決意をしていた。

「……ありがとう。そうだね。少しずつ仲良くなってる、それで最後は……」

気色の悪い笑みを浮かべる奈々華はどこか遠くのお空を眺めていた。

「アンタ、やっぱアイツの妹だよ……」

仁は奈々華の背中を視界に入れながら、少し後方を歩いていた。携帯の画面に一度視線を落として、舗装された道はずれる。名残惜しそうに、それでも安心したように奈々華の背にもう一度目をやった。

「……行ってきます」

ざくざくと落ち葉の絨毯を靴で蹴散らしながら、仁は木立ちが途切れた場所に着いた。周囲の木は焼け焦げたように、黒ずんで幹半ばでその先を失っていた。人工的に、もっと言えば赤の精霊魔法によって作られた空間。

先客がいた。目を瞑り、指揮者のように手を宙に泳がせていた。仁に気付いているだろうに、慌てた素振りもなく、やがてゆっくりと目を開けた。白いシャツに水色のジーンズ。年齢の判断がつきにくい柔らかな笑みは相も変わらなかった。

「着いて来ちゃダメじゃないか？」

余裕のある声音。まるで小さな子犬が後を追ってきているような……

「二時間ぶりですね、近藤さん」

暮れの空には、凶兆のように赤々と、太陽が輝いていた。

第一章 第三十八話…無力なる者達

「こっちの世界の携帯は便利というか、プライバシーがないとか……」

そう言って仁は近藤に携帯の画面を向けた。地図のようなものが映っている。

「ちゃんとトレース機能をオフにしないとダメですよ？」

トレース機能。その電話番号を登録してある携帯の現在位置を表示する機能。

「気付いていたんだね」

驚きも感慨もなく、近藤は淡々と尋ねた。

「三回はやりすぎだ、近藤さん。サルでもわかる」

仁がバサッと木の葉を一度蹴った。湿った土の上を、布団をはがれたねぼすけのように、団子虫たちが右往左往していた。

「……毎回毎回、俺のいない間に襲えたのは、アナタが俺と会っていたから」

近藤はポリポリと頬を掻いたきり、黙って仁の言葉を聞いていた。

「それに俺は学生だとアナタに話したことはありません」

「……」

「ここいらには中谷しか学校はありません。俺の風貌を見て、中学生なり高校生だとは普通判断しないでしょう？」

なるほどねえ、と感心したような声を出す、近藤の顔には焦りはなかった。

つまりは最初から、仁に近づくために雀荘に出入りして知り合い、仁の行きそうな場所を徘徊し、出会ったときは即学園を襲撃。仁のギャンブルジャンキー習性や、学園の生徒として生活しているなどの情報は持っていたことになる。どうして漏洩したのか……

仁は諦めたように一度頭を振って、再び近藤の目を真っ直ぐに捉えた。

「……出来れば、もっと違う形で会いたかったですよ」

「……俺もだ」

以前仁が駆逐したあの丸い溶岩のような塊が、近藤の傍に舞い降った。

「クソ！！ 繋がらないか」

坂城はもう何度目かもわからない、意味のない行動を終えて焦りを露にした。仁はトレースモードはおろか、近藤との接触後は携帯の電源も切っていた。禍玉の襲撃と撤退のわけ、坂城だけは十分に理解していた。仁がヒューイットと接触したということに他ならない。ヒューイットも仁が相手では、学園の襲撃と両天秤というわけにはいかない。

「社！！」

社は風の流れて、離れた場所にいる人の気配を察知するという作業に従事している。玉のような汗を広い額に浮かべて、上司の命令をこなしているが、めばしい成果は挙がっていないようだった。

「少し落ち着いたらどうですか？」

傍に控える木室が、歳相応に落ち着いた声で坂城を宥めた。未だ中庭に残っているのは、坂城と社、木室の三人だけだった。傷ついた者は手当てを受けに、無事な者は生徒達の統括にと走り回っている。ただ坂城だけは、発見次第仁の援護に向かえるように頑としてその場を動かないのだ。職務も立場も忘れ、ひたすらに仁の所在と、無事を今か今かと待っている。

「敵は強大です。しかし、仁さんならきっと大丈夫だと信じていましょう」

「仁を見殺しにすると言うのか！」

苛立ちは怒声に。坂城は敵でも見るように、公私共に支えになってきた老齢の魔術師を睨みつけた。

「アイツは…… アイツはこの学園を守るために闘っているんだぞ

！ 私の学園を守るために！」

感情が抑えきれずに、坂城の目からは涙が零れる。それでもなお目には鋭い光を宿していた。

「だから、落ち着きなさいと言っているんです。仮に彼の居場所を見つけたとして、そんな精神状態では助太刀にもなりません。今はただ信じるのです。耐えるのです」

静かに紡ぐ言葉とは裏腹に、木室の手は血管が浮き出るほどにきつく握られていた。木室も同じ気持ちなのかも知れない。学園を守ることにすらろくに出来ず、本来関係のない仁に全てを委ねている。今もこうして阿呆のように口を開けて待っているしか出来ない。

時間だけが過ぎていく。社の額の汗が増すだけで、一向に仁が見つかったという報告は上がらなかった。

第一章 第三十九話：近藤

「魔霊合撃」
まれいしうごうげき

魔術師と精霊が容れ物を同じくする精霊魔術師の禁忌。使用者は一時爆発的な力を得るが、代わりに自らの体に多大な負担を課せられる。最悪の場合死に至ることもある恐ろしいやり方だった。

煉獄のヒューイット、近藤をしても精霊の力の全てを受けきれるものではなく、それでも体の大部分は炎に覆われていた。服も皮膚も燃えることなく、ゴウゴウと発火を続ける。炎に包まれたヒト。足元の土は悲鳴を上げるように白い煙を吐き出し、焦土と変わっていく。常軌を逸したその風貌に、仁が気圧されたのは一瞬。

炎を纏った拳が仁の右腕の袖口をかすめ、ジュツと嫌な音を立てる。瞬く間に仁のシャツは片袖のない前衛的なデザインに変わった。禍玉本体だけが持つ熱量をゆうに越えている。ヒリヒリと痛む右腕を、目玉だけ動かして確認すると、皮膚がただれていた。

「……」

攻防一体。隙がない。刀を入れれば確実に溶けてしまうだろう。唯一背中とはほとんど炎に覆われていないが……近藤本人も何かしらの武術を修めているのか、常人の動きではない。背中を取るのは至難の業。近藤は仁の内心を見透かすように、距離を詰めてくる。ワッ。

かすただけでもあの威力。左右の動きだけでかわすのは危険と判断した仁は、瞬時にバックステップで事なきを得る。しかし、安心する間もなく今度は蹴りが飛んで来る。火の粉を撒き散らしながらしなる近藤の右足は、またしても虚空を切った。勢いあまってぶつかった地面がまたも一瞬で焦げ上がった。

「逃げてばかりじゃ勝てないよ？」

そう言って、後退ばかりを続ける仁に執拗に迫る。引き付けて、拳

が振るわれる度に後退。反撃の糸口すら掴めない。防戦一方。一歩間違えば一瞬で蒸発する。神経を擦り減らす戦闘に、仁の顔には滝のような汗と疲労の色が浮かぶ。片や背中さえ取られなきやダメーシを受ける心配もない近藤。どちらが有利かは火を見るより明らかだった。

「……少し俺の話を聞いてくれないか？」

近藤は息こそ上がっているが、殺そうとしている相手に向けているものとは思えない、穏やかな声で言う。トントンとその場を跳ねるだけで、仁に向かってこなくなった。

「……トレース機能の話をしたね？」

「……ええ」

近藤は今は闘う意思はないようだったが、それでも仁は油断なく視線を近藤から離さなかった。

「昔の癖なんだ。俺の妻はヤキモチ焼きでね…… 常に所在が確認できるようにしていないと怒られたんだよ」

「……奥さんは？」

聞きながら仁は既に答えはわかっているようだった。短い付き合いではあったが、近藤が理由もなく破壊に身を委ねるような人間には思えなかったから。

「死んだ…… 殺されたんだ」

近藤には努めて淡々とした声を出している雰囲気があった。

「フロイラインの幹部、煉獄のティターニア」

妻を殺したヤツの名前さ、と力なく笑う。

「……」

「妻はとろい所があったからね、魔術師同士の戦闘に巻き込まれたんだ。けど理由なんかどうでもいい。妻がいなくなった…… それだけで俺の全てが変わったよ。ヤツに復讐することしか頭になくなった」

「もしかして、煉獄ってのは……」

「そうだ。ヤツを殺した俺が受け継いだ通り名だ」

ぴょんぴょんと跳ねるのを止め、息を整える。

「でもどうして？」

「どうして敵がいた組織に入ったか、か？」

コクリと仁が首肯する。首肯して、近藤の目に再び強い光が宿るのを見た。一層足に力を込める。話は終わりで、また戦闘が始まるのだと思ったが、近藤の怒りが自分に向けられたものではないと次の言葉で悟った。

「……組織のボス、ひらうちりょうし平内涼子を殺すためさ」

第一章 第四十話…悲壮なる者

彼の絶望はいかほどのものだったのか、仁には思いを馳せることは出来ても、理解することは出来ない。突然愛する者を奪われる。ありきたり、という言葉が浮かんで一、二度かぶりを振った。

当事者にとって、ありきたりだろうが、一億人に一人の災難だろうが、どうでもいいことなのだ。問題はいつも支えてくれた人が、いつも優しい笑顔を見せてくれた人が、大切な人がいないということ。天寿を全うすることなく、無念のうちに殺されてしまったということ。

仮に自分が将来、愛する者を、生涯の伴侶を殺されたとき、一体どうするだろうか？

きつと近藤と同じ、復讐に心を支配されるのではないか？

「どうした？ 本気を出さないと死んでしまうぞ!？」

聞いてくれてありがとう。その言葉を合図に再び、近藤は炎の修羅へと戻った。まるで彼の命を、魂を燃やすような煉獄の炎は一層力強く……

「……」

近藤が再び拳を、蹴りを間断なく仁に打ち込む。しかし明らかにさつきまでよりも近藤自体の動きは鈍くなっていた。魔霊合撃。そのおぞましい禁忌は徐々に、けれど確実に近藤の体に何らかの負荷を与え始めているのだ。それでも唸りを上げるようにして向かってくる右の拳を、仁は渾身の力をもってかわすだけ。気を抜けば一撃で灰になることは必死だった。

「遠慮をしているのか？ 君にも守るべきものがあるんだろう？」

こんなところで朽ちたくはないんだろう？」
風切り音もなく、洗練された蹴りが仁の頭上を通過していく。ちりとまた仁の髪の毛を燃やす音がした。近藤を突き動かすのは、本

当にただ復讐の念か。恐らく今すぐ精霊との融合を解かなければ手遅れになってしまう。それでも持てる力の全てを、目の前の敵、城山仁に向ける。

「……」

「優しさだけでは誰も救えないんだぞ？ 俺は君を殺したら今度は君の妹を殺す」

仁の顔つきが変わった。大きく見開いた血走するような眼。固く引き結ばれた唇。近藤が見たこともないような顔。仁の左目が、左目だけがグリーンと白目をむく。左半身だけ癲癇を起こしたように。白目の中に何か浮かんでいる。まるで白目を二つに割るような…… 瞼？ 近藤が驚く暇も、確認する暇もない。

仁の体がその場から消えた。

直後、近藤は背中にトラックにでもぶつかられたような衝撃を受け、成す術もなく落ち葉の上に転がった。何が起きたのかもわからないまま、それでも仁の姿を視界に収めようと、すぐさまに顔を上げるのは流石。

だがそこに仁はもういない。

再び背中に衝撃が走り、今度はさっきまで自分が居た場所にもんどり打って戻ることになる。蹴られているのだ。まただ。近藤ほどの実力者にも捉えられない人智を超えた動き。

「一体何が？」

顔を上げた近藤を、仁が真正面から見下ろしていた。先程のは見間違いか、仁の目には特に異常はない。ただ背筋も凍るような冷たい目をしているだけ。落ち葉の上を這いずり回る微生物を見ているのだ。

「もうやめましょう。近藤さん、投降してください」

恐ろしいほどに無機質な声。機械の音声を再生しているよう。

「……やはり君は強いな。だけど……」

左足に力を込め、立ち上がる反動を利用して大きな右フックを繰り

出す。その途端、近藤の口から赤い、炎とは違う液体が零れた。力を含めたはずの左の膝は笑い、右の膝もまた地面についた。彼が吐いたものは、炎のように猛々しいものではなく、生命の終わりを露呈する弱い血。

「俺も退けないんだ！」

直後、近藤の体を覆っていた炎が、体の前で組んだ両手の前に集結を始める。

体からあらん限りの力を込めた炎がまた生み出され、集まっていく。巨大な炎の玉。

「一世一代の魔法だ。死んでくれ、城山君」

近藤はそれを天に向かって放り投げた。ガードを失った捨て身の、まさに一世一代の魔法。仁はがらあきの近藤の腹に拳を叩きこんで、その動きを止めた。ゴフっと口から吐しゃ物でも吐くように、大量の血液が焦げ付いた土の上に広がった。

息つく暇もなく上空からの光に、弾かれたように視線を上げる。

炎の玉が、打ち上げ花火のように空中で爆裂していた。

第一章 第四十一話：終焉のとき

花火のように、しかしそれは雨だった。炎の雨。仁は知る由もないが、熟練の赤の魔術師が、一晩中詠唱して発動させられるかどうかという最高難度の術式。しかもこれほど大規模なものを放てる者が世界中に一体彼の他に何人いるだろうか。

仁は瞬時に危機を察し、足に全力を込めて走り出した。走り出して、近藤の体が安全圏にないことを思った。敵。炎の加護を失った、生身の人間。友と成り得たかもしれない人間。

すぐさま近藤の傍に駆け寄ると、焦土の中に倒れ伏すその身を抱えて、一気にトップスピードに乗った。

世界の終焉のような光景。

炎の雨が木々に降り注ぎ、雨粒に触れた瞬間に木はガソリンでもかぶっていたかのように、一瞬でその全身を燃やし尽くされていた。

そんなことがそこかしこで起こって、木立はその体を成さなくなる。灰と残り火の世界。

集中豪雨地帯からゆうに三百メートルは離れた、アスファルトの上に、仁は近藤の体をそっと下ろした。虫の息とはこのことか。弱弱しく呼吸を繰り返すお腹が起伏していることだけが、彼の最後のバイタルサイン。時々、思い出したように苦痛に顔を歪めるが、暴れるような力も残っていない。

助けてくれとも、楽にしてくれとも言わなかった。

「近藤さん……」

哀れむような響きがあった。それは彼の壮絶な覚悟に対する冒瀆とは分かっていても、仁は同情を禁じえないでいた。誰もが一步間違えば、なりうる姿。ただ彼は妻をとて愛していただけ。ただ彼は妻が味わった苦しみの重さを推し量っただけ。誰よりも深く、誰よ

りも重く……

近藤がゆっくりと右手を懐に入れた。

また取り出したとき、その手には白い便箋のようなものが握られていた。それを上がらない手で、震える手で、仁のほうに差し向ける。仁はわけもわからず、それを縋るように握った。指先が冷えていて、仁は喉が震えるのを感じた。

「君は…… 甘いな……」

近藤の顔に顔を近づけ、やっと聞き取った。

「もう喋らないで……」

むせるように、近藤が大きく咳をした。仁の顔にビシヤリと生暖かい血が吹きかかる。

もう視力を失ってしまったのだろうか、焦点の合わない目。それでも激痛だけは感じてしまうのか、歪む顔。

仁は刀を鞘から抜いた。キンと冷たい金属音に、近藤がわずかに顔を仁のほうに向けたような気がした。

冷たい目。だけどさっきまでの戦闘のときとは違って、無理矢理に感情を押し殺しているような目で、仁は大きく刀を持ち上げた。人の肉を絶ち、骨を通して、心臓を突き破る。その膂力を使って、勢いをつけて……

ブシュ

小さな音。刀の切っ先が皮膚を破り、骨を砕き、心臓を破壊する音。命を奪う音。

引き抜くと、一瞬傷口から血が噴出し、ドクドクと生命の泉のように、乾いたアスファルトを潤していく。近藤の体は二、三度痙攣して、それから動かなくなった。

最期の刹那

「…ありがとう」
確かに近藤はそう言った。

第一章 第四十二話：罪深き魂たち

「拝啓 城山仁君

君がこの手紙を読んでいるということは、俺は君に敗れてこの世にはいないのだろう。

まず君に言いたいのは、君が気に病む必要は何もないということだ。もしかしたら何も気にしてはいないのかもしれないが、もし自分が殺した、自分のせいで俺が死んだ思っているのなら、それは大きな間違いだ。悪いのは全て、弱い俺なんだ。君は大切なものを守るために立ち上がり、その外敵である俺を退けたに過ぎない。俺が君の立場でもそうする。俺が妻の死の現場に立ち会っていたなら、きつと相手を殺してでも守ったはずだ。だから君は当然のことをしたまでなんだ。

俺には来年、高校生になる息子がいる。思えば父親らしいことをした覚えなど皆無だが、とにかくいる。俺に似てひねくれたガキだが、可愛くないこともない。君に迷惑をかけるかもしれない。勝手な願いとはわかってているが、どうか一つ、会ったら導いてやってもらえないだろうか。父親の仇と、いきなり襲い掛かるような孝行息子じゃないけれど、何かしら感じてるものはあるだろうから、助けてやって欲しい。アイツは俺が組織で働いていることも知らない。母親は俺に愛想を尽かして出て行ったとだけ伝えている。もしアイツを守ることを考えて生きていたら、俺は違った人生を歩めたのかも知れない。

……話が逸れたな。とにかく君の優しさをどうか分けてやって欲しい。

最後に警告というか、助言をしておこうと思う。

君は強い。だが、フロイラインのボス、平内涼子もまた恐ろしく強

い。だが君なら勝てると信じている。また勝手な願いだが、彼女を止めてやって欲しい。俺はあの子を討つことは出来なかった。実力が及ばなかったのもあるが、彼女はもうもうもなく悲しい子だ。会えばわかる。

もう一つ、国連には気をつけろ。特にA M Cの＜雷帝＞には、気を許すなよ。

詳しくは自分で調べろ。俺がここで教えても、本当の意味では、君は理解できないはずだ。

君に会えてよかったと思っている。立場は敵同士だが、底のほうでは分かり合えたような気がするの俺の独りよがりだろうか。

俺は煉獄に落ちるだろうから、天国にいる恵理香には会えないだろうな……

とにかくありがとう。それじゃあ」

手紙を折り目の通りにきっちり畳むと、もとあった便箋にしまって、仁は空を見上げた。

日が暮れて紫色に変わった空には、もやのような雲がかかっていて、三日月をとどころ隠していた。

手紙をシャツのポケットにしまいこむと、再び街の喧騒を眺めた。あてもなくただ徘徊するだけの街並みはひどく空虚で、物悲しく思える。

手紙にあった息子さんというのはどんな人物だろうか。高校生になるということは、近藤はもう三十代ではなかったのか。戦いに身を置く者は、精悍で皆若く見えるのだろうか。

独りよがりだなんて思っちゃいないさ。本当に良い人だったと、今でも思っている。どうして敵同士で出会ってしまったのかとも。

彼の叱咤は、今ならわかる。アレは自分に対しての言葉でもあったのだ。今更引き返せない道のりを、ただ大切な者のために出来ることを、齒を食いしばってでもやるんだ。ひよっとすると止めて欲しかったのかもしれない。平内だけじゃなく、自分自身も。

彼は煉獄に行ったのか。

ダンテの神曲には、煉獄より下はなかったっけ。だったら自分もソコに墜ちる。人を殺し、友を殺した自分も。彼が本当に会いたいの
は、妻だろうけれど……

「……俺はまた……会って話したい」

俯いて、形が変わるほど食いしばった下唇からは、うっすらと血が滲んでいた。

第一章 第四十三話…さまよう労い

社が大きく目を見開き、見つけたと叫ぶ前に、坂城と木室は森の異常に気付いていた。

丘の天辺に位置する学園からは、特に学園の三階部分からは、丘の全貌を鳥瞰することが出来る。恐ろしく大きな炎が浮かび上がる場所へと、坂城はすぐさま走り出した。その後を木室が追いかける。二人ともアレが何なのかを知っている。＜竜傑の涙＞と呼ばれる、赤の最上級精霊魔法。通常大掛かりな術式と何人もの熟練の魔術師を要して、初めて発現を見る。仁が煉獄のヒューイットと一戦交えていることの、何よりの証拠だった。そしてあんなものを食らったら……

奈々華は校門から風のような速さで、いや文字通り風の魔法を受けているのだが、飛び出してくる坂城と木室とすれ違った。坂城は目もくれず、木室は首だけ振り返った。

「奈々華さん！ 仁さんが危険です！ アナタもお早く」

声だけを残して、二人の姿は一瞬で見えなくなった。奈々華は校門を抜け、校舎へと足を運ぶ。

「……行かないでいいのかい？」

胸に抱かれるシャルロットの疑問は当然。

「あの人が危険？ 冗談…… 仁君は二人が着く時にはもうあそこにはいないよ」

シャルロットには何のことかわからない。奈々華の顔は妄信と確信に満ちていた。

「お兄ちゃんは嫌なことからは全力で逃げるから…… あの場所にはいない。それにもっと言うとかあの令嬢に従うほど私は馬鹿じゃない」

「何の話をしているんだい？」

「わからないか…… まあ当然。私ができるのは、お兄ちゃんが帰って来たときに、部屋にいてあげること。それしか出来ないから」
奈々華の雰囲気は、まるで別人。何か別のものに憑かれたような……
「さあ、部屋に戻ろう。食べないかもしれないけど、ご飯作ってあげないと！」

いつもの奈々華。明るく前向きで、少々のことではへこたれない優しい少女。シャルロットは勘違いかと首を傾げた。

道の端に横たわっている死体は仁のものではなかった。

初めて見る男。坂城も木室も、そのことに心の端で安堵し、次いでこの男がJ・J・ヒューイトだと推定した。乾き始めた血溜りの中で、眠るように死ぬ男の体。胸のあたりには、服の裂け目。素人目にも見事だとわかるほどに、一突きで心臓を貫かれている。刀傷。傍には仁の愛刀、村雲守兼家 細の太刀。

「仁がやったのか……」

「……そうでしょうね」

二人とも二の句が継げない。どうしようもなくダメな人間ではあるけれど、人を簡単に殺すような男だとは思ってはいないけれど……

「戦いでは仕方ないことです」

先に冷静さを取り戻したのは、木室のほうだった。ゆっくりと吐き出すようにそれだけを言葉にした。

「……そうだな」

「この死体は、煉獄のヒューイトで間違いなさそうですか？」

木室の言葉に、坂城はあらためて死体を見た。水色のシャツは見る影もなく、えんじ色に染まり、口の周りには自らが吐き出した血糊が固まっている。歳は三十代前後か。もう少しいっているかもしれない。死体からは壮絶な力の痕跡が窺えた。青の魔術師は魔法の匂いには敏感。繊細で緻密な彼、彼女等は死体に残存する魔力を見分けることも出来る。

「……最高クラスの赤の魔術師だ。そう見て間違いないだろう」

それだけを機械的に答えた坂城は、周囲を見回して仁の姿を探した。いくらか離れた場所の木々は、無残に燃えカスとなっている。

「まさか相打ったとは……」

「大丈夫でしょう。この場所で敵が死んでいるということは彼もまたこの場所まで来たということ」

一瞬坂城の頭を過ぎった最悪のシナリオは、冷静な木室によって否定される。

「……では仁は？」

その質問にはさすがの木室も答えを持ち合わせない。首を傾げて、私に聞くなといった風。学園の当面の危機は去ったと言うのに、二人は英雄の姿を木立の間に探し続けた。

第一章 第四十四話…哀歌

店のシャッターにもたれかかり、タバコをふかしてばかりいた。

仁は嫌なこと、考え事があるといつもそうした。意味もなくタバコに火を点け、吸うでもなく煙の行方を目で追いかける。ひどいときには一口も肺に煙を迎え入れることがなかったりする。

「……」

「……主よ。どうして我を置いて行きなされた？」

仁の腰には、いつもと変わらず当然のように村雲が納まっていた。

「本当プライバシーもクソもあったもんじゃないのな……」

一人になりたいとき。精霊にはわからないのかもしれない。

「それは、妹殿にこそ言えるのではないか？」

確かに、と鼻先で笑った仁は、それ以上会話を続ける気はなさそうだった。

「……」

「……人を殺した象徴だからか？」

やや躊躇いがちに、それでも聞いた。

「……」

「我を持っていると、近藤を刺した感触が蘇るよう……」

「うるせえよ」

「……」

すっかり人通りも落ち着いた中谷の街並みは、冷たく眠るようだった。往来を行き交うのは、刹那的に生きる若者や、仕事帰りの帰路を急ぐサラリーマン、水商売らしい女性たち。皆仁を不思議そうに見やって、その風貌を確認すると足早に過ぎ去っていくのだった。片袖の燃えた、ボロボロのシャツに、同じく所々燃えたように縮れた髪。片頬には近藤が吐いた血が紋章のようにこびりついていた。

「怖いのか？」

「……」

仁がタバコを一つ、地面に擦りつけるようにして消した。また一つ性懲りもなく火を点けた。

「人を殺すのが怖いのか？ 妹に軽蔑されるのが怖いのか？」

「……」

一口吸って、また啞えたままにしている。

「……近藤を殺した悲しみすらすぐに忘れそうで怖いのか？」

「うるせえって言うてるだろ。黙れ」

「人を殺すことに慣れてしまうのが…… 人を殺してもいつか何も感じなくなるんじゃない？」

「うるせえって言うてんだろ！！！」

隣の通りまで聞こえそうな罵声が響いた。啞えていたタバコがズボンの上を跳ねて、アスファルトの上を転がっていく。あまりの剣幕に人々が振り返る。振り返って、顔を血で染めた男が閉店後のシャッターの閉まった質屋の前で、鬼でも殺すような目をしているのを見て…… 弾かれたように顔を背けた。

「……」

「……人は自分の心を認めなければ生きてはいけないぞ？」

「……」

「いくら醜くとも、いくら間違っていようとも、それを認め、向き合わなければ、いずれは主自身が壊れてしまう。辛いのは分かる。苦しいのも分かる。だが……」

「……黙ってろよ」

言葉を尽くしても、今の仁にはそれを受け入れるほどの余裕はなかった。腰にぶらさがった冷たい相棒を、冷たい目で見下ろすだけ。通りの向こうから、ストリートライブをやっている夢ある若者のギターと歌声が仁の耳朶を打っていた。バラードだろうか、とても滑らかに、とても切ない情感を込めた歌声だった。

第一章 第四十五話…女神の抱擁

日付が変わろうかという頃、仁は学園の一階、生徒用の大浴場にいた。当然他の利用者はおらず、うるさい刀もさすがに脱衣所へ置いてきた。造りは銭湯のように、全面を白いタイルが覆っていて、最大五百人収まるという大きな施設は今仁の貸切状態だ。

仁は一人体を、頭を、顔を洗っていた。それで近藤を殺した罪が贖われるわけではない。単に汚れを落としているだけだった。顔をこすると、へばりついてた血が湯に溶けて、鮮血に変わって排水溝に流れて行った。

血がついたまま、泥がついたまま帰れば奈々華に色々と心配をかける。そんな格好で寝ないで、布団を洗うのは誰だと思ってるの？怒られるかもしれない。

仁は存外自分の頭が冷静なのを自覚していた。夜の街で冷え切った体を温めるシャワーの湯が全身を伝うに任せ、仁はそんな自分も唐突にいやになった。

タイル張りの壁に、頭をゴツンとぶつける。

近藤を殺した悲しみさえ、罪悪感さえすぐに消えてしまいそうで…
… 怖いのか？

ガツン。

二度、三度、四度、五度、六度……

いつか人を殺すことに慣れていくのが、少しずつ壊れていってしまうのが…… 怖いのか？

折角洗った顔には、新しく出来たデコの傷口から血が伝っていく。

…… 怖いのか？

排水溝に流れていく他人のものではない赤。

下着だけを履いて脱衣所に備えられた浴衣を羽織り、もと着ていた

服をゴミ箱に捨て、仁は自分の居場所へと帰っていく。自分が望んだわけではないと言う場所へ。

「……ただいま」

鍵はかかっていなかった。

「おかえり！」

「……」

シャルロットが仁のクッションの上で勝手に眠っている。反対側のクッションには、いつかは十時に眠っていた妹が、兄の帰りを待ち続けていた。何食わぬ顔で座っている。既に見慣れた光景。

「……ご飯食べる？」

「いい。食欲がない」

「……うん」

奈々華はテーブルの上に置いた仁の分の食事を冷蔵庫に運び始めた。

「……」

奈々華が甲斐甲斐しく働く気配、仁と奈々華の話し声。シャルロットが眠たげに瞼を上げた。

「……おでこ怪我してるね」

「ああ」

絆創膏はどこだっけ、と奈々華が働く手を止め、部屋の中を歩き回る。目的のものを見つけ、ピリッと包装を破る音がする。

「……髪の毛、燃えちゃってるね」

「ああ」

「切りに行かないとね」

そのままじゃ変。喧嘩してきた子供を見るような笑顔。

「ああ」

「……服盗られちゃったの？」

「いや……」

「……」

「……」

「……人、殺しちゃったの？」

「……」

シャルロットが本格的に眠ろうと、ベッドへと足を運ぶ。いつの間につけてやったのか、チリンと小さく首輪の鈴が鳴った。

「……近藤さんだったんだ」

「……そう」

「いい人だった」

「うん」

奈々華が絆創膏を仁のおでこに貼ってやった。白くて細い手を、仁は泣き出しそうな目で見ていた。

「俺が……俺が殺したんだ」

「……」

「……」

「……私がまた、お兄ちゃんを一人にすると思ってる？」

「……かもしれない」

そんなことはない。そう言えたらいいのに。仁は未だに奈々華に弱い一面を包んでもらおうと思っている。暗渠には垂れ込まない月光を今も求めている。

奈々華は、今度は優しく包み込むように、仁を抱きしめた。柔らかく、子を愛おしむように。

仁は抵抗しなかった。出来なかった。

「私を信じて……こんなこと言えた資格はないんだろうけど……」

私は仁君の味方だから。例えばアナタがどんなに間違っても、どんなに汚れても……」

見上げる奈々華の顔は、その言葉に何一つ偽りがないことを証明している。女神のように微笑んでいる。

仁は顔を背けるのも忘れて、声を押し殺して泣いた。

第一章 世界の在り様と赤の生き様 了

第二章 第四十六話…消化

第二章…雪解ける兄妹と青の苦悩

報酬は坂城が用意するものではなく、国連の魔法犯罪対策室という組織が払ってくれるそうだ。坂城は近藤の死体に残る魔力だったり状況を証拠として国連に提出した。概ね認められるそうだ。

＜フロイライン＞の幹部は軒並み、その首に賞金が懸けられているが、近藤、つまり煉獄のヒューイットの賞金は日本円にして二十億という大金だった。額に不満があれば、近々直接労いに来るという国連のお偉いさんにしてくれ、と坂城は言った。何せ本当に倒せる人間がいるとは想定していない、ほとんど形骸的なものだから交渉次第で仁の言い値を払うことに躊躇はないだろうということだった。

「いたいた、お兄ちゃん。探したよ？」

授業に出る必要も、義務もなくなった仁と奈々華は日々を漫然と過ごしていた。あれから二日。国連からの報酬が支払われるのは、早くても一週間かかるらしい。中庭でタバコを吸っていた仁は、奈々華に見つかってしまった。この二日間奈々華は金魚のフンよろしく、仁の後を着いてまわる生活を送っている。

「……」

たまには一人になりたいくて、喋る刀も部屋に置いてきたというのに。

「……街に出ちゃったのかと思ったよ」

ザクザクと芝生を踏み鳴らしながら仁の下へ歩み寄る。中庭には晩秋の冷風が吹き荒れ、木々の残る葉を一掃しようと躍りになっている。襲撃のたびに張り替えられた芝生も、茶色い風景に溶け込んでいた。

「……」

仁は奈々華が自分に付きまとうのに、文句を言わなかった。弱みを見せた。甘えた。そう思っている。今彼女に強く出るのは、冷たくあしらうのは賢くない。そうも思っていた。

「どうしてそんなに俺の後を追う？」

愚問。

「…寂しいから？ 一人で部屋にいるのは寂しいんだよ？」

「……俺も中庭に一人でいるんだが？」

「寂しいでしょ？」

別に、と答えようとして奈々華は表層的なことを言っているんじゃないのかもしれないと思った。もっと根本的な、慢性的な自分の孤独を指しているんじゃないかと。

「寂しいでしょ？」

「……」

「寂しいでしょ？」

再三。奈々華に背を向けたまま、仁は諦めたように頷いた。

「ああ。寂しい。奈々華ちゃんに会えないのはとても寂しいことだ。だけど…… 今は一人にしてくれないか？」

「ダメ」

苛立ったように振り返った仁は、奈々華の顔を見て言葉を失った。てつきり我が侘を言って困らす子供のような顔をしていると思った。奈々華は顔は笑っているが目は真剣だった。

「お兄ちゃん一人にすると、余計なこと考えるから」

西から吹く風が、仁のタバコの灰の一切れをさらってゆっくりと地面に置いた。

「……忘れる、とは言えないけど、今は考えないで」

歪められた奈々華の顔。仁はかける言葉を探した。

坂城は誰もいない学園長室で一人、部下からの報告書と睨めっこしていた。坂城が秘密裏に動かしていた彼女直属の諜報員。その内の一人が昨日殺された。死体の傍にはこんな文書が落ちていたそうだ。「我々フロイラインは、全勢力を以って、私立中谷精霊魔術学園を滅ぼすであろう」

タイプライターの無機質な文字。事実上の宣戦布告。赤の幹部を討ち取った代償。自衛への報復。

やがて坂城は神経質に、石造りの床にタップを刻み始めた。一休さんのとんちよろしく。しかし導き出される答えは、現時点で最も有効且つ現実的な方法だけだった。

「くそ！ 国連め」

坂城は自らの右腕に刻まれた、制約の証を服の上から睨みつけた。だがやがて諦めたように目を瞑り、手の報告書をテーブルの上に放り投げた。

代わりに、大きく反動をつけてソファーに深く沈んでいた体を起こすと、携帯電話を手を取った。

第二章 第四十七話…浅慮を勝る真摯

「……これを見てくれ」

学園長室に呼び出された仁と奈々華は、仁はすっかり雑談相手になる気満々だったのだが、部屋に入るやいなや差し出された一枚の紙を訝しげに受け取った。紙面に目を落とした二人は、深刻な表情と無反応に近い表情。坂城が先程まで睨めっこしていた報告書だった。

「随分簡潔な文章だな。動機も手段も書いてない」

奈々華が仁の横顔に呆れたような視線を投げかける。問題はそこじゃないだろう。

「……お兄ちゃんをまた闘わせるつもりですか？」

奈々華の発言こそ正鵠を射ていた。

「……」

坂城は奈々華の視線から逃げるように、視線を仁にやった。逃げた先で、時折見る無表情に出くわし、所在無く宙に彷徨わせた。

「お兄ちゃんが思ったより使えるから、ダメもとでぶつけてみようってことですか？」

辛辣な言葉に殴られて、坂城はゆっくりと諦めたように奈々華の顔を見た。

「……そうだ」

沈黙。

「まだ先の報酬も貰わないまま、契約延長の申し出か……」

自分の話をしているというのに、呑気にソファに腰掛けながら仁が言った。

「……虫のいい話をしているとは分かっている」

「ほんとですね」

「だが……君の力がどうしても必要だ」

坂城は突っ立ったまま、微動だにしない。奈々華が睨みつけるよう

な顔をしてその横顔を見ていた。

「まあ、あの体たらくじゃ今度幹部が来たら秒殺だな」

「……」

歯を食いしばるようにして、坂城はその言葉に打たれた。坂城とて自分の無力を、ふがいなさを良しとしているわけではない。彼女にしても断腸の思いなのだ。

「君は体を張って、この学園を守ってくれた。キチンと契約を履行してくれた」

「……」

「その君に対して、今度はこちらの都合で契約の延長を申し出ているんだ」

彼女とて、まさかフロイラインがここまでこの地の大岩に固執するとは思わなかったことだろう。それでも、読みが外れた自分達の落ち度だと言い切る。責任者としての、学園を預かる者としての矜持と責任。

「そだね。俺としてはもう言い値、つまり十分な金を貰うことは出来たんだ」

これ以上この地に留まる理由はない。まして危険が差し迫っていると分かっている場所に……

「私の身を張ろう。そんなものじゃ足りないのは分かっている。だがこれくらいしか君の働きに報いる手段が見当たらない」

「……それは君が俺のものになるということか？」

奈々華が弾かれたように、仁の横顔に目を向けた。

「そうだ」

またしても沈黙。坂城は入り口付近に立ったまま、仁の後ろ頭を見つめ、奈々華は仁の隣に座って不安げにその横顔を見たきり。仁は何食わぬ顔でタバコに火を点け始めた。一瞬振り返った仁は、坂城の腕が震えているのを見とめた。

「……断る」

奈々華の顔が安堵に満たされ、坂城はこの世の終わりが来たと言わ

んばかりに顔を青褪めさせた。

「な、頼む！　お願いだ！　君がいなければ私はこの場所を守れないんだ！」

仁はそっと立ち上がり、点けたばかりのタバコを灰皿に押し付ける。部屋の戸を向いた。奈々華も勝ち誇ったような顔でそれに続く。話は終わり。

坂城の横を通り抜けようとした仁の右腕に彼女の細い指が食い込む。「待ってくれ。私はどうやってもこの場所を守らなきゃいけないんだ。両親が残してくれたたった一つの……」

打って変わって静かに紡ぐ言葉は、途中から震えだし、彼女の体も震えだす。俯いた顔から涙がポタポタと床に落ちていった。その頭を、柔らかい猫毛を仁が優しく撫でた。

「最初っからそうやって泣きついて来い」

坂城が顔を上げた。赤らんだ顔、潤んだ瞳。頬には涙の筋がはつきり見えた。

「……ない頭を回すな。お前と俺は友達なんだ。少なくとも俺はそう思ってる」

そうだろう？　と仁は細い目をより細めて、坂城の頭に置いた手をまた優しく動かした。

「友達が困っていたら助ける。それでいいんだ。お前の学園は俺が守ってやるよ」

そうやって大きく笑うと、仁は扉を開けて外に出て行った。奈々華が一瞬恨めしそうに坂城を見て、後を着いて行った。

「友達……」

一人残された坂城はいつまでも、仁が撫でていた場所を右手でなぞっていた。

第二章 第四十八話…欠陥品

奈々華は客人に対して、あまりいい顔をしなかった。

坂城遊庵。仁に会いに来た彼女は、特段の用もないらしく、ただ世間話に花を咲かせているばかりだった。仁も仁で楽しそうに相槌を打ったりしている。それが奈々華は気に食わない。猫舌の仁には、少し温度の低い湯で入れたお茶を、坂城には沸騰して十分ほど経った湯で入れた茶を出す。

「お仕事しないでいいんですか？」

テーブルの上に湯飲みを置きながら、流し目に坂城を睨む。

「ああ。今日の分はほとんど終わった。どこかの馬鹿と違って、私はやるべきことはキチンとやってから遊ぶ主義なんだ」

坂城が悪戯っぽく笑うと、仁は不満げに眉根を寄せた。遠まわしな物言いは、二人の会話の潤滑油になるだけだった。

「何で俺を引き合いに出すんだよ」

「おや？ 私は君のことだとは一言も言っていないが？」

閉口する仁を楽しげに見つめる坂城。してやったりといった風。

「だからって、こんなところで油を売っているのは良くないんじゃないですか？」

今度はもう少しストレートに。

「まあそう言ってくれるな。私は案外暇なんだよ」

ものともせず笑う坂城を見て、奈々華はきつと彼女の誕生日には、ボトルシップか千ピースはあるジグソーパズルを贈ろうと心に決めた。

「それにしてもこの部屋は寒いな」

坂城が不意に文句を言い出し、すぐさま立ち上がって暖房のリモコンを取り上げた。ピツと短い電子音がして、部屋の壁に設置されたエアコンが作動する。ブォーンと大きな音を立てて…… すぐにエ

アコンは再び沈黙した。坂城が幾度となく電源ボタンを押すが、その繰り返し。仁たちが来て、エアコンを作動させるのは今回が初めてだった。

「多分雑魚が押しても反応しないようになってんだな…… 貸してみろ、駄馬」

仁がひったくるようにして、坂城の手からリモコンを奪うと、本体に向けてボタンを押した。

ピッ。ブォーン。シューーン。

結果は同じだった。

「君もゴミ虫と言うことだな？」

「壊れてんな、コレ。新しいの買いに行こう」

坂城の逆襲を完全に無視し、仁は奈々華に顔を向けた。

「お前はついて来るなよ？ 壊しやがって」

「私が壊したんじゃない!!」

涼しい顔した仁がハンガーにかかったダッフルコートを引っ掴んだ。

ついでにソファアーやコタツ布団も買おうという話になった。久々に言っても前回から四日も経っていないが奈々華にすれば十分久々だった、仁と二人で街に買い物に出れるということで奈々華は浮かれていた。モコモコしたダウンの上着を身につけて、嬉しそうに両手を広げて回る。

「あんまりはしゃいでると、転ぶよ？」

その後をのんびりと着いていく仁は寒そうに身を縮こまらせていた。こんなに早く落ち切るものなのか、とガードレールの向こうに広がる幹だけの木立を感嘆したような目で見ている。

「だってえ」

「だって、何だよ？」

「秘密」

奈々華の頭だけは春だった。

「……」

急に黙り込んだ仁を見て、やりすぎたかと奈々華が焦る。弁解を用意した頭は、仁の視線の先を追った視覚情報によってそれを忘れた。山火事にでも遭ったように、草一つ生えない焦土。幹の途中まで、或いはその全部を焼け焦がした黒い幹。自然のものとは明らかに違う終わり方をした、心が痛むような風景だった。

「お兄ちゃん……」

奈々華はその場に立ち尽くして、仁の横顔をひたすら見つめた。

「……」

痛みを堪えるようにして歪められた顔は、やがてぎこちなく引き攣った。子供でもわかるような作り笑い。

「大丈夫だよ。さあ、行こうか？」

ゆっくりと顔を正面に向け、再び歩き出す。

「私の前ではそんな顔しないでいいんだよ？」

風に消え入りそうな奈々華の声は本当に、突然吹いた木枯らしにさらわれていった。

第二章 第四十九話…くまマニア

中谷通りを、学園側から四百メートルほど進んだ突き当たりに大型ショッピングモールがある。都会の一等地に三百平米の敷地。何か悪いことでもやってんじゃないかとは仁の第一声。螺旋状になった各階は、服、雑貨、インテリア等々、各種専門店が軒を連ねている。二人は何でも揃うというキャッチフレーズにつられて、その施設に足を踏み入れた。平日の昼間ではさすがに客の入りもまばらな施設の通路には、ウレタンのマットが隙間なく敷かれている。店内は暖房が過不足なくきいていた。

「……まさかまだ厄介になるとはな」

「お兄ちゃんが引き受けたんでしょ？」

奈々華はこの話題を振った始めから機嫌が悪くなった。ひよつとすると坂城と仲が悪いのか、と仁は困惑した顔で米神のあたりに手を動かした。

「頭なんか撫でちゃって……」

どうも旗色が悪い。奈々華はそっぽ向いたままで、なおもぶちぶち不平を並べている。

「車も欲しいな」

仁は強引に話題を変えた。

「そんなお金ないでしょ？」

「大丈夫だよ。坂城でも恐喝すればいい…… 報酬も入るし」

ほんの一瞬、妹の奈々華でなければ見逃すような、仁が下唇を噛んだ。奈々華は気付かないフリをした。

「別に不便じゃないじゃん？」

「……ソファアは配送してもらうにしても、布団はやってもらえないだろ？」

インテリアの専門店が見えてきた。店先に奇妙な形をしたスタンドライトが置かれている。値引きセールと書かれた垂れ幕が掛かって

いた。奈々華が先んじて店内に入る。と言っても一々店舗ごとに扉があるわけではなく、マットの切れ目から店の敷地になっている。いらっしやいませ、と気の弱そうな店員が微妙な声量で二人を迎えた。

「お兄ちゃん真面目に授業聞いてないでしょ？」

「そんなことはないよ。毎回毎回全身全霊で聞いている」
くると振り返った奈々華はジト目。

「嘘」

仁は口をへの字に曲げて、曲げた方向に視線を逸らした。

「……授業でも言ってたよ。この世界は風魔法が流通に革命をもたらしたって」

奈々華の説明では、最近猫も杓子も緑の魔術師を雇って配送サービスに当たらせているそうだ。荷物や商品が空を飛び、客の下、仕入先の下へと運ばれる。長距離の配送では、適宜中継地点が置かれ、魔術師から魔術師へ、そして目的地に、という構図。荷物同士の接触事故を避けるため、業者や会社ごとに配送ルートや時間帯をずらすという新たな試みも模索されているという。

「へえ。空を荷物が飛んでんのか」

その不思議な光景を仁は頭で思い浮かべようとしたが、自分がこちらに来て、まだタバコ以外の固形物を購入した覚えがないことに行き当たった。

「やっぱり聞いてないんじゃない」

もう、と奈々華。それでも嬉しそうに見えるのは、仁との時間が楽しいから。

「さあ、とりあえずベッドの脇におけるスタンドでも買うか」
そう言うと、照明を取り扱ったコーナーに目を向ける。奈々華もこれ以上は野暮と感じたのか、言っても無駄と思ったのか、大小様々な商品に目を配るのだった。

結局二人が並んで座れそうな割と大きめのソファ―、奈々華がデザ

インがいいと言ったそれには背もたれに可愛らしい熊の刺繍が施されている。それからスタンドライト二つ。色違いの同じ型を買った。コタツ布団も奈々華が選んだ熊のアプリケット入りのもの。ライトは持って帰れそうだったので包装に包んでもらい、ソファールとコタツ布団には空を飛んでもらうことにした。エアコンは坂城から来たメールに修理を頼んだから買うなどの旨。買い物を終えた二人はモールを後にした。外は立冬も近い秋の夜長を迎え入れ、体の芯を冷やすような冷気に奈々華が一度身震いした。

「……奈々華ちゃん、コレ」

ひょいっと奈々華に向かって小さな紙の袋を投げた。目を丸くしながら奈々華が両手でそれをキャッチする。何これ？ と袋と仁の顔を交互に見る。

「お礼さ」

「お礼？」

開けてみてくれと小さく笑む。奈々華が不思議そうな顔で封を切ると、中からはデイベアをあしらったデザインのアピンが出てきた。高価なものには見えなかったが、茶色と黒の洗練されたデザイン。

「……慰めてくれた礼」

訝しげに眉を寄せたままだった奈々華はようやく合点がいった。理解して嬉しくなった。たたと兄に駆け寄ると覗き込むようにその顔を見上げた。仁は気恥ずかしそうに目を合わせない。

「ありがとう！」

少し大きすぎる感謝に、道行く何人かが二人を不思議そうに見ていた。

第二章 第五十話：AMC

行方にメールを入れたのは、夕飯の後。返事が返ってきたのは就寝時間間際だった。

「お兄ちゃん？ どこ行くの？」

浮気を疑う恋人のように、仁の動きに機敏に反応した奈々華がちらりと厳しい目を向けた。部屋の戸に向かって歩き始めていた仁は蛇に睨まれた蛙。

「……行方と話がある」

「こんな時間に？」

こんな時間になる予定はなかった、と言い訳しても意味はなさそうだった。仁は何か上手い切り抜け方はないものかと部屋の中に視線を彷徨させた。コタツの中からシャルロットが這い出てきて仁に一瞥くれただけだった。

「私に聞かれちゃまずい話？」

「いや、そういうわけでもないんだが……」

奈々華が自分の行動を縛っているのは、自分を思っていることだと仁もわかっている。本当はそれだけではないのだが。じゃあ一緒に行くと言う奈々華を止める術を仁は持たなかった。

「AMC？」

仁が行方に送ったメールには聞きたいことがあるとだけ書いておいた。新聞部、詳しく何をやっているのかはわからないが、の活動をしていると言う行方は、いきなりの質問にやや面食らっていた。

「噂でも何でもいいから、知っていることを教えてくれないか？」

近藤の最後の手紙に書いてあった忠告。仁はそれを受け止め、自分なりに調べてみたのだが釣果は芳しいものではなかった。AMC。魔法犯罪対策協会。国連管轄の組織で、読んで字の如く、世界に蔓

延る魔術師による犯罪を取り締まることを旨とする。活動は多岐に渡り、未検挙犯罪者への対策、重大犯罪者の首に懸賞金を懸けたり、犯罪者達に関する情報収集と開示。犯罪者の抑留、捕らえられた犯罪者を拘束、拘置する。犯罪者の拿捕、直属の魔術師による犯罪者の検挙。時に司法権限、警察権すらもあたかも保持するかのようには振る舞い、また本来のそれらを歯牙にもかけない。国連の闇の組織とまで評される。しかし仁が知り得たのはここまで。それすらも信頼できる情報筋ではなく、インターネット上の掲示板で得た眉唾の情報。構成員、発足の経緯、過去の戦果等々、わからないことだらけ。組織のトップに至っては誰も言及すらしていなかった。

「あんまり関わり合いにならないほうがいいわよ？」

いつになく深刻な表情を作る。学園の中庭、誰にも話を聞かれない仁の要望、寒い寒いと手に息を吹きかけていた奈々華も抜き差しならない雰囲気を感じ取って顔を強張らせた。

「……そういうわけにもいかない」

近藤を殺した仁はもう十分関わり合いになっている。

「……」

「頼む」

黙って仁の顔を見ていた行方は、やがて大きく息を吐いて折れた。ざくざくと枯れかかった芝生を踏みしめて、一步、二歩歩く。仁はその背を真剣な面持ちで見つめていた。

「……ねえ、フロイラインの構成員、特に幹部クラスは人相も経歴も主属性もわかっていないのに、どうしてその二つ名を付けていると思う？」

「青の魔術師がどうかして調べているんじゃないのか？」

くると振り返った行方は曖昧に笑っている。一日その装甲を守ってきた化粧はノリが悪くなり、月光に照らされてデコの辺りがテラテラ輝いていた。

「……居場所もわからないのに？ 第一奴等は化け物よ。そんじょそこらの青魔術師が魔力を調べようとしてもどうにもならない」

そんなヘマはしない、と言い切る。

「……」

しばしの沈黙。行方は静かに仁を見つめ、仁もまた思い詰めたような表情でそれを見返す。奈々華はそんな両者の顔を交互に窺っていた。やがて仁が口を開いた。

「通じてるってことか？」

仁の出した答え。行方の言葉を整理すると自然と行き着く道理。国連の組織と、世界最大最悪の魔法犯罪者組織、フロイラインが裏で蜜月している……

行方は感情の見えない顔で静かに頷いた。

第二章 第五十一話：機密

「……確かなのか？」

顎を引いて低い声を出した仁を、やはり無表情のまま見つめる行方は、ややあって重い口を開けた。

「表の世界、つまり顔も経歴も主属性も分かってる。真っ当に生きる二つ名持ちの魔術師はその身に制約の証を刻まれる」

「制約の証？」

今まで黙っていた奈々華が小首を傾げて鸚鵡返しに尋ねる。

「……二つ名を冠する魔術師は、例外なく優秀……つまり簡単に人を傷つけることが出来る。逆にそれを止める人間はそうはいない」

「なるほど。話が見えてきた」

「え？　どういうこと？」

奈々華だけ置いてけぼり。仁の勘がいいのか、奈々華の勘が悪いのか。

「中々豪気でしょ？　自分達は悪と通じておいて、他人には正義を求める……」

クスクスと笑う行方は自棄気味に見えた。

「……魔法犯罪対策室ってのは？」

「表の顔。フェイクって言うてもいいかも。対外もどうしてもやらなきゃいけないしね」

仁が近藤を破ったことが、万に一つ、現に起こっている。まるでパチンコ屋の景品交換所のようにだと仁は思い浮かべた。払い出しだけは別の組織のような偽装。

そして悪は何ら制約を受けることなくその隆盛を極める。

「もう一つ……雷帝ってのは？」

行方はもうさして驚くこともなく、そこまで知ってるの、と静かな

声。

「AMCの創設者。現在もその総括に当たる人物と目されているわ」
「……」

「……本当は一般人が知りえていい情報じゃないのよね。だからアタシも墓まで持っていくつもりだったんだけど」

一般人では知り得ない情報をどうして彼女は手に入れたのか。仁は一瞬行方自身に興味を覚えたが、すぐに改めて彼女の言葉の続きを待った。

「恐らくは、フロイラインと何らかの関係を持っているとアタシは睨んでる」

関係と言う言葉を出すまでに僅かな逡巡があった。

「……或いは創設に携わった。そして今も影響力を持つ……」
「滅多なこと言うもんじゃないわよ」

困惑に眉を寄せ、行方は視線を左右に振る。会話に置いていかれ、興味を失った奈々華がシャルロットと遊んでいるのが見えただけだった。後は仁と彼女、中庭には三人の姿以外は見えない。

「お前はそう考えているんじゃないのか？」

「……」

顔は口ほどに…… 雷帝に気を許すなどは、近藤の忠告はどうやらの射ているようだ。

「どうして学園長に聞かなかったのよ？」

疑問と言うよりは、責めるような口調。損な役回りには違いない。

「……何だかアイツに聞いても難しそうだったから」

事実その判断は正しい。坂城に聞いても答えに窮しただろう。そういった判断を過たないことが仁の賢さだとしたら、行方には随分酷な話だ。

「アンタのこと侮ってたかもね。その通りよ。学園長もまた二つ名を戴く魔術師。表立って国連の陰口を叩ける立場じゃないわね」

或いは答えてくれたかもしれない。仁に少なからず負い目を持つ彼女なら多少の無理をしてでも。けれどまた泣かしてしまうのは、正

直仁は憚られた。

突然、パンと一本締めをするように手を合わせた行方は、いつもの彼女に戻っていた。話は終わりということらしい。

「聞かれてばかりじゃ癪だから、最後にアタシからも聞かせて」

去り際、行方が思い出したように首だけ振り返って言った。仁は彼女の質問には可能な限り答えるつもりだった。こくりと冷静な顔で頷いた。

「煉獄のヒューイット……倒したってホント？」

それまで傍観者だった奈々華が、素早く顔を上げた。

「……」

僅かな沈黙。やがて仁が諦めたように目を瞑った。

「正確じゃない……殺した」

「お兄ちゃん！」

悲鳴のような奈々華の声に、ゆっくりと瞼を上げて行方への答えとした。

そう、と短く言葉を残した行方の背中からは彼女がその返答に何を思ったか判断がつかなかった。

第二章 第五十二話：影を追う猫

呑みに行くに残した仁について行くわけにもいかず、部屋でシャルロットと留守番をすることになった奈々華はありがたい忠告をもらっていた。即ち……

「付きまといすぎ」

シャルロットはこれに尽きた。急いてはことを仕損じる。

「そうかな？」

返す奈々華はそうは思っていないらしい。仁から貰ったヘアピンを左側の分け目に輝かせ、成果としてシャルロットに食い下がっている。

「それは単純にあの日の夜の礼だろ？ 付きまとわれて良しとしている証じゃないんじゃないのかい？」

そして言葉に窮する奈々華。実際仁は礼と言って憚らなかった。

「でもでも、嫌とは言わないじゃん？」

奈々華がそう切り返すと、シャルロットは難しい顔をした。こう見ていると人間と比べても遜色ないほどに、表情は豊かなのだ。

「アタシが思うに…… アイツはアンタに弱みを見せたと思ってるんじゃないかね」

「そんなはずないよ」

「まあ聞きなよ。そのヘアピンには礼以外にも、ひよつとしたら口止めとしての意味もあるのかもしれない……」

「私がお兄ちゃんが泣いたことを言いふらすってこと！？」

自分が兄に不利になるようなことをするはずがないと言葉尻だけに憤慨する。息巻く奈々華を冷めた目で見るシャルロットは、落着けと繰り返す。シャルロットとしてもあまり奈々華のやる気に水を差すようなことは言いたくなかったが、恐らく自分の勘が間違っていないことも分かっていたし、事実仁は窒息しかけて、今日は奈々華が付いて来れない場所に行ってしまった。このままこんな生活

を続けても行く行く傷つくのは奈々華だということも悟っていた。

「あまり付きまတွってくれるなって意味かも」

「……」

奈々華の表情が見る見る曇っていく。この様子だと薄々は勘付いていたのかもしれない。性急が過ぎると。

「アンタが犬だとしたら、アイツは猫だよ」

そうシャルロットは締めくくった。猫が猫だと言うのだから猫なんだろうと、奈々華はぼんやり思った。

く六ちゃんのバーに足を踏み入れるのも、随分久しぶりだった。

最初で最後に来たのは……

ドアを開けると、カランコロンと来客を知らせるベルが店内に響いた。今日は時間が早いこともあってか、店内に活気はなく、手持ち無沙汰の店員が仁をカウンターに案内してくれた。仁が椅子を引いて座ると、向かいの六ちゃんが挨拶をしてきた。

「僕のこと覚えてるんですか？」

驚いて言葉を返すと、六ちゃんは苦笑とも微笑みともつかない笑みを顔に浮かべた。

「……仕事ですから」

どれほどの客がこの店を利用しているかは知らないが、一度来ただけの仁を覚えていたとは恐れ入る。

「近藤さんのお友達でしょう？」

心臓を鷲掴みにされたような気分だった。今度は仁が曖昧な笑みをたたえる番。六ちゃんはそれ以上は何も言わず、注文を待っていた。仁は厨房の棚を空虚な目で見回し、一番最初に目についた銘柄も知らぬ赤ワインを頼んだ。本当は一番最初に目に飛び込んだのはウィスキーだった。

「お仕事の帰りですか？」

何の変哲もない世間話。他意はないと分かってはいながら、仁はこ

の壮年のマスターが自分の素性を油断なく聞き出そうとしているような穿った錯覚に囚われていた。

「……ええ、まあそんなところです」

血のように赤いワインが入ったグラスが、仁の前に置かれた。ワインから目を切った仁は、改めてマスターに視線を配った。白髪がほとんどを占める頭髪に、年輪のように刻まれた深い皺のある顔には絶えず柔和な笑みを浮かべ、白いシャツからのぞく胸元は、歳相応とは言い難い筋肉質な体を想起させる。若い頃はヤンチャだったのかもしれない。堅気の人間じゃなかったのかとも。

仁はワインを二、三杯飲み干すと、勘定をして店を出た。

椅子から立ち上がる時、六ちゃんが何かを言ってくるのではないかと思ったが、またお待ちしています、とだけだった。近藤さんによろしくお伝え下さい。そんな言葉を自分は予測していたんじゃないだろうか。

「……案外そっちの方が楽だったのかも知れない」
自己嫌悪に陶酔出来たのだから。

第二章 第五十三話：昼行灯

夜闇の中、学園の敷地に一陣の流れ星が落ちた。流れ星は着地の際に青魔法を展開し、水をヴェール状にして芝生に張り、衝撃を和らげる。パシャッと小さな音を立てたそのヴェールから這い出てきたのは少女だった。仁より二つ、三つ年下だろう。化粧気のない顔は、その彫りの深さが十分に補ってあまりある。くっきりとした鼻筋に、力のある目。純血の日本人ではないのかもしれない。

パチパチパチ。

観葉に植えられた木々の隙間から手を打ち合わせる音が聞こえる。次いで足音。何者かが芝生の上を踏み歩き、少女に歩み寄る。

「……すげえな。青魔法ってのはあんな使い方も出来るんだな」

月明かりに照らされる。街から帰り着いた仁は、少女が空から降ってくるという超常現象を目の当たりにして思わず拍手をしたのだった。

「アナタが例の黒魔術師ですか……」

少女の声は存外落ち着いていた。自分の極秘裏の侵入が見破られたことにも特段の感情はないようだ。

「そうだね。城山仁って言います。以後お見知りおきを」

一瞬少女がピクリと眉を動かした。

「……随分あっさり明かすんですね。私の魔力を嗅ぎつけたのだからと、カマをかけたのですが」

「滅相もない。たまたまだよ、たまたま」

そう言って大仰に顔の前で手を振る。ヘラヘラと軽薄な笑みが、少女の鼻についた。

「ヒューイットの報告通りですね…… 昼行灯」

「大石蔵之助を知ってるのか。混血だろうに、日本の歴史にも造詣が深い」

立派立派と再び拍手をする。

「猿芝居は止めろと言っているのです。近藤正輝を殺した張本人が今更ヒヨウキンを気取っても滑稽に映るだけですよ？」

近藤の名に、仁はゆっくりと笑みをしまった。

「……まあ夜中に会って、昼行灯はないよな」

またクスクスと笑う。さっきまでの安穩としたものではなく、冷笑。

弾かれたように仁が少女に駆ける。仁のトップスピードではない。

速いは速いが、目で追いきれるものだった。即座に腰に顕現した村雲を引き抜く。

ガキン！！

金属がぶつかり合う音が響き渡り、夜の闇に小さな火花が浮かぶ。

仁の横薙ぎの刀を受けたのは、どうやら槍のようだった。三つ矛のトライデント。雲の隙間から注ぐ月光がゆっくりとその持ち主を照らし始める。魚のような鱗に覆われた顔は、僅かに目と口がわかるだけ。鼻のようなものはない、ノッペリとした作りは気味の悪さを与える。全身が見える。全身銀色がかった青い鱗に覆われていて、視線を下げて足は見当たらない。尾ひれのようなものがついているだけ。半魚人ならぬ、前魚人といったところか。その全魚人は感情の見えない、そもそもコレにあるのかはわからないが、顔で仁の刀を押し返している。

仁の試すような攻撃に、少女もまた刹那に精霊を呼び出し、当たらせただった。

「全力で向かってくるかと思えば、挑発に乗らないタイプなんですね？ それとももう近藤のことなど過去のことですか？」

全魚人の後ろで少女が初めて笑みを見せる。冷たい人形のような笑顔だった。

「……」

「まあいいです。今日は戦いに来たわけでもありませんから」

「……どういうことだ？」

キンと小さな音を上げ、仁が刀を鰐迫り合いから戻し、精霊から距

離をあける。

「アナタの実力を当方は高く評価しています」

やや事務的に少女は言うと、手を横に振り、自らの精霊を下がらせた。全魚人は芋虫が這うように器用に主の下まで移動する。

「スカウト…… ということか？」

「有り体に言えば」

近藤にそうしたように、幹部を殺した人間を新たな幹部へと招く。ひどく無感情で合理的なやり方に感じられた。

「……悪い話ではないと思いますけどね、私個人も。ただ忠実に仕事をこなすだけで、一般人には得られない報酬をもらえます。仕事も厳しいものばかりじゃない。私達フロイラインの幹部と連戦を余儀なくされる事態よりよほど割りはいいいでしょう」

ほんの一瞬、少女の顔に優しさのようなものが見えた。仁を慮っているとは言い切れないが、根からの悪人というわけでもないのかもしれない。

「謹んで断らせてもらおうよ。今の俺は金で動いているわけじゃないんでね」

それを汲んだのか、仁は冷たくあしらうようなことはしなかった。

「……そうですか。遊庵は良い人を仲間にしたようですね……」

「坂城を知っているのか？」

思わぬ人の名を聞き、仁の顔に驚きが浮かぶ。

「……口が過ぎましたね。今日のところは退散しましょう」

少女は苦笑して、仁に背を向ける。向けかけたところで、ふと体を止めた。

「そうそう…… 私はミルフィリア・A・高坂こうさかと言います。以後お見知りおきを」

仁の紹介に則った言い方で悪戯っぽく笑った少女は、そのまま学園の外に歩いていった。

第二章 第五十四話：阿吽

ノックもなく部屋に侵入してきた坂城は必死の形相だった。ボタンと大きな音に驚いて顔を向けた奈々華はそんな彼女を見て、仁がまた何かやらかしたのだと悟った。首を忙しなく動かして部屋を見回す。

「仁は？」

突然の訪問を詫びることもない。奈々華は鍵をかけ忘れた自分の不注意を呪った。ベッドの膨らみを黙って指差す。すやすやと安らかな寝息を立てる仁は、部屋の入り口からでは見にくい。礼を言うことも相好を崩すこともなく、猛然とベッドに歩み寄った坂城が仁の体を激しく揺する。

「おい！ 起きろ、仁！」

二度、三度。横向きに眠る仁の肩に手を当て、首が取れるのではないかというほどに揺さぶる。仁は少し眉を寄せて、うーんと唸るだけ。坂城がなお手を動かし続けると、仁は鬱陶しそうにそれを払った。

「……何だコレは？ 全然起きないぞ。死んでいるのか？」

「生きてますよ。今野蛮人の手を払ったでしょう？ 可哀想だからやめてください」

奈々華もあまりの不遜に少々腹が立っていた。目を合わせることもなく、冷たく言い放つ。

「……」

もう一度仁の肩に手を当てようとして、奈々華がそれを止めた。振り払うように奈々華の手から逃れた坂城の手首は少し赤らんでいた。「……何なんですか？ いきなり他人の部屋に入ってきて」

坂城はようやく冷静さを取り戻したようで、ふうと息をついて一連の行動を詫びた。

「実は昨日の夜、一人の守衛が中庭の方から剣戟の音を聞いたとい

う報告が上がってな」

「……」

「別の守衛が何者かに気絶させられたとも」

ミルフィリアと名乗った少女が学園の外に出る際にやったのだろう。

「それで……」

仁が何らかの形で関与していると。もっと言えばその剣戟の奏で手は仁ではないかと事情を聞きにきたということらしい。

うるせえな、と低く呻くような声で仁が目を擦りながら、起き上がった。

「お兄ちゃん、おはよう」

坂城と対していた時とは全く別人になったような優しい声と柔らかい笑顔を浮かべ、奈々華が挨拶する。仁からはうんともああともつかない呻き声が返ってきただけが、奈々華は笑みを崩さないまま、冷蔵庫から牛乳を取り出し、コップに注いで渡した。仁はいつも寝起きに牛乳を飲む。

「……サンキュ」

受け取ったコップを豪快にあおる。口の端から零れた白い筋が、仁の首下を垂れて服の、灰色のスウェット、中に入り込んでいく。予め予測していたかのように、奈々華は平然とティッシュペーパーを一枚差し出すのだった。緩慢な手つきで体を拭くと、空のコップを添えて奈々華に返す。代わりにタバコを受け取り、のろのろと火を点ける。

一連の動きを黙って見ていた坂城が呆れたように苦笑する。

「……君はそれでいいのか？」

人として、兄として。

第二章 第五十五話…隠せない動揺

「それにしても良かった。生きていたか」

坂城は気を取り直してそう言うのと、激熱のお茶にふうふうと息を吹きかけ始めた。

「そんな半日目を離したくらいで死んでたまるかよ。金魚じゃねえんだからよ」

仁はベッドから這い出ると、素早くコタツに足を突っ込んだ。一瞬奈々華のものか、坂城のものか、足と足が触れ合った。気色悪い笑みを浮かべて仁を見やる奈々華の様子から恐らく前者だ。

「……君は昨日侵入者と戦ったろ？」

ようやく飲めると判断したのか、湯飲みで口をつける。苦い薬でも入っていたかのように、眉間に皺を寄せてすぐに唇を離した。

「ああ、侵入者。それで心配して来てくれたのか」

「……別に心配したわけじゃないが」

奈々華はようやく坂城の行動に納得がいった。納得して顔を顰めた。あのテンパリ方からよくそんな嘘がつけるものだ。

「それで？」

坂城はこの顛末を促した。心持ち赤い顔は、奈々華の茶のせいか。

「確かに迎撃したよ」

「取り逃がしたのか？」

責めるような口調ではないが、困ったといった顔。仁は短くなったタバコを灰皿に押し付けながら、口内に残る煙を吐きあげた。部屋の中はモヤがかかったように白い空気が充満していた。

「戦意のない相手に、後ろから斬りかかるわけにもいかんだろ？」

「戦意がない？」

予想だにしない言葉に、坂城がぽかんと口を開ける。

「俺を勧誘しにきた」

メンソールを意味する緑色の箱に手をかけた仁は、坂城があまりい

い顔をしていないのを見て、手を引っ込めた。

「かなりいい条件だそうだ」

「……」

坂城の顔が緊張に強張る。

「断ったよ。何だ？　俺が金に釣られてホイホイ寝返るとでも思ったか？」

「そういうわけじゃないが……」

随分ドライなんだなと思って、と付け足す。

「近藤さんもそういう契機だったらしい」

奈々華が過敏に眉を寄せる。坂城も仁と近藤の仲について詳しく知っているわけではないが、何となく顔見知り程度ではなかったと勘付いていた。だから黙った。

「丁寧に自己紹介までしてくれたよ。青の幹部らしい」

部屋の空気が完全に死ぬ前に、仁は話題を戻した。

「ミルフィリーテ？　とか言ったかな」

「ミルフィリーテ……」

奈々華と坂城がほぼ同時に反芻した。奈々華は単純に女性の名前らしいと思って。坂城は……

「違ったかな。そうだ、ミルフィリア」

「……」

寝起きの細い瞼の下で、油断なく仁の流し目は坂城の表情を捉えていた。

「ミルフィリア・A・高坂とか……」

そこまで聞いた坂城は驚愕に顔を固めていた。

「どうしたんですか？　猿にアイスクリームを取られた観光客みたいな間抜け面して」

「……」

奈々華の言葉にはたと目覚めたように、坂城は取ってつけたような笑顔を浮かべた。一度唇を舐めて、なんでもないと返した。仁はその様子を見て、諦めたように口を曲げた。

「まあ、そんなわけだ。勧誘がてらやって来たフロイラインの幹部を追い返した」

それだけだ、と言ってちゃっかり手にしたタバコに火を点ける。坂城はそれに非難の目を向けるのも忘れて、ひたすら思い詰めたような顔でコタツ布団のクマと睨めっこしていた。

第二章 第五十六話…ブラックボックス

どうしたんだろうね、と奈々華は口ほどには気にした風もなく坂城の様子を思い出しながら言った。コタツの中に手をつ突っ込んだり抜き出したりを繰り返しながら、機嫌を伺うように上目に対面の仁を見る。仁はパソコンをカタカタ、ネット麻雀で遊んでいるようだ。持ち点一万点を切った辺りからかなり投げやりに打牌を繰り返している。

「アイツも色々あんだろ。わかんないけど」

投げやりなのは打牌だけではないようだ。ロンという機械の発声の後、仁が画面から目を切った。坂城はあの後、急用を思い出したとかで部屋を辞していた。

奈々華がなおも食い下がろうとしたところで、来客があった。コンコンと控えめなノックの後、上品な声がする。

「仁さん、奈々華さん。今よろしいですか？」

孫ほども歳の離れた奈々華にも決して敬語を崩さない老婦人の声だ。コタツからもぞもぞと這い出した仁が部屋の戸を開ける。黒いスーツを着た木室が、歳を感じさせないしっかりとした姿勢からぺこりとお辞儀をする。

「どうかされたんですか？」

仁は木室に対しては慇懃を崩すことはない。尊敬の念に近いものを抱いている節まであった。

「明日からまた学園に通ってもらうことになっているでしょう？」

「え？　そうなんですか？」

「おや？　学園長から聞いてませんか？」

どうも行き違いがあったらしい。坂城の来訪は実はそれを伝えることも含まれていたのだろうか。

木室が来たのは、仁と奈々華の精霊を増やすという目的からだそう

だ。更なる攻撃の幅を増やさなければ、この先の戦いにおいて遅れを取る事態も起こり得るということだった。仁も実際に近藤との戦いで、物理攻撃しかない自分の引き出しの少なさを感じていたので、有り難い申し出だった。だがそれだけではなく、複数の精霊と契約しているのが当然とされる高等部の生徒に負い目を感じることのないうようにという気遣いが、彼女の言葉の端々に滲んでいて、仁は心が温まる思いだった。

奈々華が大岩に手を当てる。いつか見たように岩が光る。だが今度は白ではなく、ぼんやり赤い発光。木室の話では、精霊魔術師は複数の色に適性を持つのが普通だという。適性診断は眉唾ではあったが、人間は多面的であるという良い証拠なのかもしれない。

赤々と花火のような閃光の後、奈々華の傍にいたのは赤い猫。全身ペンキでも塗られたように、毛も耳も尻尾も赤。シャルロットのように翼が生えている、彼女の話ではそれは退化し忘れた飾りとのこと、というようなこともなく、全身がポストのように赤い以外は取り立てて特徴のない猫に見えた。

「……焰愛えんあいと呼ばれる中級くらいでしょうか、赤の精霊ですね」

猫が可愛らしい小さな口からボツとライター大の炎を出した。よろしくということらしい。奈々華はその様を見て、また炎を吐かれなにかおっかなびつくり、それでも優しく抱き上げる。猫は奈々華の腕の中で大人しく目を閉じた。

「よろしくね。アイシア」

もう名前を決めたらしい。焰愛だからアイシア。猫がニャと短く肯定の意を返す。人語をどこまで解しているかは分からないが、どうやら話すことは出来ないらしい。

奈々華と猫の様子を見ていた木室が、一度優しく頷くと、仁に顔を向けた。

目を瞑り、岩に精神を集中させていく。あの猫はいくらか戦闘向きのようなだが、仁は奈々華を戦闘に巻き込むつもりは全くなかった。ないどころか、きっと自分も闘うと言い出したら全力で止めるつもりだ。普段は奈々華の自由意志にあれこれ口を出せないが、それだけは譲るつもりもなかった。

「……出来たら遠距離攻撃が出来るようなヤツが欲しいな」

手に力を込める瞬間、仁は呟いた。自分がやらなければならないと自覚しているからこそそのあくなき向上心が見え隠れする。

手の先から闇が広がる。黒い霧。薄目を開けた仁は嫌な予感しかしなかった。またしても黒の精霊。闇の眷属。一際大きく黒い闇が胎動するように溢れ出し、霧は晴れた。

見上げるような巨軀は鍛え抜かれた肉体美。青い体色はまるで見る者の顔色を投射したかのよう。静かな怒りを湛えた眼光にはえもいわれぬ恐ろしさがある。鋭い牙が覗く口からは、その肺活量が人間のそれを遙かに越えるものだと示すように、綿飴のような大きさの白い息が間断なく吐き出されていた。青鬼。

「……俺、こんなんばっかりか」

第二章 第五十七話：黒の資質

二度目では木室も苦笑いしか浮かばなかった。苦笑いの後、自分の役割を果たした。

「村雲守兼家が作、静の太刀」

またもや、黒の特殊精霊。刀に宿る鬼。刀鬼ということだった。足元に跪く巨漢に、仁は半ば呆れたように一瞥くれると、木室に恨みがましい目を向ける。

「……こん中、鬼しか入ってないんじゃないですか？」

木室は苦笑を濃くして、後ろ手に組んだ指をグッパグッパしていた。「中とかないですから……」

「俺も手から魔法とか出したいんですけど？」

命名をせつつく刀鬼に、村雲に村雲と付けたものだから何としようかと思ひ悩みながらも不平を連ねる。彼は文句を言うときは器用だった。

「……伝承でしかないですけど、出せる筈ですよ」

木室はやや笑顔の質を変えながら言った。駄々をこねる子供に向けるような微笑。実際子供以上に歳は離れているのだから、彼女からすれば可愛いものなのかもしれない。

「出せるんですか？」

「ええ。呪詛とか怨念とかを込めて、相手にぶつけるのです。先程の黒い霧のようなものです。すると相手は体に変調をきたしたり、彼我の実力差が大きいと最悪それだけで死に至ることもあるそうです」

仁は木室の説明を引き攣った笑みで聞いていた。

「……もつと建設的なものがいいいんですが……」

木室も返す言葉がなく、心配げな奈々華と顔を見合わせた。

本室と別れて、また部屋に戻る二人は廊下を歩きながらそれぞれの新しい精霊について思うところを話していた。結局、仁は青鬼に静しずかと名づけた。かなり投げやりな命名にも、忠誠を誓う青鬼は真剣そのもので、青い鞆、青い柄の真っ青な真剣となった。

「しょうがないよ。お兄ちゃんはきつと才能がありすぎるんだよ」
励ます奈々華の声は弾んでいる。世辞とは一概に断定しきれないのは奈々華が仁に言っている言葉だから。

「才能は知らんが、もうあの岩には二度と触らん。このままじゃ全種コンプリートしちまう」

「お兄ちゃんが鬼で、私は猫？」

仁がちらりと奈々華の胸の辺りに眠る赤猫を見た。仁が軽口を交えている内は、そこまで深刻に悩んでいないときだと奈々華は知っていた。でも軽口の中にも種類があつて、本当は気にしている場合と全くしていない場合がある。奈々華はその見極めが出来なくなっていた。三年の隔たりがさせた。

「……でもすごいよね？ 岩に触るだけで精霊が出てくるなんて」
だから話を変えた。

「どうだろうね。岩は神聖なものと考えられたりもするからね」
そんな機微が分からない仁でもなかった。だから乗った。詳しくと奈々華は目で訴える。

「京都に瓜生石（注1）なんてあるだろう？ 中国でも孫悟空（注2）が岩から出てくる」

昔の人はそういう信仰があつたんだよ、と優しく付け足す。奈々華は殊更目から鱗が落ちたような顔で兄を見上げた。仁の顔は苦々しげなものに変化していた。

「それにしても明日から学校か……」
イヤだな。行きたくないな。子供のように嘆く。

「そんなに嫌なら断れば良かったのに」
「……あのまま帰っても後味悪いだろ？」

困っている人間を捨て置いて、元いた世界に帰る。当初の契約は果

たしたとは言え、確かに気分のいいものではない。

「だったら文句言っても仕方ないじゃない」

奈々華の機嫌は急降下。てくてく先に歩き出した妹の背を、仁は首を小さく振りながら見つめた。

「冷たいな……」

第二章 第五十七話：黒の資質（後書き）

注1…うりゆうせき。牛頭天王が最初に影向ようこうしたとされる影向石。
平たく言えば神様が降臨した有り難い石。京都の道の真ん中に柵で
囲まれ、祀られている。

注2…オラ、なんだかムラムラしてきたぞ

第二章 第五十八話：下らぬ断罪

城山兄妹がクラスに顔を見せると、少し以前とは雰囲気は違っていた。

刺すような視線はなく、どことなく嬉しそうな、近寄りやすい空気を感じる。クラスメイト達は相変わらずチラチラと遠目に見るだけなのだが、そこに含まれる感情が嫌悪や侮蔑、畏怖から親近や憧憬、感謝みたいなものに変わっているのだ。

「……どうしちゃったんだろ？」

耳打ちするような小さな声で、隣の兄に囁く奈々華。仁もさあと首を傾げるだけで、真相はわからないようだった。すると二人の登校に気付いた一団の中から少女が駆け寄ってくる。目黒だ。飼い主を見つけた子犬のような顔をしている。

「おはよう、奈々華ちゃん。お兄さんもおはようございます！」

いつになく顔を紅潮させ、興奮気味に挨拶。人懐っこい子ではあったが、仁に挨拶をすることはあまりなかった。兄妹は困ったような顔で挨拶を返した。

「どうしたんだ？ 俺の素晴らしさに世間が気付いたのか？」
そんな馬鹿な、という顔をした奈々華を余所に、目黒が小さく頷いた。

「簡単に言えばそういうことです。コレを……」

スカートのポケットからくしゃくしゃになった一枚の紙を仁に差し出す。灰色がかった紙とびっしり詰まったワープロの字から新聞らしい。

巨星墜つ！

当私立中谷精霊魔術学園の生徒、高等部一年三組の城山仁しろやまじんの手により、遂に学園に平和がもたらされた。長きに渡り我々を恐怖と絶望の底へと閉じ込めていた敵、煉獄のヒューイットがこの度、彼の手

によって倒されたからだ。彼はこれまでも同支配下の数々の精霊をその手で屠り、遂にはその元凶たる魔術師の魔の手から、当学園を解き放ったのだ。彼の勇氣ある行動の恩恵に与る我々はここに最大限の感謝の意をもって報いなければならぬ。

記事を読む限り、学内新聞のようだった。仁を全面的に称える文章。仁は隠し切れない怒りをどうにか、両手を力一杯握り締めることで爆発させずに内に籠らせていた。くるりと踵を返すと、そのまま教室を後にする。奈々華が後ろから悲鳴のように呼び止める声が聞こえたが、仁が振り返ることはなかった。

胃からこみ上げる液体を洗面器にぶちまける。黄色がかった液体はねちよりと白い洗面器の側面を伝って排水溝へと流れ着く。仁は乱暴に手を喉に突っ込み、もう一度声にならない嗚咽を上げ、残ったものを吐き出す。絞め殺されるガチョウの断末魔のような気持ちの悪い音が男子トイレ全体に響き渡る。

胃が痛かった。肺が痛かった。胸が痛かった。

見上げた鏡に、トイレの用具室が映る。その前に生氣のかけらも見えない自分の顔を見た。血の気はすっかり引き、唇からだらしなく唾とも胃液ともつかない糸を引いている。不意にその顔が近藤の顔に見えた。最後の安らかな顔ではなく、自身の体を蝕む苦痛に歪む顔。苦しい、痛い。それに恐ろしく腹が立った。

「近藤さんは！ 近藤さんは……」

苦しいとは言わなかったじゃないか。痛いとは言わなかったじゃないか。助けてくれとは、殺してくれとは言わなかった。勝手な妄想で穢すんじゃない。

俯いた先の洗面器は恐ろしくキレイに磨かれていて、仁はぼんやりと自分の醜い顔が映るのを見た。

目黒の顔が浮かんだ。クラスメイト達の顔が浮かんだ。

手の平を返したような短絡的な笑顔。気味の悪いモノが本当は自分

達の利益になると分かった瞬間、両手ばなしで喜ぶ。利用する。笑う。褒める。

「……んなもんいらねえんだよ」

倒したんじゃない。殺したんだ。わかんないのか。馬鹿みたいに笑いやがって。相変わらず気味の悪いモノ、人を殺す化け物なんだよ。わかんないのか。

「こんなことの為に近藤さんは死んだのか」

体がわなわなと震え、どうにもならなかった。

ああああああ！！

絶叫とも慟哭とも悲鳴ともつかない雄叫び。気が付くと鏡を叩き割り、なくなった鏡の向こうの壁に狂ったように拳を叩きつけている。痛い。血が馬鹿みたいに吹き出ている。壁のタイルが割れ、コンクリートが見えてきた。灰色の薄気味悪い肌に赤がビシャビシャと塗られた。ゴキッと鈍い音がして、仁の指が変な方向に曲がった。

「俺が殺したんだろうが！ 俺が！ 俺が！ 俺が！」

口から吐いた液体が血に混じり、洗面器の向こうに顔は映らなくなっていた。

第二章 第五十九話：脆く揺らぐ兄の弱さ

街をただ彷徨う仁は吸い込まれるようにパチンコ店に入っていた。騒音が自分の存在を消してくれることを切に願った。以前奈々華と街に来た際に宣伝をしていた新規オープンの店。パチンコ、スロット合わせて五百台近くはあるだろうか。中々大規模な店だった。パチンコ店のオープニングイベントにガセは少なく、皆浮かれたように筐体に向き合っていた。何を打っても良かった。

大当り完全告知台。筐体の上部に設置されたランプが鳴れば必然確変大当り。大当り後は回数限定の確率変動に移行する。そこでまた鳴れば大当り、確率変動……

仁が座った台は、一時間経ってもうんともすんとも言わなかった。釘も良く見ていない。球筋も追っていない。もっと言えば回転数も見えていない。当たろうが当たるまいが、回ろうが回るまいがどうでも良かった。ハンドルも固定していない。握るに任せ、折れた中指の痛みに任せていた。ただ自傷のように金を使い、この場にいる権利があればそれでいい。

「どうしちゃったんだろう？ お兄さん」

小首を傾げる目黒は本当に分からないといった様子。奈々華は無言のうちに手に握ったままだった新聞を返した。授業始まっちゃうのに、と呟く目黒にもう帰ってこないよと短く答える。

「……私何かマズイことしたかな？」

「……」

奈々華すらも余り友好的な態度とは取れない。自分の席に鞆を置き、椅子を引いて座る。その所作からも言外に非難とも諦観ともつかない棘があった。どうしていいかわからない目黒はただその様子を見

守っている。

「春ちゃんっていうか、クラスっていうかな」

説明も漫ろ。一時間目の授業の教科書を取り出す片手間のように見える。

「……いきなり英雄扱いだもんね」

「それもあるだろうけどね」

バンッと大きな音を立て、教科書の束を机にぶつけて整える。これ以上は何を聞いても答えてくれないだろうと判断したのか、目黒はそのまま何も言わずに自分の席へ帰っていった。ふと振り向いた目黒は奈々華が全く自分を見ていないことに気付いた。

私が守ってあげなくちゃいけないのに。

お兄ちゃんを傷つける者全てから。かつてそうしてもらったように。今あの人は絶望の淵にいる。誰も信じられず、誰に甘えることも許されず。

あんなものじゃ足りないんだ。あの夜の抱擁は自分の胸を高鳴らせるだけ、自己満足に帰結し、彼の心を解きほぐすものたりえなかった。あの人の妹としての責務をこそ果たさなければならなかったのに。

お兄ちゃんは強い人。

誰よりも誰もを守る強さと優しさを持つ人。

お兄ちゃんは弱い人。

誰よりも誰もを慈しむ弱さと儚さを持つ人。

優しすぎるんだよ。

敵にも事情を見出し、悪人の善所を探し出し、全てを守ろうとする。助けようとする。

誰かを守ることが、誰かを傷つけるということと等号だと知らない。認めない。

だからお兄ちゃんを支える人は絶対に必要なんだ。

それは私の役目だった。これからもそうでありたい。

不意に黒板の文字が滲んだ。ポタポタとノートの上に水滴が落ちる。周囲の席の人間が心配げな声をかけてくるのを、あしらうように軽くうけあって……

「私が泣いている場合じゃないんだけどなあ」

強がって浮かべた微笑は、泣くことも赦されない人へと向けられていくべきだった。

第二章 第六十話：低気圧と高気圧

トントンと肩を叩かれた仁は、逃亡中の犯罪者のように素早く振り返った。かつて近藤が街中で仁を見かけるとそうした。思いのほか速い動きに、叩いたほうは驚いてその美しい二重の目を大きく開いていた。髪色こそは日本人らしく黒をしているが、顔の造形は外国人と見紛う。

「……奇遇ですね。こんなところで会うとは」

仁は内心マズかったと思った。完全に警戒を怠っていた。今しがた後ろから襲われていたら反撃もままならず、やられていただろう。それでもいいか、とも思った。

「どうしたんですか？ この世の終わりみたいな顔して」

ミルフィリアは当てつけのように明るく、花咲くように笑んだ。別に、と逃げるように歩を進めようとした仁の前に回りこむ少女は笑みを消していた。

「お話しませんか？」

「……んな気分じゃねえよ」

退けと目で訴える。百人いれば九十九人は退くだろう憎悪すら滲んだ眼光だった。残りの一人は、微動だにせず仁の目を真っ直ぐ見返す。目を逸らしたのは仁のほうだった。

「近藤のことを思い出しましたか？」

ぴくりと仁の眉が動いた。さっきの振り向かせ方か、もっと根この部分を言っているのか判断がつかなかった。

「他人の冷たさに触れましたか？」

「……」

「立ち話もなんですね。あのカフェに行きましょう？」

まるで催眠術にでもかかったように、仁はミルフィリアの後をついて行った。

白いテーブルと白い椅子が潇洒なデザイン。イタリア語の店名は気取りすぎか。アーケードの下に三セットほど設けられたテーブルに向かい合って座る。デートのように見えるのは傍目だけで、実際はきなくさい仕事の話をするのだった。仁もそう思っていた。

「ヒドイ顔をしていますね？」

「生まれつきだ」

運ばれてきたコーヒーに口をつける。漫然とした動作は見る者をけだるくさせる。

「顔の作りを言っているではありません。それはご自由になさると良いでしょう」

「自由もクソも、これしか出来ない」

美容整形でもするのか、とシニカルに笑って、また一口カップの中を飲む。エスプレッソの苦味を噛みしめるようにしてミルフィリアの言葉を待った。

「……そんな顔をして、潰れていった人間を何人も見ました」

「だから？」

「人が人を殺せる確率は三割なんて言われています」

「首位打者のほうが打つな」

「三割は割りと凶太い方」

もって回った言い方が、今の仁には耐え切れなかった。

「だから、それがどうしたってんだ！」

語気が荒くなる。対するミルフィリアは涼しい顔をしていた。

「貴方はそんなに広角に打ち分けられる人じゃないでしょう？」

「……知らん」

「耐え切れないんですよ。普通の人は。精神が崩壊してしまう」
そう言うと、空になったスティックシュガーの紙袋をわざわざ顔の前まで持ち上げてクシャと折る。

「お前は俺が弱っている様をあざ笑いに来たのか？」

低く唸るような声。怒りを噛み殺しているのか、もう怒りも湧きき

らないのか。

「……穿ちますね。本当に偶然なんですよ？」

「……」

「忠告です。このまま今の生活が続けるのは得策ではありません。こちらに來なさい。なるべく汚れ仕事をさせないように私からも口添えます」

「……どうしてそんなに俺にしてくれるんだ？」

「おや？ 惚れてしまいましたか？ 罪な女ですね、私は」

大仰に驚いて見せる。初対面のときとは打って変わって軽口を叩くのは彼女のほうだった。

「冗談ですよ。そんな顔で睨まないで下さい」

「……」

「今は言えませんが、貴方は私にとっても必要な方なんですよ」

「……惚れたのはお前のほうじゃないのか？」

仁にやり返すという意味は感じられない。適当に言葉を紡いだような空虚さがあった。

「私にキツネを愛でる趣味はありませんよ。弱い人間も嫌いです」

「……」

弱い。彼女が言っているのは体ではなく、心なのだということは仁にもわかっていた。颯爽と立ち上がったミルフィリアが財布から一万円札を取り出し、そっとテーブルの上に置いた。

「……今日はここまでにしておきましょう。快い返事を期待しますよ」

それだけを残して、少女は少女とも思えないような堂々とした歩で去っていった。

台風一過。静けさを取り戻したテーブルで、仁はいつまでも彼女の背中から視線を外せなかった。

第二章 第六十一話：自己犠牲

また元通りにしなければならぬ。俺はヒョウキン者でピエロじゃないともたないんだ。

帰ったときに、奈々華に、周囲の人間に心配させてはいけぬんだ。誰かに甘えられる歳じゃない。甘えられる環境じゃない。あの子にはこれ以上迷惑をかけてはいけぬんだ。俺はもうあの子にあんな顔をさせたくないんだ。

欺瞞。

俺はもうあの子のあんな顔を見たくないんだ。

怖いんだ。

学園に帰り着いた仁は、自分の部屋の前で、よく知る顔が二つ口論しているのを見つけた。奈々華と行方。珍しく奈々華が興奮をあらわにして、行方が冷静に何か論している。

「どうしたんだ？ 二人して、好きな男でも取り合ってたのか？」へらへらと軽薄な笑みを浮かべて、二人に近づいていく。確かめるように、一瞬自分の顔を触った。当てずっぽうに言った言葉は、しかし少なくとも片方の心を揺さぶるには十分だった。

「お、お兄ちゃん。早かったね」

奈々華はそこまで言って、しまったという表情をした。彼女としては仁が今日学校をサボったこと自体、触れるつもりはなかったようだ。仁は透徹するような目でそれを見ていた。

「アンタのことで、この子が突っかかってくるのよ」

行方が参ったと諸手を天に向けて、奈々華を顎で指す。ふむと頬の辺りを掻きながら、仁は両者の顔を順に見つめた。奈々華は後ろ暗いように、僅かにその視線から目を逸らした。

「……新聞のことか？」

お見合いしていても埒があかない。核心をずばり突く。奈々華が行方に物申すとなると、やはりそれが妥当。

「アンタも批判の口？」

自嘲気味に笑う行方の目は挑戦的だった。

「いや…… 君なりに俺のことを考えてやってくれたんだろう？」

「別に。記事になるから書いてただけよ」

「そうか、ならいい」

部屋に入ろうと奈々華の隣を通り、一瞬目を配り、奈々華が意を決したように仁と顔を合わせた。

「お兄ちゃんは腹が立たないの？ いきなり手の平返したみたいに」

「……」

「今まで散々、化け物でも見るみたいに……」

言いよどんだ。少し涙ぐんでいる。声も怒りなのか悔しさなのか震えている。

「奈々華」

「それがちよっと自分達に有利だと分かると……」

「奈々華」

「お兄ちゃんがどんな気持ちで近藤さんを殺したかも知らないで！」

「奈々華」

感情が爆発したような奈々華の声に自分自身への憤りが、忸怩たる思いがある。十年以上兄をやっていた仁には分からないはずもなかった。だから優しく、子供に物語を聞かせるような声。

「奈々華。よく聞いて？ 俺は気にしない。近藤さんが最後にくれた手紙にね、こう書かれてたんだ。君は守るべき者、大切な者のために立ち上がったんだろう……って」

「……」

唇を固く引き結び、それすらもプルプル震えているが、必死に涙が目から零れるのを耐えている奈々華は黙って聞いていた。

「俺が守りたかったのは、あいつ等じゃない。お前なんだよ？」

例えもう道を違えてしまった、抱き締めることも撫でてやることも

出来なくなつた彼女でも、自分の妹なのだ。奈々華を守ることが、贖罪でもあり、義務でもあり、望みでもある。

「だから俺は、お前さえそうして俺を案じてくれるならいくらでも我慢できるんだ。頑張れるんだ」

その気持ちだけで十分なんだ、と。奈々華はそこまでを聞いて、辛抱きかなくなつた。兄の体に飛びつくように抱きついた。鼻水も涙も擦り付けるように、深く仁の胸に顔を沈める。

「うぐ…… え…… ごめんなさい、ごめんなさい」

仁の両手はだらしなく体の横に垂れているだけだった。今なら抱きしめてやれるかも知れない。そう思つて三年前に見た奈々華の顔を思い返した。触らないでと叫んだあの顔。憎しみと悲しみを交差させた顔。初めて見た顔…… 仁は小さくかぶりを振つて口元を諦念に緩めた。

例え進む道が違えども、この子の幸せを願つてやまない。

例え自分の手がどんなに汚れようとも、この子だけは守り通したい。

例え自分が嫌われようと拒絶されようと、この子の願うことは全て叶えてやりたい。

そのためなら俺は悪魔にでも魂を売ろう。

不意に仁の顔に浮かんだ諦めと覚悟。凄絶な暴力への傾倒。

行方は怖気に体中の肌が総毛立つのを感じて、遅れて手足が震えているのに気付いた。

第二章 第六十二話：愛情、恋情、もつれてピエロ

「何だか嬉しそうだね？」

息苦しうにコタツから顔を出したシャルロット。嫌がおうにも鼻歌混じりに夕食の準備をする奈々華は目につく。トントンとキャベツを切るリズムに合わせて下手糞な即興の歌詞まで付け始めた。

「おにいちゃんに抱きついちゃった」

重症らしい。くると飼猫一号に向き直った手には包丁が握られたままで、勢い余って飛んできやしないかとシャルロットはひやりとした。

「わかる？ わかっちゃう？」

「幼稚園児でもわかると思うけど……」

包丁を放り投げるようにまな板の上に置いた奈々華が、駆け足気味の速度でコタツに向かってくる。シャルロットをとっ捕まえて無理矢理頬ずりしだす。体を動かしていないと喜びが一所に溜まって爆発するのだった。

「実はねえ、お兄ちゃんが私のこと大好きだった」

一言もそんなことは言っていない。外出タバコ中の仁がもしこの場にいたら、取ってつけたような苦笑を浮かべることは想像に難くない。

「本当かい？」

と、ここまでは半信半疑ながらこれでようやく奈々華の恋が成就するのかと感慨深かったシャルロットだが……

話をよくよく聞いていくと、奈々華の脳内で美しく脚色された先程の一連の流れからは、そこまでの意図は読み取れない。むしろ好きなら抱き返してくるのでは？ と目に見えて落胆し始めた。

「アンタ幸せだよ……」

そんな言葉しかかけることは出来なかった。

「本当はわかってるんだよ」

打って変わって静かに紡がれた抑揚のない声。躁鬱を繰り返す精神病患者のような危うさを感じて、シャルロットは吸い込まれるように、奈々華を見上げた。

「……あの人はもう私に何も求めちゃいない」

「奈々華……」

「私に対しても罪を負ってるの」

何も知らない新入りのアイシアが話し声に目を覚ましたのか、コタツの反対側から出てきて、奈々華の膝の上にぴよんと乗った。サラサラとキレイな毛並みを優しく撫でる。

「……抱きしめてくれると思った」

打算も何もなく、ただ妹として、兄に感謝と謝罪をぶつけた。

「でも駄目だった」

機械のような目で、機械のような手つきで繰り返しアイシアの背を撫でる奈々華からは何か大切なものが欠落しているように思えて、シャルロットは口を開けなかった。

「私は償われるべき存在じゃなく、共に償う存在でありたい」

淡々と芝居の台詞を空で言うような……

「でも駄目だった」

ここまで聞いて初めて、シャルロットは自分の迂闊さを思い知った。奈々華は全てを分かった上で何も分かっていないフリをしていたのだ。大好きな兄が自分を心底では愛してくれていることも。それでももう自分を信じ、求めてはくれないことも。付きまとわれて困惑していることも。自分が求める兄妹像は勿論、最後に求める形が、霞むほどに遠く離れている現状も。全て分かった上で明るく前向きな恋する乙女を演じていたのだ。ピエロは奈々華もそうだった。

「少しでも希望を持たないと人は生きていられないんだよ」

決まって浮かべた微笑は笑んでいるようで、泣いているのだとようやくと理解した。

ふと笑った。それは慎ましく、それでも嬉しそうだった。

「でもやっぱり希望はあるんだよ？」

荒野に咲く一輪のタンポポを見つけたよう。シャルロットは奈々華の言葉を救いを求めるような気持ちで聞いていた。

「私のこと<お前>って呼んだ。<奈々華>って呼び捨てにした」シャルロットはその可愛らしい口をぽかんと開けた。肩透かしを食らったようだった。それがどうしたというのだと。そこまで思ってた仁が普段奈々華に対して他人行儀に呼んでいるのに思い当たった。だけどやっぱりそれがどうした、と目に込めた。

「……あの人は余程感情が乱れてない限り、余程自分が優位じゃない限り、ほとんど他人をお前とは呼ばないんだよ。<君>って言うクスツと無垢な笑い方は、言わんとしていることがよくわかっていないシャルロットにも安堵をもたらした。奈々華の膝上のアイシアも一層安心したように目を細めている。

「例外は親しい人。好きな人。多少礼を欠いても怒らないと判断した人」

普通のことなんだけどね、とまた笑う。そう、普通のこと。親しい人をお前呼ばわりするというだけのこと。妹を<お前>と呼ぶ兄。そんな世界中で有り触れたことがどうしてそんなに嬉しいのか。そこに仁の歩み寄りの意思を感じたから。付きまとうことに、共にいる時間まで拒絶する意志はもうないと。

「猫でも背中を撫でてもらいたい時はあるでしょう？」

最後はシャルロットではなく、アイシアに。されるがままに持ち上げられた赤い猫は、にゅと短く鳴いて小首を傾げた。

第二章 第六十三話…温情

「それで？ 話って？」

奈々華が待つ部屋へ帰ろうとした仁は、部屋の近くの廊下で仁王立ちしている坂城を見つけた。道中何を聞いても話さない坂城に誘われる形で、学園長室まで来ていた。どかとソファ―に腰を沈めた仁は、いつもより遠慮がちに座る対面の坂城に目をやった。

「わかつているのだろう？」

質問に対して質問。俺はエスパーじゃないと冷たく言い放った仁に、悲しそうな瞳を向ける坂城は随分幼く見えた。

「……」

「……ミルフィリアを殺すなってか？」

坂城は俯いてしまった。

「馬鹿だろ？ お前」

「馬鹿とは何だ！」

情緒不安定。俯いたかと思えば、仁の悪口に過敏に大声を出す。

「私だってな、色々考えたんだ。君を巻き込み、挙句契約を延長してもらい、その上戦闘の仕方にも注文をつけるなど！」

最後のほうは半べそをかいている。どうやら彼女なりに仁への配慮とミルフィリアへの何らかの感情の間で葛藤を抱きながら数日を過ごしたようだ。仁はその配慮を受け取り、穏やかに笑った。

「……あのなあ。迷惑だと思うんなら、最初から呼ぶな」
うぐつと言葉に詰まる坂城。まさに正論だった。

「でもなあ、俺は前にも言ったがもう迷惑なんて思っていない。第一もう関わっちまった」

呉越同舟。一蓮托生。乗りかかった船。袖口で目元を拭い、坂城は顔を上げた。

「……泣きついてこいって言ってるだろ？ お前の我が儘くらい屁でもねえんだよ」

坂城はじつと息を殺すように、黙って仁の顔を見つめたきり。

「何でも一人で抱え込もうとするな」

俺が言うかね、と心中。そこまで言っているもののヘラヘラ軽薄な笑みを浮かべた。

自分が思うよりも何倍も相手が自分を思ってくれている。気にかけてくれている。坂城は拭った目頭がまた熱くなるのを感じていた。胸が締め付けられるように痛み、仁の顔から視線を外せなくなる。話は終わりだと立ち上がろうとする仁を、どうしようもなく行かせたくなかった。まだここにいて欲しいと思った。

「ミリーは、私の従姉妹だ」

ちくりと胸に痛みが走る。自分勝手な感情を満たすため、仁の厚意を、従姉妹への思いを利用している。そんな坂城の内心を知ってか知らずか、仁は上げかけた腰を再び牛皮のソファに落ち着けた。

「……」

「共に暮らしていたこともある。親御さんの事情でしばらくウチが預かったんだ」

ポツポツ、自分の頭の中を整理しながら…… 罪悪感と折り合いをつけながら。

「小さい頃の話だが、よく遊んでもらった」

仁が訝しげな顔をする。

「私より二つほど上で…… 優しく賢い人だった」

「ちよっと待て…… お前今いくつだ？」

そう言って、仁は今まで坂城個人に関する話を自分がほとんど振ったためしがないことに気付いた。

「十七だが？」

仁が顔を引き攣らせる。

「嘘だろ…… ほんとだとしたら、老け……」

「老け？」

顔は笑っているが目は笑っていない。仁は逃げるように視線を部屋

の調度品に向けた。新しく買ったのか、黒とも灰色ともつかない暗色を基調にした前衛的な絵画が部屋の右側の壁に飾られていた。

「老け、なんだ？」

「ああ、いや、その…… それにしても奈々華と同じ年だとは知らなかった」

「老け顔と言おうとしたんじゃないのか？」

「そうかあ。若いみそらで立派なもんだ」

仁は絵画がよほど気に入ったのか、坂城と顔を合わせるのが怖いのか、齧りつく様に壁から目を離さない。

「誤魔化すな！」

意外に根に持つタイプらしい。

「悪かったよ。美人だから多分歳が分かりにくかったんだよ」

「び、美人」

仁の取ってつけたような世辞に、律儀に顔を赤らめる。存外言われ慣れていないらしいと、仁は目玉だけ動かして思った。

第二章 第六十四話：ベルベット・ワーズ

「私の家は代々この学園を管理していてな…… 勿論それだけではないのだが」

「何が勿論なんだ？ 学校の理事だけでも十分儲かるし、立派な仕事だろ」

羨ましい限り、と顔に書いてある。坂城はそんな仁を数秒見つめて、やがて自白するように言葉を連ねるのだった。

「私の家もミリーの家も、富豪と言って間違いない。所謂箱入り娘ってやつだ」

「……」

「だけど、数年前くらいかな？ この学園を二人で卒業してしばらくすると、彼女から音沙汰がなくなった。彼女の家にも行った。なくなっていた」

「お前飛び級したのか？」

仁の脇道の質問にああ、と小さく。

「さつきから、言葉の端々に自慢が滲んでるようなのは、気のせいかな？」

「……気のせいではない。正直留年するなんてどうやればいいのかもわからん」

そう言うのにやりと笑う坂城はすっかりいつもの調子を取り戻している。仁はチクショウと怒りをあらわにしている風だった。だが本当は怒っているんじゃないかと、わざと彼女の調子に合わせて湿っぽくならないように気遣っていると、坂城自身は十分に理解していた。「話が逸れたな。彼女からはそれっきり何の連絡も来なかった」

それでも、ここまでが限界だったらしい。彼女の顔が痛々しく翳るのを仁は眉をハの字に寄せて、心臓を刺されるような気持ちで見ていた。

「彼女が私の家に居たのは十歳くらいするときかな。一年ちょっとし

か居なかった」

でも、と小さく逆接を繋ぐ。

「私は彼女が悪事の片棒を担ぐような人間ではないと知っている。信じている」

「ああ、俺もアイツが悪いヤツとは思えない」

仁の口から漏れる本音は甘い囁きとなって、坂城の心を殊更温めた。

「……家族諸共の失踪ってのが、鍵を握っているみたいだな」

仁は既にある程度、自分の頭の中で推論を組み立てていた。もしかしたら違うのかも知れない。本当に純粹にビジネスとして加入したのかもしれない。だけど……

もし家族を人質なり何らかの形で利用されて、成す術なく一員となっているのなら。

「勝手な願いだとはわかっている。だけど……」

皆まで言わずとも、仁が自分の言わんとしていることを理解してくれると、そしてその願いを断るはずもないと確信めいたものが坂城の胸にはあった。子供みたいに甘えている。だけどこの人ならそれを……

「分かってるよ。アイツは何があっても殺さない。俺だって別に人を殺したくてウズウズしてるわけじゃない。殺さないならそれが一番いい」

「ああ……」

坂城は目を瞑り、それを聞いていた。優しい言葉を一言一句聞き漏らすまいと、余計な情報源を遮断しているのだ。川のせせらぎを、鳥の美しい囀りを、人は目を瞑り聴覚だけで愛でる。

「任せとけ。俺からも事情を聞いて、もしアイツの本心がフロイラインに居たくないってんなら説得してみる。力にもなるさ。それでも駄目なら、捕まえてお前の前に引きずってでも連れて来る」

わざと何でもないように。まるで近所の野良犬を捕まえるようなトーンで。

「ああ…… 頼む」

居ずまいを正して、勿論感謝も十二分にあつたが、坂城がぺこりと頭を下げたのは自分の顔を仁に見られたくなかったからだった。

第二章 第六十四話：ベルベット・ワーズ（後書き）

タイトルですが、多分こういう用法はないです。
作者の造語です。あまりモヤつとしないで下さい。

第二章 第六十五話…純情少女

眠たげに目を擦りながら、学園長室で共に書類の整理をする木室に坂城が突拍子もないことを言った。深まる秋から冬に近づくこの季節、朝から冷気をふんだんに溜め込んだ室内には、室温を早く上げなければと躍起になる暖房以外に音を奏でる者は何一つなくなった。書類が手元からずり落ちそうになるのを、はたと冷静に帰った木室は慌てて受け止めるのだった。

「……もう一度言ってください」

「だから…… 私はあの男を好きになったのかもしれないと言っている」

「はい。病院ですね。すぐに手配致します」

そう言うのとパサリと自分の事務机の上に書類を置き、携帯電話を取り出す。学園長室内には壁の左右に小さな扉があり、右は坂城の寝室。左は会社の一室と見紛うほど本格的なオフィスとなっている。

「ヒドいな…… 眠れなかったのだよ。アイツのことを考えていると一晩経ってしまった」

わざとらしく憎憎しげな目を作り、窓の外に目を向ける。木の枝の上で寒さに身を固めるスズメが室内を恨めしそうに見ていた。木室はのんびりと机の一番上の引き出しを開け、携帯をしまった。

「……」

「私自身わからんのだよ。恋というもののなのか、単純に感謝の念がそうさせるのか」

坂城の家は現代に生きる貴族のような生活をしていた。両親が事故で亡くなった今でこそ、坂城は自由の身ではあるが、上流階級のお嬢様を絵に描いたように、対人関係はおろか外出もままならないという環境で育った。恋愛というものを知らずに、行く行くは親が決めた相手と結婚するはずだったのだ。

「本気で言っているのですか？」

そんな事情を知らぬ木室ではなかったが、それでもそんな言葉が口をついて出た。

「どういう意味だ？」

「そのままの意味です。今更何を言っているのですかと」

木室は呆れ果てた顔で溜息を吐く。彼女がここまで遠慮なく坂城に接するのは、彼女が坂城の両親が存命であった頃から坂城の世話役として雇われていた身だから。

「随分前から貴方は仁さんに好意を持っていたと思うのですが？」

「……確かに彼には世話になっていたし、巻き込んだ手前氣にかけてもいた」

タンと胸を叩いて請け合う。的外れもいいところの返答に木室は幼稚園児でも相手にしているよう。

「いいですか？ 貴方は炎の巨人から助けられて以来、今まで彼のことを考えない日はありましたか？」

フルフルと首を横に振る。

「話がしたくて、会いたくなって、呼びつけたり部屋まで行ったりしたでしょう？」

コクコクと首を縦に振る。

「だがそれは友達としてかも知れん。昨日のは違ったんだ。どうにもこうにも頭から離れないと言うか、ずっと傍に居て欲しいとさえ思った。アイツの笑顔が目には焼きついたようだった」

ここでもう一つ、木室が一際大きな溜息をつく。つまりは想いをより強くしたらしい。いくら世間知らずに育ったとは言え、彼女も年頃の女の子。いくらなんでも自分の気持ちに気付いていないとはさすがに思っていなかったのだろう。立て続けに口から、はあと漏らす。アルコール探知でもしているようだ。

「抱きしめて欲しいとか、頭を撫でて欲しいとか、キスしたいとか思ったりはしていませんか？」

今まで客観的過ぎる自己分析を積み重ねていた坂城の顔がリンゴのように赤くなる。思い当たる節が有り余るということらしい。つい

でにそういったことを臆面もなく口にすることに羞恥を感じる位の常識は備えているみたいだ。

「だがアレは私の理想とはかけ離れているぞ？ もっとカッコ良くて、優しくて…… アイツも優しいな。面白くて…… アイツよりもっとも」と

論理も筋道もあつたものじゃない。キョロキョロと落ち着きなく動く眼球は彼女の心の揺れそのもの。

「そうだ！ タバコを吸うヤツは嫌いだ」

「子供ですか…… じゃあ彼は嫌いなんですね？」

途端に、逡巡もなくそんなことはないと来るのだから、木室の板についた苦笑は日頃の気苦労の賜物だとわかる。しかし木室は、まあ良かったのかもしれないと同時に思っていた。彼女の小学生のような押し付けがましい理想の男性像とは違うが、木室の中でも仁の評価は決して悪くない。悪い男に引かかって、自分の幻想が砂上の楼閣のように脆く崩れて、深い傷を負うようなことになるよりは、どこまでも他人本位で危ういが、確かな優しさを持つ仁と恋仲になればいいと思う。

「それにしても…… あんまりウチの姫様を誑かさないで下さいよ？」

強いて言うなら階下に向けられたような言葉を吐き、なおも苦しい言い訳を並べ立てる坂城を無視して、木室は書類の束へと向かうのだった。

第二章 第六十六話…エスプレッソ

不寐にまとわりつくようなクラスの視線をどうにかこうにか、耐え切った仁は放課を迎えていた。

仁も高校生だった頃、真面目に授業に出ていた日に限るが、この時間にこそ至福を感じていた。休み時間こそあれ、大学の授業とは違い、途中で一服なんてのは難しくどう足掻いても一定時間拘束されるこういう形式はあまりこらえ性のない仁にはかなりの苦痛だった。椅子に座ったまま一つ大きく伸びをする。
ピリリ。

携帯電話の着信音が、同じように開放感に満ち溢れた教室の面々を振り向かせた。ほんの数秒前まで教卓の上で教鞭をとっていた社が苦々しげに仁を睨む。知らない番号だった。

「もしもし」

平気で取るのが仁らしいと言えば仁らしい。

「仁さんですか？」

ミルフィリア・A・高坂。友達にかけるように気軽な声音は豪胆と言おうか、不敵と言おうか。

「やあ、ミリーちゃん」

仁も然る者。一体どうやって自分の番号を知ったのか、なんて陳腐な返しはしない。

「おや、バッティングフォームを変えたのですか？」

「ボール球を振らないように意識改革したんだよ」

そこまで続いてしばし沈黙。＜ミリーちゃん＞と言う単語に飛びつくように反応した隣席の妹が何とも言えない顔で仁を見ている。

「……今日お時間取れますか？」

昨日も訪れたカフェに彼女はいた。黒いシャツに黒いスカート、繋ぎに白のベルトを強調させている。仁は挨拶もなく、対面の席を引きゆっくりと座った。ミルフィリアもちろとそれを見ただけ。まるで電車の隣に知らぬ人間が座ったような味気ない反応。早速店員が仁のもとへ、注文を取りに来る。昨日と同じエスプレッソを頼んだところを見ると、中々気に入ったらしい。

「……正直見誤ったと思います」

何が？ と仁。ミルフィリアは肩をすくめて見せる。

「今日はマシな顔をしていると言っているのです」

「気のせいじゃないか？ 今でも近藤さんのことを思うと辛いぞ？」
ミルフィリアは驚いて瞬きも忘れて仁を見つめた。彼女の見立てでは、そう簡単に本音を吐くような人間ではないはずだった。寂しく笑う仁からは、伊達も偽りも感じられない。

「ただ気付いただけだ。近藤さんを殺してまで守りたかったモノに。それも違うか…… 頭では最初からわかっていたんだ」

ちやうど白いカップを銀のトレイに乗せて運んできた店員が仁に彼のお気に入り、頭を整理する時間を与えてくれた。

「でもあの泣き顔を見るまで本当に自分がやったことに、近藤さんを殺したことに意味があったのか、自信が持てなかったんだ。近藤さんの気遣いに、優しさに胸を張って答えられるか…… 貴方の命を奪ってまで守りたかったのは、この子ですって」

動かぬ証拠を突きつけられた犯人が胸の内を述懐するよう。だけれどもう少しそれよりも救いがあるとミルフィリアは察した。彼の顔には後悔よりも信念と覚悟が見える。

「……どうしてそんなことを私に話すんですか？」

純粹に疑問。

「俺が踏み込んだ質問を君にするからさ」

「……そう言えば遊庵に聞いたみたいでしたね」

ミリー。彼女をそう略して呼ぶのは親しい友人や家族。小学生から中学生に上がる頃、共に過ごした彼女の可愛い従姉妹。

「友情は遠慮と見つけたり、って人かと思っていましたが、それも違っていたようですね？」

見る目がありませんね、と自嘲するミルフィリア。クスクスと仁が含み笑いを返す。

「いや、全く持って優れた慧眼だよ。俺が無理に聞き出したわけじゃない」

そう言うと、両手の平を顔の近くで広げ、降参のポーズ。承服しかねると眉を寄せたのはミルフィリアだった。

「人見知りのあの子が……」

自分の知る、中々他人に心を開かない、難しい生き方をする少女ではなくなったということか。それとも……

「まあ兎に角だ」

そこで仁はいつになく真面目な顔を作って仕切りなおす。いよいよ本題。

「……ええ、以前お話しした私の個人的理由にも重なると思います」仁を彼女の事情でも必要と言った。本当はもう少し時間が欲しかったのですが、とミルフィリアはそこで一口、自分の飲み物で唇を湿らせて間を空ける。仁はその所作をじっと見ていた。カタリとカップを受け皿の上に置く音とほぼ同時に、ミルフィリアは口を開いた。

「実は…… 貴方に私の父と母を殺して欲しいのです」

殊更感情を押し殺したような声で、ミルフィリアはそう言った。

第二章 第六十七話：事情

「どうするんすか？ 旦那」

のんびりと頭を整理するように歩く仁は、それを遮る声に不快な溜息を吐いてやった。

「街中で話しかけんなって…… そうか、お前にはまだ注意したことがなかったな」

「ああ、変なヤツと思われるからっすか？」

そいつはすみません、と仁の腰にぶら下がる青い刀が謝る。

「……まあ次からは気をつけてくれよ。あとしつこいようだけど、その下っ端丸出しの喋り方もどうにかならんのか？」

静は契約時こそ慇懃に格式ばった口調で話したが、どうやら本来はこういう喋り方なのだ。と仁もわかってきていた。わかって妙に感に触れることにも気付いていた。馬鹿みたいにへりくだれとは言わないが、もう少しマシな喋り方をして欲しい。いっそタメ口にしてくれと言ったら、それはマズイっすよおとのこと。

「で、どうするんすか？」

こういう態度も拍車をかけた。あいつは口先だけだ、とは村雲の言。人通りもまばらになる丘の手前に差し掛かり、仁は諦めたように性質の悪い新入りに口を開く。

「どうするも、こうするも、取り敢えず坂城に話してみるしかないだろ」

自分ひとりで決めるには、少し難しい。仁はついさっき聞いたミルフィリアの事情を思い返した。

黒の禁忌。死者操術。

仁の世界でも空想やオカルトの世界でネクロマンサーなんて輩は耳馴染みがある。そういった類。

ミルフィリアの両親は坂城の両親とほぼ時を同じくして、この世を去った。旅客機の墜落事故。彼女は生きる希望を、生きる術を失った。両親にもう一度会いたい。両親に生きていて欲しい。ただその思いでその禁忌に手を染めた。淡々とした彼女の語り口からは、その絶望も苦痛も押し隠されて精確に知ることとは出来なかったけれど、もっと言えば彼女本人にしかそれらを完全に理解することは出来ないだろうけど、時折震える華奢な指先を仁はただじっと見つめていた。

平内涼子。そんな彼女に黒の禁忌を持ちかけた張本人。幸い損傷の少なかった遺体を見てこう甘言を囁いた。

「私なら、アナタの両親を生き返らせることが出来る」

弱った精神状態、どんな形でもいいから両親にただもう一度……ミルフィリアに断る術はなかった。

蘇った両親は、死体だった。意思を持たない、術者に言われた通りに動く物。動物。

彼女を抱きしめることはなかった。彼女に優しい言葉をかけることはなかった。ミリー、と愛称を呼ぶことはなかった。彼女を娘と認識することはなかった。

そこまで言って、彼女は唇をこれでもかと引き結んだ。両手を力一杯握り締めた。その弱弱しい指が折れてしまうんじゃないかと仁は恐る恐るそれを見ていた。

「私が間違っていたんです……」

かける言葉はなかった。

「そして今も私は間違いを繰り返そうとしている」

黒の魔術で呪われた両親を、黒の魔術で解放する。黒魔術師にしか出来ない。それが彼女の望みだった。彼女は言った。

「自分が望んで蘇らせたくせに、自分の知る両親じゃないから殺すんです」

自分勝手なんだろうか。少なくとも彼女はそう思っている。

「涼子は本当に良かれと思ってやってくれたんです。あの子にはもう……」

平内涼子を憎んでいるわけではないと強調した。全ての色に適性を持つ、＜神の子＞とまで称される天才にはわからなかったのと言う。両親の愛情を受けずに育ってしまったあの子にはわからないのだと。そして本当に罪深きは自分だと。そんなことにも気が回せず、ただ自分の幼さと弱さが招いた結果だと。

「だから殺すんです」

彼女は間違いだと言い切った。自分本位に両親の命を弄ぶ行為だと。だから呪いから、禁忌から解き放つと言う、言葉は使ってはいけないのだと彼女は自己暗示しているようだった。

第二章 第六十八話…求められている者

「たっだいも」

もうすっかり慣れてきた奈々華との共同生活の間、自分の部屋に帰って来た仁はもう一人の部屋の主が見当たらないことに気付いた。コタツ、箆笥、冷蔵庫、ベッド…… 意外に広いんだな、なんてつまらない感想が仁の頭の端に浮かぶ。するとコタツの中から主なき羽根の生えた猫が這い出てくる。

「奈々華は？」

「……」

シャルロットの目には明らかな非難の色がある。やぶ睨むようにして仁の顔を見上げている。

「な、何だよ？」

「アンタ…… 奈々華を置いていったろ？」

仁はその言葉を受けて、先程まで街に行っていたことを責められているのだとすぐに分かった。というのもミルフィリアの電話の後、自分も連れて行ってと言った奈々華に事情を説明して学園に残って欲しいと言ったのだった。

「事情は説明したし、あいつもわかってくれたぞ？」

一応は敵対する人物と会いに行くのに奈々華を連れて行くわけにはいかない。奈々華も力なく頷いたが、理解はしてくれただ。決して仁が自分との約束を反故にして遊びに行っているなどとは思っていないはずだ。

「それにしても、もうちょっと言い方ってもんがあるだろ？」

シャルロットは納得がいっていないようだ。言い方？ と、仁は何かまづかったかと思ひ返すが心当たりがないようで顎に手を当てたきり、難しい顔をしている。

「もうちょっと優しくしてやれって言ってるんだよ。このろくでなし！」

そんな様子に苛立ったシャルロットが怒声を吐く。

「優しくしてんだろ？ 今日だってあの子を危険に遭わせない最善策だ」

「女と会うのがか？」

何をそんなに怒られなきやいけないのか、仁は意味がわからない。良かれと思ってやったことが裏目に出ることなどよくあることではあるが…… どう裏目に出たのかわからない。

「あの子は今、大好きなお兄ちゃんと一緒に居られるのが嬉しくてたまらないんだ。アンタの一举手一投足に一喜一憂するんだ。わからないのかい？」

「だから！ 了承は得たって言ってんだろ？」

仁もよくわからないことで怒られているもんだから、徐々に沸点に近づきつつある。

「誰も彼もアンタみたく単純に生きてないってことさ。口で言うことだけが全てなんて本気で思ってるのかい？」

「……」

奈々華の表情を思い出していた。言われずとも快く送り出したとは言いがたいことはとうに理解してはいる。だけど、じゃあどうしろってんだ？ そんな顔をしている。

「わっかんないヤツだね。とにかく！ 優しくしておやりって言うてんだよ！ このろくでなしの甲斐性なしのごく潰しが！」

「俺のことを悪く言うのはやめろ」

コタツの前に座る猫と口論する男。喜劇のような風景ではあったが、兩人ともそんなことに気を取られている場合ではないようで、ただ怒りのこもった目をぶつけ合っている。先にそれを逸らしたのは仁のほうだった。

「……これ以上どうしろってんだよ？ 抱っこして頬ずりでもしろってのか？」

ふんと鼻から息を漏らし、ニヒルに笑う。ふざけてんじゃないよ、と罵声が飛んでくると思っていた仁はいつまで経っても何も言わな

いシャルロットを訝しむ。

「方向としてはそういうことだよ」

終いにはそんなことを言い出すものだから、仁は声を出して笑ってしまった。笑い終わるとそれこそふざけるなど言った表情でシャルロットを睨む。

「アイツは七歳じゃないんだぞ？ 十七だ」

下らないと吐き捨てようとして……

「やってみたのかよ？」

「あ？」

「やってみたのか、って聞いてんだよ!!」

この日一番の怒声。仁は思わず怯んでしまっって一歩、二歩たたらを踏んだ。玄関の石畳がコツコツと鳴った。

「中庭にいるはずだ…… そんな度胸がないなら、手を握ってやるくらいでもいい。とにかくやってみな。自分がいかに馬鹿だったかわかるはずだから」

「……」

「行けって言ってるんだろ！」

声だけで追い払われるように、仁は部屋の中に入ることなく、再び玄関の戸を開けて出て行った。

第二章 第六十九話：馬鹿

自分のことを思っ言ってくれているのはわかっていた。兄としてはそれは正しいのだということも。だからこれは自分の我が侘なのだ。この気持ちは。

これ以上を望むのは今の兄妹の状況では絵に描いた餅。女の人と会いに行くのは嫌だから行かないで。素直にそんなことを言えたらどんなに楽だろうか。

兄として自分を慮ってくれる。それだけじゃ足りない？ やっぱり我が侘だ。

平地よりも幾分寒い風をその身に受け、奈々華はもう少し温かい格好をしてくればよかったと今更ながらに思った。だけれど心の底ではそんなことも本当はどうでもいいと思っっていることもわかっていた。風邪をひいたら、兄は看病してくれるだろうか。それともミリーと呼んだ女性と、或いは坂城と遊んでいるのだろうか。鬱陶しくまとわりつく妹が病気で動けなくなってせいせいするだろうか。だけれど心の底では兄がそんな薄情な人間ではないと思っっていることもわかっていた。どうしても落ち込んで悪いほう悪いほうに考えが行く。

「はあ」

自分の溜息が思ったよりも大きくて、自分で吃驚した。木枯らしが吹きすさぶ中庭で佇むような馬鹿はこの学園に奈々華をおいて他にはいないようで…… 動物達は冬眠に備えているのか、昆虫達は死んでしまったのか。枯れた芝生と幹だけになった木々だけが占めるには中庭は大きすぎる。

「奈々華」

ふと声がした。風にさらわれることなく奈々華の耳に届いたのは、

いつも聞いている、今一番聞きたい声だからか。校舎のほうを振り返った奈々華は笑むことも忘れ、兄の顔をただひたすら見つめた。仁は逆にやや力なく微笑んで、ゆっくりと妹の傍まで歩いて行く。奈々華がしゃがんでいる場所、芝生と校舎から続く岩の床がぶつかり合う継ぎ目まで歩を進めると、そこで立ち止まった。奈々華が見ているのと同じ、中庭の風景を漫然と見た。

「……ミルフィリアと会ってきたよ」

うん、と沈んでいるのか浮かんでいるのかわからない返事。仁はそれに構わず彼女から聞いた話の内容を奈々華に聞かせた。そして最後にこう締める。

「君の安全を最優先にしたから置いて行っただんだ」

「うん」

兄妹揃って何もない中庭を見つめる。乾いた落ち葉がからからと風にさらわれ、遠くでカラスが鳴いた。

「だけど……」

ずっと仁が奈々華の隣に座った。手を伸ばせば届きそうな距離だった。

「もうこういうことはないようにするよ。約束を反故にしてまで行かないやならないようなことは…… ないようにする」

仁はぺたりと地に着いた奈々華の手の平をそっと見た。白く細い指先は鬱血したように赤くかじかんでいた。

「お兄ちゃんは悪くないんだよ。悪いのは……」

そこまで言いかけて、奈々華は自分の右手に覆うようにして温かい人の手が重なるのを感じた。ずっと外気に晒され、すっかり冷え切った指先がそれだけで再び体温を取り戻していく。驚いて指先を見ると、仁が左手をかぶせている。ゴツゴツした逞しい拳がそっと弱々しい自分の手を守っている。

「悪いのは俺だ。俺なんだ」

叱られた子供のように小さな声は少し震えていた。奈々華はそっと右手を開き、仁の左手に絡めた。温かい兄を、手の平一杯に感じる。

今度は仁が驚いたように奈々華に目をやった。望んでやまなかった手を繋いで奈々華は、自分の喜びよりも仁のことを心配している自分に気付いた。気付いてそれを誇りに思った。

「大丈夫だよ。こうして私をまた包んでくれたなら…… 私はいくらでも我慢できる。頑張れる」

「奈々華……」

呼ばれた奈々華はうん、とさっきとは違う優しい声音で答えた。

「俺は何を恐れていたんだろうな。こうして手を繋いでいられるのに…… 怖かったんだ」

「うん」

「君はいつもそうして待っていたんだな」

「うん」

兄は妹の手を、妹は兄の手を。繋いだままずっと、暮れていく空を優しい笑みをたたえたまま見ていた。

第二章 第七十話：竜虎

神妙な顔をして聞いていた坂城は、仁の話が終わってもしばらくは黙ったままだった。たつぷり、唇がとても重いものであるかのよう
に、時間をかけて開いた口から出たのは存外冷静な声だった。

「……それで彼女が出した交換条件とは？」

「フロイラインの情報提供、及び自身の戦闘協力。まあ寝返ってく
れるってことだ…… 本当に履行してくれるなら十分に釣り合うだ
ろうな」

釣り合わなければやらないって意味じゃないけど、と仁が付け足す。
隣に座る奈々華が不服そうに下唇を突き出している。あまり仁の周
りに女性が増えるのは歓迎しにくいところ。奈々華の事情。

「解呪の方法は？」

ぐいと顎を引いて更に真剣な顔を作った坂城が低い声を出す。仁は
目を瞑り、ふうと溜息。

「……何も」

「そうか」

それきり仁は黙考する。方法がわからないのでは手の施しようがな
い。ミルフィリアも申し訳ないと残したが、黒の魔術師自体が希少
極まりないのだから仕方がない。一体どうすれば彼女の両親をその
悲しい呪いから解き放つことが出来るのか。

「ダメもとで書庫を洗ってみよう」

そう言った坂城はすくと立ち上がり、自分の部屋に消え、しばらく
すると戻ってきた。手に金色の鍵が握られている。ホルダーに通さ
れているわけではなく、それ一つだけ。

「書庫って？」

奈々華が小首を傾げる。坂城はふふと含み笑いを返しただけ。

「ついてきてくれ」

学園の一階部分は、正門から向かって正面に食堂、風呂などの学生用の施設が設けられていて、左手にずっと進むと二階に上がれる階段がある。右手はというと、夜勤に当たる守衛用にあてがわれた小部屋があるくらいしか仁は知らなかった。しばらく歩くと案の定、特に目に付くものもないまま突き当たりにぶつかる。しかし突き当たりに青味がかった大きな門がある。青銅だろうか、それともそれに似せた未知の材質だろうか。こんな厳しい扉があるとは仁も奈々華も知らなかった。

「……これが？」

この先に書庫があるのだろうか。坂城は何も言わず、ただ懷にしまっていた先程の鍵を取り出す。門の左手には虎、右手には龍のレリーフが刻まれていた。その両者の手が相ぶつからんとするあたりに鍵穴がある。坂城が右側に鍵を捻ると、ガチャリと音がした。

「さあ、仁。押してみてくれ」

「力仕事は俺なのな」

まあいいけど、と体重を乗せて仁が扉を押し始める。トラックでも押すように全身を使って……ゴゴゴと床を擦りながら扉は奥に向かって開いた。

扉の向こうはすぐに地下へと続く階段になっていて、下は二段先も見えるかどうかという暗さだった。ふと仁は右手に温かい感触がして、奈々華が暗がりの中薄く笑んでいるのが見えた。パチリと音がして、部屋がいきなり明るくなる。どうやら階段の天井に所々くっついた蛍光灯のスイッチを坂城が押したようだとわかって、仁は裏切られたような気持ちになった。

「こういうのって真っ暗闇の中を進んで、キャー怖いとかなるもんじゃないの？」

「……そういうのを期待していたのか？ 意外にムツツリなんだな。死ねばいいのに」

ちらりと仁と奈々華の繋がれた手を見た坂城はそう言うときさくさく一人で先頭を歩き出す。ヒールの踵が石を打つ音に舌打ちが混じっていた。

「ちよつと言い過ぎだろ」

不意に奈々華が仁に抱きつく。坂城を追いかけようと動き出していた腕に絡みつくようにしていた。仁が何とも言えない苦笑を浮かべて自分の肩の辺りにある妹の頭を見る。

「……何やってるの？」

「キヤー怖い」

「……」

坂城が階段を踏み鳴らす音が遠ざかって聞こえなくなる。

第二章 第七十一話：彼等の本

膨大な量の書物が保管されているようで、階段の一番下、いよいよ本題の書庫に入った瞬間、紙とカビが醸成する形容しがたい独特の匂いが鼻腔を満たし、仁も奈々華も一様に眉根を寄せた。やはり入ってすぐの壁に蛍光灯のスイッチがあり、坂城が押すと部屋は白い光に包まれた。壮観。ずらりと縦十列はあろう本棚の側面がこちらを向いており、通路を押し潰さん勢いで向かい合っている。本棚の向こう端は入り口からではよく見えない。その本棚には一片の隙間なく本が詰まっている。

「……しょうがないな。他の方法を探そう」

「しょうがないのは君の頭だ。手分けして目ぼしい書物を拾い上げるぞ」

一歩もその場から動くことなく諦めた仁に容赦のない坂城の返し。

仁は口を半開きにして白目を向いて見せるが全く意味はない。

「本気で言っているのか？」

「……私はミリーを助きたい。彼女が苦しんでいるのなら手を差し伸べてやりたい。私は一人でもやるぞ」

坂城の目に迷いはない。仁からの報告を終始冷静に聞いていた彼女は内心では心を激しく乱されていたのだ。姉のように慕っていた人間が助けを乞うている。おじさんとおばさんが生なき傀儡として今も……

「悪かったよ。ちょっと試みてただけだ。俺も奈々華も手伝うよ」
なあ、と未だ手を握る妹に語りかける。逃げ口上に何の躊躇いもなく妹を巻き込むのだから、坂城としてももう何も言えない。その被害者も笑ってうん！ と元気よく返事をするのだから始末に終えない。兄が一緒なら何でもいいようだ。

「効率が悪いな…… 離れて探したらどうだ？」

そう言う坂城も仁と奈々華がいる書棚の反対側を漁っている。仁の手に取った書物を覗き込むだけの奈々華よりはまだ働いているのだが。三人がかりで一つの通路に面した二つの棚を、反対法案の投票に向かう政治家よろしく、ちまちま探っていくという作業。

「でも、お兄ちゃんが寂しくて死んじゃうって言うから……」

「君はキツネのような顔をして、実はウサギなのか？」

坂城のよくわからない質問に仁が鬱陶しそうに否定を紡ぐ。紡いだところで奈々華が意地悪く笑った。

「あれえ？ 最初に手を繋いできたのはお兄ちゃんの方じゃん？」

それを言われると仁は何も言えなくなる。こんなことならシャルロットの口車になって乗らなければよかったと片頬を膨らます。だけど、奈々華がそれを人差し指で突きながら嬉しそうに笑っているのを見れば、まあいいかという気持ちにもなった。

「……君たち何かあったのか？」

坂城の疑問はもっとも。昨日までとは少し二人の様子は違う。いつも奈々華の顔を窺うように、時折それに疲れたような顔をした仁。いつも仁の顔を窺うように、時折それを悲しんでいるような顔をした奈々華。そんな二人は今日はいない。お互いまだまだぎこちなさはあるようだが、互いが互いをより慈しむような雰囲気があった。

「別に？」

奈々華の声にはどこか優越感と愉悦があった。仁がまた一つ手に取った本の頁に、必要以上に顔を寄せる。ぱらぱらと繰る仁もそれを気にした風でもなく、載ってないねと棚に戻した。まるで一つの絵本を二人で見る小さな子供のように微笑ましい。だが実際は大学生の兄と高校生の妹。少し行き過ぎた仲の良さにも見えて、坂城は僅かに口を尖らせる。

書物の森の二列目に入ったところで、仁がこれだ！ と大きな声を出した。黒い表紙の本を高々と掲げる仁は鬼の首でも取ったよう。

味気なく黒一色で統一されたその本にはく中谷慎二 全集1＞と題うたれている。年甲斐もなくはしゃぐ仁は奈々華を引き連れて、通路を奥に駆けていく。本棚が立ち並ぶその先には閲覧者用に椅子とテーブルが置かれている。坂城も半信半疑それを追いかけて走らされる。

「本当に載っているのか？」

坂城がそのスペースに着いた頃には、既に二人は、やはり仲睦まじく、隣り合って座り、お互いに身を乗り出して本のページをああでもない、こうでもない突ついている。妙な疎外感が胸に去来する。坂城は埃にまみれた対面の椅子の座部を手で払って座ると、自分もまた身を乗り出して二人が見ているものを見ようとする。

「ああ、ばっちりだ！」

親指を突き立て、仁が空いた手で本の上部を持ち坂城の顔の前に突き出す。そこには中谷が実際に使った死者操術の禁忌と、その頃は当然禁忌として指定されていたわけではないが、その解呪の記録が載っているようだった。

三人はそれを時間が経つのも忘れて、時にメモを取り、時に意見を交わしながら読み進める。坂城の顔に久しぶりに笑顔が戻って、仁はそのことにも安堵した。

第二章 第七十二話：天才の宿命

「でもでも、こんなに早く見つけれただから良いことだよ！」
奈々華は精一杯兄を慰めようとしていた。コタツの上には、ガスコンロとそれに乗った土鍋。二人の今晚の食事はおでんのようだ。こんなにやくを取り皿に放りこみながら、仁はそれに力ない笑みを返した。

「あんなところで運を使うから、パチンコが全然当たらないんだろうな」

「……それはちょっと違うかと」

意気揚々と本の内容から解法を探っていくうちに、一つ問題にぶち当たった。

「いやあ、きつとそうだよ。俺の日頃の行いを鑑みるとそれ以外当たりを阻害する要素がない」

奈々華はコレは苦し紛れの軽口だとさすがにわかった。シャルロットが呆れたような顔で仁を見上げている。ちなみにアイシアは何故か仁によく懐いていて、今も彼の腹の上に乗って顔だけ布団から出している。

「そっちの事情はよくわからんが、アンタ達は上手くいったようだね？」

うん、ああと煮え切らない声で仁が流そうとする。

「抱っこしてやったのかい？」

「んなわけねえだろ。手を握っただけだよ」

「何の話？」

それだけで勘の良い奈々華が気付かないわけはないだろうに、彼女にはやりと笑って仁の顔を下から覗き込むようにして見つめる。彼女なりに今まで感じていた寂莫感を晴らしているのか、純粹に仁の困った顔が見たいからなのか。はたまた彼にまた降りかかった問題について一時でも忘れて欲しいからか。

「なんでもないよ……」

「お兄ちゃん、私を抱っこしたいの？」

案外どれも違うのかもしれない。

実は簡単な方法だった。黒の魔術に素養がある者が、ただその術の被害者へ、生者なら死に至であろう傷を負わせれば、それで終わり。禁忌はただちに破られ、元の物言わぬ死体となる。

中谷がサウードの軍勢に対してぶつけたのが、大量の死者たちだった。禁忌を繰り、殉職の後眠りにつくはずだった兵士達を人形として蘇らせ、決して斃れることのない最悪の兵団へと仕立てた。休むことを許されなかった彼らは黙々と術者の命令を遂行し、多くの敵を薙ぎ払った。

戦争が佳境を迎えたとき、彼が忠実なる部下達に与えた褒美は、斬り捨てることだった。狂ったように刀を振るい、肉塊へと彼らに戻していく。肉を裂き、骨を絶ち、刀が折れてなお、噛み付いてその首を引き千切った。手で臓物を引きずり出し、心臓を握り潰した。腐敗した肉を撒き散らして、体液を浴び、彼はそれでもやめなかった。生ある者達はそれを見て、皆一様に嘔吐と恐怖を繰り返したとある。彼が後の世<修羅>と呼ばれ、タブーの魔術師として捉えられる所以。彼を肯定的に評価しているのは世界中で日本だけだという。彼はサウードとの戦いの前、こう言い残した。

「もうすぐだ…… 私はやっと罪を終わらせることが出来る」

この言葉の罪とは、サウードを指しているのか、自分自身を指しているのかはわからない。両方かもしれない。誰にもわからない。

誰も彼もが崩れていく世界で、その悲しみを終わらせるには圧倒的な暴力が必要なのだと。彼を生み出したのは抗えぬ時代の潮流と世界の必然。彼は修羅ではない。天の代理人なのだと仁は思った。綺麗事で救えるほど、世界は優しく出来てはいない。彼は本当は誰よ

り優しい人間だったのではないかと仁は思う。罪とはそのまま、彼の不本意なそれでも必要な業の数々。それをこれ以上重ねる日々がようやく終わることを予期して言ったのだ。そう考える。俺と似ている。そうも思った。勿論彼の苦悩にくらぶれば、自分の一人、二人殺したくらいの苦しみは苦痛たりえないのかもしれないけれど……

「……俺もまた罪を重ねなきゃいけないんだろうか」

奈々華の健やかな寝息を耳に入れながら、仁は一人布団を体に巻きつけていた。そうしていないと、人を殺しておいてのうのうと生きている自分の罪が暗がりから足を、手を絡め取るんじゃないかと思った。

第二章 第七十三話：天和君

簡単なことじゃないか。術者である平内涼子が傍にいて命令をしなれば、相手はろくに反撃してくることもないだろう。居たとしても武術を修めているわけでもなし。殺すことは物理的には簡単だ。物理的には……

「こんなんでしょう？」

仁は翌日の放課後、新聞部の部室に奈々華と二人で来ていた。終業の鐘が鳴るやいなや仁たちの教室にやって来た行方に、校内新聞のわきに載せる連載漫画のアイデアを出してくれと頼まれたのだった。

「どれどれ？」

仁が書いた文章を読むうちに行方の表情はやや引き攣ったものから、怒り、呆れへと目まぐるしく変化していった。

「……アンタ、どこまで馬鹿なら気がすむのよ？」

「ダメか？ てんぼうくん 天和君。良いアイデアだと思うんだが」

仁の考えた話は、人生で五度も天和という役満、麻雀における最高打点のアガリ、を経験しているという五十六歳の主人公、天和君。この豪運オジサンがひたすら麻雀やパチンコ、競馬に明け暮れて、最後には万馬券を当てるまでを描いたサクセスストーリーだ。

「ダメに決まってるでしょ？ 第一天和君って歳でもないし」

行方が出したお題は同年代、即ち小学生は仕方ないにして、中学生から高校生ぐらいが読んで楽しめるもの。

「しかもどこらへんがサクセスしてるの？ お金は手に入れたかも知れないけど、この人この歳で独身の無職って……」

「何言ってるんだ、世の中金が全てだろうが」

平然と言ったのける仁に、行方は不快もあらわ。腕を組んで客を見下ろしている。新聞部も含め、生徒達の部活動にあてがわれる部屋は学園の校舎内にはスペースを置かず、以前はぐれ精霊狩りで訪れ

た裏庭の先にある森を更に奥へと進んだところに、ほぼログハウスの体である。仁の知るものでキャンプ場と言って差し支えない。一つの部活につき一軒家ほどの敷地を有するのはさすがと言うべきか。そういったログハウスが十か十五かある。新聞部の巢は中也広々、聞くところによると行方一人しか部員がおらず、何故存続しているのかと校内でも憶測が飛び交っている、ロッキングチェアに丸テーブル、勉強机と設備も充実。全て丸太を切り出しただけの建物に合わせて木製のものを用意している。

「もういいわ。奈々華ちゃんは……」

行方は奈々華をちゃん付けで呼んだ。自分があまり奈々華に好印象を持たれていないことを自覚しているのだろう。案の定テーブルの近くに座ったきり、会話に参加するでもなく、漫画の案を練るでもなく漫ろにペンをいじっていた奈々華が感情のこもらない目を行方に上げる。

「別にいいんじゃないですか？ 天和君で」

「さっすが俺の妹。話がわかるね、奈々華！」

途端に顔をくしゃつとして笑う。机に座る仁も嬉しそうに相好を崩して答える。そんな二人を見て、行方は諦めたような顔で曖昧な笑みを浮かべる。

「……何ならエッセイでも書いてくれないかしら？」

行方は何の気なしに言ったようだった。それがまずかった。奈々華が急速にその顔から熱を引かせていく。心なしか目も据わっているように見える。まずいな、という目で仁がそれを見ている。

「お兄ちゃんをこれ以上パンダにするって言うんなら、私あなたのこと許しません」

「奈々華」

「新聞の件だって私まだ納得したわけじゃないですから」

静かに吐き出される言葉達にはどうしようもなく棘があり、御しきれない怒りをどうにか御している、いつ爆発してもおかしくないような不安定を感じさせた。兄を傷つける者は例え兄が許しても奈々

華の敵。優しい兄に変わって嫌われ役を買って出るのは、身上であり本望である。やがて行方は顔を緊張させ、仁は困ったように二人を見比べて、何も話さなくなった。どうしようもなく気まずい空気が部屋を支配していく。

「お兄ちゃん、帰ろう？」

何事もなかったかのように笑いかける奈々華に、やれやれといった顔で仁も椅子から立ち上がる。そのまま奈々華は行方には目もくれず、ログハウスの戸を開ける。部屋を出るとき仁が振り返って、申し訳なさそうな顔で口だけ動かして「ごめん」と言った。冷たい空気が室内に吹き込み、行方は思い出したかのように身震いした。

第二章 第七十四話…抗えぬ黒

坂城は今日は教鞭をとることはなかった。もつと言えば本来の彼女の仕事である事務作業、と彼女は言って憚らないが実際は役所へ提出する権利関係に類するものや生徒からの要望等々彼女でしか処理出来ないものなのだが、すらも手につかなかった。予定には彼女が教える授業もあったはずだが、本分がこれでは傍流は言わずもがな。無理矢理社に押し付けて自室でただ漫然と一日を過ごした。部屋に居るのは彼女のほかに、もう一人お目付け役の職務すら忘れて昨日の話を坂城から聞いて深い思考の海へと同じようにして沈む木室がいた。

「……彼はアレを解法と言ったよ」

「……」

「中谷の名を冠する学園の責任者として、私もあの本は読んだ。背筋の凍る思いでな」

「ええ」

木室も一度目を通したことがある。というより有名な本だった。中谷の足跡を辿る唯一の資料と言ってもいい。ちなみに全集とあったが、全二部しかなく、一部は彼の戦場での功績及び非道、二部は彼の手記をまとめたものだ。

「そんなことは書かれちゃいない。私はただおぞましく、狂人が猛り狂って刃を振り乱す様子が描かれているだけにしか読み解けなかった」

＜私＞は全人類と置き換えてもいい。今まで彼のその部分の、即ち死兵を屠るシーンについて明確な説明を見出した人間は誰一人いない。中谷研究の第一人者とされるアメリカの有名な学者ですら、彼はこのとき既に正気を保てていなかったなどと小学生でも思うような見解を示すだけ。

「彼はそれを見て、読んで、すぐに何の迷いもなく、これこそが死

者操術の解法だと言った…… 中谷の真意を読み取った」

そこまで言って、坂城はどうしようもなく、ぶるりと震え、体を抱いた。

「ええ」

「私も最初は解法が分かったと喜んでいたが、彼の手にある本を見て、奈々華と一緒に楽しそうにページを繰る彼を見ているうちに怖くなった…… 彼は、彼らはアレを見ても何も感じなかったんだろうか？」

そこまで言って、坂城は慌ててバツが悪そうに口を閉じた。無理言って従姉妹を助けてもらおうと言うのに、どの口が彼らへ苦言を並べるのか、と。

「……仁さんが示した見解は正しいと思いましたよ。どうしてその考えすら浮かばなかったのかと思ったくらいです」

そんな坂城の揺れる感情の機微に触れることなく、冷静に話す。

「そうだな。私もそう思う」

自分へのさり気ない気遣いを感じ、老練の魔術師、乳母と呼んでもいい気の置けない目付けに心の中で礼を言いながら坂城は同意を重ねた。

「黒の精霊魔術師ですか……」

コツコツとパンプスで床を踏み鳴らしながら、木室はそんな言葉を紡いだ。

奈々華はカレンダーに堂々と赤いペンで丸をつけておきながら、さも今気付いたかのような顔で仁を見上げた。喜色に染まった顔は年齢以上に幼く見える。

「いいの!？」

「……いいも悪いも誕生日だろう？」

仁は仁王立ちのまま、カレンダーに一瞥くれ、自分を見上げるクリクリとした可愛い瞳をもう一度見据えて言う。そう、十一月四

日は奈々華の誕生日だった。

「でもでも、こっちの世界ではだよ？ 向こうは春だし」

仁たちがこちらの世界に来るとき、あちら側は、古風な家の二階からは鯉のぼりが泳いでいるのが見えるような頃合だった。

「構わないよ。俺達は今こっちで生きてるんだしね」

それだけ言うと、奈々華の向かい、コタツ布団を捲って足を突っ込む。背を丸めて少し寂しそうに笑った。

「それに…… この三年、お前の誕生日をちゃんと祝ってやらなかったからな」

奈々華はそれを見てそっと笑った。

「……全部持ってる」

そう答えて、自分のジーンズのポケットから淡いピンクのハンカチを取り出して仁に見せる。二年前の誕生日プレゼント。サンタクロースがするように部屋の前に置かれた包装、開けると中から出てきたもの。仁との距離を感じ、それでも自分の誕生日を覚えてくれたことへの感謝。ポツリと廊下に置かれたそれを拾い上げた虚しさ、それでも自分を思っていてくれる兄の心。悲しさと嬉しさの記憶を辿り、奈々華は今をとっても愛おしく思った。

「……今日は外食にしよう」

仁は決まり悪そうに頬を掻きながらそう言った。

第二章 第七十五話…かわいい人

中谷通りをずっと進んでいくと、大きな三叉路があり、左手に行く
と中谷西、右に行くとは中谷と呼ばれる地域に出るらしい。その分
岐点を更に真っ直ぐ進むと目的の京禮プラザホテルが見えてきた。
京禮電鉄が親会社という五十階建ての高級感漂う巨大な建造物は築
二十年ほど経つらしいが、その年季は逆に貫禄に昇華し、高層ビル
群に負けない堂々とした様で聳えていた。ホテルがある一帯はレン
ガを敷き詰めた歩道に、明治を思わせるようなレトロな街灯が立ち
並ぶやや気取った印象のある都市計画。

「何か場違いじゃない？」

奈々華はキョロキョロと辺りを見回しながら、自分の服装や居ずま
いを正していた。通行人でさえ、高そうなスーツを着た大人が大半
を占める。気にするなと優しく笑んだ仁の顔もやや強張っている。
正面入り口から堂々と入って行くと、ホテルのロビーが二人を迎え
る。荘厳なシャンデリアが天井にぶら下がって黄金色の光を撒き散
らし、大理石の床や壁がそれを反射している。キラキラと金粉でも
ばらまいたよう。ロビーの向こうには食事を提供する店がいくつも
軒を連ねている。高級レストランと言うほどの排他的な印象を受け
ない、かと言って街の定食屋ほどの気軽さはないが、一部のセレブ
以外はおいそれと足を踏み入れることが出来ないと思っていた奈々
華は存外大丈夫かもしれないと胸を撫で下ろした。今日びのこうい
ったホテルは新たな経営戦略として、一般人にも門戸を開いている
ケースも多い。仁は迷うことなく、ロビーの右手に位置する、これ
また装飾過多のエレベーターに近づいていく。奈々華が慌ててそれ
について行った。上三角が付いたボタンを押すと三基あるエレベー
ターの全てのボタンが光り、一番左の扉の上部がピコンと鳴った。

仁が予約を入れた店は和風然とした門構えで、暖簾が掛かった入り

口の傍には簡易なししおどしが置かれている。軽石を敷き詰めた小さな庭園をイメージして作られているようで、本物か偽者かは判断付かないが奈々華の身長に届きそうな竹も数本植えられていた。

引き戸を開けると、紺色のスーツで身を固めた壮年の男性が二人を迎える。お前達のようなガキに振りまく愛想など持ち合わせないと言った無然とした態度で迎えられるんじゃないかと内心どきどきしていた奈々華だったが、そういうことはなかった。

「いらっしやいませ」

男性は微笑をたたえて、折り目正しくお辞儀をする。

「えっと、七時半に予約を入れていた城山なんですが……」

はいと答えた男性は、半分仁たちを向き直ったまま廊下を進んでいく。奈々華にはよくわからないが、床からも木の良い匂いがしたからきつと高級木材だと思った。

座敷に通された奈々華はやはり新しい草の香りを嗅いでいた。上着を脱ぐと、案内をしてくれた男性がすぐさま預かり、ハンガーにかけてくれてまた恐縮する。仁も同じように上着を取られて、すいませんと小さく声をかけていた。

「後ほどまたお伺い致します」

メニューを置いて障子を閉じて男性が見えなくなると、二人はようやく人心地ついた。

「緊張するね」

奈々華は畳の上に足を伸ばそうとして、やはりキョロキョロしてやめた。座布団までも良質な肌触りで少しふわふわした心地になる。

「……客なんだから堂々としてりゃいいんだよ」

そう言った仁が落ち着きなく腕を組んだり、シャツを捲って組みなおしたりしているのを見て、奈々華はおかしくなった。兄のこういうところも好きだった。強がってみせても態度ですぐにわかってしまう。

「何だよ？　笑うなよ」

ごめんごめん、と逃げるようにメニューに目を落として、またクスリと口元を緩める。仁はへそを曲げたのか、少し片頬を膨らます。

「ねえ、お兄ちゃん？」

仁はそっぽを向いてしまっている。頼りない兄だと馬鹿にされいていると思っているのだろうか。だったらそんなことはないよ。心の中でそう呟いて……

「ありがとう」

もつと伝えたい言葉を口にした。

第二章 第七十六話：唯一

俺が悪いんじゃない。悪いのは平内涼子だ……

予防線を張っているんだ。

でもそうじゃないか。元は死人だった人を蘇らせて、命を弄んで……

俺はそれを元に、自然に帰すだけだ。それを望まれているんだ。

俺が悪いんじゃない。罪じゃない。

誕生日プレゼントをどうせなら奈々華に自分で選んでもらおうと、ホテルの近くに立ち並ぶ高級ブティックに入ろうとしたのだが、奈々華は自身の気疲れからか、以前も立ち寄った中谷通りの店に行きたいと言った。仁も断る理由がなく、ただひたすら行きも来た道を引き返していく。午後九時にさしかかろうとする繁華街の大通りは相変わらず祭りでもあるのかというほどの人混み。

「ねえ、無理してない？」

奈々華が雑踏の中でも掻き消えない声で隣を歩く仁を気遣う。

「大丈夫だよ。ちょっと兄妹で行くには洒落すぎてたけど……」

通りに猥雑な雑居ビルが並び始めた。こちらのほうが庶民らしくて、奈々華も仁も口には出さないが緊張がほぐれているようだ。風俗店や消費者金融のデカデカしたネオンを見やりながら仁は自分の横顔に奈々華の視線を感じていた。

「……そうじゃなくて」

ちょうど喫煙スペースを見つけ、仁は奈々華に手で止まれと合図する。懐からタバコの箱を出しながら白いテープで区切られた半径一メートルもない区画へ身を寄せる。スタンド灰皿の前に陣取っていた中年の男性が僅かに眉を寄せて半歩横にずれた。

「そうじゃなくて、黒の禁忌のこと」

婉曲もなく。テープの切れ目に立って、タバコに火を点ける仁を見

つめる。

「……」

仁は白いフィルターを八重歯の辺りで咥えたきり、奈々華から目線を切った。男性が気を遣ったわけではないだろうが、まだ長いタバコを鉄の灰落としの間を潜らせて立ち去っていく。ジュツと短く、水の入った灰皿の中から炎の消える音がした。

「本当は嫌なんじゃない？」

タバコをつまむようにして手に移した仁は、情けなく笑った。

「嫌だよ。いくら死んだ人とは言え、人の形をしたモノを斬るなんてやだよ」

子供みたいに話す仁の顔は、しかし大人だった。受け入れた者の顔。抗うことをやめた者の顔。

「だけど、俺しか出来ないんだから…… 仕方ないだろう？」

奈々華は泣き出しそうな顔を一瞬して、ぽつぽつと空いたスペースに歩んでいく。仁が指でタバコの背をポンと弾く。灰の塊は僅かに吹いていた風に乗って、アスファルトの上を転がっていった。

「前から聞こうと思ってたんだけどさ」

「……」

「どうして他人のために動くの？」

他人。自分とは関係のないもの。どうなってもいいもの。

「……」

「私も他人なの？」

「違う」

仁は反駁した。噛み付いてやっとそれ以上に繋いでやる言葉が追いついていないことに気付いた。

「お前は…… 違う」

身内。自分と深く関わるもの。幸せになって欲しいもの。

「……そう」

両者の違いはひどく不鮮明で、境界は不可視かのように曖昧。仁の場合は。

「誰かと繋がっていたいんだと思う。裏切られても、傷つけられても……」

一人でいた三年間。孤独を胸に未来を描かず、過去に苛まれ、現在をやり過ごす日々。仁がつまんでいたタバコを灰皿に投げ入れる。

「感謝されなくても、疎まれても……」

「じゃあやっぱり私も……」

過去に裏切り、傷つけた奈々華も。言いかけた奈々華を、苦痛を噛み殺すように唇を白い歯で押し潰そうとした奈々華を、仁は腕を引っ張り、無理矢理に抱きしめた。強く強く、崖から落ちかけた者が偶然手にかかった木の幹にしがみつくように。

「……そうじゃないだろ」

耳元で。声と言うより、息を漏らしたような。

「お前はもう俺を裏切らない。傷つけない。愛してくれる。最初から疎んでなんかいなかった」

そうだろ。引きずられるように抱きすくめられていた奈々華が、一歩二歩体勢を整えて、仁の背に腕を回した。奈落へ墜ちる者を救いとめるように。

「うん…… 神に誓って」

アナタと共にいます。誰に恨まれようと、誰に疎まれようと。例えば世界中を敵に回しても。

「お前は、お前だけは違うんだ。ようやくわかったんだ」

やっと繋ぎとめることが出来た。

「俺が他人にするのは単なる自己満足の罪滅ぼしでしかないのかも知れない。何も期待しちゃいない。だけどお前を助けたいと、優しくしてやりたいと思うのは俺の紛れもない本心なんだ」

仮に択一を迫られたら、迷うことなく他人ではなく、この子を助ける。

「その代わり求めるよ……」

それで俺が汚れても、それで俺が苛まれても…… この子が戻してくれる。この子が癒してくれる。何度でも何度でも。

「……うん」

「お前だけは俺の味方であってくれ」

祈るように閉じられた瞼を、奈々華はじっと見つめていた。

第二章 第七十七話…ムーンライト

父は商才に富んだ人だった。男性にしては口数の多いほうで、少し女性らしい面も持っていたと今になって分析している。無類のゴルフ好きで、ミルフィリアにも幼い頃から習わせていたのだが、ちょっとクラブの芯にボールが当たっただけで、やれ天才だ、将来はプロだと無邪気に囃したのをよく覚えている。当時のミルフィリアにはプロだ何だとはよく分かっていなかったが、父が満面の笑みをたたえて、自分の頭を撫でるので必死になって練習した。父が大好きだった。

母はどちらかと言うと、父ほど甘くはなく、叱るべき所はキチンと叱ってミルフィリアを育てた。習い事の稽古をサボった彼女に、父はしょうがないなと肩をすくめるだけだったが、母はいつも烈火の如く叱った。だが、怖いと思ったことはあったが、嫌いだと思ったことはなかった。母は厳しい面ばかりではなく、母親らしい優しい面も同時に持っていた。ミルフィリアに時折アップルパイを焼いてやった。とても甘くて美味しいその味をミルフィリアは今も舌の上に思い出すことが出来る。美味しいと喜ぶと決まって母はミルフィリアの頬に手を添えて、頭の天辺にキスをした。それがとても好きだった。母が大好きだった。

ミルフィリアが七歳になった年、父は知人に借金の保証人を頼まれ、断りきれず請合ってしまった。その年のうちに、高坂家はその財産の半分を失い、生活水準は一気に下がった。知人は雲隠れしてしまふ。その借金を結局全て肩代わりすることになったのだ。父は落ち込んだ。母はそれを必死に慰めていた。アナタが悪いんじゃないわよ、仕方のないことだったのよ。普段父の悪癖を事細かに注意していた母は父の失態を一言も責めず、ただ慰めに言葉を尽くしていた。父の書斎。椅子に座る彼の背を優しく撫でながら、自分にするように頭にキスをしてやる母を見た。ミルフィリアも必死に父を慰めた。

母を氣遣った。子供心に生活が変わったことで両親が自分に申し訳ないと思っていることぐらい分かった。私は何でもないよ。お父様は困っている人を助けただけでしょ？ 私はお父様とお母様が居てくれたら大丈夫だから…… 嘘偽りなど何もない。紛れもない本心だった。ミルフィリアはこの世界一の両親が傍にいてくれたらもう他に何も要らなかった。

父も母も優しくミルフィリアを抱きしめた。柔らかい二人の抱擁を、ミルフィリアは今もその胸に思い出すことが出来る。

「こんばんは」

人の氣配を感じて、ミルフィリアは追憶の彼方から自分を引き戻した。氣配の主は彼女を断罪の俎上に上がらせてくれるかも知れない人物。細い目が特徴的で、近藤との一戦からやや短く整えた黒髪が月光を受けても燦るように光らない。

「いい月だね」

仁も隣人に挨拶するよう。枯れた芝生を踏みしめ、ゆっくりと彼女の立つ場所に近づき、数歩手前で止まった。後ろからついて来た少女に、先に帰ってなさいと振り返らずに言う。少女は数瞬固まっていたが、やがてコクンと首肯して校舎の中へ消えて行った。

「……今日こそ大岩破壊させていただきます」

ミルフィリアはそれだけを告げて、いつか見た全魚人を木の陰から呼び寄せる。ズリユズリユと巨大な芋虫が這うようなおぞましい音質は、月光が映える晩秋の中庭にはいささか不釣合いだった。

「……そうはさせないさ」

仁も特別真剣な面持ちを作った。手元に呼び寄せた村雲と静をちらと見やり、いつもの相棒を鞘から引き抜いた。すぐさま降り注ぐ曇りなき月明かりを受けて、鋭く刃が光る。

ミルフィリアは再び中谷精霊魔術学園に降り立った。
フロイラインが青の幹部、ミルフィリア・A・高坂として……

第二章 第七十八話…青の苦肉

二階から漏れる生徒達の部屋の明かりが遠くぼんやりと輝く中庭に、刀と槍がぶつかり合う金切り声が響いていた。ぶつかり合う切っ先からほのかに火花も散っている。渾身の一撃を、渾身の一撃が受け止める。

「大いなる水の神代。我其の重責を果たさんと、ここに今一度力を求む。水の恩恵を遙か彼方に忘れし不逞の芥を押し潰すその強大をここに示せ！」

ミルフィリアの体が一際大きな青の光に包まれる。それを目の端で捉えていた仁は、一瞬の隙もなくすぐさま横っ飛びに今居た場所を離れる。時間にして一秒にも満たない逡巡、ミルフィリアの突き出した右手が淡く光り、仁が居た場所に巨大な氷柱が突き刺さる。ドライアイスのように白い煙を纏うそれは仁の身長の二倍はあろうか。芝生を抉り、土に食い込んでなおその威力は留まらず、グリグリとドリルのように地中を掘り進んでいく。横顔にぞっとしない冷気を浴びながら、仁は間髪入れずに自分へと猛進してくる全魚人の三叉の突きを刀の腹で受け止める。金属の先に見える能面は笑っているようにも、怒っているようにも見えた。キキキと黒板を引っ掻いたような音を立て、槍の先が刀を下へ滑っていく。

「水よ、我等に生命と叡智を与えたもう大いなる自然の恵みよ。今一度静かなる怒りを、猛威に込めて解き放て！！」

どこかで聞いたことがある。坂城が炎の巨人にお見舞いしたあの大津波だ、と仁は思い出し、あっと言う間に発動の光に包まれたミルフィリアを見た。慌てて数メートル下がり、様子を窺う。また右手を突き出し、数瞬、仁がいた場所に荒ぶる水流が押し寄せる。台風の水かさの増した河を思った。いやそれ以上に澄んでいて轟々としている。仁は再び狼に追いついて立てられる子羊のように横へ横へと逃げる。水は仁のズボンの裾を濡らしながら、校舎の壁にぶつかり、

グワンと戻ってくる。そこでまるで夢のように跡形もなく消え去る。津波とまで行かずとも、部分詠唱だけでこの威力。恐らくは邪道なのだと分かったが、それでも実戦向きである。全魚人の攻撃を一、二受け流している間に本体があればどの短時間であの威力の魔法を打ち込んでくるのだから。

「……さすがは青の幹部ってとこか」

仁は冷えた肝の辺りを撫でながら言う。ミルフィリアは妖艶に笑う。「でも…… 何でこんなまどろっこしいことするんだ？」

小さく呟くように。ミルフィリアに聞こえるかどうかあやしい声量。だが、ミルフィリアは僅かに顔をしかめた。懷から短刀を抜き、勇猛に仁へと駆けた。

素人剣法もいいところ。ブンブンと振り回すだけの短刀は空を切り、時折村雲と対峙してもすぐに力負けして弾かれる。役割を奪われた全魚人も、表情などは作れないが、困惑もあらわに主の錯乱をただ見ているだけだった。鬼気迫る表情で小刀を逆手に持ち、仁の顔目掛けて思い切り突いてくる。表情を強張らせた美人はマネキンのように無機質に見えて、仁は背筋に汗を感じながら刀を水平にしてそれを受けた。今度は渾身の突きが村雲の体に食い込むようにして拮抗する。鏢迫り合いの最中、ミルフィリアがぐっと顔を仁に近づける。

「……いつまで経っても学園を襲撃しない私に、裏切りの容疑がかかっています…… 監視もついています」

少し紅潮した顔で囁く。仁に向き合ったまま、目だけ動かして学園の外に向けた。いかに仁とて、どれだけ離れているかも分からない。まして緑の魔術師ならなおさら、人の気配を気取るのは不可能だ。

「なるほどね…… にしてももう少し上手くやらないと、手加減してんのがバレるぜ？」

淡々と返した仁も囁き声。

「それはアナタも同じでしょう？」

そう、武芸の素人であるミルフィリアが接近戦に持ち込んだ時点で仁は彼女を容易く斬り伏せることが出来た。そうしなかったのは、彼女の魔法の発動、精霊の攻撃、先のやりとりで手加減をされている、もつと言えは殺意を感じなかったから。

「ここからは上手くやって、この場はやりすごして下さい」

その言葉を合図に、仁は刀を臂力に任せて横薙ぎに思い切り振った。ミルフィリアが小刀を弾き飛ばされ、自身も衝撃に尻餅をついた。その脳天目掛けて刀を振り下ろす。

ザシュッ！

全魚人の体が脳天から真っ二つに裂けていく。血潮が間断なく芝に降り、茶を赤に濡らし、仁の顔を濡らし、庇い立てた主の顔を濡らしていく。踏み込んだ右足のジーンズが青から赤に変わり行くのをじっと見つめていた仁は、ミルフィリアが立ち上がり、距離を取るのを待っていた。

その時だった。

「やめろ！！ 仁！！」

弾かれるように第三者の声に振り返った仁とミルフィリアは、中門から飛び出してくる坂城の顔を捉えた。

第二章 第七十九話…他者

血の気の引いた顔で、仁の横をすり抜けると、坂城は地面に倒れこんだままの姉と慕う少女の傍まで駆け寄った。その体に縋るように抱きつき、首だけを仁に向けた。キッと睨むような双眸に、敵意と覚悟を見たような気がした。

「……やめろ仁。やめてくれ」

ミルフィリアは未だ目の前の事態が信じられないと言った風で、元々大きな目を更に大きく見開いたまま坂城を見ていた。

「これ以上やったら、姉様が死んでしまう……」

そこまで言って、自分の死という単語に、表情を曇らせた。仁の顔からは完全に表情がなくなっていた。ただ黙って殉死した全魚人の体を乱暴に引っつかみ、自分の背後に押しやった。

「姉様も…… これ以上戦う意味はありません」

そう言った坂城は既に仁から目を切り、自分の腕の中で固まっているミルフィリアの目を泣き出しそうな顔で見つめていた。体だけなら坂城の方がミルフィリアよりも大きい。姉様という言葉がなければ、姉が傷ついた妹を労わっているように見える。坂城はスカートのポケットからハンカチを取り出し、姉の顔にかかった下僕の血を丁寧にふき取り始めた。

「仁が、解呪の方法を見つけたのです！ これで…… これで」

そこまで早口に捲くし立てて、坂城は辛抱たまらず、泣き出した。赤く染まったハンカチを持つ手がプルプルと震える。仁が泣き声に遮られるのをわかっているような声量で、何事か呟いた。

「やれやれ…… とんだ邪魔が入りましたね」

やっと頭の回転が事態に追いついたミルフィリアの声は責めるようなトーンではなかった。しょうがありませんね、と足す声には現に可愛い妹を気遣うような気配があった。

「本当は精霊を一体仁さんに討たせて、それで今日は撤退というシ

ナリオだったのですが……」

チラリと学園の外、鉄門の向こうを見た。坂城はそれを泣き声の合間に聞き及び、ようやく自分が余計なことをしたのだと気付いたように、潤んで揺れる瞳を姉の顔に向ける。しかし彼女に非があると、仁の様相は恐ろしかった。敵の僕の血を顔中に浴びてなお、その眼光は鋭く光り、ミルフィリアを捉えていた。

「仕方ありません…… もう私には時間がありません。仁さん」

坂城の肩を両手で包むように掴み、優しく退けたミルフィリアは仁に真剣な顔を見せる。すつくと力強く立ち上がると、その表情のまま言った。彼女の企みが、両親を呪いから解き放つために敵と通じていたことがバレた今、確かに時間はない。彼女の両親を彼女が知らない場所へ送られては手の施しようがない。

「ついて来てください」

それだけを言い残し、ミルフィリアは学園の外、彼女の監視が居たのだろうか、鉄門へ向かって勢いよく走り出す。仁もそれを追おうとして…… 坂城が自分の上着の袖を引っつかんでいるのに気付いた。泣いていたせいだろうか、それとも彼に触れるのが、いつも冗談を交し合う彼に触れるのが怖いのか。彼女の手は微かに震えていた。

「すまない……」

俯けた顔で消え入るような声で。仁はゆっくりと腕を持ち上げ、ひっかかっていた彼女の手を解いた。

「……気にしちゃいないさ。行ってくる」

仁の目は既に坂城を捉えておらず、走り去ろうとするミルフィリアの背に集中していた。幾ばくかの沈黙の後、仁は駆け出して行った。

坂城は自分のすすり泣く声の間隙を縫うように耳に入ってきた声を聞いていた。ひどく冷たい男声。

「俺が信じられないのか……」

第二章 第八十話…うごめく死体

学園がある丘の西側に下ると、中谷の街があるのだが、東側には何があるのか仁は知らなかった。中谷の街に劣らず建造物が並ぶ街並みだが、それらは全て住宅のようだった。一軒一軒がとても広大な敷地を有しており、建物自体も新しく小奇麗。どうやら高級住宅街のようだと、仁は頭の幾らか柔らかい部分で思った。ミルフィリアは走り通してなおその足を緩めない。

「ちよっと待ってくれよ」

息も絶え絶え、前に行く彼女に仁は弱々しい声をぶつける。

「状況がわかっているのですか？ 先にも申しましたように私にはあまり時間がないのです」

一向に足を緩める気配もなく、どころか振り返ることもせず、切る風に独り言を言うようだ。趣味の悪い、線対称に建ったコンクリートの家を過ぎ去り、曲がり角に差し掛かる。迷うことなく右に折れたミルフィリアの横顔が一瞬見えた。焦燥に満ちていた。仁もその後を追う。

「俺がどんだけタバコで肺をやられてると思ってんだよ？」

「知りませんよ。やめればいいでしょう？」

ミルフィリアは冷たく言い放ち、その歩を緩めた。休憩を取ってくれるのかと安堵しかけた仁は、彼女の爪先が向く場所を見て、息を呑んだ。

豪邸、他の家々とくらべても目劣りすることのない豪邸。しかしその周囲にはモヤのように水蒸気が巻いていて、輪郭をひどく曖昧にしていた。黒を基調としたゴシックな作りの洋館。庭を囲う黒い鉄柵にはバラの蔦が絡み付いていて、所々鮮血のような花卉もあった。庭にはよく手入れされたモミの木が十や二十を下らない数で林の体。「魔女の屋敷だな……」

そんな言葉が仁の口をついて出た。ミルフィリアはそれに気を取られることもなく、悠然と庭に足を踏み入れる。勝手に入っているのか？ と声をかけそうになって、恐らくはコレが彼女の生家なのだと仁は口を噤んだ。

「この家は魔術で、結界とでも言いましょうか…… 一般人には空き地に見えるようにしています。程度の低い魔術師にも見えないでしょうね」

それで制約の印を受けた坂城にもなくなっていたように見えたのだろう。少し思案した仁を置き去りに、カツカツと歩を進めるミルフィリア。庭を縦断する石畳も黒々としていて、仁は先を歩む彼女を追うのを少し躊躇った。

「……」

やがて庭を過ぎ、材質も遠目では分からないほどに霧が濃いのだが、大きな黒い門扉の前でミルフィリアは立ち止まった。

家の中も高そうな調度品が並び、赤いビロードの絨毯を敷かれた床に合うように、壁紙も全て赤に統一されていた。黒い館の中は染まるような赤。ケルベロスの胃の中にも入ったように、仁は背筋が冷たくなるのを感じていた。先を歩くミルフィリアはさっきから一言も話さない。数メートル置きに灯る燭台がものもののしさに拍車をかけていた。やがて五分も歩くと、家の居間にくのだらう扉が二人の前に立ちはだかった。ミルフィリアはやはり何も言わず、真鍮のドアノブを捻った。

マネキン人形。そんな言葉しか仁の頭には浮かばなかった。それしか形容する言葉はなかった。虚ろな瞳、光のない目で居間を忙しく動き回る女性。長い黒髪をした彫りの深い顔立ちの女性。ミルフィリアの母親だとしたら、四十は下らない筈だが、二十代と言っても疑問を持たないかもしれない。恐ろしく感情のない顔でキツチン

とダイニングを行き来している。仁は顔から下に目を向けて、はっと息を飲んだ。右腕がない。ばっさりと。白いワンピースの右袖から伸びた腕は脇から数センチもないところで途切れている。腕の断面が見えた。皮膚が覆うでもなく、血が噴き出ているでもなく、ただ抉れた皮膚から赤黒い体の組織が見えていた。女性が夢遊病患者のような覚束ない足取りで向かった先でまた仁は息が詰まるような思いをした。顔を痛々しい火傷に爛れさせた男性。ソファアの上で微動だにしない男性は生きているとは思えない。緑のポロシャツから覗く胸元には生々しい傷があった。何かで引っ搔いたような、それだけで致命傷になりかねない縦に走る大きな傷。やはり傷の断面が負ったときのまま、噴出す血だけがなくなったように。

仁は二人の姿を一通り見て、隣で立ち尽くすミルフィリアの体が震えているのによく気付いた。固く引き結んだ体を、顔をそれでも悲しみにうち震わせているのだ。

「……」

彼女が見つめる先を追った。変わり果てた両親の目を見ているようだ。生気のかけらもない目を。一向にぶつからない視線。二人は自分の娘をわからないのだ。もっと言うとも何も感じず、何も考えず、何を聞くこともなく、何を見ることもないのだ。

「……これが私の罪です」

仁はかける言葉をダイニングキッチンの中に探した。たっぷり三十畳はあろう広い部屋にあるのは、生活家具と意思のない人形のような彼女の両親だけだった。

第二章 第八十一話…罪を塗った刀

「私なら、アナタのパパとママを生き返らせれるよ？」

屈託なく笑った少女の顔が脳裏に浮かんだ。やめて。私は大丈夫だから。そう言えたらこんなことにはならなかった。泣き腫らした目に、彼女は天使のように映った。

「お願い！ 私に出来ることなら何でもするから！」

こんな冒涇のような形で生き返る、本当に生き返っているのかもわからない父様と母様を見るくらいなら。最初からわかっていたなら…… 果たして私は断つだろうか。ただもう一度二人が生きているのを、動いているのを…… 見たいと思っただんじやないだろうか。自分本位で愚かな私はわかっていて、同じ罪を犯したはずだ。

仁が刀を抜いた。揺れる蝋燭の灯が刀身に映え、仁の顔をも映していた。マネキン人形のように感情の見えない顔。ミルフィリアが隣で唾を飲む音が聞こえた。一步、二歩。彼女の母親の目の間に立つ。仁はその瞳を覗き込むようにした。自分を捉えない。刀を持った闖入者を見ることはない。仁は急に虚しくなった。ああ、本当にコレは死体なんだ。屍が摂理に反して動いているだけなんだ。動物ではない。

「彼らを斬るよ」

ミルフィリアに言った言葉。背後からは何の反応もなかった。無駄と知りながら、もう一度女性の瞳を見た。どこを見ているのかもわからない瞳のまま、カツカツと仁に歩み寄る。正確にはそうではなく、ただ与えられた生活のルーティンの軌道上に仁がいるだけ。ミルフィリアの両親に与えられた命令はただ一つ、生前の生活をしろ…… ぶつかったら止まるのだろうか。肩に手を当て、押し返せば止まるのだろうか。止まったらどうなるのだろうか。仁は小さく頭

を振った。首を見据えた。浅黒い、血の気の一片も見えない人の形をした首。すっと刀を肩の上まで持ち上げた仁は、その場で器用に勢いをつけて……首に刀をめり込ませた。

粘土の中に指を突っ込んだような、手ごたえのない感触。ぐずぐずと沈んでいく刀。全く変わらない顔色、表情、虚ろな目。痛みも恐怖も感じない、動く死体。不意に仁は刀を持つ自分の右手に痛みを感じた。左手の指が食い込んでいる。爪を立て、抉るように皮膚を破っている。指の先から血が滴っている。腕が震えていて、それを止めるために指を突き立てたんだっけ。ぼんやりと思考の後を追って確かにそう考えたことを思い出した。女性が、急に糸の切れた操り人形のように、全身の力が抜け、ドサリと仁の体にその体がかぶさる。だらりと垂れ下がった左腕が振り子のように前後に揺れ、感情のない瞳と表情は変わらず。本当にこれで死んでしまったのか。呪いは解けたのか。彼女の外貌からはわからない。だけれど……仁はコレで終わったのだと思った。知っている。黒川もこうなった。首を貫かれ、鮮血を撒き散らしながら、仁の体に倒れこむ体。これで人は死ぬんだ。

縦に走った傷、彼を死なせてはくれなかった傷を、なぞっているのだろうか。水平の引っ掻き傷の上に垂直の刀傷を落とすのだ。ズブズブと底のない沼に片足を突っ込むように、皮膚を抉り進む刀身は鏡のように冷たい。左腕で刺した。豆腐のように柔らかい、きつと筋肉もほとんど落ちていいるのだろう、肉を断つには片手で事足りた。左腕も震えたら、今度は右手で抉ってやろう。そう思った。震えなかった。代わりに奥歯がギリリと鳴って、歯を食いしばっていることに初めて気付いた。男性は落ち窪んだ瞳を鈍く仁に向けた。きっと本来なら女性が近づいてくるタイミングなのだろう。そしてガクンと首を落として、動かなくなった。ゼンマイの力が消えたオモチ

ヤのように沈黙する。知っている。近藤もこうなった。心臓を貫かれ、急に事切れて死ぬんだ。これで人は死ぬんだ。

「……終わったのですか？」

女性を男性の隣に座らせながら、仁はミルフィリアの震える声を聞いていた。わずかに仁の首が縦に揺れたように見えた。部屋の入り口で立ち尽くしていたミルフィリアが一步、また一步と両親の亡骸に近づく。仁の隣まで来て止まる。左腕が小刻みに震えているのを、仁は俯いたままの瞳で流し目に確認した。父様、母様、と短く喉が震えた。

「辛いときは泣いたほうがいい」

欺瞞のような言葉が仁の口を動かした。

「……私に涙を流す資格があるでしょうか？」

「独善的でもいいんじゃないか？」

仁の返答は何でもよかったのかもしれない。ミルフィリアは弾かれたように体を横に向けると、仁に抱きついて大声を上げ始めた。屋敷中に響き渡る慟哭を耳に、両親を即物的な意味で殺した相手に抱きついて泣きじゃくる少女を、仁は羽虫でも見るような目で見下ろしていた。

第二章 第八十二話：愛憎と偽善

お互いの顔がよく見えるように、対面のソファ―に泣きつかれたミルフィリアを寝かせた。苦悶の表情のまま、涙の跡が残る頬。赤くなった目、鼻の下。あどけなくも、誘惑しているように見えた。

その姿に急に劣情を催した。次いで黒い感情が自分の胸の内を支配していくのを、仁は感じていた。自分がこれほどに虚しさを抱えているのに、あいつはカタルシスでも終わったように安らかに眠っている。何だって俺が、俺だけがこんなやりきれなさを胸に一人夜を明かさねばならないんだ。ミルフィリアの起伏する胸を見た。坂城よりも幾分小さいが、それでもそれは確かに女を感じさせた。そうさ、今なら寝ている。仮に起きたとしても、彼女は俺に借りを感じている。きつと抵抗はしないだろう。抵抗された所で、大声を出された所で、こんな打ち捨てられた廃墟の中で誰が助けに来ると言うんだ。滅茶苦茶にしてやる。両親が安らかな天への旅路を辿る日に、その亡骸の前でお前は痴態を、背徳を晒すんだ。息が詰まるほどの情欲は、仁の呼吸を荒くさせ、視界を熱病のように鮮明にした。ただ女の胸と下半身を見つめて、前戯のように視姦する。指先が眠る少女の無垢な胸に触れた。柔らかい、男には、俺にはない温もり。むせ返りそうに喉が、胸が焼けた。

奈々華の顔が脳裏に浮かんだ。

急速に黒い感情が、下衆な本能が、胸から立ち消えるのを感じた。腕をすつと引くと、仁は村雲をもう一度抜き放ち、部屋を早足で歩いて、壁に左手をつけ狂ったように勢いをつけた右手でその甲を刺した。刀の切っ先が骨を抉り、神経に到達したとき、初めて仁は顔を引き攣らせ、呻き声を上げた。左の手首を押さえ、取り落とした村雲がフローリングの上を滑っていく。

俺は取り返しのつかないことをしようとしていた。彼女の両親の前で、彼女の弱みにつけこんで。虚ろな目のまま寄り添う二人に、どうしようもなく罪悪感が湧いた。

「俺は……俺は……」

ふらふらと体が揺れる度、左手から垂れる血が床板を濡らした。奈々華をも裏切ろうとした。彼女を信じると決めた、彼女のために剣を振るうと決めた自分自身さえ裏切ろうとした。彼女が守ってくれるのは、汚れても、壊れても、直そうとする俺。癒して欲しいと思ったのは、見返りを求めず、傷を負ってでも、それでも優しくあろうと、正しくあろうと決めた自分。村雲を探した。こんな背信しか浮かばない両手なら、いっそ斬り落とさなければ……足がもつれたのを感じて、次いで横顔に強烈な衝撃を受けた。こけたんだ、と安心した自分。怖いんだ。人をいくらも殺めた自分は両腕を斬りおとすことさえ。そう思った時、仁は声にならない声を漏らし、床に横顔をつけたままむせび泣いた。

ミルフィリアの体を背負い、上着を取り忘れたのに気付いた。さっき触った胸の感触をなるべく思い起こさないように、上着を探した。居間の入り口近くに無造作に投げられている。それを掴んで、ミルフィリアを置いて、羽織ろうとして……二つの寄り添う死体を見た。

そつと着古したオーバーオールを、二人の間にかけた。許されない慈悲だと、あざとく醜い罪滅ぼしだと、心のどこかが呟いた。

「それでも……」

この屋敷は寒い。二人で夜を明かすには、彼と彼女は薄着過ぎた。さらに二人はここから黄泉の国に旅立つんだ。あちらも寒いかもしれない。川べりを吹く冷たい向かい風をせめて少しでも切ってくれたら……暖かいなら打ち捨ててくれればいい。そして最後には……

「俺なんかが着た、薄汚れたそれでも……」
六文くらいの価値があればいい。

第二章 第八十三話：弱者

竹林が広がる山の東側の斜面をゆっくりと登っていく。背中の温もりが、おこがましくも自分と世界を繋ぐ唯一の架け橋のように感じていた。すだれのような竹の幹の合い間に、先刻より幾分雲が覆う朧月が見えた。腕時計をちらりと見ると銀色の短針は午前二時を指していた。斜面を登るごと強くなる寒風は長袖の上からでも仁の肌を刺していた。

「……う、うん？」

首のすぐ後ろでした声を仁は振り返らない。起きたかと、存外冷静な声で自分でも吃驚していた。

「ここは？」

「学園に帰っているんだよ」

ミルフィリアはその返答を少し噛み砕いていて、数瞬の後、声を上げた。

「父様と母様は！？」

「……悪いが置いてきた。今日は一旦帰ろう？」

背後から声がしなくなった。戻れと怒られるだろうか、仁は半ば身構えた。

「そうですね……」

いつもの冷静な声と判断。けれどもいつもよりも多分に沈んでいた。弱さをおくびにも出さない彼女がこれほど素直に弱みを見せているのが、仁には信じがたかった。涙を見せて、沈んだ声を出して、まるで……

「傷を舐めて欲しいんだと思います」

一瞬仁の足が止まった。思考を先読みしたかのように紡がれた言葉はしかし唐突だった。

「誰かに傍にいて欲しいんだと思います。両親の亡骸だけが眠るあの場所に居たくないんです」

「……やめろよ」

「勝手に蘇らせて、勝手に戻して…… 私はその鎮魂すら怖がって……」

「やめろってば」

「どうして私を助けたんですか？ あのまま死なせてくれたら良かったのに」

仁はその言葉を聞いて、心臓を鷲掴みにされたように固まった。

「私の身に刻まれた黒の呪い。裏切りの報告を受けた涼子が発動させたはずなのに…… アナタが解いたのでしょうか？」

仁はそっと胸を撫で下ろした。違うことを言っている。どうやら彼女のあの憔悴ぶりは、彼女の両親を秘匿されることなく、自分の死期が迫っていることを理解してのものだったらしい。そしてそれを解呪したのは……

「……」

「傷舐めあうは弱者の性」

うわ言のように仁が呟いた。ミルフィリアが背後で訝しんでいるのを背中を感じる。

「されど…… 傷癒えた時、弱者は二人で立ち上がる」

「何ですか？」

「俺が昔好きだった小説の主人公が言ってた言葉」

アスファルトの上に、小さな水溜りがあった。いつの間に降っていたのだろうか、或いは幾日も前に降ったものがこの湿気の多い林道では蒸発しなかったのだろうか。仁はそれをピョンと飛び越えて、ミルフィリアはゴツンと顔を仁の肩にぶつけた。

「痛いですね……」

「舐めてやろうか？」

バシッと背中を叩かれた仁は、小さく笑った。どこか翳のある笑み。それを吹き飛ばすようにもう一つ快活に笑った。からかわれたと思ったミルフィリアは子供のように頬を膨らませた。

「……俺には何もわからないから、素人の当てずっぽうな？」

「何がですか？」

「君の両親はそれでも君に生きていて欲しいんじゃないかな？」

「……」

はっと息を飲む音。ミルフィリアはその後、静かになった。仁は今度こそ優しい、父親のような顔をして背中を貸していた。

「両親の夢を見ていました」

まだ声には湿気がある。ズズツと鼻をすする音も聞こえた。

「父は優しい人でした。甘やかしすぎだとも思いますけどね」
最後は笑いながら言った。

「うん」

「母は厳しい人でした。父が甘やかす分、きちっと私に物事の道理を教えてくれました」

「うん」

「目が覚めた時、父に背負われているのかと思いました」

「俺が？」

仁もふと笑みを零した。

「……昔よくこうしてオンブされてました」

「そうか」

また水溜り。ほら、飛ぶぞと仁。ミルフィリアは顔を背中から離して無邪気に笑っていた。

「親とは偉大なものですね？」

「だから当てずっぽうだってば」

仁は何だか知らないうちに走り出していた。

「私もそう思えました…… エゴイストですね」

「そうだな」

それでもいいじゃないか。笑っていられるなら。罪に向き合う時はいずれ訪れるのだから。それまでは楽しく過ごす権利くらいあってもいいじゃないか。

第二章 雪解ける兄妹と青の苦悩 了

第二章 第八十三話：弱者（後書き）

まことに勝手ながら、少し筆を休めたいと思います。
次回更新は十二月になってからだと思います。
ご了承ください。

第三章 第八十四話…予定調和

第三章…贖罪のゆくえと白の祈り

今日は朝から雨だった。治水の行き届いたこの地域には恵みにもならない水滴が、鈍い灰色の空から間断なく降り注いでいた。アスファルトの端をいくつもの細い筋が用水路へと流れ込み、奈々華がそれを子供のように踏み鳴らしながら歩いている。

「お前、雨好きだったっけ？」

後ろを歩く仁は黒い傘を少し上げて奈々華を見ている。電車で行こうと言った仁に、奈々華は徒歩を所望した。本中谷までは片道五キロ以上あるが、楽をすることに内心気後れしていた仁はそれに従った。遊びに行くわけでもないし、急ぐわけでもない。奈々華を気遣って言ったただけだった。

「ううん、別に」

言葉とは裏腹に、くるくる赤い傘を回す奈々華は楽しそう。いつか来た京禮ホテルを過ぎ去り、三十分も歩くとあたりは都会の喧騒を忘れていた。商業用のビルは一つとして見当たらず、ポツポツと住宅があるだけ。仁と奈々華はしばらく黙って道を歩いた。

顎と肩で傘を挟むと、仁は上着のポケットから取り出した一枚の紙を丁寧に引き伸ばした。クシャクシャに丸められたそれは、ミルフィリアの手書きの地図。目を細めて睨めっこする仁は、先に行く奈々華に声をかけた。

「ここらへんにモニュメントがあるはずなんだけど……」
目印にモニュメントとある。そこを過ぎれば目的地まで一キロ近い。

「あれじゃない？」

奈々華が前方を指差す。その先には彫像のようなものが見える。石を削った不恰好な三日月。アシンメトリーには程遠く、前のめりになったように、台座にちょこんとお尻の先っちょだけが乗っている。近づいて確認すると、三日月の上半分には顔が彫られている。白目だけあり、鼻はなく、唇は妙に分厚く半笑い。

「何かイラッとする顔だな」

「趣味悪いね」

兄妹には不評。台座にはくこーヨー・ヒノ>とローマ字。その上の説明文を読むに、大戦以前に作られたものらしい。戦禍を免れたことで有り難がられ、小奇麗に管理されているようだ。

学園ほどではないものの、丘は見上げるほどの高さで、表面は緑に覆われていた。常緑樹が多く植えられているのだろうか。鬱蒼とした木々が覆い被さるようにしながら、麓の入り口から頂上まで続くであろう石段が見えた。どこか秘境へと続くようで、奈々華も仁もそのもののしさに少し足が竦む思いだった。

「……俺にお参りする資格があるだろうか？」

苔むした階段を上りながら、仁は足音や雨音が掻き消してしまえばいいという声量で言った。ぬかるんだ石段は、足を置く度ピチャピチャと音を立てていた。

「ここまで来ておいて、今更？」

目的地の<不退寺>はこの石段を上りできれば、麓の立て看板には煩惱の数と同じだけあるそうだ、すぐそこだ。そうだね、と小さく仁それきり二人は黙々と石段を上った。伸びた枝を鬱陶しそうに避けながら前を歩く奈々華を、仁はぼんやり見つめていた。

丘の中腹あたりに差し掛かったとき、奈々華が突然足を止めた。くると振り返る。気遣わしげに眉を寄せたその顔を、仁はやはりぼんやりと見ていた。

「……二人もきつとお兄ちゃんに感謝していると思うよ？」

「そうだろうか」

「ミルフィリアさんもそう思うから呼んだんじゃないかな？」

すり足のように慎重に奈々華が石段を一步、二歩下りる。仁の一段上で止まると、じっと兄の顔を見つめた。仁はそつとその視線を逸らし、奈々華のお腹のあたりに泳がせた。妹にはその姿がとても弱々しく見えた。思わず抱きしめたくなるほど……

「そうだよ、お兄ちゃんは感謝されるようなことをしたんだよ」

「そうだろうか」

奈々華がすつと空いたほうの手を伸ばして、仁の頬を撫でる。

「もし仮に恨まれているとして…… 私はお兄ちゃんの味方なんだから」

そう言ったでしょう？ と。それでいいでしょう？ と。奈々華は優しく笑った。

「そうだね…… そうだったね。言ってみただけだよ」

ふいと顔を上げた仁はもういつもの仁だった。母親に甘えた子供のように少しはにかんでいるけれど。そつと奈々華が自分の顔を仁の横顔に近づけた。そうして耳元で囁く。

「甘えんぼ」

奈々華の息遣いを感じられて、仁はこそばゆそうに身を振った。

第三章 第八十五話：暗闇とやぶへび

いつからそうしているのだろうか。

ミルフィリアは新しく出来た墓の前で座して祈りを捧げている。墓がまばらに点在する墓地には、彼女以外に人はいない。丁度学園に向かい合っている墓地はかなり地価が高いらしく、見ると全部で十にも満たない墓石。近くに中谷慎二の墓標もあるらしく、そこに更に付加価値を与えているようだ。

土には雨が染み込み、墓石もずぶぬれたネズミのように濃い灰色。暗色ばかりの景色に黒いスーツを着た少女。傘を肩にかけて、目を閉じる姿は墓場の雰囲気と溶け合っているようにも見えてくる。何を語りかけているのだろうか。

両親の墓の前。彼女が罪を負ったと、それでも、今はのちまで愛されているのだから。そう思った、そう信じた両親の墓の前。謝っているのだろうか。尽きせぬ懺悔をとつとつと。感謝しているのだろうか。余すことなく愛を注いでくれたことを。こうして生きていてもいいと、そう思えるきつかけすら与えてくれたことを。彼女の前には、ただ黒い墓石と、脇に備えられた菊の花が、それを濡らす慈雨を吸い込んで重たそうに首を垂れているだけだった。

階段を登り終えた二人はその姿を見て声をかけずにいた。何となく、彼女が気付くまで待とうと、示し合わせたわけでもないのに、そうしていた。ミルフィリアはやがて、ふと目を開けると、二人のほうに向き直って薄く笑いかけた。

「どうしたのですか？ そんなところで突っ立ってないで」
手招きする。

「両親に挨拶してください」
仁がそうだと小さく返して、歩み寄っていく。奈々華は遠慮がちにそれについていった。ミルフィリアが脇にどいて、兄妹は揃って墓前にしゃがみこんだ。合掌する仁に倣うようにして奈々華もそう

した。

葬儀にも立ち会わず、墓が出来た頃にやってきて、手を合わせていく自分を彼と彼女は思うだろうか。仁は手の甲に、指が食い込んでいくのを感じていた。暗闇の中で二人の最期を思い出す。濁った硝子玉を二つはめ込んだような虚ろな目。罪人を無言のうちに責めていたんじゃないか。刀にまわりつくような肉の感触。がんにがらめに自分を縛る罪の意識を、これからを暗示していたんじゃないだろうか。死体に手をかけるような非道を、手塩にかけた娘をオモチャにしようとした非情を、それらを忘れたように振りまく偽善を…… 彼らは同じような暗闇から自分を見ているんじゃないだろうか。暗い地中から、黄泉の国からその罪深い所業を……

「お兄ちゃん？」

奈々華の声に、仁は急速に現実へと、光の届く場所へと揺り戻された。雨とは違う水滴が、じっとりとした脂汗が仁の背をつたっていた。

「……ああ」

揺り戻してくれるのはこの子だ。あの時もそうだった。この子が居なければ仁はどうに狂っていたかもしれない。奈々華の顔をずっと見つめていると、最初は困ったように眉根を寄せて、訝って口をぽかんとさせ、終いには頬を染めてはにかんでいる。そんな全てが仁の正気を保たせているらしかった。仁と世界を繋いでいるのだった。

「あの…… この子が？」

ミルフィリアが困ったような声を出した。彼女と奈々華はこうして直で顔を合わせるのは初めてのことだった。暗に紹介を促しているのだ。

「そうだ。この子は俺の妹で、奈々華」

仁は次いで奈々華にミルフィリアを紹介する。と言っても二人とも仁を介して互いに話には聞いている。自分が守りたい者、と言った

奈々華。困っている少女、助けを求めている少女、坂城の従姉妹、ミルフィリア。しかし両者ともしばらく握手も交わさず睨みあうようにしていた。先に口を開いたのはミルフィリアのほう。

「なるほど、大切にしたいくなるのも分かります。とても可愛らしい妹さんですね?」

言葉ほどに口元は緩やかではなくて。

「いえいえ。ミルフィリアさんこそ、お兄ちゃんが力になりたがる程に美人さんですね?」

奈々華に至っては怒気に近いものを目に宿している。

「仲良くしろよ……」

口の中だけで言った仁の言葉はしかし、両者の耳に届いており、すぐさまきつと睨まれる。怒りの矛先を向けられた仁はたまらず二歩、三歩後ずさった。

第三章 第八十六話…それぞれの思惑

ミルフィリアが奈々華と話がしたいと言うので、仁は逃げるように墓場から先程の石段へと戻った。霊園の周りはブロック塀で囲まれており、その内側に飾りのように立ち並ぶ卒塔婆を視界の端に捉えていると、石段を上ってくる人物があった。坂城遊庵。やはり黒っぽい服装をしており、黒いコサージュを胸の辺りにつけていた。二人が会うのは、ミルフィリアと対峙した夜以来だ。一週間近く話をしていないことになる。坂城の方が逃げるようにして仁を避けていた。

「……墓参りか？」

仁にも心当たりはなくはなかった。俺が信じられないのか？ 今思えばかなり突き放した言葉。石段を上りきり、少し息の上った坂城はその場で立ち止まり、息を整えて頷いた。

「それじゃあな」

横をすり抜けようとした仁は、坂城に呼びとめられる。

「待ってくれ、仁。話をしないか？」

すぐ横で反転させた仁の顔が思いのほか近くて、坂城はすっと視線を下げた。仁はそれを不思議そうに見つめている。しばらく二人はそうしていた。やがて仁のほうから口を開いた。

「……悪かったよ」

「え？」

「お前が怒ってるのは、俺が冷たいこと言ったからだろ？」

坂城はぽかんと口を開けて仁の目を見た。しかしやがて話がわかったように首を大きく横に振った。

「君が謝ることじゃない。私のほうこそ…… 君の言うとおりだった」

どうやら話しかけた方がいいが、その先までは考えていなかったらしい。一度、二度唇を舐めて口を開くが言葉が出てこない、或いは引

っ込めるを繰り返している。仁は辛抱強く続きを待った。

「私は君を信じ切れなかったんだ。本当に姉様を殺してしまうんじゃないかと……」

「仕方ないさ」

遮るように紡がれた仁の言葉は冷たくも温かくもなかった。ただ知っているのだ。諦めているのだ。人に過ぎた力を持つ者の宿命を。それが他人の目にどう映るかを。

霊園を奥へ進んだところに寺がある。殺風景な木造建築。瓦屋根の所々が欠けていたりして、相応の年季を感じさせる。寺としては大きくも小さくもない。少し大きい一軒家と言われれば頷いてしまうかもしれない。本殿への扉は固く閉じられており、周りも雨戸で覆われていて、中に人がいるのかさえわからなかった。二人は境内の横側、柿の木がいくつか植えられている庭にいた。勝手に入っているのかもやはりわからない。

「こんなところまでつれて来て何ですか？」

奈々華は不機嫌を隠そうともせず、ミルフィリアの背中にぶつけた。その質問には答えず、やがてミルフィリアは歩を止め、くると向き直った。その顔に表情はなく、奈々華には彼女が何を考えているのか見当もつかなかった。しかしはたと思い直した。今自分は一人だ。ミルフィリアが本当はフロイラインと通じていて、自分を人質に取って仁に危害を加えようとしていたとしたら、今は絶好のチャンスだ。奈々華は体を強張らせ、じっとミルフィリアの無表情を見返していた。

「そう警戒せずに…… 貴女にお願いがあるんですよ」

そう言うとミルフィリアは愛想笑いをした。その気遣いは無駄に終わり、奈々華は相変わらず彼女から相応の距離を取って、何かあればすぐに大声を出して仁に助けを求められるように心構えたまま。

「お願い？」

「ええ」

もったいつける。焦らして体から緊張がなくなった頃に襲うつもりかもしれない。

「仁さんを私か、遊庵にくれませんか？」

「……は？」

奈々華は下らない杞憂など吹っ飛んで、頭の中が真っ白になっていくのを感じていた。

第三章 第八十七話：自信

「私はこの数日、君にどう謝ればいいのか、そればかり考えていた」
坂城は独白を始めた。

「勝手に呼び出しておいて、人を殺させ、君を傷つけ……」

ふと仁は寺でする話でもないな、と思った。死者が眠る場所で、殺人について云々かんぬん。しかし場所を変えようにもこの寺は少し辺鄙すぎた。黙って聞きながら、坂城の顔を通り越して卒塔婆の文字を解読しようとしていた。

「拳句君を信じてやることも出来なかった。私の味方だと言ってくれた君を…… 最低だ」

泣き出してしまいうんじゃないかと、仁はミミズの這った戒名から目の焦点を坂城の顔に戻した。どうやらあと一步で泣き出してしまうというところ。仁は既に坂城が存外泣き虫だということは十分に知っていた。だから出来るだけ優しく微笑んだ。

「話を聞いていなかったんだから無理はないさ。あんなに血相を変えるほど本気に見えたんなら、俺は役者になれるかもしれないなあ」

軽口で締めくくって、仁は坂城の顔を真正面から見つめた。

「……お前がもし自分を許せないと思っているんなら、それでもいい」

「……」

「でも、俺はお前を許すよ。怒ってなんかいない。寧ろ申し訳なく思ってるんだ」

反駁しようと口を開きかけた坂城より早く仁は言葉を繋ぎ続けた。

「こんなにお姉ちゃん思いのいいヤツを困らせたんだからさ」

坂城は遂に唇を震わせながら顔を俯かせた。小康に入った空から小雨が降る中、ポタポタと新たな水滴が土の上に落ちる。

「お前はミルフィリアが本当に大切なんだな」

仁がそれを言い切るが早いか、坂城が仁の胸に飛び込んできた。仁が小さく呻く。しかしやがて、ぐすぐすと鼻を鳴らす少女を緩やかに抱きとめる。後ろ髪を一定の間隔で撫で続けると、坂城はその度仁の背を掴む手を強めた。

「ごめんな」

坂城は鼻をこすりつけるようにして首を振った。

「……結局泣かしちゃったな」

坂城のコサージュがポトリと落ちた。

「ダメです」

反論は許さないと云った強い口調。親の仇でも見つけたように睨みをきかせている。フロイラインと内通してしてくれた方が話しが簡単でよかったかもしれない。しかし何れにせよ奈々華の敵であることはこれではっきりしたわけだった。その敵は諦めたように笑っている。

「やっぱり…… 貴方達兄妹は只ならぬ関係なのですか」

「……どういふことですか？」

ミルフィリアも奈々華も驚いた顔をしている。寺の境内で二人の少女がキツネにつままれたような顔をしている。寺なのに稲荷でも祀っているのか。

「おや、てつきり二人は恋仲なのかと……」

「……」

純粹に齟齬が発生したただけなのだが、奈々華には嫌味にも取れなくはない。そしてそうした。これ以上不機嫌になれるものなのかと感心しそうなほど嫌な顔。動物の死体でも見るような目でミルフィリアを見ている。

「貴女の片思いということですか？」

「……悪いですか？」

小降りになった空を見て、奈々華は傘を閉じた。ばさばさと二度、

三度それを振って水滴を払う。ミルフィリアは慌てて傘を奈々華に向けて水滴から身を守った。

「失礼ですけど、貴女方のどちらでも、お兄ちゃんを幸せには出来ませんよ？」

今度は挑発的に口の端を歪めている。

「どうしてそう言えるんですか？」

「貴方達は彼の良い所しか見ていません。カッコいい所、強い所。仕方ないんですけどね」

嘲りの色は濃くなる。自分の優位を信じて疑わない顔。

「お兄ちゃんは本当に信用した人にしか弱みを見せませんから」

ミルフィリアが何か言い返そうとした。それを虫の羽音程度に感じている奈々華は、そのまま笑みを消して続けた。カマをかけただけなのかも知れない。だが本音も含まれていたのなら…… 仁に近づく女性はずべからく排除せねばならない。

「お兄ちゃんは私と居るのが幸せなんです」

揺るぎない自信がミルフィリアの口を閉じさせた。

第三章 第八十八話…遺されたもの

ミルフィリアはどこか気まずそうに、坂城はどこか名残惜しそうに、奈々華はどこか勝ち誇ったように、仁は全く普段通りに。帰路はあまり会話も弾まず、他に用事があるというミルフィリアと坂城とは途中で別れて今は行きと同じく奈々華と仁の二人で学園へと歩いているのだった。

「雨強くなってきたね」

傘に当たる雨粒は徐々に大きく強くなっていた。バチバチと音を立てる。いつだって長く降る雨は小康と本降りを繰り返す。

「ミリーと何かあったのか？」

仁は天気の話しには乗らなかった。表情こそ穏やかではあるが、内心奈々華を憂いていた。彼の妹は決して人付き合いが下手糞ではないが、彼の友人に対してあまり友好的でない。今も昔も。

「別に……」

そしてそのことを問うと大概こうして茶を濁す。心持ち傘を下げた奈々華の表情は仁からは見えなかった。

「今週から先生だぞ？ 仲良くしないと」

ミルフィリアは学園の教師として雇われることになった。坂城としても苦渋の決断。フロイラインの幹部を庇うような行いは即ち、国連との関係を悪化させることに繋がる。

「わかってる」

ぶすつとした声。仁は小さく鼻から息を漏らした。

相変わらず中谷の街並みは猥雑で、往来も人で賑わっていた。雨宿りをしているのか、通りに面した喫茶店には老若男女問わず多くの客がガラス張りの向こうに見えた。いつか見たブティックを右手に捉えながら、仁も奈々華も急ぐでもなく怠けるでもなく帰路を辿っ

ていた頃だった。

「城山 仁さんだよね？」

突然背後から声をかけられた。振り返った二人の目に少年が映った。ねずみ色のパーカーを着て、フードを目深に被っている。ジーンズの裾が雨を跳ね上げて少し濃くなっていた。傘を差していなかった。

「そう…… ですけど」

仁はこの少年に心当たりはない。チラリと横目に奈々華を見ると、彼女もやはり首を横に振った。

「僕は近藤祐きんどうゆう」

途端、仁は目を見開き、傘を取り落としそうになった。少年が徐にフードを持ち上げた。少女と見紛うような中性的な顔立ち。仁は声が出ない。目元が近藤と瓜二つ。間違いはない。

「父さんが手紙を遺していたんだ。城山君のところに行きなさいって」

仁の頭の中に色々な思いが錯綜する。導いて欲しいと言った近藤の最後の言葉。この少年は知らないのだろうか。その父を殺したのが、仁であるということを。知らないとすればどう接するべきなのか。知っているのなら……

「……知ってるよ」

仁の考えを先回りしたような言葉は雨音に消え入りそうに小さかった。だけど仁の耳にははっきりと聞こえた。心臓の鼓動が速くなる。目の前がちかちかする。気がつくとな仁は一步後ずさっていた。

「アンタが父さんを殺した人だって」

知っている。

「僕も大分迷ったよ」

少年、祐はふっと柔和な笑みを浮かべた。それも近藤がするのとよく似ていた。

「父さんを殺した人間の世話になるなんてね……」
まるで死霊に出くわしたように仁は硬直している。

「でも…… 父さんがそう言ったのならそれが最善なんだろうって」

「……」

「来週から中谷に通うよ。転校の手続きなんかは自分でやる。アンタは金を払ってくれればいい」

少年は柔らかい笑みをたたえたまま。いつしか仁は彼の顔から目を外せなくなっていた。

「父さんの首に懸かっていた懸賞金があるだろうか？」

少年は一際大きく唇を引き上げた。そしてふっと、蝋燭の炎が消えるように笑みを消した。目に浮かぶのは激しい憎悪。仁が小さく喉仏を動かした。でもこれだけは覚えておいて。囁くように言った。

「俺はお前を絶対に許さない」

それだけを言うと、少年はゆっくりと踵を返し、雑踏の中に消えていった。

「……お兄ちゃん」

奈々華も消え入るような声だった。少年が去って丸々一分は経っていた。凍り鬼でもやっているように微動だにしない仁を気遣い、それでいてそれ以上かける言葉は奈々華にはなかった。

「大丈夫……」

仁は吐息だけでそう言った。表情の消えた顔。

「大丈夫……」

蛇足のように声に出して言った。仁が首に巻いたマフラーの後ろが雨を吸って重たくなり、毛糸の先からポタポタと水滴を垂らしているのを見て、奈々華は唇を噛んだ。

第三章 第八十九話：拳句の裏目

夜半にかけて雨はより一層強さを増していた。コンクリートに腰を下ろした仁はやはりタバコをふかしていた。中庭が一望できる。暗闇の世界。学園の二階から漏れる光だけが、雨に濡れそぼる木々を、芝を照らしていた。それすらも部分的。大多数は光を浴びることさえ許されなかった。学園から中庭に出るには中門から直接出る方法と、その中門の少し手前に通用口があって、一階の各部屋の窓の下、外部の通用廊下に出る方法がある。中門から出るより校舎に近い。廊下と言っても簡素なコンクリが固めてあるだけで底もない吹き曝しのこの場所を仁は特に気に入っていた。奈々華と和解した場所。

「後悔しているのか？」

村雲の言葉は何を指しているのか。一人になりたくて半ば奈々華の目を盗むように出てきたのに、やっぱり一人になりたくなくて、村雲の帯同を許した。

「何を？」

仁に言葉遊びをする余裕はなかった。

「人と関わったこと」

仁はこの刀が怖かった。自分の考えているより深く自分の内面を抉る。いくつも抱える自分の矛盾を克明にする。だがそれが心のどこかで小気味よくもあった。

「……そうだね」

タバコの全身がまだらに濡れて、いつもと違った味がしている。

「そもそも坂城の誘いを受けるんじゃないかったと？」

「……そうだね」

「関わったばかりに近藤を殺した」

村雲はテープレコーダのように、そうだねを繰り返す仁を腰から見上げていた。

「ミリフィリアを救うんじゃないかったと？」

「……そうだね」

「関わったばかりに彼女の両親を辱めた」

傘はあまり意味を成さなかった。仁の肩に宙ぶらりんにかかるだけ。そもそも濡れないようにしようという意味は仁にはないようだった。

「だが関わってしまった」

「……そうだね」

短くなったタバコを芝生のほうへ乱雑に投げ捨てる。オレンジ色の光はやがて燻って消えた。

「他人が嫌いか？」

「……嫌いも何も」

「罪滅ぼしという下らない名目の自己満足を成す道具か？」

仁はケタケタと笑った。

「罪滅ぼしなんて出来るわけないのにな！」

「……自分に役に立ちそうだから付き合った。彼女等も然り」
虚しく笑い終わった仁はまたタバコを一本箱から取り出した。

「アリストテレスか？ 流行んねえぞ」

「続きがある。役に立てようと、役に立とうとしたピエロは一部の観客を笑わせることが出来たが、一部の観客を怒らせた」

「……全部を笑わせるのは無理だ」

「そう無理だ。何かを守れば何かを殺す」

「……」

「分かっていたなかったわけでもあるまい？」

そう。そんなことはとっくに知っていた。喉に回る毒が、仁を一つ咳払いさせた。

「寂しかったのか？」

「……そうだね」

厭世しても人の温もりが忘れられない。つまりはそういうこと。

「妹殿はどう違う？」

「……あの子には本音が話せる」

「裏切らない？」

「多分」

「わからないのに信じるのか？」

「……寂しかったって認めただろ？　もう一度信じるって決めたんだ」

しばし沈黙。仁がまたタバコを放り投げた。さっき投げたものすぐ近くにそれは吸い寄せられるように落ちた。きっと今度は大丈夫さ。小さく頭の中で呟いた。

「あの子どう思う？」

「賢い子供だ」

内心に燃え盛る怒りを一度抑えつけ、自分の立場を理解して、或いは父の最期の願いを聞き入れ、行動する。それはとても難しいことだ。

「そうだな……　近藤さんも人が悪い。出来のいい孝行息子じゃないか」

痛々しく笑う仁に村雲も笑ってやった。

第三章 第九十話：周到

行方は一瞬仁の背後を確認して奈々華がいなかったことがわかると、微妙に表情を和らげた。放課後仁は新聞部に来ていた。相変わらずヒーターが稼動しており、仁は帰りの坂道になるだけ考えないようにしていた。

「珍しいわね。アンタから訪ねてくるなんて」

事前にアポイントは取っていたが、実際に行方しかない部室に入ると仁は少し落ち着かない。

「コーヒーでいい？」

「すまない、と仁。借りてきた猫のように大人しく座った。

「聞きたいことがあるんでしょう？」

部室には簡易な給湯室があった。彼女はそこに入り込んでしまった姿は見えない。前回来たときにはあっただろうか、と訝って、前回奈々華にやり込められてしまった行方の表情を思い出した。何とも言えない顔をしていた。それでもその兄が訪ねてくると、こうして飲み物を淹れてくれるのだから、仁も初対面時に抱いた彼女の印象を随分と改めている。手に味気ないカップを二つ持って行方が戻ってくる。そこで仁は彼女に本題を切り出すことにした。

「ご明察だな…… この学校って、簡単に入れるものか？」

以前のAMCのこともあり、心なしか身構えていた行方はやや肩透かしを食らっていた。

「……どういうこと？」

「簡単に編入とか出来るのかな？」

カップをちゃぶ台に置いた行方は、しばし考えて、眉間の間を片手で揉んでいる。

「ええっと、話しが見えないけど。とりあえず答えるとかかなり難しいわね」

あまり困らせるのも悪いので、仁はかいつまんで説明した。祐の素

性は伏せて、ただ知り合いがこの学園に編入を希望しているということにした。

「なるほど……」

行方はようやく得心が言ったと、晴れやかな顔をした。

「アンタ本当にこの学園について何も知らないのね」

いつもの彼女らしい歯に衣着せぬ物言い。仁は面目ないと苦笑を返した。

「いい？　ここは日本中からエリートと言っていいような素晴らしい魔術師の素養を持った人間が集う学舎なの」

「そーいやりつか言ってたな」

呑気な仁の返答に一つ溜息。だが彼女も彼の性格には慣れたのか、そのことについて言及はしなかった。

「加えて、この学園は欠員が出ても学園側から新たに生徒を募集するようなことはしない」

「なるほど」

「つまり途中入学でも全く選考基準は下げないということ」

「じゃあ結局エリートしか入れないってことか」

「そういうこと。寧ろ……一度退学者を出してるだけに、もっと厳しいかもね」

同じような実力ではまた退学するのがオチ。退学した者より才気溢れる学生でなければならぬということらしい。

「まあ、まとめると編入はかなりの魔術の実力が要るってことね。

ここ以上に魔術師養成に力を入れている学校は日本にはないから……」

かなり難しいということになる。小学校から一貫して魔術についての教育を施してなお、退学者が出るくらいなのだから、この学園で生き残るのは容易なことではないのだ。それを外部からなど言わずもがな、となる。

「だから授業以外にも、それぞれの主属性に分かれた部活動が盛んなのよ」

この学園の部活動はスポーツなどではなく、それぞれの色の魔術を自主的に勉強するものが大半を占めるそうだ。例えば赤魔術研究会、青魔術研究会などなど。例外は……

「お前はいいのか？」

「ああ、私？」

新聞部などと、魔術に関わりのない部活動をしているのは彼女だけだ。行方はすつくと立ち上がると、机に向かい、引き出しから一枚の紙を取り出してきた。仁が受け取ってそれを見ると、どうやら成績表のようだ。緑魔術実践、魔術理論、魔術教養、精霊学、緑魔術理論と項目があつて、全て5がついている。

「優秀だったんだな……」

「はみ出し者はアンタだけじゃないってことよ」

行方がほんの一瞬、遠い目をした。彼女が仁に世話を焼くのはこういうった事情ももしかしたら絡んでいるのかもしれない。過去の、もしくは今もかもしれないが、自分と重なるところがあるのか。

「それにしても…… アンタ来年からどうなるんだろうね」

しみじみ言う行方。言葉の意味をはかりかねて、仁は小首を傾げた。「いやさ、黒魔術なんて教えられる教師はいないじゃない？」

仁は頭の中で、何かが閃いたときのように、えもいわれぬ高揚感が満ちていくのを感じた。

「そうか！ そうだよな！ 俺来年からは開店休業状態じゃん！」

「……だから」

「学校なんか行かなくてよくなって、金は坂城から貰えばいいし、パチンコ行き放題じゃねえか！」

「……」

今にも小躍りしそうなほど興奮している仁を、憐れんだ目で行方は見つめていた。

第三章 第九十一話…友情

こうやってコソコソ下調べのようなことをして、安息を得る。祐が編入してこないかも知れないと知ってほっとしている自分を、仁は自覚していた。陰湿という言葉が頭の中に浮かぶ。ただ嫌なものから逃げることだけを考えている。近藤はこんな男に自分の息子を託したのだ。

仁はそんなことを考えながら、山の斜面を下っていた。前日の雨でぬかるんだ土砂は仁の足を取ろうと隙を窺っている。斜面を下り終えると、すぐさま見知った顔が駆け寄ってきた。

「探したぞ、仁」

ぱあっと一瞬で表情を明るくした坂城から、仁はすっと視線を外した。

「何をしていたんだ？」

そんな仁を怪しむでもなく、坂城は仁の目前まで来るとピタリと止まった。前日の抱擁を思い出しているのか、坂城は忙しなく視線を泳がしている。

「……君は今まで何人の男と付き合ったことがある？」

心底興味もなさそうに聞いた。坂城はようやく仁の不審に気付いた。顔を顰めて真意を考えている。

「何だいきなり？」

別に何でも良かった。嫌がることを言いさえすれば。今つけている下着の色を聞いてもよかった。

「今は一人にしてくれて意味だ」

「……」

仁は置き去りにしようと、やや早足で歩き出した。しかし坂城はそれに駆け足でついてくる。

「聞こえなかったのか？」

「……ゼロ人だ。私は箱入り娘なんぞな」

気恥ずかしそうに笑った坂城に、仁は目の前が白くなるような怒りを感じた。

「聞いてねえよ」

「聞いただろう」

「答えるなんて言ってるねえ」

隣を併走する坂城を一つ睨むと、仁は語気を荒げた。一人にして欲しいと言っている人間を追い掛け回すなんて一体どういう見だ、と。足を動かすスピードをまた一段上げた。

「勝手だな」

そうだ、勝手だ。昨日は抱きしめたくせに、今日は逃げるんだ。自分の気持ちを整理できないまま、自分の矛盾を消化しきれないまま、他人に優しくできるほど、仁は器用ではなかった。

「話してくれ。私は君の力になりたいんだ」

それが仁の限界だった。カチンと頭の中のどこかにスイッチが入るような音を聞いた気がする。

「うるせえな。放っておけて言ってるんだろ！」

「奈々華には話すんだろう！」

坂城も負けないくらい大声を出した。仁の足が止まる。坂城もまたゆっくりと歩みを止めた。しばらく二人の荒い息だけが周囲に聞こえていた。やがて仁が根負けしたように口を開いた。

「……アイツは身内だ」

「友達は身内ではないのか？」

「……」

「君は私を友だと言った。そしてそのように扱ってくれる」

「……」

「私も君を…… 友だと思っている。そのように扱いたい。困っているなら助けてやりたい。私なんかでは役に立たないかもしれないけど……」

痛いほどに握られた坂城の両拳は白くなっていた。それを見た仁は急速に頭が冷えていく。やがて幾ばくかの沈黙の後、とつとつと自

分の心の内を話し始めた。近藤の息子がこの学園に来るということ。それを自分は歓迎していないこと。行方から聞いた話で、彼が編入することはないかもしれないこと。自分がとても自分本位であること。全て話し終えると、仁はふうと一つ大きな溜息を吐いた。

「辛いだろうな」

坂城はもつと気の利いたことが言えない自分が腹立たしくて仕方なかった。しかし彼女の気持ちは十分に仁に伝わっていた。もともと力になって欲しいと思って話したわけではない。自分の痛みは自分のもの。ただそれを氣遣ってくれさえすれば、それでいいのだ。その気持ちに彼をまた奮い立たせる。彼女もまた悩みの中にいながら、彼を支えようとしてくれる。

「何か…… 何か私に出来ることはないか？」

心からの思いだった。

「そうだね。じゃあ体で慰めてもらおうかな」

「え？」

「冗談だ。ありがとう。気持ちだけありがたく貰っておくよ」

セクハラ紛いの軽口が叩けるようになったのは、彼女のおかげ。仁もまた本心からそう言った。ひらひらと手を振りながら仁は去って行った。

「私は…… それでも」

坂城はその背をどこか焦点の定まらない目で見ていた。

第三章 第九十二話…狂えない嫉妬

別に妹なんだから、遠慮することはないんじゃないだろうか、と思いがながらもどこか本能的に気を遣ってしまふ。何を後ろ暗くなっているのか。いつもはあまりしない洗い物の手伝いなどした仁は、夕食後コタツに入りながら何となく奈々華と目を合わせずにいた。

「何かやましいことでもあるの？」

こういうときの奈々華は仁の心臓を止めんばかりに鋭い。なるだけ何でもないような声を出そうとして失敗した仁。うわずった声で別にと答える。奈々華の眉間にいくつも皺が寄る。

「昨日はコソコソ私がトイレに行ってる間に外に出るし」

「な、何でもないよ」

そうだ。別に妹にしか相談をしてはいけないなんて法律はない。

「近藤さんの息子さんのこと？」

不意に顔を歪めた奈々華は、本当に仁を氣遣ってくれている。仁はちくりと胸に罪悪感を覚えた。

「ああ。実はさ…… 坂城にも相談したんだけど」

思い切って打ち明けることにした。言葉に出して、仁はやっと罪悪感の正体に気付いた。奈々華はいつも自分を支えることを一番に考えてくれている。そんな奈々華は、自分より先に坂城に心の内を話したことをどう思うだろうか。自分が信用されていないと思いやしないだろうか。特に隔絶を経た後なのだからまだ完全に自分が信用されていないかもしれないという思いはどこかにあるんじゃないだろうか。これからは坂城に話せばいいと、変な話ヤキモチを焼くんじやないだろうか。

「ごめん……」

相談の内容を話そうと思っていた仁の口は勝手に動いてそう言っていた。怒られる、と思った仁はいつまで経っても奈々華が沈黙しているのを不思議に思った。

「どうして謝るの？ いいことじゃない」

にこりと笑ってそう言う。心底可笑しいとでも言わんばかりに。

「アレ？ 怒らないのか？」

「どうして怒るの？ 色んな人に相談できるようになったんなら、お兄ちゃんの人間嫌いも快方に向かつてるってことじゃない」

「病気みたいに言うな。てか俺は別に人間嫌いじゃない」

思わず反応してしまったが、もっと言うべき言葉は別にあったんじやないかと仁は思う。

大丈夫か、と声をかけたシャルロットは奈々華に背を向けたままだった。夕食後の一服は欠かせないと言って仁はまた部屋を空けていた。

「大丈夫だよ」

その背を撫でる奈々華からは明るい声が返ってきた。

「私は我慢強いからね」

やはり明るい声。でもどこか悲壮を感じ取って、シャルロットは首を回して奈々華の顔を見るのが怖かった。彼女は三年もの間、思いや人と会話もままならない状態にあった。それから比べれば確かに今のほうが格段に良いのだろう。だが人間とは贅沢な生き物だということもシャルロットは知っている。どこまでも欲望に忠実な生き物なのだ。そして彼女の欲望が何であるかも。

「妬いたりほしくないのかい？」

「するよ」

簡潔な言葉。しかしそれは恐らく本音であって、彼女もまた自分の精霊の前ではどこか心のガードを下げる。

「けどそれをお兄ちゃんにぶつけるのはマズイ」

また喧嘩になってしまふ、と。

「それにね…… 学園長さんは多分、お兄ちゃんにしつこく聞いたんじゃないかな」

シャルロットは言葉を挟みかけて、やめた。アイシアがもう眠たい

のか仁のベッドに入っていくのが見えた。布団の中を小さな塊がもぞもぞと動く。

「やっぱりわかってないんだよ。男の子は格好つけたがる生き物なんだから」

シャルロットはたまらず首を後ろに向けた。彼女がどんな顔をしてそんな達観した言葉を紡いでいるのかどうしても確かめずにはいられなかった。薄く笑っている。何を考えているのかは読み取れなかった。

「時には待つてあげなくちゃ」

なるほど、坂城は確かに仁の気分を害した。だが最終的にはその愚直が彼の消化の一助となった。どちらがより仁のためになるのか。鍵を回す音がして、奈々華はシャルロットを優しく膝から下ろすと、いつもと変わらない笑顔で玄関へと立ち上がった。

第三章 第九十三話：嵐

ひどく高圧的な印象を受けた。仁が授業中に突然校内放送で呼び出された三階の学園長室。ソファーに腰掛けた男は鋭い眼光で部屋に入ってきた仁を品定めするような目で見る。金色の髪を後ろに流して、オールバックとでも形容するのか、口元をいやらしく歪めている。仁の第一印象は日本人を小バカにするアングロサクソン。整った顔立ちからは年齢を推し量るのは難しかった。額や頬に刻まれた皺から、四十代かとあたりをつける。

「……彼が件の？」

流暢な日本語が男の口から出た。外見とは裏腹に親日家なのか、と仁はほんの少し警戒を解きかけた。男の向かいに座っている坂城がコクンと首肯して、隣に座れと、仁に目で合図する。わけも分らないまま仁はその通りにする。

「黒魔術師…… コレは使えるのか？」

コレ呼ばわりされた仁が僅かに顔を顰める。それをまた坂城が目で制した。

「はい。それで……」

「わかっている」

仁を置いてけぼりにして、二人は言葉を交わす。男がソファーの下からアタッシユケースを持ち上げ、テーブルの上にドンと置く。銀の立派な作りのそれを男が乱暴な手つきで開けると、中には札束が入っていた。ケース一杯に詰め込まれている。

「数えろ」

ぶっきらぼうな声。仁は何が何だかわからない。

「いえ。そのような……」

「そうか」

男は坂城の言葉を受け、ケースの蓋を閉めてそのままにした。

男の名は＜ロッペン・ラインハルト＞。世界最高の魔術師とも目される男。A M Cの最高責任者。彼を形容する言葉はいくらでもあるが、最も馴染み深いのは、彼の二つ名＜雷帝＞。仁は坂城の口から簡潔にその紹介を聞き、ようやく事態が飲み込めてきた。ラインハルトはその説明を聞き流すようにして、淹れられた紅茶を優雅に飲んでいた。白磁に金の葉をあしらったカップ。いつか仁が勝手に使おうとして坂城に怒られた一つウン百万もするというものだ。中の紅茶も恐らく最高級のものだろう。

「じゃあさっきの金は……」

仁が声を出すと、ラインハルトはあからさまに不快な顔をした。どうやら彼の許しを得ずには声を発することもまかりならないらしい。ああ、と坂城が取り持つ。

「懸賞金だ」

近藤の首に懸かった懸賞金。だが仁は訝った。そんな子供のおつかいのような用事でわざわざこんな大物が出張るだろうか、と。

「……」

「……」

男が手を動かし、カップを掴むたび仁は油断なくそれを追っていた。坂城は完全に萎縮しているようで先生にお叱りを受ける生徒のように俯き加減にしている。

「青の幹部を捕らえたらしいな」

ラインハルトは静かに言った。しかしその言外に有無を言わさぬ何かを感じ取れる。

「……はい」

「皆まで言わす気か？ 渡せ」

本題はこれだった。坂城の顔の血色が瞬時に悪くなる。完全に威圧されている。それを見て取った仁は代わりに口を開きかけた。

「誰が喋っていいと許可した？」

真っ直ぐに仁を見るラインハルトの目には怒りと敵意以外のなものも混じっていなかった。

「俺だよ。バカかお前は。言論の自由って知らないのか？」

ラインハルトの目が驚きに見開かれた。恐らくこの男はこれまで生きてきてこれほど無礼な口を利かれたことがないのだろう。

「渡すわけねえだろ。どうしてもってんなら俺を殺して持ってけよ」にやりと笑った仁。しかしその水面下では確実に相手を仕留める公算をしていた。雷帝というくらいだから雷を操る黄の魔術師なのだろう。なんにせよ精霊が近くにいない魔術師は無力だ。仁も村雲は置いてきたが、取っ組み合っても負ける気はしない。精霊を呼ぶ暇など与えずに、首をへし折る。

臨戦態勢を取っていた仁は、意表を突かれた。ラインハルトが大声を上げて笑いだしたのだ。ハハハと響き渡る笑い声に、坂城は今にも卒倒しそうなほどに青褪めている。やがて笑いをおさめたラインハルトは瞳孔の開いたような目をして、口元だけ不自然に笑っていた。

「よくぞ言ったな……」

来るか、と身構える仁。しかしいつまで経ってもラインハルトはソファ―に腰を深く沈めたままだった。やがてゆっくりとカップを持ち上げると何事もなかったかのようにそれに口をつけた。拍子抜けした仁はその動向を傍観者のように見ている。

「まあいい。今日のところは引き上げよう」

収穫はあった、と小声で呟き、ラインハルトはそのまま立ち上がった。仁は再び身構えかけたが、どうにも戦意は感じられず、そのまま見上げる。

「もう一つのお約束もお忘れなきよう」

坂城が今にも消え入りそうな声で呟いた。それを完全に無視して、ラインハルトは額にかかった金髪を掻きあげながら部屋を辞した。

第三章 第九十四話：堅城の中

「何だよ聞いてねえぞ？」

仁の不平ももつとも。それでも柔和な笑みを浮かべているのだから、坂城は心が落ち着くのを感じた。

「すまない…… だが、私もカエデに呼ばれて始めてわかったのだ」「アポなしかよ、あの金髪」

坂城は噂には聞いていた。彼はいつも事前に相手の都合を確かめるようなことはしない。そして会って納得した。どう見てもそういう気遣いをしそうなタイプには見えない。

「すまない」

「お前のせいじゃないだろう。気にしなさんな」

優しい言葉を聞きたくて、少し困ったような笑顔を見たくて坂城は言った。そして仁は彼女の思うとおりにした。しかし次の瞬間にはテーブルの上に置かれたままのアタッシュケースを開き、札束を眺めだす。そして浮かれた顔で絶景、絶景と繰り返し見た。

「アレが雷帝か」

特に感慨もなく、仁は微笑をたたえたまま。そこで坂城は気付いた。仁がいつも通り笑っているのは自分が緊張していたのを見て取って、それを解そうとしているのだ。わかってまた胸が熱くなるのを感じた。十六歳で学園の最高責任者を任された坂城は、他人に弱みを見せまいと、やはり子供かと侮られないように、幾重にも城壁を重ねた。時に気丈、時に合理、時に非情。なのに、この男はいつも簡単にその城壁を突破して、心の奥底、弱い部分をくすぐり、暖める。坂城は本来他人に涙を見せたのは、両親を除いて他にいなかった。木室の前でも小さい頃は別だが、泣いたことはなかった。これからもうしていくつもりだった。なのに……

「結局アイツは何をしに来たんだろう？」

時折可愛らしく小首を傾げるものだから、坂城は目が離せなくなるのだ。

「強攻策に出るでもなし、俺に侮辱されても怒るでもなし」

「彼は滅多なことでは自らは動かないんだ」

王のなんたるかを熟知している。常に冷静沈着を以ってことに当たり、傲慢だけで渡れないと理解している。

「収穫があったと言っただろう？ 彼は恐らく君を品定めしに来たんだ」

「俺なんか視察してどうするんだ。何か製造してるわけでもあるまいし」

どうも仁は自分の立場をよく理解していない節がある。世界史上二人目の黒魔術師。フロイラインの幹部を一人討ち、一人手駒にしてしまった。今世界中、魔術に関わるもので彼を知らない人間はいないというに。

「まあいいや…… それにしてもよく分かるな」

「……」

ラインハルトは肩書きだけは超有名人だが、その実態はほとんど知られていない。本当の権力とは、一般の人間では与り知れないところにあるのが世の常。しかし世情に疎い仁なら、噂をよく聞くななどと濁すことも坂城には出来た。

「実は…… 密偵を放っている」

彼に嘘をつくのは今の彼女には耐えられない苦痛となって返ってくる。坂城は包み隠さず全てを話すことに決めた。

行方の話しどおり、坂城もまたフロイラインとA M Cとの繋がりを疑っていた。そこで危険を承知の上で国連側にスパイを送り込んでいた。お陰でその繋がりについて決定的な証拠を掴んだものの、所詮は巨大な組織の前では子供の遊びに等しく、それはすぐに露見してしまった。露見してなお泳がされているのが実情だそうだ。仁はいくつもの今まで不可解であった点と点が繋がるのを感じていた。いくらなんでもフロイラインに目を付けられているというに、正義

を司る機関が、本音はどうあれ対外的な面子を考えれば、全く感知しないというのはどうにも腑に落ちなかったのだが、そういうことなら合点がいく。同時に何故彼らがこの地を執拗に狙うのかも。以前坂城が殺された部下や、部下からの報告と言ったが、その部下とというのも内心フロイラインの拠点も分からないのにどこに送り込んでいるのか訝ったものだが、そういうことだったのだ。

「本当に申し訳ない」

坂城はそう締めくくった。今度は本心から。叱られるのも覚悟していた。

「何で謝る？」

仁はきよんとしている。

「何故って…… 私はフロイラインと国連との繋がりを話さずに君に依頼したんだ」

敵の実情も、敵の数も質も、全て当初の契約よりひどい。しかし仁は全く気にした風でもなくいつものように優しく笑った。

「何だ、そんなことか」

「そんなことって……」

「あの金髪がトップだろう？　じゃあ知れてる」

「知れてる？」

坂城は自分の聞き間違いだと思った。仁は滅多なことでは自信過剰な発言はしない。

「ああ。まあ直接やり合っていないけど、アレ位なら多分倒せる」
坂城は言葉を見失い、ただ対面で無邪気に笑う仁の顔を見つめていた。

第三章 第九十五話：財

「最後に言っていたのは？」

仁がのんびりとした声を出す。だけどあの状況で抜け目なく坂城の言を耳に入れていたのだから、さすがと言うべきか。

「実は…… 君は報酬については交渉をしないと云っただろう？」

「ああ、そうだな」

だけどそれがどうした、と言いかけて坂城に遮られた。

「勝手だが、その代わりに条件を出したんだ」

「条件？」

坂城は言葉を選ぶように、しばし顎に手を当てて見るともなくテブルの上を見ていたが、やがて意を決して言った。

「近藤の遺体を引き渡して欲しいと言った」

はたと仁が笑みを消した。坂城はだから言うのを躊躇った。仁の顔を曇らせたくはなかった。だけど言わないわけにもいかなかった。仁はしばらく考え込むようにしていたが、やがて神妙に頷いた。

「それでまだ履行されていないってわけか」

仁は顎に手を当てたまま。坂城は約束が遅れていることについて、自分が責められているような気持ちになった。

「すまない…… だが君のためを思って」

そこまで言って、坂城はしまったと口に手を当てた。それはあまりに恩着せがましい。言い訳がましい。浅ましい。そんなことを言うてしまえば仁はまた自分のことを氣遣ってくれる。今は彼のほうが忸怩たる思いを抱いているはずなのに。だが顔を上げた仁は少し憂いを帯びてはいるが笑っていた。

「実は俺もそれは向こう側にお願いしようかと思ってやめたんだ」

「え？」

「だって俺に近藤さんの遺体を預かる権利はないだろう？」

ただ冷たい手続き上の権利関係を言っているのではないことは容易

に推察できる。坂城は予想外の仁の発言に固まってしまった。そんな坂城を気にしているのかいないのか、仁はそのまま続けた。

「だけど、祐……くんが現れたなら別だ」

そうだな、と辛うじて相槌を打つ坂城。彼には権利上も、倫理上も父の遺体を受け取り、手厚く葬る権利がある。

「そもそも今、近藤さんはどうしているんだ？」

生きているかのような言い回しに、坂城はまた言葉につまった。もはやその遺体がフロイライン赤の幹部、煉獄のヒューイットと確認が取れたのだから、当然向こう側としてももう用はないはずだ。仁はそう言いたいのだ。

「すまない…… それについてはまだ確実なことは言えない」

相手も内部に間者が潜んでいることはわかっているのだから、情報管理は厳しくなっているのだろう。もう少し待とうと、仁はそれ以上の追求を避けた。

「俺はお前を許さない」

もう何度も脳内で反芻した言葉。こんな言葉を投げつけられるのは二度目だった。学園長室を辞し、廊下を歩く仁は、虚ろな目をして唇を真横に結んだまま。前方を見ているようで、彼はどこも見えてはいなかった。近藤祐。確かに理知的で賢明な子供だろう。仁が十五かそこらのときに比べると、格段に大人びている。だけれどそれだけなのだ。殊勝と非情は混同すべきものではないし、そのことは実際にこの言葉に集約されていた。

「俺はお前を許さない」

口に出す。それを言った本人とは比べ物にならない程に弱々しい声だった。右手に持ったアタッシュケースを見る。これを受け取る権利が自分にあるのか。これは彼にこそ渡すべきものじゃないのか。遺体と同様に、父の遺したもの。もちろんギャンブルなどにつき込む気は毛頭ないが、それにしても仁の生活に充てるべきものではな

く、一人息子のためにこそあるべきじゃないか。仁の体温で鉄の取っ手は温められていた。誰かから強奪した金を持っているような罪悪感がそこから伝わるようだった。いつそのままケースを放してしまえば、気持ちがすっと楽になるのだろうか。

いつのまにか階段の前まで辿り着いていた仁は、意を決したように右手に力を込め、ゆっくりと下っていった。

第三章 第九十六話：黒川

仁が黒川と対峙したのは、そのときが初めてではなかった。同級生同士、三年の間には幾度も対戦したことがあった。

あまり部活動に熱を入れてはいなかった仁は、よくサボる、部の取り決めに従わないと、剣道部内でも困った存在になっていたのだが、顧問の教師が退部にしなかったのは、ひとえに彼の大会での成績によるものだった。悉く良い結果を残し、実力差のつきにくいと言われるこの競技で仁は圧倒的な強さを見せて、全国大会でも何度も優勝している。人生において負けたのは、サボりによる不戦敗だけ。関係者からは早熟の天才と形容された。売名と割り切って、顧問の教師も大会では彼を常に大将として据えた。

その日も他校との交流試合に駆りだされた仁は、黒川堅固くろかわけんこと当たった。もう仁はそのときどちらが何対何で勝っていたなどとは覚えていないが、いつもと同じように気だるそうに竹刀を持った。父に半強制的に習わされた剣道を仁はあまり好いてはいなかったのだ。

黒川は、凛々しい目元とシャープな輪郭をした甘いマスクで女子にかなり人気のある男だった。大会などには追っかけてやってくる自校の女子が必ずどこかにいた。城山は黒川のことが嫌いではなかった。一度だけ話したことがあるが、自分の容姿を鼻にかけているような雰囲気はどこにもなく、あまり親しくない他校の生徒である仁にも気さくに歯を見せた。もっと自分に積極性があれば友人になることも出来たかもしれないと、今になって仁は思っている。試合開始の合図が聞こえる。

互いに仁は正眼に、黒川は上段に竹刀を構えた。今日の剣道界では非常に珍しい。実は仁が一度黒川と話したというのは、彼にどうして上段に構えるのかと聞いたのだった。「だって何かカッコイイだ

ろう」と答えた。屈託のない笑顔を、仁は今でも鮮明に思い出すことが出来る。いや、一生忘れることが出来ない。

黒川の上段からの速い面を、竹刀を寝かせて受け止める。基本的に黒川は面を狙った攻撃が多い。わかっていながらフェイント等も効果的にまじえた黒川の攻撃はなかなか手強い。仁の学校の一同も、相手側も皆固唾を飲んで見守っている。心地良い高揚感と緊張感。竹刀がぶつかり合うバキッと鈍い音だけが体育館を支配する時間が続いた。

もう何度目かわからない面を受け流し、仁は突きを繰り出す。黒川との手合わせでいつも彼をねじ伏せるのは仁の突き。体に竹刀を引き寄せる動き、初動の全く読めない突きは、卓越した身体能力と幼少からの血の滲むような努力の賜物。絶対の自信を持つ神速の突き。腕の筋肉の収縮さえ感じられる気がするほど集中していた。だが黒川もこれまで幾度となくその突きに屈辱を味わっている。当然何かしら策を練ってはいるのだろうと、そのときはその程度しか考えていなかった。もう何度後悔したかも分からない。このときもう少し相手の出方を考えていれば、あんなことにはならなかったのにと。黒川は考えていた。後退してかわそうとしていつも避けきれずに食らってしまう突き。ならばと……

黒川の体が一段大きくなる。踏み込んできたのだ。踏み込みながらかわしてカウンターを決めるつもりだったのだろう。黒川の意図に気付いたときには手遅れだった。やめろ、と心の中で叫んだ。仁は自分の伸びきった腕が黒川の首に真正面から向かっていくのを、嫌にゆっくり感じていた。全てが遅い。いかに常人離れた仁であっても、一度繰り出した自身の渾身の突きを途中で止めることなど出来ようはずもなかった。

用心たれを貫いた仁の突きはグシャリと嫌な音を立てて黒川の喉を潰していた。黒川はそのまま力なく仁の側に倒れこむ。面の隙間から黒川の開ききった瞳孔が見えた。ずるりと力なく仁の胸から崩れ

落ちた黒川の体は床に突っ伏して、一ミリたりとも動かなかった。顧問の教師が駆けつけ、何か喚いていたが、何を言っていたか仁は覚えていない。ただ自分の腕に残る骨を砕く感触と、黒川の死人のような瞳が頭から離れず、放心したようにその場に立ち尽くしていた。黒川の喉あたりから、仁がそれまで見たこともないほどの血があっという間に流れ出し、体育館の床を血だまりに変えていく。

八月の初旬、体育館の中に流れ込んでくる油蟬のジーっという鳴き声が恐ろしく大きく聞こえていたのだけを仁は覚えている。

第三章 第九十七話…独りの坂

仁が罪に問われることはなかった。当時まだ少年であったこと、故意ではないことなどが加味された。仁は当時の記憶は、黒川を殺した辺りから曖昧で、ただ警察の人間だの、法律関係の人間だの話をしたことだけしか覚えていない。壊れた機械のように、「はい」と「わかりました」とを繰り返していたような気がする。恐らく父親のことにしても何か言われただろうが、頭からは綺麗に抜け落ちている。連絡もつかない、所在も掴めないのだから、警察の人間も諦めたのではないだろうか。わかったとして、あの冷酷な父親が息子が人を殺めた程度で帰ってくると思えない。

ここから仁の頭の中で、よく覚えている箇所と、さっぱり思い出せない箇所が混在する。

親しかった人間がよそよそしく、いや、あからさまに仁を避けるようになり、学校側は退学勧告も検討しているとどこからともなく知っていた。冷たい視線。刺すような視線。畏怖と軽蔑と好奇と愉悦。仁の居場所は学校にはなくなっていた。

葬儀には参列を断られた。警察に渡された黒川の実家の電話番号にかけると、男の声がして、父親だったのだが、事情を説明すると来ないで欲しいと言われた。感情を押し殺した冷たい声。有無を言わさぬ声。憎悪と激情と理性と葛藤。仁はどんどん追い詰められていた。

そして奈々華に、彼女だけは自分の味方をしてくれると信じて……

はっきりと細部にわたるまで思い出すことが出来る。

うだるような暑さの中、仁は陽炎の舞う坂道をひたすら登っていた。

小学生達とすれ違う。夏休みを迎えて、蟬とりやザリガニ釣りに心を躍らせる会話が聞こえてきた。すぐに遠く過ぎ去り、見えなくなった。登る。登る。汗を吸ったTシャツが鉛のように重く感じられ、ジーンズの内側にも汗が広がって鎖のように絡みついていた。太陽に照り付けられた路面は湯気を上げるのではないかというほど熱を持っていた。転べば火傷ではすまないかもしれない。転んでしまおうか。

黒川の家はどこにでもある平凡な一軒家だった。古くもなく新しくもなく、広くもなく狭くもなく。白い塗り壁と、椿を植えた生垣が青々としてコントラストをもたらしていた。呼び鈴を鳴らすと、しばらくしてややくぐもった男声が聞こえた。電話で会話した声。仁は名を名乗り、来訪の目的を告げた。焼香をあげさせてほしいと。そこで待っている、とだけ。五分はあっただろうか、それとも三十秒程度だっただろうか。やがて玄関の戸が開き、中から中年の男性が顔を出した。歳相応に刻まれた皺とやや厚い唇。こけた頬は最近のものだろうとすぐに察した。その頬を時折、ピクピクと引き攣らせた。それも最近のことなのかもしれない。仁は喉の奥が詰まるのを感じた。

「あの……」

「ここではマズイ。場所を変えよう」

男性は仁の言葉を遮り、サンダルを履いて玄関から出てきた。仁のやや手前で止まると、一瞬その顔を見たが、すぐに俯き加減になって横を通り過ぎた。カポカポと音を立てながら歩く男性に仁はついていく。彼は何らスポーツはやっていなかったのだろう。猫背気味に歩くその背は弱々しく、一般的な成人男性よりも細く見えた。

やがて五分も歩くと、小さな喫茶店に辿り着いた。個人経営なのだろうか、古ぼけた縞々のアーケードが日に焼けて色あせていた。ガラス扉は管理が行き届いていないのか、所々白んでいた。カランコロンと来客を告げる鈴が店内に鳴り響くのを聞きながら、仁は小さく店内を見回した。お世辞にも広いとは言えず、外装同様年季が入

っている。三組ほどテーブルと椅子があり、椅子はテーブルの上に逆さまに置かれていた。おばさんが小走りに寄ってくると、入り口から一番遠いテーブルの椅子を下ろして、どうぞと声をかけた。男性が奥に座る。仁はゆっくりその対面の椅子を引き、座った。

「すまないね」

単なる枕言葉にしても、そんな言葉が出るほど男性は大人だった。

いえ、と短く答える。男性は常連なのか、おばさんはアイスコーヒ―ね、と勝手に品を決めた。仁も同じものを頼んだ。

「家内はかなり不安定でね。家に上げると君に何をするかわからない」

半分本当で、半分嘘だとわからないほど、仁は子供ではなかった。家に上げるのが嫌なのだ。当然だ。息子の命を奪った男を我が家に招き入れるなんてありえない。

「さてと…… まずは君の考えを聞こうか？」

テーブルに両肘をついて組み、その上に顎を乗せた男性がわずかに身を乗り出す。その目には御しきれない怒りと悲しみが色濃く浮かんでいた。

第三章 第九十八話…アイスコーヒ―

「僕が死ねばよかったんです」

友も、父も、顔も知らぬ母も、誰も、妹さえも、仁を望んでいない。全ては過去のもの。今になって思えば、本当に友だったのか、本当に父だったのか、本当に母だったのか、本当に妹だったのか。それさえも仁にはわからなくなっていた。こんなに容易く崩れてしまうのか。今まで築き上げてきたものは、泥の表面に浮き上がった泡のように全部弾けてしまった。もとよりそんなものはなかったのかも知れない。人のために尽くし、人に好かれるように生きてきた。その全ては自分の独りよがりだったのなら、この生に何の意味があるのだろうか。

「黒川君は、剣道の才能も素晴らしかった。人望もあるようでした。人柄も良いようでした」

ようでした、ようでした。自分はよく知りもしないのに、少し見ただけの憶測を並べている。侮辱している。ふざけている。自覚していた。止まらなかった。何か喋っていないと代わりに叫びだしそうだった。男性は静かに聞いていた。頬の痙攣が一層ひどくなったような気がする。

「僕なんかより……」

「本当にな」

深い穴の底からしたような声だった。男性はさっきから微動だにしていなかった。ややもすると聞き間違いのようであったが、しかしそれは確かに彼が発したものだ。だった。

「君が死ねばよかったのにな」

「……」

「どうして堅固なんだ？」

「……」

男性は顔を引っ込めた。手も解いた。目を瞑り、首を横に振る。そ

れが現すのはどうしようもない失望だった。

「建設的な言葉を聞かせてもらっても、何の慰めにもならないとはわかってるが」

仁は乾ききった喉を小さく鳴らした。アイスコーヒーは手元に既にあるが、目にも入らなかった。

「もっとマシな言葉が出るかと思っていた……」

「……」

「最悪だ。適当に並べたような言葉。自分本位な言葉」

そう言った声は震えていた。

「わかってるのか！ 人を殺したんだぞ！」

男性が握り締めた拳を思い切りテーブルに叩きつけた。二つのグラスが跳ね上がり、倒れた。黒い液体がドクドクとテーブルの上を流れる。

「過失だ？ ふざけるな！ 親も連れてこないで、子供一人に来て、バカにしてるのか！」

もう一度叩きつけた。仁のグラスが床に落ちて、けたたましい音を立てて割れた。店員のおばさんも、やんごとならない事態に、足を動かさずにいた。仁は返す言葉もなかった。母はいない、父は行方知れず。そんなことを言っても全ては醜い言い訳でしかない。椅子がガタンと大きな音を立てて仁の後ろで倒れる音がした。気がつくと、地べたに額を擦りつけていた。男性は荒い息を整えながら、それを見下ろしていた。

「やめろ」

「……」

立ち上がる術を忘れたように、仁は動かなかった。最悪の冒瀆だ。どうしてこうなってしまったんだ。どうすれば、この心臓を生きたまま扱られるような心痛から逃れられるのだ。その考えまでも浅ましくて、また苦しむのに。一体どうすれば……

「やめろ！」

男性が乱暴に仁の腕を掴み、地べたの上を転がした。半身を起こし

た仁はどうしても顔を上げることが出来なかった。男性の顔を見るのがたまらなく怖かった。そのまま時が流れた。一分にも満たなかったかもしれない。一時間はそうしていたのかもしれない。男性が最初と同じ、静かな声で言った。

「二度と私の…… 私達の前に現れないでくれ」

「……」

「だが忘れるな」

男性の声は感情を押し殺すことも出来ずに、上ずっていた。人がこんな声を出せるのか、と仁は初めて知った。

「俺は君を絶対に許さない。いつまでも…… どこかに君を憎む人間がいるということを肝に銘じて生きろ」

男性は財布から金を抜き取り、テーブルの上に置いて、静かに店を出て行った。

それからしばらくして仁は、黒川の家族がいずこかへ引っ越したと、世話になった警察の人間に聞いた。

第三章 第九十九話：狂いの勧め

仁はそこで過去から流れてくるイメージの奔流をとめた。自室の前だった。歩きながら眠っていて、それが醒めたような感覚で、少しふらついた。左手でドアを開ける。人のいない部屋。村雲と静がただ言葉もなく並んで壁に寄りかかっている。シャルロットは奈々華と一緒に教室、アイシアは散歩中か。

「アレ？ お早いお帰りで」

静が軽い調子で言う。仁は曖昧な返事を返すと、その壁の近くにケースを置いた。右手を見ると僅かに血液の流れが滞っていて、指の腹が白くなっていた。

「例の懸賞金すか？」

察しがいい。仁はまた唸るような声を出して肯定した。

「また感傷に浸ってるわけっすか」

「今日はやけに絡むな？」

静は軽快な口調で話すのだが、口数自体は村雲よりもむしろ少ない。その静が今日に限っては話したい気分なのか。

「妹さんがいなくて残念すか？」

「さあね」

仁は少なくとも、黒川の件については、奈々華に心中を吐露するわけにはいかなかった。

「いつまで幻想に縋るつもりっすか？」

「幻想？」

クッションをちらりと見た仁は、しかし座ろうとはしなかった。ようやく自由になった腕を組んで、立ったまま静を見据えた。

「だってそうでしょう？ 妹さんはいつかは旦那の前からいなくなる」

二人は兄妹であって、夫婦ではない。奈々華もいつかはどこかの誰かと恋に落ち、結婚していく。

「いつまでも旦那を助けてはくれないっしょ？」

「……」

「それに、それ以前に、彼女が絶対旦那を裏切らないなんて保証はどこにもないでしょう？」

わかっている。わかっているながら、仁は奈々華に心の安息を求めている。他人が怖くて、家族に頼っている。しかしそれすらも脆弱なのだ。奈々華は一度仁の縋る手を振り払った。

「仮に万が一、彼女が傍にいてくれたとして、旦那は彼女に自分の隣を歩ませるつもりですか？」

「……」

血塗られた道を。罪を重ね続ける道を。やがてそれは、ゆっくりと回る毒のように、仁の心を蝕むのではないか。仁はトロンとしたような目で青い刀を見つめ続けていた。彼もまた仁の矛盾を目ざとく示唆していた。心が壊れそうなとき、人は、どんなに脆弱でも、傍目からはどんなに歪んでいようと、どこかに安定を求める。腹を括ったつもりでも、どこかに逃げ道を用意している。それが安定だと、逃げ道だと妄信する。

「アンタが信じてるソレは有限の、保証もない張りぼてでさあ」
喋り続ける。

「中谷の旦那にもね、弟がいたんすよね」

不意に中谷の名前が出てきて、仁の目に驚きが浮かぶ。

「静殿は我よりも先達にあたる。中谷慎二と組んでいたことがあるのだ」

今まで沈黙を続けてきた村雲が注釈を入れる。

「なるほど。大先輩だな。これからは敬語を使ったほうがいいのか？」

仁が努めて明るい声を出した。しかし齡の十分の一にも満たない餓鬼の軽口を取り合ってくれるほど、静は暇ではなかった。

「最初に縁を切ったんすよ。自分がこれから歩む道を見先して」

自分の宿命を悟り、起こる戦禍と、罪にまみれた行く末を、彼は家

族と歩む道を閉ざしたのだと。

「比べちゃなんなんすけどね。敢えて言いましょう」と前置いて。

「アンタは確かに、中谷慎二よりも強い。なるほど鋼の体だ」
先は聞かずとも、仁にはわかった。手に取るように、デジャヴのよう
に。

「けどそれを支える心は紙だ。焼かれれば煤け、濡れればふやけ……」

「……」

「この先もそうしていくんですか？ その都度、あの娘に修復してもらうんすか？」

「……」

「いつまでそうしてもらえるんですか？ 心の中で、弱い兄貴だと嘲笑ってないって言い切れるんですか？」

「……」

「アンタはもう自覚してるはずだ。三年間誰にも寄りかからないでやってこれたんでしょう？ 敵と見做した相手には冷酷なまでの殺意を感じるんでしょう？」

仁は黙ったまま。静の言葉は全て正鵠を射ていた。

「もうわかってるんでしょう？ 誰も信用しちゃいけないって。結局裏切らないのは自分自身だけって。だったら……全部敵だと思えばいい」

村雲が何か口を挟みかける気配があった。だがそれを齒牙にもかけず、静は言い切った。

「自分ひとりで処理しきれないなら、いっそ狂ってしまえばいい」
仁は電信柱のように、立ち尽くしてその言葉を聞いていた。

第三章 第百話…奇遇

その晩、仁は突然むくりと起き上がった。起きてみると、彼の体中が熱帯夜のようにじっとりとした汗で湿っていた。半身を起こした状態でしばらくじっとしていると、今度は濡れた体が室温に噛みあわず、小さく身震いする。布団も毛布も押し退けて仁はベッドから出た。

テーブルの上に置いたタバコをそつと掴むと、ドアを開けて静かに部屋から抜け出した。

夢に見るのは久しぶりだった。暗闇の中だった。突然現れた、自分が知る、生前の黒川堅固。それが一瞬で真っ赤に染まり、倒れる。刹那に見たあの目は、死体の目は……交錯するは、ミルフィリアの両親。近藤の最期。倒れ伏した黒川の死体を見ると、不意に彼らの姿が暗闇に浮かび上がった。皆同じように、自分が思い浮かべた通りに、無機質な目を向けている。何も言わず、ただじっと。

携帯の外部ディスプレイには、午前三時半と出ていた。

六ちゃんの店に行くには遅すぎた。麻雀を打つような気分ではない。仁は身の振り方に困っていた。何となしに中庭には出たものの、雲の合間から申し訳なさそうに顔を出す半月が僅かに照らす、薄暗い世界が広がっているだけだった。

「村雲……」

仁の腰には、村雲も静もいなかった。精霊でも眠るのだろうか。仁の呼びかけは虚しく、しんとした空気に飲み込まれていくだけ。街に出よう。足を動かしかけたとき、背後から自分を呼ぶ声に、仁は振り返った。声の主はやや小走りに仁に追いつく。

「こんな夜更けにどうしたんですか？ 高坂先生」

「その呼び方はなしです」

母方の祖母がアメリカ人だという少女。フロイラインの元幹部。今はこの学園で教師をしている。主に二年生に青魔法を教えているらしい。仁の隣まで歩きつくと、歩をとめた。

「……眠れないんです」

へえ、と仁はそっけなく。いざ人が現れると、自分が一人でいたいのか、誰かといいたいのか、判断がつかなくなるのだから始末におえない。

「何の気なしに校舎をうろうろしていたら、貴方を見つけました」にこつと笑う。寝起きという顔じゃない。本当に一睡も出来なかったのか、仁と同じように目が覚めてしまったのか。

「深夜徘徊じゃねえか」

「貴方もね」

「それもそうだ」

仁もようやく歯を見せた。

「ねえ…… ドライブに行きませんか？」

ミルフィリアはジャケットのポケットから車のキーを取り出して見せた。

道もすっかり仁の知るものとは違い、恐らくは神奈川まで下っているのだということだけは推測できるぐらいだった。深夜の高速道路は車の通りも少なく、昼間の世界とは様相が大きく異なる。たまに大型のトラックが右車線を恐ろしいスピードで駆け抜けていく。ミルフィリアはのんびりと左車線を百キロに満たない速度で走っていた。

「私は人を一人殺したことがあります」

助手席の仁はチラリと隣を窺ったが、ミルフィリアの視線は前を向いたまま。

「以前貴方に偉そうなことを言いましたが、私もその耐え切れない、心が壊れてしまう一人なんです」

本当に人を殺せる人間は三割程度云々というやつだ。仁はもう何本目かもわからないタバコを取り出した。ミルフィリアは特にタバコを嫌がらなかった。

「一人殺しただけで…… 夢に見るんです」

「……そうか」

「小さな女の子でした」

「……」

紫煙が旋回するように、二人の間にたゆたっていた。

「顔を見られた以上、殺すことが掟です」

何の仕事をしていたのかは分からないが、それは絶対の掟らしい。フロイラインはそうして構成員を闇の中に保っているのだった。

「まだ十歳くらいの子供でした」

苦痛をこらえるように、ミルフィリアの端正な顔が歪んだ。

「水の塊をぶつけました。最後の最後まで少女はきょとんとした顔をしていました。人形みたいに動かなくなりました……」

仁の閉じられた口から、唇の隙間から、声にならない声が出た。彼には容易に想像できた。人の最期を知る彼には、彼女の心情が否応なしに。

「私はフロイラインを逆恨みしました。自分の身勝手なお願いを聞いてもらった代償に加入した組織を」

「……仕方ない」

黙って聞いているつもりが、仁の口からは声が出ていた。彼女に言ったのか、自分に言い聞かせたのか。

「私はどこまでも自分本位なんです。どこまで行っても自分が助かることしか、自分の心を助けることしか考えていないんですよ」
仕方ないんだ。そうしないと……

二人はそれきり何も話さなくなった。

第三章 第一百話：辿り着いた母性

海面は風で、波の音は静かに、耳をこらさなければ聞こえないほどだった。夜半の海は光もなく、黒々とした、何か大きな生き物の体表のようで薄気味が悪い。ミルフィリアは夜明けくらいに着くことを想定していたらしく、何だか怖いですね、と苦笑した。

「落ちたら凍死するかな？」

仁は波止場から、下を覗き込んで言った。テトラポットの底のほうに、藻のようなものがびっしり絡みついていた。

「……私が引き上げます」

「……」

仁がゆっくりと体を戻した。

「貴方がそうしてくれたように、私もまた貴方の味方であります」

「……坂城にも言われたよ」

無機質な声だった。

「私達では役不足ですか？」

「そんなこと言っちゃいない」

ミルフィリアはブーツを踏み鳴らし、仁に背を向けた。

「私は貴方が居てくれてよかったと思いました」

「……何の話だよ？」

「父様と母様を……元に戻した日のことです」

仁から数メートル離れた場所でミルフィリアは立ち止まった。

「私は近藤に一度会ったことがあります」

仁の体がピクリと動いた。

「……さっきから何なんだ？」

「フロイラインは横の繋がりはほとんどありません。皆涼子から指示を受けて、それぞれの仕事をするだけの縦割りです」

仁は黙って聞くことにしたのか、その場に腰を下ろした。

「私が出会った他の幹部は、彼と緑の少女だけです」

「……」

またコツコツと、座り込む仁の手前まで戻ってきた。

「会ってよかったと思います」

「……俺もだ」

小さく呟いた。

「とても強い人でした」

「そうだな」

自分なんか比べ物にならないくらい。一度決めたことなら、歯を食いしばってでもやるんだ。強い意志。折れない心。

「フロイラインはドイツ語で、令嬢という意味です」

「そうだな」

仁はドイツ語を大学で少し齧った。

「その名のとおり、女性たちを束ねた組織です」

「そうなのか」

「近藤だけが、特例で加入しました」

漁から戻ってきたのか、寄港するのか、小さな灯りが遠くに見えた。

「彼にどうして汚れ仕事を率先して請けるのか、聞きました」

「……」

「彼、なんて答えたと思います？」

何となく仁には近藤の答えがわかるような気がした。彼ならどう言うか。

「たまたまだよって」

「嘘だな」

ええ、と力なく笑ったミルフィリアはそのまま続けた。

「恐らく私達に回らないようにしていたんだと思います」

仁はどのようなもなく、目頭が熱くなるのを感じていた。あの人は、誰の感謝もなく、それでも思いやりを持っていた。そんなものが罪滅ぼしになるなんて、心を軽くするなんて、これっぽっちも思っていなかった筈だ。どうしてそう強くあれるんだ。かつての英雄の姿を重ねて、仁は自分の矮小さに打ちのめされるようだった。

「彼ほど強くなくても…… 三割に入っていないなくても、救われる道はあります」

仁はミルフィリアの顔を見上げた。目には涙を溜めているその姿は、彼女よりも年上の男性にはとても見えなかった。

「私はそれを貴方に教えてもらいました」

「俺はそんなこと……」

「いいえ」

優しく、ゆつくりと、首を横に振った。

「自分ひとりで抱えきれないなら、誰かに背負ってもらえばいいのです」

しゃがみこんで、仁の顔を覗きこんだ。むくれている幼稚園児を慰める保母さんのようだった。

「こんな簡単なことに今まで気付けませんでした。いえ…… 忘れていたんです」

「それで本当に……」

「貴方もう分かっているんでしょう？ だから妹さんを頼っている」

「……」

「貴方が思うほど、女の子は弱くありません」

ミルフィリアは微笑んだ。

「貴方の妹さんも、遊庵も、私も、貴方が辛いときは傍にいます。話しくらいは聞いてあげられます」

「……」

「貴方は一人ではないですよ」

気がつくと、仁は全てを話していた。祐の言葉に思い出した黒川のこと。奈々華には話せずにいたことを全て。ミルフィリアは時折、優しく相槌を打ちながらそれを聞いていた。

第三章 第二百一話…詮無き哀悼

一週間はすぐに過ぎた。仁は断頭台に登る罪人そのままの心境で祐を迎えに中庭に出ていた。事情を知る坂城、ミルフィリアも、授業の都合をつけて立ち会った。奈々華が隣から不安げな顔で兄を見つめている。

近藤祐は、緑魔術に対して非凡な才能を持っており、いとも簡単に編入試験を突破してしまった。彼は一般の中学校に通っていたらしいが、それでも魔術の研鑽を怠らなかったようだ。近藤の言いつけなのかな、と根拠もなく仁は推測していた。

祐は黒い綿のパンツに、同じく黒のジャケットを合わせ、黒い革靴を履いていた。統一された服装は、彼のルックスと相まって非常に映えた。しかし仁の目には死刑執行人。一步近づいてくるたびに、緊張の色は濃くなっていく。遂に仁たちが並ぶ中門の前まで祐は辿り着いた。

「こんにちは」

奈々華が声をかけた。明るく、友達に話しかけるように。祐も短く挨拶を返す。年代の可愛い少女に声をかけられて、祐は歳相応に恥らっている。その姿に仁は少し気が晴れるような思いだった。

「……その、こんにちは」

思い切ってかけた声は、祐の顔を瞬時に強張らせた。

「よく出迎える気になったね」

嫌味にも聞こえたし、純粹に不思議がっているようにも聞こえた。

「まあいいや。それで僕の部屋まで案内してくれるんだろう？」

小さく笑んだ。それは仁に向けられている言葉だった。仁にだけ向けられている言葉だった。ああ、と頷いた仁は隣の奈々華に目を配りたい衝動を何とか抑えた。

「ありがとう。じゃあ行きましようか」

奈々華も、ミルフィリアも、坂城も、同伴を願い出ようとしたが、祐の目に強い光が宿っているのを見て、口を閉じざるを得なかった。

どうしようもなく重たい空気。廊下を歩く仁は、隣で歩測を合わせてついてくる少年に声をかけられずにいた。仁は顔が見えないように、先導しようと歩を早めたが、それを許さなかった祐によって、今の状態となっている。見慣れた石の壁が、赤い絨毯が、すべからく仁を監視しているような、弱い部分を曝け出す仁の全ての動向を逃さずに見ているような、おかしい感覚に陥っていた。階段はまだなのか、と心の中で呟いた。

「ねえ、父さんの最期はどんなだったの？」

仁はそれが糾弾の言葉だと思った。呼吸が苦しくなるような罪悪感を感じながら、祐を見る。そこには単純に父の最期を看取った人間に、その様子を聞いている息子しかいなかった。仁は洗いざらい話した。禁忌に手を染めてまで勇猛に立ち向かってきたこと。壮絶な覚悟を以って大魔法を放ったこと。最期まで弱さを見せずに息を引き取ったこと。今になって仁は思う。手紙には息子に何もしてやれなかったと述懐してあったが、そんなことはないはずだ。彼はやはりこの少年を養うために生きていたはずだ。それを汲み取っていたからこそ、祐はこんなにも自分を憎んでいるんだと。息子と同年代の少女の手を汚さないようにしていたのだと。話している間も歩き続けていたのに、階段は一向に姿を現さなかった。

「そっか……」

祐はそれだけを呟いた。聞いている間ずっと、彼は前だけを見て、仁と目を合わせなかった。たまらず謝罪の言葉を口にしかけて、仁は自分を殴りつけたい衝動がこみ上げるのをじっと堪えていた。

「父さんはやっぱり父さんだったんだね」

声は涙ぐんでいた。この賢い少年はきつと、父の苦悩を、父の覚悟を、全て悟っている。

「わかってはいるんだけどね」

仁は続きを待ったが、祐は目元を拭うだけだった。喋ることを許されたのだと、ようやく理解した。

「……何を？」

仁は歩く速度を緩めた。祐は立ち止まりそうな速度で歩いていた。

「アンタが悪いわけじゃないんだって」

そうじゃない。悪いのは俺だ。言ってやればこの少年は憎しみだけに焦がれて、強く生きることが出来るのだろうか。仁にはそれが出来なかった。

「手紙にもあった。アンタを決して憎むなって。彼は当然のことをしたまでだって。たまたま最後の相手が彼だったんだって」

「……俺は」

本当にそうだろうか。もつと違う道があったんじゃないだろうか。近藤をもつと早くに止める術はあったんじゃないのか。もたもたして、本気で止めようとしなかったのが、彼の決死の覚悟に見合う覚悟を決めるのが遅かったから、彼を死に至らしめたのではないのか。腕の一本や二本、失ってでも炎の中に飛び込んでいけば……彼と自分と祐と。笑って過ごせたんじゃないのか。

「君を殺したら、今度は君の妹を殺す」

彼は自分の大切なものを、教えてくれた。覚悟を決めさせた。何て賢い人なんだろう。何て優しい人なんだろう。何て強い人なんだろう。

「俺が死ねばよかったんだ」

祐に聞こえないように、小さく、小さく、口の中で呟いた。

第三章 第百三話：労働の勧め

仁はそれから部屋に着くまでの間、近藤の遺産を明け渡そうと思っていること、遺体はとある機関にあり、しばらくすれば戻ってくることに、当然にそれも引き渡す用意があることを祐に話した。役所の人間のように、ひどく事務的な語り口調になっていた。祐はそれを聞いているのか、聞いていないのかわからない、感情の抜け落ちた顔で前を向いたままだった。

祐の部屋は仁たちの部屋からそう離れていなかった。階段に近い側から、小等部、中等部、高等部の学生が居を構える、その中等部の一番奥側、高等部との境に位置した。部屋の前まで着いた頃には、祐は涙を止めていた。

「ねえ、お金のことなんだけどさ」

「ああ」

どうやら聞いていたらしい。

「実は父さんは僕に十分な額を遺してってくれたんだ」

よく考えれば、あの近藤が息子に何の貯えも遺さないまま一人にするはずもなかった。

「……じゃあどうして？」

「言っただろう？ 父さんの手紙にあったからだって」

彼には仁と関わりあわないという選択肢もあったはずだ。それをさせなかったのが、近藤の遺志。賢い祐は忠実に父の最後の言いつけを聞き入れた。つまり仁の質問は愚問中の愚問ということ。

「アンタには懸賞金で払えみたいなこと言っただけどさ、僕もあれから考えたんだ」

祐は真剣な顔を作った。

「アンタには、働いて僕の養育費を出してもらいたいんだ」

その目に強制力があつた。しばらくその目を逃げずに正面から捉えていた仁は、数瞬の後、神妙に頷いた。

「……わかった」

仁の承諾を聞くと、祐も一つ頷いた。

「まあ、これから…… 仲良くは出来ないだろうけど、よろしく」
それだけを言い残して、部屋の中へと消えていった。

奈々華は既に部屋の中で待機していた。戻ってきた仁の姿を見ると、すぐさま寄ってくる。膝の上に乗っていたシャルロットが転げ落ちて、床の上で腹を見せた。

「お兄ちゃん」

「ただいま」

いつもどおり。

「苛められなかった？ 嫌なこと言われなかった？」

茶化すような言葉を選ぶのは、氣遣いだった。外套を手渡して、仁は苦笑した。

「大丈夫だよ」

しばらく兄の顔を見つめていた奈々華は、その言葉に裏がないかどうか判断していた。

「坂城とミリーは？」

「……」

「奈々華？」

「あ、うん。授業と仕事に戻ってたよ」

奈々華は一瞬暗い表情をしたが、すぐにいつもどおり明るい声で答えた。

「俺、働くよ」

奈々華はそれを聞いて、宇宙人にでも出くわしたような顔をしている。危うくコタツのコードに足を引っ掛けて、お盆に乗せた湯飲みをひっくり返しそうになった。

「ど、どうしたの？ やっぱり何かされたんじゃないの？」

「……おいおい」

「だって変だよ。今まで働こうとしなかったじゃない！」

湯飲みを置いた奈々華は血相を変えて仁の隣に座る。

「いくらパチンコで負けても、競馬で負けても、絶対に働かなかったじゃない！」

「……そうだけでもさ」

「すぐに学園長さんにお金を貰いに行つて…… 働くのをあんなに嫌がつたのに」

本当に心配げな表情をしている。

「今までだってそうしてきたでしょう？ タバコが買えなくなるくらいになってようやく短期のアルバイトを探したり、最悪生活費から取ろうとしたりして」

兄妹は毎月、父親の仕送りから生活費を差し引き、その残りを小遣いとして二人で分け合つて暮らしていたのだが、仁はそういう盗っ人紛いのことも前科としてやっていた。つまりぐうの音も出ないほどにその通りではあったのだが、仁は何とか奈々華を落ち着かせる。

「俺だって働きたいわけじゃないんだが……」

奈々華に祐の意思を伝えた。

「囚人が労働させられるのはさ。きっと自分の身で働いて何かを得るってことの素晴らしさを再確認させるためなんだよ」

「……そうだけど」

「だから働くってことは大事なんだよ」

「……」

まさか兄の口から、そんな言葉を聞く日が来るとは思ってもみなかった奈々華は言葉を失っていた。

「祐君もそういうことを考えているんじゃないかな」

恐らくはそう、仁に罪の重みを常に忘れないようにという意図が含まれているのだろう。純粹に仁を苦しめたいなら、もっとやりようがある。仁と奈々華は街へ求人雑誌を取りに行くことにした。

第三章 第百四話：世知辛い世の中と日頃の怠慢

魔術師というだけで仕事には困らないこの世の中、しかし仁は取ってきた求人雑誌の頁をくりながら、ううんとかああとか情けない声で唸っていた。黒魔術師の求人などあるはずもないのだ。

「ないねえ」

奈々華も一緒に働くと言って聞かなかった。奈々華の白魔法は需要もあり、医療機関では引く手数多ではあったが、仁と共に働かなければ意味がないので、右に同じく難しい顔をしていた。

仁は頁を遡る。面白いことに、求人雑誌は魔術師専門職と一般職で項目が分かれている。前半が一般職、後半が魔術師専門職という構成。仁はつまり魔術師としての能力を生かした仕事を諦めたのだった。

「コンビニは？ お兄ちゃんやったことあるでしょう？」

奈々華が一冊の雑誌の頁を指す。仁は確かに大学一年の頃に少し働いたことがある。もつとも二ヶ月ともたず辞めたが。

「……自給がなあ。てか何で奈々華知ってるんだ？」

言って、仁はしまったという顔をした。暗い表情をするかと思われた奈々華は、しかしバツが悪そうな顔をした。何かを誤魔化そうとするときの顔だ。

「それくらいはわかるよ。離れてても」

まさかストーカーのようなことをしていたとは言えないのだった。全く不可解な言い訳だったが、仁も空気を悪くしたくないのでそれ以上言及はしなかった。

「交通整備とかは？」

仁が答える前に、奈々華がやっぱりダメだと声を上げる。

「昼間か深夜しかないや」

いつの間にか言いだしっぺの仁よりも熱が入っている。仁としては

彼女がどうしてこんなにやる気になっているのかわからなかったが、意識改善の兆候と見て取ったのだろうと解釈していた。奈々華は直接言葉にはしないが、平素から仁のダメっぷりを危惧している節がある。

「なかなかないよなあ。月払いにしても学費が五万くらいか。生活費も五万くらい？ 難しいな」

私立の学校にしては良心的な学費ではあるが、学生が働いてまかなうとなるとやはり厳しい。仁は恨めしそうに手元の雑誌を後ろから捲った。そこそこの自給と、待遇を保証するという旨の文字が踊っている。

「もしかすると、祐君はこういうのも加味してるのかもな」

「どういうの？」

「俺の主属性では魔術師の求人は得られない。一般職で額に汗して働かなきゃいけないってことを見越してさ」

確かに楽々稼げては意味がない。仁の推察はあながち間違っていないかもしれない。

「そうだ！ 当たり屋とかは……」

「叩くよ？」

坂城に相談をしに行くことにした。

坂城は事情を聞くと、うんうんと頷き、自室に戻って行った。何事かと顔を見合わせていた兄妹が呼び戻しに行こうとした矢先、一枚のクリアファイルを持って帰って来た。

「うちにも苦学生がいけないこともないからな」

そう言ってそれを仁に手渡す。この学園はアルバイトを社会勉強の一環と見ており、容認、或いは奨励の立場を取っているのだそうだ。中身はその言通り、魔術師専門職の求人であった。読んでいくうちに、主属性は関係なく、魔術の素養があれば出来るようなものもあるらしかった。魔術師専門の塾の講師がほとんどだが。

「こんなものであるんだな」

「ああ、うちの生徒の中にも通う者もいるし、他のそれほど魔術師養成に力を入れていない学校に通う、これまたうちに来れるほどの素養のない生徒なんかが利用する」

へえと仁。確かにそういう需要もあるだろう。上手く素質を開花させれば、将来は安泰だ。自分の子息にそういう可能性があるなら、金を払ってでも教育を施すのが親心といったところか。

「これなら俺が黒魔術師だってなくても苛められないか？」

入学当時にくらった、クラスメイト達の白い目が思い起こされる。

「君の主属性を明かさなければな」

仁と奈々華が一樣に明るい顔をする。自給も条件をクリアしている。

「教えるのは、魔術理論などの基礎的なことが多い。後は精霊との同調の仕方とかな」

「……」

仁の表情が凍りつく。奈々華もまたそれはマズイという顔。

「どうした？ 授業で言っている内容でまず問題はないのだが……」
坂城もまたようやく二人の表情の意味を悟った。

「俺が授業を聞いているわけないだろう」

第三章 第百五話…汚れ仕事

坂城は険しい表情のまま、顎に手をあてて考え込んでいた。結局今からまた授業のやり直しのようなことをするのは、非効率に過ぎるということ、仁は塾の講師は見切った。その決意を聞いた坂城は、ずっとそうだった調子なのだった。

「どうしたんだろう？ 電池が切れたのかな？」
奈々華は別段気にした風でもなく、動かなくなったオモチャを見るよう。

「ゼンマイじゃないのか？」
呑気にうけあう仁。坂城がキツと二人を睨んだ。考え込みながらも聞いていたらしい。

「誰のために悩んでいるかと思ってるんだ。全く。そんな調子で来年の進級試験は大丈夫なのか？」

中谷精霊魔術学園は、年に一度の進級試験でその成績が決まる。泣いても笑っても一発勝負。坂城の見立てでは奈々華は進級は問題ない。仁はかなり怪しいといった所。

「……まあいい。今は君の償いについてだからな」
償いという表現は、坂城は何の気なしに使ったが、妙に正確だった。仁も奈々華も黙って続きを待った。

「本当はコレは紹介したくはなかったんだが……」
勿体つけるような茶目はなく、ただその言葉はその意味どおりだった。

「何なんだ？」

「はぐれ精霊狩りだ」

短い言葉。

「いつか授業でやった？」

ああ、と一つ頷いて、坂城は説明を始めた。

「授業で行ったのはあくまでも氷山の一角を突いただけだ」

「まあ、そうだろうな」

現在十人に一人の割合で魔術師がいるという。いくらなんでも学生のボランティアで狩りつくせるほどのレベルではないはずだ。

「専門の機関がある」

国から援助を受ける組織。独立行政法人という呼び名が相応しいのかは知らないが、仁はそれに近い組織なのだろうと位置づけた。

「何だ。おあつらえ向きじゃねえか？」

「大岩の辺りまで戻ってこようとする精霊と同じとは思わないほうがいい」

坂城は苦々しく言う。

「もと居た世界に戻ろうという殊勝な心を忘れ、人間に迷惑をかけることに何ら躊躇いを持たない、或いは、積極的にそうしようとする気性の荒いものばかりと聞く」

「なるほど」

それが紹介したくなかった理由か。どうする、と坂城が顔を近づける。断って欲しいといわんばかりの表情だった。

「やるよ…… 紹介してくれ」

他により良い仕事があるようには思えない。仁は心配げな友と妹に、鷹揚に頷いてみせた。

それから一時間と少しで、一台の軽トラックが学園の前に停まった。坂城の話では万年人手不足ということらしかったが、新人を一人派遣すると言っただけで、このがつきようは尋常ではない。白い車体から、青年が降りてくる。どうやら外国人のようだ。

「こんにちは。お話しを伺いまして、研修地まで案内する者ですよ」所々イントネーションがおかしい。語尾も不安だ。東欧系なのだろうか、黒い髪に彫りの深い顔立ちをクシャツと人懐っこく歪める。この場には仁一人だった。奈々華は当然、一緒に働くと言ったが、それを制して自室に帰した。あの説明を聞いて、妹を連れて行こう

などという思考は働かない。

「よろしく願います。ええっと、城山仁です」

「シロヤマさん」

「仁で結構です」

仁が他人に対して自分の呼び名を指定したりすることは非常に珍しい。この外国人が日本語がそれほど達者ではないことと、彼が悪い人間には見えなかったことがそうさせたのだった。

「ジンさんですね」

そんな気遣いを知ってか知らずか、青年はもう一度破顔した。まだあどけなさを残す笑顔。仁よりも年下かもしれない。仁はそこから、彼の指示に従って軽トラックの助手席に座った。

第三章 第百六話：職場

外国人は、ヒメネスと名乗った。ファミリーネームかファーストネームかも仁はわかりかねたが、彼の性格からもファーストネームを言ったのだろうと判断していた。ヒメネスは本当に人懐っこかった。曰く。

「私が一番下っ端。ジュニアが出来るの嬉しい」ということらしい。ジュニアというのは後輩という意味で使っているのだろうか。とにかくよく喋る。

「日本人ミナ優しい。ここで働けてよかった」
にこにこ笑う。

「仕事キツイけど、すぐ慣れるよ。絶対」

時折仁を気遣うようなことも言った。仁はそれら全てに、「うん」とか「そうだね」と相槌を打ってやった。仕事上は先輩にあたるのだが、どうにも敬語を使う気になれなかった。またそれを彼自身、少なくとも嫌がるような素振りは見受けられない、望んでいるような気がした。

「ねえ、本社に向かっているの？」

一文一文ぶつ切りのように繰り出されるヒメネスの話の隙間を縫うように質問した。まだどこへ行くのかも聞いていない。一応役所仕事に近いのであれば、キッチンと本社に行くのか、直接勤務地に行くのか。組織の全体図も、体質も分からない仁は取り敢えずそう聞いたのだが。

「ほんじゃ？」

「ええっと、会社のこと」

そう言い直すと、またにこつと笑った。

「そう、会社だよ」

その会社がお偉いさんがいるところなのか、現場の各所の一つなのか、結局わからずじまい。ヒメネスはそれから祖国のだという歌を

歌い始めた。

車は小一時間ほどかけて、西中谷の外れに停まった。途中オフィス街を抜けたことも考えると、本社ではなく、直接の勤務先につれて来られたようだった。辺りは工場が立ち並ぶ。アクリルの屋根を貼っただけのようなものや、本格的に作られた煙突付きの建物。頑丈な鉄の倉庫などもちらほら。皆西日を受けてオレンジ色に染まっていた。勤務地は小さなプレハブで建てられた、事務所とも言いがたい簡素な作りだった。壁を叩くとしなるのか、拳がめり込むのか。少なくとも仁の拳を弾き返すような頑強さは窺えない。二階建てで、敷地内には軽トラックがいくつも並んでいる。駐車場というよりは空き地。トラックの腹の下には雑草が茂っていた。工事現場の仮設事務所を思った。

「ヒメネス……さん。ここで合ってるの？」

思わず聞いた。カンカンと骨組みも見える粗末な階段を先に上がるヒメネスはくると仁を振り返った。

「合ってるよ。絶対」

絶対という言葉が気に入っているらしく、道中の会話でも何度か聞いた。

二階の建てつけの悪い引き戸を開けると、中で中年のおじさんたちがタバコを吸ったり、飲み物を飲んだりしてくつろいでいた。その数、三人。これまた安っぽい折り畳みのテーブルと椅子に座っている。

「おう、ヒメ。連れて来たか」

歳相応、ではなく、歳の割りにスリムな体型をした一人が椅子から立ち上がって、仁を見た。よく見ると皆そういう体型をしている。腹の出た者は一人もいない。立ち振る舞いも何かしらの武道を嗜んでいるとわかる凛としたものだった。仁は三人に向かって深々と頭

を下げる。

「中谷精霊魔術学園から派遣されました。城山仁と申します」

「おう。そんなに畏まらんでもええぞ？」

残りの二人のうちどちらかが、仁の後頭部に声をかけた。方言混じりのそれは野次のようでもあり、氣遣っているようでもあった。

「俺がここの最高責任者だ。広嶋勝一ひろはたしやういちって言う」

最初に立った一人が、すっと手を差し出してくる。仁はそれを受け取って握手した。数秒の後、手を離れた男が、懷にその手を放り込む。

「名刺は…… まあ、いつか」

恐らく名刺など持たないであろう、学生の仁を氣遣ったのだろう。

「よろしくな、城山くん」

仁は既にこのときには少し緊張を解いていた。

第三章 第百七話：献花

書類上の手続きだけで今日は開放された。仁は学園に戻っていた。職種柄、保険関係の書類が累々。署名と押印だけでも肩が凝る思いだった。ヒメネスが送ると言ったが、毎度甘えるわけにもいかない。坂道をゆっくりと自分の足で上がっていた。歩くと恐らく勤務地から二時間強かかる。

「チャリだな」

歩くたびに口から漏れる白い息を見つめながらひたすらに歩く。ふと人の気配を感じてそこから目線を切った仁は、意外な人物の姿を捉えた。学園の生徒はこの時間帯は自由に動いてはいけないはずだったが、そんなことは仁にも彼にもどうでもよかった。

「やあ、先輩。勤務初日はどうだった？」

坂城あたりが伝えたのだろうか。祐はゆっくりとその場から立ち上がると、いつもよりどこか翳のある顔で仁に向かい合った。

「いや、今日はまだ書類の手続きとかで、本格的に働くのは明後日から」

早口に捲くし立てた。ずっと視線を祐の顔から外す。

「そう……」

祐はくるりと踵を返して、先を歩んでいった。そこで、彼がその手に何か持っているのに始めて仁は気付いた。花だ。少ししなびた花が数本。夜目のきく仁には捉えられた。祐がしゃがみこんでいた場所を見る。今度は真新しい花が数本。白い花卉が夜の闇に負けじと瑞々しく咲き誇っている。

「そうか…… この場所は」

近藤が息を引き取った場所。ガードレールの向こう側、そこから数百メートルは離れている場所は、まだ戦いの爪跡は色濃く、草が生えきらない地面と、焦げて久しい朽木。ギチッと仁の奥歯が鳴った。

「俺は何の感慨もなく通り過ぎていたのか」

忘れたわけではない。なのに、花を供えることもしていなかった。遺体がないから。そんなことは何の言い訳になろうか。墓標はまさしく、標でしかない。そこに哀悼を捧げられないなら、ただの形骸。逆をかえせば、例え何もない空間であろうと、それを募らせれば、立派な墓となる。死者を弔う心こそが墓を墓にする。そんなこともわからず、五つも六つも歳の離れた少年に気付かされる。仁は一つ大きな溜息を吐き、家路を急いだ。

「ちよつとは元気出したらどうなんだい？」

シャルロットはどこか儚げな主を見上げていた。一人で帰ってくるなり、奈々華は心ここに在らず。

「……」

「ちよつと……」

もしかして聞こえていないのかとシャルロットはもう一度声をかけようとした。そこで奈々華の口が動いた。

「ねえ、私って何も出来ないのかな？」

奈々華の返答は、およそシャルロットの前言と噛み合っていなかった。しかし賢い猫は奈々華の心中をそれだけで少しは察した。

「お兄ちゃんの手助けなんて出来ないのかな？」

奈々華の目はどこか焦点の合わないまま、二段ベッドの下の段あたりに彷徨っていた。

「アイツが自分でどうにかしなきゃいけない問題なんじゃないのかい？」

そんな正論がこの少女の心を少しも落ち着けないのを知っていながら、シャルロットはそう言うしかなかった。奈々華がふっと顔を下に向け、コタツに半身を入れた飼い猫を見た。

「私はあの人の苦しみも代わってあげられない。戦闘で手助けすることも出来ない」

ならば償いの手助けをと、息巻いていたのだが、この有り様。

「自信なくしちゃいそう」

せめて茶化すように笑って言えば、シャルロットも慰めの言葉が出たのかもしれない。悲しげに寄せられた眉が見るものの心を締め付けるようだった。

「嫉妬しているのかい？」

戦闘で手助けの出来る坂城に。新たに加わったミルフィリアに。

「怒っているのかい？」

更にその二人は仁が本来奈々華にこそ語るべき彼の心中を聞いている。無遠慮に奈々華の立ち位置にまで侵食してくる新参者たち。奈々華は答えなかった。答える代わりにまた憂いを帯びた顔を上げ、見るともなく兄がいつも眠る場所に目を向けた。

第三章 第百八話…唐突

翌日は日曜日。長い一日が始まった。

「白の幹部の居所がわかった」

朝一番にやってきた坂城の第一声はそれだった。城山兄妹は無遠慮な来訪よりも、その言に驚いて朝食をとる手を止めた。ブラウン管の向こうでは朝の占いコーナーが流れていたが、二人はもっと直接的に未来の運勢を決めるであろう者の顔を穴が開くほど見つめていた。

「おいおい。アイツ等は人相も何もわかってないんじゃないのか？」

ややあって仁が口を開く。疑問はもつとも。坂城は詳しく話し始めた。密偵からの情報で、白の幹部が襲撃に備えて、日本に入ったということ。都内のホテルの一室に泊まる外国人をそれと認めたこと。それに際して、ミルフィリアを現場に向かわせ、確かに平内涼子と面会しているのを確認したこと。

「それじゃあ、平内も？」

坂城は首を横に振る。

「帰ったみたいだ。どこにかはわからないが」

今は白の幹部が居るだけ。二人は顔を見合わせ、相互の见解が一致しているのを悟り合った。敢えて口に出したのは仁。

「罠だな」

そんなおざなりな情報管理、わざわざ組織のトップが出張って、今更現地に入った幹部に指示を出す。そんなことが有り得るはずもない。

「或いは攪乱か」

その思考に陥らせること事態も向こうの思惑にあるのかもしれない。坂城も仁の言葉に深く頷く。

「ミルフィリアは？」

彼女はまがりなりにも、その組織に属した人間だ。意見を聞くべきだろう。

「……それが」

何か思うところがあるのか、坂城は言葉を濁した。

「とにかく詳しく協議しよう。学園長室で待っている」

坂城は神妙な顔つきで、そのまま部屋を出て行った。

「うって出ましょう」

ミルフィリアは語気を荒げるでもなく、冷静に言葉を発した。学園長室。坂城、ミルフィリア、仁、奈々華。四者がそれぞれソファ―に座って向き合っている。

「罨くさいが？」

仁が答える。

「ええ。本当なら様子見でしょう」

ミルフィリアはそう断ってから、一度居ずまいを正した。

「白の幹部は、涼子に命を救われたと聞きます。その件もあってか、絶対的な忠誠を誓っています」

「……それが？」

「何をしてくるかわからないということです」

「だから？」

今度は奈々華。ミルフィリアを除いた三人はよく状況が飲み込めていない。彼女の言わんとしている事を察しかねていた。

「裏を返せば、目的の為ならなんでもするということです」

「婉曲はやめろよ。何をしてくるってんだよ？」

仁が先をせかす。すると少女の隣、坂城が徐に口を開いた。

「聞いたことがある。他の学園が襲撃された時、個別に生徒が狙われ、死者も何人か出たという」

「彼らは罨に嵌めたがっています。それを遂行するためなら強引な

手段も躊躇わないでしょう」

バレて尚ゴリ押してくるのだから性質が悪い。その罠に絶対的な自信を持っていると言ってもいい。

「恐らく挟撃か、二点同時攻撃でしょう」

「……そうだろうね」

坂城が地図を引っ張り出す。都内の地図だ。学園に青いサインペンで丸をつける。そこから少し離れた場所に赤い丸をつける。ホテルだ。そこに白の幹部が居ることか。

「我々の戦力は私と、貴方」

ミルフィリアが仁を指差す。

「人を指差しちゃダメだって教わらなかったか？」

「遊庵は本来なら数にカウントしたいのですが、0・5人として数えるべきでしょう」

仁の軽口を無視して続ける。仁も取り合ってもらえるとは思っていなかったらしく、チラリと坂城の右腕の辺りを見ただけだった。

「つまり全部で2・5人の戦力をこちらは保持しているわけです」

その1という数は、一人で相手の幹部を相手取れる、若しくは撃破できるという算段が立つ人数のことだ。そこで奈々華が元氣良く手を挙げる。

「はいはい。私は？」

「マイナス1かな」

仁が答える。

「どうして減る？」

奈々華には戦場に立たせる気は毛頭ない。ミルフィリアがパンと手を合わせた。皆彼女を見る。

「本来なら戦力は分散させたくないのですが、状況が状況だけにそうも言ってもらえません」

黙って続きを待った。

「しかし、突入部隊が挟撃を受けたとき、耐え切れるかが焦点になります」

挟撃というからには、二人以上の幹部が居るかもしれないということ。仁が当然その突入部隊に組み込まれるわけだが……

「部隊？」

「そうです。部隊です」

ミルフィリアは専守防衛の形で学園に残るのが筋。坂城がそれを補佐するのだろう。となると……

「私は奈々華さんをもう一人の戦力として数えています」

第三章 第百九話…パターナリズム

「反対だね」

仁がいつになく強張った顔で言った。

「妹思いもいいですが……」

「それだけじゃない。この子は実戦経験なんて皆無だ」

危険すぎる、と。奈々華の目も見ずに、仁はそう言い切った。

「君は反対属性の恐ろしさを知らない。一人同一属性の人間を連れて
いるだけで……」

「お前も賛成なのか？」

ぐっと顎を引いて睨むようにして坂城を見つめる。坂城は言葉に詰まりそうになるが、意を決して、そうだと肯定した。

「勝算を上げるためです」

ミルフィリアが後を受け持つ。冷静な指揮官としての判断。正しく冷たい。

「学園が挟撃を受けたら？」

仁は自分に理が少ないことを知っていた。それでも何とかして奈々華を引き連れない方法がないか模索していた。

「こちらの庭です。貴方達が戻ってくるまでは耐えてみせましょう」
パンと胸に手の平を当てて大きく頷くミルフィリア。

「だけど……」

「お兄ちゃん」

奈々華の静かな声。仁は知っていた。これが覚悟を決めたときの妹の声だと。

「私やるよ。お兄ちゃんの役に立てるなら」

奈々華の爛々と輝く瞳を見ると、仁は諦めたように口をつぐんだ。

「ダメだ」

仁は部屋に戻って来てからはそれしか言葉を発していないと言ってもいい。

「どうして？ 二人も私を連れて行くのが得策だって」

「ダメだ」

この押し問答。もう一時間近くなる。作戦は単純明快。夜の闇に紛れて、仁と奈々華の兄妹がホテルに強襲をかける。坂城とミルフィリア姉妹は学園に残って二点同時攻撃に備える。仁は二人の手前では了承したフリをしていたが、やはり奈々華を連れて行く気はないのであった。

「お兄ちゃんは授業を真面目に聞いていないから…… 反対属性の魔術攻撃を受けると大変なことになるんだよ！」

「……」

「私が居れば多少はその危険を殺げる……」
奈々華は必死の形相で訴えていた。

「ダメだ」

仁も断固譲らない。強い意志が感じられる声。

「どうして！」

「ダメなものはダメだ」

「……」

兄妹は睨み合うようにして対峙している。シャルロットも刀たちも声をかけられずにいた。

「私はお兄ちゃんが心配なんだよ？」

そんなことは言われるまでもなく、仁はわかっていた。だが答えは……

「ダメだ。お前はここで大人しくしてるんだ」

「……」

徐々に奈々華にも仁の強い意思は伝わっていった。

「私がいると足手まといだから？」

奈々華の泣きそうな顔を見るのは、仁にはこの上なく辛い。それでも心を鬼にしてでも。

「……そうだ」

「……」

奈々華は唇を噛みしめたまま顔を俯けた。

「攻撃が危ないなら食らわなきゃいい」

言うは易し。確かに仁ならばそれも可能かも知れない。だけど万が一にも食らってしまえば、闇を裂く光の一撃を受ければ、いかな仁とも言えず只では済まない。増して今回は多対一が予想される戦い。その可能性は飛躍的に上がっている。

「大丈夫。ちゃんと無事に帰ってくるさ」

仁は一度大仰に肩をすくめて見せる。

「……」

「俺を信じろ」

それは最後通告。これ以上は奈々華が踏み込んで来れないように、締めくくった言葉。奈々華は俯いたまま、言葉もなくそれを聞いていた。

第三章 第一百話：自転車と花

午前中は決戦前の最後のモラトリウム。仁は奈々華も誘ったが、ベッドの上で不貞寝を決め込む彼女から返答はなかった。仁は黙って部屋を辞した。一人で街に下りるのはいつ以来だろうと、努めて奈々華のことを考えないようにしていた。彼女の言い分も分かる。だが、それ以上に仁は奈々華に危険な目に遭ってほしくはなかった。例え自分が傷ついても、彼女さえ無事なら……

久しく触れていなかった外気は、昼間だというのに、身を切るように仁の体温を奪いにかかっていた。夜は雪が降るかもしれない。

「主は意外に不器用なのだな」

「……」

腰にさした覚えのない村雲の声。いつの間にやら。仁はそれでも嫌がるような素振りではなかった。決して歓迎もしていないが。

「お前が大切だと言ってやれば丸くおさまったのではないか？」

「どうか……」

奈々華は意外に頑固なのだ。そう言えば、逆に付け入る隙を与えたのではないか。兄のことを最優先に考える少女に、彼女自身の危険を理由に説得にかかるのはあまり賢くないと、経験上理解していた。

「あのままでは、あまりに不憫であろう」

「……不憫でも何でも、あの子が無事ならそれでいい」

本心。仁の目は僅かに細められていた。優しい顔。兄の顔。奈々華が愛している顔。

自転車と花。さすがに都会だけあって何でも揃う。自転車など前時代の遺物とでも言わんばかりの扱いを受けていると思っていた仁は、存外簡単に手に入ったので、改めて自分がいた世界との共通性を見出す思いだった。いかに魔術の利便性に頼る世界といえど、魔術師

以外が多数を占める社会。

花。その遅れた弔意に意味があるのか、自問しながらも、仁は赤い花卉をつけた彼岸花を買った。近藤には、あの赤く燃えるような生き様を見せた彼には、菊は似合わない。

仁は駅前の広場で足を休めていた。隅のほうにある自販機横に備え付けられた、簡易なプラスチックのベンチに腰をかけている。自転車はすぐ目の前にとめてある。落ち着いた色の車体は売れ筋らしく、仁の体格に合わせるという、二十八インチがベストだった、条件ながらも結構な出費となった。休日だというに京禮線は利用客が絶えず、駅の出入り口は大いに賑わっている。仁は身の振り方に困っていた。奈々華のいる部屋に帰ったところで口を利いてくれるか。かと言って他に行くアテもない。ギャンブルに興じる気分でもなかった。帰ろうと腰を上げた仁は、誰かの自分を呼ぶ声に顔を横に向けた。

「ジンさん！」

ヒメネスだ。駅のほうから出てきたということは、休日にどこかに遊びに行くのか。相変わらずの人懐っこい笑顔を振りまいて、仁の傍に駆け寄ってくる。

「何してる？」

「いや…… 自転車を買いに来てたんだ」

親指でくいと、傷一つない真新しい自転車を指す。ヒメネスは不思議そうな顔をしていたが、やがてそれが通勤用のものだど気付いて、また笑った。

「言ってくれば送り迎えするよ！」

子供のように手を挙げる。仁は少し人目を気にしたが、屈託のない笑顔を見ているうちに、気にならなくなった。彼は社交辞令を言うような人間ではない。付き合いは至極短いが、それくらいはわかっている。だから真っ直ぐに、自分を氣遣っているのだとも。裏表のない純粹な好意。羨ましいくらいに。遠く昔に自分は失ったものを彼は持っている。曲解と猜疑に囚われることを知らない。目を輝かせて仁の自転車を撫で回すようにしている少年を見ると、不意

に小さい頃の奈々華を思い出した。小学生の時、始めて買ってやった自転車を、今の彼と同じように、宝物のように愛おしそうにしていた。くるくると自転車の周りを歩き回り、飽きたかと思うと跨ってみる。ありがたいと、あどけない笑顔を見せる彼女を。

ヒメネスは用事があると言って、去っていった。あっさりと去る様も、遠慮や体裁など気にしていないからなのかもしれない。

第三章 第百十一話：石の壁

奈々華は布団を目深にかぶり、壁を見つめていた。石を積み重ねたような外貌は本当に材質が違ふものとは思えない。試しに手を出して触ってみる。ゴツゴツとした冷たい感触。それでいてどこか懐かしい。

「……お兄ちゃんみたい」

奈々華は正しく仁の真意を読み取っていた。自分を傷つけまいとした嘘。いや、嘘というのは正確ではない。確かに足手まといではあるのだろう。実戦経験のない自分が戦地に赴くというのは、即ち仁の危険も増すことに繋がり得る。

「でも…… あんな言い方って」

頭ごなし。自分の心配すらも頑として聞き入れない。今回は違うのだ。自分でも役に立つことが出来るかもしれないのだ。小さな溜息は、誰に聞かれることもなくその岩肌に吸い込まれるよう。シャルロットも決まりが悪いのか、アイシアと連れ立って散歩に出ている。刀たちも仁の外出に伴っていつの間にか姿を消していた。一人きりの部屋。奈々華は知らず、三年前のことを思い出していた。

奈々華には中学時代、親友と呼べる人間がいた。倉橋絵美里。くらはしえみり

帰宅部だった奈々華と、陸上部だった彼女とは、何故か馬が合い、入学初日に意気投合し、それ以来よくつるむようになっていた。彼女は奈々華を帰宅部ではなく、お兄ちゃん部と揶揄していた。帰りに迎えに来る兄と下校し、兄の身の周りの世話をするために放課後を使っていたのを知っていたからだ。彼女の部活が休みの日には、時折仁も交えて、放課後にどこかに遊びに行くことも少なくなかった。彼女は口には出さなかったが、奈々華が仁に肉親以外の愛情を持っているのを知っていたのだと思う。それを誰かに言うでもなく、

仁の話題をタブーとして扱うでもなく、極自然に接してくれた。奈々華は彼女が大好きだった。心から信頼していた。

仁が人を殺めた。噂はすぐに広がった。当然仁を奈々華の兄だと知っているクラスメイト達はこぞって奈々華を避けるようになった。今まで自分に言い寄ろうとしていた男子も手の平を返すのだから、奈々華は嘲笑を禁じえなかった。遠巻きに噂話をする彼、彼女等から、時折聞こえてくる単語は、「人殺しの妹」。奈々華はただ唇を噛んで耐えていた。耐えられたのは、倉橋が普段と変わらず接してくれたことに尽きた。彼女さえ、親友さえ自分を支えてくれたら。学校での居場所は彼女だけになった。

奈々華はその日、忘れ物をしてしまい、放課後の教室に一人戻った。あまり遅くなると、仁が心配するかも知れない。そのときには抜け殻のようになってしまった仁に、これ以上心労を与えてはならない。今でも引き返すべきだったと思う。忘れ物など明日でもよかっただろうに。いや、知らず過ごしていたならより滑稽だった。これで良かったのかもしれない。

「それで？」

教室の中から誰かの話し声が聞こえる。奈々華ははたと、戸にかけた手を止めた。

「ウン。マジできもい。エミちゃん、エミちゃんって」

奈々華は視界が白くなるのを感じた。動悸が早くなる。クラスメイトの質問に答える声の主は、聞き間違えようなない親友。倉橋絵美里その人だった。

「頭おかしいんじゃないの？ 人を殺した兄貴が居るってのに、今までと同じようにしようなんて」

クラスメイトが本当に精神障害者のことを語るように、侮蔑と嫌悪にまみれた言葉を吐く。倉橋は笑った。それが同意以外の何者でもないのは、声の質から容易に推察できた。

奈々華はそこで教室の前を後にした。帰るとき、チラと振り返った。擦りガラスの窓の向こうでは、倉橋が愉しそうに笑っている顔が見えた。もう振り返ることもなく、怪物にでも出くわしたように、階段まで全速力で駆けた。脳内では掻き消えない笑顔が延々と再生されていた。

第三章 第一百十二話…後悔

一人、拳を握り締めながら、帰路を辿った。無性に腹が立っていた。どうして兄は迎えに来ないのか。自分がこんなにも苦しんでいるのに。自分がこんなにも愛おしんでいるのに。顔も見せない。愛していると囁いてもくれない。もとはと言えば、倉橋をあんな風に変えたのは、仁じゃないか。このときにはまだ彼女に一縷の未練があった。情けない。女々しい。

帰宅すると、仁が居間にいた。居るくせに自分を迎えにも来なかった。彼は丁度、警察から帰ったところだった。抜け殻のような虚ろな目ではなかった。奈々華を見つけた仁は、希望の光をその目に宿したように見えた。最後の希望を。自分へと伸ばされる手。腹が立った。自分勝手だと思った。浅ましいとさえ思った。何を期待しているの。バカじゃないの。今まで私のことなんかそっちのけで、放心していたくせに。おかげで私は……

手を振り払った。自分の肩に触れるか、触れないかの辺りで。パシッと鋭い音が部屋にこだまする。

「触らないでよ!!」

気がつくとも怒りに任せてそんな言葉を吐いていた。

今でも忘れない。決して忘れることは出来ない。兄の顔。呆然とした顔。それが深い悲しみに代わり、全てを諦めた顔に変わり、やがて俯いた。スローモーションのように再生できる。途端、激しい痛みが胸に走った。仁は俯いたまま、「ごめん」と消え入りそうな声で言った。走り出していた。階段を一瞬で駆け上がり、自分の部屋の戸を乱暴に引き開けた。逃げた。

布団を顔までかぶると、この世の全てから隔絶されたような気持ちになった。それが心地良いのか、恐ろしいのか、もうわからなかった。ただどんどん冷静になっていった。早く謝らなきゃ。求め続けた手じゃないか。

でもどうやって？ 謝るの？ 私が悪いの？

エミちゃんはもう友達じゃないんだよ？ お兄ちゃんのせいなんだよ？

どうすればいいの？

私は気付くべきだった。本当に大切な存在に。逆境を共に越えない友など、友とも呼べない。何の価値もない。苦しみの果てに居てなお、自分を必要としてくれる想い人は、まさしく自分の愛した人だ。全てを投げ打ってでも赦す価値がある。

しばらくの後逃げるように転校した。離れた地域に逃げ込んだ私は後ろ指を指されるようなこともなく、平穩に暮らせた。もともと未成年が犯した過失。大々的にニュースになるようなこともなく、その地でそれを知る者は一人としていなかった。

兄妹の絆は失われた。仁のよそよそしい態度。苦しみを噛み殺して笑う、他人に見せる笑顔。逃げるように会話を切る、取ってつけたような愛想笑い。私はようやく気付いた。失ってはならないものを失ってしまったのだと。そのときには全てが遅かった。学校の送り迎えは自然消滅的になくなり、一切仁のほうからは口をきかなくなった。料理も食べなくなった。作らなくていいと言われた。洗濯も自分の分は自分でするようになった。部屋にも鍵がかかるようになった。生活時間帯も噛み合わなくなった。昼は寝ており、夜は外出する。何をしているのかもわからない。どこにいるのかもわからない。彼にとって私は他人になった。

そんな日々が続いた。

第三章 第一百十三話…失くした物を取り戻す世界

どうしてあの人が居ないの？

全てがつまらない。色を失った世界。モノクロの世界。何も私の目につくものはない。何も私の興味を引くようなものはない。適当に会話を交わすクラスメイト。自分の容姿だけを気に入る、言い寄ってくる男子。等しく灰色。居ても居なくても変わらない。もう倉橋の顔など思い出すこともなくなっていた。いつも心に浮かぶのは仁の顔。惜しみなく愛情を注いでくれる兄の顔。狂おしく、夜も眠れないほどに焦がれる顔。笑った顔も、怒った顔も、悲しむ顔も、喜ぶ顔も。何かに夢中になったとき不意に見せる真剣な表情。怒られても舌をペロッと出して悪びれない表情。何もかもが好きだった。追憶の中の何もかもが煌いて見えた。失われたそれらが宝物だった。

これだけで、記憶の中で出会える兄だけで、生きていけると言い聞かせた。

無理だった。

寂しい夜は、隣で吐息を感じていたい。季節を感じる頃には、隣で足音を聞いていたい。何気ない日常で、隣で笑顔を見ていたい。会いたい。一緒にいたい。

いくら自分勝手でも、先に拒絶したのは自分だと分かっている、想いは止まらない。このままでは壊れてしまう。

兄が眠っている間、合鍵を使って部屋に忍び込んだ。せめて肉体だけは繋がっていられたら、心の支えになるのではないかと背徳を押し殺した。何度も唇を重ねた。意味はなかった。

兄の行動をチェックするような真似をした。恋人が居るのではない

かと疑いだすと、いてもたってもいられなかった。気付かれないように後をつけた。意味はなかった。

奈々華は部屋を出ることにした。気が滅入ってしまう。気分を変えなければいけない。過去を顧みたところで意味はない。二段ベッドに備え付けられた梯子を下る。部屋のカーペットに足をつけると、ひんやりとした感触。靴下を履いて、部屋を出ることにした。

出た先でいきなり人と出くわした。新居美菜、白の魔術を教える教師だ。まだ二十代の後半くらいで、あまり色気はないが、整った顔立ちと柔らかい物腰から、生徒達には人気がある。奈々華自身も主属性の関係上もあってか、幾らか他の教師よりも好いていた。

「あら、こんにちは」

いつも愛想よく、分け隔てなく接する態度も好感が持てる。奈々華もなるべく明るい声で挨拶を返した。

「元気がないわね？」

失敗したようだ。彼女が人の感情に敏感なせいもあるかもしれないが。

「何か悩み？」

奈々華がそのとき、気が弱っていたのも大きかった。まるで関係ない第三者に聞いてもらいたいとも思った。話した。廊下でするような話でもなく、もしかしたら相手は気分を悪くするかも知れないと思ったが、構わず話し続けた。勿論、仁の名は伏せた。兄に道ならぬ恋をしているなど、それほど関係の深くない相手にしても、相手は困ってしまうだろう。

「その人のことが大好きなのね？」

「はい」

強く頷いた。それだけは揺ぎ無い真実。

「お兄さんでしょ？」

奈々華は一瞬、新居が何を言っているのか、理解できなかった。し

かしすぐに事態を把握して動揺した。

「ど、どうして？」

新居はふふと上品に笑う。様になっている。

「普通、反対属性の人間には魔術は効きにくいものなの。黒魔術師を治療だなんてね…… よほどの愛がなければ出来ないことの筈よ」
「どうやら奈々華が仁を治したことは、坂城から聞いているようだ。」
奈々華は参ったなという顔をする。こうも簡単にバレてしまうとは思ったら、新居は再び笑い出した。

「ごめんなさい。意地悪言ったわ。本当はね、授業中の態度を見ていて思ったの」

「え？」

「貴方チラチラお兄さんのほうばかり見てるんだもの」

奈々華は顔を赤くする。思い当たる節がないわけでもない。机に突っ伏して眠っている仁の頭を容易に思い出すことが出来るのだから、自分では気付かないうちに目を配っていたらしい。

「貴方達、本当の兄妹じゃないんでしょう？」

仁と奈々華の容姿を見比べれば、そう思われても仕方ない。奈々華は曖昧な返事をしていた。それにしても、彼女は自分の身も固めていないくせに、人の恋愛話が好きだという噂は本当のようだ。終始愛想とは違う、楽しそうな笑みを浮かべている。

「まあ、私から助言できるのは、こういう結果になるにせよ、悔いのないようにしなさいってことだけね」

ポンと奈々華の肩を叩いて、新居は階段のほうへと歩いていった。

第三章 第百十四話：開戦

そして夜が来た。

雪こそ降ってはいないものの、夜は厳しい寒さで、吐く息もタバコの紫煙と区別がつかないほどに白く大きい。奈々華は置いてきた。仁に後顧の憂いはないはずだ。しかし彼の表情は冴えない。この寒さのせいではなく、人を殺さずには帰っては来れないだろうという憂鬱がそうさせていた。

「ここか？」

仁の前には古びたビジネスホテルがあった。打ちっぱなしのコンクリートの外壁。入り口の近くには植木鉢が幾つかあったが、植えられている植物はどれもこれも茶色い葉を見せて枯れていた。その入り口は小さく狭く、学生アパートの管理人窓口と言った方がしっくりくるような、粗末な受付が外から見えた。ガラス戸の向こうには小部屋があるが、人はいないようだ。

「本当にこんなチンケなところにフロイラインの幹部様が泊まっているのか？」

二時間以上歩きとおしたせいで、張ったふくらはぎの辺りを撫でながら仁が笑う。腰にささった村雲は答えない。

「何だ？ 最近誰も俺の軽口に付き合ってくれないな」

「居りますな。しかし一人か……」

村雲が静かに言うのと、仁は大袈裟に目を見開いて見せた。

「お前そんなことわかるのか？」

魔力探知は青、人物そのものの気配は緑。どちらにせよ、黒の精霊が得意とする分野ではないはずだ。

「気付かれませんか？ 強烈な殺気を放っておるではないですか」
さも気付かない仁が悪いかの言い様。仁は手の平を天にかざして、わかりませんのポーズ。

「まあいいや。とにかく居るんだろう？　行くぞ」

ホテルの内装もまた質素なもので、入り口から入って右に曲がるとすぐに古びた廊下が仁を迎える。青いマットは敷かれているが、足の裏から伝わる感触はその下のコンクリートを容易にとらえていた。廊下には所狭しと各部屋へのドアがあり、一階あたり二十部屋くらいありそうだ。扉も鉄製の味気ないもの。廊下の向こう側には窪んだ空間があって、その中は階段になっているようだ。

「ひよっとすると、フロイラインてのは貧乏なのかな」

帰って来るとも思っていない疑問をぶつけて、仁は村雲の指示にあった二階へと歩を進める。全部で三階建てのようだが、どれほど利用客がいるのかもわからない。

「近藤さんも利用してたのかな？」

「主……　油断なさらぬよう」

村雲の忠告は、開戦の合図と変わった。二階の廊下へと足を踏み入れた仁は、左手にまばゆい光を感じ、咄嗟、階段のある空間へとバックステップする。すぐ目の前を閃光が弾丸のように過ぎ去り、右手へと消えていく。敵の攻撃だと悟った仁は、油断なく階段の小部屋に身体をつけ、顔だけを僅かに廊下側に出した。廊下の中ほど、蛍光灯の光を浴びて、金色の髪が映える少女が立っていた。青い目はそれだけで日本人ではないと推察できる。仁の横顔を捉えて、ピンク色の艶っぽい唇が醜く歪んだ。季節はずれな白いワンピースを着ている。白の幹部だからというわけでもないだろうが。

「出て来いよ」

挑発的な言葉。仁は触発されるでもなく、ゆっくりと廊下に身を出す。にやにやと意地の悪そうな笑みを浮かべた少女と仁との距離は十メートル前後。向き合って、仁は先程までの軽口ばかり叩いていた軽薄な顔から、戦士の顔。油断なく相手の全身に目を配っている。僅かな詠唱、攻撃の素振りをも見逃さないという構え。

「俺はフロイライン白の幹部、聖女エリシア・ロックハインだ。て

めえを屠る者でもある」

聖女とは名ばかり。口汚い挑発を重ねる少女を視界におさめたまま、
ゆっくりと仁が腰の相棒を抜き放った。

第三章 第百十五話…剣が峰

エリシアと名乗った少女の背後から彼女の精霊が姿を現す。ホワイトタイガー。仁が知る動物ではソレが一番近い。しかしそれとの相違点は数点。一つは黒のラインのない純然たる白い体色。もう一点。恐ろしく尖った格子のような牙が口に納まりきらずに、凶暴な光を放りながら顎の辺りまで伸びている。ホワイトタイガーでありサーベルタイガー。四本足もそれぞれしなやかな筋肉を付け、虎の巨大な顔には爛々と輝く金色の瞳が二つ。

「随分獰猛そうなペットだな、おい？」

巨大な肉食動物を前にしても怯えるどころか、気安く軽口を叩くのが仁らしい。

「ああ、可愛がつてんだ。エサを前にしても大人しいもんだろう？」少女が虎の頭を撫でながら応酬する。相変わらず自身の精霊に劣らない獰猛な笑みを浮かべたまま。

「さてと…… 死んでもらおうか」

少女の身体が白いぼんやりとした光に包まれると同時に、檻の入り口が開いたとも言わんばかりの勢いで、虎が仁目掛けて駆けた。

いくつか仁にはわかったことがある。幾度となく虎の突進をかわし、少女が放つ白の魔法を避け、虎の牙を刀で押し返す合間、洞察を巡らせた末のことだった。まず一つは虎の攻撃が極めて単調であること。突進して距離を詰め、牙を振り回す。時折片足を上げて爪で引っ掻くような動作も見せるが、あまりにも鈍重なために容易にかわされるとわかると、ほとんどの攻撃を先の二つに切り替えた。次に、少女の攻撃も、どうやら直線に光を放つ魔法に尽きるということ。それもそのはず、曲線的な動きでは自身の精霊に対しても危険である。あまり賢いとは言えないこの虎は、向こう見ずに向かってきて

攻撃を重ねるだけ。そして主の攻撃の際は猛攻が一瞬淀み、僅かに後退する。それが主人の攻撃の合図を相手にも伝えているとわからずに。以上のようなことから、回避は簡単だということが言える。ここからは悪い発見。虎は愚直ではあるが同時に、簡単には反撃出来ないこと。人にはない無尽の体力と臂力を武器に、俊敏で鋭利な攻撃を繰り返す。仁だからこそそれら全てをいなし続けているが、常人ならとつくにその牙に倒れているだろう。それがかける瞬間も、今度は一撃でも食らえば致命傷になるような強烈な白の光線が飛んで来るのだから、迂闊に距離を縮めるわけにもいかない。近距離攻撃の精霊と、遠距離攻撃の本人。死角のない完璧な攻撃布陣と言っている。仁も容易には破れず、少女も容易には仕留められない。

戦いは膠着状態に陥っていた。

「クソ！　ちょこまかと」

少女もまた余裕をなくしていた。一件優勢に見えるが、攻撃は悉く仁に当たらない。頼みの綱、精霊もまたその牙も体当たりも空を切る、受け止められるに終わる。仁は油断なく少女の姿を流し目に捉えていた。顔には大量の汗が滲み、肩で息をしている。そう、実は劣勢は少女。仁は消耗戦に持ち込むことに成功していた。そして消耗戦なら、精霊を操りながら詠唱を繰り返す少女と、最小限の動きで回避に努める仁のどちらが有利かは火を見るより明らかだ。

少女の顔が今一度、挑発的に歪む。

「なるほど、他の幹部も手こずるわけだ」

虎が俊敏な動きで少女の下へ帰る。仁は瞬間、空気が変わるのを感じた。何も知らない人間には神々しくさえ見えるだろう。少女の身体がまばゆいばかりに光っている。輪郭すら曖昧になるほどの光。虎がまぶしそうに目を細めているのが見えた。

仁の体が傾ぐ。片膝を地面につき、その場にしゃがみこむ。

「……力が、抜ける？」

仁の顔までも今や真っ白に照らされている。少女が光の中で一際妖艶に笑った気がする。

「圧倒的な光の前では、闇の力もそうそう跳梁を赦されはしない」次の瞬間、少女の手から、視力を失いそうなほどの光が別れ始める。マズイと本能が警鐘を鳴らしても、その煌々とした光は、闇を束縛して離さない。

仁は背後でベランダのガラスが割れる音を聞いた。

第三章 第一百十六話…追尾少女

「よかった、バレてないみたいだね」

奈々華はそっと胸を撫で下ろしてから、視線も下ろして、傍らの白猫に笑いかけた。

「アレは何か殺気とか、そういうのしかわからないはずだから大丈夫さ」

前方には質素な建物。ホテルと言い張っているが、どうにも学生マンションといった印象が強い。その建物の前、二人からほんの数メートルの場所にある電信柱の影から、おあつらえ向きに二人からは死角になっていた、様子を覗いていた奈々華には仁と村雲との会話が筒抜けだった。筒抜けて奈々華は肝を冷やした。勝手についてきたことがバレてしまったら仁に帰されてしまう。様子を見ながら、いざという時にこそ助けに出るつもりなのだ。百メートル以上は離れて尾行を続け、見失ったとしても地図で目的地の位置は把握している、ここまでやってきていたのだから、何もしないまま送り返されるのだけは御免だった。

「本当に行くのかい？」

今更な質問。それでも、戦闘経験のない奈々華がいきなり戦闘のプロ同士がぶつかり合う戦場に立とうと言うのだから、聞かずにはいられないのだった。

「……うん。後悔のないようにしないと」

新居の言葉は、事情の知らない第三者の言葉は、逆に奈々華の心を決めるカンフル剤となった。

「だけどね……」

「大丈夫。お兄ちゃんが本当に危なくなるまでは大人しくしてるから」

心配性の飼い猫に気丈に笑ってみせる。仁が建物の中へと入っていく。

「追わなきゃ。行くよ、シャル！」

「待ちなよ！」

シャルロットが猛進しようとする奈々華のズボンの裾を啜えて止めた。奈々華の体が慣性に従って上半身だけ前のめりになる。危ないじゃない、と小声で怒る。

「中がどうなってるかもわからないし、見つかるかもしれないよ？」
「だったらどうしろってのよ？」

少し苛立ったような声。そうこうしているうちにも、仁は交戦しているかもしれない。シャルロットはその質問には答えずに、ややあつて首を右上に持ち上げた。建物の上方、右寄りに外壁から出っ張った空間があるようだ。落下防止の鉄柵に覆われている。その奥にガラス戸、下半分はすりガラスで、下からでは全く中の様子は窺えない。バルコニーなんて洒落た言い方よりもベランダと言った造り。廊下のエンドに設置された宿泊客共用のものらしい。もっとも使用されているのかは甚だ疑問ではあるが。

「私、緑魔法使えないんだけど……」

「何言ってるんだい。下に木が生えてるじゃないか」

ベランダのすぐ下まで枝を伸ばした常緑樹が、観賞用に植えられている。

「全く…… 木登りなんて…… 小学校以来だよ」

文句を並べながらも、奈々華は器用に枝から枝へとつたい、確実に自身の高度を上げていた。幹にしがみつく両手はかじかんでか、硬い樹皮のせいか、赤くなっている。シャルロットは簡単に木の天辺近くに登りきって、奈々華を見下ろしている。

「もう少しだよ。ファイト」

最後の枝に手をかける。思いっきり力を込めて全身を持ち上げた。鉄棒のように、枝の上に腹を預ける。奈々華の重みに、少し枝先が下を向いて、全体が危なげに揺れる。シャルロットが慌てて枝先か

ら幹のほうへと走った。ぴよこんと身軽に奈々華の肩の辺りに掴まる。

「大丈夫かい？ 後は……」

鉄柵が幸いした。掴むところが沢山あるのだから、後は最後の力を振り絞り、腕の力で足を持ち上げてかけるだけ。ベランダの床まで届かなくても最悪鉄柵に絡めれば何とかなった。

「運動神経あって良かったよ」

倒れこむようにして安定した地面に転がる。奈々華の黒いダウンコートが白い埃を纏う。ぜえぜえと荒い息を整えながら、ゆっくりと体を起こす。シャルロットは奈々華が倒れこむ前にジャンプして肩から脱出、涼しい顔でちょこんと座っている。奈々華がガラスを覗き込むと、途端眩しさに目を閉じざるを得なかった。奈々華は瞬間的に動悸が早くなるのを感じた。わけもわからず、猛烈な焦燥に任せて、ガラス戸に体当たりしてぶち破り中に入る。ゴロゴロと転がり、止まったところで薄目を開ける。仁が跪いている。その先に虎が見える。その横、光源はそこだ。

「お兄ちゃん！」

第三章 第百十七話：伏兵の想い

奈々華の体が、エリシアのそれと変わらない眩い光を放つ。しゃがみこんだ仁の前に進み出て、そのまま両手を敵に向けてかざした。

「……な、奈々華。どうして」

仁はその見慣れた背中に取り留めようもない言葉をかける。

エリシアが放つ魔法は白の大魔法＜聖痕の調べ＞。不浄の一切を消し去る。不浄の塊と言って差し支えない黒の魔術師にとっては脅威そのもの。かつての英雄中谷慎二をして、自分を倒すことの出来る魔法と言わしめた、白の魔術師の最高峰。仁が食らえばひとたまりもなかっただろう。

対して奈々華が行っているのは＜カウンタースpell＞。一切の魔法をその根源から断つ強制力。エリシアの大魔法と比べても何ら遜色がないほどに、高度で難しい魔法。奈々華は誰に教わったわけでもない。ただ仁を助きたい。仁を守りたい。その一心で、まさに無我夢中で本能的にそれを繰り返していた。それこそが彼女の才能だった。

互いの光が消え去る。後に残ったのは金髪碧眼の少女、顔には驚きだけが浮かぶ。仁のたった一人の妹、必死の形相。奈々華のたった一人の兄、事態を誰よりも素早く飲み込んでいる。虎、新たな敵を見据えて臨戦態勢を整えている。

瞬間、戦局は変わる。誰よりも早く動いた仁の刃が、少女に向かう。勿論、金色の髪をした方。奈々華の体の横をすり抜け、常人には回避も難しいほどの突き。少女の左の脇腹に刀の切っ先が刺さる。そこで少女は体を反転、深く食い込む予定の刀は少女の肉を抉り取るだけに終わった。血を噴出す脇腹を手で押さえて、少女がふらつく。指の間からボトリと肉片が落ちる。赤々としたそれは数センチ四方のマグロの刺身にでも見えた。その上へと、傷口からの鮮血が滴る。

「てめえ……」

痛みと憎悪に歪む顔。少女に呼応するように虎が前足を振り上げて飛び掛る。奈々華へと。

「奈々！」

恐ろしい反応速度で、仁が奈々華の腕を掴み、体を思い切り引つ張った。よろける暇もなく、奈々華の体は仁の傍らに後ろ向きに倒れる。キャッと短い悲鳴。仁と奈々華の立ち位置がそっくり入れ替わった格好。

仁の腹が虎の牙に引き裂かれる。寸でのところで致命傷を受けなかったのはさすがと言うべきか。それでも先程のエリシアと同じく、血飛沫を伴って小さな肉片が床に散る。虎は攻撃をやめない。第二陣。強烈な刃となった爪が振り下ろされる。それを仁が村雲で受ける。鋭い金属音。

「お兄ちゃん！」

起き上がった奈々華は仁の腹から滴る血を見て、まるで自分の血が失われたように血相を変えて叫ぶ。

仁がそれに答えようとした瞬間、手を打ち合わせたような音。パンと乾いた音がエリシアの背後から聞こえた。その音がするまで奈々華も仁も、一切そこに人がいるなどと気付かなかった。それもそのはず。新たに現れた少女はまさしく今現れたのだから。顔立ちは日本人のそれ。眠たげな目と細い輪郭。手入れされていないのだろうか、鈍く蛍光灯の光を照り返す傷んだ黒髪は腰のあたりまである。サイズの合わない鼠色のパーカーと、緑のダボついたカーゴパンツが、彼女全体の雰囲気戦場に似つかわしくないものになっていた。

「終わりです…… エリシア」

いきなり現れた少女は落ち着いた声で言った。エリシアのほうは唇を噛んで、僅かにその言葉に頷いた。次の瞬間、突如台風でも来たような強風が吹き荒れる。思わず目を瞑った奈々華。

突風が収まると、少女二人も虎も居なくなっていた。残されたのは仁と奈々華。目まぐるしく変わる戦局に奈々華は混乱を隠せず、キョロキョロと辺りを見回す。敵の姿を探す。しかし最早廊下には人の気配は彼女等二人のもの以外なく、嘘のような静けさがあるだけだった。蛍光灯がジーンと地虫のような音を立てている。

「……退いたみたいだね」

仁が多分に無理をして声を出す。その間にも腹の傷からは絶えず血が流れていた。奈々華はそこでやっとこさ仁の負傷に気が回る。

「お、お兄ちゃん！ 今治すね！」

そこまです聞いた仁は、ゆっくりと体を廊下の床に預けた。

第三章 第一百十八話…治癒

「クソ！ クソ！ クソ！！」

エリシアの怒声。傷口に当てた手は白く発光している。夜の闇に光る明星のようでもあり、星の終わりの瞬きにも見えた。風に乗って運ばれた先は、人気のない裏路地。少女はそこで自身の傷の手当をしているのだった。しかし思わしくないのは誰の目にも明らか。傷口からは当然に、鮮血が湧き水のように溢れだしているばかり。白の魔術師の攻撃は、黒の魔術師にとっては脅威。それは逆も然り。闇の眷属である村雲の刀傷はそれだけで、全ての白の魔法を受け付けない呪詛の如く。

「……ですから、私が助力すると」

風を起こした張本人、緑の幹部である少女のどこまでも冷静な声。

「うるせえ。アイツは俺が仕留めるって決めてたんだよ！」

苛立ちは、確実に迫る死への恐怖の隠れ蓑でしかなかった。共同戦線を断ったのは、彼女の過剰な自信と、平内への妄信的な忠誠。普段は補助的な役割をこなす彼女が、黒魔術師相手では主力として扱われた。彼女にとってはこの上ない見せ場であった。

「とにかく、もう分かっていますね？ 貴方にはあまり時間がありません」

ここまでくれば冷静を乗り越して冷酷。エリシアは苦痛に歪んでいた顔を、無理矢理に不敵に笑わせた。見る者の背筋を寒くさせるような凄絶な表情だった。

「わかってるさ…… 最後にあの学園だけは道連れにしてやらあ」

幾重にも重ねた治癒魔法が効果を発揮し始めたのは、実に三十分以上経ってからだった。白の魔術師の魔法ないし精霊から受けた傷を癒す。それは並大抵のことではなく、ひとえに彼女の献身的なまで

の強い想いと白の魔術師としての高い適性が成した業だった。最初の何回かは何の効力も見られないまま終わったが、奈々華の頭には諦めるなどという言葉は一度たりとも浮かばなかった。今にも泣きそうな顔で、それでも涙は零さず、唇を硬く引き結び、一心不乱に治癒魔法を仁の傷口へ当て続けた。

仁の苦しげな額から皺が消える。呼吸も整ってきた。第一傷口が塞がり始めた。四本の縦に走った傷は、身を抉り、赤い組織を見せていたが、次第に肌色を取り戻していく。

「お兄ちゃん……」

ゆっくりと仁が瞼を上げる。血を失ったせいで、いくらか白くなった顔ではあるが、はっきりと生命を感じ取れた。

「……大丈夫？」

間拔けな質問だとわかっていながら、奈々華にはそれ以外言葉が思いつかなかった。返事が返ってくるとは思っていなかった。

「……頭がくらくらする」

熱病のようなどこかふわふわした喋り方。

「……腹が痛い」

これだけ喋れば今すぐどうこうなるということとはなさそうだ。

「ごめんなさい」

仁の体調報告が終わると、奈々華は謝罪の言葉を口にした。仁は白い顔を奈々華に向けた。また弱々しく笑う。

「……奈々ちゃんが来てくれなかったら、俺はとっくに死んでたさ」
「でも……」

結局は奈々華を庇ったために、仁は傷を負った。仁がゆっくりと腹を撫で回した。捲り上げられたシャツの下、地肌を直に触ると、爪跡もわからないほどに癒えていた。傷があったあたりはまだほんのり赤いが、傷自体は完全に塞がっていた。そこから感じ取れるのは奈々華の必死の努力だけ。

「傷…… ふさがってんじゃない」

うん、と消え入るような奈々華の返事。それを誇ることもない。

「だったら、何も問題はないよ」

いくらか仁の顔にもピンクが差してきた。失われた血は、廊下のいたるところで赤黒く凝固を始めている。それでも大事には至らなかったことは彼の優しい笑顔が如実に現している。

「お前が痛い思いをするくらいなら、この方がずっといい」

「そんな……」

そんな自己犠牲はあまりに悲しい。強いた本人がかける言葉でもなかった。

「これは罰なのかな。大人しく連れてくれば、いくらでも対処の仕様もあった」

最初から居るとわかっているのなら、それなりの戦い方も出来た。突然の闖入に場当たりの対処をしなくても済んだだろう。だからこそミルフィリアも坂城も、奈々華の帯同を推したのだった。

「……」

仁が自分への気遣いからそうしなかったのだと、痛いほど理解している奈々華は、ただ黙って仁の髪を撫でた。

第三章 第百十九話：互いの情

「兄妹愛を確かめあつてるとこ悪いけど……」

第三の声に、仁は半身を素早く起こして首だけ振り返る。少年がゆっくりと廊下を歩いていく。奈々華が立ち上がる。今仁は動くこともままならない。もしかすると、この少年はその隙を狙って父親の敵討ちをするつもりかもしれないという猜疑はどうしても拭えなかった。敵意を込めた目で睨む。

「何もしないよ。そいつを殺しても父さんは帰ってこない」
その言葉に裏はないようだった。祐が遂に仁の傍まで辿り着く。のろのろとした動きでその場に胡坐をかけた仁は祐を見上げる。

「白の魔術師が学園を襲うようだ」

淡々とした声。事実だけを伝える無機質な声。仁はそれを聞いても表情を強張らせるでもなく、笑うでもなく、感情の見えない目で声の主を見上げているだけだった。

「……どうする？」

今度は試すような口調だった。自分の体調を理由に断るような薄情者か、無理を押しても仲間の下へ馳せるだけの気骨者か。仁は後者であった。祐が言い終わるが早いか、さっきまでの青白い顔などなかったかのように、力強く立ち上がる。祐は一瞬呆気に取られたような顔をする。

「連れて行ってくれ」

「お兄ちゃん!!」

いくら傷が塞がったとはいえ、全快には程遠い。あまりにも危険すぎる。仁が奈々華を振り返る。真剣な表情。場を弁えず、奈々華は見惚れそうになるが、慌てて頭を振って否定を重ねる。

「ダメだよ! まだ動くだけで精一杯でしょう?」

仁もまた首を横に振る。

「多分禁忌を使ってくるはずだ。ミリーと坂城だけじゃ危ない」

魔霊合撃。その恐ろしいまでの禁忌の力を仁は身を以って知っている。奈々華は顔を俯け、唇を噛みしめたまま。血が出るほど拳を強く握っていた。普段は妹の言うことを割かしよく聞く兄ではあったが、ここ一番ではテコでも動かない。やがて顔を上げた奈々華は強い決意を瞳に込めていた。

「……わかった。ただし私もついて行く」

それは絶対条件。これ以上の譲歩を今の彼女から引き出すのは不可能だった。いざとなったら、何があっても兄を守る。

「……わかった」

仁も了承する。今回のことで懲りたとかいうことだけでもなく、奈々華の強い意志を嫌というほど感じ取ったから。普段は兄の言うことを割かしよく聞く妹ではあったが、ここ一番ではテコでも動かない。

「祐君…… 風を頼む」

やや気圧されるように兄妹のやり取りを聞いていた祐は、気を取り直してゆっくり頷いた。少し笑っている。

途端に祐の体が緑色の光に包まれ、先刻起こった突風に引け劣らない強い空気の流れが生まれた。

「少し落ち着いたらどうなの？」

学園の中庭。さっきから坂城は同じ場所を行ったり来たり。テスト前日の学生のように、追い詰められた顔をして動き回っているのだ。「ですが……」

坂城が足を止める。姉に対して反抗的にならないように注意しているような雰囲気があったが、それでも反駁だけは続ける。

「アイツは今闘っているのですよ？」

「大丈夫よ。奈々華さんもつけたし。余程のことがなければ彼は負けないわよ」

ミルフィリアは、普段の慇懃を崩す唯一の相手を宥める。坂城はな

おも食い下がろうとして、姉のどこか憂いを帯びた笑みに口を閉ざした。

「心配していないと言えば嘘になるけれどね。信じてあげること重要よ」

それは自分に言い聞かせるようでもあった。決めた心を再確認するような。いかな挟撃を受けても、白の魔術さえ防げれば、仁の実力を以ってすれば負けることは考えにくい。それほどにミルフィリアは彼を買っていた。しかし同時に勝負は何が起こるかわからない。万が一のことを考えないわけでもないのだ。その葛藤の狭間で、一番勝率の高い作戦を練り上げたのだから、もう後は上手くいくことを祈るしかない。

風を感じる。ミルフィリアも坂城も警戒を瞬時に纏い、その先を見る。何かが空に浮いている。物凄いスピードで中庭に向かっている。

白いワンピースは脇腹のあたりが赤黒く変色していた。もとは少女だったらしい。今はそのワンピースも所々裂け、白い体毛が生えた獣のような肌。顔は人の二倍ほどあろうか。虎のそれだった。金色の瞳にはこの世の全てを憎むような壮絶な色が浮かんでいる。口からは涎の付いた白磁の牙を覗かせる。

風が止んだ。ドスンと大きな音を立てて、獣人が中庭の土を踏みしめた。

第三章 第二百十話：遅参のヒーロー

「水よ、我等に生命と叡智を与えたもう大いなる自然の恵みよ。今一度静かなる怒りを、猛威に込めて解き放て!!」

台風の後の増水した川もかくや、恐ろしいほどの水量がエリシアの身体を押し流す。そのまま木に叩きつけられれば如何に虎の強固な身体を手にした彼女でもただではすまないはずだ。

虎が寧猛な笑みを浮かべる。前方からの圧力をものともせず、強く後ろ足を踏ん張ると、そのまま上空へと跳び上がる。

「な……」

ミルフィリアの驚愕の表情の後ろ、詠唱を終えた坂城の手から氷の刃が切っ先を虎に向けて飛びかかる。滞空しているのなら好都合。逃げ道はない。坂城の顔が勝利の確信に綻ぶ。

キーンという金属がぶつかりあったような鋭い音が二度、三度。氷は全て、滞空中の虎の爪に弾かれた。動体視力も人間のそれとは格段に違った。

虎が坂城のそれとは比べ物にならないくらい残酷な勝利の笑みを浮かべる。傷は一時的に塞がっているようだが、それ以上に素早く回る全身の壊死に抗いながら戦う少女の笑顔。目の前の少女二人を巻き添えにせずには、死んでも死に切れないのだ。エリシアが地面に降り立ったとき、既に水流は跡形もなく消え去っていた。その脚力を前にして、彼女と肉弾戦を繰り広げられるような精霊を持たない少女二人は脳裏に鮮明な自身の死をイメージした。魔法の詠唱も間に合うはずがない。

「そこまでだ」

青年の低い声。突進を始めかけた虎の臂力を受け止め、正確に牙と爪を刀で防御してその場に仁王立つ。ミルフィリアも坂城もその背

をよく知っている。二人の傍に見知った顔が遅れて降り立った。祐、奈々華。

「……遅くなったな」

背中越しにかけられる優しさが、やっと二人の少女の心を死のイメージから解き放った。虎の足が枯れた芝に深く食い込む。仁はそれでも動かない。これ以上は何人たりとも進ませはしないのだ。自分が守るべき者達の下へは何があっても行かせない。困憊した身体に鞭打つ仁もまた、エリシアに負けず劣らず鬼のような形相をしていた。お互いに譲れないもの。仁は守るべきものの為に、エリシアは恩義に報いる為に。命を賭してでも成し遂げなければならないものがあるのだ。

「よう…… 二本足で立てるようになったのかい？」

「てめえこそ…… よくその体で立てるもんだな？」

互いの軽口は、押し込める力と押し返す力が拮抗する合間。

祐の全身が光る。坂城もミルフィリアも。それを背で感じた仁は怒声を上げた。

「やめろ！ コイツは俺が殺す！」

坂城もミルフィリアも祐も、仁のそんな声は聞いたことがなかった。一瞬にして詠唱は止み、皆一様に困惑していた。奈々華だけはその真意を正しく理解していた。殺すなんて剣呑な言葉を使ったのは、文字通り殺すからだ。殺さずして少女が止まることはないと思ったからだ。そしてその覚悟に敵ながら敬意を抱いたからこそ、彼一人でケリをつける。

激しい音を立てて、刀が爪を弾き返した。虎の体が揺れる。

第三章 第二百一十一話：汚れ仕事

近藤さんのような高尚なものでもないさ。

斬りつけた虎の傷口から、おびただしい血液が飛び散る。コレは彼女の体液なのだろうか、虎のものなのだろうか。寸でのところで倒れずに、踏みしめた芝生がギシッと音を立てて剥げる。向き直った目には怒りや憎しみは通り越して、ただただ相手を殺すビジョンだけが青写真として浮かんでいる。

祐の手も坂城の手も汚させてはいけない。ミルフィリアの手もこれ以上は。

もう動くことも苦しいだろうに、虎は四足ついてまた猛然と襲い掛かってくる。猛り狂う動物としての本能しかそこにはありはしない。刀を縦にして、牙のあたりに当てて食い止める。ぐるると凶暴な呻き声。生暖かい息が、白い水蒸気となって顔を濡らす。

その裏には贖罪という名の自己満足が見え透いている。

押し返すのも容易になってきた。最早エリシアに万全の力は残されていない。近藤の最期の失速と同じような現象が彼女にも起こっている。力を込めた両腕が確かな手応えをもって、牙を弾き返した。空中で腹を見せると、そのままメートルほど離れたところに墜落した。起き上がる。体を支える足も手も、子ヤギのように震えていた。

だからコレは真似事でしかない。今はそれしか出来ない。

虎が喀血する。ビシャツと血が吹き飛ぶ音。見ると指先が人のそれに変わりつつある。手の甲は毛の生えた獣のもの、先だけが少女の白魚のような指。禁忌を保つ力は確実に失われつつある。グロテスクだと忌むような感情は湧かなかった。ただ近藤の最期を思い出していた。楽にしてやるんだ。

こんな汚れ仕事をいくつもこなした彼はどういう気持ちだったのだろうか。

歩み寄って虎を見下ろす。敵を見据えて、爪を振った腕は既に人のものと変わっていた。華奢な白い腕。その衝撃だけが、彼女の内臓を圧迫し、再び吐血する。靴の先に血飛沫がこびりついた。白いスニーカーを彩るにはあまりに悲しい。

嫌だ。やめたい。どうして俺がこんなことをやるんだ。

体が薄く光り、残されたのは虫の息となった白人の少女。顔を窺うことも出来ない。うつ伏せたまま、僅かに背中が起伏しているだけ。「殺せ」と小さく。少女の心境を測りかけた。恩人の命を忠実にこなすことを至上としていた彼女の無念。やめた。これ以上は意味をなさない。いや、自分を苦しめる。

導いて欲しいと近藤は言った。それが最期の願いなら……
歯を食いしばってでもやるんだ。

刀を大きく振りかざし、少女の首筋へと吸い込ませた。

第三章 第二百二十二話…傍観者達の気持ち

祐はその場を後にして、一人校舎の中に消えていった。

「わかんねえよ」

今でも憎しみは消えない。それでも同時に同情もあるのだ。苦しむ少女を一人で片付けたのは、彼の自分達への思いやり以外のなにものでもなかった。自分の父もまたそのように殺したのだ。直接手を下さずにもいられた筈なのに、苦しむ時間を無にした。それもまた彼の辛い優しさがそうさせたのだ。

「守ったのか……」

そう。守った。彼が愛すべき人間を。命に優劣をつけるのは当たり前だ。誰だって自分が大切に思う人と、見知らぬ人間とではどちらを優先するかは決まりきっている。自分自身も父のためなら、母のためなら、たとえ他人の命を奪ってでも生きていて欲しいと願う。だからこそ父の仕事を知りながらそれに口を出さなかった。

「僕も含まれているのか？」

祐の独り言は冷たい校舎の岩の壁に吸い込まれるだけだった。

「くそ！ 祐のヤツ」

風で運べれば非常に楽だった。いや、坂城の中に楽をしたいという気持ちにはなかった。ただ一刻も早く仁を安静な場所で休ませてやりたかった。あの後、仁は力尽きるように倒れた。疲労困憊した体をおして、駆けつけた先でまた死闘を繰り広げて倒れた。

「嘆いても仕方ないでしょう。早く運んであげましょう」

タンカの足側を持つミルフィリアが努めて冷静な声音で言う。皆仁のために何かをしたかった。何かせずには居れなかった。安らかな寝息を聞いているのだから彼はただ疲れて眠っているだけだとわかっていながらも。奈々華は血と泥にまみれた仁の体を拭いてやる準

備と、布団の準備をしに、先に部屋に戻っていた。

「どうして君はいつも……辛い役を買って出る？」

仁は運び手にどれほど揺さぶられても起きる気配はない。体が半強制的に休息を取っているのだ。だから坂城の問いかけに答えられるのは、ミルフィリアただ一人。

「私達の手を汚させないためよ」

ミルフィリアは自分が近藤の話をしたからかとも思ったが、そうではないと結論付けていた。多分何も知らないでも結局彼はそうした。「バカなのよ。自己犠牲でしか好意を表現できない」

本当にバカ、と付け足す。だがいくら罵っても、タンカを運ぶ足は緩まらない。緩まるどころか、一層早く動く。そのバカを寢床で休ませてやりたいのだから、二人もまたバカみたいに急いでいるのだ。階段に差し掛かる。どちらが掛け声をかけるわけでもないのに、二人はもたつくこともなく一段一段、確実に上って行く。

「お姉様は…… コイツをどう思っているのですか？」

突然坂城が話しを変えた。疲れた戦士を氣遣っていたかと思えば、色恋の話。そんな場合ではない、と叱りつけようとしたミルフィリアは妹の顔が恐ろしく真剣なのを見てやめた。

「……憎からずは思っているわ。彼には多大な恩もあるしね」

仁が呑気に腹の辺りを搔いた。それがまた少し愛らしくて二人の顔が同時に綻ぶ。

「まあ、貴方ほどは焦がれてはいないけれど……」

「え？」

「寝言でよく、彼の名を呼んでいるわよ？」

ミルフィリアは坂城と同じ部屋に居住していた。学園は教師達専用の寮を丘の近くに持つが、気心の知れた二人が別々に暮らすのも野暮という次第。坂城の顔は火でも噴出すのではないかというほどに真っ赤になる。向かい合ってタンカを運ぶミルフィリアは妹の百面相を堪能していた。

「仁。頼む…… 私を」

「や、や、やめてください!!」

寢言を反芻してみせるミルフィリアは心底愉快という顔。坂城が慌ててとめても、舌を出して笑っている。普段の凜とした振る舞いも、姉の前では形無しだ。ミルフィリアは軽薄な笑みを浮かべたまま、階段の一番上の段に足をかける。

「まあ、何にせよ……」

二人は廊下を進み始める。進行方向に背を向けるミルフィリアは、早足の合間で、器用に廊下の先を振り返った。

「手強い敵がいるのは間違いないわね」

「……奈々華は本当に？」

坂城は未だ半信半疑。確かに仲のいい兄妹ではあるが。

「……もうすぐよ」

あっという間に廊下を横切った姉妹は、仁の部屋の前でその快速をとめた。

第三章 第二百二十三話：変な匂い

「あとは私がやります」

礼を述べた後、奈々華はそう言っただけ。タンカに乗った仁をベツドの上に移したら、もう坂城はお払い箱。邪魔の一言に尽きる。

「いや、私も何かしてやりたい」

「何ありませんよ？ 学園長さんのお手を煩わせるようなことは敵意もあらわ。坂城は、奈々華が仁に対して恋心を抱いているという話を信じるに値するものとして捉え始めていた。

「しかし…… 体を拭いたり」

「私がやります」

「君一人に任せるのは……」

食い下がる坂城、取り付く島もない奈々華。

「寝ているお兄ちゃんは、雨に濡れた野良犬みたいな匂いがしますよ？」

「え…… か、構わない」

「硫黄が腐ったような匂いのすかしっ屁も時折しますよ？」

「……」

「とにかく大丈夫ですから」

奈々華の強硬な姿勢に、坂城はすんなり引き下がってしまった。

「何をやっているの！」

押し殺したような声ではあるが、怒声に変わりない。不甲斐ない妹を、姉は許さない。折角今回は妹に良い所を譲ったというのに。その間、ミルフィリアは庭の死体を処理していたのだった。

「だって…… 滅茶苦茶怖いですよ」

坂城はイジメられた仔犬のような声。

「そんな押しの弱いことでどうするの！」

押し退けてでも、後で恩義を感じてもらえるようなことをするのが目的だ。いささか強引で卑怯な手ではあるが、勝てば官軍。弱味につけこむような真似をしてでも、相手に好印象を抱かせればそれでいいのだ。

「全く……」

怒ってはみても、しょんぼりしている妹はやはり可愛い。残念に思っているのは彼女も同じ。押しが弱いのも短所であると同時に、遠慮深いという長所でもあるのだ。彼女の髪を撫で付けながら、ミルフィリアはそんなことを思っていた。

見事坂城を撃退した奈々華は、仁の服をゆっくりと脱がせる。上半身は鍛え抜かれた数年前より幾分脂肪がついてはいるが、十分に戦いに身を置くものの体だった。シャツをひん剥かれても呻き声一つ立てない仁は本当に深い眠りについているのだった。奈々華は火照った顔を冷えた両手の平で包む。

「……傷はもう治ってるね」

鼓動の音を誤魔化すように独り言。時刻は深夜二時を回って、シャルロットもアイシアも二段ベッドの上の段。お湯の入ったタライにまっさらなタオルをつける。水を吸って重たくなったそれを絞り、徐に血のついた兄の腹に当てる。擦ると赤い色がタオルのそこかしこに付いた。

「ゴメンね」

コレは自分のせい。腹を、顔を、擦る手は緩めずに、奈々華は心の中を探ってみる。本当に自分は兄の役に立ちたいという一心だったのだろうか。焦燥はなかっただろうか。戦闘で役に立たない自分の存在意義が、仁の中で小さくなりやしないかという恐怖。嫉妬はなかっただろうか。肩を並べて戦場に立てる少女達が、仁の中で大きくなりやしないかという危惧。三年前のことを思うと、世界が終わるような孤独を思うと……

「……奈々ちゃん？」

知らず流れていた涙を、冷たい手が拭った。弾かれるように顔を上げた奈々華は、自分を不思議そうに見る兄の顔をとらえた。

「お兄ちゃん……」

「体を拭いてくれてたのか…… ありがとう」

そう言って笑みを浮かべる。奈々華は胸が詰まりそうになって、涙を止められなかった。

「どうして泣いてるんだ？」

仁の顔が翳るのを、奈々華は滲んだ視界で確認していた。

「……お兄ちゃん。ゴメンね」

「それはもういいって」

「そうじゃないの…… 三年前のこと」

禁句のように蒸し返さずに来た兄妹の遺恨。奈々華はそれを良しとはしていなかった。仁が口にしないのをいいことにそれに甘えていた。

「……もういいんだよ。もう」

述懐を、謝罪を口にしようとした奈々華はそれを遮った兄の顔を、天使を見るような目で見ていた。

「なっちゃんにも迷惑をかけた。謝りたいのはこっちだよ」

「そんなこと！」

「でもお前もお前で苦しんでいた。俺に申し訳ないと思っていたんだな」

「……当たり前だよ」

救いを求めた手を振り払った自分は、妹として傍にいる資格さえもないと思った。

「だからさ…… おあいこだ」

すうっと伸ばされた手は、また奈々華の頬を伝う涙を拭った。

「それにまた俺とお前は兄妹になったんだ…… それでいいじゃないか」

諭すように、宥めすかすように。奈々華は世界で一番優しい言葉だ
と思った。

第三章 第二百二十四話：祈念

今、奈々華は胸を押さえていた。どうにもならない程の恋情が、体の中から飛び出そうとして、心臓を、胸を、押し潰そうとしているのだ。仁は再び眠ってしまった。今ならば何をしてでもバレるようなことはない。いつものようにキスをすればいい。それが出来ずにいた。兄の優しさを直近にうけて、その背徳が許されないことだと理解していた。すやすやと眠る青年の横顔。

別に整っているというわけでもない。それでも優しい顔を、眠たげな瞳を、時折緩む唇は、自分が最も欲しい言葉を、大切な言葉を、優しく囁いてくれる。たった一人の想い人。

花火に例えるなら、長く燃え続ける線香花火だと思っていた。それが今、激しく燃え盛る打ち上げ花火のようにこの身を熱くさせる。十年来続く初恋は、今、抗いようのない刹那の恋に近かった。

「参ったなあ…… これ以上好きになれないと思ってたのに」
違う顔を見せる自分。もうわかる。この衝動が終われば、きつとまた一段とこの人を好きになっているのだ。より胸の深くで焦がれるのだ。いくつもの狂おしい夜を越えて、想いを強固にしてきた。これは通過儀礼。

「ねえ…… お兄ちゃん。責任とってね？」

仰向けに眠る仁は、さっきから鼾をかいている。よほど疲れていたのだろう。奈々華はその隣に身を預け、布団を被りなおす。隣で聞こえる間拔けな音。また仁が腹をぼりぼりと掻く音がそれに重なる。急に笑いがこみ上げてきた。

「悩んでたのがバカみたい」

何も悩む必要なんかなかった。自分が好きになった人はそんなに薄情な人間だったのか。そんなはずがなかった。もっと早く気付くべきだった。許されないかもしれない。自分を嫌って、他の誰かに一

番依存するかもしれない。そんな思いは全ては杞憂だったのだ。仁は自分を一番に考えていてくれた。あまつさえ、裏切った自分に申し訳ないと思っていた。同居を許したのも、街への同伴の約束を交わしたのも、彼の仲直りのサイン。自分と同じように、悩みながら、再び近づく機を待っていたのだ。彼もまた以前の兄妹の姿を求めていた。

だからもっと早くに、自分の思いの丈をぶつけてやれば良かったのだ。許しあえたのだ。

彼と自分は再び以前の兄妹を完全に取り戻した。半分。自分の目的まであと半分。スタートラインに立ったに過ぎないのかもしれない。だけどこれからまた恋人に向けて努力を重ねるのだ。大丈夫。確実に二人の仲は密になっていっているのだから。

ゆっくりと仁の唇に指を這わせる。唇を重ね合わせられないのは残念だが、いつか起きている間にどちらからともなく、そう出来るように……

奈々華は誰にともなく、祈った。神を信じているわけではない。それは宣誓。これを破ることは決してないのだが、仮に破った時には二度と赦されない、自分に対する裏切り行為。だから、いかなる困難が待ち受けようともこの兄と共にあり続けるという強い信念を再確認する作業なのだった。

第三章 贖罪のゆくえと白の祈り 了

第四章 第二百二十五話：構ってちゃん

第四章…束の間の充足と緑の覚悟

「ページめくるの早い」

隣で寝そべる奈々華から兄へのお叱り。クッションを下敷きに、腹ばいになって漫画を読んでいた仁の隣には、いつの間にか彼の妹が居た。四辺あるコタツの一边を二人で分け合っているのだからとても狭い。肩を触れ合わせて身を寄せるのは寒さのためではない。

「……なんで俺が読んでるのを覗いてるんだ？」

「……別にいいじゃん」

そう言われると特に嫌がる理由もない仁は黙り込む。鼻から溜息を漏らして、仁はページを逆に捲った。

「暇だな」

仁の言葉はここ数日の倦怠を指していた。学園が冬休みに突入して、仁と奈々華は途端にやる事がなくなった。年明けに学期末試験を控えているものの、それに備えて勉強に励むような殊勝な心がけが仁にあるはずもなく、だらだらと毎日を過ごしているのだった。自分だけ進級しても意味のない奈々華も然り。

「お兄ちゃん早いってば」

再びページを捲った仁に、少し苛立った奈々華の声。仁は漫画を置いてすくりと立ち上がる。

「……俺はもう一度読んでるから」

漫画を奈々華に譲って、仁はソファアに腰掛けてテレビの電源をつけた。

白の幹部、エリシア・ロックハインを討った後、学園には再び平穏

が訪れていた。

緑の幹部については現在もその行方を探っているが、進捗はないようで、国内に未だいるのか、もう日本にはいないのか、それすらもわかっていない。気配を探る能力に秀でた緑の魔術師は、逆もまた当然にこなす。隠密行動のスペシャリストと言ってもいい。学園側も社を筆頭とした優秀な魔術師がことに当たっているのだが、役者が不足しているというのが実情。坂城が彼女の搜索を断念するのも時間の問題だろう。

フロイライン側も残る手札は二枚、黒の魔術師はいないのだからそうなる、次の戦いは苛烈を極めるだろう。尻に火のついた最悪の犯罪組織がどんな手を使ってくるか見当もつかない。どの道先手を打てない仁に出来ることは今の平和を謳歌することだけだった。

大人しくコタツに入って漫画を読んでいた奈々華だったが、三十分もすると退屈そうな目を仁に向け始める。構って欲しいという意図を込めた視線をチラチラ。仁はブラウン管の向こう、サイケデリックな衣装と化粧のビジュアルバンドが英語混じりの歌詞を熱唱する様を漫然と見つめたきりだった。

「ねえ、それ面白い？」

立ち上がった奈々華は、仁の隣に座る。ソファアが奈々華の重みで、ぎしりと小さな音を立てた。

「ううん。気持ち悪い」

苦笑い。仁もただチャンネルを回すうちに、歌番組を見つけて観ていただけだった。世界が違って、人の営みに音楽は欠かせない。だけれど、このバンドは彼の趣味ではないらしい。

「そうだね」

奈々華も仁の横顔から、テレビの画面に目を向ける。そしてすぐさま、兄の顔真似と言うわけでもないだろうが、苦笑い。彼女もまたユニセックスな歌い手に好印象を抱くには至らなかった。

「……チャンネル変えてもいい？」

ああと唸るような仁の承諾。くると目まぐるしく、画面が切り替わっていく。止まったのはニュース番組。暗い画面の中、黒く煤けた建物が映し出されている。放火現場からの中継らしい。しばらく二人は対岸の火事をぼんやりと見つめていた。

「こうしてるとさ……」

奈々華がポツリと声を出す。

「世界中に私達しかいないみたいだね」

六畳一間の一室に二人きり。全寮制の学園の生徒達は、休暇を利用してそれぞれの実家に帰っている者が大半。いつもは廊下から話し声が聞こえたりするものだが、今は水を打ったように静まり返っていて、部屋の中にある音源は、テレビと二人の会話だけだった。

「うん、まあ、俺達が部屋から出ないからだよね。完全に」

寒さも手伝って、仁の出不精に一層磨きがかかっているわけだった。

「むう…… デリカシーがないなあ」

「デリカシー？」

「もういいや。じゃあさ、DVD借りに行こう？」

誘うような口調だが、決定事項らしい。ソファから勢いよく立ち上がった奈々華は早速、数着の上着を手に取り、見比べる。その後ろ姿を眺めながら、再び妹に振り回される生活が戻ってきたことを実感している仁。ポリポリと首の後ろを掻きながら、しかしその顔は優しく緩んでいた。

第四章 第二百二十六話：怒りのガム

大通りから少し外れたところに、中規模のレンタルビデオショップがある。電飾の一部分が誰かの悪戯で割られていて、来る度に仁はいつ直すのだろうと気になっている。自動ドアをくぐると、左手にカウンターがあり、正面にはCDやDVDを陳列した棚がずらりと並んでいる。中谷の駅前にはかなり巨大な同業が看板を出しているが、慎ましく営業するこの店を兄妹は利用していた。

「俺向こう行ってるよ」

入り口から一番遠い棚、その奥にパチンコ台やクレイシゲームが置かれたゲームコーナーがある。奈々華の返事も待たずに、仁はそちらへと吸い込まれる。手近にある台に座って百円玉を投入、ハンドルを握って玉を弾き始める。遅れてやってきた奈々華が隣の台の丸椅子に座る。

「探してきなよ？　俺は待ってるから」

ガチャガチャと玉を弾く音は、実際のパチンコ店では聞ける機会はあまりなかったりする。奈々華がぼそぼそと何事か喋る。いくらパチンコ店にくらべれば雑音が少ないと言っても、他のゲーム機も稼動しているのだから、仁は聞き取れない。もう一度言ってくれと顔で合図。

「一緒に行こう……」

今度は聞き取れたらしい。だが乗り気とは言いがたい顔で、俯いた妹を見る。

「子供じゃないんだから」

気に入った映画なりドラマなり勝手に借りればいい。第一部屋で今までさんざ一緒に居たのに、まだ自分と一緒に居たいと言う。仁にはそれが理解しきれない。勿論懐かれるのは嬉しいことなのだが、少し度が過ぎる。

言葉に詰まっている間に、仁の右手が感触の変化を覚える。百円で

買った玉がなくなったのだ。筐体の上に設置されたデータ機、回転数や大当り回数などを表示する、を見ると8回転しかしていない。改めて仁がガラスの向こうの冷たい金属の群れを見つめる。へそ釘とワープ釘はプラス調整だが、寄釘と風車はいかんともしがたい方向に曲がっている。これではステージからの入賞に依存するばかり。

「いやいや…… 遊ばせろ」

仁は嚙んでいたガムを口から取り出すと、下皿に擦りつけ始めた。

「ちょっと！ お兄ちゃん」

奈々華が慌てて兄の犯罪行為を止めにかかる。仁の逞しい右手を、奈々華の華奢な両手が引っ張るが、びくともしない。結局、皿の底に満遍なくガムの膜を貼り付けたところでやっと満足して手を離れた。

「何てこと……」

「これはガムじゃない。素人が釘をいじるなという切なるメッセー
ジだ」

「ガムでしようが！ 何を訳の分からないことを言ってるの！」

大声で叱るものだから、客の数人が何事かと視線を投げかけてくる。周囲の様子に気付いた奈々華はトーンダウンし、兄を引っ張って違う通路へそそくさと退散した。

「回らない台なんてホールだけで十分なんだよ」

なおも続く仁の身勝手な言い分を無視し、奈々華は棚を物色する。既にアクション映画、コメディ―映画が数本カゴに放り込まれているが、奈々華の目は忙しなく棚を行き来する。時折パッケージを手にとって粗筋なんかを読んでいる。

「なあ、まだ借りるのか？」

仁はあまり映画やドラマに興味がなく、法事に連れてこられた子供のように退屈な顔。

「うん。だって暇でしょ？」

それを言われれば返す言葉もないのだが、恐らくは仁と一緒に観よ

うと借りているのだから、そうなる何時間か拘束されることとなる。

「なんか恋人みたいだな」

その行動と言い、束縛と言い、確かに、不精な男が几帳面な女に振り回される図そのもの。仁の皮肉はしかし、奈々華にそのままの意図では伝わらない。彼女は手に持っていたDVDケースを取り落とし、派手な音を立てて床の上を滑らせた。二人に背を向けて店内を徘徊していた少年が、びくりと体を跳ねさせてから振り返る。その少年にぺこりと軽く頭を下げてから、仁は床の上の薄汚れたケースを拾い上げた。

「何やってんだよ……」

自然と目に入ったDVDの中身は、かなり濃い恋愛映画だった。

第四章 第二百二十七話…ミサンガ

仁も全くの暇人というわけではない。はぐれ精霊狩りの仕事がある。休み中は夜勤で出て欲しいと言われ、そのようにシフトを組んだ。夜勤は夜の十時から翌朝六時まで。どんな仕事をしているかと問われれば実は特に何もしていない。常日頃、被害が出る前に悪質な精霊を発見、これを撃退しているため、出社しても特にすることはないのだった。しかし中には緑の魔術師の、中谷支部では井須啓次いすけいじという男性職員があたる、捜査網を漏れて人に危害を及ぼす段まで気付かないモノもいる。そういった場合にはスクランブルで迎撃に向かうわけだから、待機中と言えど気は抜けないのだ。当然年中無休、二十四時間体制。

そしてそうなった場合の仕事の内容は極めて簡単。精霊の捕獲なし、屠殺。そして大抵の場合は後者でことの処理とする。

「そろそろ行かないとな」

夕食を終えて早速始まった上映会を、奈々華を傷つけることなく脱出できる正当な用事。気取られないように残念そうな声を出しているが、顔が安堵に緩んでいる。対照的に奈々華は曇った顔。可愛らしい少女が憂いを帯びた表情をすると、わけもわからず申し訳ない気持ちになるのだから不思議だ。しかしそれは他人の話。家族である仁はお構いなしに、行ってきますと呑気な挨拶。体が資本なのだからと、用意も何もなく出て行けるこの仕事を存外仁は気に入っていた。

「あ！ 待って」

それを奈々華が呼び止める。ドアに歩き始めた仁は首だけ振り返った。最近買い足した洋服筆筒の中をゴソゴソ漁ると、手に何かを持って仁に歩み寄る。どうやらミサンガのようだった。材質は何かの動物の体毛にも見える。白を基調に所々ピンクが入っていた。ピン

クはどうやら毛糸のようだ。

「編んだの？」

市販のものと言われれば疑うこともないような出来栄えだが、彼女は裁縫も得意だ。奈々華は誇らしげに頷く。

「お守りなんだって。ラッキーラビットっていう精霊の毛皮を使って編むんだ」

嬉しそうに語る。

「もう一つあるみたいだけど？」

奈々華の手にはそっくり同じものがもう一つ握られていた。

「お揃いで作ったの」

そう言って左手に嵌める。腕をくるくる回して仁に見せる奈々華は本当に嬉しそう。仁もつられて微笑む。

「ありがとう。大事にするよ」

彼女なりに、危険な仕事場へ行く仁にせめてもの贈り物のつもりなのだろう。迷信やオカルトの類を信じない仁もその心遣いにこそ感謝した。

自転車をとばし、職場のプレハブに駆け込んだ仁は夕方から勤務の職員に挨拶を済まし、石油ストーブの前を陣取る。一段と寒さを増した冬の坂道を自転車で駆けた体を温めるためだ。手持ち無沙汰な仁は、もう見慣れた職場の風景を漫ろに見渡す。会議用の簡易な机と椅子が数組。ホワイトボードが一つ。石油ストーブが一つ。冷蔵庫が一つ。事務用の机が二つ。書類を挟んだファイルを保管する本棚が一つ。本当に無駄なものがない職場だ。基本的にシフトは二人体制。今日の夜勤は仁と広畠。当分は研修も兼ねて彼とペアを組むとのこと。

広畠が遅れて事務所に入ってくる。おうと気さくな挨拶、上下ジャージのラフな装い。

「おはようございます」

夜勤におはようと言うのも変な感じだが、彼の生活は夜勤続きな
でそれで正しかった。交替の二人の到着を受けて勤務を終えた二人
の職員は職場を後にする。残されたのは仁と広畠の二人。部屋の隅
に設けられた台所で、給仕よろしく茶を沸かし始めた仁。滅多にな
い緊急出勤を未だ仁は経験しておらず、彼の仕事は専らお茶汲み係
りとなっていた。だが今日は少し違った。広畠が何やら含み笑いを
浮かべながら仁を見ている。

「何ですか？」

「いやなあ…… 大丈夫かなと思って」

もったいつける。広畠は決して悪い男ではないが、こうして時折人
をからかったり、焦らしたりして、その反応を楽しむ節がある。仁
も慣れたもので次の言葉を辛抱強く待った。

「今日は城山君に実地をやってもらうんだ」

そう言うと、広畠は一段と笑みを濃くした。

第四章 第二百二十八話：上司

仁は困惑した表情で広畠の運転する車の助手席に座っていた。

その原因は二つ。まず得心がいかない。事前に発見している悪質な精霊をどうして野放しにしているのか。いくら新人研修の名分でも、一般人に被害が出る前に可及的速やかに排除しておくべきだろう。

もう一つ。仁はこの段になってようやく失念していた重要事項を思い出した。彼にとっては死活問題と言っても過言ではない。ツーマッセルということは、自分が戦っている姿を相方に見られるということだ。つまり彼の主属性が、一般的な五つに該当しないということが露見してしまう。失念の理由を分析すると、今まで一人の戦いを繰り広げてきた彼にとって、他人と共闘するという慣れない事態を、頭の表層的な部分でしか理解していなかったことが挙げられる。何にせよもう遅い。車は時速六十キロで件の精霊がいるという目的地に向かっていているし、一つ目の疑問に関しても、いつもの広畠の悪癖の前にのりくらりかわされる。「行けばわかる」とのこと。

目的地は中谷の街並みを遠く離れた、神奈川県のある山。麓から伸びる舗装された道路を登り、中腹辺りにある登山客用の休憩所兼駐車場、一台も車が停まっていない貸切状態の一角に、車は乱雑に停まった。車を降りると冬の凜とした空気の中に、眠りにつく緑の呼吸が混じっていた。思わず大きく伸びをした仁は、後から降りてきた広畠を見て、体を丸めた。一応は勤務中で、こんな山間まで車を走らせたのは仁のためだ。

「冬だから夜景が綺麗なんだが、野郎と来ても嬉しかねえな？」
広畠が黄ばんだ歯を見せる。なるほどガードレールの向こうに目をやると、名も知れぬ街並みが眼下に広がる。だが仁はその軽口に愛想笑いを返すだけで、もう何度目かもわからない質問を再び口にし

た。

「こんな山道にはぐれ精霊が居るんですか？」

「そうだよ」

「どういふことですか？」

人に危害を加えるのなら、こんな辺鄙な場所に陣取っていないで、人里に降りてくればいい。

「まあ、いいからついて来いよ」

そう言つてアスファルトを山頂に向かって歩き始める。ここまで来てももったいぶる彼に、仁は苛立ちを隠すのに苦労した。

「……待機してなくていいんですか？」

それを紛らわせるために違ふ質問をする。新人教育をしていたから緊急出動要請に応えませんでしたなんて事態になつてはよろしくない。他県にまで来てしまつてから言うのも後の祭りだが。

「一日くらい大丈夫さ」

「……」

「冗談だ。井須に連絡係兼補欠として出てもらつてる」

冗談を挟むのは彼らしいが、仁に変に気を遣わせない配慮かもしれない。有り難いけれど、仁はそこまで卑屈ではない。どんな仕事でも新人を一端の戦力に育て上げるには人手も労力も必要だと理解しているし、そのへんは割り切っていた。質問も途絶え、仁は黙つて広畠の後について歩いた。

それは突然現れた。

ガードレールの側を歩いてた仁は、反対側の斜面から黒い巨大な獣がすさまじいスピードで駆け下りてくるのを見た。一見すると狼だが、尾が異常に長い。体長の悠に二倍はある。体長それ自体も道路の両車線を塞ぐほどの大きさだ。口からは白い牙が覗き、体に陽炎をゆらゆらと纏っている。ぐるると凜猛な威嚇。雄雄しいの一言に尽きた。

「山の王・赤」

広畠の口から精霊の名が告げられる。その荘厳な名を冠するに相応しい威容は見る者に、自身の明確な死を悟らせる。

「なるほど……それで山に籠ってるわけですね？」

広畠は驚きをもって仁の顔を横目に見た。広畠ほどの実力者でやっ
と手に負えるというレベルの大物。上級精霊を前にしても落ち着き
はらった様子の仁は傍目には異常でさえある。

「仕方ないっすね」

諦めたように笑った仁は、覚悟を決めた。腰にはいつもの相棒。黒
い鞘から妖しく光る刀を抜き放つ。刹那、仁の体がその場所から消
えた。

第四章 第二百二十九話：一蹴

山の王・赤。名の通り赤の上級精霊で、人の何倍もある体躯と長大な尾を使って攻撃をしかけてくる。尾はムチのようにしなやかで、横薙ぎにも、振り降ろしにも、突きにもなった。口からは烈火を吐き出す。圧倒的な手数を誇る攻撃に特化した精霊。世界の名だたる赤の魔術師達にはコレをパートナーとして選ぶ者もいるが、非常に凶暴で、飼いならすのは困難を極める。一頭につき一つの山を根城とする習性があるらしい。人語を解するため、意思疎通は可能ではあるが、人を見下す態度からまともにコミュニケーションを取れた例は少なく、彼らの習性はほんの一部しか明らかになっていない。

遊んでいるようにさえ見えた。踊る軽やかなステップは的確に狼の攻撃が投下される場所から仁を退避させる。一連の動きの中の一部分だった。回避、攻撃、間合い、と全ては繋がっている。老練さを感じさせる動きは彼の年齢にあって大成されていた。

当初、広畠は共闘というより自分一人で倒すつもりだった。仁には自分のサポート、即ち後方支援をさせて、その実力を判断するつもりだったのだ。それが蓋を開けてみれば、真っ先に特攻していった仁を自分が傍観しているのだから予定も何もあったものじゃない。それでも彼の中に、仁を止めようという気持ちは微塵も湧かなかった。負けるはずがないとわかっていた。その危なげない戦いぶりに感嘆していた。主人なき精霊と彼とでは格が違う。

「予想以上じゃねえか」

広畠にとっては思わぬ収穫だった。新人は大抵この実戦で根をあげる。五十人雇って一人残ればいいほう。だから新人はダメでもともと。しかしこの城山仁という青年は上級精霊相手に横綱相撲。興奮を抑えきれないといった様子で、膝を打つ。

それが合図だったわけでもないだろうが、鈍重な、と言っても仁か

ら見ればの話しだが、獣の懷に飛び込んだ仁の刃が獣の首もとを深々と決る。仁の体を捉えようとして尾が右往左往するが、首の下に潜り込まれては、獣の本能が自傷の可能性を躊躇う。氣道に異物が混入しては、炎を吐くことも出来ない。獣は何も出来ないままのたうつ。そして活動の限界を迎えた巨大な体を横転させた。白いガードレールは鮮血に染まりながら、ひん曲がり、何とか獣の体を受け止めた。焼け焦げた山肌や木々、ぼこぼこ掘り返されたアスファルト。獣の攻撃は土地を破壊しただけに終わり、かすり傷一つない仁は生ぬるい赤のシャワーで濡れそぼった前髪を悠然と掻きあげる。開戦から十分と費やしていなかった。

「正直驚いたね」

ゆつくりと仁に歩み寄った広畠の第一声はそれだった。率直な感想。しかし仁もまた少し驚いたような顔をしている。彼の戦いぶりを見ても、恐れるでも気味悪がるでもなく平然と声をかけてくるような人間はそうはいない。つまりは同じ穴のムジナ。

「……こんなのをいつも新人にやらせるんですか？」

仁だからこそその快勝。並みの魔術師では返り討ちだ。広畠はケラケラと快活に笑った。

「そうじゃない」

それから自身の当初の予定を話し、仁は己の早とちりに気付いた。気付いて決まり悪そうに苦笑いする。どの道、後方支援などやったこともないので、予定通りにことを進めていては逆に失格だったかもしれないのだが。

「……まあ上司として、少しは部下をねぎらうか」

広畠はそう言って、全身から赤い雫を垂らしている仁を見る。何ですか？ と仁が疑問を口にするが早いか、彼の全身は水の繭に閉じ込められる。何もない所に大量の水が突然現れ、細長い球体を形作り、そこに漬けられているのだ。突然のことに吃驚した仁は、だがすぐに、そこから脱出しようともがく。

「じっとしてろ」

数秒の後、水は下から上へと繭の中を流れ、色を赤に変え、全て蒸発するように消えてしまった。解放された仁は財布でもなくしたかのように、目を見開いたまま全身に手を回していた。そこで気付いたのだが、確かに全身を水槽に漬けられたというのに、全く水気を感しない。

「体を洗っただけだ」

仁の反応が新鮮だったのか、広嶋はクスクスと心底可笑しそうに笑う。

第四章 第三百三十話…オヤジたちの沈黙

帰りの車内では、終始広畠はご機嫌だった。仁を言葉の限り褒めちぎり、褒められた本人より悦に入っていた。腰に懸念材料をぶら下げたままの仁は複雑な表情で社交辞令を返していた。

「死体はあのままで良いんですか？」

車に乗り込む前、どこかに携帯で連絡をしていたのを見ているので、何となく別働の部隊が片付けるのではないかと予想はしていた。だから、単に褒められすぎて悪くなった居心地をなおすために、適当に紡いだ言葉だった。

「ああ…… アレはウチじゃない。研究所のお偉いさん方に献上しなきゃいけないから」

仁の予想通りの答え。別の部門だとまでは考え付かなかったが。

「……」

「……」

広畠もまた仁を褒め殺していたのは、仁の主属性を悟り、彼なりに気を回していたためらしい。それをまた仁も感じ取った。車内に微妙な空気が流れる。黙りこくっていても仕方ないので、意を決して口を開きかけた仁は、しかし先を越された。

「君がそうだったんだな」

「え？」

「黒の魔術師が学園に入ったってのは噂には聞いていたんだ。フロイラインの幹部相手に快進撃を続けてるってのもな」

そこまで知っているのなら、仁から言うことは何もない。隠していなかったと言えは嘘になろうか。

「ウチは実力主義だ。職員が何色でも構わんよ…… 精霊を退治できる実力があれば何も文句はねえさ。それ以上もそれ以下も求めちゃいねえ」

淡々とした口調には、何の感情も窺えなかった。新人をいたわる優

しい上司の顔はなかった。人によっては部下を駒のように見る言い草は、冷淡と感じるかも知れない。しかし仁はそれでよかった。下手な偽善よりは嘘のない合理主義のほうが心地良い。

「改めて宜しく頼むよ」

「はい」

そろそろ太陽が昇るころ、助手席の窓からは明るみ始めた空が、薄紫の夜を押し退けていた。

仁は少し心臓に悪い思いをしたので、ダウンの上着を脱ぎ、インナーのシャツの袖を捲くった。運転席からソレを見つけた広畠は、またからかうネタが出来たわけで早速食いつく。

「いいもんしてるじゃねえか」

広畠の視線は、仁の右の手首、白とピンクのミサンガの上で止まっていた。何とも言えない表情で仁はアゴの無精ひげを触りながら、いえまあと歯切れ悪く。

「可愛いのか？」

「はい？」

「それをくれたお嬢さんだよ」

仁は驚く。どうして女性だと限定出来るのか。少し間が空いて、質問の答えをしようとしてまた言葉に詰まる。確かに奈々華の容姿は、兄に似ず、可愛いと形容しても差し支えないほど端整だ。だが身内としては謙遜が良いのか、と。

「妹がくれたんですよ」

結局仁は正直に答えることにした。先程のやり取りではないが、腹を割ってしまった方が上手くいくこともある。

「……」

広畠は怪訝な表情。前方不注意と取られてもおかしくない頻度で仁の顔を窺う。

「妹さんはまだ小さいのか？」

「いえ？ 十七ですけど」

そろそろ仁も広畠の態度から、自分がしているものは、兄弟姉妹から贈られるようなものではないのだと勘付くが、一体どういうものなのか見当がつかない。奈々華は仁の無事を願って作ってくれたのだろうから、ますます彼には心当たりがない。

「……どうしたんですか？」

「……ええっと、その」

珍しく広畠の言葉に精細がない。

「もしかして妹から貰うのはおかしいものなんですか？」

「知らないのか？　そうか……　おかしくなくはないような気もしないでもない……　かもしれない」

否定なのか肯定なのか。煮え切らない広畠を仁は目に力を込めて見つめる。藪を突いてしまった広畠は一度軽く目を瞑り、観念した様子。

「まあその、それは……　縁結びというか、恋人同士がつけるものだ」

「え？」

「お揃いで」

「え？」

確かに奈々華は自分の分も持っていた。

「男が右手、女が左手だったかな。若者の間で流行ってるらしいから、俺も詳しくは知らんのだが……」

「……え？」

「……」

車内に沈黙。往路とは違った種類の、払拭の方法すら見つからない沈黙。

第四章 第三百三十一話：楽勝

「あのバカまんまと気付いてなかったね？」

奈々華が仁を見送った後の彼らの部屋、それまで布団の中で狸寝入り、もとい静観を決め込んでいたシャルロットがのそのそと顔を出す。梯子を使わずに一気に床のカーペットの上に飛び降り、見事に着地する。

「うん。そんな気はした」

人間達の流行などには疎い、精霊のシャルロットでさえ知っていた願掛け。そういった分野に関して、仁はその精霊以下のアンテナしか持っていないということになる。街でそういったアクセサリーを身につけている人間は何度か見ている筈だが、せいぜい、流行っているんだろいうな程度にしか認識していなかったのだろう。

「徹夜したかいがあったよ」

「そうだねえ。仁の居ぬ間にせっせとね」

ここ数日、仁が夜勤に出かけた後、奈々華はチクチクとミサンガを編んでいたわけだった。シャルロットはソファーに座る奈々華の膝の上に座る。今ではもう彼女にとってそこは一番のお気に入り場所となっている。

「アレを持たせておけば牽制にはなるからね」

ふふと不敵に笑う奈々華。夜なべの原動力はつまりそれだった。坂城は完全に黒、ミルフィリアもグレーに近いのだから、対策は急務だった。

「でも遅かれ早かれ、仁は気づくんじゃないかい？」

シャルロットはよく知らないが、人間の中には他人の恋愛事情を突いて楽しむ輩もいるということぐらいはわかっていた。

「大丈夫だよ。説得すれば、お兄ちゃんも単じゅ……優しいから納得してくれるよ」

コクンと一つ、自信たっぷりに頷く。仁の扱いは、妹の奈々華が一

番よく心得ている。

そうかい、と気のない返事を返して、ちらりと冷蔵庫を見たシャルロット。生憎彼女は他人の恋の話を聞いてもお腹一杯にはならない。奈々華もそこらへんはよく分かっていて、何も言わず台所へ向かう。シャルロットは生意気にも、仁と奈々華と同じものを食べる。勿論、猫に食べさせると具合の悪いものは抜いているのだが、それすらも自分は猫ではないと言い張る彼女にとっては面白い話ではないらしい。冷蔵庫から取り出した魚の切り身を皿に乗せて、奈々華が帰ってくる。

夜が明けて、朝の八時近くになってようやく仁が帰ってくる。奈々華は六時半に起きて、朝食も身支度もぼつちり。いつもは疲れた様子もなく、帰宅の挨拶をする仁であったが、今日は少し様子が違った。無然とした表情で、ドアを開けると、つかつかと奈々華の傍まで歩み寄る。

「くおら。クソジャリ。てめえのせいでとんだ恥かいたじゃねえか」
「何のこと？」

仁は右手に嵌めたミサンガを取り、左手でひらひらと振ってみせる。

「これだよ！ 何考えてんだ？ これ縁結びらしいじゃねえか」

「うん」

「うんじゃねえよ。俺の無事を祈願しろよ」

そう言っで見下ろされても、奈々華はけろっとしている。仁が本気で怒っているのかそうじゃないかわからない。そして、なめているわけではないのだが、仁が少々なことでは怒らないことも知っている。

「確かに、巷ちまたではそういう風に思っつけてるみたいだけど、私とお兄ちゃんの無事を願って作ったのなら、何も問題はないでしょう？」

朗らかに笑う。

「そういう問題か？」

「そういう問題だよ。皆がそうしてるからって、私たちまでそういう意図を込めて持つ必要はないでしょう？」

「いやいや。でもご利益違いっていうか……」

「え？ お兄ちゃんってそんなに信心深かったっけ？」

「いや…… そういうわけじゃないけど」

そもそも仁はお守りのご利益を信じて受け取ったわけでもなく、奈々華の気持ちに感謝してこそだったわけだから、それが本来どのようなご利益があると流布されている代物だろうが、関係はない。

「じゃあ…… つけてくれない？」

奈々華の表情が急に曇る。泣き出しそうで、消え入りそうで。仁は面白いように騙されて、律儀に慌てる。

「つける、つけるから…… 奈々華がせっかく作ってくれたんだし、お前の言うとおり、他人は他人だもんな」

有言実行、また右手にお守りを嵌める。何だかんだ言っても、仁はこの四つ離れた妹には滅法弱い。それは昔から、隔絶を経た今でも変わらない。

話し声に目を覚ましたシャルロットは、一部始終を見届け、ベッドから降りてくる。朝の散歩を日課とする彼女は、部屋の戸へ向かう。仁が開け放ったままだった。

「アンタ…… もう少し自分というものを持ったほうがいいよ」

すれ違いざまにかけられた言葉は、妹思いとは両立出来ない内容だった。

第四章 第三百三十二話：青の猛攻

「それで？ 用って何ですか？」

「愛の告白」

坂城なら、仁の思惑通りに狼狽してくれたのだろうが、その姉は一味違う。

「それで？ 用って何ですか？」

何事もなかったかのように再度。学園の一階にある職員室。用事があるで一報入れた仁は、ミルフィリアにそこに来るよう指示された。今二人が居るのは、来客用のスペース。ガラスの洒落たデザインのテーブルを挟み込むようにして黒いソファアが向かい合っている。そこに対面同士に座った青年と少女は、生徒と教師。スモークの貼ったガラスで間仕切りされてはいるが、職員室の人間が会話を聞こうとすればいくらかでも出来よう。そして新居を始めとした噂好きの職員の一部は実際そうしていた。だから先程の仁の返答の後、間髪入れずひそひそと話す声が仕切りの向こうから聞こえた。

「……その、祐君はどうしてる？」

「どうしてるとはどういう意味ですか？ 元気にしているんじゃないですか？」

ミルフィリアは高等部の二年生、特に進級の査定が厳しい中等部の三年生、小等部の六年生を相手に教鞭をとっている。

「そうじゃなくて……」

「進級は問題ないどころか、多分ペーパーは貴方なんて比べ物にもならないですよ」

「そうか…… まあそれもあるんだが」

そこまで言って、出されたマグカップに口をつける仁。彼としては仕切りなおしの意味を込めたのだが、ミルフィリアに小言を言う隙を与えてしまった。

「他人のことより、自分のことを心配したらどうですか？ 遊庵が

嘆いていましたよ？ 私も休み前に行った小テストの貴方の答案を見ました。何ですか？ アとかイって。第五、第六問は記述問題ですよ？ やる気あるんですか？」

「あるわけがないだろう？」

旗色が悪くなっても反省を見せるような男でもない。誇らしげな顔で言い切る。

「何を威張っているんですか？ バカなんですか？ あとそのどや顔、むかつくからやめてください」

「うるせえなあ。俺のことは良いんだよ」

「よくはないでしょう。貴方本格的に留年ですよ？」

意外にミルフィリアは小言が多い。坂城や奈々華に比べても、より上昇志向が強いのかもしれない。完璧主義なのかもしれない。出された珈琲は苦くはなかったが、仁の顔は今や完全に苦みばしったものを口に入れたようになってる。

「いいんですか？ 来年は知り合いの中学生と同級生になって、妹の下級生ですよ？ どこまで落ちぶれば気が済むんですか？」

そして容赦がない。相手をボコボコにするまで口撃の手を緩めることを知らない。

「だあもう！ 今はとにかく俺の質問に答えてくれよ。祐君はちゃんとクラスに馴染めていそうか？」

わずかな間。ミルフィリアは、その質問には答えずに、先程の仁と同じように自分の分の飲み物で唇を湿らせた。仁はその間、彼女の動作を見つめていた。

「……自分で聞けばいいでしょう？」

冷静な声。妥当な答え。仁は後ろ髪に手を入れて困ったような表情を浮かべた。やがてそのままの表情で口を開いた。

「それがさあ……」

昨日あったことを話し始めた。

第四章 百三十三話…係争

いつものように、お茶を汲みに仕事場へと向かう仁は、中庭を通り過ぎようとしたとき、かすかな話し声を聞いた。腕時計は午後八時を指した辺りで、真面目で向学心の強いこの生徒が学年末試験を控えたこの時期にふらふら遊んでいるとは思えにくい。つまりは余程重要な用事があるのだろうか。現に、話し声の片方は怒声に近い。喧嘩だろうか。

いつもなら関わり合いになろうともしない仁であったが、その日に限っては妙に気になった。もう一つの冷静な声が聞き覚えのある声に似ていたからだ。音の発生源にそっと近づくと、中庭の片隅、林立する木々の中に三人の人影が見えた。暗がりの中、声やかすかに窺える体格から、全員男のようだ。そして仁の推察どおり、一人は彼の知る人物のようだった。声変わりはすましているが、それでも少し高い声。聞き間違えるはずもない。

「僕が君の彼女に言い寄られているのがそんなに気に入らないかい？」

静かな声ではあるが、不思議と通る。仁の耳にも祐の声ははっきり聞こえた。

「……ユミは関係ねえよ」

どうやら祐が相手の男子生徒の恋人と懇意になったことが原因らしい。相手は否定しているようだが、多分に苦し紛れと言ったトーン。「何度も言っているけれど、あの娘とは何もないよ。食事に誘われただけ。断ったしね」

「だから関係ねえって言ってんだろう！」

相手の男子生徒はどうやらかなりお冠のようだ。

「俺達は実地でお前に手加減されたのが気にいらねえんだよ」

言って、もう一人の男子生徒に裏づけを取る。そうだな、と強い口調に、もう一人の気の弱そうな男子生徒はうんと小さく返した。

どうやら彼の個人的な怨恨に大義をつける口実のために連れてこられたらしい。仁の頭の中は、それにしても中学生は実地の授業などあるのかという驚きと、もう一人の男子生徒はこの寒い中言質を取られるただけに駆り出されて可哀想だということだけ。

「手加減しないと、君たちは病院で年を越すことになるからね」
厳然たる事実をさらりと。

「てめえ！」

男子生徒が祐の襟首を掴む。穏やかではない。仁は迷った挙句、止めに入ることにした。

「やめろ」

仁の声には迷いがなお残る。それでも第三者の声に心臓を鷲掴みにされたような男子生徒二人は、弾かれたように振り返った。振り返って仁を見とめるやいなや顔を硬直させる。まるで死神にでも出くわしたように恐怖だけを浮かべる。学園の生徒で仁を知らない者はいない。

「たけちゃん、まずいよ」

もう一人の少年の怯えきった声。この少年には同情こそすれ、危害を加えるつもりはない仁であったから少し心外である。たけちゃんと呼ばれた、激昂していた少年は苦い顔をして、祐の襟から手を離れた。そのまま振り返らずに、木立の中へと消えていく。お付きの少年もその後を慌てて追っていった。

「まさか介入してくるとはね……」

祐は当然仁の存在には気付いていた。

「……余計なことをしたかな？」

仁には祐の言葉の裏にどんな感情が潜んでいて、また自分がした行動が常識的に見ても正しいのかどうか判断しかねていた。まさしく余計なこと、非常識なお節介で、祐もまたそのように鬱陶しく思っているのではないだろうか、と。しかし祐は薄く笑んだ。仁が見た

こともない優しい顔だった。

「いや…… 助かった。僕も穏便に済ましたかったから」
「……」

仁はこのとき黙って立ち去るなりするべきだった。少なくとも蒸し返すべきではなかった。

「君はその…… 上手くいっていないのか？」
「何が？」

祐の顔からは微笑が消えた。

「あの男の子の恋人にちよっかいをかけられて……」

「こそこそ盗み聞きしてたんだろう？ 僕は何もしちゃいない」
いつも仁が聞く冷たい声音がそこにあった。仁は今更になって己の軽率を理解した。

「僕が感謝したのは、純粹に困っているところを手助けしてもらったからに過ぎない。なるほど…… アンタはそれが僕だったから助けたわけか。父親面か？ それとも恩でも売ろうってか？」
まさしく仁の奥底に巢食う卑しさを抉っていた。凶星なのだ。祐は軽蔑の念をこめた目を向けて、最後に言い放った。

「僕の対人関係に首を突っ込んで説教でも垂れる気か？ アンタにそんな資格があるのか？」

答えが返ってくると思っていない。仁に返す言葉があるわけがない。祐は仁と目を合わさず、その横を通り過ぎていった。

第四章 第三百三十四話：向きあう仁

仁の回想を聞き終えたミルフィリアは、すました顔をしていた。優雅にカップの中身を啜る少女と、示唆を待つ青年は、まさしく教師と生徒。どちらが年上かわからない。

「祐君が正しいのでしょうかね」

まずは善悪をはっきりさせた。そこについては仁も納得している。

「貴方には言われたくないでしょう。学園一のはぶられ者ですし」
不名誉な称号ではあるが、事実。仁に対人関係を円滑にするための何かしらのアドバイスをされたところで、何らの説得力も感じない。

「……無理に近藤の代わりをしようとはせずに、友達のように付き合えばいいんじゃないでしょうか？」

仁には確かに祐に対してそういうきらいがある。「導け」という言葉は、愚かな仁には抽象的過ぎた。

「それすらも困難なんだが……」

「それは貴方の思い過ごしではないですか？ 彼も少し貴方の評価を改めてきていると思いますよ？」

「そうだろうか」

満身創痍で学園を、大切な者達を守る姿に、何ら心動かされないはずがない。それが父親の命を奪った男でも。

「現に助けたことに関しては礼を言っていたのでしょう？ そういう関係を続けていけばいいのです」

「そうだろうか」

「ええ、きっと」

彼もまた迷いの中にいるのかもしれない。自分の父を殺めた人間が、止むに止まれぬ事情があったと知っている。そして自分をどうにか気かけようとしている。感情を正しく汲めない人間ならば、突っぱねるだけだ。もしかしたらもう仇討ちに襲い掛かってきて、行くところまで行っているかもしれない。祐はそうではない。だからこ

そ、自分を助けてくれたことに感謝し、裏の意図を察して拒絶した。あの時、仁の頭には純粋な厚意とその裏の意図が混在した。

仁はまた黙ってしまったが、ミルフィリアは小言を言い切ったわけではない。ただその質は変わった。

「仁さん、腕にしているソレは何ですか？」

突拍子もない話題の転換に、仁は呆けた顔をした。しばらくあって、右手のミサंगाに目をやった。

「奈々華がくれた」

「……少し変態だとは思っていましたが」

「そうじゃねえ！ これは確かにそういうもんだけど、俺はお守りだと思っしてしてるんだ」

「なるほど…… 重度の変態だったと」

「何でそうなる！」

なおも反駁を続けようとした仁であったが、相手の顔を見て言葉に詰まった。ミルフィリアは眉を曲げて、悲しんでいるようにも見えた。彼女の沈んだ顔を見るのは初めてではないが、いつ見ても気分のいいものではない。

「奈々華が徹夜して編んでくれたんだ。あの子も自分があまり俺の役に立てないのを気にしている。多分無事な自分と俺が繋がっていることで、俺の無事も手繰り寄せれると考えたんだと思う」

全然違う。

「……まあそういうことなら仕方ないですね」

ミルフィリアの顔がいつものクールなものに戻る。

「ていうか、俺が何をしていようと関係ないだろう？ もしかして妬いてる？」

「水よ。大いなる水よ……」

「わ、待って！ 俺が調子に乗りました。確かに乗りました。すいませんでした」

発光していたミルフィリアが常態に戻る。その間には、顔に差し
いたほのかな朱も消えていた。

「わかればいいのです……」

仕切りなおすように咳払いを一つ。

「奈々華さんと同じように扱ってみてはどうですか？」

「え？」

時々、ミルフィリアは話をコロコロ変える。脈略のない話し方は、
彼女に限っては頭の回転が早いせいかもしれない。

「祐君です。純粋な思いやりを持って接していれば、きっと上手く
いきます」

隔絶してなお、仁に愛情を抱いていた奈々華とは勝手が違う。けれ
ども方向として間違っているとはとても思えない。ミルフィリアの
言いたいことはそういうことだった。

「そうだね…… あの子は賢い。すぐには無理でも、例え許せない
ことがあっても」

仁は思った。仮に奈々華を奪われた自分が、彼のように居られるだ
ろうか。無理だ。冷たいのとは違う。だけど理知を以って激情を抑
え、バイアスも憎悪も片時置いて、自分の目で相手を判断する。恐
らく仁がもっと非道な人間なら容赦はしなかったろう。

「こっちが導いて欲しいくらいだよ」

小さく呟いた仁は、自分に渴を入れるように、カップの中身を豪快
に呷った。そしてミルフィリアに礼を言うのと、席を立った。

第四章 第三百三十五話：おためごかし

「遊園地？」

「そう、遊園地」

祐の部屋の前。戸を開いて事態が飲み込めないまま奈々華を見ている部屋の主は、珍客の突然の訪問とお誘いに困惑を隠せなかった。プライベートで会えば少しはやりやすいだろうという判断だった。昨日のこと、その他色々、一度きつちりと謝るべきだとはわかっていても、いざ面と向かって謝意を話せと言われて器用に出来るような仁ではない。そこらへんを分かっている奈々華は、彼にきつかけを与えようと考えたのだった。

「奈々華さんと、僕が？」

そんな奈々華の心中を知らぬ祐はまだ事態を把握し切れていない。それでも少し困ったような嬉しそうな微笑を浮かべる。そんな表情さえ中々蟲惑的だったが、残念ながら奈々華の心を魅了するには至らない。

「そう…… あと何人か誘って」

そこまで言えば、やはり後は彼の飲み込みは早い。その他の人間に誰が含まれるのかを察し、穿つ。

「城山さんの差し金ですか？」

「私も城山さんなんだけど？」

不敵に笑う奈々華に、逆に祐がどぎまぎさせられる。そう、不敵だった。奈々華はこの案を通すにあたり、婉曲はあだになると判断した。玄関戸から半身を乗り出したままの祐は、照れ隠しに苦笑する。

「お兄ちゃんは知らないよ。私の独断」

今度は花咲くように笑む。祐は目のやり場に困ってしまって、宙に視線を泳がせた。

「君が嫌がるのも無理はないと思う。憎んで当然だと思う。だけど…… お兄ちゃんを恨むなら私も恨んで？ お兄ちゃんは私を守る

ために貴方のお父さんを殺したんだから」

奈々華はいつのまにか笑みを完全に消して、神妙な顔をしている。

「……」

「でももし…… お兄ちゃんにも少しでも同情できるなら、チャンスをくれないかな？」

「……」

「待ってる」

祐の手に強引に握らせたのは、奈々華の携帯電話の番号。くるりと踵を返した奈々華。

「待って！ あのこと… 行きます」

呼び止めた祐の顔もまた何かしらの決意を宿していた。振り返った奈々華は、これほど早く快い返事が聞けるとは思っていなかったのだ。拍子抜けしたように顔を呆けさせた。だけれどそれは数瞬。

「ありがとう！」

ぱあっと顔を輝かせた奈々華には、見る者全てを虜にしないではないかなという魅力があった。

奈々華にとっても賭けに近かったのだ。自室へと戻る僅かな廊下を踏みしめる奈々華は、カーペットの上がひどくふわふわと柔らかいものを感じた。失敗するようなことがあれば、二人の仲を余計にこじらせることになるだろうし、成功した今でも仁に相談もなしに敢行したのだから、やはり上手くないかもしれない。

だけど傍観者で居るのはもう嫌だ。三年前のように、彼がただ苦しんでいるのを何の手立てもなく見過ごすのは辛い。仁は困るだろうか。勝手に舞台をセッティングして、勝手に役者に決めて、勝手に演目まで決めてしまった。しかし、それはきっと仁が望むものであるはずだ。人の心を読むことなど出来ない人の身であって、共に過ごした時間が、彼女の自信を裏打ちするのだ。彼の心は誰よりも、彼自身を除けば、正しく理解しているはずだ。それにもし嘆いたと

ころでもう遅い。賽は投げられたのだ。脚本だけは彼に委ねられているが、きつと上手くいく。そう思うことでしか今の奈々華には、自分の行動を正当化することは出来なかった。

ただどこで全く脈がないようだ、との道、まがりなりの共生も不可能だとも思った。謝る機会すら与えられないということは、奈々華はあまり知らないが、黒川の遺族に向き合ったときと変わらないのだ。

「私お節介かなあ？」

それだけじゃない。仁がミルフィリアにも相談に乗ってもらおうと出かけたことも多分に関係する。つまりは心証を良くしようという焦りもないとは言えない。彼にとってデリケートな問題であるにも関わらず、だ。

「何だか自己嫌悪」

そうはわかっていても、やめられない彼女もまた苦しい胸の内なのだった。

第四章 第三百三十六話：甘言

薄く張った雲を見つめながら、仁は小さく紫煙を吐き出した。奈々華と久しぶりに気まずい雰囲気。原因は当然祐を誘っての行楽だ。逃げるように中庭に非難した仁は、冬にあっても下界を優しく暖める太陽の存在感を改めて噛みしめながら、いつものようにタバコをふかしているのだった。

「どうせ、旦那一人じゃ踏ん切りがつかなかったでしょうに」

「……そう思うよ。けれど相談くらいしてくれても良かったんじゃないかなとも思う」

責めたてたわけじゃなく、ただ煮え切らない態度を取ったのだから、余計に性質が悪い。女々しいのだが、彼の言い分にも一理ある。

「文句があるなら、はっきり言えばよかったんすよ」

今日の彼の反省会に付き合っているのは、静だった。弾効とも言う。

「文句はないさ。あの子なりに考えて行動したんだから」

朝降りた霜が解かされて、きらきらと輝く芝生の光景は、冬の美観を閉じ込めたような趣があったが、仁にそれを楽しむ余裕はあまりなかった。それどころか、タバコの火を消すのにおあつらえ向きだと思っているらしい。押し付けた茶色の葉に、黒い粘土のような灰のかたまりがこびりつく。

「……アンタ、ひょっとして謝ることがより相手の反感を買うと思ってるっすか？」

「……」

箱から取り出した三本目のタバコは、口に咥えさせる動きの途中でピクリと止まった。沈黙は肯定だった。

「だとしたら、それは逃げてるだけじゃないっすかね」

軽い調子で静はいつも重たい言葉を紡ぐ。ゆっくりと口まで運んだタバコを唇で挟んでから、仁はまた火を点ける。

「向き合うことを相手が拒んでいると勝手に解釈してそうしない」

「……」

聞いているのか、聞いていないのかわからないほどに、仁は表情を作らなかった。

「友達なんて無理じゃないすか？ どこまでいっても加害者と被害者なんじゃないんすか？」

「……」

「だったら…… 逃げて逃げて逃げ続ければいいんじゃないすか？」

「……そういうわけにもいかないだろう」

「赦してもらえない謝罪に何の意味があるんすか？」

徐々に仁の表情が強張っていく。

「謝ることに、誠意を見せることに意味があるんだ」

それは自分に言い聞かせる言葉だった。

「だったら妹さんがやったことは渡りに船じゃないんすか？ どうして諸手を挙げて賛同しなかったんすか？ よくやったって褒めればいいじゃないすか」

「……」

「……」

ジジジと仁が毒を吸う音。弱々しく赤い光を放つタバコ。

「逃げたらどうですか？ また冷たい言葉を浴びせられるかもしれないっすよ？」

「あの子は…… 賢い子だ。黒川の時とは違う」

「どうして言い切れるんすか？」

心底バカにしたような嘲笑混じりの声。何ら確証のない空論を振りかざして、一人よがりの悦に入るガキはバカにされて当然かもしれない。

「まあ…… もう後には退けないっすからねえ。腹を割って話してみるのもいいんじゃないすか？ 案外優しい言葉が返ってくるかも知れないしねえ。何せ人は本音を話すとは限らないっすから。旦那がいい見本でさあ」

ケタケタと底意地の悪い言葉に、しかし仁は返す言葉を持たなかつ

た。胸がすくような青い空をゆっくりと流れる雲は、人が望むと望まざると時は流れるということを、戒めるためにそうしているのかもしれない。

「明後日か……」

第四章 第三百三十七話…DS少女

本来、特定の生徒と別段に懇意にするのは、教育者としてよろしくない。そんなことも忘れて、二つ返事で了承した坂城ではあったが、学園の責任者としての自覚がないわけではない。

「あくまで監督です。テストを控えたこの時期に遊び呆けようなど、直接会ってガツンと言ってやらなければいけませんしね」

「語尾が踊ってるわよ？ 本当にわかりやすい性格ねえ」

あきれたミルフィリアもまた、仁に誘われて断らなかった口。結局、仁と奈々華の城山兄妹、ミルフィリアと坂城、それに祐を加えた五人で遊園地に行くことになった。坂城もミルフィリアも、祐が加わった意味を十分に理解しているのだが、どうしようもなく坂城は心を躍らせている。

「そんなことはありません。ただの監督ですから」

「へえ。じゃあもし二、三とかで別れて、二人きりになっても小言を言い続けて鬱陶しがられるの？」

「……」

ぐうの音も出ないといった顔。ミルフィリアならそうするのだろうが、坂城はそこまで気が強くはない。彼のためを思えばそうするべきなのかもしれない。

「本当に好きなのね？」

「……はい」

「どういうところが？」

にやりと嫌らしい顔で尋ねるミルフィリアの冬休みの退屈しのぎは、このように従姉妹をからかうことだった。

「それは…… その。何度となく命を助けてもらったし、父と母が遺してくれたこの学園を命懸けで守ってくれるし、その……」

言いよどむ。宿題を忘れた生徒のように真っ赤になっているのだから、上手く頭も舌も回らないのは当然だ。冬の太陽を取り込んだ室

内はただでさえ少し暖かいような気がする。

「それだけでもないのでしょ？」

「……優しい」

笑みを濃くするミルフィリア。ちょっと大丈夫かと心配になるほどに顔を赤くする坂城。

「私は何も見返りを用意できないのに、不平一つ言わず守ってくれる」

「ふむふむ」

「アイツは馬鹿だし、へたれのダメ人間です。だけど……」

絵の具を塗ったように赤い顔で、思いのたけを吐きつらねる。いつしかミルフィリアも好奇よりも愛情を持ってそれを見ている。

「私は彼にもらった分を返したいんです。彼が望むことを何でもしてあげたい。それだけのことをしてもらっているんです」

「そうね」

笑みの質がとても優しいものになる。小さな子供が正しいことをしようとしているのを見守るよう。

「ううん…… 私がそう望んでるんです。彼と共に歩む未来を……」
坂城はそう締めくくり、目を閉じて、胸の中にある大きな想いを大切に、大切に噛みしめていた。

「暇だよお」

ヒメネスはぐったりと長机の上に体を放り出した。冷たい木の表面にピタリと頬をつけ、上目遣いに仁をみやる。ストーブを稼働させている職場は、石油の匂いが充満し、むせかえるような熱を帯びていた。

仁が一人前と認定されて以来、広畠は時折ヒメネスと組ませた。彼も現場を預かる人間なのだから、それなりに忙しいだろうし、常に仁についているわけにもいかない。パイプ椅子をロッキングチェアのようにゆらゆらさせていた仁は、苦笑を交えてその視線を見返

す。十六だという相棒は、歳の割りに世間ずれしていなくて、純粹で真っ直ぐだった。仕事中心といえどダレてしまいうくらいに。

「またトランプでもやる？」

「やだ」

即答。トランプをはじめ、色々なボードゲームをやったが、ほとんどが仁の圧勝に終わった。数々の敗戦を思い出したのか、ヒメネスの眉が寄る。さすがに泣き出したりはしないが、目に見えて不機嫌になるので、仁としてもこの返事は助かった。変なところで鋭くて、手を抜いてもすぐにばれてしまい、余計に不機嫌になるので始末に終えない。

「スクランブルってのは中々ないんだね？」

頻繁にあっても困るのだが。ヒメネスは頬を机につけたまま頷く。正確には擦りつけたわけで、接地面がギュツと鳴った。

「……」

「……」

しばしの沈黙。やがて仁が徐に口を開いた。

「ねえ…… ヒメネスがもし、もしもだよ？ 誰かを傷つけるようなことをしてしまったら、ヒメネスはどうする？」

「謝る」

間髪入れずに返す。突然の話題転換にも動じないのは、それが世界の真理だと、人と人が繋がってられる唯一の手段だと疑わないからだ。

「謝っても許してくれなかったら？」

「許してくれるまで謝る」

「……」

むくりと顔を上げたヒメネスは小首を傾げる。当たり前のことを聞く目の前の青年が不思議でならないのだ。単純なことであり、絶対のことであり、困難なことである。

「そうだよね」

「うん！ そうだよ」

そして屈託なく笑う。仁もつられて優しく笑う。
「……そうだよな？」

第四章 第三百三十八話…勇氣

電車で五駅ほど離れた駅、古窪南^{こくぼみなみ}。大型のショッピングセンターや、アウトレットモールなどが駅前にとんと構え、そこから離れると程よい緑と、住宅街が連なる。大味な街と言った仁の感想も何となくわかる気がする。その住宅街に挟み込まれるようにして、古窪ニュータウン通りという大通り、そこを真っ直ぐ進むと右手に多きな遊園地が見える。よくある野球場の例えなら、十個分はあろうか。仁の身長は三倍はあるだろう鉄格子にぐるりと囲まれ、ドーム状の建物や、城を思わせる尖塔などが遠くからでも存在感たっぷりに見えた。

車中、道中会話は弾まない。それでも、不仲の二人を含んでなお、女性陣は交互に話しをふって和氣に努めたのだから、仁は果報者と言える。やがて五人が五人、事務的な会話以外に話すこともなく、目的地が見えてきて、ようやくと安堵に頬を緩めた。鉄柵の一部が欠けて、受付が現れる。左右に窓口があり、中には愛想の良さそうな女性が居た。インターネットでチケットを手配したのは奈々華。それを持っているのも彼女で、それらを渡し、半券を返してもらう。無くさないように、とマニュアル通りの注意。受付を過ぎるとすぐに巨大なアーチが見える。赤一色の派手な門構えにミルフィリアが「鳥居みたい」と呟いた。

「どうするんですか？ 五人で行動？」

祐は仁以外の全員の顔を見回した。彼ら二人は道中も一度も言葉を交わさなかった。アーチを抜けた広場のような場所。噴水には天使が鎮座し、それをぐるりと取り囲むように休憩用のベンチがある。人通りも多く、盛況振りを窺わせる。冬休みだからか。カップルや家族連れ、仁たちのように友達数人のグループ、様々。

「あのさ……」

仁が声をかける。裏返りかけた声は、最年長の威厳を感じさせない。祐がやっと仁を見る。不機嫌でもなく、上機嫌でもない。何か彫像でも見るような目だった。

「俺と回ってくれないか？」

時が止まったようだった。仁以外の人間は「え？」と吃驚して目を見開いている。周囲の雑音だけが、耳に聞こえるばかりだった。

「……どうして僕がアンタと回らなきゃいけないんだい？」

誰もが予想していた答え。やはりダメか、と仁が落胆しかけたとき……

「と言いたところだけだね…… 僕も一度アンタと話しをしなきゃいけないと思っていたんだ」

祐は相変わらず、目に感情をこめずに言った。しかしそれでも、仁の心臓は驚掴みから開放されたように、安堵の鼓動を刻み始める。これを逃したら、恐らく祐と話し合う機会は持てないだろうという強い覚悟を乗せた言葉だったのだ。

「良かった。それじゃあ行こうか」

仁が歩き出す。祐もそれについて行く。残されたのは女性三人。

「……」

「……」

「……私達要らなくないですか？」

ミルフィリアの言ってしまったのは身も蓋もない言葉。いきなり仁が一对一で話そうと誘えるなど思いもよらなかった。奈々華の作戦、及び彼女から伝え聞き協力を受けあったミルフィリアと坂城の作戦は、なるだけ二人が打ち解けやすいような雰囲気を作ることだったのだが。

「まあ、私達が思っているほど、仁も根性なしではないということじゃないですか」

良かった良かったと付け足す坂城の顔は、しかし落胆の色を隠せない。

「そうですね…… 私達も回ります？」

奈々華は本当に困った様子。予想外の事態は彼女も同じ。

「……」

「……」

仁と祐の関係も改善を要するが、姉妹と奈々華の関係もまた、共通の目的なくしては気まずいものなのであった。

第四章 第三百三十九話…破壊

「……飯でも食べようか？」

男二人で乗って、周囲の目が気にならない乗り物は、遊園地には皆無に近い。そもそも遊園地を男二人が連れ立って歩いているのは、彼らくらいだった。いたたまれなくなって、軽食も出すオープンカフェを指差したのは仁にしてもいい選択だった。

「ああ」

言葉少なく、メニューを開く。祐はボンゴレを注文し、仁は珈琲とサンドイッチを頼んだ。

何かを話しかけては、口を閉じ、相手が話すのを待ってみても、相手も同じように口からは空気を漏らすだけ。お互いにそんな状況だった。誘ったのは仁で、年上は仁で、話しをするべきは彼なのだが、一体どうして会話の糸口を掴めばいいのかわからなかった。どこまでが踏み込んでよくて、どこからが踏み込むと癪に障るのか……

「昔ここには来たことがあるんだ」

不意に祐のほうから口を開いた。痺れをきらしたのか、と仁は自分が情けなくなる。父親を殺した人間を氣遣える優しさが逆に彼をみじめにした。

「……そうなんだ」

気の利いたことも言えない。

「父さんと、まだ生きていた母さん……二人につれてきてもらった」

「知っていたのか？」

確か近藤は母親の死を祐には知らせていなかったはずだ。「何が？」と返す祐に、仁は逡巡した。

「その……近藤さんは君の母親は……」

「父さんは隠しきれたつもりだったみたいだけど……当時の新聞

なんかを図書館で見てね」

祐は弱々しく笑った。

「……」

胸の辺りに、どうしようもない感情の渦がまいているのを、仁は感じた。きっと祐は近藤の気持ちを察して、知らないフリをしていたんだ。守れなかった後悔も、子供に親の死を悟らせないための嘘も、全て透徹していた。

「J・J・ヒューイットって名前は、昔母さんが好きだったアメリカの俳優さんから取ったんだ」

「……」

仁は声を上げそうになった。やめてくれ。どの口が言えるのか。

「父さんは母さんが大好きだった。僕も母さんもそんな父さんが大好きだった。母さんも父さんもそんな僕が大好きだった」

そんな家族が不意に壊れる。壊したのは、前代の煉獄の名を冠する少女と、仁。渦巻く感情は奔流となって、仁の目頭を刺激していた。ゆっくりと額に手を当てて潤んだ目を隠す。涙を見せる資格などありはしなかった。そんな仕草を、対面の祐は黙って見ていた。

「だから父さんは黙っていたんだ」

「……」

「ここも随分と変わってしまった。僕が来た時にはもっと閑散としていた」

偶然に奈々華が選んだ場所。何の因果だろう。祐はふふふと噛み殺したように笑った。

「思い出した。メリーゴーランドの馬が今よりもっとリアルで、僕は恐くて泣き出したんだ」

「……」

「そんな僕を母さんが抱っこして乗せてくれた」

情景は目に浮かぶ。丁度通りを小さな少年が走り、それをゆっくりと追いかける若い母親の姿。目を輝かせる少年と、優しく微笑む女性。どこにでもあって、何よりも尊い光景。失われてはならない人

の営み。祐はそれを薄く笑って見守っていた。一体どんな気持ちなんだろう。遠く失われた過去の安らぎを思い出しているのだろうか。

「君は……」

俺を憎んでいるよな？ 愚問だ。口を噤んだ。憎まれて、恨まれて当然のことをしたのだ。改めて思う。

第四章 第四百十話…導き

「父さんは辛かったんだ。だから…… 逃げた」

言葉の最後は消え入るようだった。

「そんな……」

逃げると言う言葉は、仁の知る近藤には似つかわしくなかった。反射的に返しかけて、祐の目がとても真剣なのを見てやめた。

「いつか酔った父さんが言った。誰かを憎んで生きるとは簡単すぎるよな…… って」

きつと復讐の虚しさを知った日だ。仁は思った。前代の煉獄を討ったときか、平内への復讐を断念したときか。そこまで思っ、不意に祐の言葉の真意を悟った。頭の中に真水を流し込んだように、はたと閃いたのだ。

「それは逃げじゃないよ」

ほとんど泣きそうな声だった。周囲のテーブルから訝しげな視線が二人のテーブルに寄せられる。

「復讐を逃げだと言ってるんじゃない。父さんはその簡単な生き方からも逃げたんだ」

諦めた復讐の完遂。

「憎いなら、殺しければいい。だけどそれが出来なかった。その先に虚しさしかないと知って、怖くなって逃げたんだ」

「……」

一度決めたことは歯を食いしばってでもやるんだ。あの言葉は自分への戒めだったのか。

「僕からも逃げた。僕に何もしてやれていないと勝手に一人で決め付けて……」

声が震えていた。

「僕は父さんがいてくれるだけでよかったんだ。母さんが亡くなつて、たった一人の家族がいてくれるだけで……」

祈るように組まれた両の指先の結び目に、ポタポタと涙が落ちる。

近藤は結局、亡くした者への愛と今ある者への愛、どちらも選べなかったのかも知れない。中途半端な道に、同じように迷いの中にいた仁を導いて、自ら幕を引いた。だけど、本当にそうなのか。もつとやりようがあったんじゃないか。再び鎌首をもたげる詮無き後悔を、仁はとめる術を知らなかった。

「だから、僕を一人ぼっちにして！」

「……」

「勝手に死んでしまったんだ！」

他の客達はもはや目を合わせないようにして、次々と席を立てて会計を済ませて行った。かさかさとした仁が懐を探る。取り出したのは、近藤が今わの際に託した手紙。丁寧に皺を伸ばして、テーブルの上に置く。最初はコレを彼に見せる気はなかった。自分を弁護するような内容の手紙。卑怯だと思った。だけれど、彼には近藤の考えていた全てを知る権利がある。それを見て彼がした選択を受け入れるべきなのだ。

「確かに近藤さんは、君から逃げたのかも知れない。復讐からも目を背けたのかも知れない。だけど……君を愛していなかったわけじゃないんだ」

ようやく、仁にも近藤の「導け」という言葉の真意がわかった気がする。そしてもし仁の思ったとおりなら、祐の赦しもまた、甘んじて受け取るべきなのだ。そんな資格があるのか、と果てない自問を置き去りにしても。

祐がゆっくりと目頭を拭い、紙面に目を落とす。

「……」

「……」

やがて赤い目を上げると、祐は仁の解釈どおりの言葉を発した。

「僕に自分と同じ道を辿らせたくはないんだね」

仁ではなく、目は仁の目を真っ直ぐに捉えてはいるが、亡き父に。仁に何かしら表情を作ることとは出来なかった。ただ黙って祐の目を

見返し、審判の時を待つ。この賢き少年に限って、万に一つもないだろうが、それでも彼の決意に少しの影響も与えてしまっているから。

「……僕はアンタを赦そうと思う。少なくとも父さんと同じ道は歩まない」

元々彼に復讐の意図はなかったのだらうと思う。だけれど、これから苦難の道を歩むのだとしたら、それを導くのが仁の役目。勿論その苦難の原因たる仁は、彼の憎しみを取り除くために誠心誠意これから贖罪に努めなければいけない。彼の赦しに報いるために。仁もまた憎まれ、蔑まれたほうが楽なのかもしれない。それでも、彼が真に赦しを与えてよかったと思える日が来るなら。赦されてよかったと仁が思える日が来るなら…… こんなに幸せな結末はないはずだ。

第四章 第四百一十一話…家族

「父さんがあぁなってしまったのは、きっと僕にも原因があるんだ」
祐の独白に、仁は否定も肯定も紡げなかった。知らないから。近藤の葛藤も、祐の葛藤も、全ては察することしか出来ない。

「誰かが支えてあげなければいけなかったんだ」
仁に奈々華がいるように、近藤には祐がいるべきだった。それが出来なかったのか。

「僕は母さんがいなくなった原因を責めた」

近藤の妻がいなくなって、辛いのは彼だけではないのだ。まだ幼い少年に母親が去った原因を責めるなというほうが無理だろう。祐が組んだ手は白くなるほどに、力がこめられていた。

「僕は子供だった。父さんの苦悩も知らないで…… 事実を知ったときにはもう父さんは」

誰のせいでもないよ。そんな言葉さえ、安易にかけることは出来なかった。彼の大人びた言動は、その後悔の反動なのかもしれない。そう思うと、どうしようもなく悲しかった。

「自棄的にギャンブルに手を染めるようになった。そうだな……
アンタに似てるかも知れない」

急に俗的な話しになって、思わず仁が苦笑する。

「俺のはそういうもんでもない。趣味さ」

祐もくすりと笑ってくれた。それがたまらなく仁には嬉しかった。

「……人を殺すようになった」

嬉しい気持ちは霧散し、きりきりと胃が痛む思いに変わる。

「フロイラインは子供が多いんだって。だから……」

まるで自分が責められたように、口をついて弁護の言葉が出る。祐は何か言いかけて、口を閉じる。頼んでいた料理がようやくやって来た。盆をテーブルに乗せたウェイトレスが足早に去っていく。祐はボンゴレにフォークを刺してグルグル回すが、口に入れる気はな

いようだった。仁も遠慮がちに珈琲をチビチビ口に入れるだけ。

「知ってるよ。だけどそれは言い訳にしかないよ……」

人を殺した事実は、どんなに言い訳を連ねても変わりはないのだ。そんなことを仁は重々承知している。しているのに、言い訳が口を吐いて出たのは……

「アンタが白の幹部を殺したのと似てる」

自己弁護か。仁は自嘲の念が絶えない。ここに来てまだ自分の行動を正当化しようとしているのか。皆の手を汚させないために。自分のためだろうか？

「アンタが何を思ってああいうことをしたのかは知らない。だけど僕は…… どうしようもなく父さんを思い出した。こういう風に一人で抱え込んでカッコつけてたんだなって」

「……近藤さんを真似したからね」

「そうなんだ？ でもそれがカッコイイなんて思ったら、大間違いだよ？」

「……」

「アンタにはあんなに親身になってくれる妹さんがいる。僕が今日来たのもあの人の熱意にほだされたからだ…… 何のための家族なんだ？」

それは仁に対してか。亡き父にか。

「何でも一人で抱え込むのは馬鹿のすることだ」

父さんは馬鹿だった、と付け足す。仁は鉛を飲み込んだ気分だった。奈々華が抱きしめてくれたのは、そんな兄が見てられないからだ。だったんだ。そんなことにも気付かない自分は彼の言うとおり、本当に馬鹿なんだろう、と。

「……」

「ねえ、父さんは幸せだったかなあ？」

白い歯がのぞき、薄い唇をきつく噛む。それだけが彼の気がかりなのだろう。

「……」

そしてその答えは、もういない本人にしかわからない。それでも願う。彼が彼の妻と出会い、祐を授かり、満ち足りた日々を送ったのは、決してその後にかかる悲劇の伏線ではなかったはずだ。

幸せだったさ。最後はとても悲しいものだっただけで、彼が生きたそれまでは…… 君や君のお母さんと過ごした日々は嘘じゃない。そうであってくれ。そうだと言ってくれ、近藤さん。

いくらがあつて、祐がやがて落ち着きを取り戻す。

「父さんは誰かに止めて欲しかったんだと思う。だからこれでよかったんだと思う…… 最近はそう思うんだ」

誰かの大切な人を奪う修羅へと変わり果てた自分を、ミイラ取りのミイラとなった自分を。その言葉が嘘ではないことを示すように、一口フォークを口に入れた。小さく咀嚼してから、こくと飲み込む。

「少なくとも父さんはアンタを恨んで逝かなかっただろう？」

言質を取るような言い方は、実は自身に対して言い聞かせているのかもしれない。

「……ああ」

だから仁も力強く肯定した。誰かの命を奪うということは、自分の命も奪われても文句は言えない。見苦しく救いを求めた仁でさえ、今となつてはその覚悟がある。

「だから…… 僕もアンタを赦すんだ」

また同じような声。きつと感情はまだ、仁を赦しきつてはいないのだろう。だから理性を働かせている。それでも前には進んでいる。帰ってくる近藤を共に弔い、線香を上げられるようになったら…… サンドイッチをつまんだ仁の手はぐっしりと汗で濡れていた。

第四章 第四百十二話：妹の歪み

青い巨大な鯨をモチーフにしてはいるが、恐怖より微笑ましさを感じさせるデフォルメがなされている。逞しいワイヤーが天井からそれを吊るしていて、ブンブンと前後に揺らしている。

「私の世界じゃ海賊船って相場が決まってるんだけどなあ」

誰にともなく奈々華が言う。女三人の遊園地もまた和気藹々とはいかないものなのだった。だからこの言葉も返事が返ってくると思わずに言ったのだ。案の定坂城が一瞬振り向いたが、ミルフィリアにいたっては何も聞こえなかったかのように、すました顔で階段を登っている。搭乗口は当然高い位置にあって、少女達は仕方なく一緒に回っていて、このアトラクションに乗りうとしていた。

「スイマセン。お二人様づつとなります」

階段の最上部、目と鼻の先に黒い革のシートと、黄色い安全用の固定具が見える。確かに二席づつ列になっている。

「……」

「……いいですよ。私は下で待っているんで」

奈々華は二人の返事も待たず、登ってきた階段を下り始める。坂城が何か声をかけたようだが、奈々華は振り返らずにカツカツと金属製の段を踏みしめて行った。

「感じ悪くないかい？」

ベンチに腰掛ける奈々華の足の下から、白い猫がひょっこりと顔を出す。睨むようにしているのは、遊びに行くのに置いていったからか。シャルロットは人間の遊びにも興味があって、テレビを見たり、トランプまでやろうとする。しかしいくら遠く離れても精霊は魔術師と一心同体。お互いの意志一つで精霊は空間を渡る。

「……いつからいたの？」

奈々華も負けず劣らず機嫌が悪い。彼女の飼った猫が覗き見をしてい

たという理由だけでもないだろう。怒っていたのはシャルロットも同じなのに、その不機嫌を見た途端、奈々華の足にじゃれついて機嫌を取り始めた。

「まあいいや…… あの人たちも私がないほうがやりやすいですよ？」

「まあそうだろうけど……」

「それにあの人たち自分のことしか考えてない」

仁がいなくなってつまらないのは奈々華も同じなのだ。だけれど、それでも仁と祐の和解を願っているというのに……

「それは私も同じか」

そもそも立案の時点で不純な動機がなかったかと問われれば、素直に頷けない。だから自分の卑しさを映し見ているようで腹が立つ。

「奈々華？」

「ううん…… なんでもない」

弱々しい誤魔化しは、キャーッと言う歓声に阻まれた。全員の搭乗が終わり、アトラクションが動き出したのだ。迫力満点に揺れる鮫の下に配置されたプールから水しぶきが上がり、どてっ腹にぶつかる。

「何が楽しいのか」

厭世の老人よろしく、冷めた視線を送る。

「アレに仁と一緒に乗っていても同じ台詞を吐けるのかい？」

「ううん？ 最高に楽しいに決まってるじゃん。ていうか今シャルの代わりにお兄ちゃんがベンチに座ってるだけでも大分違うよ？」

「ヒドイ言われようだね」

クスクスと奈々華。

「冗談だよ。来てくれてありがとう。退屈だし気まずいし、どうしようかと思ってたんだ」

ふわっと宙を舞った機体の中ほど、坂城とミルフィリアが一瞬目に止まった。瞼の裏に焼きついたその表情は目を瞑り、口を大きく開けて何事か叫んでいるようだった。

「やっぱり兄弟仲良くだよね」

暖かい言葉とは裏腹に、悪寒が走るほど声音は冷え切っていた。シャルロットが首を持ち上げてその表情を窺うのを躊躇うほど。

「兄妹は一緒にいるのがいいよね」

膝上に乗ったシャルロットの背を撫でる。白い小動物はピクツと体を跳ねさせた。その違和感、恐怖の所以もわからないまま。

ふと目の前の通りを走り去る黒いスーツを着た老齢の魔術師。シャルロットも奈々華もその見知った背を見紛うはずもなかった。シャルロットはこの得体の知れない感情の波を鎮めるのに絶好だと思った。

「アレは木室さん？」

呟くように口にする。そうして怒り心頭の母親にお伺いを立てる子供のように、振り返って奈々華の顔を見上げる。

「確か都の役員との会合に行ってるんじゃない……」

学園の副代表として何か会合の場に駆りだされたとか。十二月頭から、一月まで戻らないと伝え聞いている。

「違うよ。アレは令嬢だってば」

「え？」

奈々華の表情は人形のように冷たかった。道端の石でも見るような目だ。

「そうだな…… 仁君一人ならどうともなるけど、今日は祐君もいるもんね。注意しに行こうか？」

そう言うと、奈々華が突然破顔する。その笑顔さえ、シャルロットの心を乱した。

第四章 第四百十三話…強襲

料理の皿も半分以上、その白が見える頃、祐は突然顔を上げる。それまでも真剣な表情をしていたが、それとはまた違う。明らかに剣呑な雰囲気纏っている。

「……ヤツだ」

「ヤツ？」

鸚鵡返しの仁も、その表情を見て事態の変化を知る。

「緑の幹部。近くにいます！」

叫んだと同時に、仁の体が風に包まれる。ふわりと浮き上がったかと思うと、そのまま目の回るような勢いで店内から弾き出される。直後、二人が座っていたテーブルに竜巻のような膨大な風の塊が押し寄せ、包み込み、粉々に破壊する。路上に放り出された仁は、元はテーブルだった木片が、天に召されるように巻き上げられていくのを見ていた。周囲は阿鼻叫喚の図。魔術による攻撃から一般人は身を守る術がない。我先にと店外へ飛び出していく客や従業員に、跪く仁は見えていない。誰かの膝が仁の肩にぶつかる。そこで仁ははたと我に帰る。

「祐君！」

周囲を見回す。恰幅のいい老婦人、壮年のシェフ、ポニーテールのウェイトレス。目的の人物の姿が見えない。まさか今の攻撃に巻き込まれたのでは、と嫌な想像が巡る。

「こっちだよ」

声は背後。仁が振り返ると、涼しい顔でたたずむ祐。攻撃の直前に巻き起こった風は、祐のもの。二人を安全地帯へと逃がしていたのだ。仁はじわじわと胸を焚きつけるような焦りから解放され、ほっと頬を緩める。

「敵は？」

「……待って」

祐が目を閉じる。人の気配を探ることが出来るという緑の魔術師。店内の人間の避難は滞りなく終了していて、辺りには既に静けさが戻っていた。祐の世界。張り詰めた空気に仁の体は総毛立つ。

「いた。あっち！」

祐は指差すより早く顔を左に向ける。道なりに進んだ先に観覧車があるはずだ。

「かなり離れてる。化け物か。こんなに正確に……」

祐もまた才能溢れる魔術師だ。普通はいくら近くに來たとしても、フロイラインの幹部ともなると、並みの魔術師では気配など探れない。しかし現時点での彼我の実力差をすぐさま感じ取っていた。それすらもまた才能ではあるのだが。

「観覧車のほうか」

ぐっと顎を引いた仁は既に臨戦態勢。その横顔に視線が注がれているのを感じて、仁はまた優しい顔になった。

「大丈夫。君はここにいて。あちらさんが用なのは俺だろうからね」祐の不安をいち早く気取っていた。いや、そもそも彼を同伴して戦地に赴くつもりはなかった。しかし祐は静かに首を横に振る。

「僕も行く。第一相手が移動したらアンタになす術はない。そしたらまた奇襲だ」

正論。

「でも……」

彼を危険な目に遭わせるわけにはいかない。仁の顔に焦りが浮かぶ。「言ったろ？ 何でも一人でやろうとするな。人には役割つてもものもあるんだ」

目に強い信念がある。仁には本当の意味で理解は出来ていない。誰かに守られるだけの切なさ。苦しみを、痛みを分かち合えない悲しさ。それは彼が強すぎるための弱さ。それでも理解しようとしている。近藤が辿れなかった、祐が辿りたかった道。

「ダメだと言われてもついて行くよ？」

「……わかった。道案内を頼む」

二人の急ごしらえのタグは、風に包まれ、そして空の向こうへと消えていった。

第四章 第四百四話：増長

ふわりと風が止み、二人の体を地上へと下ろす。アスファルトの大地を踏みしめるより早く、敵の姿を見とめていた。紺のカーゴパンツ、白い無地のパーカー。相変わらずの出で立ちは、ボサボサの頭と相まって歳相応の少女を感じさせない。仁と祐、少女が向かい合う。少女が履いてもいないスカートの裾を掴むような仕草で虚空をつまみ、浅くお辞儀をする。

「はじめまして。アタシはフロイラインが緑の幹部、かきぎぎょうか柿木京香と申します」

勿論偽名ですが、と嘲るように笑った。

「そいつは残念だ。可愛らしいお嬢さんのお名前を是非に聞いておきたかったんだが」

仁も軽口を返す。可愛らしいという世辞は、既に皮肉の域だ。しかし少女は、気にした様子もなく、目だけで祐を見る。

「まさか子供まで連れてくるとは随分余裕ですね？」

眉に力がこもる。よほど侮辱になっているようだ。

「僕は確かに子供だけれど、仁の手伝いくらいは出来る」

仁は殴られたように祐の横顔を見た。聞き間違いではない。彼が始めて自分の名を呼んでくれた。六つも下の子供に呼び捨てられたにも関わらず、どうしようもなく仁の心は躍った。全身から力が湧き上がるようだった。

「そうだ。祐君を侮っていると、墓場で後悔することになる」

普段は決して口にしないような売り言葉が自然と出る。単純だ。だけれど嫌いじゃない。

「そうだ、友達だ。友達が侮辱されたら、我がことのように怒るんだ。それが友達だ」

「……何を言っているんです？」

「お前にはわかんないことだよ」

にやりと不敵に笑う。柿木と名乗った少女は、言葉の通じない外国人を相手にしている、そのままの表情で首を振る。そして体が新緑に光る。生命を色濃く感じさせるような力強さがあった。それでも仁は負ける気がしない。笑みを崩さないまま逆さに手招きして、かかってこいのポーズ。

「おっさんが調子に乗りやがって。ガキともどもぶっ殺してやるよ！」

少女の頭上、巨大な影が降り注いだ。

「マジックハッピーか……」

祐が風の魔術を詠唱なしに相手の精霊にぶつける。しかし相手も緑の精霊。中空でわずかによろめいただけで、すぐに体勢を整える。そのわずかな間、風で飛んだ仁が刀を精霊に垂直に持ち、弾丸となって打ち込まれる。翼竜は片の翼をブンと振っただけで空を滑る。不発に終わった弾丸が、祐の手によって地上にふわりと下ろされる。息つく間もなく、竜は翼を交互にはためかせて風を起こす。突風。竜巻とは読んで字の如く。祐の体が光る。先程少女の体を覆った光よりは幾分目劣りするが、それでも眩いばかりの緑。

「風よ。何もかもを守る楯となり、我等の自由を望め！」

簡易詠唱。かつてミルフィリアが使った高等技術。精霊の起こした竜巻の三分の一程度の大きさのもの。相ぶつかる。グワンと空間が歪むような衝突の後、あぶれた風が仁と祐の髪を激しく揺らす。

「ダメだ。もたない。逃げて」

二人がその場から左右に散る。直後、祐のそれすら飲み込んだ膨大な風が二人の間を駆け抜ける。いかな原理か、周囲を飲み込むのではなく、直線上の全てを破壊する暴威となっている。遠く、巻き込まれたベンチが刃のないミキサーに蹂躪され、見る影もなくなっていた。

戦況は、仁が思っていたほど容易いものではなかった。古代竜・緑。

竜というより俊敏なワイバーンと言えはわかりやすい。しなやかな筋肉を携えたシュツとした体躯に、苔むしたような緑の体毛を生やしているのが、仁が御伽噺で見るそれとの相違点か。自分の体長ほどもある両の翼は、屈強な戦士でも折りがたく、斬りがたい。そう、祐がいなければ話にもならなかった。空を舞う相手に手も足も出ずに後塵を拝するより他なかった。

「ははは。口先だけかよ！ おっさん！」

甲高い笑い声が、頭に響く。少女はさっきからほとんど微動だにせず、地上にいた。彼女もまた油断しているのだ。万全を期すなら仁の攻撃の届かない空にいるべきだ。それこそが、二人の付け入る隙であった。隙ではあるのだが、竜の暴風の前に前進もままならないのが現状。

「アイツ、何かキャラ変わってねえか？」

「……マジックハッピー」

「マジックハッピー？」

「魔法を唱えだすと性格が変わるんだ。極端にハイになる。一種の精神病だね」

なるほど、油断ではなく、彼女の性質ということ。何にせよ、唯一の光明。

「……来るよ！」

竜が再び風を起こさんと、両翼を大きく開く。

そのときだった。仁は突然、背後に何かを感じ、咄嗟に横にずれる。仁の横髪を揺らし、恐ろしい速度で何かが通り過ぎていく。黄色い矢。走る最中に視認した仁の桁外れの動体視力がなくとも、それを確認するのは容易だ。なぜなら、その矢は竜の腹に深々と刺さっている。

「仁さん、無事でしたか？」

聞き覚えのある女声がした。

第四章 第四百十五話…喪失

「木室さん！」

戦局を打開した老婦人の名を叫ぶ。確かに二つ名を冠する魔術師だとは聞き及んでいたが、まさか一撃のもとにこれまで自分達が討ちあぐねていた古代竜を倒してしまうとは。やはり反対属性の恩恵か。仁には確かなことはわからなかったが、それはどうでもいいことだった。これで後は緑の幹部を倒して学園に帰るだけ。祐のぽかんと口を開けた顔を見る。こうして見るととても幼い。

「危ないじゃないですか！ 討つなら言ってくれなきゃ」

そんな文句さえ感謝の言葉に近かった。このとき仁の頭に、どうして木室がこんな場所に居るのかなんて疑問は毛ほどもなかった。ただ隣にある希望とこれから始まる生活。

俺に近藤さんの代わりは出来ない。けれど、奈々華やミルフイリア、坂城……皆と一緒に遊んで帰って。きっと祐君は笑ってくれる。彼も変わりは始めている。逃げていてはダメなんだ。思い出を壊した俺は、思い出を作ってあげる義務がある。大丈夫、赦すと言ってくれたじゃないか。最初はぎこちなくても、少しずつ距離を縮めていけば……。きっと友達になれる。

「仁さん！ 私が援護します。早く敵を！」

本室の怒号のような大声。仁は言われるまでもない。既に足は未来へと着実に回転を速めている。仁の目に柿木の顔が映った。狼狽に揺れている。それすら何だかおかしかった。

「祐君の前だ。人殺し沙汰はしないよ」

ただ昏倒してもらう。仁の中には腹に一撃入れて動きを止めようか、顎を殴りつけて失神させようか、贅沢な迷いがあった。どちらのビジョンも再生されていた。どちらにせよ、精霊なき今、彼女はただの華奢な少女。負ける要素はどこにもない。回す足は自然と速まり、

もうあと数メートルで少女の体を捉える。

柿木の顔が醜く歪んだ。口の端を吊り上げたその笑みは、明らかに捕食されるものの顔ではなかった。仁の体が金縛りにでもあったように、動かなくなる。傍目にはわかりにくい、前後左右から同質量の風が仁へと吹き向かい、その身をがんじがらめにしている。今度は仁の顔に狼狽。そんなはずはない、彼女に最早魔法を貸す精霊などいない、と。

仁の疑問を氷解するように、少女の背中からゆっくりと精霊の姿が現れる。禍玉・緑。いつか近藤と同化した赤き玉と同様の形。違うのは目の覚めるような緑の体色。やっと仁は自分の迂闊を知った。

「くそ……」

悪態をついてももう遅い。どうして彼女の契約精霊が一体などと言いつける。

「仁！」

少年が駆ける。駆けているにも関わらず、彼の膝の筋肉の収縮さえ見えるようだった。世界の全ての時の流れが遅くなったような気分だった。少年の体が光りを放ち始め、仁は体にかかる圧力が緩まるのを感じる。中和してくれたのか、と頭の隅。

少年の奥、木室の体もまたゆっくりと、禍々しささえ感じさせる、濃い黄色に輝き始める。仁が見たこともない凄絶な嗜虐の笑みをたたえている。

「ダメだ！ 来るな！」

口が言ったのか、心の中で叫んだのかすら、仁にはわからなかった。祐の必死の形相。その整ったパーツの一部一部さえ、色濃く仁の脳裏に刻まれる。木室の皺の走る手。その先から輝く黄金の矢。放たれた。真っ直ぐに仁へ。しかしその直線上を走る、賢く優しい少年。仁はようやく自分が呪縛から解放されたまさにその瞬間だと気付く。脳だけが動き、体は動いていなかった。まさしく金縛りだった。

「祐君！！」

慟哭は空しく虚空を走る。仁の体まであと数メートル。祐の胸から黄金の矢の切っ先が覗き、抉り、突き出す。祐の全身の躍動が止まる。きつく結ばれた口元からはゆっくりと赤い筋が垂れる。

「祐君!!」

ようやくと動いた体は、傾ぎ始めた少年の体を支えることしか出来なかった。妙に軽い。それが命が薄弱になっていく予兆のようで、仁は肩を掴んだ手に血管が浮き出る感覚すらはつきりと覚えた。祐は既に反応をする力もなく、ゆっくりと目を閉じる。安らかな顔だ。このまま死んでしまうのではないか、頭に過ぎった。しかしそうではなく、祐は言葉を探していた。辞世の句を。また目が開く。トロンとした眠たげな目。仁は知っている。人が目から終わっていくのを。

「……無事か」

少年の声は、息を漏らすようだった。口の端から滔々と赤い血が流れる。

「祐君! 喋っちゃダメだ! すぐに…… すぐに奈々華を呼ぶから。アイツは反対属性の傷も治せるんだ。こんな傷……」

抱いた体が、腕が人にあらざる白に染まっていく。やがて人をただの有機物の塊に変える終わりの白。腕に伝わる体温が、徐々にその優しさを失っていく。賢さを失っていく。冷たい氷を抱いているようだった。

「ねえ……」

「……喋っちゃ!」

「狂っちゃダメだよ。逃げちゃダメだ。アンタには…… 家族がいる」

お願いだ。神様。この子を助けてくれ。俺の命なんてどうなってもいい。

「お父さん…… お母さん…… こわい…… よお。でも……」

祐の手が真っ直ぐに天に向かって伸びる。目はどこを見ているのか

わからない。

伸ばされた腕がカクンと落ちる。

「……祐君？」

ドロンと濁った目。動かない白い唇。生きた証すら奪っていくような、消えいく残り香の体温。

「あ…… ああ。祐君！ 祐君！ 祐君！ 祐君！！」

死者を揺すり続ける仁の耳に、どこかで誰かの嘲る笑い声が聞こえた。

第四章 第四百十六話：眠った贖罪

仁はその後のことをよく覚えていない。奈々華が遅れて到着した頃には、祐の死体の前で狂ったように拳を振るう兄と、その後方で体を真つ二つにされた、いつか見た緑の幹部の少女があるだけだった。実際にはこんなことがあった。

仁の耳に聞こえたのは、柿木の嘲笑だった。しかしそれを認識しているのかもわからない。幽鬼のようにゆらりと立ち上がった仁の顔は伏されていたから。木室も柿木もそれが、彼の中の悪魔が喪に服す様だと理解しているべきだった。

「つまらない茶番でしたね。まあ、後は貴方に任せますよ」

茫然自失としている、と取った仁の様子から、木室は同僚を一方的な殺戮の場に置いて去る。逆に言うと、もう少し遅ければ、彼女もその餌食となっていた。何にせよ立ち去る彼女には事態の変化を知る術はなかった。

「おい、おっさん。次はお前の番だ。すぐにそのボロ雑巾と同じようにしてやるよ」

ケタケタとまた耳障りな嘲笑。ゆっくりと顔を上げた仁の目を見て、しかしそれは止まる。

「な、何だよ。その左目」

「……変形重瞳」

瞬間少女は身の危険を感じる。それは彼女の戦闘経験から、一度も味わったことのない、圧倒的絶望だった。自身が捕食される側だとありありと伝える全身の悪寒。

しかし鳥肌すら立てることも許されないまま、まして回避行動など取り得るはずもない、少女の体は真つ二つに裂かれていた。いつどうやって少女の前まで移動したのか、どうやって斬り伏せたのか。人の目には捉えることは出来なかった。少女は魔法も唱えることす

ら出来ず、まして自分がいつ死んだのかさえわからないまま、ボロ雑巾のように地面に転がる。フロイラインの幹部である少女にしてその事態は異常だった。そこまでしても、仁の心に憎しみはなかった。いや、全ての感情は殺されていた。ただ目の前のうるさいハエを払ったように。ただ彼の中に無限に再生される情景は、祐の体から飛び出した黄金の矢と、最期の瞬間、虚空に突き出された彼の青白い腕。

「死んでしまった」

少女の死体には目もくれず。振り返った先の少年の白い体を見て、ポツリと呟いた。ふらふらと熱にうかされたように、歩み寄る。

「死んでしまった!」

死体は既に瞳孔は閉じられていて、安らかに眠っているのと変わらない。だけど永遠に目を覚ますことはない。憎まれ口を叩くことはない。笑いかけることもない。動くことはない。父の焼香すら上げられず、母の墓参りすら出来ず、自らが荼毘に付す運命。その顔を覗きこんで、座る。

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい」

その運命に伴う読経とはならないのに。

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめん…… なさい」

ぶわっと堰を切ったように、仁の目から涙が零れた。額をアスファルトに擦りつけて、すぐにまた顔を上げた。唇が切れていた。額にも血が滲んでいた。悪鬼の如く目に憎しみと涙が溜まっていた。そして拳を宙に振りかざした。

「何で守れないんだよ!! 何のための力だよ!」

アスファルトに何度も何度も、彷徨う拳が叩きつけられる。

「やめろ! 主。拳が壊れる」

その異様にたまらず、緑の少女を斬って放り出されたままの村雲が声を上げる。青年の拳は歯牙にもかけずに、律動を繰り返す。

「壊れればいいんだよ!! 要らねえじゃねえか!! 何にも……
誰も守れないじゃねえか!! だったらこんなもん……」

「お兄ちゃん! やめて!」

声と同時に、仁の右腕に柔らかくて暖かいものが触れる。振り上げた腕に、少女が抱きつくようにしていた。彼の妹。遅すぎた。仁はしばらくその障害を跳ね除けようと暴れたが、それが奈々華だと気付いて大人しくなった。ガクンと首を垂れて、動かなくなった。

「奈々…… 守れなかったんだ。守れなかったんだ。ごめんなさい。ごめんなさい…… 謝っても赦してくれないんだ」

寝言のように、対象の定まらない儂い声。

「違う…… 赦してくれたんだ。なのに…… なのに!!」

「お兄ちゃん!」

抱きしめた兄は、そうしていないと、自傷行動なくしても、消えてしまいうだった。それを彼が望んでいるのだった。ゆっくりと奈々華の体が白む。包み込んだ仁の右腕に、先刻感じた死の冷たさを払拭するような愛と優しさが溜まる。それを拒む。右腕を振り回して、奈々華の手の平を逃れる。キャツと小さな悲鳴の後、奈々華は尻餅をついた。

「こんなの…… 治してどうするんだよ……」

目の前にある、優しい少年はいつか見た微笑を作らなかった。

第四章 第四百十七話：濁り

祐の葬儀はしめやかに、慎ましく行われた。葬儀に参列したのは、共に遊園地に行った四人。祐に縁のある者は皆無と言ってよかった。きっと近藤がフロイラインに与するにあたって、親戚縁者の類とは縁を切ってしまったのだと思う。彼の遺品を整理してもそれらにまつわるものは見つからなかった。以前通っていた中学校に連絡を入れたと、坂城の話しだったが、そこからも誰も来なかった。彼もまた他人に対して壁を作っていたのかもしれない。いつか見かけた同級生とのいざこざを思うと、仁は納得した。「寂しいね」と奈々華が本当に悲痛な顔で言った。だからこそ……ここにいる人間は彼の友となりえたのに。

坊主の読経も終わり、出棺となる。いつか来た、ミルフィリアの両親のものを含む墓場を管理する寺。まさかこのような形で再び訪れることになるとは、誰も予想しなかった。したくもなかった。金の装飾を取り付けた霊柩車。そこに運び込まれる棺。祐はその中にいる。血の気の引いた顔で、口に詰め物をされて、白い装束を着て、遺品に囲まれて……母と父と共に写った写真も入れた。

霊柩車が合図を鳴らし、発進する。もう生者の手の届かないところへと。

誰も仁に声をかけられずにいた。彼はただ、葬儀の間も濁った目を棺に向けていて、今もまたその目を走り去る黒と金の車に据えている。だけど、本当にそこを見ているのかもわからなかった。

「はい……はい、知り合いに不幸がありました……はい。すいません。ご迷惑おかけします」

電話口の向こうに丁寧な言葉遣いで謝る。応対は広畠だった。本来

なら仁が自分で事情を説明するべきではあったが、今の彼には無理だと判断した。彼が今後アルバイトを続けるのかさえ、わからなかった。

「失礼します」

もう一度申し訳なさそうな声を出して、奈々華は電話を切った。ソファの上で動かない仁を振り返る。

「今日はお休みさせてくれるって……」

微かに仁の首が上下に揺れた。

「……」

空々しいテレビはついていない。エアコンの稼動する音だけがしていた。

「お兄ちゃん……」

アイシアが慰めるように、仁の腹の上に乗っかる。いつもなら撫で回して可愛がる動物好きの青年は、視界にすら入れない。ぼんやりとテーブルの上に視線を置いたきり、マネキン人形のように動かない。

「他人を信じるな……か」

ぼそりと囁くような声。静の言葉。戯言と切り捨てた言葉は、核心をついていて、仁に清算を強いた。木室カエデ。味方だと思っていた人間が、ある日突然、今まで偽りの笑顔を向けていたと知る。辛くてよくあること。いつから背信に落ちていたのか。最初から？

仁が来てから？ 坂城はどう思っているんだ？ 近藤に情報を横流ししていたのは彼女なのか？ 色んなことが頭の中をグルグル回るのが、何一つ掴むことは出来ずにいた。

「ジョーカーが誰かって話した相手がそうだなってな……」

奈々華が心配げな表情で仁の隣に座る。三日経った。それでも仁にカタルシスは訪れない。

「お兄ちゃん……」

ただ呼びかけることしか出来ない。それでも、それこそが彼を繋ぎとめる唯一の手段だと、奈々華は思っている。誰かが傍にいて、自

分の名を呼んでいる。それは決して馬鹿に出来るほど小さなことではないはずだ。

「結局……俺は何も学んでいないのかも知れない」

「違うよ。誰も信じなくなることが、傷つかずに生きるってことじゃない」

そんなのは、悲しすぎる。身を乗り出して、兄の顔に自分の顔を近づける。ソファァーが重心の移動を伝えた。アイシアがピクリと俊敏な動きで反応してみせる。

「誰かを犠牲にしても？」

仁がようやく笑った。だけど自嘲だった。

「……お兄ちゃんは悪くないよ。悪くない。何も悪いことなんてしてない」

静かな声音に、感情が発露していた。仁は自嘲をやめ、またもとの抜け殻に戻る。ゆっくりと奈々華の顔を正面から捉える。

「そうだね……何もしていない」

不作為の罪。そんな言葉を小さく呟いた。

第四章 第四百十八話…イノセンス

「仁の様子は？」

自室に戻ってきた義理の姉の姿を見るや、坂城は首を回した。その動作があまりに素早く、ミルフィリアは一瞬驚いたが、すぐに平静を取り戻した。そしてそれとは対照的にゆっくりと首を横に振る。奈々華の気遣いで、仁は面会謝絶扱いになっていた。外部からの刺激を断つため、というのが仁と二人きりになる口実ではなく、本心からの願いだとわかって、二人はそれを呑んだ。

「……そうですか」

だけど、こうして毎日その様子を奈々華に聞きに行っていた。そして芳しい進捗も変化もその口から聞くことが出来ずにいるのだ。ミルフィリアはふうと一息をつき、自身の椅子に座る。坂城の執務机の斜め向かいが彼女のテリトリーだ。だから姉妹は今、体を斜めにして向かい合っている。

「無理もないでしょう。あの様子だと」

遊園地のアトラクションから下りると、奈々華がどこかへ一目散に駆けていくのを見て、追いかけた。追いかけた先で絶望の風景を見た。そこにいるただ一人の生者が、今まで見たともないような憔悴しきった表情でうなだれていた。

その後、死体の処理をかって出たミルフィリアに対して、仁は「祐君は負ぶって帰る」と言い出した。皆吃驚した。一件非常識に見えて、仁は分別のある男だ。だけど、その異様な判断に気付いていなかった。心がどこかへ行ってしまっている。そう思った。誰もが憐憫を抱き、優しく諭すと、何とか理解してくれたが、諦めて俯いた表情は例えようのない虚しさを持っていた。

「貴方は大丈夫なの？」

坂城は一瞬呆けた顔をしたが、すぐにたどたどしく頷いた。

「確かにショックではありましたが……」

坂城にとって身近な者を亡くすことは、両親の死を想起させるのではないか。そういう心配だと早合点した。

「そうじゃなくて…… 木室さんのこと」

ミルフィリアも木室とは顔なじみだ。幼き頃より坂城の世話役をしていたので、彼女の実家に預けられてときに出会っている。教員として働くに際しても幾つか言葉を交わしている。しかし彼女の裏切りについて最も衝撃を受けたはずなのは、坂城を置いて他にいない。

「……正直まだ実感が湧かないのです」

躊躇いがちに開かれた口から、躊躇いがちな言葉。頬にかかる毛先をいじくりながら、そつとミルフィリアから視線を外した。

「何かの間違いなんじゃないか、って。勿論仁が嘘をついているなんて思っています。奈々華も目撃したと言っていますし…… でも何か事情があったんじゃないか、って」

最後は消え入るようだった。彼女は信じられないんじゃないかって、信じたくないのだ。

「だからこの目で見て…… 話して確かめるまでは」

人はそうして心の準備をする。凡庸なモラトリアム。しかし、坂城の場合は少し違うのかもしれない。額面どおり、幼い希望を捨てきれずにいるのだと、ミルフィリアは理解した。

「傷つくことを受け入れられずにいるのね？」

ゆっくり立ち上がると、目を合わさない、子供のような妹に近寄る。そつと頭を抱きしめると、優しい手つきで髪を撫でる。丁度赤子を抱いているようだった。

「姉様？」

ミルフィリアの胸に顔を埋められながら、少女は場違いなまでに無垢な声を出す。

「貴方は昔からそう…… 優しくて穢れを知らない子。自分の歪みに気付かないほど」

猫のように柔らかい毛が、手の中で小さく手折られた。

第四章 第四百十九話…晴れない霧

今まで眠っていたとは思えない俊敏な動作で布団をはねのけた仁の顔は、異常に白かった。体中の熱を放ちきってしまったと言っても誇大表現にはならない。まるでおねしょでもしたように、仁のパジャマ代わりのスウェットズボンの踝には水が溜まっていた。胸板もぐっしりと濡れている。布団の中はむわっとむせ返る熱帯夜の空気が、荒い息を整えるように、しばらく半身の状態で暗闇に雌伏して、「今日は寝ずに明かそう」

ぼそっと独り言。音を発しないと暗闇に解け行ってしまうような気さえた。こんな夜は、仁はいつも部屋の明かりを点けて、ゲームをしたり、気が向けば外へ麻雀をしに行く。どちらも気分ではない。奈々華もいる。胸が痛い。焼けるように痛い。乱暴に掴んでいた濡れそぼったシャツには、既に幾重にも皺が刻まれている。

「あ…… ぐう…… ああ」

痛い。掻き毟るようにシャツを掴む手が動く。新たな皺を作っている。しばらく押し殺した呻き声を上げながら、ただじっとしていた。痛みが引いていく。胸の鼓動も落ち着きを取り戻していく。

「なんだったんだ、今のは」

「天罰だ」

仁は驚いたような顔をしている。自分以外の声だと本気で思っているようだった。それは仁の口から無意識に発せられていた。誰かを犠牲にしてのうのと生き残る自分には、いつか天罰が下る。下らなきや嘘だ。遣わされた死神がそれを欲しているのかもしれない。

「今日に行くよ」

奈々華がいつものように、仁の携帯から職場へと電話をかけようとしたとき、突然そう言った。奈々華はくると振り返って、仁の顔

を穴が開くほど見つめたが、何かが吹っ切れたわけではないようだった。未だその目に力はなかった。

「でも……」

「いつまでも迷惑かけるわけにはいかないだろう？」

仁が休んでいる間、当然誰かがそれを穴埋めしているわけだ。奈々華は少し躊躇ってから、伏し目がちに口を開いた。

「まだ続けるの？」

「……」

「祐君が死んで……」

まだ続けるのか。彼に言われて始めた贖罪の形。だけでも彼は生活しない。学費はいらない。贖うことはもうかなわないのだ。それでもまだ続ける意味は一体どこにあるというのか。

「……行ってきます」

全ての会話を拒むように、外套を手にとって、羽織って、玄關戸に真っ直ぐ向かった。

何かしていないと潰れてしまいそうだった。奈々華の言うとおり、もうこれに贖罪の意義はない。相手がいない贖罪は自慰に等しい。それでも、彼は祐の葬儀及び墓代を、立て替えた近藤の懸賞金に補填するつもりだった。それくらいしか、今の彼にとって有意義だと思える行動はなかった。街の見知らぬ住人を守るなんて大義に殉じれるほど、彼は純朴ではないのだから、行動理由にはそれしかなかった。果たしてまっさらな状態で近藤の命の対価を残していたところでどうなるのか、使い道すらわからない金はまさしく宝の持ち腐れ、腐らせるためにあるのかも知れない。そんなことをとりとめもなく思いながら、寒風の吹きすさぶ街へと歩いていった。

第四章 第百五十話…先達

広畠はいつもと何ら変わらず、仁の姿を見つけると、おうと簡単な挨拶をした。仁も挨拶を返し、前日のことを詫びた。

「一昨日はすいませんでした」

深く頭を下げる。はじめ。真っ当に生きる人間はこうして社会に適合している。

「……おう」

そっけない返事。しかしそこに怒りも慰めもなかった。広畠は夕方からの連続勤務のようで、すっかり退屈しのぎの道具を持ち込んでいた。長テーブルの上に何冊かの文庫本が積まれている。背表紙から推理小説だとわかる。もう一度頭を下げてから、広畠の対面のテーブルに着席した。男二人、仕事上の付き合いしかない彼らに仲良く話せというほうが無理だ。いつものように待機あるのみ、考えようによっては楽な仕事だが、いざ緊急事態が発生すれば命懸けの仕事だ。

「あの…… お茶淹れましょうか？」

「……いや、いい」

ページから視線を上げることはなかった。彼は読書家で、ペアを組んだときは度々こうしている。仁にとって慣れた光景のはずだったが、今日に限って沈黙が耐え難いものに感じられた。手持ち無沙汰に堰を立ち、備え付けの冷蔵庫を開ける。飲みかけのペットボトルや乱暴に銀紙を千切られたチョコレート菓子などがあった。

「もういいのか？」

「え？」

くるりと仁が振り返っても広畠はまだ読書に専念していた。

「友達が死んだんだろ？」

いつもはもったいつけるくせに、大事なことは言葉を選ぶようなこととはしない。そういうところが、仁は好きになれずにいた。

「……はい。ご迷惑をおかけしました」

定型文を読み上げるように、仁は申し訳なさそうな情感をこめて謝った。

「そうか」

広畠は短く。仁は怪訝な表情を浮かべた。人の事情に突っ込んでからかったりする彼も、ことがことだけに憚られたのかもしれない。それでも、仁は胸にモヤがかかったような気持ちになる。肩透かしを食らったと言ってもいい。

「あの……」

「何だ？」

仁はおもむろに立ち上がった。広畠の背に、大人が時折見せる冷たさや素っ気なさや怖さが詰まっているように感じられた。小型の冷蔵庫は、ひとりでのんびりと閉まる。

「聞かないんですか？」

何があったのか、どうして休んだのか。友人が死んだとだけ伝えられたのでは、現場を預かる責任者として事態を把握し切れていないのではないか。しかし返ってきた答えは予想もしないものだった。

「……しけた面したヤツのしけた話を聞いても仕方ないだろう？」
仁は目の前が真っ白になるほどの怒りを覚えた。同時に驚いていた。凶星をつかれて激高できるほどの血気がまだ自分に残っていたことに。

「随分な言い草ですね」

押し殺した声は、頭の中で、向けられた背に刀を突き立てる映像を繰り返すことでようやく搾り出したものだった。

「守れなかったんだろう？」

今度も核心を突いた。

「どうして……」

心が読めるのかと、本気で思った。何か自分の知らない魔法でそういった類の能力を人に付加するものがあるのではないかと。

「こういう仕事してるとな、仲間を失う場面もよくある」

「……」

「失ってしまったヤツを見ることも」

「……」

「ハートだよ。燃え盛るような闘争心ってやつだ」

パンツと大きな音をたてて、広畠の手の中で本が閉じられる。それを本の山の一番上に乱暴に置くと、広畠はゆっくりと仁を振り返った。

「人は失くしちゃいけないものを失くしたとき、己も失う」

今のお前がそうだ、と不躰に仁を指す。何か秘密にしていたことを突然暴かれたように、仁は泡を食っていて、それでいてやり場のない怒りを顔に浮かべていた。そんな彼の心の動きに気付いていないはずはないのに、広畠は涼しい顔で続けた。

「そっからだ」

「……」

「そっから人は二つに分かれる。何もかも失って過去に生きるヤツ。相手を憎み、人を憎み、修羅の道に墜ちるヤツ」

「極論です。相手を赦し、人を赦して生きる者もいます！」

知らず声を荒げていた。広畠の表情が今まで見たどれよりも冷たく、感情の見えないものになった。仁は虚しくなった。

「ならお前はそう出来るのか？」

「……」

無理だ。失った優しい友人は、死の間際までその道を仁に指し示してくれたと言うのに。無理だ。沈黙を正しく否定に受け取った広畠は、諦めたように目を瞑った。それが全てを物語っていた。

「皆が皆そうできたら、警察はいらねえんだよ」

もしかしたら、彼にもそういう過去があるのかもしれない。しかし今の仁に相手を慮るような余裕はなかった。ただ黙って顔を俯け、唇を噛んでいた。

第四章 第百五十一話：強さ

「俺やお前が持つてる力なんて、才能と努力で手に入っただけだ。確かにそれは財産だ。だけど……それだけじゃあ、強さにはならないんだ」

そんな仁に、打って変わって優しい声音。

「……ヒメネスはさ、紛争国から来たんだ」

仁は聞いているのかわからなかったが、構わず続ける。

「幸い紛争は終わったみたいなんだけど」

「……」

「色んなものを失ったはずだ。アイツは一度もそんなことを口にはしていないけどな」

きつと日本に生きる誰もが想像も出来ないだろう。

「一度、母親のことを聞いてしまったことがある……一瞬、ほんの一瞬、悲しそうな顔をした。だけどすぐにいつもみたいにニコニコしやがってな」

まるで息子のことを自慢する父親のような顔だ。恥ずかしそうで、だけどどこか晴れやかで。

「紛争が終わったら、今度は家がない。着るものがない。食べるものがない」

「……」

「面接の時、志望理由を聞いたら、幼い兄弟に仕送りするためだよ」

「……」

「自分の悲しみを置いて、今出来ることを見据えて、前を見て生きていけるのが、本当の強さだと思わねえか？ 誰かを失ったとき、悲しむのは誰でもするし、誰でも出来る。だけど……まだ自分を頼ってくれる者がいるんなら、大切な者がいるんなら、そいつの為に生きることが大事なんじゃねえか？」

「……」

アంతには家族がいる。祐が言いたかったこと、近藤が気付いていながら省みれなかったこと、ヒメネスが頑張っている理由。

「幼い妹をどこかの金持ちの玩具にしないため、幼い弟を過酷な労働に就かせないため……」

「……」

「お前にはいないのか？　もう誰もいないのか？」

「……います」

妹。血を分けた自分の命よりも大事なもの。自分の後をついてまわる可愛い子供。自分の味方だと言ってくれた優しい少女。自分を求めてくれる守るべき存在。

「くよくよして、なよなよして、そいつまで守れなかったら、嘘だぞ」

その通りだ。まったくもってその通りだ。何が正しいかなんて簡単に言い切れない世界で、それだけは絶対に正しい。仁がゆっくりと顔を上げる。まだ憂いの残る顔に、小さな決意を秘めている。そうだ。何があっても守るんだ。決めたことじゃないか。もう誰も失わない。奈々華も、坂城も、ミルフィリアも。

その時、広畠の携帯が無機質な着信音を鳴らす。広畠が外部ディスプレイを見て、表情を引き締める。

しばらくそんな調子で電話口の向こうと会話していたが、やがて仁に向き直る。

「待ちに待ったエマージェンシーってやつだ」

にやりとほくそ笑む。緊張感がないというより、余裕があるのだ。仁と同質の、強者だけが持ちえる自信。

「行けるか？」

コクリと頷く仁の顔もまた精悍極まっていた。迷い人が、進むべき道を見つけたら、次に湧いてくるのは力だけ。いい返事だ、と広畠も満足気に頷き返すと、二人はどちらからともなく事務所の引き戸を開けて、夜の闇に溶け込んでいくのだった。

第四章 第百五十二話…乱れる心

奈々華の携帯電話に着信があったのは、午前三時を少し過ぎた頃だった。鬱陶しそうに枕元に置いたその文明の利器を取って出たのだが、電話口の声を聞いて、頭にかかるぼやけた霧が振り払われた。

「城山君の妹さんですよね？」

広畠の落ち着いた声。奈々華が一昨日聞いたばかりの声。はい、と答えた奈々華の声は震えていた。

「……落ち着いて聞いてくださいね？」

じわじわと心に禍々しい蔭が張っていくように、緊張と不安が伸びていく。はぐれ精霊と闘う仕事、いつ何時命を落とすかもしれない仕事。仁の強さを信じていないわけではない。だけど……

「何かあったんですか？」

裏返りそうな声を必死に落ち着かせて。既に布団から抜け出し、梯子の一番上の段に足をかけていた。

「……城山君が倒れました。すぐに来て下さい」

「どこに行くんだい？」というシャルロットの声を置き去りに、奈々華は寝巻きのまま廊下へと飛び出していた。

広畠の話では、仁は突然胸を押さえながら倒れたらしい。意識はあるようだが、近くの病院に搬送されたということ。それから、彼は突然現れたはぐれ精霊の討伐に向かうので、仁の近くには居られないということ。後は病院の場所、幻創痛という単語、そんなことくらいしか奈々華の耳には残らなかった。無事の一報への安堵と、病院にまで運ばれたという事態への不安が混在する心が出した結論は、一刻も早く兄の下へ駆けつけなければいけないという至上命題。

パジャマ姿の少女にとって、十二月の外気は無情であったが、まるでそれどころではなく、仁の自転車にまたがり、仁は最近坂道が

寒いなどと言って使わないから奈々華が呆れて買った意味を問うたことがある、何かにぶつかればただでは済まないようなスピードで坂を下っていく。赤くしもやけた両手も、体温を奪われた蒼白の顔も、何もかもがどうでもよかった。今の彼女には自身の身など石ころも同然だった。

事態は深刻だった。まだ敵にやられたというのなら対処のしようもある。傷を癒すことの出来る彼女が行けば万事解決だ。しかし病気の類だと彼女に手立てはない。幻創痛。聞きなれない単語に、奈々華の心は大きくかき乱されている。少なくとも彼女の居た世界にはない言葉と症例で、それが及ぼす害悪も、回復の手段もわからない。少なくとも倒れるような体の変調なのだ。もし治療方法がなければ……

心は更に悪いほう悪いほうへと思考を誘導していく。もしそれが遊園地で起こった事件に起因したとしたら…… 遊園地に誘ったのは自分だ。忠告が遅れたのも自分の怠慢だ。祐を失ったことにしても少なからず責任がある。その上、今回の兄の異変にまで関与していたなら……

「……うう」

小さく呻くような声が風に飛ばされずに耳まで届いた。知らず涙が零れていた。悔恨と自己嫌悪と不安。今までのように楽しく笑って過ごすことが出来ないかもしれない。残りの人生を病院で過ごすようなことになったら…… その原因が自分にあつたとしたら……もしかしたら兄に嫌われてしまうかもしれない。ハンドルを誤り、車体が大きく滑る。ただでさえ見通しの悪い斜面を、涙で濡れた夜目では仁の下へ着くまでに自分が大怪我をしてしまう。奈々華は一度車体を止め、両足を何とか地面につけ、掻き爪るように両目を擦った。

とにかく情報が足りない。今すべきことは、一刻も早く仁に会い、その安全を確認し、事態の把握に努めることだ。もう感覚の薄れてきた両手で、頬を一度パチンと叩き、自転車をもた走らせた。

第四章 第百五十三話…幻創痛

「くそ。このコンピュータずるいな。何でいつつも三順目以内で曲がるんだよ」

奈々華が病院に着き、案内されるままに訪れた病室で、仁は携帯ゲームをやっていた。暇つぶし用に職場に持ちこんだものだ。奈々華はその光景を口を開けて呆然と眺めている。倒れたとの一報に駆けつけてみれば、中国発祥の遊戯にいそしんでいるとは夢にも思わない。熱中していた仁も部屋の戸が開いたことに気付き、そちらを見る。呆然としている妹、困ったような怒ったような看護婦。

「城山さん。院内でゲームをしないで下さい」

幸い個室だが、そういう問題でもない。そのとき、突然奈々華がかけ出し、ベッドで半身を起こしている仁の胸元に飛び込んだ。埋めた顔は、小刻みに震えていて、すすり泣く声がする。仁はやや気まぐすそうにゲームの電源を落として、看護婦に視線をやる。外してくれ、と取った看護婦は黙って部屋を後にした。

「奈々華…… 悪い。心配かけた」

無骨な手が奈々華の頭を優しく撫でる。少女はただこれでもかと兄の胸に鼻を擦りつける。ヒックヒックと酔っ払いのような嗚咽がして、やがて小康状態に入る。

「髪がくすぐったいから……」

仁の顎のあたりにつむじの辺りがある。少しして奈々華がゆっくりと顔を離した。腫れぼったい目で仁を睨む。

「……倒れたって聞いたんだけど？」

ゲームをするくらい元気だとは思わない。

「ああ、死ぬかと思うくらい痛かったんだけどね……」

今度はその不穏な単語に顔を歪める。それを見てとった仁は慌てて手の平をブンブンと振り回した。

「もう大丈夫。体に異常はないらしいし」

「じゃあどうして倒れたの？ 痛くなっただってどこが？ もう大丈夫って本当？」

矢継ぎ早の質問に、仁は苦笑いを浮かべる。部屋の戸がコンコンとノックされる音。これ幸い、「どうぞ」と入室の許可を仁が出す。現れたのは中年の医師だった。四十代くらいだろうか、薄くなっただと丸っこい体は妙に愛嬌がある。先程の看護婦が遅れて顔を出した。

「幻創痛……」

読んで字の如く、今はない傷口に痛みを覚えるものである。医師の話を含括すると、その発症には二つの要因がある。一つ、反対属性の魔法によってかつて負った傷があること。必然、魔術師特有の症状である。仁の場合はエリシアの精霊に引っかけられた傷ということになる。二つ、ストレス。これは祐の死が引き金となっていると考えるのが妥当だろう。

「激しい痛みと、人によってまちまちですが…… 寒気。城山さんにはあるみたいです」

補足説明を入れる医師は、自分の責任のように申し訳なさそうな顔をしている。見た目どおり人のいい医者ようだ。

「それらが前触れなく訪れ、引き…… その繰り返しです。通常数日から一週間程度で自然と消滅するようです」

看護婦が横から口を出す。医師は苦笑しながら「過去の事例ではそれくらいの期間が最も多いようです」と付け足す。

「その間は安静にしてください」

その言葉に、奈々華は少し不安げな顔になる。

「入院とかしなくていいんですか？」

医師はまた眉根を寄せて、首の後ろを掻く。

「いえ…… 先程も申しましたように、何分神経痛と言いましょるか、多分に患者さんの感覚的な問題なので、医学の領域ではないのです。勿論痛み止めのお薬はお出ししますが…… 入院していただ

いてもこちらとしても手が出せない状況でして……」

何度か言葉を切って、言った。

「ご自宅で療養していただくという形になります。何かございましたら、ご連絡いただくといいことで……」

はい、と仁は、恐らく既に同様の説明を受けていたのだろう、ベッドから出て患者用のスリッパに足を入れる。看護婦と医師は深々と一礼して、部屋から出て行った。

仁は患者用に用意された薄緑色の服を脱ぎ、ベッドの先にあるカゴに入った自分の服に着替え始める。

その胸には、傷も何もない。奈々華は顔を俯けて、赤みの取れてきた自分の指先を見つめていた。

第四章 第五百五十四話…寒気

「……ごめんなさい」

からからと自転車の車輪が回る音に掻き消されそうな奈々華の声を、仁は正しく聞き取った。寝巻き姿の奈々華に貸し与えたコートに目をやり、もみあげの下を掻いた。

「いいよ。俺のために駆けつけてくれたんだし。俺あんま風邪ひかないしね」

あんまりというより、仁は二十一年の人生の中で一度も風邪を引いたことがない。奈々華はぶかぶかのコートの袖を一度引っ張って、首を横に振った。

「そうじゃなくて…… お兄ちゃんの傷は……」

「前にも言っただろ？ お前のせいじゃないって」

遮った仁の声は、明るかった。それが妹を深刻にさせないためにわざと出されているものと、奈々華には痛いほどわかった。自分の痛みを堪えている。心も体も。胸が熱くなる。

「私が無理にでもお兄ちゃんについて行けば…… もっと早く駆けつけていたら……」

仁は傷を負わずに済んだ。祐は死なずに済んだ。

「違うよ…… 俺が君を連れて行きたくなかったんだ。俺が彼を守れなかったんだ」

「お兄ちゃん……」

「俺が彼を守れなかったんだ」

噛みしめるように反芻された言葉に、もう明るい調子はなかった。

仁は道中痛みを訴えることもなく、ただ黙々と帰路を辿り、住み慣れた部屋へと戻ってきた。時刻は深夜というより早朝に近い。部屋のカーテンも薄明るい夜明けの空気を取り込んで、淡く光っている。

「何か食べる？」

「……いや、いい。寝るよ」

そう言うが早いか、ベッドにもぐりこむと、すぐに寝息を立て始めた。肉体というより精神の疲労が、彼を極限まで追い詰めていた。今からもう一度眠る気にもならず、奈々華は黙ってそれを見ていた。最近はいつもそう、眠れない夜を越え、体力の限界に伴って泥のように眠る。それでもまだ眠れるだけマシだと、仁は一度自嘲した。余程疲れていたのか、寝息はいびきに変わる。ゴーゴーと地鳴りのように低い音を立てながら、青年は布団を目深に被って休息を取る。寒気を感じる。ふと医師の説明が奈々華の頭を過ぎる。

するりと布団を持ち上げ、起こさないように仁の隣に体を寄せる。人は暖かい。しばらくそうしていたが、やがて仁の顔が歪み、終いには「ぐう」とも「うう」ともつかない唸りを上げ、目を覚ました。虚ろな目が奈々華を捉える。しまったと思った。勝手に布団に忍び込んでいるのを見られてしまった。しかし仁の反応は奈々華の思っていたものと三百六十度反対のものだった。

ぐいと引き寄せられた体が、仁の厚い胸板に吸い込まれる。

「お、お兄ちゃん？」

奈々華は湯沸かし器よろしく、顔から湯気が出る勢いで赤くなる。喜びを感じる余裕より、狼狽が一番大きい。仁の腕が奈々華の体をなおも締め付けるようにして抱きしめる。

「寒いんだ」

その声は、奈々華の気持ちを静めるのに十分なものだった。暗い穴の底から助けを求めるような頼りなくて、辛い声。

「ごめん…… ちよつとこうさせていてくれないか？ すぐに引くと思うから……」

本当に心苦しそうな声音。奈々華は胸が張り裂けそうになった。

「うん…… 気が済むまでこうしていて。ううん…… ずっとこう

してたっていいんだよ」

それは彼女の女としての事情。仁が受け取るのは妹としてのいたわり。

「ありがとう……」

それだけを呟いた仁は、母親に抱きすくめられた幼子のように、安心しきった顔になって…… やがて少しだけ腕の力を緩める。ゆっくりと力の抜けた腕の中で、奈々華は全身で兄を感じていられるように、身動き一つしなかった。

第四章 第百五十五話…女性

「あったかいなあ」

また目を覚ました仁は、腕の中にいる奈々華に語りかける。さつきから断続的な眠りを繰り返していた。痛みと寒さと、安らぎと暖かさ。

「ありがとうね。何だか痛みも和らいでるような気がするよ」

「うん」

もぞもぞと仁の胸に鼻を擦り付けて甘える。仁は女性だけが持つ温かさと甘さ、柔らかさを感じていた。

「安心していられるんだ……俺に母さんがいたらこんな感じだったのかなあ」

「私はお兄ちゃんのお母さんって年じゃないよ？」

「ははは。俺より年下のお母さんはいないよね」

時々奈々華の別に笑わせようとしているわけでもない発言に仁はこうして笑ってやる。彼の優しい部分がにじみ出ているようで、奈々華はその笑いが大好きだ。

「祐君は、家族をととても大切にしていたんだ」

自分を責めるような言い方には感じられなかった。ただ優しい友人を誇っているようだった。

「そうだね」

「今奈々が傍に居てくれることが、祐君の望んだことが正しかったって証明になる気がする」

そう言うと、奈々華の額に軽く手を当てる。前髪を掻きあげる指は、小鳥を愛でるように優しくかった。

「広畠さんにも叱られたよ。いつまでもくよくよしてないで、今守るべき者を守れって」

「……うん」

「俺は君を守っているようで、本当は守られているんだ。でもやっ

ぱり守らなくちゃいけないんだ。はは、何言ってるかわかんないよね」

「……うん。わかるよ。それに…… 信じてる」

「そうか」

そこで会話は止まる。ただ黙って抱き合う兄妹は、傍目から見れば異常なのかもしれない。だがそんなことはどうでもよかった。お互いはお互いになくてはならないものであり、お互いはお互いを最もよく理解していた。その尊さを、家族の非互換性を、ただ確かめている。

「俺は冷たいのかな…… 勿論祐君のことは今も苦しいし、申し訳ない気持ちで一杯だ。だけど、誰かのことを引きずって、お前を守るほど、俺は強くない」

奈々華はゆっくりと首を横に振った。長い髪が布団の中で、衣擦れの音を立てた。

「祐君のことを悼む気持ちは大事だよ。だけど、そうしていつまでも囚われていても、祐君はきっと喜ばないよ。家族を一番愛した祐君が、家族を守るためにまた前を向き始めた仁君を責めるはずがないよ」

仁はその言葉を、唇を噛んで聞いていた。「ごめん」と上擦った声が聞こえる。それが感極まったことからきていると、奈々華は知っている。奈々華は体をずり動かし、今まで胸に埋めていた顔を枕の上に出す。仁の目には宝石のように輝く涙が浮かんでいた。反対に奈々華が仁の顔を胸に引き寄せる。

押し殺すことも忘れて、明け方の部屋に泣きじゃくる声が響く。

「守れなかったんだ！ 俺は！」

「うん」

どうしてこんなに可哀想なんだろう。父に習わされて剣道をしていて、人を殺めてしまった。突然呼び出された世界で、優しさを持ち続けていた結果、人を殺し、人に憎まれ、人に裏切られた。

「守りたかったんだ！ 近藤さんと約束したんだ！」

「うん」

どうしてこんなに優しいんだろう。ただ事故だと切り捨てることも出来るはずなのに。悪いのは、裏切っていた木室であり、フロイラインであるはずなのに。全部を背負い込んでしまおうとする。

「祐君は…… もっと生きたかったんだ。俺も祐君ともっと生きたかった！」

「……うん」

奈々華の胸も詰まる。

「もう誰も彼も拒んで生きるのは嫌なんだ！！ だから……」

「うん」

だから奈々華とまたこうしている。祐と対話の道を模索した。仲直りが出来た。坂城もミルフィリアもきつと多大な感謝を抱いているはずだ。

「間違っってなんていないんだよ。お兄ちゃんがそういう気持ちになっってくれなきゃ、私はいつまでも一人だった。祐君が死んでしまったのは、辛いことだけど…… 最後に祐君と仲直りできたのは、素晴らしいことなんだよ」

息も出来ないほどに強く、奈々華は仁を抱きしめていた。

第四章 第百五十六話…変質者

「電気毛布か、湯たんぽか……」

仁はパソコンを立ち上げ、インターネットに接続し、とある家電量販店のホームページを覗いている。痛みは潮の干満のように、行ったり来たりする。だから今は干潮ということになる。

大声で泣くとすっきりすると聞く。勿論そんなに簡単な話ではないのだろうが、仁の顔にもう翳りはない。少し笑うようにもなった。「何してるの？」

洗濯を終えて、部屋に張ったロープに通されたハンガーにシャツをかける片手間、奈々華が仁に声をかける。ついと顔を上げた仁は、微笑を作り、言った。

「毎晩お前と寝るわけにもいかねえだろ？」

奈々華の手から、滑って洗濯ばさみが落ちた。慌てて仁に背を向けて作業に戻る。

「あったかいサムシングをゲットするのさ。さしずめ電気毛布か湯たんぽか」

「……」

「まあ毛布かなあ」

やっと顔の色が元に戻っただろうと判断した奈々華がまた振り返る。もう洗濯物はそっちのけになっていて、手に持っていた次に干すべき靴下は、洗濯カゴの中へと逆戻り。

「アレは体に悪いから、ダメ」

「ふうん。そうなの？　じゃあ湯たんぽだな」

「アレはすぐにお湯が水になるから、絶対ダメ」

強い口調で取り付く島もない。仁は弱って頬を掻きながら、お伺いを立てる。

「じゃあもう一枚羽毛布団を買おう？」

「お兄ちゃんが寝たら何でかすぐ黄色くなるのに、二枚も洗う身に

もなつてよ!」

「じゃあ、俺が洗うからさあ」

「洗い方なんてわからないでしょう? ダメ」

アレもコレもダメ。仁は終いに少し腹が立ってくる。

「教えてくれてもいいだろう? 第一俺は一応病人なんだぞ。少しわがまま言ってもいいじゃねえか」

「いっつもわがまま言うじゃん」

「いっつも聞いてくれないじゃん」

「ああもう…… ダメったらダメ」

地団駄踏むようにして、奈々華はまた否定を重ねる。仁は怒りを通り越して、何故頑なに自分の寒気を緩和する手段を許可しないのか、不思議に思ってきた。途方に暮れてもいた。

「じゃあどうすりゃいいんだよ?」

「……人肌が一番体に優しいんだよ」

「……」

またむこうを向いてしまう。誤魔化すように靴下を取り出して干す。他は陰干ししているのに、それだけ表を向いていた。

「は?」

「だから! 他に良い手段がないんだから、今日も一緒に寝てあげろって言ってるの!」

パンと大きな音を立てて皺伸ばしされた仁のトランクス。ドット柄のそれを真正面から見ってしまった奈々華はまたまたカゴに叩きつけるようにして戻す。何がしたいのか、仁にはさっぱりわからない。

「ううん…… いくら兄妹でも、俺と一緒に寝るのは嫌だろうから、考えたんだが……」

「……別に嫌じゃない」

蚊の鳴くような声は、照れ隠しだとすぐにわかる。仁は胸の中がすっと温まるような気持ちになる。母のような優しさを感じた昨晚とは真逆に、子供らしさを見せつけられると、むくむくと悪戯心が芽生えてくる。

「そうかあ。良かった。俺も奈々ちゃんはあったかいし、柔らかくて気持ちいいから、そう言ってくれと助かるよ」

成り行きとは言え、昨日の大胆な行動を思い出した奈々華の顔は、みるみる赤くなっていく。真面目な生徒が宿題を忘れて、教師に怒られているかのようだ。

「やっぱり寝ない！ 最低！ 変態！」

カゴの中身をぶちまけられた仁は、洗濯物お化け。

「誰が変態だ！」

奈々華の下着が顔に張り付いている。奈々華は「もう知らない」と剣幕もそのままに、部屋を出る。

火照った顔に、廊下のひんやりした空気が心地良い。部屋の戸に背中を張り付けて、仁が後を追って開けられないようにして、一つ息を吐く。

「嫌なんかじゃないよ」

顔を両手で挟む。濡れた洗濯物を触っていた手は、空気よりももっと冷たく、洗剤の芳香がした。クスリと堪えきれずに笑う。洗濯物まみれになった兄は、今頃必死に全てをどけようとして、自分の下着を頭から被っていることに気付いた頃だろう。

「変態は私か……」

クスクスと笑い声が抑えきれない。

丁度戸を開けて部屋から出てきた高等部のほかの生徒が、奈々華にぎよっとした目を向け、すぐにまた自室へ身を引っ込ませた。

第四章 第百五十七話…変化

「幻創痛ですか……」

やっと面会許可が下りたミルフィリアと坂城はいの一番に仁の部屋を訪ねた。スパルタで知られるミルフィリアもことがこただけに優しい言葉を用意していたのだが、仁の様子が以前と全く同じというわけにはいかないが、どこか立ち直りの兆しを見せているのに驚いた。

「知ってるのか？」

仁の屈託のない質問。まさしくわからないことを教師に尋ねる生徒の図。大まかな説明は医師から聞いたものの、魔術の専門家にも詳しいことを聞くのが筋だ。

「当たり前です。二年になれば、奈々華さんは白の属性ですから、改めて習うことになります……」

そうことわって、チャリと奈々華を見る。丁度給湯を終え、緑茶を持ってきている。湯飲みの上部をつまむようにして、坂城とミルフィリアの前に差し出す。とても熱いことを知っている二人は表面上の礼だけ言って、しばらく手をつけない。

「治す方法は？」

仁の期待のこもった眼差しを受けて、坂城はさりげなく視線を外す。ミルフィリアが損な役回りを引き受けた。

「……残念ながら」

目を瞑って首を大きく横に振る。セミロングの髪が揺れる。

「症状の自然治癒を待つより他にありません」

病院で聞いたものと同じ答え。奈々華は落胆し、仁もううんと唸る。「治らなかった例はあるのか？」

仁の質問に、ミルフィリアは面食らった。出来れば聞きたくないようなことを、平然と自分から聞く。まず状況把握に努める姿勢は、歴戦の戦士としての彼の本来の姿。祐を背負って帰るなどと感情的

になっていた事の直後からは幾分立ち直っていることがここにも窺える。

「中谷慎二……」

呟いたのは坂城。仁の視線を真っ向から受けて、また慌てて顔を俯けた。

「すみません。久しぶりに話すものだから、緊張しているんです」
ミルフィリアが発した軽口は、幾分場を和ませた。

「意味わかんねえから」

しかしそれは軽口の類ではなかった。目に力をこめたミルフィリアは、仁の顔を真正面から捉える。

「本当にわかりませんか？」

「……」

「貴方は決して鈍いほうではないでしょう？」

「……」

仁の顔から笑みが消える。言葉を探しているようでもあり、何も考えていないようでもあった。坂城は嗜めるように、「姉様、やめてください」と小声。仁とは意図的に顔を合わせないようにしていた。「それにしても、今フロイラインに責めて来られたらどうするんですか？」

重くなりかけた空気を、話題を変えた奈々華。残りの三人は不意をつかれたように、一斉に奈々華に顔を向ける。見えない力で吸い寄せられたように。少ししてミルフィリアが応じる。

「大丈夫でしょう。もう情報のリークはないのですから、仁さんが幻創痛だということはバレていないはずです。むしろあの状態から緑の幹部を破ったのですから、敵はやはり慎重に構えるでしょう」
坂城の顔が曇る。敵という単語。

「最悪責めて来られても、私がいいます。仁さんばかりに負担はかけられませんからね」

任せろ、と首を大きく縦に振る。

敵への対処については、それ以上名案があるわけでもなし、それき

りとなった。

「それにしても、不自由はありませんか？」

やはりミルフィリアの言葉にはいつもの棘も皮肉もなかった。仁は快活に笑ってみせる。

「大丈夫だよ。もう慣れた」

「しかし…… 痛むんじゃないか？ それに寒気もあるんだろう？」
坂城が後に続く。

「大丈夫ですよ。私が一緒に寝てますから」

奈々華がいやらしく口の端を持ち上げる。坂城とミルフィリアは従姉妹らしく同じ反応をした。最初呆気に取りられて、次に顔を顰めて、最後にゴミでも見るような目で仁を見る。

「どこまで変態なんでしょうか。この人は」

「気持ち悪いな。頭も診てもらったほうがいいんじゃないか？」

口々に罵る。今度は仁が視線を外す番だ。

「しょうがないだろう？ 寒いんだから。本当は何か暖を取るものを買ってすまそうとしたんだけどさあ。俺がしょっちゅう起きるから奈々華も眠れないだろうし」

「はい？ 十分寝れてるし。馬鹿じゃないの？」

奈々華まで便乗する。勘弁してくれ、と手を挙げてみせる仁。

坂城もミルフィリアも何となく察しているらしかった。翳りのある笑顔。奈々華と寢床を共にすることで、仁の心境に変化がもたらされたのだらうということ。仁はすっかり拗ねてしまつて、窓際まで行くとゆっくりとタバコをくゆらせる。口を「お」の字にして煙で輪っかを作つて遊んでいた。

第四章 第百五十八話…エンドライン

「何すか？ 改まって」

奈々華は浴場に行っていた。いつ何時発作が起こるかわからない状況ではあったが、彼女も女の子だ。後ろ髪を引かれるような思いで部屋を後にした。

「昼間の件だよ。静は中谷の精霊だったんだろう？」

「そうっすけど。それが？」

「……広畠さんといい、このショッキングブルーといい」

皆まで言わずとも、当然分かっているであろうことを、皆まで言わせる。憤りをあらわにする仁を見て満足したのか、やがて静は「冗談すよ」と折れる。

「聞いたでしょう？ ストレスも一要因だって」

「ああ」

ある程度、仁にも察しがついていたが、確認はしたい。

「あの人は罪を一人で背負って生きていましたからねえ」

仁の予想通りだった。彼に心休まるときは一瞬たりとも訪れなかったというわけだ。

「それで正気を保っていたのか？」

「さあ」

素っ気ない返事。仁は短くなったタバコを灰皿に押し付ける。グリグリと必要以上に擦った。

「さあってなあ」

「わからないんすよ。あの人は誰にも心を開きませんでしたから。狂っているようにも見えたし、正気のようにも見えた。冷静な目で幼子の首も刎ねるし、狂ったようにペットの死に涙したりするような男でしたからねえ」

「……」

「そもそもそんな境界はあやふやなんじゃないすか？ どっから正

気でどっから狂気か旦那は峻別できるんすか？」

その通りだった。出来やしない。だが反論したい気持ちにもなる。

「狂えて言っというて、それはないんじゃないか？」

「ははは。そうっすね。でもあっしは適当なことをよく言います。

旦那の精霊っすからねえ」

「どういう意味だ？」

少し凄んでみても、クスクスと含み笑い。表情もわからない上に、飄々とした性格は掴みどころがない。

「それより…… そんなこと聞いてどうするんすか？ 中谷さんみたいに生きるんですか？ それともあの幻創痛と同じようなまやかしに頼って立ち直るんすか？」

言いにくいことも無遠慮に言う。世渡りとは無縁の孤高の精霊に、人の感情の機微を説いても詮無いことはわかってるので、仁はぐっと堪える。

「俺に中谷のような生き方は無理だ。お前じゃないけど狂っちまう。それと…… あの子はまやかしじゃないさ。家族だ」

それだけは譲れない、と声に力がこもる。それでも日和った様子もなく、静は言葉を重ねる。

「じゃあその家族のためなら、これからも血にまみれることを厭わないんすよね。これから先もっともっと過酷な試練が待っていると思いますよ？ それでもその手にあの子を抱いて進むんすか？」

「……」

「狂うなと言ったあの少年の言葉はどうなるんすか？ どう受け取っているんすか？ 罪を重ねるなって意味かもしれませんよ？」

「……言葉通りさ。狂わないように、修羅の道に墜ちないように、奈々華を守ることだけを考えて生きるんだ」

クスクスと笑いは一層強くなる。

「もう墜ちてるでしょう。復讐に駆られて緑の少女を殺したじゃないすか。もう狂っているかもしれないよ。境界はあやふやですからねえ」

「……ならそれでいいさ。祐君の定義じゃ、きつと近藤さんのようになることが狂いなんだ。だったら俺には当てはまらない。奈々華と共に生きるから」

「言葉遊びですねえ。まあいいですけど…… そんな決意表明をするためにわざわざ話しかけたんすか？」

今度は仁がクスクスと笑う。

「そうだよ」

「……」

静が何を考えているのかはわからない。どうでもよかった。元々これは会話ではなかった。一方的な、そう、決意表明だ。

「まあ、全てが終わったとき、果たして旦那に後悔がないか、じっくり拝見させていただきますよ」

それきり静は、いつものインテリアに戻った。

第四章 第百五十九話：誓い

痛みは天井知らずに膨れ上がっていた。吐き気を堪えるような呻き声が、夜の部屋にこだまする。二人の話では、その終わりが近づくにつれ、痛みも増していくのが幻創痛の特徴だそうだ。背をさする奈々華も今にも泣きそうな顔をしている。「大丈夫？」なんて安易に声もかけられない。青白い顔で胸を押さえる仁の体は、壊れたように震えている。体温は全く低下していない。全ては幻。しかし本人には現実。

「うう……ぐ、あ」

片手は胸を押さえ、開いた手が口元を押さえ始めた。

「袋持ってこようか？」

奈々華の言葉に、弱々しく頷く仁。奈々華はすぐさま立ち上がって台所から透明の袋を持って来たが、仁に渡す前に、堪えきれずに嘔吐する。黄色い、すえた匂いのする吐しゃ物がカーペットの上にぶちまけられた。それを見て奈々華はUターンして布巾を片手に帰ってくる。せっせと拭き取る。仁の顔に謝意のようなものが浮かぶ。

「気にしないで。こんなこといくらでもやるから」

その言葉に嘘はなく、手早く作業を終える。きつと後で改めて水拭きしたり、天日に干したり、仁の知らないやり方で、匂いも取るのだろう。次にティッシュペーパーを二、三枚まとめて取って仁の口の周りを拭いてやる。仁が嗚咽の隙間に笑う。

「いいってば」

奈々華も薄く笑む。彼女の苦になっていないことははっきりと見て取れる。

少し落ち着いてきた。月が自転して、違う場所の海水をその引力で引っ張り始めたのか。発症から三日たつ。早い者ならもうそろそろ終わりを迎える時期だ。しかし、ストレスも関係するという話。仁

の場合もう少しかかるかもしれない。今でも時折、眠りながら涙を流しているのを奈々華は一番近くで歯痒く見ている。仁は困憊した顔で呼吸を整えている。天井のシミでも数えているような、ぼんやりとした目でソファアの上に仰向けになっていた。

「落ち着いた？」

奈々華は洗面器と水の入ったコップを持ってきた。口をゆすいで、と渡す。上半身だけ起こして受け取った仁は口をゆすいだ水を洗面器の中に放り込む。「歯医者さんみたいだ」と力なく笑った。奈々華も釣られて笑った。

「最初は天罰だと思った」

仁は遠い目をしていた。天井を見ているわけではなく、もしかしたら、天国に居る祐に話しかけたいのかもしれない。奈々華は黙って頷いた。

「でも…… こんなの祐君が受けた苦しみに比べれば罰でも何でもないんだ」

また頷く。気配で察する仁は妙な安心感に包まれていた。

「だからコレは俺の過失。神様も悪魔もこの世にはいないんだ」

今度は頷くことはせず、奈々華は仁の顔の横に腰を落ち着かせた。小さく髪を撫でることで相槌とした。

「お尻撫でていいの？」

「ダメ」

ふふつと鼻から息を漏らすタイミングは二人揃っていた。

「あるのは人の良心と葛藤だけ」

そうかもね、と奈々華。同意してくれるとわかっていたはずなのに、優しい声音に仁の顔は綻んだ。

「だから乗り越えなくちゃいけない。忘れるわけじゃない。壊れないようにするんだ」

ぐっと握った拳は、もう要らないなんて言わない。いない神にではなく、それを望んでくれた友に宣誓する。その拳に、そっと奈々華

の手が重なった。温かくてかけがえのない手。壊れそうになる自分をいつだって治してくれた手。彼がついぞ持ち得なかった家族。その支えがあって出来ないはずがない。たとえ血に濡れた道でも、歩みを止めるよりはいい。憎いなら殺しきればいい、と彼は言った。そう、それでもついて来てくれるのだ。祐も近藤が支えを求めれば、きっと身を粉にしてもついて行ったはずだ。それが家族なんだ。傍目には狂っていても間違っていない。いい。相手が家族を奪う気なら、相手を奪おう。人である前に兄であろう。

「俺は守るよ。どんな手を使っても」

第四章 束の間の充足と緑の覚悟 了

第五章 第百六十話：察し

第五章 綻ぶ世界と黄の真相

出勤の前にヒメネスの病室を訪ねることにした。仁がいつか運ばれた病院。仁の職場からの患者は二十四時間最優先で受け入れているらしい。お偉いさんと太いパイプで繋がってるんだとよ、とは広畠の言。

ヒメネスは三階の個室病棟の一室にいた。むちうち患者がつけるような固定具を首に巻かれている。それ以外は特に目立った外傷はなさそうで、仁は心の中で安堵する。

「ヒメネス。大丈夫かい？」

仁が声をかけると、にこりと笑った。しかしいつもの天真爛漫を絵に描いたようなものではなく、弱々しい。来客用のパイプ椅子を引き寄せて座る。

「大丈夫。大袈裟」

また笑う。仁はそんなに深刻な顔をしていただろうかと、頬の辺りを触るが、平静な顔をしていた。大袈裟とは、この処遇についてだろう。

仁の幻創痛が快方に向かい始めた頃、ヒメネスが職務中に怪我をしたと知らされた。いつもの淡々とした広畠の声だった。仁は少なからず衝撃を覚えた。年が近いせいもあってか、職場内では一番仲がいい。もう一つ。ヒメネスは白の魔術師だと聞く。つまり相方の防衛もままならぬまま、若しくはそれを掻い潜ってヒメネスに攻撃が届いたということになる。精霊は辛くも倒したと広畠は言っていたが、それほど強い精霊が井須の探查網に引っかからなかったことは由々しき事態だ。

「何か最近おかしい」

思考の渦に埋没していた仁は、ヒメネスの躊躇いがちな声に、我に帰った。そして顔に疑問符を浮かべた。ヒメネスは主語を抜いて話す傾向がある。

「何がおかしいの？」

「世界」

他の人間なら随分哲学的な話が始まると身構えるところだが。

「今まであんなに強いはぐれ精霊に会ったことない」

しかし、今の事態。仮にも仁よりも長くはぐれ精霊狩りに携わっているヒメネスが入院を余儀なくされる事態。井須も見つけられなかった強大な精霊。よほど知能が高く、潜伏も上手いということになる。今まで現れなかった強力で狡猾な精霊。世界、正しいのかもしれない。

「どんなヤツだったの？」

「……」

ヒメネスは考え込むようにして口をすぼめた。

「悪魔」

そしてそれ以上に、自身が対峙した精霊を上手く形容する言葉は見つからなかった。仁は予想外の言葉に、息を飲むのも忘れてヒメネスをじっと見つめた。

「悪魔……」

「うん。スターダストデビルって、井須さんは言ってた」

「スターダストデビル」

聞きなれない。もっと言えば仁が知る精霊はほんの一握りに過ぎない。しかし、一つだけ当たりをつけることができる。

「それは…… 黒の精霊なんじゃないか？」

ヒメネスの目が忙しく揺れる。壁や窓に逃げるそれから、仁は既視感を覚えていた。ひょっとするとヒメネスは口止めをされているのかもしれない。ねめつけるようにしていた仁も、やがてヒメネスがこれ以上口を動かさないことを悟って、ゆっくりと椅子から立ち上がった。

「……邪魔したね。お大事に」

そうかもしれない。世界が変調しているのかもしれない。優しくった木室は偽りで、賢い友が死に、街が破滅へと向かっている。きゅるきゅると立て付けの悪い引き戸を開けて、部屋の外に出る。白い廊下を白衣の看護婦が足早に過ぎ去っていくのが見えた。黒一色の仁の出で立ちとコンストラストを生むようだった。

「楽な思考だよね」

仁が歩んだ軌跡は、紛れもなく仁自身が紡いだもの。そして今回の出来事についても、仁には心当たりがある。

病院を後にした。

第五章 第百六十一話：アイソレイション

どん、と肩がぶつかり合った。夕方勤務の、田中といったか。そのまま階段を下りていく。彼と仁は二、三度言葉を交わした程度の仲ではあったが、愛想のない男ではなかったはずだ。開け放たれたままのドアから、広島の顔が見える。眉間に皺が寄っていたのは一瞬で、すぐに仁に不恰好な笑みを向ける。彼とは何度も席を同じくして、仁はよく知っている。こんな風に愛想を振りまく男ではないことを。

「おはようございます」

幻創痛で仕事を休んだのは、倒れた日も含めて三回。その穴埋めも兼ねて、本来のシフトにはない今日、出勤を申し出た。既に二日余分に出ているので、今日の勤務を終えたと一応の責任を果たしたことになる。当然、ヒメネスがダウンしたことによって開いたシフトを今度は仁が埋めるという意味合いもある。

「おう、おはよう」

相変わらず慣れない笑みを浮かべている。対照的に、いつもは微笑を浮かべる仁が、何の感情も顔に出すことなく、広島の対面に腰掛けた。

「ヒメネスの見舞いに行ってきましたよ」

昼に食べたものを報告するような、なんでもない口調。しかし、広島は読んでいた文庫本から目を上げ、仁の顔を見つめた。そこから何かを読み取ろうとしているようだった。

「……元気してたか？」

当たり障りのない返答から、成果は挙がらなかったことが窺える。

「はい。大袈裟だって言っていましたよ」

にこりと相好を崩した。そこからは、ヒメネスへの親愛以外は読み取れなかった。

「そうか…… その、他には何か言っただけだったか？」

仁の笑みの質が変わる。あまり良い印象を与えないものだった。

「彼は本当に純朴ですね」

「……」

「悪魔と闘ったと教えてくれました」

「……」

広島は目を瞑り、諦めて頭を振った。

「口止めするくらいなら、病室を教えなければいいのに」

「……アイツは、お前に懐いている。結構へこんでいたみたいだから、勇気付けて欲しかった」

「可愛い弟のように、俺も思っています」

広島はまた大きく首を振った。いよいよ観念したようにも見えた。

「黒の精霊の出現、下級精霊にも関わらず、手を焼いた」

「そしてその時、俺は職場には居なかった」

ふっと鼻で笑う仁は、続けた。

「状況証拠としてはこれ以上ないですね。黒の魔術師である俺が、精霊を操り、街を襲わせた。世界に一人と言っている俺しか、黒の精霊と契約できません。しかも、俺はいつでも精霊と契約できる環境にあります。悪魔ははぐれていたわけではなく、俺が操っていた。だから強かった。だから井須さんにも見つからなかった。だからヒメネスは傷を負った」

「……」

「黒の精霊と契約できる可能性のある人間は、俺以外に一人だけいます」

俯いて、読経を聞くようにしていた広島がガバツと顔を上げる。

「誰だ？」

「……そいつだと確証があるわけでもありません。俺がやったと考えたほうが筋が通る」

「誰だ？」

「……平内涼子。フロイラインの首領です。かつて、全ての属性に

適性を示すと聞いたことがあります。彼女ならあるいは……」

広畠は顎に手をやり、考え込む。仁はそんな様子が、たまらなく可笑しくなった。

「俺を疑ったほうが現実的です。クビにしたほうがいいんじゃないですか？」

「……そうだな。現にお前を疑っているヤツも少なくない」
田中はその話をしていたのだろう。

「それで体裁を保つんですか？ はっきり言ったらどうなんですか？俺もお前を疑ってる。このまま裏切り者を抱えていては、いざというときに責任問題になる。よってクビだって」

言って、仁はしまったと顔を歪めた。穏便に済ませる心算だったのだろう。

「……判断しかねている」

そんな仁の顔を、広畠は見えていなかった。また下を向いたきり、小刻みにその体が震えている。

「俺は、一度信用した人間を、そう簡単に切れるほど器用じゃない」
意外な言葉だった。仁の描く広畠という人物像は、合理を第一としていた。そんな男だった。最後の最後に彼の違った一面を見つけるなんて、皮肉なことだった。

「……俺はそうやってここまで来れたんだ」

そんな広畠に、仁はただ黙って封筒を差し出した。「辞職願」と書いてある。仁は敏感だった。職場に蔓延する自身への糾弾と疎外の目を正しく察していた。例え広畠や、ヒメネスが惜しんでも、大多数の人間が仲間に対して不信を持っていれば、組織は一枚岩にならない。

「ごめんね、祐君。だけどこれ以上この人たちに迷惑はかけられないよ」

口の中で仁がそう呟く声は、広畠の携帯のけたたましい着信音に掻き消された。

第五章 第百六十二話…異常事態

「お前、運転はできるか？」

電話を切るや、広畠は仁に鋭い目を向けた。既に死線に身を置く者の目だ。仁は困惑しながらも頷き、すぐに思い出したように口を開いた。手には行くアテを失った辞職願が握られたままだった。

「でも……俺免許持っていないせん」

正確にはこちらの世界の日本で通用する免許だが。

「んなもん、見つからなきゃいいんだよ。公僕に止められても突っ切れ。後でどうにかする」

広畠は言いながら、コートを羽織り、車のキーを仁に投げる。危なげなく受け取った仁、それでも表情は固かった。

「それに、俺は……」

「俺はそんなもん、まだ受け取ってねえ。今は職務中だ。そしてお前はうちの職員だ。俺の指示には従ってもらう」

高圧的だが、仁は嫌な気持ちにはならなかった。

「……わかりました」

「いい返事だ。中谷駅前のメインストリートに向かえ。一人でもいいけるな？」

仁は絶句する。本来の職務形態から逸脱する単独行動もさることながら、そんな人通りの多い場所にはぐれ精霊の出現を許してしまった事態に、仁は驚きを隠せなかった。最近おかしいんだ。ヒメネスの言葉が否応なく思い出された。

「ぼやぼやするな！ 行くぞ！」

広畠はもう事務所の引き戸を乱暴に開けて、外に出ようとしている。

「あ、あの。広畠さんは？」

苛立った顔が仁を振り返る。

「もう一体出たんだよ。俺はそっちだ」

最近おかしいんだ。世界がおかしいんだ。

目標はすぐに見つかった。黒檀にニスを塗ったように、夜の闇にあつて毒々しく輝いていた。黒い体色の巨大な化け物。並ぶ雑居ビルと同じくらいの背丈。背にはコウモリのような羽が生えている。人の男性と変わらない体のつくりで、下半身には赤茶けたパンツを履いている。

「鬼か？」

それが暴れている場所から数百メートル離れた場所に軽トラックを停める。生憎路上駐車を気に留める余裕はなかった。逃げ惑う人の波。阿鼻叫喚。血を流して倒れている若者が見えた。失血量から見るに既に息はないだろう。元はビルだったコンクリートの塊がその上に降り注ぐ。はるか上方で今まさに、それが破壊活動をしているのだ。拳を叩きつけるだけで、豆腐を潰すようにビルが壊れていく。また拳を突っ込む。引き抜いた先から、オフィス用のデスクが飛び出した。頭から血を流し、よたよたと歩く女性を、押し退けて逃げる金髪のごろつき。路地裏へ走りこむ背広の男は、既に左腕がなかった。

「……村雲。アレは鬼か？」

頭部を見やると一本長い角が生えている。顔には口や鼻はなく、目玉が吹き出物のようにそこかしこにあるだけ。二十は下らないだろうか。

「下級のな」

短い返答。地獄絵図の中にあつて、誰よりも冷静な一人と一振が人の波を掻き分けて、渦中に体を滑り込ませていく。彼らがその下へ辿り着いたとき、鬼の暴虐は終わる。そう見ると、鬼は最後に本能的な破壊衝動に身を委ねているようにも感じられてくるから不思議だ。

「アレは本来大人しいはずなんだがな……」

村雲の言葉は喧騒に耳を塞ぐ仁には届いてはいなかった。

第五章 第百六十三話：卵と辞職と親子

「主！ 上だ！」

張り上げた声に、仁がすぐさま上を向くと、粉塵とネオンの光が交差する空に異質なものが浮かんでいる。白い楕円。それが徐々に大きく、はつきりとしてくる。

「卵？」

突然現れたそれも、重力の洗礼に遭い、落下を始める。落ちる先は仁の頭の上。ゴン、と鈍い音を立てて、それを仁は当然かわした、アスファルトの上に墜落する。やはり卵にしか見えない。仁はダチヨウの卵なら、動物園で見たことがあるが、そんなものの比ではないくらいに大きい。彼の膝上あたりまである。

「主！ 前だ！」

鬼が猛然と仁目掛けて駆けている。一つ一つの動作は鈍重だが、歩幅が大きいので、村雲の注意が飛んだ頃には既に両者は十メートルと離れていなかった。すぐに顔を垂直に上げると、巨大な拳が振り下ろされようとしていた。すぐさま回避行動。改めて常人の反射神経ではない。横に跳んだすぐ後に、アスファルトに大きなクレータ―が出来る。ゴトゴトと大きな音が足元から聞こえる。どうやらアスファルトを突き抜け、下水道にその破片が落ちているようだ。腕を引き抜いた鬼が、顔を横に向ける。無数の目が仁を捉えていた。明らかに仁一人を狙っている。

「あ、主！ どうして卵を？ 早く捨てなされ！」

「割れちゃったら可哀想だろう？」

ついさっきまで見ていた同じ人間の失命を悼むことはしないでくせに、何かもわからない卵を大事に抱えている。

「来ますぞ！」

鬼の恐ろしい目たちが一瞬、悲しげに揺れたような気がした。

広畠が仁の下へ救援に駆けつけたときには、辺りは騒然となっていた。救急車やパトカーが縦列駐車も憚らず、多くの野次馬が黄色いテープで仕切られた区画の外を覆っていた。また一台、救急車が怪我人を乗せてけたたましいサイレンを鳴らしながら発進する。その開いた場所に次にやってきた白いワゴンが停車して、中から白装束の隊員たちが飛び出す。広畠はパトカーの横に二重駐車する羽目になった。

仁は騒動の中心にいた。紺の制服を着た警官達に囲まれている。

「おい！ 城山！ 大丈夫か？」

テープを乱暴に引き上げて中に入ると、ずかずかと警官の群れに突っ込む。仁は広畠の顔を見ると、安堵に顔を綻ばせる。平素なら事前に警察へは事情を説明しているのだが、スクランブルはそうはいかない。それでもこういった繁華街は重点的に井須が調べているので、出現先はほとんど人里離れた場所。これまで警察に先を越されてしまうような事態にはならなかった。

「ええっと、上司です」

仁は広畠に無事だと告げ、警察への対応を任せた。

ようやく騒ぎも収まった頃、広畠と仁は事務所へ帰ることを許された。人が引いていくと、辺りの凄惨さがより目につく。血痕があちこちに散っていて、片付け損ねた小さなコンクリートブロックの破片たちは、後日回収されるそうだ。

「お前…… それは何だ？」

広畠は顔ごと仁の胸に抱かれた大きな卵を見ている。

「鬼の卵のようです。コレを探していたのかもしれませんが」

「……なるほど。丁度運動して小腹が空いていたから、好都合だな」
「落ち着いて下さい」

冗談だよ、と広畠。鬼の死骸があった辺りに目を向ける。既に研究所を名乗る集団が持って帰った後だった。今はへこんだアスファル

トにおびただしい失血の跡が残るばかり。

「何となく、彼らには隠していたんですが……　まずかったですか？」

「……なんで隠したりしたんだ？」

責めるような声音ではなかった。彼は研究所の連中を快く思っていない。彼らの利益を図ろうなどという気持ちはハナからない。

「鬼にも、親と子があるんですよ。親は仕方なく殺しましたが……　ただ子を求めて当てもなく彷徨って、見つからなくてやり場もなく猛り狂っていただけだとしたら、可哀想な話です」
そして言葉通りの顔をした。

「……お前は変なヤツだな」

「そうでしょうか？」

「ああ」

笑った。仁ははじめて広畠の穏やかな笑顔を見たような気がした。そして手を差し出した。

「お前とはもう少し一緒に仕事をしたかったよ」

仁はクシャクシャになった封筒を、上着のポケットから引っ張り出した。それを広畠は両手で受け取った。

「……僕もです」

だけど、最後にほんの少し、心を通わせることが出来たのかもしれない。

「この卵どうしましょうか？」

「退職金代わりだ。好きにすると良い」

トラックへと足を向ける広畠の背がやけに小さく見えた。

第五章 第百六十四話：鬼のこと

仁が帰宅すると、やはり奈々華は既に起床していた。柔らかい笑顔で迎える途中、仁の胸にあるものに目を止めて、表情を固めた。

「どうしたの、それ？ どこから盗んできたの？」

「鬼の卵だよ。盗んできたわけじゃない。回収班の目を誤魔化して持って帰ってきただけだ」

奈々華は事情が飲み込めない。奇妙な数式に出会ったように、顔を難しくしている。

「それを盗んだって言うんじゃないの？ 大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。仕事は辞めてきたから」

こういうことはサラリと言うのが肝要だと、仁は常日頃思っている。

「……え？」

「だから、仕事は辞めたからもう大丈夫だよ。餞別に頂いてきたのさ」

「大丈夫じゃないじゃない！ ばれたらクビ……」

「そういうことだ。引責辞任をさせられる前に、先手を打って辞めるのがプロだ」

仁は奈々華に真相を話すつもりはないようだった。奈々華は何を言っているのか、ただ憐憫にも近い感情を目に宿して兄を見つめている。

「さあ。腹が減ってるんだ。オムライスにでもしてくれ」

「落ち着いて」

冷静な声が返ってきた。

「それにしても、鬼が卵で孵るなんて知らなかったな」

奈々華と仁は、朝食を終え、テーブルの上にその大きな卵を挟んで話している。仁は緩慢な動作で村雲と静を振り返る。相変わらず壁に立てかけられたままだ。

「……我等は母も父もない」

村雲の声には少しの寂寞があった。

「どうということ？」

奈々華も最近はこの刀たちと違和感なく接することが出来るようになっていた。慣れって怖いね、といつか苦笑していた。

「我等は生前の記憶がない。恐らくは最悪の悪鬼ではあったのだろうが、何かに懲罰されて刀に宿ることを余儀なくされております」「それを死って捉えるのか？」

「鬼の姿でいられるのは、ほんの数刻。死と呼ばずして何と？」

気位の高さが窺い知れる。本来なら誰の支配に下ることも厭い、己が忌々しき身と、それを強いた世界への憎悪を糧に生きるのが刀鬼。仁だからこそ、彼らは従っているのだ。

「……話しが逸れてるっすよ。あいつらは下等な鬼。まあ小鬼しょうぎつて我々は蔑称をつけているんすが、女の鬼は、卵を産み、男の鬼がそれを孵化させ、育てる」
静が珍しく口を開いた。

「あの大きさに小鬼かよ」

体の大きさの話をしているのではないことはわかっていたが、どうにも軽口を挟まずにはいられなかった。

「まあ…… 人の手で壊すことは容易ではありませんまい。何かの縁、孵して育ててみては？」

村雲が締めくくった。

「どうやって孵すんだ？」

仁は確かに因縁めいたものを感じていた。恐らくはフロイラインの策略で仁の上に卵が落ちてきたのだろう。あの時周囲に妖しい気配は感じられなかったが、もしかして木室か、平内が居たのかも知れない。そして成り行きとは言え、卵を鬼から奪い取る形となった。責任も感じないでもない。仁はこの卵を育てることに決めていた。

「なに…… 鳥と変わりませぬ。暖めればよろしい」

幻創痛が終わり、ようやく一人の寢床が帰ってきた矢先、新たな同

衾相手が見つかった。

第五章 第百六十五話…魔術史への問題提起

年が明け、学園が再開された。

仁も奈々華も想像以上の張り詰めた空気に、教室内で息苦しささえ覚えた。今日は一限から五限までみっちり学園長自ら教鞭を執っている。そしてその愛の鞭は当然にクラス一の落伍者を叩くことに余念がない。

「一学期で教えた内容だろう？ もう覚えていないのか？」

「お前こそ俺が二学期の終わりから入ったってもう覚えていないのか？」

そして仁も負けていない。自分の不真面目を棚に上げて屁理屈をこねくり回すことにおいて彼の右に出る者はいない。そんな二人のやり取りはお構いなし、クラスメイト達は黒板の字を書き写すことにだけ神経を費やしていた。

「いいか？ 決して我々に魔法を生成する力があるわけではない。全ては精霊の力を借りているのだ。それを忘れてしまったがために起きたのが、約五十年前の精霊狩事件だ。精霊の従順さを逆手に取り、次々と貴重な精霊を呼び出してはその命を奪い、地上の動物にない毛皮や牙、爪などを売りさばく連中とそれを平然と買っていた我々一般人にも責任がある」

「俺関係ねえし」

「君がつけているミサンガだって、精霊の毛皮だろう？ 兎に角、その悲しい風潮は一体の強力な精霊の出現によって終止符を打たれる」

「へえ。すごい」

まるたおに

「丸太鬼と我々は呼んでいる。突如現れたそれは世界中で人を虐殺していった。丁度我々が精霊にしたように」

何百もの命が奪われた。神出鬼没、突如現れたそれに一つの街の間が、一夜にして皆殺しにされたというエピソードもある。そして

丸太鬼は、当時世界中の名のある魔術師が百人近く集結し、アメリカの地で殺害された。魔術史の教科書に載っている内容だ。今のやりとりで、仁が教科書すらろくに目を通していないことが明白となっている。

「……鬼か」

「聞いているのか？」

「ああ、バツチリちゃっかり聞いているさ」

瞬発力だけで嘘をつく男だと、坂城も十分に知っているが、溜息を一つついただけで、深くは追求せず続けた。

「丸太鬼の出現と暴虐によって、人々は考えを改めた」

それが良心からくるものではなく、第二、第三の丸太鬼の出現を恐れたからだとは容易に察せる。人は金が絡むとき、良心や良識で動きを止めたりはしない。

「だが、喉下過ぎれば…… 現在でも精霊蔑視の傾向は根強い」

魔術師は精霊との交流から力を得るのに、それでも心の底では付き従う下僕のように考えている。いやらしくて、人間らしい。仁はミルフィリアが敵の目を欺くために、手持ちの精霊を一体仁に斬らせたことを思い出した。

「道具…… か」

何の先入観もない仁は、これまで村雲や静を対等なものとして見てきた。だが、道具として使っている以上、人のことは言えないのかもしれない。小鬼を手にかけた。子を探してただけの精霊。知らなかったとは言え、精霊側からすれば、精霊の命を無下に行っている連中と何ら変わらないのかもしれない。

「おい、聞いているのか？」

「ああ、きつちりがつつり聞いている」

思案顔の仁に何を言っても無駄と知ったのか、坂城は授業を再開した。

第五章 第百六十六話：一人の時間

「坂城」

授業を終えて、自室へと階段を上る途中を呼び止めた。肩甲骨の辺りまで伸びた淡い栗色の髪が揺れて、仁を振り返った。丁度上から見下ろす格好になっている。

「仁…… な、なんだ？」

下りてくる。それを仁は手を振って制した。そのジャスチャーを理解していないからか、それとも近くで話したいからか、坂城はなおも足を下の段へ動かす。

「下りてこなくていいよ。今からお前の部屋にお邪魔するつもりなんだ」

「え？」

突然の言葉に坂城は階段を踏み外しそうになる。軽いタップダンスを踊るようにして体勢を整える学園の最高責任者。仁は苦笑しながら一度ぺろりと下唇を舐めた。

「実は…… 鍵を貸して欲しい」

相も変わらず埃とカビの匂いが充満した場所だった。おまけに面積に対して照明が足りなくて、全体的に薄暗い。人を拒むような雰囲気はしかし、ある種の神秘的な静謐をたたえているようで、人によつては趣があると感じるのかもしれない。仁は学園の地下、膨大な蔵書の棚の間を縫っていた。坂城の曾祖父が私財を叩いてそのほとんどを集めたそうだが、この人が少し変わった人物で、蒐集自体に喜びを見出す性質だったらしく、手に入れた後は本棚に詰め込むだけという乱雑ぶりで、坂城にもどこに何があるのかわからないらしい。ちなみにその所管が余りに貴重極まりないものばかりであるため、一般の生徒が立ち入ることは本来なら許されないのだが、事情

を聞いた坂城は仁に金色の鍵を渡した。

「……見つからないな。どこだ？」

仁が探しているのは黒の精霊に関する書物。坂城には鬼の卵を拾った経緯と、それを育てるつもりだということを話した。彼女は何となく察したのか、仁の辞職についてはあまり深く追求しなかった。鍵を受け取る段にかけた、「助かるよ」と言う言葉にはそういった配慮への感謝も込んでいた。

仁は目的の本を探す間、当て所もなく思考の海も彷徨っていた。一人だった。

思えばこっちに来てから一人になることはなかった。奈々華が部屋に居て、坂城やミルフィリアにちよっかいをかけられて、村雲や静は精霊としての本分と、誰かと何かと一緒だった。最初は久しぶりに人と仁を以って接する生活に戸惑った。一人になりたくもなかった。だけど……

今は、嫌いじゃない。

奈々華と過ごす日々は少しむず痒くて心地良い。厭世を続けていればあの娘と再び家族になることもなかった。村雲や静と話すのは、時に喧嘩になりそうになるけど、面白い。坂城もミルフィリアも良くしてくれる。

失われた人の顔が浮かんだ。近藤さん、祐君、ミルフィリアの両親、エリシア、柿木。皆殺した。失いたくない人もいた。守れなかった。今でも時折夢に見る。起きたとき、涙を流していることもある。怖くなる。悲しくなる。忘れていないのだと、安心する。消えてしまいたくなる俺を支えているのは、守りきれた人たち。奈々華。

だから……

今は、好きじゃない。

近藤さんの生き様を思うと恥ずかしくて叫びだしたくなる。祐君の

最期を思い出すと、どうしてまだ自分だけのうのと生きているのだと憤りを覚える。抗いがたい自傷の衝動が湧き上がって胸が焼けるように熱くなる。そして妹に縋って、周囲に甘えて、醜く生きている。

「……これがいいか」

散漫な意識下でも、目はキッチンと黒の背表紙を認識した。「中谷慎二に見る黒の精霊についての考察」とある。仁は深く息を吐いて、ついでに本の上に溜まった埃を落とした。

第五章 第百六十七話：女の子の秘密

調べる項目は三つあって、一つは奈々華に知られなくて、一つは誰にも知られなくなかった。今日の授業、丸太鬼。ヒメネスを襲ったスターダストデビル。卵の育成方法の確認は一番重要度は低かった。方便にも近い。だからそれに納得して鍵を渡してくれた坂城には少し心苦しい。

スターダストデビル。思ったとおり黒の精霊で、中谷が初めて召還した精霊として世間、もっとも魔術師の間の話だが、には認知されている。その時中谷は僅か十歳そこそこだったらしい。精霊としては下級にあたり、それほど力はない。呪術に長けるそうだ。小鬼の卵。該当記述なし。

そこまで調べ終えて、仁は席を立ち上がる。いつか奈々華と坂城と三人でやってきたときと同じテーブルの同じ椅子に座っていた。あの時からまた埃を溜めた座面は、仁の黒い綿パンツを、お尻の部分だけ白くしていた。再び縦列の本棚に戻っていく。

「しかしよくこんだけ書いたし、こんだけ集めたもんだ」

「人は常に空想を忘れません」

仁の独り言に、右手の本棚の裏から反応が返ってきた。高くも低くもない、聞き取りやすい女声。コツコツと靴を踏み鳴らす音が、後方に小さくなっていく。棚の切れ目、仁がさっきまで座っていたテーブルの方へ。

「しかし人はそれを空想だと正しく、否応なしに理解しています」

「……」

「だけど、もしその空想が現実のものとなったら……」

ミルフィリアが言っているのは、数百年前の魔術師の顕現。空想が真になった瞬間。見たこともない生物を使役して、火や水や風や雷

を操る。誰もが一度は夢見て、常に諦めていたこと。

「人はその空想に心奪われる」

仁は体ごと後ろを振り返る。ミルフィリアの宝石のような瞳が仁を捉えていた。

「その結果がこの蔵書か……」

「こんなもののほんの一握りに過ぎません」

なおも靴音を広い空間に反響させて、仁に歩み寄る。クォーターともなると、日本らしく顔の見える程度の距離をとって話す。

「ストーキングはあまりいい趣味とは言えないな」

「遊庵から聞いてきました。珍しく殊勝なことをしているなと思えば……」

一度言葉を切って、後ろを首だけ振り返る。仁がピックアップした黒い本がテーブルの上に開いたまま置かれている。仁は溜息を吐きながら、首を左右に小さく振った。

「……実は卵の育成方法について調べている」

この期に及んで方便を重ねるのは、最後の抵抗と言ってもいい。

「それだけでもないのでしょうか？」

仁の目の前の少女はとても鋭い。時々、仁はミルフィリアが怖くなる。

「丸太鬼」

短く。苦々しい顔をしている。

「丸太鬼？」

「……なんでか気になるんだ」

それだけを告げて、再び背表紙の陳列に目を戻す。仁の斜め上の蛍光灯が、その寿命が近いのか、カチカチと明滅している。黒い服を好む仁もまた、一瞬間に溶け込んだり、一瞬光に照らされたりしている。

「挿絵を見たい」

「……」

「口外しないで欲しい」

「……」

恐らく彼女が彼から聞き出したい情報は余すことなく伝えたはずだ。それを受けて、放たれた言葉は仁の予想にないものだった。

「それならこの棚ではないです。向こう」

仁が驚いて振り向いたときには、ミルフィリアはもう背を向けていた。案内をしてくれるらしい。

「どうしてお前がそんなこと知ってるんだ？」

「……女の子の秘密を暴こうなんて無粋ですね」

「今はお前の軽口に付き合う気はない」

去り行く少女を早足で追いかける男の図は、傍目には色っぽい想像を煽るだろうか。それとも暴漢に見えるだろうか。仁にとってはどちらでも構わない。坂城すら網羅できていない蔵書の間所を、最近学園にやって来たミルフィリアが把握しているのは腑に落ちない。肩に手を当てる乱暴に振り向かせると、ミルフィリアは片目を瞑って、口元だけ笑っていた。随分芝居がかった仕草も、彼女がやると嫌味にも気障にもならなかった。絵になって様になった。

「私は貴方と違って読書家なんですよ？」

第五章 第百六十八話…遠慮

「坂城は一体どうしたんだ？」

前を歩くミルフィリアとの間には、気まずい雰囲気。仁はいつそ話題を変えることにしたらしい。でもそれは全く意味のない世間話というでもない。先程会った時、仁は坂城に木室への対策についての話をふった。仁が幻創痛に苛まれている間、ろくに話し合うことが出来なかったからだ。しかし防衛の観点からいつまでも野放しというわけにもいかず……

「木室の居場所については何か掴んでいるのか？」

途端、坂城の顔色が変わった。仁はその変化がどういう感情からくるものなのか、察することができなかった。

「……もう呼び捨てなんだな」

未練。見て取れたのはそれだけ。黒檀の机の上に手を組んだまま、微動だにしなくなった。丁度対面に座る仁の腹の辺りに目の焦点を当てている。仁は黒ずくめの服装をソファーに溶け込ませたまま、次の言葉を待つことにした。

「カエデには何か事情があるはずだ。じゃなきゃ……」

「私を裏切るはずはない？」

言葉を切った坂城を急かさないう、優しい声になっていた。

「……そうだ」

「だけどだな……」

「裏切るはずがないんだ。彼女は私が一番よく知っている。口にはしないが、私のことを娘か孫のように思っていてくれた。私も祖母のように思っていた」

坂城は口早にそれだけを言うと、再び動かない彫像のようになった。祖父母の顔を知らない彼女にとって、木室はまさしく祖母なのかも

しれない。祐を目の前で奪った木室に対して、ただならぬ感情を抱いているであろう仁を気遣えない。彼女にとっては、今でも木室は祖母なのだ。

「そうかもしれないな。事情があるんだろうな」

半ば気迫負けしたように仁は鼻の頭を触りながら、そう言って宥めた。

「今のアイツの様子だと、現実的な話し合いが出来ないぜ？」

事情があろうが、なかろうが、木室が学園に翻意を見せているのは事実で、現に学園の生徒を一人殺めているのだ。対策は必然だ。

「……空想を見ているのですよ」

「え？」

消え入る声は、二人しかいない空間であっても、その二人の足音に掻き消された。

「何でもありません。社には私のほうから秘密裏に探らせています。まあ……結果は芳しくないのですが」

「そうか。使えないハゲだな」

「全く。遊庵は少しそつとしておいて下さい。あまりにもショックが大きいです。今は現実を受け入れる準備をしているんです、きつと」

ミルフィリアの足が止まり、くると仁を振り返った。棚と棚の間の通路の入り口に立っている。入り口からは随分遠い場所で、ミルフィリアの案内がなければ探し出すのに苦労しただろう。

「ありがとう。助かったよ」

「いえ。本のある場所まで行きましょう」

そう言うと、仁の返事も待たずに通路を歩きだす。これまでもこれから迷いのない足取り。

「本当にどうして君は……」

「何ですか？」

「いや…… そんなに親切だったか？」

水掛け論になるのは目に見えているし、また彼女と気まずい雰囲気になるよりは、軽口を叩いているほうが性に合っているのも事実。

「どういう意味ですか？」

口を真横に結んで不機嫌そうな顔を作るが、彼女が怒っていないことは明白だ。

映っているのは、画素は粗いがカラーの写真。赤い体躯。実物を見ているかのようにありありと怒気を感じるその双眸。野生の肉食動物とはまた違った鋭さ。彼らは生きるために全ての他者を信じず、牙を剥き、目を睜るが、写真の丸太鬼のそれは、人に近い。憎悪の炎を宿して狂う、人に。

「……どうかしましたか？」

ミルフィリアが横から覗き込んだ。紙面と仁を目だけ動かして見比べている。それすらも認識しているのかわからないほど、仁は写真に食い入っていた。

「いや、何でもない……」

そのまま一分近く経って、それだけを呟いた。

第五章 第百六十九話…静

「いいんすか？ こんなコソコソ抜け出すような真似して」

時刻は深夜三時を少し過ぎた頃だった。いつものように中庭。風もなく虫の鳴かない冬の夜は時間が止まったような錯覚を覚える。葉を落とした草木の呼気は感じられず、丑三つの眠りより、永久の眠りについたようだ。だがそれは違う。暗い闇の中であって、春の日差しがやがて必ず訪れることを知っている。

「仕方ない。静と二人で話したかったから」

奈々華が眠りについたのを確認して、仁は静だけを片手に部屋を抜け出した。

「村雲君もダメなんすか？」

からかうような口調に、仁はしかめっ面。細い目をもっと細めて腰に帯同している人生の大先輩を見つめた。

「……丸太鬼っすか？」

「お前には隠し事は出来ないな。飄々としていて本質を確実に見極めている」

「お褒めに与り光栄っす。だけど…… それは同属嫌悪っすよ」

仁は油の匂いをかすかに嗅ぎながら、ライターの炎に口元の葉を近づける。やはり全く風はなく、まるで夜の海を遠く照らす灯台の灯のように、煌々と燃えていた。しかしカチンと蓋を閉めると、役目を終えてマヤカシのように消えた。

「俺には鬼の顔を見分けることは出来ない。動物や外国人の顔をはつきり見分けられないのと同じように」

「あつしらもアンタ等人間の顔は判別が難しい。所詮違う生き物っすから」

「違う生き物……か」

「旦那はあつしらに近いけど、鬼じゃない。あつしや村雲君は旦那に近いけど、人じゃない」

「それは考え方が？」

「そっす」

「どこらへんが？」

「義憤よりも私怨に燃える。仲間には優しいけれど、他者には全く関心を示さない」

「……」

吸うことも忘れられたタバコの先から、長くなった灰がポトリと地面に落ちた。

「今から数十年前、面白い鬼の男がいました。鬼は普通同じ種族、即ち鬼としか馴れ合わない。小鬼なら小鬼。我々の生前、王鬼おうきなら王鬼」

「……お前、生前の記憶はないって言ってたろ？」

「話しの腰を折るのは良くない癖だよ？ 坊や」

普段は本当に必要なことしか喋らない老獪な刀も、その反動か、一度喋りだすと自分の話の腰を折られるのはあまり好かない。

「……」

「まあいいでしょう。いかにあっしが馬齢を重ねていても、それくらいは気付くもんっす」

「そうなのか」

「話を戻すっすよ？ 死後の刀鬼は刀鬼と。丁度あっしと村雲君のように」

威厳のある喋り方をする村雲が後輩で、若者のような喋り方をする静が先輩で、彼らの掛け合いは、滅多に見られないけれど、見ていて面白いものがある。

「だけどその鬼の男は違う種族とも仲良くした。いやもっと……違う色の精霊とも仲良くした。どんんどん友達を作って、どんどん仲間を増やした。時には裏切られ傷つけられることもあったけど、それでも彼は自分の道を曲げなかった。それが幸せであり財産だと信じて疑わなかった。そしてまた、彼の下に集った仲間もその優しさに惹かれて満ち足りた日々を送っていた」

「……」

「そんな日々は突如終わった。精霊狩事件。あのお嬢さんの説明に詳しいでしょう」

「……その仲間達がこっちの世界に召還された」

相槌も打たず、静は続けた。

「そして仲間を奪われたその鬼の男は立ち上がった。丸太鬼事件。仲間を失う苦しみは旦那も詳しいでしょう？」

嫌味は含まれていなかった。仁はコクンと首を動かした。

「精霊には…… 本能的に自分と本質的に近い人間の呼びかけに呼応してしまう習性があります。あつしが旦那のような若造に付き従っているのはそういう部分もあるっす」

「容赦ないな。少し寂しいぞ？」

「そういう部分もと言ったでしょう？ 嫌いなら一緒に居ないっすよ。いくら本質的には近いとは言っても…… さつき同属嫌悪という言葉を出したでしょう？ 人と人の付き合いとそこは同じ。うまくいかない場合もあるんすよ。実際に顔をつき合わせて語らって、苦楽の時間を共有して初めてウマが合うか判断できるんす」

こればかりは長く生きていても、とこぼす。好き合う者同士でも、例えば家族でも仲違いしたりする。奈々華と仁のように。経験や知識を積み重ねてもままならないのが心。

「悪意を持って呼び出していたなら悟ることはできなかったのか？」

「……麻痺してたんすよ。精霊もまた生き物であるということを忘れてしまったんすよ。風潮や教育。きつと携わった人間全てが悪い人間というわけでもなかった」

そんな馬鹿な、と感情的に叫びかけた仁は、すんで留まった。動物の皮を着て、動物の肉を食べて生きている仁に、何かの命を奪って糧にしているという感覚が切実にあるかと言われれば、自信を持って頷けない。仁は黙って三角座りの靴の間にタバコを落として、右足で踏み消した。

第五章 第百七十話：海

「丸太鬼は、ただその一本気な性根の良さだけで、あらゆる者と仲良くしようとした。旦那の見え透いたおためごかしとはまた一味違う」

「これまた手厳しい」

眉間の辺りに手を当てて下唇を突き出す。ふざけたような態度だが、その鋭い言葉はキチンと頭で理解している。他人の意見を聞き入れ、反映すべきか否か一隻眼^{いっせきがん}を以って判断する。そしてまたそれを養っていく。

「だから人を襲うようなことも軽蔑するようなことも、本来はない？」

究極の博愛主義者とも言える。罪滅ぼしの幻影に満足を見出す仁の卑しさとは似て非なる。

「そう、本来は」

「だけど…… 仲間を理不尽に奪われた憎しみに身を委ねた？」

「悲しい話しだと思わないっすか？ 彼はただ仲間達といつまでも面白おかしく過ごしたかっただけで、人さえも受け入れようと考えていたのに」

「……ああ」

「その裏表ない、海のような穏やかな優しさが、丸々憎悪に変わったんすね」

風は未曾有の大時化へと。受け入れられない苦しみ。跳ね除けられる悲しみ。仁の場合は奈々華に理があったけれど、丸太鬼の場合は彼に全く非はない。その気持ちを察するといったたまれない。

「やっぱりそうなのか」

突然曖昧な言葉を吐いた仁であったが、静なら何を指しているのかわかるという信頼が見て取れる一言だった。

「生前の記憶は当然ないっすけどね。それでもどこか生真面目で人

の良い所は消えてないっすね」

カラカラと快活に笑う静は、心から嬉しそうだった。こんな彼を仁は数えるほどしか見たことがない。底意なんて一つもない。親愛だけが溢れている。

仁は常々思う。長く生きるにつれ、大人になるにつれ、一つの物事に対して多角的な視点を持ってしまいうから、それに対して複数の感情が湧くのが道理だと。だから本当に珍しいのだ。仁の何十、何百倍も長く生きている彼が一つの感情だけで心を満たすのは。そして尊いのだ。

「それにしても村雲君を連れてこないというのは素晴らしい判断っすね」

普通の人間からすれば、友人の話をするのに当人を連れて来ないのは不自然な話かもしれない。陰口を叩くために集まっているわけでもなく、どうでもいい噂話をするわけでもなく、いわば刀鬼としての出自を話しているのだ。友であればこそ、本人にも知らせようとするのが、いや真っ先に知らせようとするのが自然な流れだろう。

「ううん。何となくね」

そう言って曖昧に笑う仁。殊更感心しているのは静。

「何となくでそういった判断を過たないのだから、ある種才能と言ってもいいかもしれないっすね」

「今度はうってかわって甘口だな？」

両者、静は視覚的には見えないのだが、笑い合う。そして二人ほぼ同時にそれを止めた。

「やっぱりマズイのか？」

「あつしのような年寄りならまだしも、五十年は鬼からすればあまりに短い」

「憎しみを拭いきれていない？ フラッシュバックする？」

静はええ、と短く切っておいて。

「最期は自身まで殺されているわけで…… 以前よりも人に対する

憎しみは強くなっているもおかしくないでしょうね」

「そういえば、封印されてるって言ってなかったか？」

殺されたというのは一種の比喩表現。刀に封印されている鬼を刀鬼と言うはずではなかったか、仁はそう言っている。懲りずに水を差す仁に呆れたような間を取ったが、静は苦言はやめて質問に答えた。「そう簡単に殺されてたまりますか。仮にも最高位の鬼の一族ですよ？ 人の性っすね。殺したと発表したほうが民衆のウケもいいでしょう？」

確かに、封印という言葉では虐殺に怯える人々を安心させるのに足りない。同時に呪縛が解ける可能性も孕んだ言葉だ。

「実際に解けるわけか？」

「ええ。その真の名を教えてしまえば。まあそれだけじゃあ不完全で、特定の条件も要るわけっす」

その条件についてはあまり語りたくない雰囲気だった。途方もない時間を生きた彼には、もしかして嫌な思い出があるのかもしれない。突っ込むほど仁も野暮ではない。

「とにかく秘密にしておけばいいんだな？」

なるだけ能天気な響きを残した。そういった気遣いも静に胸のすくような心地良さを与える。ええ、とだけ返ってきた。

第五章 第七十一話…環境

よう、と仁が碎けた挨拶をかけると、少女は声だけで誰だかわかったらしく、振り向いたときには穏やかな微笑を浮かべていた。学園の廊下、冬季休暇の静けさが嘘のように生徒達で溢れている。その中でも染髪している人間は仁が知っている限り一人しかいない。

「久しぶりね。元気してた？」

相変わらず化粧は濃いのが、悪い人間ではない。

「まあね……」

歯切れが悪いのは、世間一般に言う元気からは遠い状態にあったから。体に異変はなかったわけだが、祐の死、幻創痛、木室の裏切り……

「いつ帰って来たんだ？」

行方もまた休暇を利用して、実家に帰省すると言っていた。

「年明けよ。ぎりぎりまで母さんのところに居たわ」

「へえ」

母親のことにしか言及しないことに、仁は気付いていた。

「ここに居ても楽しくはないからね。将来のためにいるだけ」

「……ふうん」

「自分から話しかけといてさっきから覇気がないわね？ 本当は何かあったんじゃない？」

「君は…… お父さんが嫌いなのか？」

「……」

大人げない。仁の頭にそんな単語がぼつりと浮かんだ。

「いや…… なんでもない。忘れてくれ」

「父は死んだわ。私が小学生の時に」

思い直したときには、遅くて、一度口から出た言葉は消えることはなくて、行方が目を伏せて言葉を紡いでいるのは、仁のせいだった。高等部の生徒が数人連れ立って教室を移動するために二人の近くに

やってくる。問題児二人と目を合わせないようにして足早に横を抜けていく。

「父は嫌いよ。母さんを残して勝手に死んで……」

「……」

僕を残して勝手に死んだ。祐もまたその虚しさに苛まれた。それでも父を愛した彼と、父を憎むことにした行方は重ならない。それでもそこまでは育ててくれたんだろう？ それでも親なんだろう？ そんな言葉を軽々に吐けるのは他人であって、吐くべきでもないのは他人だった。仁とて金銭面以外は何一つ親らしいことをしない父を好いてはいない。

「自分の信念や情熱を曲げない人だった。そのせいで危ないところに首を突っ込んで死んだ」

「……」

「だけどあの人やるべきは妻子を守ることでしょう？ それを果たさないで、残された母さんにだけ負わせて。だから私は……」嫌われても浮いてもこの学園に留まっている。行方が最初に、同様な立場で弱音を吐いていた仁に感情的になったのは許せなかったからだろう。もしかすると取材はただの口実だったのかもしれない。同じように疎外される者として何かしら助力を考えたのかもしれない。

「行方……」

「……つまらないことを話したわね」

静かに仁は首を横に振った。

「俺の父親は存命だけど、金だけをどこから送ってくるだけでも何年も会っていない。きっと俺が学校を卒業する頃にはその仕送りもなくなるんだろうな。今どこにいるのかもわからない。足長おじさんより悪い」

「……アンタもお父さんが嫌い？」

「感謝はしているさ。最低限のことだけはしているって思ってる」

「模範解答ね」

「そうだね」

母親の居ない仁にとって、必要なのは金だけではなく片親としての愛情だった。

「少しおかしいんだ。俺は人として何かが欠けている」

それを父親のせいだけにするのはいささか性急な責任転嫁。祐、仁、行方。一緒くたにして考えるのは乱暴なのだろうけど、皆一様に周囲との協調に問題を抱き、皆一様に内に秘めた優しさをストレートに表現できない。それが父に対する不満からくるものなのかはやはりわからない。祐は今となってはわからないけど、少なくとも二人は全くの無関係だとは思っていないらなかった。

「まあ…… また部室にでも遊びにきなさいな。お茶くらいは出すわよ」

始業のベルが鳴り、それだけを残して行方は仁に背を向けて去って行った。

第五章 第一百七十二話：寝ぼけ眼の真実

「でもあの子のお父さんはジャーナリストだったんだってさ」

色気のあるピロートークとは成りようもない。一つの枕を仲良く分け合う兄妹は密着でなく、丁度平行線のようだ。二人の体の間には卵がある。まだ孵らない。元々自堕落な生活を送る仁ではあったが、最近の特によく昼寝をする。卵を温めるという命題。奈々華も律儀に付き合う。最初のうちは何とか追い出そうとしていた仁だったが、「二人であつたためたほうが効率がいい」というおかしい反論を真に受けたわけではなく、何度言い聞かせてもまるで聞く耳を持たない妹に根負けした。

「本当は…… 心の底ではお父さんが好きなのかもしれないね」

行方の話。あお向いたまま目の焦点をぼかしている。下段のベッドから天を仰ぎ見ても、その先には木目の板があるだけだ。

「ふうん」

兄が女性の話をする、奈々華は決まってつまらなさそうに聞く。話を変えろと、暗に指示している。

「坂城はどうなるんだろう？ ミリーがケアしているみたいだけど」

「……」

変えた先も悪い。だけど仁は悪くない。

「あの子もまた凄く心が弱いのかも知れないね。でも……」

奈々華には全てを話している。男として兄として強がっていられるほど、仁は大人でも子供でもない。だけど、その先は言いよんだ。「大切な人に裏切られるのは辛いよね」きっとそんな言葉を口にしたから。

「お兄ちゃんの友達って女の人ばかりだね」

「……」

仁が一瞬苦しげな顔をした。そのまま黙りこむ。その沈黙の間に、奈々華は自身の失言に気付いていた。

「男の友達は何死んでしまった」

「……ごめん。ちょっと考えが足りなかった」
精確でない。殺した。

仁が目を覚ましたのは、携帯電話が小刻みに揺れる音のせいだった。テーブルの上をガタガタと小さく滑っていく。起き上がりうとして、仁は引き戻された。シャツの袖を奈々華が掴んでいる。虚ろな瞳はそれでも仁を捉えていた。

「どこ行くの？」

「どこも行きやしないよ」

「どっか行っちゃうの？」

話しが通じていない。どうも寝ぼけているようだ。仁と同じ理由で起きたわけではないようだ。仁が優しく頬を撫でると、再び安心したのか、目を閉じて寝息を立て始めた。

電話の相手は痺れを切らしたのか、携帯電話の振動は止まっていた。大した用でもないのかもしれない。仁の携帯電話の番号を知っている人間は学園内に留まるので、もし急ぎの用なら押しかけてくるだろう。

「まあ…… 後で折り返せばいいか」

というのが仁の結論。また起き上がった気配を感じて、奈々華が目醒まさないと限らない。

「そうだよ。奈々も寂しかったんだもんね？」

奈々華の睫毛の下、小さく光るものが見えた。

彼女はとても強い。そう思い込んでいたのかもしれない。俺に余裕がなかったのかもしれない。彼女だって不安な日々を、寂しい日々を送っていたと告白したではないか。ずっと共にあったかったと慟哭にも似た叫びを聞いたではないか。現に一度互いに離れたではないか。

小さな子供のように、俺を求めている。それは再び俺に安らぎと居

場所を与えてくれている。そんなこの子に一体何を返せているんだろう。何もしてやれていないから、泣いているんじゃないのか。また俺が居なくなるのではないかという妄想を、拭いきれていないのではないか。普段は俺を支えることにばかり気を揉んで、本当は怖いのではないだろうか。無意識と意識の狭間に見せたあの儚い姿は……

普通の家族ならきつとそこまでの依存はありえないのだろう。だけど、この子には俺しかない。父は形骸、母は死去。俺にもこの子しかない。父は形骸、母は顔も知らない。

仁は携帯電話を取りに向かうことはなく、ただ奈々華の隣でその寝顔を見つめていた。だから仁が、携帯電話の着信は公衆電話からのものだったと気付くのは、奈々華が目を醒まして、そのときには先の自分の行動をやはり把握していなかった、夕食の準備に慌てて取り掛かる頃だった。

第五章 第百七十三話…謝意ボーイ

携帯電話をパタンと閉じると、仁はそれを乱暴にベッドへ放り投げた。そしてそのまま何の気なしに、夕食を終えて食器を洗う奈々華の後姿を見る。やはり彼女お気に入り熊の刺繍が入ったエプロンをつけて鼻歌を歌いながら皿を撫で回している。彼女が動物の中で特に熊を気に入っているのは、とある日、まだ奈々華がランドセルを背負っていた頃、仁が彼女のシャツにプリントされた熊を見て「可愛い」と褒めたことに起因する。スカートの下からは少し細めの足が伸びている。

「どうしたの？」

奈々華が視線に気付いたのか、振り返る。

「まだ食べ足りないの？」

夕食は十分な量があった。はは、と小さく笑ってから仁は否定を口にする。

「そうじゃないよ」

「そうなの？」

「そうだよ」

今度はにこりと笑う。その優しい笑顔に奈々華の心が揺れることも知らない。慌てて正面を向きなおした奈々華は皿洗いに戻る。しばらくはキュッキュと小気味のスポンジと皿が擦れあう音が部屋に響くだけだった。

「ねえ……」

「うん？」

一分ほどそんな時間が流れて、仁がまた声をかける。奈々華は今度は振り向かず声だけ返す。

「どっか行きたいところはない？」

奈々華の反応は早かった。ガチャンとシンクに皿が落ちる音。割れてやしないだろうかと仁の視線は一瞬奈々華の体を通り越して洗い

場の方に向いた。

「どっか連れてってくれるの？」

「あ、ああ」

「本当？」

「うん。思えば家族サービスをずっとしてなかったからね。まあこっちじゃ遊び場も知らないし車もないけどね」

そういつて照れ隠しのように苦笑する。

「ついでにお前がよければの……」

「行く！ 行く行く。やったあ、久しぶりのデートだ」

手を拭くことも忘れて、水飛沫を撒き散らしながら仁へと駆け寄る。その動きが機敏で、仁は気圧されて半歩コタツの中を動く。その隙間に奈々華が当然のようにおさまる。

「デートって……」

「どこ行こうか？ 何着て行こうかな。タウン雑誌ってこっちにもあるよね。コンビニで買ってこないとね！ ああ、あとグルメ関係も。ご飯も美味しいところで食べたいよね」

「落ち着いてくれ」

そう言いながらも、仁の口の端も持ち上がっていた。遊びに行こうと誘っただけで、飼い主を見つけた子犬のようにはしゃぎまわる妹はやはり彼からしても可愛いのだろう。

日時は週末、日曜日の午前十時。回る場所は奈々華がインターネッツなどで調べておく、仁は一日費やすほど多くの場所を回る気はなかったのだが、とのこと。ちなみに翌日は中谷精霊魔術学園唯一の考查試験が行われるのだが、二人の話し合いにおいてコンマの一秒も言及されることはなかった。

「アンタにしては殊勝じゃないか」

からかうような口調。アイシアと卵を格闘させながら、コタツの中で温もっている仁の傍までシャルロットがやってくる。バックグラウンドミュージックは奈々華の先程よりも大きな鼻歌。仁が昔薦め

たノリのいいユーロビートだ。

「ああ、まあね。あの子が喜んでくれるのなら兄貴としても嬉しい」
「そういうことを聞いているんじゃないんだけどね…… とういう風の吹き回しだい？」

仁は傍まで来たシャルロットを持ち上げて膝に乗せてその背を撫でる。最初は触られると嫌な顔をした彼女だが、最近は仁に体を撫でられても目を細めることが多い。

「別に意味なんてないさ。強いて言うなら日頃の感謝かな。今も家事を一手に引き受けてくれて…… いつも支えてくれて」

「……なるほどねえ」

にたにたと、本当に猫にしておくのが勿体ないくらいに表情が豊かだ、底意地の悪そうな笑みを浮かべて仁の顔を見上げる。何だよ、と返しかけたとき、ベッドの方からブーブーと現代人の必須アイテムが揺れる音。ちらりと奈々華を窺うようにして見た仁。皿洗いは済んだようで、明日の弁当の仕込みに取り掛かっているらしかった。全寮制の学園にあって混み合う食堂を利用するのは料理が出来ない学生か、出来てもその暇がない若しくはその労を惜しむ学生だけだ。一番最初に該当する仁が人混みにまみれないのも偏に奈々華のおかげだ。

「おやおや。妹をデートに誘ったかと思えば、今度は違う女かい？
もてる男は違うねえ」

猫がわざと大きな声を出すのは意地悪半分、親切半分。しかし奈々華の鼻歌はサビに差し掛かっていて気付いた様子もない。

「運が良かったね。ありゃ完全にトリップしてるよ」

親切のほうは報われず、仁はコタツを脱し、ベッドへ向かう。外部ディスプレイには「坂城遊庵」の名称が浮かんでいた。

第五章 第百七十四話：泣き虫こよし

「俺もテストを控える一学生なんだけど？」

落ち葉が腐り、土へと帰る途上の柔らかい地面を踏みしめながら、仁は先方を歩く姉妹に人のいい笑みを向けた。学園の裏手、精霊との契約に使う大岩を過ぎ、各々の部室が立ち並ぶエリアを過ぎ、辺りは未開の森林となっていた。はぐれ精霊狩りに付き合え、用件はそれだけだった。

「都合のいい時だけ生徒面しないでください」

足は緩めず、首だけ振り返ったミルフィリアは呆れた表情。どうせ何もしていないんでしょう、と凶星を突くことも忘れない。

「そんなことわからないぞ？」　もしかしたら暇で暇で仕方なく少しは勉強しているかもしれないぞ？」

「ないな」

「ありえないですね」

仲良くほぼ同時に。仁は苦笑いを返して、タバコを地面に落として踏み消した。

「それにしても、いきなり呼びつけてヒドインじゃないか？　奈々華を言い聞かせるのに大変だったぞ？」

奈々華を危険な目に遭わせるかもしれない。そんなところに連れて行くわけにはいかない。最終的には理解はしてくれたが、納得はしていなかった。仁を部屋から見送るときの顔は、晴れやかとは対極に位置した。

「……それについてはすまないといか言いようがない」

坂城は時折仁の冗談にも律儀な返事を返す。そして決まってそんなときの周囲の感情は可笑しさと愛しさをないまぜにした何とも言えないもの。仁が「天然泣き虫娘」と折を見てからかうのは決して馬鹿にする意味合いを含んではいなかった。

「まあいいや。それでそんなに凶暴なのか？」

「いえ……　そういうわけではないのですが」

二人の説明では部活動を終えた高等部の三年生が昨日、件の精霊の姿を目撃したとのこと。その生徒はすぐに逃げたので事件にはならなかったのだが、報告だけは坂城に上がってきたということ。仁は歯切れの悪いミルフィリアを急かすでもなく、ただ足を動かすたびに揺れる靴先についた湿った黒い葉を目で追っていた。

「恐らく黒の精霊なのです」

溜息を吐き出すように、観念したように。仁は冷静な顔をしていて、内心の動揺は気取らせない。やがてミルフィリアも坂城も立ち止まり、くるりと彼に向き直った。

「俺を疑っているのか？」

最近おかしいんだ。世界がおかしいんだ。ここも崩れるのか。

「……」

「疑われても仕方ないだろうね。黒の精霊を呼び出せるのは、俺一人だからね」

そしてそれが一番賢いやり方とでも言うように、仁はいつかも吐いた台詞を機械のように無機質な声で再現した。

「否定はしないのですか？」

「否定に何の意味がある？」

仁は悲しいほど知っている。一度湧き上がった猜疑は、害虫のように駆除しても駆除しても、新たに湧いて出てやがては人を飲み込む。「……見くびるな。私達が君を疑うわけがないだろう！」

今まで姉と仁のやり取りを黙って聞いていた坂城が悲鳴のような声を上げた。泣いていた。ぽろぽろとどこまでも透き通った宝石が目尻からこぼれる。絵本の世界の鉱山のように、拭っても拭っても新たに湧いて出てやがては仁を優しくさせる。二歩、三歩、近づいて頭を撫でてやる。それでも泣き止むことを知らない少女を、それでも辛抱強く撫で続ける。水のように簡単に干からびてしまう。水のように勢いをつけてやればどこまでもいつまでも流れ続ける。

「よしよし。いくらでも撫でてやるから泣き止んでくれよ」

「気持ち悪いですね。奈々華さんに頭でも殴られたんじゃないですか？」

「そこまで凶暴じゃねえよ」

そう、いつものように。坂城が場の空気を読まず、真剣に生きていて、仁が宥めて、ミルフィリアがからかって…… 最後には坂城も笑って、つられて二人も笑う。

第五章 第百七十五話…呪翹

「やっぱり不安定なのかね？」

仁は隣を歩くミルフィリアに無駄口を叩く。目撃者の話では部室を出てすぐに出くわしたとのことだったのだが、そこを遙かに通り過ぎて未だはぐれ精霊の気配はなかった。今一行は更に奥へと進んでいる。

「……何がですか？」

「わかってんだろう」

涙を見せてしまった恥ずかしさからか、二人に先んじて前を歩く坂城を顎でしゃくる。

「木室さんが裏切った矢先のことで気持ちの整理もつかない状態で、今度は貴方があんなつれないことを言って傷つけてしまったことを気に病んでいるのですか？」

「オブラートはどうした？」

「女の子を泣かす馬鹿者は粉薬を喉に詰まらせて死んでしまえばいいとは思いませんか？」

「……」

やはり口ではミルフィリアに分がある。仁は降参の合図とばかり後ろ髪に手をやり、周囲の風景に目を移す。中庭と同じように殺風景しかしそれとの相違点として、街とは反対側の斜面が眼下にあって、竹藪が唯一の緑を担当していた。

「泣き虫ではあったけどな……」

「あの子が泣き虫なのは今に始まったことではありません」

「とは言えなあ。うまく言えないけど…… 何か精神の揺れというか」

「空想の崩壊に近いのかも知れないですね」

「え？」

「何でもありません。あの子にはもう少し時間をあげましょう。別

れのための」

論点が絶妙にすり替わっていたが、仁もその意見には賛成のため、坂城の話はそれでお終いとなった。

「お前も平内涼子の仕業だと思うか？」

「何がですか？」

「それはもういいって…… 今回のことだよ」

微苦笑まじりに。無駄口を叩きながらも、両者周囲への警戒も同時に行っていた。鈍色の空に日は弱く、ステレオタイプな冬の午後が下りている。ミルフィリアの艶やかな髪は、その中であって一番星のように静かに輝いていた。

「貴方ではないのでしたら、そうでしょう」

「消去法でしか導けないかな？」

「それに恐らく今回ののは下級精霊。涼子は全部の属性に適合しますが、黒はやはり特殊。それほど強力なものは呼び出せないはずです」
「なるほど」

それも消去法。

「大した力はありません。せいぜい人に悪戯する程度でしょう」

「それでも俺を呼ぶのか」

「用心にこしたことはありません」

「黒の精霊なのに大したことないんだな」

「色はあまり関係ありません。精霊達もまた生態系を築いています。力弱きものも居ないと捕食者が困るでしょう？」

「冷たいな。現実的とも言うけど」

「温かさが要りますか？」

そう言って笑うミルフィリアには、言葉とは裏腹に、周囲に漂う凜とした冷気にそぐわない人懐っこさがあった。

「……来た！」

坂城の緊張を含んだ声。仁もミルフィリアも口を閉じ、先頭に追いつく。半ば二人の前に盾のように飛び出した仁は、当然同色の魔術

師として相手の攻撃が効きにくいであろうという算段の下、目を見開く。敵は宙に浮いていた。小さな体、小さな羽。口はストロー状になっている。丁度クマゼミと蝶を足して二で割ったような格好。それが数を数えるのも面倒な程の群れになっている。仁の視界の先一帯だけがまるで一足早い夜のように黒い幕が下りている。

「昆虫じゃねえか」

その言葉ほどに仁の顔に油断はない。ただの昆虫採集に仁がわざわざ借り出されるはずもない。もつと言えば彼女達が本腰を入れて討伐に向かうこともない。

「呪翅^{しゅし}、操る魔術師がいなければ統率の取れた動きはしてこない。羽虫と何ら変わらない」

坂城の顔も険しい。

「ただ攻撃を食らうと……」

人の言葉がわかるわけもないが、実例を示すかのように数匹が先陣を切って坂城目掛けて翅を動かす。

「メイスン！」

いつか見た水棲トカゲが坂城の足元に顕現する。それと同時に小さく何事か呟く声。坂城の体が光る。暗黙の内に詠唱の最中の警護を受け持つ仁は、静を振り回し呪翅の群れに斬りかかる。しかし仁の武器は一对一の戦いにおいては絶大な威力を誇るが、多対一、しかも体の小さな精霊の群れを相手にするには徹底的に不向きだった。丁度風に舞い散る桜の花びらを全て斬れと言うようなもの。何匹かは斬り伏せたものの、零した数匹が連れ立って坂城の顔や手の甲、地肌が露出する部分に向かって飛翔し、かすめていった。

直後坂城の手の平から発射される洪水。群れの中心を直撃し、仁が斬り伏せたそれらの上に翅を濡らした死骸が重なる。おびただしい数を屠ったが、それでもまだ半分以上が残っている。焦燥を煽るような羽音が耳につく。その音に重ねてミルフィリアが最後方で詠唱を始めた囁き声が聞こえてくる。

「すまん！ 大丈夫か？」

一旦坂城の傍まで後退した仁は目だけ動かして彼女の様子を探る。かすめた部分からは微かに血が滲んでいる。引っ掻き傷のようなそれは、傷痕に似つかわしくない量の出血を伴っていた。

「攻撃されると、血が止まらなくなる呪いも同時にかかる」

苦々しげに話す坂城の言葉に、仁はようやく自分が呼び出された理由を知った。

第五章 第百七十六話：呪いと吸血

風潰しとはこのことか。地面に折り重なる死骸はその数ゆうに千は下らない。起毛した足や亀裂のような線の走った翅、テラテラとした甲殻。それらが無秩序に絡み合い、重なり合っている様はグロテスクの一言に尽きた。確かに手強い相手ではなかった。今すぐに命の危機に晒されるという事態にはなりようもなかった。しかし……

「失血死とかなしないでくれよ？」

虫の墓場から目を切って、仁は後方に控える二人の少女を振り返った。どちらも腕や顔に小さな傷が幾つかある。そこからは確かに傷の程度にしては多目の血が流れているが、失血死は大袈裟で、いつもの軽口だった。しかし今の二人には聞き流せない部類で、当然のように無傷の仁にジト目を向けるのも無理はない。黒の魔術師に黒の精霊の、まして下級精霊と仁では話しにもならない、呪いは効かない。虫たちもそれを本能的に理解していたのだろう。攻撃は女性陣に集中した。

「わかっていたことではあるんですけど、釈然としませんね」

山道に行くのだから、と合点していた二人の露出の少ない格好は実はこれを見越してのことだったらしい。仲良く同じような色合いのジーンズを履き、色違いのジャケットを着ている。

「事前に聞いていたにしても特徴くらいだろう？　よく精霊を特定できたな」

「そうか、君は知らないんだな。高坂家と言えば名家であると同時に精霊研究でも……」

自分のことのように胸を張ってスラスラと講釈を始めた坂城も、途中で喋ってやっと口が過ぎたかと姉の顔を見やる。死んだ家族の話を勝手にされた怒りはそこにはなく、出来の悪い妹に困ったような嬉しいような複雑な表情をしていた。

「それで…… 役立たずの俺を呼んだのは解呪をさせるためだろう

？」

話をふったのは自分なのだから、話を変えるのも自分の役目と思っているのだろうが、少女達の顔には一様に感謝の念が見て取れた。

「ええ。お願いできますか？」

「……どうやるの？」

少年のように小首を傾げてみせる。ミルフィリアは決まり悪そうに仁から視線を外した。外した先にも虫の共同墓地を見つけ、周囲はすっかりそのような様相だった、顔を顰めた。

「わかりませんか？ 貴方が思った通りにすれば出来るはずです。私の父母を解き放ったときも、貴方は直感で方法を理解した……」方法は確立されていない。そもそも先例がない。ミルフィリアの両親のときは、中谷の凶行について触れ、その方法を悟ったが今回は完全に仁の直感に委ねられている。仁は更に首を傾げ、また元に戻して、顎に手を当て、しばらく黙考してぼそりと呟いた。

「何となく毒っぱいから…… 吸い出すとか？」

「す、吸い出す！」

坂城が半歩後ずさる。

「ではやってみてください」

ミルフィリアが半歩前に出る。

「おいおい、正気か？」

仁の戸惑った顔を悠然と見返し、ゆっくりと右手の甲を差し出す。二本平行線のように傷が走っている。そこから今もジクジクと血が流れている。

「貴方に一任すると言ったでしょう？ それに…… 憶測ですがプラシーボのようなものだと思うのです」

「治るって思えば治るってこと？」

「違います。貴方の方です。解けると思えば解けるんじゃないかと」

「ほんとかよ」

「やってみればいいでしょう？」

また一歩仁に歩み寄って手を伸ばす。仁は顎に当てたままだった手

でアゴヒゲをなぞる。弱ったという意味表示。しかしそこで向けられた手から視線を上げ、少し笑む。

「顔が赤いぞ？ ミルフィリア」

耳の先と頬の辺りが確かに赤い。色の白い彼女は少しの紅潮も一目でわかる。

「遊庵。その岩を取ってください」

「わ、悪かった。やるぞ！」

仁は慌ててミルフィリアの手に口づける。単純な口づけとは違った唇の形。血液を吸いだしているようだ。

「ちょ、ちよつといきなり……」

仁が顔を上げる。その直後ミルフィリアの左手が振り下ろされ、右手の甲と重なった。パチンと澄んだ音がして仁は肝を冷やす。あれだけしぶとく流れていた血はその衝撃で飛び散ることもなく……

ミルフィリアが手をどけると、傷口から流れる血は止まっていた。

跡に残るのは引っかき傷。一日、二日で塞がるだろう。解呪の方法がわかった。

第五章 第百七十七話：押しの功罪

「中々ままならないね」

シャルロットの気遣うような声音に、奈々華は力ない笑みを返した。仁がいつも抱く卵を胸に。卵はまだ孵らない。いつもの場所を奪われているシャルロットは奈々華の隣、コタツに下半身だけ潜らせている。

「しょうがないよ。はぐれ精霊と闘うんだもん。私が行ったら邪魔になる」

へえ、と目を細めるシャルロット。卵をテーブルの上に置くと、猫達の反応は素早かった。シャルロットは今しがた出来た空席に。アイシアは、最近は卵で遊ぶことに執心している、テーブルの上に行儀も何もなく飛び乗り、今しがた解放された遊び相手とじゃれ始める。

「今日はいつになく聞きわけがいいじゃないか？」

聞きわけが良くて、出発前に散々渋ったのだから仁の苦労も推し量るに難い。奈々華はフフフと含み笑う。

「だってお兄ちゃんの方から遊びに行こうなんて……」

「まああのものぐさがね」

「今回はそれで許してやらないこともないかな、なんて」
わざと偉ぶった口調でそう言う。

「女二人と行っても？」

ニタリと意地悪く笑うシャルロットは奈々華のからかい方を熟知していた。途端に言葉に詰まる奈々華を見てますます笑みを濃くした。起き上がりコボシのように叩いても戻ってくる卵に、飽きもせずパンチを繰り出すアイシアが鋭く敵意をこめた鳴き声を上げる。

「そこは…… お兄ちゃんを信じるしかない…… かな」

「信じるも何も…… アイツからすれば女を口説こうが何しようがアンタに遠慮する謂れはないんじゃない？」

「それは」

「いくら妹が一人ぼっちになるからって、それで自分の人生までツンドラ状態にする必要もないだろう？ お前も早く彼氏を作れよ、で終わりさ」

「うう」

「古今東西、惚れた方が押すのは当然さね」

からかったかと思えば、それは奈々華の背を押す言葉を導く枕詞。この精霊のそういうところを奈々華もよく気に入っているようだった。

「うん…… そうだよ。お兄ちゃんの腕ならそろそろ終わる頃だし…… 迎えに行こう！」

問題は坂城のほうだった。位置関係で敵の群れにミルフィリアよりも近かった彼女は頬や顎、即ち顔の各部にも傷を負っていた。先程のミルフィリアよりも赤い顔で俯いたままヴェーゼを待つ姿に、仁まで何やら気恥ずかしくなる。

「まずい方法を思いついちゃったな」

ミルフィリアの推論が正しければ要するに気の持ちよう。蛇蝎だかつに見るに、人が忌むものには大抵毒があるというイメージと、呪いとを安直に混同したために吸い出すという奇行を考え付いたが、よく考えれば衛生面から言っても指で血を摘み出すだとか水で洗い流すなどといった策の方がスマートだ。

「……わ、私は別に構わない」

「構わないって言うてもなあ」

流れる血は擬態するよう。上気した頬は朱を通り越して真紅と言ってもいい。顔に意識が集まるほど、更に赤くなり手がつけられなくなっていく。ミルフィリアが二人の傍まで近づいてくる。すっかりいつも通りの澄ました顔は次に吐くであろう言葉に手心が加えられないことを容易に推察させる。

「まだ済んでなかったのですか？ 遊庵は構わないと言っているのですからさっさとやっちゃいなさいな」

「いやでもなあ。ほっぺただぞ？」

「女がいいと言っているのに、頬に口づけも出来ないんですか？ へたれ」

口づけという単語に坂城の顔は本日最高純度の赤を迎える。へたれ呼ばわりされた仁も直情的に不快を滲ませる。「やってやるよ」と強引に坂城の肩に手を置き、顔と顔を近づける。坂城が声にならない声を上げたが、構わず唇を薄く開く。

「それでいいのです。遊庵を憎からず思っているのなら彼女を受け容れてあげなさい」

徐々に顔と顔の距離がゼロへ。触れる。吸い出す。坂城はマネキン人形のように直立して、それとの相違は目がきつく閉じられていることか、ただ仁の息遣いを、唇を、肌で感じている。

第三者の声は突然、夜の帳よりも暗くて、冬の日暮れに負けず冷たく。

「何やってるの？ お兄ちゃん」

第五章 第百七十八話…至らぬ納得

簡単な顛末は話した。しかし奈々華の表情は未だ懔然としたままだ。仁はまるで他人事のように、勿論弁明の必要性は重々理解はしているのだが、その姿にある種の懐古を覚えていた。つまり昔、隔絶してしまう前にはよくあったことだ。

「だからさ。解呪するんならわざわざあんな方法をとらなくてもいいでしょう？」

仁は知っている。理論武装の裏側に隠された感情がたった一人の家族をとられるかもしれないことへの不安と焦燥だと。どこまでも利己的でいっそ愛情すら覚える幼さ。

「それについては不味かったと俺も思っている。もっと他の方法を考え付くべきだったと」

そう、弁明は必要だ。もし仮に奈々華が仁の知っている男であれ、知らない男であれ、頬に口づけあっているのを見たら……いい気はしない。一言相談や報告があってもいいのではないか、自分はそんなに信用がないのかと恨み言の一つも浮かぶ。もっとも仁と坂城の間に、或いはミルフィリアの間にそういった感情や関係は存在しないので、彼女の早合点ではあるのだが。だからこそ釈明は不可欠だ。

「大体お兄ちゃんは……その、好きでもない女の子にキスして平気なの？」

「まあ減るもんでもないし」

「お兄ちゃん？」

なかなかドスの効いた声。

「仕方のない、いわば医療行為に近いし。確かに奈々ちゃんの言うとおりマズイ方法ではあるけれど、思いついて実行して成果が挙げった以上はそれでいくしかないっていうか……」

「……わかってるよ。そんなこと」

「わかってるんなら、怒りを静めてくれてもいいんじゃないか？」
仁の声にも少なからず疲労が滲む。もし彼女の言葉が本当なら、仁にこれ以上釈明の言葉はない。後はその理解から納得、許し、更には信用へと彼女の心の中で消化すべき、昇華すべき事柄だ。

「別に怒ってるわけじゃないもん。納得できないだけ」

つまりその思考の階段が理解で留まっていることを示唆した。

「だからさあ……」

疲れを通り越して怒気が見られる。昔と違う点。彼女はしつこくなつた。それは彼女の兄への想いが一層強くなつたことと、仁の愛情に未だ全幅の信頼を置いていないことに由来するのだろう。

「もういい。もういいよ」

静かにそれだけを告げ、仁に背を向けてもと来た道を引き返し始める。辺りはすっかり暗くなり、虫の死骸もその黒を闇に溶け込ませている。黙って兄妹の諍いを聞いていたミルフィリアが鞆をまさぐり、用意していた懷中電灯を持ち出す。そのまま走って奈々華を追いか越し道先案内人。

ミルフィリアが先頭、少し後を奈々華、それを見守るように仁。その仁を更に心配げに見やる坂城が平行して歩いている。きっと彼女のことだから、原因の一端は自分もあると責任を感じているのだろう。しばらくは誰の間にも会話はなく葬列のように、腐りかけた葉に各人の靴が沈み込むわずかな物音しか周囲にはなかった。

「ああ、そうだ。坂城。昨日電話する前に…… ああ、えっと。アレ以外にも電話してきたか？」

不意に何かを思い出したという顔をして、仁は坂城に尋ねる。周囲の空気を配慮してか少し声を落としていたが、先頭のミルフィリアまでキチンと聞こえていた。暗闇の中で奈々華がまた顔を歪める。

「え？ いや。昨日電話したのはあの時、六時くらい一回だけだが……」

仁にしても確認行為だったようで、気落ちも疑問符も顔には浮かん

でいなかった。坂城がわざわざ街まで下りて公衆電話を探し、そこから仁の携帯電話にかける意味はない。同様にミルフィリアも行方も推測からは外れる。後は広嶋、或いはヒメネス。近藤の電話番号も未だ電話帳には残っていたが、死人からかかってくることはない。「どうかしたのか？」

黙考する仁に、坂城が心配げな声をかける。

「……いや。なんでもない」

一時、奈々華のことも忘れ、仁は電話の相手に思いを馳せていた。もしかしたら既に退職してしまった自分の手まで借りなければいけないほど、のっぴきならない事態に、例えば前例に類を見ない強力な精霊が現れた、なっているとしたら……

いや、それなら電話が一度きりというのもおかしい。それに、やはり携帯電話が使えなくて公衆電話からかけるという状況が思い描けない。バッテリーが切れた、くらいしか思いつかない。事務所に戻ることも出来ない状態で、その最悪の事態を迎えたとしたら有り得ないことではないのか。

今考えてもわからない。それが結論だった。情報が少なすぎる。

いつの間にか、四人の目前には学園の裏手、大岩が姿を現す。暗闇の中で威風を失わず、デンと佇む。その更に向こうに学園の明かりが仄かに灯る。暗闇と重苦しい空気に身を置いていた一行には、それは道標のような安堵を与えるのかもしれない。しかし仁だけは、それが目に入っている筈なのに、依然暗闇の中に沈み込んでいるような深刻な顔をしていた。

第五章 第百七十九話…妹の迷走

「ちょっと陰湿じゃないかな？」

配膳された夕食を見て、仁は不平をこぼす。しかしあまり強気に出れないために、口元に曖昧な笑みを浮かべている。仁の前に置かれたメインディッシュはハンバーグ。簡単に手の平におさまりそうなサイズのそれは奈々華のものなのに二分の一程度だ。呪翹退治から三日。その間仁の食生活は悪化の一途を辿っている。昨日のカキフライ、奈々華よりも三個から四個は少なかった、に続き本日も格差が顕著だ。

「何？ 何か文句でもあるの？」

綺麗な二重の目を細めて睨むようにして仁を見る。

「何でもありません」

どんなものであれ、食事を作ってもらっている身の仁にそこまで大っぴらに文句を言う権利があるとも思えない。彼女の思考のプロセスが未だに理解の段で留まっているのが仁だけの帰責と言うには酷であるが、一端を担っているのも事実。そういった点からも、仁は目の前の可愛らしいハンバーグを黙って食べるしかないのだ。逃げるようにして皿に目を落とした仁、小さな後悔と大きな怒りの狭間で迷いのある顔の奈々華。食事は団欒から程遠いものとなった。

「そろそろ許してやったらどうなんだい？」

シャルロットは精霊の分を越え、年長者として語りかける。その瞳は全てを透徹するような、人にはない妖しい奥深さを時折感じさせる。それらが真っ直ぐに奈々華を捉えている。黙り込む彼女に、人生の先達は言葉を繋げる。

「人間てのは難儀だね。怒ってなくてもすれ違うんだから」

「……」

「よくは知らないけど、アンタとアイツが昔気まづくなったのもそ

ういう感じだったんじゃないのかい？」

「……かも」

「このまま放っておいたら二の舞になるんじゃないのかい？」

きつと彼女も本心では自分が間違っていることをわかっている。彼に真実を告げるでもなく、悪戯に自分の気持ちの先端だけぶつけている。どうして理解してくれないのか、それは互いに思っていて、それがいつか大きな溝に繋がって…… 確かに三年前と似ているのかもしれない。

「きっかけが要るんだろう？ ごめんなさいって言いな。明日はア
ンタの望んでたデートだろう？」

「……そのデートの前にあんなことするんだもん」

はあ、とシャルロットの溜息。堂々巡りの奈々華の思考。自分が悪い、しかし仁も悪い、仁は何故自分が悪いのかもわかっていない、その非はとがめられない、でも腹が立つ。そんな自分にも腹が立つ。けど本当は怒ってはいないのだ。ただまた四日前と同じように過ごし、お邪魔虫が寄り付かないようにしていればいいだけ。そしてそのためには何かきっかけが必要で、それにうってつけなのが明日で、シャルロットはそう言っている。

「アレはそんなに要領の良い方ではないだろう？」

「そうだけど……」

年頃の少女二人と一緒に行動を共にしても気の利いたことを言って誑かすような器用な男ではない。しかし彼の方にそんな気がなくても、彼女達、少なくとも坂城は確実に仁に気があるのだから、先の行動が及ぼす波紋は想像に難くない。

「しっかりしなよ。そんなんじゃない本当に誰かに取られちゃうよ？」

「わかってるよ、そんなこと」

語気が荒くなる。奈々華とて、このまま仁に冷たく当たり続けても良い結果を生まないことは十分わかっている。仁の思考回路が以下のようになることもわかっている。また嫌われてしまった。距離を置こう。それは奈々華の望みとは間逆に向かっている。

「わかってるんならやることは一つだろう。いいかい？ 明日は何とかして仲直りするんだよ？」

結論としてはそれ。至上命題として第二の隔絶は避けねばならない。「惚れたほうが多少の我慢をするのも、古今東西決まりごとさね」奈々華は、そればかりと口を尖らせた。

第五章 第百八十話：兄の迷走

学園の共同浴場は、午後八時から十時の間に最も混雑し、それを過ぎて以降は極端に利用者が少なくなる。特にテストを目前に控えた真面目な生徒達は規則正しく行動している。日付が変わる頃にそこを訪れた仁が他人の前に裸を晒す事態はなかった。仁がこのような時間にここを利用しているのには二つの理由がある。一つは彼が元来人の多い場所は好かないということ。もう一つは彼の日頃の素行。自分がどういう目で見られているのか正しく理解している仁は、自分と遭遇した相手もまた気を遣ったり、不必要に怯えたり気負ったりするのが嫌なのだ。利他というより、そういう空気を感じるのには本人にとっても面白くないもので、やはりどちらの理由も利己的なものと仁は自分で分析している。

「またコソコソすか？」

静が同行を申し出た。湿気は我々の容れ物に大敵だと風呂場についてくることなど今までなかった。

「触らぬ神に祟りなしってね」

がらんと静まり返った脱衣所はやけに二人の声がエコーする。誰に遠慮する必要もないのに、仁の声は心持ち小さかった。

「……言葉の裏を読んでくれないと困るんすけどね」

わざわざこんな場所にまでついて来たのは、奈々華の不機嫌に当てられる仁を気遣う目的ではない。

「村雲のことか？」

「ええ。どうしてアッシを連れて行ったんですか？ 普段は使い慣れた彼を同伴させているでしょう？」

例の呪翹討伐の件。仁が相棒に選んだのは静だった。

「彼には普段通り接していないとまずいでしょう？」

「二十やそこらのガキに随分高望みをなさる」

絶対にボロを出してはいけなとき、人はその対象と積極的に関わ

るという選択肢を最後尾に回す。それは年齢のせいというより人の性に近いが、仁の自虐には自身の態度に不自然があることを自覚している裏返しかもしれない。

「……確かに長く生きていると他者を欺く術だけが達者になってしまうのかも知れないっすね」

静は、仁の目から見ても村雲に対する態度に何ら変化をきたしていない。それもそのはず、仁が気付く前から彼は村雲の真の名を知っていたのだから。

「口には出していきいすけどね、彼、寂しがってっすよ？」

「そうなのか？」

「ええ。彼にとっては刀鬼として初めての主人。それにそれだけでもなく、アンタのことは気に入っています」

ひねくれているわけではないが、達観している静が手放しで気がいいと褒めた村雲。鬼にとつての五十年が一瞬だと言ふのなら、彼はいわば無垢の赤子に近いのかもしれない。仁はその信頼と好意を一身に受けているのだ。赤子を授かる親には、その天使を寂しがらせてはいけないという義務があるのだ。

「……まあいいでしょう。これからの意識改善に期待つてとこっすね」

仁は話しの終わりを察し、上半身をむき出しにする。赤子のそれとは違い、ほとんど無駄な肉のない引き締まった成人の体。

「ああ、それと。冒頭の話に戻りますが…… あの子もまた寂しがつています。モテる男は辛いつすね？」

からかうような内容だが、口調はいつもの通り。つまり耳を傾けるに値する話。

「何となくわかる」

「だったら、まやかしではないのなら、抱き締めてやりなさい。あの子の傍にいつまでも居てあげなさい。それがあの子の望み」

ついに下半身まで服を脱いだ仁は、脱衣カゴの中に下着を放り込む。先客の静は仁のパンツを被ることになる。代わりにタオルを取り出

して肩にかけ、「へーい」と呑気な声を出して浴場の引き戸を開ける。そのまま湯煙の中へと消えていく仁に、続く静の声は届かなかった。

「ちゃんとわかってるんすか？　いつまでも言った意味を」

第五章 第百八十一話…巡る感情

16両編成でやってきた灰色の地下鉄の内部風景は仁たちのいた世界のものとほとんど差異はない。休日らしくまばらな客も、いつもの勤め人らしき装いを、ラフな格好に替え、妻子を連れて家族サービスに励んでいる。唯一違う点といえば、中吊り広告の社名や雑誌名、大学名などが全く知らないものである程度。奈々華と仁は七人掛けのシートの端に並んで座った。

「混んでないといいけどね」

「……うん」

途切れる会話。仲の良い兄妹は時折沈黙を生むが、それはこれとは似て非なるもの。親しい者同士が恣意的に生むそれは、いつでもどちらからでも破れるもの。破っていいもの。これは違う。ある種強制的に生まれるもの。破っても破りきれないもの。

これから二人が行くところは「精霊園」と呼ばれる場所。動物の代わりに精霊を客にお披露目する場所。奈々華の案には、動物園、植物園、映画館、など高校生らしい候補が含まれていたが、どれも仁を退屈させそうで、一風変わった場所を選んだつもりだ。折りしもそれは仁の興味をひいた。

「可愛い精霊がたくさんいるのかな？」

「……多分」

静と村雲、両刀を携えていた。精霊を見世物にするような場所に、村雲を連れて行くことは抵抗があったが、静が何も言わなかったのでそのようにした。前日の静の言葉が正しければ、村雲を一振りぼつちにさせるのは憚られる。電車は各駅停車。アナウンスが入り、扉が開くたび、暖房の効いた車内に冷たい冬の空気が侵入してくる。「次は蓮の台。蓮の台。お下りの際は忘れ物がないように……」アナウンスもまた普遍的。いつのどこの世にも電車に忘れ物をしてしまう人間はいるのだろう。

「次だね」

「うん」

終始話しかけるのは仁。こちらの世界に来たときとは立場が逆転していて、奈々華はほんの少し可笑しくなる。

こんなにも状況は変わった。お兄ちゃんが自分から私に話しかけてくれる。私を気にかけてくれる。最初からは想像もつかないほどの進歩、幸せ。

こんなにも状況は変わった。お兄ちゃんが私の我が侘を聞いてくれる。「しょうがないな」と私の大好きな微笑をくれる。胸の中がぽかぽかする。

なのに、どうして私はまだ片意地を張っているんだろう。

お兄ちゃんがあんなことしてたから？ 違う。シャルロットの言ったとおり、お兄ちゃんが深い考えの下で行動することは滅多にない。だからアレに他意なんてない。額面どおり解呪をしていただけ。彼女達がいくらお兄ちゃんに想いを寄せても、お兄ちゃんさえ取り合わなければ、それが叶うことなんてない。

だったらどうしてまだごちない？ ふと自分の中の幼さを再認識する。そっか、寂しいんだ。不安なんだ。お兄ちゃんを独り占めしていたいんだ。庇護欲とないまぜにしたような愛情さえ、他の人には向けて欲しくないんだ。妹は私だけ。私だけを守って、見ていて、笑いかけて欲しいんだ。

「ほら、奈々華。下りるよ」

ずっと顔の前に伸ばされた手。ゴツゴツしていて、温かい手。私を守ってくれる手。顔を上げるとお兄ちゃんがいつもの微笑とも苦笑ともつかない気弱な笑みを浮かべている。今この瞬間は、私にだけ向けられる笑顔。永遠でない？ だったらこの世界に私とお兄ちゃんだけになればいいのに。そうすればこの笑顔は私だけのものになるのに。

ただ、そうだよ。まだその笑顔を向けてくれるなら、私はそれを曇らせてはいけない。

そつと伸ばされた奈々華の手を、仁は優しく受け取り、二人は電車を下りていった。

第五章 第百八十二話…カラ元気と精霊の園

色とりどり、という表現が正しいのかはわからないが、黒を除いた全ての属性の精霊が居た。勿論飼育の面からも安全面からも下級精霊がほとんど。飼育員はその精霊達のパートナー、即ち魔術師ということになる。開園当初は主に魔術師以外の一般人をターゲットとして想定していたらしいが、最近は精霊との接し方の実地として魔術師も参考までに訪れるケースも多いらしい。

ここ「国立蓮の台精霊園」は日本有数の広さと、飼育している精霊の種類が豊富なことで知られている。造り自体は仁や奈々華の知る動物園とほとんど変わらない。箱庭のように手入れされた環境で愛くるしい姿を振りまく小動物然とした精霊。特殊な環境を整備する必要のある精霊、比較的体が大きな精霊などには屋内の個別ブースが設けられている。客の入りはかなり良いらしく、仁は表情には出さないが椅子に腰掛けたまま、ぼんやりと園内を見回している。二人は園内に唯一ある軽食を出す店で小休止していた。店、と言っても屋台のようなもので、席は全て白いプラスチックのテーブルと椅子。野ざらし状態だった。

「可愛かったね」

仁の対面に腰掛ける彼の妹は、この精霊園に着いて以来はしゃぎっぱなしだった。

「ラッキークラビット？」

チラリと右腕のミサンガを見やってから。ウサギの体にネズミのような毛のない長い尾を垂らした様は、本音を言うと仁はあまり可愛いとは思わなかった。

「可愛かったよね」

繰り返す。無理に作った笑顔は、仁の心を痛める。ああ、と短く返してから、再び通りに目を向ける。かすかに憂いを帯びた横顔に、奈々華は少しだけ見惚れる。

「……君は強いな」

顔を合わせないまま、仁がぼそりと吐いた。はしゃぎまわる子供、笑い合う恋人達。通りの喧騒に掻き消されそうだった。

「……」

奈々華は仁の心境をほぼ正しく理解していた。彼はおそらく自分を不甲斐ないと思っている。妹がせっかく先の諍いを忘れたように、明るく振舞っているのに、自分はいつもとおり接しきれないでいる。負い目や気遣いがどうしてもそれを遮っている。

だけど奈々華だってふっ切れたわけでもなく、まして仁を許しきったわけでもなく、自分を許しきったわけでもなく…… つられるようにして、脳裏に焼きついた悲しい情景が浮かび上がる。兄の唇が、坂城の頬に触れて……

「ねえ、お兄ちゃん」

快活な声は出なかった。仁もまた窺うようにして奈々華の顔を見た。冴えない顔、奈々華が見たくない顔、奈々華が強い顔。奈々華は思わずテーブルに目を落とす。発泡スチロールの受け皿は肌を見せ、二人が買った焼きソバもホットドッグもなくなっていた。視線を辿った仁がそれらを引つつかんで立ち上がる。捨ててくるとだけ残し、奈々華の返事も待たずに歩き出した。次第に遠くなる仁の背中。反対側から店に歩いてくるカップルが楽しそうに笑い合っていた。

「私は強くないよ……」

第五章 第百八十三話：二つの杞憂

男子トイレは比較的回転がいいものだが、女子トイレはそうはいかない。日曜日の昼間、精霊園はまた一段と人が増え、トイレまでが混雑する有様。仁はトイレから数メートル離れた場所で所在無く妹の帰りを待っていた。トイレの前にはコンクリの通路、それを挟んで芝生を敷いたなだらかな丘があり、その向こうには少し体の大きな精霊を入れた鉄格子の檻が並ぶ。そこは既に回っていた。等間隔を開けて檻が陳列されていて、檻の手前には各精霊の生態などを書いたプレートが立っている。

「お前までムスツとすることはないだろ？」

腰に手を当て、その手は刀の柄を押さえ込むようにしている。さながらスキップと言ったところ。

「我は別に……」

仁は最初、しばらく部屋で留守番をさせていたから拗ねているのかとも思った。しかし思い直した。もし彼が前世の性根を臠ながら受け継いでいるのだとしたら、この場所が不快なのかもしれないと。精霊を見世物にして利益を上げる施設。その底流にあるのは、やはり精霊蔑視の考え方ではないか。

「だったら何でそんなに声が重いんだよ」

「……」

「ひょっとして最近構ってなかったから拗ねてるのか？」

「馬鹿な！」

少し弾んだ声音。仁は目だけ周囲に配って、怪しまれていないことを確認して、再び腰に視線を落とす。芝の丘陵の手前には同じように待たされる男性陣が数人居たが、つまらなさそうに携帯電話をいじったりしていて誰も他の人間を気に留めていなかった。

「我が憂いているのは……」

「憂いているのは？」

また一人、女子トイレから人が出てくる。仁から一メートルほど離れて立っていた青年が「遅いよ」と声をかけて二人連れ立って去っていく。

「主と奈々華殿」

急に仁の顔が険しくなる。鼻から溜息を漏らし、つまらなさそうに顔を上げた。それは仁自身が最も懸案していて、答えは出ている、出ていなくて、他人から聞かされるとうんざりする類のもの。

「どうして素直に接してやらない？」

「……」

「このままではまた離れ離れになってしまうのではないのか？」

「……」

仁は閉塞感を通り越して村雲のことを考えていた。

「確かにお節介のキライはあったけどね」

「何と？」

静の目はやはり正しい。精霊への愛着を揺り戻すのではないかという仁の懸念は杞憂に終わる。仲間だけを大切にするという気質に今は変わっていて、それはやはり静の言葉通り仁と似通ったもので、互いに仲間と認識している。

「なあ、覚えてるか？」

「さっきから話が飛んでばかりですよ？」

「いいから聞けよ」

仁の頬は少し綻んでいた。

「いつかもうこういうことあったろ？」

「いつかとは……」

「ほら、まだ俺と奈々華がわだかまっていた頃」

村雲はまだ合点がいかない。勘が悪いな、と仁は悪戯っぽく笑って続ける。

「今みたいに奈々華が出てくるのを待ちながら、お前から奈々華への接し方への忠言を賜ったろう？」

ああ、と村雲。少し笑みを含んでいる。人は何か忘れていたことを

思い出すと、同時に自然と笑む。それは思い出の共有する相手のことを思い、その思い出を懐かしみ、どうして忘れていたんだろうと可笑しくなるから。それは下らなくて瑣末なことほど顕著だ。人と鬼は違ふと静は言うけれど、彼らには仲間という括りだけで十分なのかもしれない。

仁も村雲も微笑をたたえていると、女子トイレの出入り口から待ち人たる少女が出てくる。白いファー付きのフードのダウンコート。彼女もまた彼らの仲間だった。

第五章 第百八十四話…カフェオレ

私は矛盾してるんだ。妹として大切にして欲しい気持ちと、いつまでも一緒に居たい気持ち。仲のいい兄妹としての時間と、どの兄妹もやがて迎える別離。それは本当に表裏一体のものなの？ 兆候があれ？ お兄ちゃんの気持ち私が私から離れていくの？

イヤ。絶対イヤ。そんなのヤだよ。

恋は外へのベクトル。常に相手の気持ちを、相手の顔を、相手の仕事を測る。他者を自分に振り向かせることで得られる独占の喜び。それは極論すると容姿や服装、外的な魅力の向上の果てに相手に同一かそれ以上の見返りを求めることに執心する。

愛は内へのベクトル。常に相手の気持ちを、相手の顔を、相手の仕事を輝かせる。他者と自分が繋がっていることで得られる魂の充足。それは極論すると思いやりや忍耐、自己犠牲の果てに相手と同一になることに執心する。

家族でしか成し得ないこともあって、恋人でしか成し得ないことがある。私ならどちらもお兄ちゃんに与えられる。それは私の勘違い？ 私が世界で一番お兄ちゃんを上手く包める。それは独りよがり？

「馬子にも衣装だね」

「それ使い方違う」

眼下には冬の結晶を享受する街並み。昼前からたちこめた暗雲は夕方を回った辺りから雪を運んできた。ふわふわと花びらのように舞い降りる。大丈夫。上手く笑えている。また明日から今まで通りの毎日が続くんだ。あんなの忘れちゃえばいいんだ。胸を刺す痛み。頬を刺す寒さより鋭く痛い。

「あんな汚い街でも雪化粧が様になるんだから…… 間違っていないよ」

「情緒がないなあ」

また同じようなことになったら？ お兄ちゃんの気持ちが変わった
ら？

「付き合い長いんだから、いい加減慣れてくれよ」

「慣れてるよ」

慣れてるよ。その度、私は泣き寝入り？

頼りなげに青白い顔をして、ポケットに手をつ込んで、乾く唇を
何度も舐めて。ごめんね、寒い思いさせて。お兄ちゃんなんか凍死
してしまえばいいんだ。

帰り道。デートの終わり。毎日の始まり。報われるとも知れぬ努力。
いつもの長い坂道を二人、雪でぬかるみ始めたコンクリートをひた
すら登る。今日の収穫はあったのかな。それを望むのは時期尚早。
優しい態度はない。欲しい言葉はかからない。だってお兄ちゃんが
理解しているのは妹の気持ちだけ。だから否が応でもこれまでの生
活を続けるしかない。それがイヤなら人生で一番の決断をしなければ
ならない。怖い。上手くいく想像よりも、失敗する想像が易い。
今まで通りの生活すら出来なくなるかもしれない。意気地なしと罵
られても、もう私はこの人を失うわけにはいかない。そうなければき
っと生きていけない。だったら…… 惚れた方が我慢するのが常。
今は我慢するしかない。答えは最初からあってただ辿り着きたくな
かっただけ。

ふふ、とお兄ちゃんの押し殺したような笑いで我に帰った。「どう
したの？」と尋ねると、くるりと首だけ振り返ってまた笑う。小さ
なしこりを一時忘れ、いつだってこういう顔をするお兄ちゃんは楽
しい話をしてくれる。

「懐かしかったな」

「何が？」

だから私も忘れる。小さなしこりも、それに付けた渋々の折り合い

も。一時忘れる。お兄ちゃんは子供のように目を輝かせている。

「ほら、小さい頃奈々華を連れて動物園に行ったら？」

頭の中を探ると、すぐさま該当する思い出があった。確かお兄ちゃんが中学生くらい、私が小学校高学年くらいの時のこと。名義上の保護者しかいない私達兄妹はあまり遊びに行くようなことはなかった。きつといつもお兄ちゃんはそのことを気にかけていたんだと思う。テレビなんかで行楽地の様子が流れると無理に話題を変えたり。子供心にそれがわかっていた。そしてお兄ちゃんが中学生になったある日、あれは春だったと思う、突然動物園に誘ってくれた。きつとお兄ちゃんは子供二人で行っても、中学生くらいの兄が引率していれば周囲からも怪訝な目で見られないと判断して、それでずっと待っていたんだと思う。私はそんなお兄ちゃんが可愛くて、嬉しくて、何度もありがとうって言った。

「でも、あの時は怒っちゃって悪いことしたな」

「え？」

記憶をもう一度さらう。そしてすぐにまた思い出す。ほんのちょっとほろ苦くて、でもすごく温かい思い出。カフェオレみたいな優しい味。どうしてさっき一緒に思い出せなかったんだろう。嬉しくてはしゃいでいた私が、サル山を見つけて、柵から身を乗り出して……
「落っこちそうになったんだよね」

自然と顔が綻んでいるのを自覚する。何とかお兄ちゃんが引っぱり上げてくれたけれど、すごく怒られた。それは愛情から来るものだった。子供心でもはっきりとわかった。私は大丈夫。そう思った。お母さんもお父さんもないけど、こんなにも愛してくれているお兄ちゃんがいる。

「泣かせちゃったんだよね」

ポリポリと頬を掻くお兄ちゃん。また胸がぽかぽかしてくる。相変わらず雪は深々と降り注いでいるけど、体の芯が熱を帯びていて気にもならない。

「違うよ。アレは怖くて泣いてたんじゃないよ」

そっか、とお兄ちゃん。きつと柔らかい笑顔。大丈夫。ちゃんと伝わってる。背中ごしに伝わってるよ。

第五章 第百八十五話…言葉

「多分…… 君も弱いんだね」

仁がふと呟いた。耳鳴りの錯覚さえ覚える冬の寒風、降り立ったばかりの雪に靴を踏み込む音。掻き消されそうだった。

「まだ俺が必要なのかな？ まだまだずっとついていないと寂しいのかな？」

それは自問のようでもあった。ギュッギュと靴底に雪が踏みしめられる音は悲鳴のようにも聞こえる。粉雪にも近かった雪はいまや一粒一粒がはっきりと視認できる大きさになっている。意志を持つかのように舞うそれらは生き物のようにも見える。傘を買っておけばよかったね、と仁の頭の一部がつまらないことを考えた。

「子供扱いみたいで少しイヤだけど……」

本当は力強く頷いて、思いつきり仁の胸に飛び込みたいのだろう。だけど彼女には仁の言葉が軽口の類にも聞こえた。判断しかねた。隔絶の弊害がまた出てきたようで、膿のように厭んだ。だけど振り向いた仁の顔を見て、全てが氷解する。唇を噛みしめ、世界で一番大切な家族を悲しませたことを何よりも悔いていた。

「もしそうなら……」

「……」

奈々華の胸は高鳴っていた。立ち止まった仁に、ゆっくりと、だけど確実に奈々華が近づいていく。二人の間に隔たっていた距離が限りなくゼロになる。手を伸ばせば触れ合う。笑いかければ笑い返してくる。言葉を紡げば絶対に届く。

「もしそうなら…… お前が俺を要らなくなるまで、お前の傍にいるよ。お前が望むだけ」

「お兄ちゃん」

奈々華の瞳に輝きが宿る。それは潤い。ずっと静かに零れ落ちる。頬を伝い、顎を伝い、上着の上に落ちる。小さく弾けた水滴を合図

に、奈々華は仁の胸に飛び込んだ。仁は雪に足を取られそうになるが、二、三步たたらを踏んでとどまる。いつもはすすり泣くようにグスグスと鼻を鳴らすのに、今日は、今日だけは喉を枯らすような大きな声を上げ、大粒の涙を枯れることなく流す。張り詰めた冬の空気に、三年間の狂いそうな空白を乗せた慟哭が響き渡る。

仁はゆっくりと奈々華の前髪や額を撫でる。これからは絶対に傷つけないように。

「それが家族なんだ」

「……馬鹿。私の気持ちなんて少しもわかってないクセに……」

嗚咽混じりの声に、仁は顔を曇らせるのではなく、一層優しい笑みを浮かべる。力ない拳が仁の胸を打つ。

「ああ。馬鹿だ。勝手に強いと思い込んで、勝手に大人になったと思ひ込んで、勝手にもう俺の手は必要ないと思い込んで」

「なのに……なのに、私の一番欲しい言葉を最後にくれる」

奈々華の拳が力なく仁の胸におさまる。古い思い出を引っ張り出したせいで、奈々華の頭にはまた懐かしい記憶が蘇っていた。最初に奈々華と仁が出会ったとき、仁は自己紹介の段で自分の名前をあまり好いていないと明かした。母がつけた名の由来を、父から聞かされたそうだ。こう言った。「人に対していっつも本気で優しくしないといけないんだって。面倒くさいよ」

ものぐさな所も優しい所も何一つ変わっていない。

拳を解き、きつくきつく仁を抱き締める。仁がくれた家族としての思いに、それ以上の想いを重ねてしまうと、二人の間に僅かな隙間があることすら疎ましいのだ。仁もいつもと違って苦しいとも痛いとも言わず、静かに抱きとめている。顔には奈々華の大好きな微笑。暫くの間、二人の間に会話はなく、ただ黙って心を通わせるように抱き合っていた。

そして破壊はやって来た。

第五章 第百八十六話…ストレンジャー

「折角兄妹が絆を深めているところを悪いのですが……」

耳慣れた声。ふらりとガードレールの向こう、木立の間に人影。年を感じさせないシャンとした足取りが、落ち葉と雪に覆われた地面を進む。声だけでその主を正しく判別した二人は即座に抱擁を解き、仁が一步前へ、奈々華が一步後ろへ。引き抜かれた村雲の刀身に白い雪が舞い降りる。黒い男物の傘の下から覗く白髪は、雪をちりばめたよう。口元に仁もよく知る薄い笑みを浮かべている。

「……木室さん」

名を呼ぶと、木室カエデはより優しく笑んだ。それも仁が知るものだった。仁の顔には憎悪ではなく、悲しみと失望が混ざったものが浮かんでいた。涙を堪える少年にも見えた。

「お久しぶりですね」

穏やかな挨拶もまた、事情を知らない者が見たらこれから刃を交える者同士だとは夢にも思わない。仁は言葉が出ない。何を喋っているのかわからない。本当に裏切っているのか？ 愚問。祐を殺した。どうして祐を殺した？ 愚問。敵が敵の陣営を殺す、当然のこと。坂城に申し訳ないと思わないのか？ 愚問。そんな殊勝な考えがあれば裏切ったりしない。

突然木室が深い溜息を吐いた。顔にはさっきまでの温もりは失せ、鉄仮面のような無表情。仁には嫌でもわかる。それが人を殺す者の顔だと。フロイラインの幹部の顔であると。

「その様子だと…… そうですね」

「いつから裏切っていたんですか？」

仁はようやく、その顔を見て、口が開いた。顎をぐっと引き、木室の顔を真正面から見据えたとき、既にそこには優しい兄の顔はなかった。

「裏切っていたとは人聞きが悪いですね。騙していたことは認めま

すが」

ニヤリと嘲笑を浮かべる。柿木やエリシアにあったものと同質の嫌悪を抱かせる。

「同じことでしょう？」

「似て非なるものですよ」

仁の顔が一層険しくなる。元より細い目がより細く、残酷な色さえ含んで、絞られた。

「アンタと言葉遊びをする気はねえよ」

低い声。そこに閉じ込められた憤怒を察せぬ木室でもなかった。

「……なるほど。すごい威圧ですね。ここは素直に命令をこなすこととさせて頂きます」

その言葉を皮切りに動き出した。

仁が刀を正眼に構えたまま、木室へと目標を定め、足に力を込めたのと、奈々華の悲鳴は同時。恐ろしい反応速度で足に込めた力はそのまま、重心を後ろにやり反転する。そのまま駆け出すのと、事態の把握は同時。仁の両目に映ったのは、奈々華を囲みこむ無数の人形。雛人形のような大きさのそれらが、蠢き、奈々華を包囲しようと迫っている。それが何色の精霊なのかも、もつと言うと精霊なのかも判別つかぬまま、風のような速さで群れに刀を一閃。横薙ぎの一撃は十体近くのそれらの胴と頭を切り離れた。僅かに開いたスペース、それでも仁と奈々華を繋ぐ線上には何の障害もなくなる。その結果に満足する暇もなく、人形の亡骸を踏みしめ、仁は奈々華と合流する。一連の動きに何ら無駄はなく、瞬きするほどの間だった。そこで改めて仁は人形の風貌を確認する。黒い和服を着ている。袖口からは腕が出ていない。足には足袋を履いており地肌というものが見えない。顔には般若の面をつけている。それらが無数。木室のいた反対側のガードレールの向こう、木々の合間にうじゃうじゃといる。見る物に怖気と戦慄を与えるような光景。

「念のために聞きます。私達の仲間になりませんか？」

木室の声は幾分遠い。既に退却の準備を始めているらしい。それは

今までにない提案であり、フロイラインの方針転換を匂わせる。しかし仁にそんな冷静な頭は残っていない。奈々華の危機がなければ本室はそこいらに散らばる人形と同じ姿になっていたはずだ。

「断る」

「そうですか」

本室の声はそれっきりしなくなった。相変わらずガードレールをよじ登り、次々に人形達が迫ってくる。振るう剣には血すらつかない。ただ骸を晒すだけの不気味な、生き物かもわからないモノ達。先日の呪翹討伐にも似た不向きな多対一。仁が苦戦を覚悟し、刀を納め、奈々華を乱暴に抱き寄せる。そのまま抱え上げると高く跳躍する。当然進行方向は後ろ。敵の発生源からは反対のサイドに降り立つと、奈々華をガードレールに押し付ける。奈々華はその間「きゃ」だとか「わ」だとか短い悲鳴は上げたが、暴れたりするようなことはなかった。

「とりあえず俺より前には出ないで。あと俺の傍からは離れないで」「は、はい」

アスファルトの上には既に吐き気さえ催す光景があった。数えきれない数の人形。仁の喉仏がごとりと動く。

第五章 第百八十七話…別離の選択

仁の胸には様々な感情が渦巻いている。木室の裏切りを、改めて会話を通して痛感したことに対するやりきれなさ。それと付随するどす黒い感情。奈々華の安全を守らなくてはいけないという重責の中、終わりの見えない不慣れな戦いに身を置く緊張。それでも仁はよく戦っている。それは偏に守りたい者が後ろにいるから。倒れるわけにはいけないから。奈々華は気を利かせて、増援の電話をかけている。ミルフィリアと坂城の手を借りられれば、戦局は一気に優勢に傾く。

「くそ！ キリがねえ」

未だ底は見えない。アスファルト一面、ガードレールを覆い、更に奥からも地面一杯に黒の大群。アリの行列の濃度をより密にして、その数を増やしたような景色。既に仁の足元には数百を越す敵の残骸が転がっているが、明らかに攻め入ってくる数の方が多い。敵の攻撃方法はわからないが、敵はとにかく体によじ登ろうとしてくる。そこから恐らく攻撃に入るのだろうと予測し、仁はもとより奈々華にも一匹も這い登らせるようなことはしていない。つまり弱い。個々の力は全くといいほど脅威にはならない。ただ脅威は、その不気味な風体をした尽きることのない手勢。未知の昆虫を撃退した先日似ているが、攻撃方法が定かではない点、より性質が悪い。

戦局は一瞬にして変わった。仁は呆気を取られて刀を持て余した。人形達がピタリと、電池が切れたように動かなくなったのだ。

「お兄ちゃん！ 大変。学園長さんたちが！」

奈々華の緊迫した声。仁は振り返ろうとして、人形達に視線を戻さざるを得なかった。それらが一斉につんざく様な声で笑い始めた。鉄が軋む音にも似ていて、奈々華は思わず耳を塞ぐ。状況の掴めない仁は再び油断なく刀を構えなおす。

「キキキキキキ」

「キキキキキキ」

「何が起きてるんだ？」

仁の呟くような声量は、軽く千を越す人形達の笑い声に完全に消される。人形が一際大きな金切り声を上げる。

「整った。整った。整った。整った！」

今度は同じ言葉を繰り返す。輪唱ではなく全てがほぼ同時に。

「お前の名前は丸太鬼。丸太鬼。丸太鬼。丸太鬼。」

四度繰り返し返す前に、腰に下がったままの静が聞いたこともない大声を上げる。

「まずい！ こいつ等＜闇の胎動を促す者＞だ。急いで本体を見つけてろ！」

仁は状況が掴み切れていないが、村雲の本当の名を知っている得体の知れない敵を倒すことに異論などない。緊急性も手伝って、仁の頭はすぐに湧き上がる混乱も疑問も一旦隅に追いやり、必要な情報だけを欲した。

「どうやって見つけるんだ？」

「一番力の強いヤツだ。何とか探し出せ！」

丸太鬼、丸太鬼……と呪文のように人形達は囃し立てる。仁はそれが物理的な力の強さではなく、魔力の偏在から知るものだとすぐに察する。ギリッと奥歯が鳴った。きっと坂城やミルフィリアが居れば簡単にいくのだろうが……ふと仁は弾かれたように村雲を見る。当の村雲は何も話さなければ、顔も見えない。戦闘中に無駄口を叩くような精霊でもないのです、それで普通なのだが、今だけ仁は村雲に語りかける。

「おい、大丈夫か！」

名を知り、とある儀式を経て、過去の記憶を取り戻すという話。その儀式とやらがこの＜闇の胎動を促す者＞と関係しているのなら……

「……主？」

「マズイ。乖離が始まっている」

静の口調にも先程からいつもの余裕はない。それが切迫した事態を示していた。

「乖離って何だ！」

仁は闇雲に刀を振るう。次々と人形の破片が宙を舞うが、一向に囀りも進軍も止まない。本体というくらいなのだから、恐らく群れの一番奥、少なくとも最前線には居ないはずだ。ついつと足を踏み出しかけて、自身の後ろに居る存在を思い出す。取捨選択。そんな言葉が妙に重たく、仁の脳裏を闇のように侵食した。

浮き上がりかけた足は…… 踏み出されることなく、そのまま地についた。

「文字通りだ。精霊の心が魔術師から乖離する現象」

普通は起こり得ない。いつだって裏切るのは人間の方だから。人形達の高笑いが終わり、幾つかの人形が動かなくなる。ブツブツと何かを呟いている。次第にその声が大きくなり、全体に波及していく。間もなく全ての人形が黒い霧のようなものを体から滲ませる。

「丸太鬼。乳飲み子を食い殺せ。」

丸太鬼。希望の若者を蹴り殺せ。

丸太鬼。守るべき者の前で守り手を壊し尽くせ。

丸太鬼。安らかなる死を待つ老躯を踏み潰せ。

生きたまま腕をむしれ。生きたまま足を砕け。生きたまま腸を引きずり出せ。其は同胞が受けた恥辱。其は同胞が受けた苦しみ。其は同胞が受けた憎しみ。返せ。返せ。返せ。返せ！」

おぞましい詠唱。

「いけない！ 早く！」

静はあらん限りに声を上げる。しかし仁は半ば自失したような目で、手に持った仲間を見つめていた。

「主？ 主？ 人間？ 人間。人間。人間。」

村雲の刀身から先に見た人形達のものとは比べ物にならないくらいに、濃く深い闇が広がっていった。

第五章 第百八十八話…変わるモノ、変わらないモノ

霧。黒い霧。思わず刀から手を放した仁の瞳には、地上から立ち昇る煙のようにも見えた。頭の中に巡る諦念。彼は本能的に理解していた。先程のおぞましい詠唱が静の言っていた条件というもので、これから村雲は丸太鬼へと戻る。人形達がまるで最初から気体だったかのように霧散する。不快な笑い声を残しながら。奈々華が後ろで尻餅をつく気配があった。彼以外の人間にはその黒い霧は闇の胎動。

まるで意志をもったような黒い霧が、徐々に晴れていく。次第に見えてくるのは鮮血を塗りたくったような巨大な足。隆々と盛り上がった体。霧が立ち消える。契約の時に見たよりももっと、もっと恐ろしくて悲しい瞳。わかり合うことは出来ない。数ヶ月も共に闘ってきた相棒である仁が一目でそう感じてしまった。完全にその姿を晒した丸太鬼は言葉を持たない獣のように一つ、大きな咆哮を上げた。それは確かにおぞましく、現に近くのカードレールすらビリビリと震えている。だけど仁にはそれが泣き叫んでいるように感じられた。

「……もう戻せないのか？」

新たに引き抜いた静に尋ねた声は掠れていた。

「無理だ」

声音は冷たく聞こえた。仁の逡巡を、選択の間を、理解できぬ静でもなかった。仁は確かに選んだ。二つの命を天秤にかけ、一つを選んだ。

「……そうか」

何とかそれだけを呟いて、仁は刀を構えた。

臂力は簡単に防ぎきれるものではなく、体重の乗った一撃は刀を水

平に構えた俺ごと、アスファルトに押し潰さんとしていた。仰ぎ見ると足の裏、その向こうに憎悪に揺れる瞳が見える。身に詰まる。体の前に心が潰れてしまいうんじゃないか。そんな錯覚さえ覚えていた。

他人事でもないのだ。信じ、愛した者を奪われた彼は。刀を振るうことさえ憚られた。裁かれるはむしろ人間の方だ。彼が何をした？腕に力を込める。心というのは体と連動している。きっとこの足には彼の狂おしい怒りが乗っているんだ。だけどこちらも負けるわけにはいかないのだ。後ろには俺の名を叫ぶ声がある。俺の無事だけを切に祈る存在がある。守ると決めた大切な家族がいる。近藤の命、祐の命、沢山の命から選び取ってきた失ってはならないもの。そんな権利が俺にないことはわかってる。全てが終わり、断罪の時があるのなら、煉獄にでも畜生道にでも墜ちてやる。だけどこの子だけは……

可愛いんだ。愛おしいんだ。俺の我が侘なんだ。

口の中に血の味がする。奥歯を強く噛みすぎたのかもしれない。唇を噛んでいたのかもしれない。不意に体にかかっていた重みが消える。丸太鬼の体を押し返し、足が宙に浮いたのだろう。即座に駆け、左足の落下点から抜ける。そのまま瞳に映るのは赤いもう一つの足。あっという間にそれが刀の射程範囲に入った。向こう脛を斬りつける。浅い。わずかに血が出たようだが、体色を考慮に入れても出血は多くない。丸太鬼は蚊に刺された程度の痛みしか感じていないはずだ。

「上だ！」

静の声が飛ぶ。仰ぎ見ると、妙にゆっくり丸太鬼の丸太よりも太い腕が振り下ろされてくるのが見えた。横っ飛びでかわす。すぐさま道路に亀裂が入る。丸太鬼は体重をかけた左腕が地面にめりこんで、体も前屈みになっている。これで隙が出来たと喜べるのは今までのつまらない下級精霊。初動すら見えない速さで地面についた左腕が横薙ぎに振られる。避けることなど出来そうもない。静を再び水平

に構え、体の前に押し出す。直後に両腕に今まで感じたこともないほどの衝撃。目の前が暗転し、胸に痛みを覚えると同時に体が浮き上がる。腕だけでは止めきれずに、胸に刀の背が食い込んでいた。妙に冷静な頭。今は吹き飛ばされて後方に勢いよく移動している。刀の先に当たっていた右手を自由にし、受身へ。すぐさま背中に硬いものが当たる感触。体の横に両手の平をついて、後方宙返りの要領で体を回す。足を地面につけるが、勢いがつきすぎていて尻が落ちそうになって強く踏みしめる。前を見ると悠然とこちらに歩を進める丸太鬼。すぐさま距離を詰めて追撃にも出たろうに……

「はは、コイツは強えな」

頬が緩んでいるのがわかる。そっか、左目が開きかけてるんだ。でもそれじゃない。こんなに強いヤツと共に闘ってきたのかと思うと、状況も弁えず、誇らしい気持ちさえする。丸太鬼は依然歩速も上げず、王者のような余裕を見せている。奈々華の横を平然と通り過ぎる。焦りすら生まれなかった。なぜなら……

「主従のよしみだ。主を殺すまでは妹には手は出さない」

コイツならこう言ってくれると心のどこかが確信していた。妙に義理堅い本質は、きっと怒りに囚われても、丸太鬼になろうと変わらない。

「だから、本気でかかって来い。我が主よ！」

第五章 第百八十九話…語らい

黒の精霊と黒の魔術師。互いに攻撃を利かせにくい。本来なら多少の隙を見せても即座に死に直結しない泥仕合となることの多い同色同士の戦いにおいて、仁と丸太鬼は一撃の攻防を恐ろしい水準で取り合っていた。それはどちらにあって、魔術の属性云々以前に、大きな隙がある相手を一撃で肉塊に変える物理的な力を持っているから。丸太鬼は仮にガラ開きになった仁の胴体がそこにあれば渾身の拳を打ち込み、五臓六腑の全てを破壊することも出来る。逆に仁は仮に最高の体勢で丸太鬼の首にその身を近づければ、いかに傷をつけにくい静を以ってしてもそこに墓標のように突き立てることは難くない。互いの実力が一回りして、膠着状態に近い戦いになっていた。決定打を打てない、打たせない。

丸太鬼の右手がまた仁に振り下ろされる。それを軽やかにかわした仁は次の相手の行動を予測している。顔には緊張と笑みが、背反せずに混在。案の定、丸太鬼はそこから横薙ぎ。この刹那は丸太鬼の攻、仁の防。

しかし仁は人間という大別に組み込めるのかもあやしい程の反応速度と動体視力。そのレパトリを繰り出されるうちに、横っ飛びから更な横へのステップだけでかわせるようになっていく。ブオンと突風でも起こったような大きな音を立てて、丸太鬼の腕は空を切る。今度は仁の攻、丸太鬼の防。

丸太鬼は当然のように、あの恐ろしい横薙ぎを放った瞬間から体の重心を後ろに戻し、足に力を込めている。仁は仁で、横へとぶれる重心をいとも簡単に前、即ち丸太鬼の体の方へスムーズに移行し終えている。仁の斬り込みは既に立ち上がっている丸太鬼が後ろに小さく跳ぶことでかわされる。刀を振るう鋭い音と、丸太鬼が着地した重たい音が前後して、一種のリズムを生んでいるよう。

先に攻めを変えてきたのは、丸太鬼。数メートル離れた場所から足に体重がかかる。仁にはその力の流れが見える。跳躍か突進か。仁は後者と判断。丸太鬼の体に鈍さなどあろうはずもない。それはまるで砲弾。ズンズンと二歩、アスファルトに足型を残す。それは当然恐ろしい脚力の成せる業、速度も爆発的。常人ならかわすこともいनाすことも出来ず、弾き飛ばされて潰れるだろう。仁は寸前まで引き付け、感嘆すら漏れる体さばきを以ってして体を横に流す。丸太鬼の体は仁を捉えられず通り過ぎる。しかし大きく通り過ぎることはなく、加速以上の力を足に込め、仁の居た辺りから数歩過ぎたところで急停止する。仁には背を向けた格好。好機と仁の胸が逸つたのは一瞬。距離を詰めかけた仁が見たのは、右ふくらはぎの筋肉の収縮。しなやかでいて力強い。チツと仁の短い舌打ち。刀を右側頭部に縦に展開。左手を先端に添えてガードの構え。丸太鬼の右足が後方、即ち仁側へ一歩。コンマとかからず右の拳が後方へ振られる。裏拳。体重の乗り切った拳が仁のガードを物ともせず、ガードレールの向こう側へ吹き飛ばす。ピンポン球のように木の幹に叩きつけられ、地面にずり落ちる。奈々華の悲痛な叫び声がこだました。木は仁がぶつかった辺りに大きな亀裂を残し、やがてゆっくりと後方へ倒れこんでいく。

仁は悠然と立ち上がった。顔にはまだ笑みがある。刀が触れてしまったのか、右の腿の辺りが破けて、血の滲む肌が露出している。

「あそこから防御に回ったか。化け物よ」

「それはこっちの科白だよ。ドラコンと勘違いしていないか？」

二人軽口を叩きあい、笑う。ガードレールの上から、三メートルを悠に越す巨体は、ガードレールの下、小さな巨人を見下ろしても、見下さない。低く太い豪胆な笑いをおさめたが、丸太鬼の顔には未だ好戦の笑みが張り付いていた。そのまま右腕を持ち上げ、手の甲を仁に見せながら中指を動かした。

第五章 第百九十話…咆哮

「そろそろか」

仁の呟きは、目まぐるしい攻防の垣間に。恐らくは考えていたことがそのまま口に出ただけで、彼自身は声になっっていることすら自覚がないのだろう。仁と丸太鬼が交戦を始めて一時間以上経過していた。一人と一体は体力まで人外。息こそ荒いものの、体の動きに鈍化は一向に見えない。

「だけど傷は違う」

攻撃に向かう丸太鬼の膝が一瞬落ちる。仁は開戦以来、終始丸太鬼の右足に刃を当て続けた。その一撃づつは、硬い丸太鬼の皮膚に小さな傷をつけるくらいのことしか出来ないが、幾重もの攻防の果てに、幾重にも重ねると話が違ってくる。精確に、最初の傷をなぞるように、ほぼ狂いなく。それは皮を裂き、肉に届き、肉を傷つけ、裂き、骨に近い部分まで届いていた。そんな好機を逃す仁でもない。すぐさま風のような速さで駆け、開いた下腹部に刀を走らせる。小さな傷は、また積み重ねの一步目。刀を振りぬくともう一撃。今度は振り上げるように。右側の側腹部に回りこまれている丸太鬼が取り得る行動はほぼ二つに絞られる。右足の蹴り。右足の踏ん張り。利かない状態で左の蹴りは考えにくい。もう一つは拳の振り下ろし。丸太鬼は後者で来た。しかし体勢を立て直すことはせず、散漫で力のこもらぬ拳。仁は当然その速度も威力も落ちた攻撃を楽々かわす。バックステップ二つ。十分に距離を取ってから目を睜る。丸太鬼は両の腕を仁が居た辺りにブンブンと振り回している。型も何もなく、ただ追い詰められた獣。

「奈々華！ ガードレールを飛び降りろ！ こっちに来い！」

位置関係で言えば奈々華は今丸太鬼がいる辺りの少し上。即座に兄の忠告どおり、ガードレールを飛び越え、木立の間を抜け、坂を下ってくる。丸太鬼の拳は未だ狂ったよう。暫くして仁が傍に居ない

ことだけは何とか理解したのか、ゆつくりと立ち上がる。ポタポタと右の膝下から血が落ち、積もり始めた雪の上に赤が解け入る。仁は油断なく全身を見つめていた。腹の辺りに力が集まる。

「やべえ！ 奈々、耳を塞げ！」

仁の傍までやって来たばかりの奈々華は呆ける間もなく、両耳に手の平を当てる。遅れて仁も同じように。次の瞬間、丸太鬼の桁外れの肺活量が成せる雄叫び。

「オオオオオオオオ！！」

耳を塞いでなお、二人には最大音量のスピーカーを使って耳元で叫ばれているようだった。奈々華は目を瞑っていて見えなかった。仁が唇を強く噛み、眉をハの字に曲げ、世の不条理に初めて触れ、泣き出しそうな子供のように顔を歪めているのを。

丸太鬼の全身に恐ろしい力が行き渡る。当然傷ついた右足からは大量の血液が垂れ流される。まるで沸騰しているかのように、雪を大きく溶かす。白目すら充血して赤い。流れる涙に血が混じっているように見えるのは、体色のせいではないはずだ。憎くて憎くて、悔しくて不甲斐なくて、理性など吹き飛んで……

「奈々ちゃん。森の中を走って。ここから離れて」

「そんな……」

何が出来るわけでもないのはわかっていても、奈々華にとって兄の安否も定かでないまま、自身だけが安全に身を置くことがどれほど苦痛であるか、仁にも十分にわかっている。わかっていてなお、奈々華の安全を思う。目だけガードレール下の妹に動かし、「頼む」と。奈々華は俯いて肩を震わせる。

「お願い…… 無事で帰って来て」

それだけを振り絞り、奈々華は仁に背を向けて走り出す。その背を見届け、仁は再び丸太鬼に視線を戻す。

「無茶言ってくれる」

丸太鬼が動く。死力を注ぎ込んだ両足が回転する。先程の突進とは

比べ物にもならない速度。一步一步が魂の足跡。両手を広げ、道の端から端まで完全に塞いでいる。空気抵抗を受けてなお恐ろしい速度。回避は難しい。ガードレール下に逃げ込む余裕などない。仁は静を、彼の友を正面に構え神経を研ぎ澄ました。

第五章 第百九十一話：戦友

丸太鬼の体は遙か向こうでその活動を止め、ゆっくりと膝が地につく。そのままうつ伏せに倒れこむ。地震のような揺れが、舗装の剥げた大地に伝わった。積雪に見る見る赤が染み込む。膝、腹、首。

交錯の瞬間、仁は地面を大きく蹴り、限界まで跳躍した。体勢を心持ち低く保っていた丸太鬼の首の辺りに刀のレンジを持っていくことが出来た。ほとんど捨て身だった。体がそこまで浮かび上がらなければ即死。浮かび上がったところで、胴体が丸太鬼と接触してしまったら相打ち。つまり相手と接触する寸でで上に逃げ、その途上丸太鬼の首と仁の腕が直線に並ぶ一瞬に斬撃をあわせ、その後速度を失わず衝突を防ぐ。針の穴を通すような正確無比な所業を、仁はやってのけた。いや、実は完璧ではない。恐らく彼が自己採点をつけるとしたら百点満点中八十点といったところ。

仁は静を鞘に納めて、ほふく前進で坂を下っている。両足を折った。つまり全身を逃がしきれなかった。激痛が走る両足を引き摺り、腕の力だけで体を動かす。汗と熱気で火照った肘が、雪に食い込みその熱を失っていく。それが丸太鬼の、村雲の体温と同様であると知っていて、仁はあらん限りの速度で下る。

「無様ですな、主」

丸太鬼は頬を雪につけ、生気の失われた顔で語りかける。隣にあるのは、自身のものより一回りも二回りも小さな顔。鬼の尋常ならざる生命力が、彼の最期を仁に看取らせる。

「そっちも同じようなもんだらう？」

グシュツと嫌な音を立てて、首から纏まった血が流れ出る。目に怒気はなく、穏やかだった。仁がいつも語らう時に、頭の中で思い描く彼の表情と似ていた。仁は声にならない音を唇の隙間から漏らし

た。荒れた呼吸のせいではなかった。

「……」

「闘わなければいけなかったのか」

「我の中の主を殺したくない気持ちより、人を憎む気持ちの方が強くなった」

仁が村雲と奈々華を秤にかけ、後者に傾けたのと同じように、彼もまた仁と失われた仲間の重さを量った。

「……」

「……」

鬼の首から流れる血は勢いを失わず、その貯蔵が無限であるかのような錯覚さえ覚えさせる。だけど、仁が必死に表情を殺しているのは、それが有限であると知っているから。

「もし同じ状況が百回あったとしたら、俺は百度今と同じ選択をしている」

「……知っております」

「お前が精霊だからじゃなくて、お前より奈々華が大切だからだ」

「……知っております」

「俺に博愛は無理だ。そんなに強くない。裏切らない、心の底から愛することが出来る存在が必要だ」

「……知っております」

「俺には……俺には……」

仁の無表情は崩れた。どちらが死の淵に立っているのかわからないほど、二人の表情はあべこべだった。苦痛に耐えるかのように目を瞑り、湿った声を閉ざした仁。口元に笑みすら浮かべ、人すらも遂に赦したかのような声音の村雲。

「我は博愛主義ではない。あんな絵に描いた餅を追い求めるほど愚かではない。友を殺す種族を決して赦すことは出来ない。我が仏の顔を見せるのは、我に仁を持つ者だけ」

「……それでも、それでも人と分かりあおうとしたんだろう？」

「そう。そしてそれは失敗に終わった」

人間側の一方的な不遜によって。歩み寄り差し出した手に乗せられたのは、仲間達の遺骸だけ。

綻ぶものなのかもしれない。どんなにしても分かり合えない相手はいるし、友の中にも優劣はつく。付き合いが長く気心が知れる者、付き合いが浅く会話だけは成り立つ者。画一に扱うことは、前者に応えきれていない。不信や寂しささえ与えかねない。誰にでも優しいということは、誰も愛してないと捉えられやしないか。

「主が我を信じていなかったわけでもなく、好いていなかったわけでもないことは承知している」

「やめてくれ……俺にそんな言葉をかけてもらう資格なんてない」

「相手が悪かった。きっと世界中の誰でも、妹殿にはかなわぬ」

「やめてくれ……」

仁の唇から血が流れ、雪の上に滴る。村雲が流すものに比べれば雀の涙ほどの量だった。

「我は主の精霊になれて後悔はありません。楽しい時間を過ごせました……」

言葉を考えているわけでもなく、間を取ったわけでもなく、言葉を切らざるを得なかった。村雲は声帯を震わす力すら搾り出すのが難しくなっているのだ。

「……僭越ながら弟のように感じておりました」

「……」

「静殿。嫌な役を押し付けてしまいました」

「気にしないで欲しい……っす」

「賜った鞭撻、地獄でも忘れはしませぬ」

「気にしないで……欲しいっす」

ヒューヒューと村雲の齒の間から音が出る。

「主……」

「何だ？」

仁はほとんど叫ぶようだった。

「触れていてくれませぬか？」

もうどこを見ているのか、大きな瞳は焦点が定まらない。仁は黙って村雲の頬に手を当てた。

しばらくして村雲の目は瞬きをしなくなった。

第五章 第百九十二話：電話

携帯電話で奈々華を呼んだ。兄の無事に涙を流す声が電話口から聞こえ、仁は本当に小さく笑った。

彼女が来るまでの間、静は饒舌だった。

「村雲君は、いや、丸太鬼は力比べが好きだったみたいですよ？」

「……そうなのか」

「ええ。勿論彼と互角に戦える相手などそうそう居なくて、たまにライバルを見つけると日がな一日闘っていたそうっす。勿論どちらも相手を殺したりはしないですが……」

「そうか」

「……きつと嬉しかったはずっす。最後に最高の相手と戦えて」

腕が疲れないのか、仁はもう長い間村雲の頬に手の平を当てたままだった。

「そうか」

村雲の顔は悪鬼のまま。だけど最後に見せた表情は穏やかで、口元が微妙に緩んでいたようにも見えた。

「村雲が謝ることじゃないよな」

「え？」

「恨んでくれてもいい」

雪は強まりもしなければ、弱まりもしない。きつとこのまま何も変わらず、夜まで、明日の朝まで、ひよっとするともっと先まで、ずっと降り続けるのだろう。そうして街に、森に、道に、積み重なるのだ。ずっと溶けなければいいのに。そうすれば、この光景を目に焼き付けたまま、いつでも思い出せるのに。彼との激闘、彼の最期、彼の雄姿、彼の慈愛。全てがこのまま残る。そんな馬鹿げた考えを仁は拭いきれずにいた。

「……強い者が弱い者の生殺与奪を握る。鬼の、いえ、精霊界の常識っす」

「……」

「闇の胎動を促す者」

仁の目は丸太鬼の顔から離れない。静にどんな感情をぶつけられても、仁は受け入れるしかない。どんな話題が出てきても、仁は聞き届けるしかない。

「あっしは馬鹿です。いよいよの段まで気付くことが出来ませんでした」

「……」

「アレは姿なんてないんす。強力な封印を解くためだけの存在」
変幻自在。実体などなく、いわば悪霊の類。たまたま人形を媒体と
していただけ。

「あっしにも非はあるんすよ」

それは仁を氣遣った言葉ではなく、悔やみきれない後悔だけが滲む
言葉。

「……お前らしくもない。こういうときは、ただただ感情論でいい
のに」

電話が鳴った。無機質な、雪よりも冷たい音に感じられた。仁は既にその相手を当て推量ではなく、本能的に感じ取っていた。何とかその場に胡坐をかいて携帯電話をズボンのポケットから引っ張り出す。ディスプレイには公衆電話。

「今度は取るんですね」

穏やかな声音だった。右手に握った携帯電話がミシリと小さな音を
立てた。

「……本当に化け物ですね。我々が数十人がかりで封印するのがや
つとだった丸太鬼を一人で倒してしまうんですから」

「……」

「もう五十年以上前になるんですね。私は当時の討伐チームに最年
少で組み込まれたんですよ」

「どうでもいい」

「……強かったでしょう？」

握りこむ握力がまた一段強くなる。

もっと早く気付くべきだった。黒の精霊、しかも一度もこちらの世界に召還されたこともない村雲の名を彼女は一目見て言い当てた。しかし知っていた経緯をその時話さなかった。何か裏がある。そう思って然るべきだった。もしかすると、少しの疑念でも持っていれば、祐は死なずに済んだかも知れない。闇の胎動を促す者への対処も変わったかも知れない。仁の右手が携帯電話を握りつぶそうとしているのは、きっと電話口の相手への怒りと、自身の不注意に対する怒りとがないまぜになっているから。

「今どこにいる？」

「教えるとも思いますか？」

既に相手側は仁と一対一で闘っても勝ち目はないことを知っている。

「教えろ」

地の底から響くような声だった。

「……まあ最初は貴方に姫様の様子を伺おうと思ったのですが」

独り言に近い電話口からの声。取り合っていないことがまた仁の感情を逆撫でする。きっと彼女は最初の電話について言及しているのだろうが、仁にとってはどうでもよかった。姫というのが誰を指しているのか、そもそも何故彼の電話番号を知っているのかについても同様だった。

「教えろって言ってるんだ」

「……」

やがて、やれやれと呆れた声が返ってきた。

「もう少し賢くならないともっと失いますよ？」

「アンタを殺せばもう失わない」

押し殺した笑い声。嘲笑というより失笑に近い。

「今の貴方とお話しても無駄のようですね」

冷たい声。子供の駄々を見切ってしまった大人。

「私が欲する情報は頂けないでしょうね。まあ貴方の様子から大概はわかったので良しとしましょう」

それではごきげんよう。締め言葉までにはいつもの穏やかなトーンに戻る。

「待て！」

ガチャリと受話器を置いた音。仁は着信履歴のページからリダイヤル。血の上った頭でも、相手が公衆電話からかけてきていた意味を理解するのに然程時間は要さなかった。いや、仮に相手の携帯電話からかかってきていたとしても、彼女の態度から繋がるとは思えない。

「クソ！」

叩きつけた黒い機体は、白一面の雪の上にポツンと浮いていた。

第五章 第百九十三話…タイガー

奈々華を賢い子と仁が評するのは、仁が咄嗟に見せた利己よりもつと建設的な機知を僅かな時間で発揮するところにあるのかも知れない。尤もそのエゴイズムは、友より自分を選んでくれたことは、奈々華にとっていくら不謹慎でも嬉しいものではあるのだが。

奈々華は兄の無事にただただ歓喜する段階から、一段進んでいた。仁と村雲が激突した場所へと戻るまでの数分の間に、彼女が仁にすべき治療の心構え、自分が持つ情報の伝達について、足を素早く回転させながら、頭もまた負けず劣らず回していた。

だから彼女は治療が終わりに差し掛かる頃合には、予め聞いていた両足の損傷や傍に眠る巨大な戦士の亡骸に怯むことなく、仁に大切なことを伝え終えていた。その冷静な声音に呼応するように、仁も先の木室との電話での動揺を収めて、自身の次なる行動への準備に心を砕けた。奈々華の手が、雪の上に放り出してやや赤みを帯びた両足を包み込む間、仁は微動だにせず、瞳を閉じ、口元に小さな笑みを浮かべていた。それは友人を助けるために気を吐くのではなく、持て余した怒りの矛先を定めた高揚からなのは誰の目にも明らかだった。瞼の裏には、きつと虎のような目が嗜虐に輝くのを待っているのだろう。

仁よりも一回り小さな手の平は、雪に溶け込むように白く光り輝いていた。穏やかに眠る赤子を見守る母のように、四つ歳の離れた兄の顔を見つめている。幾年もの年月を寄り添って過ごした彼女には、仁がこれから行う更なる蛮行についても察しがつかないはずもないのに、

「今度スネ毛剃ってもいい？」

口から出たのはおよそシリアスとは程遠い言葉。

「ダメだよ。これは俺の足を守るために生えてんだから」

仁もまた本当に状況を理解しているのか疑わしいほどリラックスしたものだっただけ。

唯一他者で居合わせた静は絶句する。妹に。兄に。何か得体の知れない気味の悪ささえ感じさせる。

「ああ。段々足の感覚が戻ってきたよ」

殊更仁の口元が緩む。そこにやはり他意は見えず、純粋な奈々華への感謝だけ。奈々華もまた嬉しそうに顔を綻ばせるのだった。

「村雲さん居なくなっちゃったね」

そのままの顔で奈々華がデリケートな話題に及ぶのは、二人の絆を確信しているから。目を開いた仁は腐っても怒ってもいなかった。

「ああ。今まで闘ったどんな相手よりも強かったよ」

一瞬寂しそうな顔をして、すぐに誇らしげに鬼の巨体に目をやる。再びその戦士の骸を見て、なおも口を開きかけて、それ以上飾る言葉がないことに仁は気付く。おこがましいと感じられるのならそれでもいい。だけど彼を素直に称えなければ、彼の優しさを、彼との激闘を冒瀆することになる。再び目を瞑った彼の胸に去来するのは鎮魂ではなく……

「遊び相手には物足りないだろうけど」

静かに開いた目には、強い光が宿っていて、坂の先、愚かな獲物に照準が定まっていた。

第五章 第百九十四話…矛先

ロッペン・ラインハルトは困惑と怒りを丁度半分ずつ混ぜ合わせたような表情だった。

仁が学園に戻ってきて真っ先に叩いたのは、学園長室の扉だった。いや、正確ではない。ノックもなく突如室内に入り込んできた闖入者を見る目は三者三様。ミルフィリアは然程表情を変えず、しかし微かな驚きは隠しきれていない。坂城は仁の姿を見るなり、すぐに表情を輝かせた。そして来客ラインハルトの顔は先述のように。

「またお前か」

それが第一声。より険しい表情を作り、半ば仁を睨みつけるようにして言った。入り口に近い側のソファーに坂城とミルフィリア。向こう側にラインハルトが座っている。黒いスーツに包まれた両腕を空段前で組んでいる。

奈々華が電話をしたのは、坂城。返ってきた言葉はラインハルトの襲来と仁の早期の帰還を望む内容だった。奈々華は状況を鑑みて、優先順位を過たず、仁と丸太鬼の戦いの後に伝えたのだった。優先順位とは即ち兄の無事を至上命題に組み立てられている。従ってその場ですぐに伝えて、僅かでも動揺を植えつけるようなことがあってはならなかったのだ。

「それは俺のセリフだ」

仁は不愉快を隠そうとしなかった。入り口からカツカツと歩を進めると、手前のソファーの裏側に立った。立ったまま向こうのラインハルトを見下ろす。

「近藤さんの遺体は？」

「報告では近藤正輝の一人息子、祐とやらは死んだようだが？」

「質問してんのはこっちだよ」

ドスの利いた声に、仁の後ろに控えめに立つ奈々華でさえ、仁の表情は容易に察せた。据わった目をして薄く唇を開いているのが。

「お前に、近藤を殺したお前に、その遺体を引き取る権利があるのか？」

「ないね」

だけど、と繋げた。

「お前等にもあるとは思えない」

だったら祐の傍に葬ってやるのが、せめてもの人情だろう。ラインハルトは一つ呆れたような溜息を吐いて、仁から目を切った。

「今日来たのはそのフロイラインの幹部の引渡しと、お前の二つ名の承認」

「元幹部だ」

ミルフィリアは真っ直ぐ前だけを、坂城は首を忙しく動かして自分を挟むようにして対峙する二人を見比べていた。体よく仁の力を封じるには絶好の口実を、仁は歯牙にもかけない。

「報奨金と付されるべきだった近藤さんの遺体を、返しもしないで新たな要求か？」

「……」

「呑むと思ってんのかよ」

抑えきれない怒りが、語気を荒くさせた。

踏み込んだ右足すら見えなかった。ダーンと大きく床を打ちつける音から判断するしかなかった。ソファアからは白い綿が飛び出し、横一閃の斬激が襲ったのがわかる。しかしラインハルトの体はそこにはなかった。ソファアから大きく飛び退き、坂城の事務机の手前に降り立っていた。

「承認の過程には、昔はA M Cの代表が直接相手の力量を見極めるというのがあった」

そのラインハルトは口の端を軽く持ち上げ、悠然と笑っていた。

「いいだろう。私に刃を向けることがどれほど愚かしいことか、教えてやろう」

声からは圧倒的な自信。世界最強の名を欲しいままにする王。

ゆっくりと後退していくと、そのまま窓ガラスを突き破り、中庭へと飛び降りていった。その後を仁が追う。あっという間の出来事に腕一つ動かすことが出来なかった三人は、数テンポ遅れて動き始める。

「マズイ。我々も追いましょう！」

坂城が奈々華を押し退けるようにして、学園長室を飛び出す。あっという間に見えなくなった背を、奈々華はのんびりと見つめていた。

「貴方は追わないのですか？」

ミルフィリアが余裕のある声。

「どうして？」

「貴方の大好きなお兄ちゃんの危機じゃないですか」

「危機？」

「……」

少しポカンとして、奈々華はあまりの間抜けな質問に噴き出す。ミルフィリアは怪訝な顔を作ってそれを見つめていた。ははは、と大きな声を上げて一しきり笑うと、目元の涙を拭い、ミルフィリアに答えを返す。

「何が危機なんですか？ ミルフィリアさんこそ早く行ったほうがいいですよ？」

「……」

「学園長さんは今精神的に弱ってるんでしょう？ あまり刺激的な絵は見せないほうがいいですよ」

そう言い捨てると、奈々華は急ぐでもなく、学園の廊下を歩き出した。

第五章 第百九十五話…響かない力

弱い。技術的な面から言えば、向こうのほうが何枚も上手なのだろう。だけど身に詰まる怖さがない。近藤さんの最期の大魔法は、村雲との戦いは、昂ぶりすら覚えた。命のやりとりをしているのだと、否応なしに実感させられた。全身の肌がひりついた。

何もない。負ける気がしない。殺される気がしない。こんなヤツが裏で糸を引いて何倍も俺を苦しめた人や友を死に追いやったのか…
：俺に殺させたのか…

だから圧倒的な殺意を抑えきれない。不思議な感覚。憎悪に囚われているわけでもないのに、相手を殺す明確なビジョンだけが浮かぶ。ああ、そうだ。コイツを殺そう。

また新たな精霊が出てくる。ラインハルトの表情には既に全く余裕はなく、それどころか今の自分の状況を信じられないといった感情が浮かんでいる。一体目、彼の持つ精霊の中で最も強力なもの、雷鶴^{かぐ}、文字通り鶴の形をしたものなのだが、それは仁の一刀の下に首と体を切り離され、活動を停止していた。通常の鶴と違って長く伸びた尾羽を鞭のように振るってきたが、軽くいなされ、懷に飛び込まれて終わった。今はラインハルトの奥、慣性に従って仰向けに倒れている。二体目、木室が一度見せたものより数段大きな雷馬。脚力を武器に、果敢に突進と角の攻撃を繰り返すインファイターは突進を鮮やかに飛び越えた仁に後ろを取られる形となり、足を斬りおとされ、動けなくなったところをまたも首を刎ねられ、仁の傍で血溜りを作っていた。その間それらの主も手をこまねいていた訳ではなく、高電圧の雷の玉を仁目掛けて乱発していたが、どれ一つ仁の衣服を掠めることすらかなわなかった。そして今また新たに召還した三体目、禍玉・黄。恐ろしい速度で間合いを詰めた仁に、形を作る前に真っ二つにされた。詰みである。

仁の目がラインハルトの醜悪に慌てふため顔を捉えることはなかった。三体目を斬り伏せたその足でラインハルトの目前まで駆け寄り、頬に強烈な拳を食らわせたからだ。勝負を分けた要因はいくつもあるが、一番大きいのは余裕綽々に軽くもんでやろうと遊び半分でかかったラインハルト、相手がどれほどの力量であろうが確実に息の根を止めてやろうと挑んだ仁。ラインハルトがキチンと相手を強敵だという認識を持って闘えば、これほど早期に後塵を拝すこともなかったかもしれない。

数メートル転がって止まったラインハルトが顔を上げると口の中が切れたのか、唇の端から血が零れる。しかし今度はラインハルトが仁の姿を目に留めることが出来ない。悠々と歩を進めていた仁がアリを踏むようにその頭を踏みつけたからだ。

「本当にこの程度なのか？ 世界最強？ 笑わせるなよ」

足をどけると、しゃがみこみ、ラインハルトの金色の髪を掴む。そのまま顔を地面に打ち付ける。二度、三度、四度、五度、六度……「近藤さんはもっと強かった。村雲は俺に死のイメージすら抱かせた」

血を吐いたり、苦痛の声を上げるだけでラインハルトは返事が出来ない。上下に振れる仁の右手が止まった。

「俺もお前も同じ穴の貉だ。けどな…… 力の信奉者がやっちゃいけないことがある」

「……」

「自分より強い者を手駒にしちゃいけない。力一つで渡るのはなら、自分より強いヤツには従うか、殺されるのが筋だろう？」

「……」

「お前はそうやって渡ってきたんじゃないのか？」

「……」

「……お前は俺には絶対に勝てない。狡猾を覚えた喧嘩屋はもう喧嘩屋じゃないんだよ」

ガツンとまた打ち付ける。歯が折れたのだろう、鈍い音が響いた。

「早く吐き出さないと口の中傷つけるぜ？　それはもうお前の体の一部じゃないから」

口ほどに手は優しくなく、吐き出す間すら与えず、釘を打ち込むトンカチのように。

「まあいいさ。お前の生き方にケチつけても仕方ない」

「……が。ぐ、は」

口から数本の歯が飛び出す。白く美しかったそれらは血を纏い、痛々しさだけを見る者に植えつけた。

「近藤さんの遺体を明日にはこっちに寄越せ」

「……誰、が」

「お前が……」

立ち上がった仁がラインハルトの顔を思い切り蹴りつける。ボキッと嫌な音がして、端正な鼻梁を保っていた鼻が曲がってはいけな方向に曲がる。

「やるんだよ！」

今度は腹。ボキッと嫌な音がして、引き締まった体を支えていた肋骨がへし折れる。

「俺はお前とは違って器用な処世術なんてないからな。最初からこうすれば良かったとさえ思うよ」

そうすれば、結果は変わらなかったかもしれないが、祐に近藤の焼香をあげさせてやったかも知れない。そう思うと、仁は自身の不甲斐なささえ忘れて、全ての元凶が、責任が、目の前の男にあるような都合のいい錯覚を覚えそうになって、振り払いたくて、また蹴った。瞼の辺りが赤く腫れあがって、口からはそれに負けない真赤が途切れることなく吐き出されていた。

「自分の要求は力で通す。それが我が侂でも、自己満足でも」

第五章 第百九十六話…迂闊

五分は経っていなかっただろう。仁とラインハルトが刃を交えてから。だからまさかそれほど早く決着がついているなどとは誰も思わない。しかし結果として奈々華の忠告は意味を成さなかったことになる。

校舎内を右へ左へ駆け抜けた坂城が、中庭に辿り着いて目にしたのは先の光景だった。地に這いつくばる王者の頭を狂ったように枯れ草の上に叩きつける友達。あちこちに血塗れた精霊の死骸が転がっているその中央に位置した。立ち尽くした。声をかける余地などあるはずもなく、助力など要ろうはずもなく。ただただ呆然と木偶のように成り行きを見ているだけの坂城。だから背後の人の気配に気付かなかった。

指一つ動かすのも一苦勞しそうなラインハルトに代わって、仁が彼の背広のポケットから携帯電話を探し当てる。それは勿論優しさではない。その電話が終われば、ラインハルトの命は朝霧のように立ち消える。折り畳み式のそれを開いて、仁が操作をする。画面に目をやる仁は隙があると言えはあるが、精霊を失い、動くことすらままならないラインハルトはただ黙ってそれを見ているしかなかった。「ほら。コイツだろう？ 早くかけろ」

近藤の遺体が安置されている場所に見当のつかない仁は、秘書らしき人物の番号を呼び出し、携帯電話を地に伏すラインハルトに渡す。「いいか？ ここに明日中にだぞ」

念を押す仁から受け取ったラインハルトは、のろのろした動きで頬に当てる。グレーの機体は仁の漆黒のそれとは似て非なかった。

「コーディンか？ 私だ……」

「そこまでです！」

突然空を切り裂くような大きな声が響いた。仁のものでもなく、ラ

インハルトのものではなく、坂城のものでもなかった。

仁が目にしたのは、中門の前で後ろから何者かに後ろから羽交い絞めにされている坂城の姿だった。状況を正確に掴む前に、映ったのは坂城の体の自由を奪っている者の顔だった。

「雷帝から離れてください!」

やはり歳を感じさせない声量。仁はややあってラインハルトの傍から二、三步さがった。同時にラインハルトは携帯電話をパタンと畳んだ。

「やはり妹さんから片付けておくべきでしたね。無傷ではなかったでしょうに。まさか間に合うとは」

木室の独り言は、前言とは違ってとても小さく、後ろから凄い力で抑え込まれている坂城にしか聞こえなかった。しかし耳に入っても頭には入っていない。

「カエデ…… カエデなのか!」

「貴方に用はありません。大人しく人質をやっているさい」

木室の冷たい声。坂城の顔は、茫然から僅かな喜色、そして驚きと悲しみが入り乱れた表情へと。

「カエデ! どうしてこんなことをするんだ! カエデ!」

ジタバタと動き回る坂城。最早彼女の目には仁とラインハルトは映っていないくて、ただ拘束を振りほどいて人生の大部分を共に過ごした優しい祖母の顔を見ることだけに心は囚われていた。チツと小さな舌打ち。木室が腰の辺りから引き抜いた短剣が容赦なく坂城の首筋に当てられた。ピタリと止まる坂城。その顔に浮かぶのは恐怖ではなく、驚愕。ポカンと開いた口から何か声にならない音が漏れた。

「人質の交換といきましょう」

おとなしくなった坂城には目もくれず、仁に向けて声を張る。

「……随分と余裕がないな。らしくない」

仁は辛うじて軽口らしきものを返したが、虚勢なのは火を見るより明らかだった。そして胸にあったのはもうこちらに来て幾度繰り返

したかもわからない自戒だった。賢くならなければもつと失う。敵の言葉ながら言いえて妙。坂城が中庭に来ていたのは目の端で捉えていたが、注意は完全にラインハルトに集中していた。既になりふり構わないフロイラインが、A M Cとの関係が露見することを今更厭う筈もない。即ち木室の助勢は十分に有り得たのだ。

「イレギュラーですからね」

先の独り言にも通じる。彼女の描いた筋書きだと、ミルフィリアを攫った後、仁との対峙という形だったようだ。もう一つ、ラインハルトがこうもあっさり負けるというのも誤算だったのかもしれない。「さあ、もう少し離れて。また友達を失いたくはないでしょう？」仁は言われるがまま。ラインハルトとの距離は広がっていき、木室が良いと言った頃には両者の間に数十メートル離れていた。そのまま坂城を引きずって、ラインハルトの傍に入れ替わる。

「早く坂城を放せ」

その言葉を合図に、木室は坂城の背をドンと押して解放する。二、三歩つんのめるようにして坂城が仁の方へ。それと同時に木室とラインハルトの周囲に竜巻のような暴風が起こる。

それがやむと、二人の姿はもうどこにもなかった。

第五章 第百九十七話…終わる夢

「カエデ…… カエデ」

坂城はカセットテープのようにそれだけを繰り返していた。仁はその坂城の傍で色々と声をかけていた。しかし彼とて人を慰めていられるような心境では決してないのだった。木室はまだしも、幹部でもない緑の魔術師にまで学園への侵入を許していたのは、どう言い訳しても不手際だ。囚われていないはずが、やはり憎しみに心を奪われていた。近藤と祐を寄り添わせることさえ出来ず、拳句坂城まで危険に晒した。可能ならば自身の頬を思いきり殴りつけてやりたい気持ちだった。それでも自棄になっていないのは、偏に坂城の変調にあった。虚ろな目をして、いつまでも木室がいた辺りから動かない。ミルフィリアの両親すら想起しかけて、仁は自身の不甲斐なさを一時他へやって坂城に声をかけ続けた。

「しっかりしろ」

「カエデ…… どうして」

「おい。こつちを向け」

「カエデ」

「……」

心がどこかへ行ってしまうようだった。肉体と乖離して、どこかへ馳せている。木室との思い出か、両親も生きていた頃か。

ミルフィリアが、遅れて奈々華が中庭に着いた時には既にその状態だった。ミルフィリアが声をかけても然程変わりはなかった。

「何があったのですか？」

一しきり声をかけて、反応が芳しくないことを確認して、ミルフィリアは仁を追求する。仁はありのままを話した。話している途中、隣に控える奈々華を見やり、自身と照らした。小さな頃から共に過ごした相手と袂を分かつことがどれほど苦しいことか、仁にもわか

らないでもなかった。

「なるほど。木室さんが……」

伝え聞いてなお、信じることをしなかった裏切りが、はっきりと形となって示されたのだ。坂城の様子から、それまでの時間は、心の準備をしていたのではなく、本当に信じていなかったと捉えて間違いないようだ。仁にはそこが、その気持ちが変わらなかった。いくら伝聞とはいえ、裏切りに信憑性はあった。実際に自分の前にいつまで経っても姿を見せないのだから。そんな人を信じきれるものなのか。そこまで考えて、仁は過去の自分の投影をやめた。彼女とはケースが違いすぎる。きっと親を亡くして、残された家族への依存はより強まったのだ。仁は死別を知らない。奈々華とすれ違った時でも、彼女は生きていたし、自分に出来ることがなくなったとしても、彼女の幸せを願うことは出来た。それは腐った心にも、小さくても、一筋の光として差していた。

「……とりあえず自室で休ませます」

ミルフィリアの声も少し震えているように聞こえた。優しく背中を手を回して校舎の方へ誘導していく。歩いているというより、押されて動いているといった方がしっくりくる。

二人の背中徐徐に小さくなっていき、校舎へと消えていった。

第五章 綻ぶ世界と黄の真相 了

終章 第百九十八話：光明の縁故

終章 終わり待つ少女と黒の幸福

約束の時間から十分ほど遅れて、広畠はやって来た。隣にはヒメネスも連れているのが、用心のためにか、単に仁と仲の良かった青年とを再会させようという意図なのかはわからなかった。工事器具を運ぶような巨大なトラックのタイヤには用意よくチェーンが絡まっていた。

「よう」

と気さくな挨拶は相変わらず。仁は口角だけで笑って見せる。その時には広畠の目もヒメネスの目も、仁の向こう、丸太鬼の巨大な死体を見ていた。

「これか」

「ええ。出来たら手厚く葬ってやりたいんですけど」

火葬にせよ土葬にせよ人手が要った。そしてこちらの世界に頼れる人間は、仁には限られていた。

「研究所の連中なら垂涎ものだな」

そう言いながらも、やはり精霊研究のサンプルとして寄贈する気はなさそうだった。仁もそれを察知してか、然程慌てた様子もなかった。

「以前倒した鬼とは少し違うみたいだが？」

「ええ……」

「凄く強そう」

ヒメネスも相変わらずで、仁は優しく笑う。

「丸太鬼です」

「丸太鬼だど？」

軽く首肯。雪は勢いを失わず、三人にも、物言わぬ亡骸にも平等に

降り注いでいた。

「コイツは驚いたな。大物中の大物じゃねえか。お前が倒したのか？」

「……はい」

仁は唇を引き結んで思案顔を続けていたが、やがて事情を説明し始めた。刀鬼のこと。丸太鬼のこと。フロイラインの策略のこと。必要なことを過不足なく。聞き終わると広畠は「そうか」とだけ返した。

三人で巨大な遺体の両足を持ち上げて、トラックの荷台に押し上げる。そこを取っ掛かりに、一番力のある仁が荷台から引っ張り上げる。二人は頭部や背中に回り押し上げる。ずりずりと少しづつ体が高まり上げていく。生きる者だけが踏みしめる大地から離れていく。ある程度引き上げると、仁も荷台を下りて押す側に回る。ヒメネスの隣に立って大きな足の裏に手を押し当てる。

「大丈夫？」

ヒメネスの言葉は、仁の体力を気遣ってではなかった。

「……何がだい？」

「……」

「俺は大丈夫だよ。自分で選んだ道だから」

ヒメネスは気遣う目のまま、微かに頷いた。

広畠の人脈の広さは中々侮れないもので、これほど巨大な精霊を燃やすことの出来る火葬場を知っていると云う。勿論、用が済んだ精霊を処分する手段にも抜かりないであろう研究所とは別のつてで。それは広畠なりの感謝も含んでいた。もし街に丸太鬼が下り立った場合には大惨事は必至だった。元々仁の精霊だとか、フロイラインの計略がどうかは度外視すべきだし、それが出来る思考回路の持ち主。伝説の鬼が地上に再臨したという結果だけ変えられないのだから、仁に対しては慰労の念が絶えない。だから助力に多謝す

る仁に概ね「構わない」だとか「気にするな」と優しい言葉をかけた。

「これはどうする？」

もう積み込みも終わって、いよいよトラックが出立するという段になって、広畠が右手に刀を持って仁に近づいてきた。それはかつて、数時間前まで村雲が棲家としていた刀。村雲守兼家。ほとんど変わらない姿であるはずなのに、仁の目には以前のような鬼気迫る輝きが失われているように見えた。抜き身のままで長時間冷え込む雪空の下、放られていた。

「それはこっちで引き取ります」

形見は護り刀とはいかなくても。

「そうか。それじゃあ明日には灰を届けてやるよ」

それだけを言うと、改めて感謝の念を伝える仁を無視するようにトラックへと向かって行った。ヒメネスも別れを惜しんで窓から手を振っていた。仁はトラックが動き出すまでの間、ずっと頭を下げたままだった。部外者である彼に、関係施設に足を踏み入れる権利はない。だから友の亡骸を吊ってくれる彼らに、いくら構わないと言ってもらえても、謝意は尽きないのだった。

終章 第百九十九話：二人で見る夢

「ただいま」の挨拶にも疲れが滲んでいた。

仁は部屋に帰ると、手早く着替えると夕食もとらずにベッドに入った。連戦。少なくとも村雲との戦いは一歩間違えば自身が死んでいたかもしれない真正正銘の殺し合い。友と認める相手との殺し合い。奈々華は夕食の準備もしていたが、フイにされても何も言うことはなかった。念のために作っていただけで、仁が食事をとる可能性は限りなくゼロに近いと予想していた。仁は疲れきっていた。仮に元氣でも食べ物が喉を通るとも思えなかった。

奈々華が違和感を覚えたのは、仁の寝顔を確認するためにベッドに近づいたときだった。勿論やましい意図ではなく、仁がうなされたり涙を流していないか見るためだった。もしそのようになっていても、彼女にはどうしてやることも出来ないが……せめて手を繋いだり、共に泣いてやることくらいは出来るから。

「お兄ちゃん？」

いびきはおろか、寝息すら立てていなかった。奈々華からはそっぽを向くように壁に対している顔は、瞳も唇も強く閉じられていた。

「もしかして眠れないの？」

枕に乗った仁の頭が小さく動いた。

「……眠りたくないんだ」

やがて消え入りそうな声が返ってきた。

「どうして？」

木の柵に手をかけて、奈々華は仁の顔を覗きこむようにした。そうするとますます仁は壁側に寄った。可愛いなあ、と奈々華は口の中だけで呟いた。

「怖いんだ」

「村雲さんのことを忘れそうで？」

小さな子供に尋ねるように。

「……俺は慣れていつているんじゃないかって」

「慣れる？」

「うん」

「何に？」

「誰かを殺すことに」

「……」

仁は背中越しにも、無言の奈々華が優しい顔をして自分の話を聞いてくれているのを感じていた。

「近藤さんを殺した時は辛くて、怖くて眠れなかった」

「うん」

「疲れていたはずなのに眠れなかった」

「うん」

「祐君が死んだ時、申し訳なくて、情けなくて眠れなかった」

「うん」

「君に泣きついた」

「うん」

「今回は自分で選んだから……」

声が震える。

「でも本当はどうなんだろう？　ただ慣れただけなんじゃないのか？　少しづつ壊れていつているんじゃないのか？」

「……」

二人の間に沈黙が横たわろうとしたとき、奈々華がそっと仁の頬に手を当てた。

「奈々？」

「人は慣れる生き物だよ」

「……」

「でもそれは壊れてるんじゃないかって、汚れていつているんじゃないかって、人の強さなんだよ」

「……」

「確かに慣れたくないこともあるよ。けどそれは人が心を保つための強さ」

「弱さだよ。慣れなければ保てない心なんて」

「そうかもね」

仁は簡単に意見を翻した奈々華に責めるように向き直る。目には微かな苛立ちが見えた。

「適当なこと……」

「強くても弱くてもいいよ」

「え？」

「お兄ちゃんはお兄ちゃんであって欲しい。私の知る、私を一番に大切にしてくれる優しいお兄ちゃん」

「……」

「私を選んでくれてありがとう。だから私も同罪。苦しい時は私も一緒に苦しむ。楽しい時は私も一緒に笑う」

「奈々華……」

不意に奈々華は晴れやかに笑う。そして当然のように柵を乗り越え、布団をめくって仁の隣に潜り込む。

「だから、しょうがないから…… 今日是一緒に寝てあげるよ」

やましさ半分、やさしさ半分。仁はその変わり身の早さに呆れた顔をするが、黙って受け入れる。

「……ありがとう」

再び奈々華に背を向けた仁から返ってきた精一杯の声。

「おやすみ」

その背にピタリと張り付いた奈々華の全てを包み込むような声。口を挟むことなく部屋の中で二人を見守る猫と刀の精霊は、心の中で祈った。願わくば、今だけは、彼らの休息が安らかなるものであるようにと。

終章 第二百話…試験

中谷精霊学園唯一にして最大の考查試験は予告どおり、一年の集大成とも言うべく教科書にある全ての範囲を網羅していた。問題数にして約百問。試験時間は三時間。本格的な記述問題は後ろ四つだけで、時間を考慮すると易しいのだと言う。高等部の三年は、卒業試験として実地も含めて、三日に渡って精査されるのだそうだ。

カリカリと鉛筆の芯が削れていく音が何重にもなり、勉強嫌いの人間にはある種の強迫観念のようなものさえ与える。仁はシャープペンシルを指で回しながらも、閃いたという顔をした後は、何かを答案に書き込んでいる。少しは真面目に解いているようだった。しかし時折顔が上がる。視線の先は、教卓の向こう、教員用の椅子に腰掛ける新居の姿だった。本来、彼らのクラスの試験監督は坂城。代役とだけ告げた彼女は椅子の上から神妙な面持ちで教室内を油断なく見渡している。

「そこまで」

凜とした声に、地虫が鳴くように間断なく続いていた鉛筆の音が止む。教室内は試験後独特の解放と安堵の雰囲気包まれる。きっと結果いかんではなく、厄介事が一つ終わったことに心が軽くなるのだ。不出来なら退学という道すら十分に考えられる厳しい考查であっても、人はいつまでも気を張り詰めたままはいられない。

後ろから前に答案を回していく回収方法。気の早い者は、自身の未来を乗せたそれを委ねてしまった時点で周囲の友達とテストについて意見を交わし始める。最後尾に座る奈々華と仁も例外ではなかった。二人ともやはり学生なのだ。

「お兄ちゃん、出来た？」

「まあ何とかね」

仁は苦笑する。実は進級は問題ないくらいには出来ていた。彼の頭の作りは悪くない。自身のいた世界ではそれなりに名の通った大学に通っている。偏差値で言えば上から数えたほうが早い。

「まあ大学生が高校生の理解力、文章構成力等々を加味して作ったテストを解くんだから結構汚いよね」

耳慣れない単語も、経験則に当てはめられない理論も、数ヶ月の間触れていれば自ず、頭に残る。

「あはは」

屈託なく笑い返す奈々華も出来は悪くなかったようだ。

「静かに！ 答案を回収し終えるまで私語は厳禁です！」

教員の対応も時空の壁を越えるらしい。主に兄妹に向けて発せられているらしかった。皆声を潜める中堂々と会話を交わしているのは二人だけだった。それに二人の会話は少し他と趣が違う。緊迫感や真剣味に欠けた。奈々華は仁に舌をペロツと出して見せて、前に向き直った。

「新居先生！」

解放の余韻に浸りながらまばらに解散していく生徒達を尻目に、仁は答案の山を抱え上げる白の魔術師に声をかける。

「あら？ 手伝ってくれるの？」

新居は歳相応でない可愛らしい声を出した。歳相応に男の扱いに長けているせいかもしれないが。仁は曖昧な笑顔を作った。

「いえ…… その。実は学園長のことなんですが」

新居はきょとんとした表情で仁を見つめ返す。厚意のおねだりをしたりしないのが、この教師の人気の所以なのかも知れない。

「あら？ こっちが聞きたいくらいよ。貴方の方が仲がよろしいでしょう？」

「……ええっと」

反応に困る。事情を知らない彼女は、浮名すら立ちかけている相手を気にかける仁を面白がっている。しかしすぐに仁の様子から彼の

心配がそういった理由からではないことを察する。

「ごめんなさい。知らないわ。ミルフィリアさんが今朝やってきて、試験官を代わって欲しいと言われただけなの」

心底申し訳なさそうな顔でそう言う。お役に立てなくてごめんね、と重ねて謝るので仁は恐縮する。

「いえ、それだけでも聞けて良かったです。ありがとうございます」
それだけでも推量は立つ。きっと彼女は昨日から部屋に籠ったままなのだ。

終章 第二百一話：友の範疇

「何を話していたの？」

部屋に戻ると奈々華の早速の質問。朗らかに笑っている実、目だけは笑っていないかった。兄の表情の変化を、微かな感情の揺れさえも見逃さない。詰問されるよりも余程気味が悪くて、仁はたじろいで妹から目をそらした。

「坂城の様子について聞いてみただけだよ」

「ふうん。それで？」

「いや。新居先生は何も知らないって」

「心配？」

「そりゃあ」

仁の目が窓の外へ。雪は永遠とはいかず、今朝二人が目を醒ましたときには止んでいた。それでも溶けるまでには至らず、斜陽を取り込んできらびやかに中庭を彩っている。午後の四時を回った頃、もしかするとまた夜半にかけて降るのかもしれない。凜とした空気。

「見に行くの？」

対象は新居から坂城へ。奈々華も忙しい。表情が晴れないのは、仁が肯定を返すと思っているから。

「いや……」

「ええ、ただ小さな否定。」

「え？」

「ここまでだよ」

「何が？」

得心いかない奈々華は仁の横顔を見つめたきり。

「他人の俺が踏み込んでいいのは、ここまでだよ」

線引き。ソフトパックのケースから一本、メンソールの煙草を取り出して火を点ける。もう部屋でも気兼ねなく吸えるようになった。

「ミリーに任せよう。家族の問題は家族にしか解決できない」

「……」

「お前がまた俺と一緒に居るのは……」

ふううと大きく煙を吐き出す。続くセリフが少し臭いから。

「俺にしか、家族にしか満たせない感情もあるからだろう?」

それは仁自身にも言えた。今もこうして本音を口に出せるのは、家族の前だから。

「いずれ元居た世界に帰る俺が何を言っても響かないよ」

締めくくった言葉は、卑屈になっているわけでもなく、厳然たる事実だった。

仁の携帯電話が鳴ったのは、もう辺りがすっかり暗くなった頃だった。ヒメネスからだった。夜勤に向かう足を伸ばして、仁のもとへ村雲の遺骨を届けに来てくれると言った。

指定した時間通りにやって来た。昨日まで村雲の遺体があった場所。一人出迎えた仁は、いつも彼に向ける笑顔を見せた。まるでまだ在職で、これから共に勤務に向かうような、そんな雰囲気だった。

「広畠さんは?」

「夕方から仕事」

やり取りも同僚のようだった。仁は小さな寂しさを胸に感じていた。しかしそれも自身で選び取った道の帰結だった。

「……そうか」

「うん…… これ」

ヒメネスの腕には、陶磁の骨壺が抱かれていた。漆を塗った黒に、金の菊があしらわれている。一目見て安物ではないとわかった。きつと広畠が気を利かせ、用意してくれたものだろう。慎重に差し出されたそれを仁もまた丁寧に両手で受け取った。

偉大な戦士、優しき友。利用して、選ばず、切り捨てた自身に彼を友と呼ぶ資格があるのか、仁はわからなくなっていた。

広畠の気遣い。察するに、仁の心を正しく汲み、丁寧に葬ってくれ

た。幻創痛や、黒の精霊騒ぎで迷惑を掛けた自分に、彼の厚意を受ける資格があるのか、わからなくなっていた。

仁は目頭が熱くなった。そんな彼を、今だってヒメネスは我がことのように、眉を曲げて見ている。分かち合おうとしてくれている。慌てて別の話題を振るのが精一杯だった。

「そういや、俺が辞めてから精霊はどうだ？」

苦し紛れの話題転換に、仁はまた自己嫌悪しそうになった。本来なら再会してすぐに聞くべき話題だった。彼らは自分が仕事を辞めてからも、変わらず親愛を向けてくれている。それに引き換え、自分はどうか、と。仕事を辞めてしまったらもう他人事。いきなり連絡を寄越したかと思えば、手伝ってくれ、と。虫の良い。自分のことしか考えていない。臍を噛んで、噛み千切ってやりたい気分だった。

「わからないんだ」

「……え？」

「どうしてか、ジンが辞めてからぱったり、黒の精霊も、強い精霊も出なくなったんだ」

仁は一旦自身の情けない後ろ向きな考えを頭の隅に追いやり、ヒメネスの言葉を反芻していた。

「おかしいよね。やっぱりジンのせいじゃなかったんだ」

「え？」

「だってそうでしょ？ もしジンがやってたんなら、一人になった今の方が断然やりやすくなって、もっともっと出てくるはずだもん！」

ヒメネスは事態に我が意を得たり。嬉々とした声。仁は彼のあどけない笑顔を久しぶりに見た。一片の翳もなく、五月の空のように澄み切った笑顔。仁はいよいよ骨壺を持つ手に力を込めた。

心がぐちゃぐちゃになってしまいうだった。ヒメネスの言うとおりであって、フロイラインの、平内涼子の仕業だったにしても、その意図は掴めないままなのに、仁にはそんなことはどうでも良いことだと思えてならなかった。

「あ、もう行かなきゃ！」

「……」

「またね！」

「ああ…… ありがとう」

搾り出した声は、不恰好にかすれていた。背を向けて走り出すヒメネス。仁がちらりと腕時計を見ると、夜勤の勤務開始時刻までは一時間を切っていた。ここからだと走ってぎりぎり間に合うかどうか。小さくなる背中を、仁は見守っていた。突如立ち止まった。くるりと振り返ると、恥ずかしくなるくらいの大声で「またね！」と手を振る。

「ああ！ またな！」

仁も叫んでいた。

終章 第二百二話：最低の追悼

耳が千切れるような寒さに街は支配されていて、道行く誰も彼も、冷え切った心と体を温めるために家路を急いでいた。街路樹たちの枝に溶け残った雪は、街灯に照らされて、硝子を散りばめたように輝いていた。だけどよく見ると、光っていない、若しくは反射の弱い部分も沢山ある。きっと光を受け入れる力のある結晶だけ、華麗に瞬くのだ。

すれ違いざまの女性から、強い香水の匂いが香り、鼻に残り、仁は僅かに顔を顰めた。ヒメネスと共に行けたなら、彼の心はもう少し穏やかだっただろうか。それとも今の彼にあの無垢な優しさは、冬の空気より身を裂くだろうか。何にせよ、その選択肢は彼にはない。もしヒメネスと仲良く歩いているのを職場の誰かに見つかったりしたら、恩を仇で返すことになる。謂れもない紛糾や疑惑に苛まれる彼の姿を思い浮かべるだけで胸が痛んだ。

「暗いな」

ポツリと独り言。静でさえ置いてきた。しきりに帯同を促した村雲の声が懐かしくなる。骨壺と、腰に下げた村雲の居なくなった村雲。夜目の利く仁と言えど、灯りのない階段を登るのは、少々危険だった。ただでさえコケが生えて足場は不安定なのに、その上昨日の雪。下手をすると転げ落ちるかもしれない。仁は一度首を左右に傾け、骨を鳴らした。そしてそのまま、春の日の午後、そこを登るように躊躇なく登っていった。

ぐじゅぐじゅと鈍い感触が靴先から、胸の内にまで入り込むように時折唇を曲げながら登った。きっと昨日から誰も階段を利用していないのだろう、雪は降り積もったままの姿で、冷気に固められていた。滑りそうになっても、仁は一つも声を漏らさなかった。ただ押

し黙って、修験者が山に登るように、険しい顔をしていた。

祐の墓は、やはり雪が降り積もったまま、冷え込むに任せていた。仁がここに来たのは、実は葬儀の時以来だった。二日に一度、仁は奈々華を連れ立って墓の、例の階段の前まで来ていたが、決まって階段を登りきるのは奈々華一人だった。そして墓の掃除を一通り終え、合掌して戻ってくる。仁はいつも階段の下で、自身の不義理に齒を食いしばり、尻拭いをする奈々華に申し訳なくて、俯いて待っていた。

あわせる顔がない。つまらない嘘を並べても誰に対しても何の意味もなかった。何よりそんなことをしては、仁は自分を決して許せなくなる。感情に論理の膜を張れば、多少は形になるけれど、感情に別の感情の膜を張っても、きつと上から貼り付ける感情を上手く演じ切れなければ、嘘にすらならなくて、自分の薄っぺらさを露呈するだけだ。

黒味がかったグレーの墓石の上に乗った雪を払いのける。つんと、すぐに体温を奪われるけれど、仁は表情一つ変えず丹念にそれらをのけた。暗さの中にあって、はつきりと刻まれた名が見える。「近藤 祐之墓」、仁は首をそのまま上げて、空を仰いだ。月は儂く下弦。それでも彼に戒めの名を、戒めの墓標を見せた。しばらく首を持ち上げたままだったが、やがてまた戻した。そしてそのまま、腰に下げた村雲を引き抜いた。銀色の輝く刀身が地面に刺さる。ザクっと積雪の上に立つ。祐の目前に晒された。

「村雲を斬ったよ」

答えはない。余韻が虚空に消える前に、仁はまた音を発した。

「友達を斬った」

墓所内は静まり返っていて、動物の気配さえなかった。境内の方も同様で、住職や関係者も居ないようだった。近くに居住用の建物は見当たらない。祐のもの以外にも、ミルフィリアの両親のものを含め、他の墓石にも雪化粧。どうやら此処の寺はあまり墓所の管理には頓

着しないようだ。

「驚きだろう？ 君はそんなヤツを許したんだぜ？」

実は仁は階段を登りきった辺りまで、自身の不義理をいの一に謝ろうと思っていた。だけど、口について出たのは自身の情けない、煮え切らない私事だった。

「きつと君と奈々華が秤にかかったら、君を斬った」
息をつかずに、捲くし立てるように一気に喋った。

「そう選ぶんだ」

最低だろ？ と笑ってみせる。思春期の少年が、警戒に、自己防衛に、虚勢を貼り付けたような笑みだった。すぐにばれる嘘。だけど彼は生憎それで良しと、若しくはその不実に気付かないほど幼くはなかった。寧ろ発した前提として意識化はあったのかもしれない。

「だけど後悔するんだ。もっと俺に力があれば…… って」
今度は眉を下げて甲斐性なく笑った。

「これ以上の力を得てどうするんだろうな。壊すだけの力を」
答えない。墓石は鎮座するだけ。

「君だから言うよ。ただ逃げ場を探してるだけなんだ。理不尽をして責任転嫁してるだけなんだ」
一つ大きな溜息をついた。

「どうして俺が…… っていつも心のどこかで思ってる。どうして俺がこんな取捨選択をしなきゃいけないんだ。どうして俺が誰かを殺さなきゃいけないんだ。どうして俺がこんな目に遭わなきゃいけないんだって」

僅かに凩いだ風が、左から右へ、仁の前髪を小さく揺らした。少し隠れ気味になっている仁の目元を露にした。

終章 第二百三話：灯

「誰にでも如才なく振舞っていたつもりだよ」

地面まで届ききっていないのか、村雲はグラグラと揺らぐ。倒れる寸前で、仁が手を出して支える。それでも倒れ込もうとする力が強くて、仁は諦めて鞘にしまった。

「でもその実、ただの右顧左眄」

自嘲は痛々しくもあった。

「父親のせいだと思った。母親のせいだと思った。俺に人との付き合い方を教えなかったから」

懷に手を入れて、煙草を取り出そうとしてやめた。

「それでもそれなりに上手くいった」

唇を隠すように手の平を当てた。寒さのせいだけではないだろう。指の先が震えていたのは。

「いつもと同じように。誰に嫌われることなく、やり過ごすように…… 一日を生きていた。いつもと同じように剣道をやった。いつもと同じようにやった。人を殺した」

誰に何の落ち度がなくても、突如日常は崩れる。磨耗した歯車がカランと外れるように。

「こっちに来了。最初坂城を助けるつもりはなかった」
でも、と沈んだ声が出た。

「見捨てることは出来なかった。必死さにほだされた」

ひよっとすると、祐がもし生きてこの言葉を聞いていたらどう言うだろうか。「今度は学園長に責任転嫁か？」と呆れるかも知れない。叱咤されるかもしれない。仁はそうされたいのかもしれない。

「……流された」

女々しい、と付け加えた。

「流されて見えたものもあるんだ。得たものもあるんだ。そういうのを度外視して、弊害だけを被害妄想みたい……」

仁の目に献花が留まった。寒さの中で、雪の欠片をかぶって小さく輝く。枯れ行く定めに逆らうようにも見えた。

「……」

仁は無言で米神を掻いた。

「すまない。君が何も言い返さないから、気持ちの整理につきあわせてしまった」

本当に目の前で対峙しているように、心苦しそうな笑みを浮かべた。「明日花を供えに来るよ。奈々華と一緒に……もしかして邪魔かな？ 君は奈々華の事を少し意識していたみたいだしね」
仁は弱々しい笑みのままではぐらかした。

「冗談だよ」

それじゃあ、と背を向けて歩き出す。

階段を下り終えた頃に、肝心なことを話していないことに気付いた。近藤の遺体の件だ。いつの間にか緊張していた。話すつもりがなかったことを長々話して、喫緊の報告をしなかった。思わず舌打ちが出る。しかし、足が戻りかけたところで、いやこれで良いのだと思いついた。取り返せそうになった、もう少しで取り返せる。坂城の体面なんかも慮ってこれまで自重してきたが、限界に近い。もう待っているだけでは意味がないことがわかった。単身アメリカに乗り込んででも奪い返してくる。その時に、携えて、報告しよう。経過など教えても意味はない。

そのまま学園へと歩く。時計を見やると夕食の時間に近づいていた。ふ、と祐の顔が浮かんだ。真っ赤な顔で反論している。先ほどの冗句の時だ。ついに見ることはできなかったけれど、きっとあんな風にムキになって否定するんじゃないだろうか…… 笑みがこみ上げる。

もし世界の一つ一つが、数ある可能性の枝のそれぞれを辿った収斂なら、こんな世界もあっても良い筈だ。奈々華と祐、二人が恋人同

士になって、俺がその二人を見届けて朽ちる。二人が笑っているのを見てから断頭台に登れるなら、それは数少ない幸せの世界ではないのか。奈々華はああ言ってくれたが、俺を許してくれる稀有な人間はきつと祐君ぐらいだ。信賞必罰。いずれ必ず訪れるだろう。その時彼女を巻き込んではいけない。俺のせいで人生を狂わしてしまった。今また立て直して行く。その過程に俺が必要なら、いくらでも手を貸そう。いつか俺の手が要らなくなる時まで…… だから二人が、彼が笑っている世界、彼女が笑っている世界。近藤が死んでいなければ尚いい。村雲が死んでいなければ尚いい。夢想する。懐から煙草を取り出す。ジッポライターを開けて擦るが、火は出ない。油が切れているのか。ジャツジャツと虚しい音だけが響いて親指が黒くなっていく。

「……マツチ売りの少女でもいいんだけどな」
つまらない独り言は冬の空に吸い込まれていった。

終章 第二百四話：ほろ酔いの距離

向こう三日は晴れが続くらしい。

根雪となれずに終わった今年の処女雪は、泥や土を取り込んで、黒や茶にその色を変えた。白のままなら綺麗だともてはやされるのに、自然物が混じり合っただけなのに、人々はまるで汚物を見るように靴で踏むことさえ嫌った。学園の中庭の冬景色もまたそのように無残に変わっていた。

「今日は随分遅いんですね？」

仁の腕に巻かれたシルバーの時計は、夕飯時を少し過ぎた頃、午後の八時。

「それに息が酒臭いですしね。呑んできたのですか？」

「わざわざ説教するために待ち伏せなんてしてたのか？」

アルコールを普段から口にしないミルフィリアは、それを異質な匂いとして敏感に察知する。あまり距離を詰めない仁の口からそれを嗅ぎ分ける程に。

「待ち伏せなんてしてませんよ。たまたま見かけたから声をかけただけです」

嘘だ、という顔はしたが、声には出さなかった。鈍く光る月さえ、厚い雲に覆われて、二人を照らす光源は、学び舎からちらほら注ぐ蛍光灯。まばらなのは、考查を終えて再び実家へと戻る生徒も多いから。仁は「休みの多い学校だね」と、一度坂城をからかったことがある。

「……どうして来ないんですか？」

本題。

「何のこと？」

「遊案ですよ」

ぷつぷつと途切れる。まるで何か腹の中を探り合うようで、二人ともどこかバツが悪そうだ。距離。時間にすると一日二日程度、顔を

合わせなかったただけなのに。

「いつか言いませんでした？ 浅慮と遠慮を勘違いしてはいけないと」

「……」

汚い雪を踏みしめ、ミルフィリアが仁に近づく。拳銃を持った暴漢が近づいたわけでもないのに、仁はジリと後ずさる。

「貴方は、貴方が幻創痛に苛まれていた時も我々を近づけませんでしたよね？」

「……」

「それも遠慮ですか？」

「……」

仁は鉛を飲まれたような顔で固まっていた。成熟しきらない子供が見せる素直な困惑に近かった。事実、恐らく自分は目の前の二つ年下の少女に比べて、幾らか精神的な成熟度で劣る。仁はそう考えていた。

「遊案は…… 遊案は自分を責めていますよ」

最悪の状態は脱したのか。仁の顔に一瞬浮かんだ安堵を、ミルフィリアは見逃さない。忌々しいものを見るように目を細めて、

「貴方が自分のところを尋ねてこないのは、自分のせいだと」

「な、なんで」

「自分がもっと早くに、現実を見つめていたら…… 木室さんの裏切りを受け止めていたら、貴方はラインハルトを取り逃がさなかったかもしれない…… 近藤の遺体を取り戻すことが出来たかも知れない」

「……アレは俺が。それに結局彼女の位置を掴むことは出来なかった筈だから」

「結果論とは貴方らしくもないですね」

一際鋭い、突き刺すような口調だった。仁は気圧されて口をつぐんだ。

「そうですね。彼女も腐ってもフロイラインの幹部。どうしても尻

尾を掴むことは出来なかったかもしれない。だけど…… あの子がもっと深刻に事態を捉えていたら、もっと方策があったかも知れない。少なくとも話し合うことは出来た。違いますか？」

「……坂城は今はどんな状態なんだ？」

ミルフィリアの爪先の辺りに目を落として尋ねた。黒いブーツの先には、汚れた雪が小さく張り付いていた。窘めるより、責めるような瞳から目を逸らした仁に優しい言葉はかからなかった。

「貴方が自分で確かめないから、遊案は、最善を尽くす道を経た自分を、貴方が怒って心配してくれないと思っっているんです」

静かな声音なのに、刃が隠れているようだった。

「いい加減、目を背けるのはヤメにしませんか？ あの子が前を向いて歩くには、貴方の手が必要なのですよ」

「……」

「気付いていないなんて言わせませんよ？ 貴方は人一倍他人の感情の機微には聡いでしょう？ 距離を測って…… 見えない心の内を探って…… 敵意と好意を鋭く悟って…… そうやって生きてきたんじゃないませんか？」

「……」

ふうと、一つ溜息を吐いたミルフィリア。少し、ほんの少しだけ眼光が鈍くなったように見えた。

「突っ込みすぎましたね」

もう一度溜息。瞳を閉じて、開いたときにはいつもの彼女。

「なんにしても、これ以上私が口出すことでもありません。これだけ言えば…… 貴方は馬鹿ではありませんからね」

「……」

「ただ一つ。彼女に接するのなら、家族として接してあげてください。でなければ後悔することになりますよ」

仁が何か言いかけて、それを遮るように、ミルフィリアは静かな、しかし有無を言わさぬ口調で続けた。

「貴方と遊案は家族になれるでしょう？」

おやすみなさい、と残して。去り行くミルフィリアの後姿を仁は黙って見つめていた。濃紺のスカートはひらひら揺れ、黒いブーツはてらてら光っていた。

「あんな…… 子供が白馬の王子様に抱くような憧憬を……」

大きくかぶりを振っても、完全に醒めてしまった酔いは戻ってこなかった。

終章 第二百五話…やっぱり野焼ラーメン

「野焼きだね」

お兄ちゃんがスンスンと鼻を二回鳴らす。目を閉じて匂いを堪能している。言われる前に、私も乾いた空気の中に、何かが燃える匂いを嗅ぎ取っていた。

「どこかな？」

目を開けて、お兄ちゃんはキョロキョロと辺りを見回す。お寺の近くは、都会の喧騒と縁遠く、緑もちらほら見られる。家々の中には自前の畑を持つものもあって、発生源はわからない。

祐君のお墓を掃除して、お花を供えて、学園に帰る途中。他のお墓には全て雪が被さっていたのに、祐君のだけは綺麗に払われていた。何も言わなかったけど、きっと昨日の晩、お兄ちゃんは一人で追悼に行ったんだ。だって…… 酔えないくせにお酒を呑んで帰って来て、今日は一緒に階段を登ったから。憑き物が落ちたような顔で私の横を歩いている。

スンスン。また鳴らす。

「本当に好きなんだね？」

心が柔らかい毛布に包まれたようで、心地良い空気が鼻から漏れる。お兄ちゃんは草が燃える匂いが好きだ。やっぱり変わってなかった。枯れて、静かに終わりを迎えた自然を弔うような所作を私もやっぱり好きだ。なんてのは後づけで、きつとお兄ちゃんが好きだから、私も好きなんだと思う。

「ああ。良い匂いだ」

終わりの美学。郷愁。前を向けば、古い家々に囲まれたアスファルトの道が続いている。泥混じりの雪の上に、自転車のタイヤの跡や人が歩いた足跡。踵の方で踏むと転びそうになる。だから爪先で。ザクザクザク。

「昼はどこかで食べて帰ろうか？」

大分通日も賑やかになってきて、ダウンタウンが近いことを告げている。野焼きの匂いはもうしないけど、お兄ちゃんの顔は穏やかなままだった。

廃れても栄えてもないラーメン屋さんに入る。「何が食べたい？」と聞くお兄ちゃんに「お兄ちゃんが食べたいものでいい」と返すと、適当に目に付いた此処を選んだ。大通りから少し外れている店内は昼時を少し過ぎてもサラリーマンが数人居た。カウンターに二人で並んで座ると、人懐っこそうな笑みを浮かべた店主が注文を聞く。豚骨ラーメンを二つ頼むと「あいよ」と元氣な声で答えてくれた。

少しは整理がついた筈だった。祐君の墓に行ったのは、きっと少しは吹っ切れたから。多分。それに一役買った自負もある。過信はしないけど。私にお兄ちゃんがいないとダメなのと一緒に、お兄ちゃんにも私が要るんだ。

村雲さんの遺骨についても、処置は決まった。昨日帰って来て、静さんと話し合って、決めた。人の慣習に則して葬るのは、彼も望まないだろうと。全てが終わって、契約が終わって、静さんが精霊の世界に帰るときに、一緒に持って帰って埋葬する。「撒く」と言っていた。きっと村雲さんが生まれて、育った、愛すべき土地に。その上に花が咲けばいいな。そう思った。

「まだかな？ お腹空いたよね」

店主に聞こえないように、お兄ちゃんは声を落として私に笑いかける。

「チャーシュー大きいと良いな」

人の氣も知らないで……でも可愛いから許してしまう。ゲームソフトの発売を待ちきれない子供のように目を輝かせて。だけど時々、やっぱり曇る。どうしてだろう。それでも完全には吹っ切れていないから？ 近藤さんの遺体がまだだから？ それともまた何かあった？

「はい。豚骨二つね」
ドンブリ鉢が二つ、ぬつと差し出される。受け取って目の前に置くと、隣のお兄ちゃんは「いただきます」もしないで、飢えた獣のよう顔ごと鉢に埋めんばかりの勢いで麺をすすりだす。薄茶とも白ともつかない色のスープには気泡のように油が浮かんでいる。焼豚は比較的大きかった。

終章 第二百六話：擬似連続予告

ゲームセンターに寄って帰ろうと言い出した時に、お兄ちゃんがまた抱えた問題がこれまでのものと毛色が違うものと判断した。つまり、近藤さん、祐君、村雲さん、お兄ちゃんが殺めてきた人々は関係がないということ。でも、だったら……

やはり例の如く「お兄ちゃんがやりたいヤツでいい」とことわると、お兄ちゃんは店内に入った途端、磁石が吸い寄せられるように、パチンコ台が置いてあるコーナーへと向かった。私も何度かこういう機会に、連れられてやったことがある。筐体は整然と並んでいて、本屋の本棚の配列にちよつと似ている。

「あ！ 牛がある！」

グルグルとコーナーを回っていたお兄ちゃんが嬉しそうに声を上げて、一つの台に座る。こういうときのお兄ちゃんは大抵ろくでもない、とはわかっていても、隣に座らざるを得ない。

「牛？」

「CR猛牛ファームだ」

色んなパチンコがあるのは知っているけど、酷いネーミングだ。筐体を見ると、大画面の液晶に「デモムービー」なるものが流れている。角の生えた牛が牛舎の人間を弾き飛ばしている。やっぱりろくでもない。せめて他のにしよう、と切り出す前には、お兄ちゃんは百円玉を投入してハンドルを握っていた。

「面白いからやってみろって。どうして検定を通ったのかもわからんくらいにファンタスティックな台だから！」

こういうときにだけ妙に興奮するお兄ちゃんを尻目に、私も百円玉を財布から取り出してお金を入れた。

少しわざとらしい、本当に少し、私にしか分からないくらい。大概は私に何か後ろ暗いことがある時…… ついお兄ちゃんの顔を見

る。

「……大丈夫だって。そろそろどっちか当たってもおかしくないはずだから」

少し焦ったような声音。どうも凝視に近くなっていたみたいだ。私が無言のうちに当たらないことに抗議しているとでも思ったらしい。遊戯を開始して三十分以上経過していた。苦笑して、八重歯で噛むようにしていた煙草を灰皿のへりに置く。

「そんなに見つめられると、お兄ちゃん変な気持ちになって、奈々華ちゃんを襲っちゃうぞ？」

「……いつでもどうぞ」

私に隠していたいこと……

目覚めたときのように、じわりじわりと頭がはっきりしていく感覚。そうだ。どうして今まで気付かなかったのか。お兄ちゃんはきっと私の秘めた想いには気付いていないけど、私がお兄ちゃんの女友達に良い顔をしないのはわかっている。気に病んでいる。

「おお。奈々、熱いぞ」

私の視線を自分から外そうとする気色の悪い冗談を取り合ってもらえなかったお兄ちゃんは、違う言葉を吐く。目は私の目の前にあるパチンコ台。仕方なく私も前に集中すると、液晶の左から右に、赤い体色の牛が駆け、右端で静止しようとしていた飼育員を弾き飛ばす。きりもみしながら飼育員は吹き飛ばされていく。ガシャーンと大きな音がして、右の図柄も止まる。

「よし！」

「何がよしの？ 何か飼育員さんが可哀想なんだけど」

また左から右へ。当然のように人を弾き飛ばす猛牛。

「擬似連って言って、続くほど熱いんだよ。つまり何回も飼育員がぶっ飛ばされると良いんだ」

「パチンコってこんな馬鹿みたいなものばかりなの？」

「いや。この台の演出の奇才ぶりが半端じゃないだけだよ」

ガシャーンとまた大きな音。筐体自体もビカビカ光り出して、目に

悪そうだ。

「やっぱりいつ見てもこの擬似は研ぎ澄まされてるなあ」

本当に嬉しそうだ。液晶では、今度は飼育員さんが踏ん張って牛を止める。直後に左右の図柄が同時に止まって、「モウー」と音が出る。リーチなのだそうだ。

液晶がブラックアウトする。ロングリーチというヤツらしい。

「おお！ 当たったよ！」

お兄ちゃんの声は興奮を抑え切れていない。私は何が何だかわからない。暗転が明けると、つなぎを着た飼育員さんが赤い顔をしてモジモジしている場面が映った。口元が半笑いで、気持ちが悪い。

「アニメーションにして、素晴らしいキモさだろ？」

何を誉めているのかわからない。

「ねえ、牛は？」

この台に興味なんてないけど、一応は牛をメインに据えているのに、牛など出てくる気配もない。

「ああ、発展先矛盾なんだ。突進擬似は牛系リーチに発展するのが普通なんだけど……」

突進擬似というのはさっきので、牛系リーチ？

「これは飼育員告白リーチ。飼育員のお兄さんが好きな女の子に告白して成功すれば大当たりなんだけど、当たっているのは見たことがない。一応0・000002パーセントの信頼度なんだけど」

「それ、当たらないんじゃないの？」

「いや、それが当たるんだよ…… まあ見てなって」

言われた通り、見ていると可愛らしい少女がやってくる。飼育員さんが電信柱の影から飛び出して手紙を差し出す。ラブレターらしい。差し出した場面でタメを作っている。飼育員さんの顔と少女の顔が交互に映し出されて、図柄が5と6を行ったり来たり。しかし突如視点が引いて、飼育員さんが殴り飛ばされるシーンに。青年が映し出されて、何やら喋っている。お兄ちゃんの台も何か激しい音を出していて、聞き取れない。きっと恋人なんだろう。そう思うと、ふ

と飼育員さんが可哀想になった。恋人が居るとは知らずに、想いを暖め、清水の舞台から飛び降りるような覚悟を決めてそれを伝えた。恥ずかしいだろうか。悔しいだろうか。いや…… きっと悲しいはずだ。体面なんてとっくになくなり捨てているんだから。

終章 第二百六話：擬似連続予告（後書き）

趣味です。スイマセン

終章 第二百七話：確認行為

「外れたよ？」

画面は再び暗転する。大丈夫だって言ったじゃん。不安になっちゃうよ。

お兄ちゃんはへらっと笑う。画面は5、6、5。やっぱり揃ってない。当たってない。また視線を隣に注ぎかけたところで、「変動」が始まらないことに気付く。すると画面の上の方に牛が現れる。あろうことか、お尻を下に向け、ウンチを落とした。ボーンと大きな音がして、ウンチが落ちた辺り、つまりリーチラインが爆発する。ウンチが爆発する原理がよくわからない。余程訝しげな顔をしているたのだろう、お兄ちゃんが声を上げて笑う。

「復活だよ、復活」

「どうしてウンチが爆発するの？」

何だか、とても馬鹿らしくて、飼育員さんに思わず感情移入してしまったことが少し恥ずかしくなってくる。

「細かいことに突っ込んだら負けだよ。この台は」

煙幕が晴れると、綺麗に赤い図柄、777。

「奈々ちゃんは7を揃えるのが上手いなあ」

お兄ちゃんに誉められて、素直に喜べないのは、私にとってはとても珍しいことだった。

「学園長さんのところに行くの？」

二人は結局二時間弱、ゲームセンターで遊んで帰路についた。疲れは見えず、されどどちらも会話を積極的に行う気配はなかった。そんな中、奈々華が発した言葉だった。

「……俺、話したっけ？」

ううん、と奈々華は首を動かすだけで答えた。

「じゃあどうしてわかったの？」

もう何度登ったかわからない坂。学園へと続く坂。坂城が切り盛りする学園。

「何となく。お兄ちゃんの顔が時々翳るし、後は…… はしやぎ方かな」

「はしやぎ方……」

「口では上手く説明できないんだけど、どうも不自然な感じがしてしかし、昨晚の仁とミルフィリアの会話ほど、張り詰めたような空気はなかった。通わせた心、なくなった距離。」

「時々お兄ちゃんは、お前の鋭さが怖いよ」

僅かに口元は緩んでいるが、目は笑っていなかった。途方に暮れた乾いた笑い。「参ったね」と続く。

「……行くの？」

「行かないよ」

「え？」

即答は予想外だったのか、奈々華は聞き返す。

「前にも言ったけど、俺がアイツのために出来ることはないよ」

「……」

「優しくすることは出来る。慰めの言葉をかけることも出来る。だけど、それが意味を成さないことは最早明白だろう」

本室が去ったとき、それは実証された。彼がかけるべきだった言葉は、何の足しにもならない慰めではなくて、目の前に希望を掲げる、極論でもなんでもなく、愛の言葉だった。

「安心した？」

「え？」

「さっきのパチンコ台でもあったろう？」

「はい？」

奈々華は驚き、そして続いた言葉に疑問符。

「ほら？ 飼育員告白リーチ。飼育員が出来レースみたいに振られたろ？」

「うん。殴られたやつだよね」

「そうそう」

「あの相手の恋人さんが何言ってるか聞き取れなかったんだけど」

「あれは恋人じゃないよ。お兄ちゃんだ」

「仁君ってこと？」

「んなわけあるか。どんだけ痛い妄想だよ」

仁は思わず嘔き出す。

「あの女の子のお兄ちゃんなんだよ。これ以上俺の妹に付きまとうな。このストーカー野郎…… って言ってたんだよ」

「酷い言われよう……」

「仕方ないさ。妹ってのは可愛いもんだからな」

「お兄ちゃん」

奈々華の杞憂は晴れたのか、仁を見つめる目には熱が宿る。

「お兄ちゃんも私に変なのがまわりついたら、ああやって守ってくれる？」

「ははは。まあね」

仁の頬は少し赤い。どうやら自然に口をついて出た言葉だったらしく、今更になって照れくさくなったようだった。そして、それは奈々華を殊更喜ばせる。

「ずっと？」

「……お前が望むだけね」

奈々華は感極まる。もしかするとその形の良い唇からは、放っておくと歓喜の声飛び出すのかもしれない。その彫像のようにくつきりとした二重の瞳からは感涙が零れるのかもしれない。だから変に筋肉を強張らせた顔を、俯いて想い人に見せないようにして、ずっと仁の手を掴んだ。指を絡めた。仁はまだ気恥ずかしいのか、握り返す力は弱かったが、奈々華にはそれでも十分すぎた。

予報どおり、雲を押し退け、太陽が冬の空に輝いていた。

終章 第二百八話…誕生

通常、二人を出迎えるのは、シャルロット、アイシアの猫組。静を帯同していなければ、彼もそこに加わる。迎えると言うほど大仰なものでもないが、一応「お帰り」の一言くらいはかけてくれる。しかし今日は一味違う。静は待機しているが、猫二匹は連れ立って散歩にでも出かけているのだろう、その傍に見慣れない小さな子供がいた。褐色の肌があらわになっている。着衣がない。

驚きと同時に、その小さな生き物が何であるかを二人とも即座に察した。殻が転がっている。卵が孵ったのだ。小鬼の大人、という表現であっているのかはわからないが、少なくとも仁が見た個体とはかなり違う。目は人と同じ、二つ。体の作りも、人との相違を見つけるほうが難しい。

「……」

「おかえりっす」

「……ただいま」

辛うじて声を出したのは仁。

「静…… その子供は……」

「お兄ちゃんダメ！」

はたと何かに気付いた顔をして、大声を上げたかと思うと、奈々華は突然仁の目に手を当てる。

「わ！ な、何だ。血迷ったか奈々華」

「妹さん。そんなに神経質にならなくても……」

「ダメ！ お兄ちゃん的情操教育によくない」

女の子、と識別して間違いないようだ。勿論起伏のない体に、欲情するタイプに仁が該当するわけではないが。必死に腕を伸ばして、仁の目を塞ぐ奈々華の顔は、羞恥か体を動かしているためか、真っ赤だ。

「奈々。わかったから。俺は後ろ向いて退散するから、服を着せて

やってくれ」

つぶらな二つの瞳が、兄妹を不思議そうに見つめていた。

だぼついた奈々華の服を着て、きょとんと見上げる仕草は、可愛らしいと意外には形容しがたい。仁も奈々華も途方に暮れていた。精霊の中で、人の言葉がわかるものは少ない。そして彼女はその希少な部類には入っていなかった。これは既に、成体のそれと戦ったことのある仁は理解していたことだが、実際面と向かって対した時に、これほど不便だとも思っていなかった。なまじっか人と似た姿をしていることも、コミュニケーションに諦めをつけきれずにいた。つまりは……

「名前はないのか？」

だとか。

「お腹空いていない？」

などと、ついつい言葉をかけてしまう兄妹の姿があった。そして二人で顔を見合わせて落胆を確認する。特に奈々華はたまったものでない。アイシアのように猫ならば構わないが、意思の疎通が出来ないまま、そこいらで小用でも足された日には、仁の情操教育とやらの多大な悪影響を及ぼすのだから。

「じ・ん」

仁が切り口を変える。どうやら自分の名前を覚えさせようという意図。例の成体との戦いで、声帯が震えることはわかっていているわけだから、不可能な話ではないのかもしれない。ないのだが……

「いい加減諦めたらどうっすか？」

静の言葉が一番冷静で、筋が通っている。数度繰り返したが、鬼の少女は口を動かすことらしい。仮に知らない外国語を話す人間が居たとして、果たしてその彼、彼女の言葉を真似ようとする人間がどれほどいるだろうか。勿論語学学習で異国の地を訪れているだとか、特段の理由がなければ、人は困った笑いを浮かべてやり過ごす

のではないだろうか。それは習得のメリットも、今一瞬その彼、彼女と話さなければいけない必要性も感じないから。

「小鬼に言葉で意思疎通を図る文化はないはずっす」

加えて少女の場合は更に複雑なようだ。そうになると、先ほどの例になぞらえるなら、仁の姿は、目の前で口を使って奇妙な音を出す異文化人に見えるのだろう。これではもう誰も真似などしようとは思わない。早くどこかに行ってくれ、だとか、どうして自分に絡むんだ、なんて非建設的な考えしか出てはこない。

「……文化ってのは、生まれ持ったもんじゃないだろう？ 何とかならんか？」

仁の言うことにも一理ある。

「どうしてそういう文化がないか、は考えないっすか？」

「……」

奈々華が顎に手を当てて小首を傾げてみせる。対照的に仁は下唇を突き出して首を小さく振る。

「声帯が、或いは喉の構造が、複雑な音を出すのに向いていない、進化していない」

「ご名答」

少女は音の発生源を追いかけて、各々の顔を見回していた。

終章 第二百九話…幸福追求権

「じゃあ行ってくるから」

「うん。すまないね」

「……」

「奈々？」

「……行ってきます」

奈々華は少女を連れて、店内へと入っていった。以前家具を買ったショッピングモール。そこに子供服を専門に扱う店舗も入っているのを、インターネットで確認したのが三時間ほど前。何やかんやと用意を済ました頃には、いい加減いい時間になっていた。夕食もここで済ますことになる。

「妹さんもコロコロ忙しいっすね」

幸い店舗の丁度真ん前に休憩用に木製のベンチが置かれていて、仁は半笑いを浮かべながらそこに腰掛けた。

「ヤキモチっすね」

「ヤキモチだね」

仁のその微笑のようなものは、この話題が済むまでは顔に貼り付いていそうだった。

「もっと可愛がってやればいいじゃないっすか」

「もう十分可愛がっているじゃないか」

「そうっすか？」

「日がな一日一緒にいて、たまには外に一緒に遊びに行つて、あの子のやりたいことはほとんど許してるじゃんかよ。これを可愛がっていないってんなら、何が可愛がってる状態なんだよ？」

「……」

二人はそこで少し黙る。目の前を過ぎる人間が多くなってきた。仁が通う学園が少し早い春季休業に入ったことも関係していた。現に通路を手持ち無沙汰に歩く人間のうちには、仁の顔を見て足早に過

ぎる中高生らしき年恰好の少年少女もいた。砂浜に寄せては返す波のように、周期的に人の動きは、示し合わせたように、ムラを作る。大衆心理というヤツなのか、単なる巡りあわせの妙なのか。そしてまた引いた。タイミングをはかって、仁が「あのさ」と口を開く。「前にシャルロットに言ったことがあるんだけど、アイツに子供にするように接するのはおかしいって」

「おかしい？」

静が子供ののように、愚直にオウム返されると、仁は大抵言葉に詰まった。誘導尋問が始まるようで。

「アイツは十七だからね、もう」

「あの子は二十七になってもああだと思うんすけど？」

「まさか！ 勘弁してくれ」

咄嗟に噴出しはしたけれど、仁はすぐにその笑いを引っ込めた。

「あんた等の過去に関係があるんすか？ それとも可愛くない？」

「可愛くないってことはないさ。あんなに懷いてくれてるんだから静が口を挟む前に、仁は「前者だよ」と吐いた。「お前には本当に敵わないな」ともこぼした。

「もう跳ね除けられるようなことはないだろうけどさ」

「……」

概要も説明しないまま。わからないならわからないで良いや、という気持ちなのか、この春秋高く、圧倒的な経験則を培ってきた相棒に全幅の信頼を置いているのか、仁は一から説明する気はないようだった。

「どうしても、体の方がね…… 撫でてやりたいと思っても、腕は引っ込んだりするもんだ」

彼にとってはとてもショッキングな出来事で、三年間ろくに触れ合うこともなかった妹に、仲直りしてはいそうですかと簡単にはいかないのも道理。

「心も離れてたんだ。一度思わず抱きしめたときも、少し後悔したくらいだ。今でも…… 多分あの子が求めているのは、そういうこ

となんだろうとは、思うんだけど。多分でしかないんだ」

「……」

思えば兄妹の触れ合いは、常に仁の受動、奈々華の能動。

「なあ。生存権を知ってるか？」

「いえ」

突如、仁の話が飛んだ。飛んでいるようで飛んでいないことを、静は既に知っていた。

「こっちにあるのかは知らないけど、ウチの世界では憲法二十五条だね…… すべて国民は、健康的で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する、だっけか」

「いいっすね。いい理想論だ」

「だろう？ これは幸福追求権なんて解釈もある」

「へえ」

「じゃあさ。奈々華のそれはどうなってたんだろうね？」

「……」

「子供にとって、家族と触れ合えないことは、果たして最低限度の生活が守れているのか……」

「……」

「俺がこの条文を好きなのは、これは国の義務として謳っているけど、人が人に接する、相手の尊厳ってヤツだね、それを守っているべきなんじゃないかって。人が人の最低限度を破っちゃいけないえと戒めてるからなんだ」

国が社会の拡大版なのだから。だから憲法に記載されている。最高法規。「人殺しのセリフじゃないんだけどね」と軽く茶化して、

「俺は奈々華に、その誰もが得るべき最低限度の生活を与えなかったんじゃないかって。思うんだ。多感な時期に、一人ぼっちにした。恋人や友達が、代替があったならいい。だけど、もしそれもなく、俺にそれを求めて生きていたなら…… 家族は俺一人なのに」
また情けなく笑った。

「今も俺は、何もしてやれていない。ウジウジつまらない考えに囚

われて」

「……」

「情けない兄貴だよな」

通路の向こうで、ポツポツとまた人波が形成されていた。

終章 第二百九話：幸福追求権（後書き）

もう何年も前に得た知識ですので、間違っていたら申し訳ないです。

終章 第二百十話：灰色のバツタ

予報は三日目に裏切った。朝からどんよりとした雨雲に覆われた空が、昼に差し掛かる頃合に、ついに泣き出した。汚れた雪に追い討ちをかけるように降り注ぐ雨は、どうにも残酷に見える。ふいとベッドに目をやると、昨日の騒動の主、鬼の少女があどけない寝顔を晒していた。隣には奈々華、不貞寝を決め込んでいる。

やはり同属性の恩恵か、少女は俺に特別懐いた。夜眠る段になっても、ぴたりと寄り添って離れない彼女を、結局ベッドに招き入れることになったが、ここで奈々華が噛み付いて、誰がどこで寝るや寝ないやの白熱した議論に発展した。俺としては子供相手におかしなことをすると思われているのが癪で、つい奈々華の同衾を断ってしまったのが、余計に誤解を招いた。そこまで思い出してふうと大きな溜息が出る。結局昨晚は三人並んで寝るという不思議な状況で落ち着いた。

少女の寝顔を見つめる。昨日買ってもらったばかりの寝巻きをいたく気に入る、嬉しそうに俺の前で何度もくるくる回って見せた。その無垢な笑顔を見ていると、こちらまで笑みを引き出される。奈々華が十歳前後の頃には、こういう感情は生まれなかった。だけど人の親になっていてもおかしくない年頃になって、純粹に可愛いと思える。懐いてくれる妹も同様に可愛がればいい。それは奈々華との付き合い方に一石を投じているんじゃないか、なんて、そういった感情に理由をつけたがる下らない考え方も一方で巢食っている。もっとプリミティブでいいんじゃないか。そう思っても、手は動かない。簡単に少女の頭を撫でれるのは、頬をなぞってくすぐれるのは、打ち払われても何も痛いことがないからじゃないか。嫌われても、鬱陶しがられても別段苦しいことがないからじゃないか。それは穿っているのか。

別の側面もある。一つの命が終わり、一つの命が始まった。何か感慨深いものがある。俺が奪ったにも関わらずだ。村雲だけじゃない、彼女の親の命を奪ったのも他ならぬ俺だ。

昨日からそうだ。脈絡もなく、飛び地のように思考は回る。

目を切る。窓の外に目を向けても、小学生がやけばちに単色で塗りとくったように灰。雲まで灰色をしてやがる。煙草を取り出し、火を点ける。俺の口から漏れ出すコレも、灰色なんだろうか、白なんだろうか。どうでもいいことを考えているな。ベッドの方から衣擦れるような音がして、見ると奈々華が寝返りを打っていた。何となくわざとらしく見えて、起きているんじゃないかと勘繰る。起きているとして、起きてこないのは、やっぱり俺が原因なんだろうか……何でこんなにモヤモヤしているのかもわかっていない。俺の心の中で誰か灰色に塗ったんだろうか。鈍く、白黒つかないあの色を塗りたいくれば、少し明色を入れても中々消えないのは納得だ。唇を尖らせて、よくわからない色をした煙を吐き出す。紫煙と言う。じゃあコレは本当は紫なのか。馬鹿な。

また飛んだ。安直にバツタを思った。ぴょんぴょんぴょん。

坂城のことだ。奈々華にはああ言ったし、それについて後悔や疑問があるわけでもないが、本当にこれで良いのか、とも思う。せめて俺が怒っていないことくらいは伝えてやるべきなんじゃないか。でもその次は？　俺は怒っていない。だからまた会いに来る。会いには来るけど、愛しはしない。お前のそのどこかしらに怯えを内包したような、矛盾を孕んだ、俺への憧憬を受け入れる気はない。友達として頭は撫でるが抱きはしない。そう言うのか？　ははっと鼻から息が漏れる。何に対する嘲笑なのかもわからない。最低だな。そう言えばアイツの頭も簡単に撫でれるな。最低だな。

終章 第二百一十一話：ガラス細工

正午になっても奈々華が起きてくる気配はなく、仕方なく学生食堂に行った。ゲロが出るんじゃないかと思うほどごった返しているということもなく、今日明日中にも潰れるんじゃないかというほど閑古鳥が鳴いているということもない。つまりはまばらに人が入っている状態。パイプ椅子に腰掛けて、不味くも美味くもないカレーライスを頬張る。ジャガイモがやたら硬い。歯が折れたら訴えてやる。恨みがましく食堂で料理に励む職員に目をやる。そこで俺はふと気付く。慣れていたことに。奈々華が毎食ずっと作っていてくれる日常に。それも最初は申し訳なくて仕方なかったんだ。不出来な兄に手間を取らせるのが、可哀想にさえ思えた。

それだけじゃない。取っ掛かりの蔓を引っ張ったら、沢山の紫芋が地中から引き出されるように、過去のイメージたちが頭を駆け巡った。最初に無理だと思って、次第に慣れていった光景たち。

「人は慣れる生き物だから」

奈々華の言葉もついてきた。

例えば初めて共同生活の中で、妹の目を盗んで自慰をしたとき。無理だと思った。俺には俺の生活があって、奈々華には奈々華の生活がある。もう俺達は大人だ、と。

例えば便座の裏に小さな血の跡を見つけたとき。見てはいけないものを見た慌ててそれを下げたが、それはそうだろう、と思った。どこの世界に六畳一間で異性の兄妹が共に暮らしているというんだ、と。子供じゃないんだ、と。

なのに、気がつけば何ヶ月も共に同じ部屋で暮らしている。鬱陶しいなと思うこともあれば、居てくれてよかったと心の底から思うこともある。良い事も悪い事も、慣れるんだ。

そして、頭の中でさえ言語化してこなかった感情にぶち当たる。

「慣れろよ」

じゃあ、お前も。自棄に近かった。どこまで最低なんだ、と心の底のもう一人の声を黙殺する。ジャガイモをフォークで割ると、勢い余って皿がガツンと音を立てた。

「慣れろよ」

今まで触れ合うことなんてなかったんだから。それが常態になっていたんだから、仕方がないだろう。加味しろよ。鑑みろよ。俺は慣れたろう。新しい環境に。

そのことによる恩恵も無視して。

ただ奈々華の責任だと言わんばかりに、思考は自分勝手もいいところに、奈々華を責め立てている。大体俺にこれ以上どうしろって言うんだ。譲歩に譲歩を重ねて今の環境が出来ているんだ。なのにお前はどうか。やりたいことを全部して、わがままじゃないか。

ふ、と毒が抜けきった。黒ずむのは終わった。白が混じってくる。

だから灰色が終わらない。

本当に簡単なことだった。少女を膝に乗せ、頭を撫でたり頬をくすぐっている間に、不意に見た奈々華の顔が全ての原因だった。羨ましそうにしているならまだ、よかったかもしれない。悲しそうだった。とても、とても。彼女の考えていることが手に取るようにわかった。今の自分にはどう足掻いても届かない場所、と知っている者の顔。羨望をやめ、諦めにも似た悲しみ。例えるならシンデレラが見つめる王子様。彼女が王子様のハートを射止めたのは、魔法で手にした美しいドレスのせいではない。

罪悪感。不甲斐なさ。俺は二度とあの子にあの顔をさせたくないと思っていた。思っていたのに……させてしまった。

吃驚した。思考の底に沈みきっていた俺を、現実に戻す声だった。堅苦しい口調も、わざと少し低く出す声質も、よく知るものだった。呆然と見上げると不安げな顔が映った。それでも整った眉や

綺麗な二重は健在で、少女の魅力を損なってはいなかった。珈琲の湯気が立つ紙コップを二つ持っている。

聞こえなかったと思ったのか、もう一度同じ言葉をその形のいい唇が紡ぐ。

「ここ、いいか？」

反射的に頷くと、坂城は小さく笑った。

終章 第二百十二話：偏執

「君のテスト、採点した。進級は何とかなりそうだ」

無難な話題選びと言ったところか。問題の先送りとも言いが。仁は曖昧に笑って見せた。それからカップを顔の前で拝むようにして、奢ってもらった珈琲に口をつける。

「……」

「……」

まるで初めて出会ったかのように。二人は互いに会話の糸口を探しているようだった。特に仁は辛いだろう。「元気になったんだな」とも「もう平気なのか?」とも切り出せない。傷口をまた抉り返すことになりかねない。昼飯時を過ぎ始めた食堂からは人が次々去っていく。残る者もかき込むように食事を終わらせてトレーを返却口へと急ぐ。用事があるのか、学園のトップと随一の有名人との会合に居合わせるほどの役者ではないと知っているからか。

「そう言えば俺がパクッてきた卵孵ったんだぜ?」

「ええと。鬼のヤツか」

パイパスを通ってはいいるが、話の選択としては仁も無難だ。おまけに感触も良さそうということで、仁の顔も僅かに安堵に綻ぶ。

「これがすげえ可愛いんだ。見た目は人間の女の子とさして変わらないんだけど……」

「女の子……」

「あ、えっと」

金属探知機も持たずに地雷原を駆け抜けろ、と言うのと似たようなものかもしれない。

「あの部屋で暮らしているのか?」

困り果てた顔で仁が頷く。

「狭いだろう。それに兄妹だから大目に見てきたけれど、女の子と君が共に暮らしているのは……」

「ちょっと待てよ。ある意味俺の精霊って言ってもいい。精霊と暮らすのがダメってのか？」

「それは……」

「それに大目に見るって、お前が最初に決めたんだろう。俺が別に奈々華と暮らしたいって言ったわけでもない」

むしろ個室を望んでいた仁に、そんな例外は許されないと突っぱねたのが坂城だった。

「そうだったな。すまない。許してくれ」

懇願するような口調だった。

「いや、別に怒ったわけじゃないよ」

そこまで言ってまた飲み物を呷った。仁がカップで隠すようにしたしかめっ面は、珈琲の苦さのせいではないはずだ。カップを放した彼はぼそりと続けた。

「ついでに言うと、怒ってるわけでもないよ」

「え？」

「……」

何か喋ってくれ、と。察してくれ、と。仁が間を作った意図は、坂城にはわからないようだった。

「ミリーに聞いたよ。俺は怒って君に会いに行かなかったわけじゃない」

「……そうか」

口の端に滲む微かな喜色。

「大体俺がラインハルトを取り逃がしたことについて、君を責めるのはお門違いだ」

憎悪に駆られた彼が、あの時坂城の存在を留意しなかったこと、ひいては周囲への警戒を怠ったことが主原因であろう。

「それについて」

「じゃあどうして」

二人の声は重なった。仁が話そうとした内容はラインハルトの追撃で、坂城が口に出しかけたのは……

「じゃあどうして私に会いに来てくれなかったんだ？」

仁が譲る格好になった。唇を噛んで歪んだ顔をした坂城に、仁は二の句が継げなかったからだ。

「それは……」

「辛かった。君にまで嫌われてしまった。君にまで去られてしまう」
「……」

「そう思ったら、胸が苦しくて、辛くて……」

「ごめん」

薄っすらと坂城の目の端に涙が浮かぶ。

「その…… そっとしておこうと思ったんだ。俺が幻創痛の時もそうだったけど、時間が必要かなって」

意志薄弱な仁が保留を選ぶのは殆ど予定調和と言ってよかった。

「それでも一言くらいあっても……」

「悪かったよ」

それ以上に何か言おうとして、仁はやめた。賢明だと思われる。彼女はより手元に残った者への依存度を増しているように見える。有り体に言えば形振り構わなくなっている。甘い言葉を囁いても、かからうような言葉を吐いても、今の彼女には全て安らぎを与える。

「それじゃあこれからは会いに来てくれるか？」

子供のような好意だ。河のように自然な流れだ。

「ああ」

「本当か！」

「ああ。明日にでもまた、その鬼の精霊を連れて遊びに行くよ」

どうしようもない男だった。結局その場で彼女を泣かせるか、後で泣かせるかの違いなのに。しかも後になればなるほど、共に過ごした時間は鈍く彼女を痛めつけることくらいわからないでもないはずなのに。褥瘡じよくそうのようにジワリジワリと。本来心身を癒す場所が、逆に痛みをもたらすのなら、人は何処で心休まる時を過ごすのか、その答えは仁の中にはない。

坂城は何度も約束の確認をして、仁に取り付く島を与えないで、最後には雨上りの天道のように笑うと「明日待ってるから」と残し去っていった。

「……結局切り出し損ねたな」

一人きりになった仁は明日への不安と、再び静寂を手に入れた安堵の中で、そのどちらからともつかない溜息を吐いた。

終章 第二百十三話…変質

雨が窓を打つ音だけが部屋の中に響いていた。雨足は存外強く、奈々華は兄がよもや外へ食事に行ったのではないかと、先にたたない後悔を胸の内で繰り返していた。ついと顔を隣に向ける。人間の見た目で言う十歳前後に見える鬼の少女は、それでも生まれたばかりの赤子で、一日の大半を寝て過ごすようだった。あどけなく世の穢れも知らない寝顔は、相応に可愛らしい。半身を起こした奈々華のお腹の辺りに猫が一匹飛び乗った。普段はお散歩の時間だろうが、今日は雨天中止のようだ。

「随分と遅いご起床で」

皮肉るでも茶化すでもなく、言い放った。ややあつて奈々華は「うん」とだけ返した。目は冴えているようだが、それ以上起き上がる気配はなかった。

「アンタの大好きなお兄ちゃんは、どうやら食堂に行ったみたいだよ」

一時間ほど前だろう。その後を追うようにふらりと出て行ったシャルロットはそれを確認してきたらしかった。

「そっか」

「起きてたんだろう？」

「うん」

奈々華の返答は、一々含むような間を残していた。変わらずコンコンと窓を打つ大きな雨粒。少女の小さな寝息を殺していた。

「怒ってなかったし、起こそうともしなかったね」

奈々華の声は平淡だった。少女の内なる小さな寂しさを殺していた。

「……仕方ないだろう？」

シャルロットは逆に言い聞かすように、慰めるように。

「……距離が違う」

そっと付け足した。トランプのタワーに最後の一对を足すように慎

重な声音にも聞こえた。そう、距離。わがままと行ってよかった。確かに彼は彼女のすぐ近くに、彼女が望むまで居てくれるのだから。これ以上ない自己犠牲。

「わかつてはいるんだけどね」

恋人の距離。兄妹の距離。ひょっとすると、あの思慮深い仁のことだ。わだかまり云々を抜かしても、難しい年頃の妹に積極的にスキップを図ることは憚ったのではないだろうか。そしてそれが恐らく彼にとって心地良い距離なのだ。

「まさか私も自分がここまで狭量とは思わなかったよ。まさかこんな小さな子供に嫉妬するなんて」

自分でも呆れた、と言わんばかりに口の端に笑みを乗せる。

問題はとてもシンプルだった。もっと触れ合いたい奈々華と、今の距離を保ちたい仁。きつと奈々華も譲歩していたのだろう、その切欠がなければ。

「嫉妬ってのはちょっと違うかも知れないね。語弊を恐れず言うなら…… ないものねだり？」

「アタシに聞かれてもね」

はあ、と短い吐息。背に息がかかったのか、シャルロットが反射的に体を強張らせる。ここらへんを見ると、本当に猫なのだと実感できる。

「まあいいや。今回はこんなものでしょう」

言い終わると奈々華は手の平を打ち合わせた。パンと小気味いい音。弛緩を始めたシャルロットの体が再びピクリと固まる。

「どうということだい？」

自身の動物くさい習性に、バツが悪そうな声で聞き返す。

「時間切れてこと」

「時間切れ？」

「そう」

布団をめくり、奈々華は体を起こす。その動きは確かで、彼女が何時間も前から頭を覚醒させていたことを証明している。

「これ以上望むのは現状では無理かな」

「一体何の話だい？」

シャルロットは、もう何も彼女を驚かすようなことを奈々華はしていないのに、三度体を硬直させていた。彼女が度々見てきた、主の異質。人格が入れ替わったような変質。それがまた顔を出すのではないかと、いつもの笑顔で背を撫でてくれる奈々華がどこかへ行ってしまうのではないかと。

「もうこの世界の役目も終わりが近づいているってこと」

にこりと、その笑みはやはりいつもと変わらず。変わらないからこそ妖しく。鬼の子が煩そうに寝返りを一つうった。

終章 第二百十四話：清算クラッシュ

「いいんすか？」

静が言った。仁の胸の内側のポケットの中で、携帯電話が着信音を鳴らしている。

「妹さんでしょう？」

「そうだろうね」

気のない返事。とらないでもわかる内容。午後八時を回って、未だ帰らぬ兄を心配しての電話。荒い砂の乗ったアスファルトの上で、半身を翻すと、ジャリツと小気味よく靴裏が鳴った。もし電話に出たとして、どこに居るのと問われれば、「多分高尾山」と答えるのだろうか。何をしているのと問われれば、「多分返礼」と答えるのだろうか。しかし仁の携帯は、その持ち主が通話ボタンを押す前に、味気ない音を途切らせた。だからそういった疑問も立ち消えとなる。場所は正しく、八王子の端。高尾山だろう。それでも仁が広畠に場所を指定されたとき、その名を口にしなかったのは、もしかするとあまり深く入れ込まない為かも知れない。此処が異世界だと強く認識しなおしたかったからかも知れない。言ってしまうえば全て現実の自身とは何ら係わり合いのない夢物語として扱いたい気持ちの現われなのかも知れない。なるほどそうすれば、彼がこの世界を去った後、彼の非道の数々は彼を強くは苛まないかもしれない。いや、或いは全く違うかもしれない。そういった自己欺瞞の姿勢が、より彼を惨めにするし、罪の意識からはどうやっても逃げ切れるものではないことくらい彼が一番良くわかっていているはずだ。単に確証が持てないことを言いたくなかっただけかもしれない。

返礼と素直に言い切らないだろうと推測されうるのは、彼が決戦の前に悶々とした心のモヤを払いたくて体を動かしたのか、他意なく村雲の件で世話になった広畠に恩義を感じていたからかわからないから。

とにかく妹の心配を余所に、仁は確かな足取りで歩き出した。麓に停めた軽トラックに半身を滑り込ませると中から着替えを取り出し、その場で着替える。ぐっしりと精霊の体液を吸った重いツナギを脱ぎ捨て、自身の服に。すっかり綺麗な出で立ちに直すと、仁は煙草を一本口に咥えて、車を発進させた。

広畠との待ち合わせ場所は、JR八王子駅だった。やはり仁は意図して視線を駅名に行かないようにしているような雰囲気があったが、造りは彼が知る八王子駅と酷似していた。改札を抜けた先の放射状に伸びる高架橋だったり、ごみごみとした駅前も。

その狭い道路の一角に停車して、仁は再び煙草の箱をあさる。上下左右にソフトパックを振るが、やがて苛立った舌打ちを出した。ドアを開けようとしたところで助手席側の窓がコンコンとノックされる。

「お疲れさん」

広畠は柔和に笑った。余所行きの笑みにも見えた。気が利く彼は仁の吸う銘柄のタバコを開けられた窓からポンと投げ込んだ。

「無理言ってすいませんでした」

仁は煙草の礼もそこそこに、紋切り型の謙虚を示した。

「随分急だったな」

仁と運転席を代わった広畠は車を出す。電車で帰ると言った仁に、そうそう見られやしないよと笑った広畠は中谷の駅まで送ると聞かなかった。「まるで逢引する芸能人ですね」と軽口を叩いたが、広畠はやはり小さく笑うだけだった。

「近いうちアメリカに発とうと思うんです」

「なるほどねえ。律儀じゃねえか」

「……どうですかね」

ははと苦笑。借りを清算するのが律儀と評されるのが、皮肉でも何でもないからこの世界は困る。少し嫌そうな顔をした広畠を見て、

仁も前方を見る。大型トラックが車線変更して白い小さな軽トラックの前に出てきたところだった。

「信号が見えませんがもんね」

「……ああ」

言っているそばから信号につかまったらしく、ゆっくりと前のトラックの速度が落ちていく。信号の色はおろか、信号機自体も見えない。先が全く見えない。広畠もサードから로우、ニュートラルへと左手をせかせか動かして止まった。

「ああいうのに突っ込んだらどうなるかって想像したことないですか？」

「まず運ちゃんがでてきて、散々言われて法外な金をふんだくられるのかね」

返答は早くて、一度も脳内で試行したことがないというわけではないらしかった。ついでに可笑しそうに笑っていた。

「もし死んだりなんかしたら、家族は悲しんでくれるかね……とか。相手を万一殺してしまったらそれこそ大変だろうな、とか」
前のトラックが一瞬下がって、それから動き出す。同じようにして二人を乗せた軽トラックも動き出す。

「もう帰ってこないってこともないんだろう？」

仁は煙草を一度深く吸い込んだ。ふうと吐き出すと、車内は白い煙で満たされた。

「……わかりません。あっちで全てが終わるかも知れませんし」

「それは死ぬってことか？」

「……わかりません。俺が死ぬか、相手が死ぬか。はたまたもっと
凄い終わりを迎えるか」

「ぶつけてみるまでわかんないってか」

「奈々華は…… 妹は悲しんでくれますよね？ 俺が死んだら」

「俺に聞くな」

「それもそうですね」

仁は灰皿に煙草を押し付けて道路を見た。中谷の街はまだまだ遠そうだった。

終章 第二百十五話…浮き足、勇み足

「居なくなつた？」

聞こえていないはずのない仁は、それでも聞き返した。奈々華は神妙に頷いた。

「ちよつと目を離した隙に…… 気付いたらもう」

「なるほど。それであんなに電話してきてたんだな」

腕を組んで今は言っても詮無きことを呟く。

「私が用もないのに、寂しいからってあんなに電話すると思う？」

「思う」

「……」

仁が帰った部屋には、彼の最愛の妹が一人。猫が二匹。欠員が一人。その欠員の行方が問題になっていた。赤ん坊も同然の彼女だが、身体能力だけとれば、実際の見た目と変わらない。歩くことはおろか、走ることもだって出来る。しかしそれでも頭の中は赤ん坊。もし外に出ていたりしたら…… おかしな人間に捕まっていたら……

「まずは用務員さんに外に行つてないか聞いてみよう」

奈々華が頷き、「行ってくる」と駆け出す。日がな一日門の近くを見張っているわけではないので、確実な情報にはならないだろうが、それでも仁や奈々華に比べれば、彼女が万一学外に出ていたなら、それを目撃した確率が高い。もしかしたら保護されているかもしれない。

「さてと」

仁がいない間、奈々華がやっていたことは、学生への聞き込み。まさか何時間も見つからないとは思ってもみなかった彼女からすれば、大方部屋の外をチョロチョロしているくらいだろうと、そういう行動に出たのだった。そして何の情報も得られなかった。そもそも試験を終えて帰省する者が大半の時期、その残った学生がタイミグ

よく仁と奈々華の部屋から飛び出した少女を目撃している可能性は低そうだ。それでもそれはそれなりに有効で、学園の二階には彼女が居ないと見なせる。少なくともできる限りのことは、二階についてはやっているわけだ。

しばらく黙考して仁は携帯電話を取り出した。確かな手つきでボタンを操作すると、二回目の呼び出し音の後、相手に繋がった。

「ど、どうしたんだ。こんな夜更けに」

警戒の中に喜び。緊張の中に期待。

「ああ。悪い…… 実は昼間言った鬼の子供なんだが」

「ああ。そろそろ来る頃かと思っていたんだ」

声は弾んでいた。仁が怪訝に眉を顰める。

「何か報告とかあがってないか？ 目撃でも良いんだ」

推測と言うほど大仰なものでもなく、正体のわからない子供を見つけた一般学生が取りうる行動として真っ先に考えられるのが、学園の責任者への通報、及び誘導ということになる。勿論学外へ出ていなくて、なおかつ学生に発見、保護されていなければ話にならないが。

「預かっている」

どうやら仁は一発で当りを引いたらしい。

「しかしあっちから連絡を入れてくれてもいいのにな」

仁の携帯の着信履歴には奈々華のものしかなかった。勿論メールも来ていない。当然奈々華の慌てようから、彼女へも何ら連絡がなかったことが窺える。

「まあ」

静は何か思うところがあるのか、無口モード。

「つっても俺がほったらかしにしていたからこうなったんだから、アイツを責めるのはお門違いだね」

そう、この事態になってこそ初めて出る贅沢。

「人の親ってのはこんな気持ちなのかね？」

「さあ」

スニーカーの裏が階段の一段一段を踏みしめるたびに、仁は喜びと安堵、後悔と叱責を噛みしめる思いだった。あらぬ杞憂に胃を痛め、わずかな可愛らしい所作に心の奥底をくすぐられ……

「妹さんはいいんすか？」

奈々華は居なかった。一階へと走っていった奈々華には、残念ながら無駄足だったが、メールをうっておいた。「見つかった。部屋に連れ帰るから待っている」との旨だった。

坂城が電話の最後に、奈々華が傍に居ないか聞いてきた。奈々華が坂城を嫌っているように、坂城も奈々華を得意としていなかった。

仁は「居ない」と答えた。「一人で迎えに行く」とも言った。

「……ああ。明日するつもりだった話が今日になっただけだ」

どうせ、彼女等には会わねばならなかった。その会合に奈々華を連れて行ってもこじれそうだった。最後の段を踏みしめた音が、静まり返った三階の廊下にやけに大きく響いた。

終章 第二百十六話…不安定の爆発

少女は今は落ち着いて、坂城のベッドで寝ているらしい。「泣き疲れたのだろう」と坂城は言った。彼女の下へ届けられたときには、すすり泣いていたそうだ。仁はそれを聞いてただ不味そうに煙草をふかすだけだった。

「君をお父さんと認識しているのかもな」

きりきりと痛んだ胃には、煙草は猛毒で、仁は小さく咳払いをしてまだ長いそれを安物の灰皿に押し付けて消した。

「母様の気持ちが少しわかった。子供というのは本当に一つの感情しか表現しないんだな」

「……真剣なんだ」

仁は十分に言葉を選んで、

「だから怖くて可愛い」

それが締めになって、二人の間に沈黙が居座る。重苦しくはなかった。ただどちらもそれぞれの本題を切り出すタイミングを窺っている間だった。ピッチャーとバッターが間を取り合う風景に似ていた。どちらかがマウンドなり打席を外したり、投手は球を長く持ち、打者は入念に土を蹴った。だけどいずれ球は放られる。

「とりあえずあの子に顔を見せてやったらどうだ？」

一球外にはずしたらしい。次は内角にズバッと投げ込む布石にもとれる。仁は黙って頷き、互いに席を立ち、学園長室の右奥、プライベートルームへと入る。

あまりキョロキョロするのも失礼と思ったのか、仁は初めて入る坂城とミルフィリアの寝所に落ち着かない様子だった。生徒達の部屋とは違い、石を模した壁面には白い壁紙が張られていて、しかしボコボコした輪郭は浮かんでいなかった。不可思議だ。部屋は存外奥行きがあり、奥の方にはクローゼット。二人の居住スペースに間仕

切りなどではなく、部屋の中ほどに平行線を作るように二つのベッドが向かい合っている。そしてその足側、つまり仁たちが佇む入り口に遠い方に、また向かい合って二つ机が壁に接して置いてある。あまり無駄な装飾品はなく、簡素と言えた。長方形の部屋だった。

「こっちだ」

坂城の声に、仁は目玉を遠慮がちに動かす時間を終わらせて彼女の後に続く。向かって右側のベッド。白いシーツに枕、その上に横たわる少女を、これまた白い羽毛の掛け布団が包み込んでいた。少女の褐色の頬には僅かに白い軌跡。瞼にかかる黒い髪を、仁は起こさないように優しくすくい上げた。

「ごめんな」

本当の父を殺した張本人をかりそめと知らず、父と認識する少女。無知は罪ではなく武器なのかも知れない。仁にしてみれば、きっと明け透けな怒りをぶつけられた方が楽だったろう。祐とは違った方法だ。彼女もまた同じ状況から、しかし彼女は仁を慕う。

そして仁は思い知る。彼女と祐では圧倒的に前者への罪の意識が足りなかったことに。どこかで、口をきかない動物を殺したのと同等の意識程度しか持っていなかったのではないだろうか。ちよつと可哀想なことをしたな、程度の。唇を噛んで少女の寝顔を見下ろす仁の胸に去来するのは自己嫌悪か。無垢は癒ではなく、武器かも知れない。仁は十分に知っているはずだ。口をきくものが、自律の意思をもつものが上等で、その逆が下等だと誰も言えないことを。人間が他者を貶める悪意を持って蔑みの言葉を吐くことも出来る存在である。その安易で甘美な悪意から自を律せない意思など、口など、働かないほうが何倍もマシだというのに……

ふうと大きく息を吐いた。前髪が小さく揺れた。少女から坂城へ目を移した仁は既にいつもの仁だった。

「この子をまた預かってもらうことになるかもしれない」

仁はどうやらセットポジションについたようだ。

「……どういうことだ？」

「しばらく学園を離れたいんだ」

「……」

坂城は俯いてしまった。小さく肩が震えている。

「……つくのか？」

「は？」

声が小さすぎて仁は聞き取れない。坂城が顔を上げた。仁は気圧されるというより、怖気を感じた。また仁が見たことのない顔だった。目は異様にぎらついており、今にも目玉が飛び出してしまうんじゃないかというほど大きく見開かれていた。怒りより憎しみに近かった。赤い唇は紅のせいでもなく。

「嘘をつくのかと言っている！」

怒声。仁は一、二歩といわず、さがれるだけさがって、足をベッドの柵にぶつけた。顔は青褪めんばかりに恐怖と困惑。

「君はこれから私に会いにきてくれるんだろう！　ずっと！　ずっと！　ずっと！」

鬼の少女が喧騒に目を醒まし、それから仁の姿を見つけ、坂城の姿に怯えて、仁の腰の辺りに抱きついた。坂城は再び床を見た。仁はどうすることも出来ず、メデューサに睨まれたように立ち尽くした。やがて掠れた声で坂城は言った。

「……出て行ってくれ」

「待ってくれ。こっちにも事情があるんだ」

「出て行ってくれ」

強い語調。

「裏切り者の顔は見たくない」

「裏切り者って……」

仁は察せなかった。嵐は去ったわけではなく、台風の目に滞在していただけだ。少し冷静になった頭で仁は、その事情を説明するため食い下がろうとした。それがいけなかった。きつと顔を上げた坂城の顔は血走った目に涙を溜め、睨んだまま机の方へ動いた。その動きが異様に速くて、仁が呆気に取りられたのも束の間、手当たり次

第に物を投げつけてきた。ファイル、筆立て、スタンドライトまである。「顔も見たくない」だとか「裏切り者」といったわずかな単語は聞き取れたが、それ以外は言葉に、声にならない悲鳴のようなものだった。

仁はとにかく退散するより他なく、少女を持ち上げて腹の前で抱き、物が当たらないように、坂城に背を向けて入り口へと方々の体で逃げ出した。

終章 第二百十七話：ドリーマー

ボタンと閉じた扉の奥で未だ、怒声や物が扉や壁にぶつかる音が響いている。仁は一度むせたように咳き込んで、少女を床に下ろした。その無知で無垢な子供は、物音がするたびに小さく体を跳ねさせて、仁の足元から離れようとしなかった。「大丈夫だよ」と根拠のない気休めを示して、仁はその頬を指の腹でなぞる。子供特有の弾力を含んだ肌はそこだけ小さくへこむ。

「弱ったな」

小さく、少女に聞こえないように、聞こえても意味は取れないのだが、呟いた。部屋の中から聞こえてくる物音がやがて間断が目立つようになり、小さくなり、聞こえなくなった。

「泣き疲れたか」

聞く者のない皮肉。仁はどうしたものかと首を捻った。

何せ彼は目的を完遂していなかった。近藤の遺体を取り戻すためにアメリカへ渡る。そのためには本来の契約である学園の守護をどうしても置き去りにしてしまう。事情を話して許可を貰わないといけない立場なのだ。

「日を改めるにしてもなあ」

あの剣幕を目の当たりにして、もう一度何食わぬ顔で話が出るほど肝が据わっていたなら、最初からこんな事態にはなっていない。

「ん？」

少女が仁の見ていない間に、何かを読んでいる。いや、見ているが正解か。「どうしたんだ？」と声をかけながら、仁は中腰になって少女と同じ高さになる。大学ノートだった。キチンとファイリングされた書類ばかりの坂城の持ち物にあって少し物珍しかった。隣から覗き込んだ仁は字面を追った。

「10月19日

当たり前の時間だと思っていた。永劫続くと思っていた。
変わることなく、色あせることなく。

終わりは突然だった。一瞬だった。

逆らう暇すら私に与えず、奪った。

幸せだった。満ち足りていた。もう一度……

報われることのない願望。それでも願ってやまない。

決して時間は巻き戻らない。そんなことはわかっていても
ろくに別れも告げられぬまま。こんなの…… こんな現実……」

「10月30日

つまらない。全てが色を失い、セピア。

義理も人情もない世界に私だけが取り残された。

薄情な人の本質を見た。見たくなかった。

あの優しき母様と父様はフィルターをかけてくれていたんだ。

なんと温かい日々を私は失ってしまったんだろう。

ただただ懐古に胸を休めて、私は生きていくんだろうか？」

「11月11日

死してなおも留まる者。それが残された者に幸せを運ぶのか？

蠟人形のようなおじ様とおば様。

とても喜んでいた。彼女の父母も生き返らせるべきか？

魅力的なのではないか。善行となるのではないか。

どう選ぶのか興味もある。不謹慎だろうか？ だけど

倫理なんて意味はない。役に立たない。優しい時を返さない。

どちらも同じだ。だったら…… 形だけでも。

生み出すものがなくても、

時間は戻らなくても」

「11月11日

闇を彷徨う。闇は今生。闇はとこしえ。

はり裂けそうな想いを胸に。

理屈じゃない。感情だけでもない。

星だ。私を照らす。私を輝かせる。私を守る。

幸せの別解がここに在るかも知れない。彼が持っているかも知れない。

愛おしさと狂おしさ。手元に置きたいけど、壊したい」

「12月14日

壊れてしまう。このままでは。連立していなくてはいけない。

理性と本能が勝ちきらず、負けきらず。

罪に苛まれる彼が、真に求めるべきは同様の私だ。

差しさわりのない言葉ではなく、愛の言葉を。

世界の全てを彼と共に。

流浪は終わり、居場所を掴む。その時隣にいるのは……」

途中から取り上げるようにして読んでいた仁は、次のページが白紙なのを見て、片手でパタンと閉じた。日記にしては日付が飛び飛びで、ポエムにしては日付がついている意図がよくわからない。

「詩人だな。こんな趣味があったなんて」

へらと言葉を知らない少女に笑いかけてみせる。しかし笑みはすぐにしまい、神妙な顔つきで額に手を当てて何かを考え込む。

「何をやっているんですか？」

びくりと体を硬直させた仁は素早い動きで振り返る。何か暗闇から

にゅつと手が伸びてきたような驚愕を仁に与えた。学園町室の扉からもう一人の相談相手がきました顔で仁を見ていた。いや、正確には仁の手にある大学ノート。何か悪戯を見つけたように、決まり悪そうに右手をぶら下げていた。

歩み寄ってきたミルフィリアが手の平を差し出し、仁は大人しくノートを手渡した。それを持て余した仁は、肩の荷が下りたような顔になった。

「実はさ……」

そしてそのままの流れで、今起きたことの顛末を話し始めた。

終章 第二百十八話…諦めの新婚旅行

精神的にも肉体的にも、仁は休息が欲しかった。ミルフィリアは言葉少なに、坂城は自分が何とか宥めすかす。明日また相談を持ってきて欲しい。その要点だけを伝えて、二人の部屋へと消えていった。身の振り方が決まった仁は退却、部屋へと帰って来たわけだが……

「香水の匂いがする」

上着をハンガーにかけた奈々華がぼそりと、しかし確実に兄の耳にも入るような声量で指摘したのだった。

「そろそろマジで怖いよ?」

「これは…… 学園長さんかな?」

にこりと笑って振り返る。彼女にかかれば探偵など無用。観念する以外の選択肢がない仁は諦めて首肯する。

「そうだよ。アイツが預かっててくれたんだ」

無事帰還を果たした鬼の少女は風呂も入らないままに、眠たげに目を擦っている。腰を落ち着けた仁の体に寄り添って体重を預けている。

全く後ろ暗い気持ちじゃなかったわけでもないが、奈々華に敢えて言わなかったのには、仁にしても言い分がある。

「実はあの金髪のおっさんをぶちのめしに行こうと思っているんだ」
奈々華と浮気論争をしても仁の旗色は限りなく悪そうだ。根本から話すことに決めたらしい。

「その相談もあったんだ。だからお前を置いて行った」
つまりそういうこと、と付け足す。

「相談するだけなら私も一緒でもよかったんじゃないの?」

「お前、アイツらと仲悪いだろ?」

仁はすばり婉曲表現も用いず。ここらへんはやはり兄妹の仲が好転した成果だろうか。

「……別に悪くはないよ」

「ついた瞬間にばれる嘘ってのはどうなんだ？」

「……」

ふうと呆れたような溜息は仁。

「本当は二人を説得して話すつもりだったんだけど、面白くなかったか？」

「面白くない」

今度は疲れたような溜息。

「難しそうな方から行ったんだがね」

「どういうこと？」

「君はどうせついてくると言ってきたんだろうから」

コクンと大きく一度。

「お兄ちゃんが私の知らないところで危ない目に遭うのは嫌だ、だろ？」

「似てない」

一応声真似をしたのだが、気持ち悪いだけだった。茶化すようで、更に挑発にもなってしまった。

「言っておくけど、お兄ちゃんが死んだら私後を追うからね？」

「怖いからやめれって！」

やり返したと判断したのか、奈々華はしたり顔で「冗談」と笑う。

やはり目は笑っていなかったが。ゴホンと咳払い。仁の咽喉は大忙しだ。

「まあそこについては諦めてて、連れて行くつもりなんだ。少しそれとは別件で思うところもあって…… まあいいか、とにかくそういうことなら説得の必要性もないだろう？」

なるほど、と奈々華。「この子は？」と続けて、鬼の少女を指差す。もうすっかりオネムで、仁の膝枕の上で安心しきった寝顔を見せていた。

「いや、この子は置いて行こうかと」

奈々華の顔がやっとこさ本日はじめての本物の笑顔に変わる。

「じゃあハネムーン？」

「ハネムーンではないよ。確実に」

仁の否定は早い。兄妹間の呼吸。しかし奈々華が強かなのは、こういった冗談の中に本気を混ぜるあたり。

「何をしに行くかわかってるんだろう？」

「観光でしよう？」

お前なあ、と仁。しかし強く言わないのは、あえて本意を言わないのは、奈々華なりに気を紛らわせようと気遣っているから。

「思うところってのは？」

「今はまだ確実なことは言えない。考えがまとまったら話すよ」

質問したくせに、奈々華は興味なさそうに頷いた。どうやら彼女の気持ちは既に仁と二人で行く旅行のことで一杯のようだった。時折ニヤニヤとして実に気持ちが悪い。

「まあそんなわけだから、明日から準備に取り掛かる。出来たら今週中には発ちたい」

「はい」と子供っぽく。彼女は兄のことを単純だと思っているようだが、実際には似た者同士なのかも知れない。

終章 第二百十九話：力押し

翌日、ミルフィリアからの呼び出しに、奈々華もついて行くと言ってきたが、仁は結局妹と鬼の少女と連れ立って学園長室のドアを叩いた。部屋に入ると、坂城の姿はなく、ミルフィリア一人だった。いつも彼女の妹がどこかと腰を下ろすソファ―に優雅な居ずまい。仁はチラリと目だけ動かして彼女等のプライバシーを見やった。

「やっぱりダメか」

「ダメにしたのは貴方ですけどね」

返す言葉もなく、仁は了承も得ずに彼女の体面に腰を落ち着けた。奈々華と少女は遅れて、仁を挟むようにして座った。「何の話？」と尋ねる奈々華に、仁は力ない笑みを見せるだけだった。代わりにミルフィリアがうけあう。

「いえね……私の妹分が、変質的な性癖の男性に憧れを打ち碎かれたということです」

「俺は別に変質的じゃないよ」

「それは貴方の両隣を見ても同じことがまだ言えますか？」

「……」

「私は忠告したはずですよ？　そういう気持ちがないのなら下手に近づくなと」

「……」

回りまわって結局彼の見捨てきれない優しさは優しさたり得なかった。

「まあいいでしょう。今日はそういう話でもないのでしょうか？」
ミルフィリアの目は達観していた。仁は謝罪の気持ちを口にしかけて、一度口を閉じ、再度開いたときには渡米の意思を伝えた。

「渡ってどうするつもりなんですか？　場所もわからないんじゃないな

いんですか？」

ミルフィリアはいつにもまして冷静だった。仁はいつもその冷静さが羨ましくもあり怖くもあった。まるで彼女の両親を彷彿させるような感情の見えない顔は、仁が時折見せるそれよりも何倍も完成されていた。

「国連の窓口で暴れてりやなんとかなるさ」

奈々華ですら驚いた顔を見せた。彼の無計画ぶりはここまで来ると、尊敬の念すら抱かせる。A M Cの全貌も組織図も知らず、それでも彼がやると言えば出来てしまうのではないか。そう思わせるだけの力がある。

「誰でも自分の命は大事だからね。いざとなれば恐喝すりや金髪のねぐらくらいわけなく話すさ」

圧倒的な暴力は立場も体面もぶち壊す。何も考えていないかと思えば、突然世の中の理を話すのだから不思議な男でもあった。

「パスポートはどうするんですか？」

彼にはこちらの世界において戸籍すらない。

「実は雀荘で知り合ったヤクザのおっさんが居るんだ。その人に金を積んで頼もうかと思ってる」
偽装、ということらしい。

「最悪空港の職員を買収してもいい」

へらへらと軽薄な笑み。やはりここらへんも行き当たりばったり。

「誰だって金は欲しいからね。それでもダメなら…… いざとなれば恐喝すりや飛行機に乗るくらいわけないさ」

流し目で兄を見る奈々華だけは、その無計画の裏に彼の本気を見ていた。仁は元来そういうことが出来る、そういう資格を持った数少ない男だ。言うなれば自分の意思を百パーセント実現できる、それだけの力を天から授かっている。彼は知っている。この世の中、周到にやれば必ずうまく運ぶとは限らない。だったらその身一つで勝負するのが、彼にとって最も確実な方法だと。普段からそうしないのは、そうまで無理をして叶えたい思いがないから。人との調和を

身に染み付け、またそのやり方が一番賢くて疲れないから。

「どれもこれも犯罪じゃないですか」

脱力したような溜息と共にミルフィリアは言う。仁は「今更だろう」と取り合わない。彼が殺した人間の遺体を強奪しに行くという、その目的自体何一つ法律に抵触しないものはない。

「それにさ…… 約束を破ったのはむしろだぜ？」

仁がニヒルに笑うと、あれほど強固に無表情を貫いていたミルフィリアまで引き出されるように微笑を浮かべるのだ。

「そんな子供でもやるような不義理を、大人でもやらないような違法の数々を犯してでもとがめに行くんですね」

ミルフィリアの半ば諦めたような微笑には確かに少しの嬉しさがある。仁はそういう冷徹を貫かない彼女に親近感を覚えているのだ。

「遊案と相談して、貴方が居ない間の学園の防衛が可能かどうか色々シミュレートしてみます」

ついにはそういう言葉が出てくる。

「可能と判断したら、渡航の手段はこちらで用意します。その他便宜も少しは図れると思います」

仁はその言葉にしばし考える。記憶を探るようにミルフィリアの頭の辺りにぼんやり焦点。

「……そっか。助かる」

坂城にはお抱えの密偵が幾人か居るといつか仁に零した。その彼らはきつと独自の潜入ルートを持っているはずで、坂城は自前の船かジェット機でも所持しているのかも知れない。しかしそれを突くほど仁も野暮ではなく、礼を言うに留めた。

終章 第二百二十話：刹那の愛すらその真贋を見極められない愛なき迷子

去り際、仁は振り返った。やはり変わらずミルフィリアは座ったままだった。

「……アイツ、お前の話なら聞くのな」

ミルフィリアは再び鉄仮面を取り戻し、仁を見上げた。

「私はあの子の傍に居ますからね」

抑揚のない声だった。こういうところが大人だ、と仁は考えている。ダメなどころには容赦なく、良いところには人間味溢れる裁断を下す。

「……俺一人が居ないくらいで、あそこまで情緒不安定になるかね」

「まあ、確かに彼女はちよつと特別ですがね」

一気に喋りきらず、一度口内を湿らせるような僅かな間において、
「それだけ貴方があの子にとって大切な存在だとは考え付きませんか？ 居なくなると思うだけで心をかき乱されるほどに」

「……」

「貴方は面白いですね。それだけの力を持っていて、卑屈なんですから」

また少し区切って、

「かと思えばさっきみたいに貴方にしか出来ないことを、がむしやらにしようとする」

掴みどころがないですね、と。話は終わりとばかり、ミルフィリアはソファアールから腰を上げ、彼女等の部屋へと歩を進め始めた。そしてその途中で、立ち尽くす仁を振り返った。

「もう行きなさい。妹さんが待っているんでしょう？」

「告白されたの？」と聞かれると「そういうわけでもないけど、それに近い」と答える。奈々華は「お兄ちゃんって意外とモテるんだ

ね」と嫌味ったらしく返してくる。意外と、の部分を強く言う。俺は愛想笑いのようなものを浮かべる。上の空というわけでもないけど、思考の大部分は全然違う場所を辿っていた。

奈々華と坂城はどう違うのだろう。この真っ直ぐ向けられる好意は、種類こそ違え、強さや価値は変わらない。いや、そもそも妹が兄に向ける親愛と、他者が他者に向ける情愛にどういう違いがあるんだろう。愛のない世界に生まれ落ちた俺にだけわからないのだろうか。根本は共にいたい、仲良くしたい。そんな単純な気持ちが共通していて、何が違うんだろう。キスやセックスということだけなのか。じゃあそれらをしないカップルは、絶対に愛し合っていないくて、兄妹なのか。そんなわけあるか。

そもそもどうして坂城を受け入れないんだ。奈々華と共に居たいからか。恋人が居ても妹と一緒に遊んでも何ら問題はないのに。そこで蘇る奈々華の悲しみに沈んだ表情。頭を振っていた。今は特にダメだ。やっとこさ兄妹の形を取り戻した今、彼女の傍には常に居ないとダメだ。それをこの子は望んでいる。思いながら奈々華を見つけていると、奈々華は気まずそうにはにかんできてる。

本当は怖いだけかもしれない。まるで心の深淵から、影が伸びてきたようにもう一人の自分の声がしたような気がした。それに体よく奈々華を口実に行っているだけじゃないのか。子供のようにあどけない独占欲を「しょうがないな」と物分りの良いフリをして、大人ぶって……この三年自由奔放な一人暮らしを堪能していた心の中に面倒くささや疎ましさは確かにあるくせに。自覚しているくせに。本当は折れてしまっているんだろう。黒川を殺めた日、最も怖くて悲しかったのが周囲の変化だろう。手の平を返して呪詛の言葉を撒き散らす昨日の友人。ちよつといいなと思っていた異性。気にかけてくれていた教師。誰かを信じ、誰かを愛し、誰かに愛されることに、果て無き懷疑と嫌悪を植えつけられて、心が折れてしまったんだろう。そうして俺は、黒川のことより自分のことばかりを考えている自分の価値を大きく下げた。

だけどそれでも説明のつかないことがある。そう、奈々華だ。周囲と同様に俺を許さなかった彼女を今は信じているんじゃないか。共に居るなんて約束までした。奈々華のため、苦しめたことへの贖い、なんておためごかしはもうよくて、俺はこの目の前の子と一緒に居たいと思っている。俺が相手をしたくないものだから少し拗ねて鬼の少女と手を繋いで俺を置き去りにしようと歩を速めている、十七とも思えない子供っぽさを持ったこの子と。

過ぎた年月か……結局そんなありきたりな結論になる。ありきたりだけど馬鹿に出来ない。たとえ一度突っぱねられていたとしても、それでも俺はこの子が悪い子じゃないと知っている。実際に離れていた間も、この子は仲直りのきっかけを探していたのも知っている。他人は怖い。猜疑や嫌悪を抱いていても笑う。わからない。怖い。だったら気心の知れたわがままの方が良い。所詮兄妹とは言え違う生き物。それは思い知った。まさかあれほど懷いてくれたこの子に手をはね退けられるなんて思いもしなかった。けど同時に思った。妹でこれなんだから全くの赤の他人の心の深奥などわかりようはずもない。だったら多少わからない部分があっても、少なくとも今この瞬間は自分を求めてくれるこの子と居たい。そんな逆説にもならない、消去法にも近い考え方。それでも今この瞬間は信じている。

「結局……」

奈々華は信じられるけど、坂城は、他人は信じられない。そういうことになるのか。

終章 第二百二十一話：返還

それから三日経った頃だった。仁は姉妹のゴーサインと共に発つ準備を進め、向こうの気候や風土に合わせて替えの服などを数着用意したり、預けるにあたって鬼の少女の名前を決めたり、存外やることなく暇を持て余したりして過ごしていた。実際最大の難関は渡航手段だったわけだから、当然と言えば当然だった。

突然来たのだった。本当に何の前触れもなく、そのヘリコプターは学園の中庭に降りたった。応対に行ったミルフィリアから仁に連絡が入ったのが正午を少し過ぎたあたり。そこから祐やミルフィリアの両親の墓を管理する例の寺に連絡を入れ、葬儀の予約を取り付けたのが少し前。火葬、葬儀は明後日行われることになった。遺体の保管場所は、学園の地下に決まった。劣化を懼れてか仁は戸惑った顔をしたが、冬の気候、ミルフィリアの魔術で冷凍保管が可能だということを知り、了承した。

近藤正輝の遺体が国連から学園へと返還された。

「多分そこは妹なんだと思う」

奈々華の難解な答えに、シャルロットはこちらも相応に難しい顔をした。奈々華はそれ以上自分から言葉を重ねる気がないのか、鬼の少女をあやす作業に戻る。「カティ」と名づけた。最初に大きく興味を示したものをモジろう、と仁が言うので、それはカチューシャだった。買い物に連れて行った時だった。

「……どういふことだい？ ドライな部分ってことかい？」

シャルロットがしたのは「一緒に居なくていいのかい？」という質問。仁は出ていた。

「例えばお兄ちゃんがお兄ちゃんじゃなければ私は今頃とつくに求婚

していて、べったりだったと思う。勿論オツケーしてもらえたらの話だけど」

溢れる想いが口について出ないのは、理性が律しているから。理性の正体は……

「遠慮ってことになるのかい？」

シャルロットは釈然とせず、奈々華もまた首を大袈裟に捻ってみせる。

「慎重さと、妹の部分、って言ってもわからないよね？」

諦めたように笑うので、シャルロットはほんの少しの寂しさを抱く。

「何となく慎重さって部分はわかるよ。タブーをぶちぎるようなことだからね」

「まあそうだね。妹の方はさ。私にも上手く説明出来ないんだけど」そうとだけことわって、奈々華の手が止まる。カティは言語が通じないはずなのに、仁がすぐに戻ると言い聞かせるとぐずるようなこともなかった。今は奈々華に絵本を読んでもらっている。絵の下のひらがなを読み上げていくことに、あまり意味がないことにすぐに気づき、奈々華はただ膝を貸してタイミングを見計らってページを繰るだけの作業だが、どことなく褐色の少女は嬉しそうだった。

「今は一人にして欲しいんだろうなってわかるんだ」

「まあ、近藤とか言う男のことは結構気にかけていたみたいだからね。正確にはその死体だけど」

シャルロットはさつきから自分の推測を言ったり、奈々華の意に同調を示したり、様々手を尽くしているが、中々彼女の主人が大きく頷くことはなかった。奈々華は「ううん」と唸ってから、

「それは勿論そうなんだけど……それ以外にもちよっと考えることがあるみたい」

仁は奈々華には少し用事を済ましてくるとしか告げなかった。兄妹だからわかる部分と言うのもあながち馬鹿に出来ないのかもしれない。「勘」というものは経験則から導き出される。重ねた年月が物を言う。

シャルロットは参ったね、と漏らす。やはり少し残念そうな顔。彼女に一定以上の精度を誇る勘を働かしめるほどの経験則をもたらすには、半年足らずのこの日々は圧倒的に少なかった。そしてそんな彼女の胸の内を機敏に察知したのか、奈々華は優しく笑って言った。「遠慮ってのも間違ってはいないんだよ。私が本能のままに動いていたら、お兄ちゃんは今頃禿げるに任せてると思うから」

「コレで遠慮してるってんだから最早私はなんて言っていいいかわからんよ」

シャルロットは何度も首を振り、この場に居ない仁に向けて心の中で合掌した。

終章 第二百二十二話…アイスマン

学園の書庫に不釣り合いな氷の柱が一本立っている。無駄なスペースを割けないとでも言うように、本棚の一角に立てかけられていた。まるで異物のように扱われても、そこにしか置けないこともわかっていたし、そもそも自分が文句を言ったり出来る立場でもないのだから、それを見ても仁は特に表情を変えなかった。冬場の地下だというだけで自然と鳥肌が立つほどの気温なのに、その場所は一際寒かった。近藤正輝。何かの冗談か、昆虫の標本のように、氷柱に閉じ込められた人間。陳腐でもなんでも、仁の第一声は「眠っているみたいだ」だった。仁が最後に見た、そのままの姿をしていた。無駄な肉を排した裸体はきらめく氷の粒と相まって芸術品のような高貴さえ漂わせている。切れ長の目に整った柳眉は、血が争えないことを証明していた。そしてその似通った目もとの持ち主もまた、仁が守れず死んだ。

仁はただ黙って手を合わせた。そのまま動かなくなった。瞳を閉じ口を真一文字に閉じ、外界から閉じられているように静かだった。死者に懺悔してみても、弾劾も慰めも返ってはこない。逆に言えば彼にはそうするしかないのかもしれない。祐にしたように、自慰や決意表明も、ないのかもしれない。語る言葉がないのかもしれない。彼の最後の望みは、既に先に墓所で眠る。

仁がそうして一時間近く経った。真摯な祈りに閉じていた目を、徐に開け、口を開いた。

「僕は貴方の息子を守りませんでした。導けという言葉に何一つ報いることが出来ませんでした」

淡々とした独白に、静かな怒りがこもっていた。勿論自身の不義理への怒り。そして自分を叱責することによって、汚らわしく矮小な自慰を未然に封じているような節があった。

「……謝れません。謝ることは僕の心しか助けないからです」

手を解いた。後ろで組み直す。もし、もしも、近藤が氷を突き破って怒り狂い、仁を殴るのなら、仁はそのままの姿勢から動かない。

「僕は貴方に何かを返すチャンスがないんです。最後のチャンスをフイにしたんです。どころか……」

唇が震えた。仁の左手には、右手の爪が食い込んで、皮を掻き剥るようにして、石畳に赤い斑点を作っていた。しばらく何かに耐えるように、仁は動かなかった。近藤は瞳を穏やかに閉じたまま、そんな仁に目もくれない。

「……失礼します」

仁は慇懃に頭を下げると、身を翻した。振り返らずに歩いて行く。本棚の間を縫う足取りは、覚束ない酔っ払いの千鳥足よりは幾らかマシだった。

見計らったようなタイミングで、仁の腰にいつもの相棒が戻った。レリーフが施された荘厳な扉を閉めた辺りだった。黙祷は済みましたか、と聞くのでああと小さく返す仁は金色の鍵を隠すようにポケットにしまった。

「肩透かしを食らったってとこっすか？」

万端の準備は水泡に帰し、入れ込まんばかりの気合は霧と消えた。

「俺は別にバトルフリークでもないからね」

顎を引いて、前を向いて、

「戻ってくればそれでいい」

「へえ」

「お前が残念だったんじゃないか？ 鬼ってのはそういうもんなんだろう？」

「村雲君はそうでしたね」

「お前は違うってのか？」

結論を急ぐ仁に、わざとをもって回った言い方。しかも返答は「さあ」と来た。仁は軽く舌打ち。

「やっぱりイライラしてるじゃないすか」

きつと顔があれば、静はニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべているのだろう。

「別に闘えなかったからじゃない」

そんなものは唾棄すべきとでも言わんばかり。

「……気に入らないんだよ。何か俺の見えないところで、見えない力が働いてるみたいで」

「ほう」

「それに踊らされてるみたいで」

「確かにそんなタイミングだったね。すると、神様がアンタにこれ以上罪を被せない為に……」

言葉は途中で遮られた。それこそ唾棄すべきような話だった。

「そんなわけあるか！ 誰かが動いているんだよ。俺とラインハルトをぶつけない為に」

「木室さんって線はないんですか？」

「……わからない。そんな権力があの人にあるだろうか。それに見張っていたとしか思えないタイミング。そんなことが出来るか？

どこから？ いつも？」

最後の方はブツブツと。静にというより、自身の考えをまとめるために言語化しているだけのようだった。

終章 第二百二十三話…デジタル思考

行方の部屋は二階の高等部の学生が占めるエリア中頃にあった。何の予約もなしに、仁は戸を叩いた。相部屋だろう、行方とは対照的に化粧気のない少女が顔を出した。眼鏡をかけて染髪など無縁の日本人らしい黒髪を肩口で切りそろえている。

「すみません。行方さんを尋ねてきたんですが」

少女は少し眉を動かしただけで、「はい」と硬質な声で答えると、部屋の中をかえりみた。それが合図にでもなっているのか、行方が入れ替わりに顔を出す。こちらは今日も今日とてバッチリお化粧。

「私出てますから」

と相部屋の少女。玄関口の辺りで立ち尽くす仁は、行方が何も言わないでその背を見送っているのと同じようにした。ガチャリと戸が閉まる音。

「真面目そうな子だね」

「ああいうのが性質が悪いのよ」

仮にも同じ部屋で過ごす相手に向ける言葉ではなかった。そうして孤立を嫌悪や優越で紛らわせているのだろうか、と仁は邪推するが、行方の表情からは感情が窺えなかった。

「必ず相部屋ってのも難儀よね」

自分からふった話題にも関わらず、もう仁はついていけず、弱々しい苦笑を浮かべるだけだった。

「お父さんの？」

申し訳なさそうに頬のあたりを搔いて、仁は頷いた。

「何でもいいんだ。君がA M Cについて色々知っていたのは、君のお父さんの遺業のためだろう？」

「私は継ぎたいわけじゃないんだけどね」

その反発も仁は織り込み済みで、苦笑でやり過ごす。

「……資料とかないかな？」

行方は一瞬嫌な顔をしたが、やがて立ち上がると、自分の勉強用だろう、木製の簡素な机の引き出しを引くと数枚の資料が挟まっているらしいクリアファイルを手仁の前に座りなおした。父親の遺産と呼べなくもないそれらは乱雑でも丁寧でもなく扱われているらしかった。彼女の父親への複雑な想いが反映されているようだった。ジャーナリズムに命をかける生き様は仁には理解できないものではあったが、何か一つに全てをかける人間を退けてきた仁にとって、ただの紙切れでないのは確かだった。会釈するようにして受け取った仁は切り口から全てを取り出すと目を通して始める。行方はそんな仁をじっと対面から見ていた。

原稿用紙と写真がクリップで一まとめにされたものが数セット。十に届かないだろうか。A M Cとフロイラインの同一性を示唆するためのものだった。誰かがやらなければいけないことなのかもしれない。世界は人が思うより複雑で、衆目に晒すことはいわば啓蒙だった。

「私が以前教えたようなことしかないわよ。もう絞っても叩いてもなんにも出やしない」

行方の饒舌は仕方がないことかもしれない。よく見ると、経年劣化とは違うインクの指跡なんかも端の方にあった。

「……これは？」

仁の手は止まる。写真や原稿にはラインハルトを追ったものが多かったが、毛色が違う資料が一つだけあった。彼の手書きの原稿ではなく、新聞記事のようだった。白黒の写真には旅客機が大破して炎を上げている姿が映っている。日付は今から二年ほど前のようだ。記事の方に犠牲者の名前のリストがあった。仁はそれを穴が開くほど見つめる。

「わかんないのよね。多分その事故にフロイラインが関わっていると踏んだんだろうけど。時期も重なるし」

「時期？」

仁が顔を上げる。

「それまでの記事を読んでみなさいよ」

読んでいるようで流していたらしい仁は言われてもう一度資料を見返す。真剣に字面を追っていく仁に行方も口をつぐんだ。アナログの目覚まし時計の針の音が焦燥を煽るように時を刻んでいた。

何度も礼を言って辞する仁に行方は複雑な顔をしていた。「もういいわよ」と中途半端な笑みを浮かべる。家族を顧みず、自分を貫き通した父の成したことが、犬死だと考えていた父の遺したものが、人の役に立つ。それが信じられないのか、気に入らないのか、誇らしいのか。

「……俺も親父に無理矢理剣道を習わされたんだけど、今となってはそれなりに役に立ってるんだ」

去り際、仁は突然身の上を話し出した。行方は何となく予期していたのか、困惑はなかった。

「親父が嫌いだからって剣道まで嫌う筋合いはないよな」

立場や事情は違えど、通ずるものは二人にはあるのかもしれない。なにせ行方は神妙に頷いていたから。

「ねえ……前から聞きたかったんだけど。あんたは何者？」

仁は天井に目をやり、少し考えてから、

「ただの学生だよ」

笑顔を残して、扉が閉められた。

終章 第二百二十四話：もう一回

ミルフィリア・A・高坂は部屋の戸口を鋭い目つきで睨んだ。何せ足音が聞こえなかった。突然透明人間が部屋の前で顕在化し、ノックしたかのようなだった。電話口の相手に「切ります」と短く伝えて、部屋の向こうの相手に「どうぞ」と短く伝えた。当たりはついていて、やはり数時間前に地下への鍵を渡した男だった。いつもヘラヘラと軽薄な笑みを口の端に乗せている青年は、ここぞという時にとっても切れるしキレるので、取り繕ったような笑みを返した。

「誰と話してたんだい？」

「部下ですよ。と言っても私ではなく、遊案なのですが」

へえ、とわざと興味なさそうに。世間話の類だった。ミルフィリアとこの青年は鍵を渡した、返した、はいさようならというような味気ない間柄ではなかった。

「俺のアメリカ行きがなくなったことが関係してるのか？」

仁は申し訳なさそうな顔。妙に板につくそれは、彼の処世術として凝り固まっているのだった。

「貴方が気に病むことでもありませんよ」

柔和に笑う。

「遊案に会っていきますか？」

「おいおい」

「ラストチャンスだと思うのですが？」

ミルフィリアは口元は締めず、目だけ力があつた。仁は小さく溜息を返した。

「何が気に入りませんか？ 私より幾らか女らしい体をしているでしょう？ 気立てもいい。私なんかより男を立てる術が生まれもつてあります」

「……いちいち比較するのは、俺がもし奈々華のお守りがなかったらお前を選ぶって言って欲しいのか？」

「違いますか？」

「そうだよ。多分、どちらかというとお前の方に惚れてる」

「妹さんとは結婚できませんよ？」

「そういう対象ではないよ、流石に。勿論。でも……今はダメだよ」

「いつならいいんですか？」

「それは奈々華に聞いてくれ」

「……最低ですね」

矢継ぎ早に飛び交う質疑応答。仁は休憩するように前髪を深く長く、掻きあげた。

「会ってってください」

「俺にはお前がわからんよ。どうして妹と変わらないような存在をわざわざ傷つけるような相手と鉢合わせる？ どうしてお前と俺がくっついても良しとする？」

「一つ目は、貴方をあの子が好いたから。簡単なことです。チキンの貴方と違って、欲しいものはどうやっても手に入れたがる子です」
「……」

「二つ目は、あの子の特殊性。私と貴方が結ばれるということは、あの子と結ばれるということでもあるからです。私と貴方が絡み合っているところに、あの子が裸で加われれば、貴方はあの子を抱くでしょう？」

「生々しいな」

苦笑い。

「悲しきは男の性かな」

「一番でなくても良いんです。あの子にとって家族であり、仲間ですらあれば」

「随分と都合のいい女なんだな」

「そう思うなら遊びでもいいから抱いてやればいいでしょう？」

ミルフィリアの足が動く。二人のプライベートルームの扉が開かれる。ミルフィリアの笑みは、娼婦が誘うような妖しさがある。仁は

吸い込まれるように部屋へと足を踏み入れる。しかしその目には強い光があつて、彼女は悟る。悟って尚、切れない想いがあつて、口を開いた。

「最後のチャンスですよ。本当に」

終章 第二百二十五話…妄想懷胎、偽善の限界

部屋に入ると、いきなり口がきけなくなる。唇を唇で塞がれている、と気付くのにそう時間はかからなかった。長い睫毛が涙に濡れていて、艶っぽくて、形のいい鼻からは強い息が漏れている。このまま状況に流されてしまおうかという弱い自分も確かに居た。だけど俺は帰る。奈々華と帰る。帰って何をする。あっちの世界に帰れば何かあるのか。自由はある。金はない。娯楽はある。恋人はいない。妹はいる。なんだ、一長一短じゃないか。でも帰るのか。そもそもどうして俺はこんなにも好かれる。それほどにこの目の前の女にとってこの場所は大事なのか。守ってくれる存在が必要なのか。それもフロイラインを潰せば終わる。じゃあもうそんなことは関係ないのか。女は馬鹿だ。ちょっと命を助けただけでこうも簡単に体を許すのか。俺にとっちゃ何てことはない。ただ刀を振るっただけなのに…… いや、馬鹿は俺だ。そんなことはわかってる。

「……仁」

荒い息で俺の名前を紡ぐ唇。異様に湿ったそこに俺の唾液も含まれている。いつの間にか俺は彼女の肩を掴んで引き離していたらしい。「愛している。私にはもう……」

嘲笑すら出かける。全部嘘だとは言わんさ。だけど、お前は俺を怖がっていたじゃないか。君の姉を殺すとさえ思っただろう。そしてその恐怖は正しい。俺には確かに御しがたい凶暴がある。心臓の中に突然黒い、どす黒い液体がばら撒かれるんだ。それが全身を巡り、脳を支配し、手足に命令して、壊すんだ。だからお前を守ったんでも、学園を守ったんでもないよ。

「抱いてくれ。同情でも遊びでも良い」

無理だ。俺の偽善はそんなに簡単に崩れない。何て言うかわからないのか。

「友達を同情や遊びでは抱けないよ」

屑だ。恨むならこんな俺を好きになった自分の見る目のなさを恨め。もうそんな生半可ではないのにな。もう絶対に失いたくない者のリストに俺の名前も載っているのにな。わかっていてこんな言葉を吐くんだから救いがない。だけど、遅かれ早かれ俺の体はここではない場所へと帰る。一度抱いて満足するんじゃないだろう。恒常的に求めるんだろう。

「どうしてだ？ どうして！」

再び唇を重ねられる。重い、と頭が思ったときには体は床の上に倒れていた。胸のあたりに胸の感触。「私より幾らか女らしい体」なるほど。奈々華より大きそうだ。「変質的な男」なるほど。今度は明確な意思を持って、坂城の体を押し退ける。唇が離れる。蜘蛛の糸のように、唾液が唇間。

「俺はお前を愛してはいない」

婉曲は意味がないんだな。言葉の端々に脈がないことは滲ませてきたつもりだ。「友達」と明言したこともある。全部傷つけただけになったのか。ギザギザの鈍い刃で斬ったようだ。足をもがれた昆虫を思った。不意に他人事のような哀情が湧く。言葉の裏を読めないと、こんなに滑稽に踊るのか。腕を掴まれた感覚があつて、手の平に柔らかく温かいもの。トクトクと少し早い鼓動が豊満なそれらを通しても伝わる。握り込まされて、手の平から溢れるような感覚。

「……遊びでもいいと言っている」

そもそもさ、お前俺に何か隠してないか？ いや、やめよう。今口に出しても水掛け論になれば良い方。

「……遊びでは抱けないと言っている」

腕を掴む痛いほどの握力は、徐々に、力尽きるように、緩くなる。やがて自由を手に入れた腕は、少女の胸から離れていく。坂城の虫の泣くような声。「どうしてもか？」と聞いたらしい。冷たいな、俺は。だけど、元の世界に帰る俺に体を捧げても、それを受け取っても、それこそ酷いよ。無神経に刻むには余りに大きな快樂だ。

ガチャリとドアが開いた。ミルフィリアの顔が見える。俺は丁度少

女の体の下から這い出したところだった。ゴミを見るように冷たい顔をしているかと思えば、優しい顔をしていた。全てを諦めた者のようだった。祐君の顔が浮かんた。俺を赦すと言ったときあんな顔をしていなかったか。じゃあ俺の顔は救いを得たように醜く緩んでいるのか。

「……仁さん。もういいです」

立ち上がる。足にはすぐに力がこもり、上体は簡単にスッと伸びる。ああ、最低だ。大人に怒られた子供が、親がやってきたのを見つけたようだ。放棄。

「ああ、すまない」

何を謝っているんだ。謝るくらいなら最初から断るな。

「すまないね」

もう一度口が勝手に謝って、部屋を辞する。解放。部屋の外、いつも見る坂城の事務机が、懐かしささえ伴う。

最後に小さく、覗き見るようにして窺った坂城は涙を溜めた瞳を無感情に俺に向けていた。

終章 第二百二十五話：妄想懐胎、偽善の限界（後書き）

そつと15禁にしてみました。

終章 第二百二十六話：バックボーン

仁は走っていた。タバコの影響か体力不足を痛感して、このところ仁はよく走っていた。それは戦いを控えた戦士が高揚を静めるために入念に行う素振りや武器の手入れに似ていた。いや、特にこの三日ほどは激しく走り込んでいたので、実際似ているというより同じなのかもしれない。

平日の昼下がりの市街は、勤め人もおらず、仁と同じような学生がプラプラしているのと時折すれ違うだけだった。快適な環境と言えなくもなかった。一つだけ彼が不満を持つとしたら、いつも着る上下黒のジャージではなく、全くの普段着だという点くらいか。坂城の部屋からその足で、山を下りた。

「……安直だな」

走り始める前、仁は苦々しく静にそう言った。静は何も言わなかった。安直というのは、性欲を抑えるために体を痛めつけるという発想を指しているのか。三大欲求の中でも睡眠欲というのは最も御しがたく二者に勝る。或いは彼の中に巢食い始めたどす黒い感情が、やり場をなくしたことで関係するのか。口では戻ればそれでいいと言ったが、相応の覚悟を伴った予定が泡のように消えて、簡単に割り切るのは難しい。彼の性格からすると後者が強いかもしれない。自分が苦心して取り返す、そのプロセスに自己満足が含まれていることに気付いてしまったのだろう。死者には着せようもない恩を売りつけず、無償で提供して悦に入る為のプロセス。フードの下から覗く仁の鋭い眼光に、向こうから楽しそうに笑い声を上げて近づいてきた若者二人組が口をつぐんだ。

一しきり走り終えたと、仁はスポーツドリンクを自動販売機で買い、街を後にした。いつもの坂道までの距離、仁も静も一言も言葉を発さなかった。

随分長い間走っていただろうに、さすがと言うべきか、膝が泣いた
りもせず、仁はしっかりと足取りでアスファルトを踏みしめる。

「……俺は」

仁が久しぶりに出した声は情けなく上ずっていた。喉の渇きや体の
疲れや、心の疲れからだった。

「俺はこの世界に何しに来たんだろうな」

目だけは相変わらず前を向いたまま。しかしその瞳は弱々しく迷い
を含んでいた。足を止めれば惑うのは、体だけではないのだった。

「生きてるヤツにも殺した人にも…… 俺は」

最後まで言いかけて、いややめようと打ち切った。静はその間喋っ
ていなくて、まるで独り言だった。

「……妹さんと仲直りしたじゃないっすか」

しばらくして、もうとつくに話題は終わって学園の門が見えてくる
頃だった、静が言った。「え？」と仁は一瞬何の話だかわからない。

「妹さんと仲直りしたじゃないっすか」

「ああ……」

合点がいった、という意味合いと、ああそんなことか、という拍子
抜けの意味合いが合わさっているようだった。

「案外難しいものなんだよ。自分の中でもどうしても譲れない一本の
筋を見つけるってのは」

時折静が使う、若者を啓発するような口調を、仁は内心好いていた。
「魂って言うってもいい。それを持ってるヤツは何をやらしても強い」

「それが奈々華……」

顎に手を当てて熟考する仁の中には既に答えは出ていた。

「そうでしょう？」

頷いた。幾度となく直面した取捨選択に、仁は意識的に或いは無意
識に、奈々華を選び取ってきた。

「だけど…… それはここじゃなくても出来たことで、俺が勝手に
つぶってたから」

「きっかけてるのは物事が進むのに意外とあなどれない役割を持っているんすよ」

パンと背中を叩いただけで告白が成功して、恋仲になった男女。吸ってみろよ、と中学時代の先輩が差し出した吸いさしの煙草。パチンと払われた救いを求めた手。成り行き任せに一つの部屋で同居を始めた兄妹。エトセトラ、エトセトラ…… 仁もわからないでもなかった。

「犠牲が多すぎる」

首を左右に振った。汗で湿った前髪は纏まって揺れる。

「確かにそうかもしれないっすね。こんなにハードな局面の連続の中でなくても、或いはゆっくり時間をかけて仲直りできたかもしれない」

「そうだろ？」

「でもアンタはそれでよかったかもしれないけど、あの子は限界だったんじゃないすか？」

やっとこさ辿り着いた鉄の門。くぐりながら仁は、奈々華が待つであろう二階の右隅に焦点を当てていた。泣いて許しを乞うた妹の顔を、縛り付けるように強く抱き締めてきた腕を、思い出しているのだろうか。

終章 第二百二十七話：精神年齢

妙に疲れた顔をして部屋に戻ってきた仁を、カティが迎える。腰の辺りに巻きつくようにしてじゃれつかれる様は父親そのもの。奈々華が遅れて「おかえり」と挨拶。仁は前回の教訓もあって、先に早めの風呂を浴びてきた。しかしそれはそれでまずかった。

「どうしてお風呂なんて入ってきたの？」

いつもどおり振舞ってくれる奈々華を、素直に仁は有り難がれない。

「……気持ちを切り替えるためにね」

「ふうん」

目を合わせない兄に、それでも奈々華は追及はしなかった。ある程度納得できる理由ではあったから。仁とて嘘はついていなかった。

「ぐずぐずしてるお兄ちゃんも結構好きだけどな」

「酷い言われ様」

やっと疲れた顔に笑みが灯る。カティを抱っこしてやり、仁はコタツに足を突っ込む。腹の上の子供まで布団をかけてやると、そこだけ山が出来上がる。「寒い」と言いたいのか、中に潜っていたアイシアが不満そうな声で鳴いた。奈々華は兄の食事を用意するべく甲斐甲斐しく台所へと立った。

「思えばこの部屋も狭いよな。人間二人、鬼一匹、猫二匹、刀一本…… てかすげえカオスだな」

食後温かい茶を三人分。猫舌の仁と子供のカティの分は必要以上にぬるい。配給を終えた奈々華は仁の対面に座って足を突き合わせる。こうして慎ましいスキシップで日頃は我慢しているのだから、突然現れた子供が膝の上に座っているのが気に食わないのも仕方ないことかもしれない。まだまだ小さな子供だから爆発していいとも言えるが。

「突然どうしたの？」

「いやなんか、色々振り返っちゃってさ」

そう言うと、少し遠い目をする。

「手詰まりってこと？」

「なぜそうなる？」

懐古という名の現実逃避。仁が難しい局面にぶち当たると確実にやること。

「何かあったの？」

「あ、いや。その、まあ…… やることがなくなっただよ」

近藤の遺体は取り返した。十分かどうかと問われれば、決して力強く領けないが、近藤親子に対して今仁に出来る限りのことは尽くしたことになる。そもそも死者にしてやれることは少ない。これは奈々華には内緒だが、坂城との関係にも変化、いや決着がついた。とても双方が幸せになれる形ではなかったが、それでも今の仁にはあの答えしか出せないのだから仕方がない。そもそも異世界人にしてやれることは少ない。

「あとは待ちゲーだね。パチンコだよ、パチンコ」

不謹慎ではあるが、言いて妙なのかもしれない。こちらの意思は一切介入出来ない。残りのフロイラインが攻めてくるのを待つだけ。それがいつになるかはわからない。

「ううん。本当にそうかな。出来ることはないかな」

「……出来ればない状態が良いな」

いつもの不精とは違って、真剣な雰囲気がどこことなくあった。

「今日は上で寝てくれないか？」

「ええ？」

嫌がる奈々華。カティが生まれてから、兄妹はその赤子を囲んで寝ている。

「ちょっと考えたいことがある。出来たらカティまで引き取ってくれると嬉しいくらいだ」

まあすぐに寝付くから居ても大丈夫か、と自己完結気味。

「ダメだよ。私にはある程度しか懐かないもん」

それも世話をしているから、という認識程度かもしれない。子供は案外賢く、誰が自分の為に動いてくれるかを正しく理解している。

「それはお前がちょっと冷たくしてるからじゃないか？ 坂城のベツドには眠っていたぞ？」

「そんなこと……」

奈々華とて子供を可愛がるくらいの器量は持っている。だけど確かに、ふとしたときに無条件の愛情を注いでいるかと問われると頷ききらない。

「ていうか、お兄ちゃんは大丈夫なの？」

「お前、俺を何歳だと思ってる？」

「十一歳くらいかな」

丁度カティと同じくらいの年恰好。

「んなこと……」

仁とて大の男としてのプライドがないでもない。だけど確かに、ふと辛いことにぶち当たったときに無条件の愛情を注いでくれるこの妹に頼っていかないかと問われると頷ききらない。

「意外とそれくらいかもね。精神年齢は」

「ほうらね」と奈々華。逸早く、もう文句を言わせないとばかりに布団にもぐりこむ。

「まあ…… 流石に妹に欲情したりはせんか」

口の中だけで呟いて、仁は諦めの境地もかくやと、カティを連れ立って奈々華が待つ布団に体を滑り込ませた。

終章 第二百二十八話：詰まらない最後の一步（前書き）

冷静に読み返してあまりに酷かったので二段落以降を書き直しました。二度手間を取らせてしまった方には陳謝いたします。

終章 第二百二十八話…詰まらない最後の一步

夢を見た。なんだかよくわからない夢だった。中学時代の同級生の夢だった。俺は彼女に確かに好意を抱いていたように思う。本当に淡くてしょうもない想いだった。押せば壊れるような。もう何年も会っていない彼女は夢の中では大人になっていた。「恋人がいる」と言った気がする。俺は告白したんだろうか。時制もバラバラで、俺は中学時代のその下らない想いをぶつけたということだろうか。そのシーンはなく、ただ彼女は「恋人がいる」とだけ。嘲笑われたようにも、哀れまれたようにも感じた。ふられた俺は何故か奈々華を思った。重ね合わせた。夢の中の俺の思考回路は俺にもわからない。奈々華もいつかああいふ顔をするのか、と。「恋人がいる」と寂しいのか、怖いのか、何だかわからない気持ちになった。鉛が心にのしかかったようだった。奈々華は器量がいい。冷静に引き抜けた頭で考えると、恋人の一人や二人いてもおかしくはない。ひょっとすると元の世界に戻れば俺はもうとっくに要らなくて、ただこの世界に頼れる人間が俺しか居ないだけなのかもしれない。頭をふった。奈々華もカティもすやすやと眠っていた。暗闇の中でやけに遠く感じた。窓の外も暗くて、置時計を見ると午前三時だとわかった。

暗闇で煙草を探し、火を点ける。まずい。口の中がカラカラだ。コタツの中に足を入れようとしてやめた。いやに寝汗をかいている。しばらく冷やそう。頭も体も。周囲を見回すと電化製品の待機電力の賜物か、小さな光点が暗闇を完全にしていない。そして口元に灯る煙草の火。抗っているようで可笑しかった。ベッドの方に目をやると、もう手が届くことはないのではないかと錯覚するほど遠かった。

どれくらい経ったろう。もう何本目かも知れない煙草に火をつけよ

うとライターを擦った時だった。

「……眠れないの？」

急に声がして、体がかすかに動く。脳内で何度も再生しなおして確認するまでもなく、この部屋で俺に大っぴらに話しかけてくるのは奈々華だけ。衣擦れの音が無音の空間に響いて、目をやっていたベツドに突然人影が浮かび上がる。綺麗な顔。俺とは似つかない顔。

「別に」

何を否定しているんだ。そう思ったが、それ以上に仕方ないとも思っていた。さつきリフレインしたときに、奈々華の心配げな声に、齟齬を発見していた。お前が思っているようなんじゃないよと言ってやりたかった。俺は近藤さんの夢すら見ていないんだよと。

来るなよ、なんて言えるはずもなく、奈々華はベッドを抜け出し、こちらに歩いてきた。覚束ない足取りに、支えようか、なんて言えるはずもなく、ただ黙って見ていた。隣に座った。

「何を怖がっているの？」

俺がお前を？　また齟齬。噛み合わない。わからないから聞いているだけだった。

「……お兄ちゃん震えてる」

知ってるよ、んなこと。そうだよ、孤独。怖いのかも知れない。贅沢だと思った。分をわきまえろ。俺の自己犠牲は当然だけど、奈々華にまでそれを強いてどうする。この子には幸せになって欲しいんだろう？　だったらどこかで俺とは違う道に行ってもらわないと……　　なんでかトロツコを思った。暗い炭鉱を走るやつだ。二人で乗ってるそれはいつか行き止まりにぶち当たって碎けるんだ。だから奈々華には途中の分岐で光の方へ繋がる道へ下りてもらうんだ。

「……寒いだけだよ」

そうだよ、寒いんだ。冬の夜にコタツにも入らずに寝巻きで起きてりゃ寒いだろう？　暗闇でも大きく光る奈々華の瞳が二つ、俺のどんな些細な心の機微も見逃さないと云わんばかりに真っ直ぐ向けられている。鋭くて困る。

「そうだね。寒いね…… 戻ろう？」

見逃したんじゃないくて、見逃されたようだった。奈々華にも思うところがあるのだろう、と思う。踏み込むにはそれ相応の覚悟がいる。そんな気配を感じ取ったのかもしれない。やっぱ賢いよお前は。同時に助かったとも思った。お前も俺が望むだけ俺の傍に居ろ。どの口がほざく。

提案を突っぱねるほど頭も体も熱くなかった。立ち上がった奈々華の背中を追うようにして歩くとふらついた。ヤニくらなんて久しぶりだな、と思うことにした。

終章 第二百二十九話…葬式

定期的に打ち鳴らされる木魚の音が眠気を誘うのは、ひょっとすると死者の安らかな眠りを誘導しているのかもしれない。そんな風に仁は願っていた。祐の葬儀にも同じことを思った。

寺の中は張り替えられたばかりの畳がイ草の香りを放っていた。そこに焼香の匂いが混じり、仁の好きな野焼のような雰囲気があったが、仁は仏頂面を崩すことはなかった。薄っぺらい冊子には、坊主の読経が載っていて、それを胸の前に掲げ、小さく復唱していた。彼の隣の奈々華は時折もぞもぞと膝を崩したが、仁は一度も音を上げることもなく、まるで神木のようにそのままだった。

「ミルフィリアさんもちよつと冷たいね」

葬儀が始まる前に、奈々華が仁に言った。仁はただ曖昧に笑って誤魔化すしかなかった。生前多少なりとも関わりのあった彼女が、この場に参列できなかったのは、仁によるところが大きかった。

最後のページを読み上げたお坊さんは、その場から立ち上がることなく、後ろの私たちに向き直った。剃髪しておらず、黒い髪を耳にかからない程度の長さで保っている。葬儀が始まる前に、ちよこつと話した時には妻子があると言っていた。ここらへんは、私も詳しくは知らないけど、宗派によってまちまちなだろう。

「……それでは仏様の方に、ご焼香よかですか？」

お坊さんは訛りがあった。元は関東の人間ではないのかもしれない。私は横に座って微動だにせず読経していたお兄ちゃんを見る。私より先に行くべきだろう。そう思った。お兄ちゃんは仏前に相応しく重々しく頷くと、すつくと立ち上がる。黒のスーツが長身に映える。カッコイイ、なんて不謹慎だけど私は思っていた。確かに考えると、ころがないわけでもないけど、以前スーパーで出会ったことのある

男性がもうこの世には居なくて、二度と声が聞けなくて、二度と笑いかけることはなくて、でもやっぱりお兄ちゃんほど身に詰まらされるものがないのも事実。子供の頃、親戚の葬式に参列したときは、子供ながらに悲しんでいない自分が酷く場違いで人でなしで、申し訳ない気持ちを感じたことがある。思えば中途半端に成熟した子供だったのだろう。今は違う。当然のことなんだと思う。よく知らない人間のことで涙を流せない代わりに、愛する人のことでは号泣できるとだ。

お坊さんが退いた座布団の上に、お兄ちゃんが座る。焼香を一つまみ、眉間の辺りまで持っていく。きつときつく瞳を閉じてお別れか謝罪か、いや祈っているのかも知らない。それはそんな神聖ささえ感じさせた。敬虔な教徒が、身勝手を知りながら自らの神に、どうしても叶えたい願いを祈念する様に見えた。傍観者であった私にも、手に取るようにわかった。「祐君や奥さんとまた逢えますように」私もそう祈ろう。届くといい。叶うといい。お兄ちゃんが手をそっと下げる。

「仏様に……」

お堂の端に安置されていた。棺おけの蓋は外され、生氣を持たない白い顔が見えるようになっていた。お兄ちゃんはっきりした足運びで、そこまで行く。しばらくその棺おけを見つめ、その場に正座する。「対峙するは常に自分自身」「親父が俺に剣を教えるにあたって言った言葉だ」お兄ちゃんはお父さんをあまり好いていないけど、その言葉だけは肝に銘じてるらしかった。ならお兄ちゃんは今、言い方は悪いけど、意思をなくしてただの屍、物となった近藤さんに、何を重ね見ているんだろう。自分の罪、自分の弱さ。それ以上憶測すら出ない自分が齒がゆい。

お兄ちゃんの肩は小さく、本当に小さく震えていた。抱き締めて慰めたい衝動が、胸を狭くするような感覚を伴って、御しがたくなる。「克己。結局自分で乗り越えなきゃいけないんだ」今はそうだね……三年前に出来なかった克己を果たそうとするお兄ちゃんの傍に

寄り添うだけで……

終章 第二百三十話：終わりの美学

焼却炉から出てきた近藤は、既にもう近藤正輝を思い起こさせるものは何もなく、ただの白い粉だった。そして所々白い塊。坊主の車に乗せてもらい、中谷の街外れの火葬場まで霊柩車を追ってやってきた兄妹は会話もなく、ただ黙ってそのお骨を見つめた。

「随分鍛えていたみたいだけど、やっぱり最近の若い人は骨の方が弱くてね……」

と、火葬場の人間。悪意ある言葉ではなかったが、どちらかということ骨があまり残らなかったことについて申し訳なさそうに言ったのだが、仁は黙殺した。奈々華が取り繕うように笑う。道中の坊主の世間話も奈々華がいなし続けた。

火葬場を出ると、打ちっぱなしのコンクリートの外装の上に突き出た煙突から黒ずんだ煙がもうもうと上がっていた。祐が居る場所まで届けばいい。奈々華は小さく瞳を閉じ、拳を握った。

「納骨は一週間後、お墓が出来上がった後ということだ」

感傷もそこそこに、坊主が事務的な話を始めた。奈々華は敏感で、この坊主が仁たち兄妹と近藤との繋がりを訝っている節があることを感じ取っていた。仁は立ち昇る煙を見ていた。

「はい。お願いします」

奈々華が受ける。

「お帰りは？」

ここで奈々華が仁を見る。仁はその視線を迎えるように、煙から目を切っていた。アイコンタクトなんて高尚なものでもなく、今の仁の瞳を見て何も察せない人間がいたらそれは相当鈍いだろう、兄妹は数瞬見つめあって、奈々華が坊主に振り返ったときには首を横に振る準備が出来ていた。

「……お気遣いありがとうございます」

坊主は奈々華の言葉を受け、丁寧に会釈を返すと、骨壺を抱いて車

に乗り込んだ。

「……大丈夫？」

二人寄り添い歩く、道の端で奈々華は聞かずにはいらなかった。

「何が？」

「何がって……」

ひょっとすると返ってこないことも想定に入れていた奈々華は仁の反応が予想外に早くて、言葉に詰まった。仁はその間に言葉をさがしていた。

「言ったろう？ もう俺に出来ることはないよ」

「……」

「でも」

思い出したように仁は逆接を繋いだ。

「近藤さんが奥さんの敵討ちを願っているとも思えないけれど、見極めようと思うよ」

「見極める？」

「ああ。自分の目でね」

奈々華が「何を？」と聞くのと仁の答えはかぶさった。

「平内涼子が本当に討つに値しないかどうか」

「討つに値しないと判断したら？」

「……」

「お兄ちゃん！」

「……本当にお前は鋭いな」

仁はそれだけ言っておいて、周囲を見回した。以前野焼をしていたような畑には既に土しかなく、朝下りた霜が溶け、太陽が弱くて黒く湿ったままだった。仁はこの間が何なのか、正しく理解している。睨むような懇願するような瞳を向ける妹は、こういうとき言葉を尽くさない。その潤んだ綺麗な瞳が口よりも雄弁であることを知っている。仁が折れるのを待っている。

「本当に賢い子だ。わかってるよ。死ぬのはなしだ」

まだ足りない。奈々華の目は力を込め、熱を込めたままだった。

「お前を一人にするわけにはいかないもんな」

討たれるべきは自分であると、その考えは今も変わらないだろう。それでもその言葉を放ったのは、どんなに罪を重ねても、彼の目の前の少女が幸せを掴むその時を見届ける義務も確かに感じているから。義務は願いと書き換えてもいい。奈々華はようやく笑んだ。邪気も猜疑もないその笑みに、仁は常に癒されてきた。

しばらく歩いていると、仁が携帯電話の電源を入れるのを見計らっていたようなタイミングで、それが鳴った。虚しい、最後の戦いの始まりを告げるものだった。

終章 第二百三十一話：プライドの行方

知らない番号だった。しかし仁は迷うことなく通話ボタンを押した。奈々華が呑気に「だれ？」と尋ねる。

「……城山仁だな？」

流暢な日本語。しかしその主は金髪碧眼の白人至上主義者。「ああ」と短く太い声で仁は答えた。

「用件はわかっているな？」

「……解せんな。わからないか？ 何度やっても俺には勝てんぞ？」
「黙れ」

静かな声に、多分な怒りが聞いてとれた。生まれてこれまで土をつけられたことなどなかった彼が、完膚なきまでに叩きのめされたまでか、勝てないと認めろと言う。長い年月をかけて膨らませてきた彼の自尊心は、そんな侮辱を看過するはずがなかった。

「折角守ってもらってるんだろう？ 大人しく隠れていたらどうだ？」

奈々華も既に兄の電話の相手が誰なのか察しがついているようで、ただ仁の口が動くのを黙ってみていた。

「黙れと言っている」

「ああ、それとも頼もしい涼子ちゃんの影に隠れながら闘う……」
「黙れ！」

仁は顔をしかめて電話を遠ざける。奈々華にも聞こえるほどの強烈な憤怒。息を整えたラインハルトが次に喋るのと、仁が頃合を見計らって嫌そうに電話を耳に当てなおすのはほとんど同時だった。

「街に出てみる。お前みたいな下らない芥子粒には勿体無い舞台が出来上がっている」

「……みたいね」

「三十分以内に中谷記念碑公園に来い。遅れたり来なかった場合は…… 貴様に縁のある者を血祭りにあげてやる」

「ほいほい、了解」

電話は切れた。仁は隣で言葉を待つ奈々華に言う。

「死にたがりか一人居る。お前も見に来るか？」

奈々華は頷いた。

中谷記念碑公園は、都会の数少ない緑を保つ。常緑樹が外周を覆い、森のような外観を作り出していた。中谷本人が眠るわけではなく、そもそも彼の遺体は数百年経った今でも見つからないそうだ、この場所でサウードの軍勢と激戦を繰り広げ、見事それを退けたという話が残っていることから。彼自身の代わりに、中谷の精霊が眠っているそうだ。

普段は散歩をする人や近道に使う人、何だかんだそれなりに人通りのあるこの公園だが今は人っ子一人見当たらず、ダンボールやブルーシートで作られたホームレスの寝床ももぬけの空だった。ラインハルトが何かしたというよりも、もしかするとそれどころではないのかもしれない。二人は、逃げ惑う人々が渋滞を作る合間を縫うようにしてここまで来た。今も物が破碎する音や、甲高い悲鳴が遠く聞こえる。

「来たか」

相変わらず不遜な顔。しかしそれが虚勢であることが、直接対峙しない奈々華にもわかった。

「蟻を踏み潰しに来说いと言われて面倒くさささえあっても、逃げることはないよ」

仁は破顔してみせる。本当に面白い冗談を聞いたという風に、いつまでもニヤニヤと笑いが尾を引く。仁はそのままの顔で余裕綽々、周囲の状況を見回す。公園の内部は土のグラウンドとそれを囲う芝を植えたエリアの二分。芝のエンドに藤の木が四本、結ぶと丁度長方形になるように植わっている。その上に目の荒い鉄格子の天蓋があつて、枝が絡みついている。その下、季節がよければ木漏れ日が

注ぐようにベンチが置かれている。仁はそれを顎でしゃくって、

「あっこで待っててよ。すぐ終わるから」

「うん。気をつけてね」

仁は心配性な妹に苦笑を禁じえない。蟻を踏み潰すのに、気をつけるものもない。

ラインハルトはそれら全てを見ているだけで、それら全ては彼の高いプライドを悉くコケにするものだったが、それでも口を挟むことはなかった。兄妹の馴れ合いが終わり、すうっと息を大きく吸い込んだ。

「……貴様の強さは認めなければならない。境遇次第で王として君臨できたかもしれない」

「そいつはどうも」

興味なさそうに。

「私が前回貴様に負けたのは、それを認識していなかったからだ」

「まあ、一端くらいはあるかもね」

「……だから今度は最初から全力でいかせてもらう」

言うが早いのか、ラインハルトの体が雷光に包まれる。

終章 第二百三十二話：ボアリング・マン

ラインハルトは口先だけの男ではなかった。前回の敗戦を踏まえて、戦い方を完全に変えた。精霊は一体、そして彼自身は十分に敵から距離を取って長い詠唱を経て強力な魔法を打つ。仁が中々思うように動いていないのは、その足止めの精霊がとても強力なためだった。一目見た仁は、ビールはあまり好きじゃないんだけどね、と軽口。麒麟に似ていた。馬のような下半身に、ヒヒのような顔。常に帯電しているようで、静の助言どおり触れることなくかわし続ける羽目になっているのだった。

「雷光走らば不逞を討つ。神鳴る時不浄は滅す」

そして間隙を縫って落ちる雷。地を這うように向かってくる雷電。仁が直撃も感電もしていないのは、その人の身に余る身体能力と、それこそ雷のように鋭い洞察の恩恵だった。地を走る電流を、瞬時の判断でラインハルトの側に退避することで事なきを得た。なるほど彼も人の身なれば、自身の魔法が効かない道理はなくて、自分の側へは走らないようにコントロールしているわけだった。それはそうなのだが、実際に初見でその動きを見せた仁には脱帽するしかない。

開戦から三十分。持久戦の様相を呈していた。

「あれ結構マズイんじゃないかい？」

シャルロットが呼ばれたのは、何も手助けできない奈々華の最低限の仕事だった。傷つけられたプライドを取り戻すために闘うラインハルトが、万が一にも卑怯な手を使うとも思えないが、念には念を。魔法が飛んできた日には、すぐに防衛できるようにしておかなければならない。

「大丈夫だよ」

奈々華は一笑にふす。シャルロットはまた疎外を味わったように、

不承。

「アンタが心配する基準がわからんよ」

近藤や村雲との戦いにおいては、確かに奈々華は血相を変えて慌てたり泣いたりと忙しかった。なのにラインハルトとの戦いでは奈々華は終始余裕があった。初めて見た手品に首を捻るようなシャルロットに、「それじゃあ種明かし」と笑って言った。

仁がこちらに来て、奈々華と多少は会話をするようになった頃、敵について自分なりの見解を話したことがあった。それは奈々華を不必要に心配させないためなのか、真実なのか、疎遠が長かった奈々華には最初はわからなかったが、誰よりも彼の闘いを間近で見ているうちに後者だと判断した。彼はこう言った。

「実際に人を殴って壊したことの無い人間ってのはさほど怖くない」それ以上は仁は語らなかったが、黒川のことがいやでも話題に上って奈々華に余計な気を遣わせるからかもしれない、その一言には言外に含むものが多すぎて、都度都度思い返す奈々華に雄弁に語りかけた。

人を壊す感触、極限のやりとり。言ってみれば、彼女等フロイラインにとって精霊を奪われてでも壊したい相手を壊した経験がないのだ。もし仮にそうなれば、彼女等は逃避を選択するのだろう。それじゃあ怖くない。鬼気迫るものがない。どこをどれだけ殴れば人が死ぬのかを彼女等は知らない。近藤や村雲との対峙に、仁が全力を注いだのは、彼らがそれを熟知していたから。仁がそれを悟るのは、体さばきであったり、全身から隠しきれず滲み出る雰囲気であったり、直感であったり。彼らは悲しくなるくらいに同族だから。

連関して多彩ではないのだ。彼女等の攻めは常に型にはまっていた。精霊を肉弾戦及び足止めに利用しながら自身は安全なところから遠距離攻撃を繰り返すに終始。スマートなのだろう。危ないのだろう。格下の相手と戦う分にはそれでいいし、それが一番効率がいい。

「今ならもう少し話してくれると思うけどね」

奈々華は仁の一言とそこから感じ取ったことの全てを話してあげた。そしてそう締めくくった。仁がその時も一言付け加えようとしてやめた言葉「ひりつかねえんだよ」と。家族と責任の狭間で揺れながら、それでも自分の身を捨てて敵を仕留めに來た男。忠誠と憎悪の狭間で揺れながら、それでも好敵手との激闘に心を躍らせた男。仁が笑っていたのは、嘲りではなく、歪んだ敬意だった。全身の毛が逆立ち、脳内麻薬が迸り、頭が真っ白になって、利害も敵も味方もなくなって、相手を討つ。それが彼の存在の証明だった。

「ほら」

誇らしげに伸ばされた奈々華の人差し指の先では、ひりつかない相手、ラインハルトが地に伏せていた。

終章 第二百三十三話：最強の証明

「走り込みの成果もあったらしいね」

仁が直接手を下したわけではない。ラインハルトのランナーズハイ。いや、いつまで経っても動きの落ちない仁を相手取って自然体力の消費が早まったのかもしれない。完全にスタミナ切れだった。そこから彼のこの一戦に懸ける思いが軽々しいものではなかったことが伺い知れた。だがそれだけ。仁にしてみれば冬の寒さを吹き飛ばすような有酸素運動をしていたに等しい。麒麟は神々しさを失い、どこか所在無さに地に膝をついた主人を見やった。

「祈る神はあるのかい？」

麒麟が道を譲るようにして仁から遠ざかった。十分な知性を持っているようだが、言葉は話さない。話せないのか話さないのかは、仁にとってはどうでもいいことではあったが、ただ一つ、バチバチと雷光を纏っていたその体から光はなくなっていた。どうやら帯電の方はラインハルトの仕業らしくて、ガス欠を起こした彼にはそれを保てなくなっていて、つまりは麒麟は今なら簡単に斬り殺される。その十分な知性がそういう判断を下したのなら中々に悲しい。主人の盾となるほどの絆は急造のタッグの間にはなかったことになる。仁はそんな麒麟に一瞥をくれて、そこには同情に近いものが宿っているように見えた、先の言葉をかけながらゆっくりとラインハルトに歩み寄った。

一瞬だった。ラインハルトの体が光り出し、その光に麒麟が吸い寄せられて行くその一瞬手前、仁の両手に握られた静が、ラインハルトの胸の辺りに深く突き刺さっていた。ラインハルトの体を包んだ光は、何事もなかったかのように立ち消える。彼がやろうとしたのは仁が幾度も見た禁忌。流石にそう何度も同じ手を食らってやるほど、仁は優しくも愚かでもなかった。馬の足も突如発生した磁場の

ような引力に、なす術なくバランスを崩し地面に倒れ込む。ラインハルトは口から尋常でない量の纏まった血を吐く。仁が彼の胸から刀を引き抜くと、そこからも堰を切ったように血流。それでも片膝をついたまま、尚震わせながら立ち上がるという気概を見せる。彼を突き動かすものが、仁にはわからなかった。そこまでして守る自尊心にどれだけの価値があるのか。名家ラインハルト家の嫡男として生を受け、勝つことが、続べることが宿命づけられ、それだけがまた己の存在の証明だった彼の心中を仁が知る由もない。だけど理解できないからとて馬鹿にしたりするほど幼くもないので、仁はもう一度言葉を繰り返す。

「祈る神はないのかい？」

それも同じような心情から導かれる言葉だった。無神論者の仁にとって神に祈る習慣も気持ちも到底理解できないものではあったが、最期の慈悲くらいかけた。ラインハルトはしかし、胸を押さえ、何とか膝をついた姿勢を保つだけだった。見かたを変えればそれは祈りのポーズにも見えたが、それは違う。彼の双眸には強い光が宿っていた。見上げる仁を気圧そうとせんばかりに。

「外人さんは大抵宗教家だと思っていたけど、まあそれも人それぞれか」

そしてそんな心情を彼流の言葉で表すところなる。そしてそのまま刀を握る手に力を込める。

「じゃあ辞世の句を」

「……どうしてだ」

「あ？」

「どうして…… 勝てない？」

血反吐混じりとは思えない力強い声だった。虚勢も張り続ければ立派な強さになる。

「俺とお前…… 差は何だ？」

「……」

仁は黙ってラインハルトの強い瞳を見返していた。そこにもう侮蔑

はなかった。現に「弱いと言ったのは取り消すよ」と前置きの言葉を吐き出した。

「それでも……俺より弱いからだろうな」

ふっと口元に笑みが浮かんだのは死にかけのラインハルトの方だった。短絡的な真理に笑わざるを得なかった。

「確かにそうだ」

彼の最期の言葉はそれだった。恐ろしい速さで刀が横に振られる。仁は虚勢を張ったまま、彼を逝かせた。

終章 第二百三十四話：不貫徹の愛

ビシャビシャと噴水のように降り注ぐ血流を仁は頭からかぶり、見る間に赤く染まっていった。やがて首を失ったラインハルトの体はゆるやかに傾いでいき、どさりと倒れふした。そんな血塗れた殺人鬼のような風体の仁を見ても、奈々華の足は止まらなかった。どころか、ベンチを立ち上がりパタパタと駆ける足取りは一步ずつ速さを増すようだった。しかし他ならぬ兄がそれを手で制した。手の平を縦にして奈々華に見せる。従順な妹は急停止。

「首でも盗りに来たんですか？」

仁の冷ややかな声は、芝の切れ目、茂みの奥へとかけられていた。

「おや、気付いていましたか」

落ち着いた女性の声。仁はそれを聞きたび、その姿を見るたび、胸の奥に黒い感情が渦巻くのを感じていた。それは裏切られたことより、彼女が自身の浅慮や無力を象徴する存在だからかもしれない。木々の間を割るようにして現れた木室カエデは最初に仁が見たときと変わらない柔和な笑みを浮かべていた。刀を再度体の正面に構える仁に、木室は頭を横に振ることで答えた。

「私は案内役に過ぎません。最初からそうだったでしょう？」

思えば仁がはじめてこの世界に来て、味方として出会ったのが彼女だった。彼女はそんな笑顔で学園長室まで彼を導いた。仁は湧き上がりがかけた感傷を無理矢理に押さえ込むように、小さく顎を引いてやぶ睨んだ。

「ラインハルトは良いのか？」

「言うことを聞かない手駒など捨て駒にもなりません」

手の平を天に向けてお手上げ。

「彼女以外に土をつけられたのが我慢ならなかったのでしょうか」

「……彼女」

ええ、と気さくに頷いて。

「待っていますよ。貴方を。自分の居場所を壊してでも……」

そう言うとき木室は無警戒に背中を向けて歩き出した。公園の出口を目指している。案内役。仁はしばらく案内するべき人間をほったらかして距離を空けるその背を見つめてから、奈々華に手招きした。

「少し昔話をしましょうか？」

街は小鬼が暴れたときよりも地獄絵図。逃げられる者は全部逃げて、後は死を待つ者が、或いはもう死んだ者が通りを塞いでいるだけだった。その数を数えようとして、仁は脳内だけでは数えきれないことを悟ってやめた。辺りに充満するのは、血の匂い。何かが焼ける匂い。仁はテレビで伝える紛争地域を思った。或いは疫病の流行った中世の京や欧州を思った。シャツの袖口を、迷子のような瞳の奈々華が強く握っていた。もう一度だけ周囲に目を向け、その目を数刻閉じ、開いたときには先を歩く木室の背中だけを見た。

「アンタの武勇伝か？」

丸太鬼を、村雲を侮辱するような内容なら、仁は卑怯も案内も関係なく木室に飛びかかっただろう。だが違った。

「私は国連を退役したのが四十を回った頃でした。その後は若くて有望な魔術師の育成に携わっていました」

それが現職の、もっともフロイラインの幹部としての顔とどちらが本職なのかはわからないが、教員ということになるのだろう。

「そして中谷の街に赴任したのが、丁度五十の頃でした。元々日本の血も混じっていた私はいつか日本でも教鞭を執りたいと思っていたので、話が来た時には渡りに船でした」

おっと余談でしたね、と途中で切る。仁は空気も読まず、この人生の先達の話をもう少し聞いてみたいという頭の隅の願望を黙殺した。「そこで私は見たこともないような光を放つ原石と出会いました」

「……」

「私は彼女の育成こそが天命だと思いました。それまで積み上げてきた全ては彼女に授けるために神が与えた経験だと。それから私

はその家に住み込み、彼女の生活の全てを管理しました。何が彼女のためになる、彼女の魔術師としての成長に必要なのか、全てを正しく峻別し、育てました」

「……」

「親心のようなものもあったと思います。独り身の私には小さな彼女は可愛らしく、成長は生きがいになり、厳しさと優しさを持って接するのはとても骨が折れて楽しくて……」

破碎音が近い。破壊の中心地点に近づいている。現に三人が歩く前方のビルがだるま落としの要領で沈むように壊れていった。

「そんな彼女に不幸が訪れました。二年前ですかね」

わざとぼかしたような言い方をしたが、木室の声は震えていた。仁たちに見えない瞳には、あるいは涙を溜めているのかもしれない。

「それからの彼女は、人が変わりました。実際変わったんです」

「……」

ちらと奈々華を見ると、仁はまた前を向いた。こういうとき、賢い妹が軽々に口を挟むとも思えなかったけれど、それでも仁は自分を奮い立たせるために見た。奈々華は優しく仁に笑いかけた。

「私は己の醜さを知りました。あの子にとって自分が大切な存在の一つであることを認識できたことが嬉しかったのです。そして一番でないことも知り、亡くなった方々へのどうしようもない嫉妬も持ちました…… いつの間にか彼女を愛していたのです」

「……」

独り語りは続く。

「だけど私が彼女と接しているのは、もう仕事になっているのです。それでも愛しているんです」

段々感情や論理に矛盾が濃くなってきた。

「……貴方は私が憎いかも知れませんが、私も貴方が憎いのですよ？」

強い感情が込められていた。言葉が嘘ではないと。

「再び彼女を目覚めさせた貴方が……」

振り返った木室は唇を強く噛んで瞳を細くしていた。その後ろに二つ、見知った顔があった。

終章 第二百三十五話…憎悪

数学の教師が図解するのを思った。そう、図解だ。全ての不明瞭な点は、ある一つの結論に向かつては明瞭に線が伸びて繋がった。或いは一つの結論からは全ての点に向かつて綺麗に線は伸びた。演繹でも帰納でもいいわけだった。だからそれは真実だということを如実に語る。

最初の違和感は、早かった。彼女はどうやって俺達を召還したというのか、という純粹な疑問だった。精霊の住む世界から、勿論大岩がそういう異世界とこの世界を繋ぐ装置だとしたのは俺の推論だが、間違っていないだろう、それら呼び出すのは誰にでも出来るが、その他の世界から何かを呼び寄せるのは並大抵のことではないのではないか。俺らの世界には生憎ああいいう生き物達は居ない。やはり第三の世界から俺達を呼んだことになる。だが、実際彼女の戦いぶりを目の当たりにして、とても強力な魔術師とも思えなかった。刻印とやらが刻まれて、力が十分に発揮できないのかと思ったが、それならやはり俺達を召還するほどの力は振るえないはずだ。

次は彼女が内密に国連を探っているということだった。泳がせたにしても国連側にメリットがない。全力で阻止しようとしたら、出来るはずだ。あれほど大きな組織がそこまでずさんな情報管理と言うのは納得がいかない。一応の説明は受けたが、やはり頭のどこかで引っかかっていた。

もっと根本的な話をしよう。本気で大岩を壊す気なら、全勢力を以って攻めれば簡単に落とせたのではないか。チンタラチンタラ、近藤さん一人にやらせているのは不思議でならなかった。実際に近藤さんと対峙してみて、彼ほどの実力者なら一人でも本気でやれば、彼我の実力差を鑑みれば、やはりもう俺が着く前には落ちていて然るべきだ。

グルグルと汚い感情が湧き上がって、胸の中に居座っていく。目の前がチカチカする。頭に血が上っているにしては思考が鮮明で、落ち着いていると言うには余りに目の前の三人を惨殺するビジョンが鮮明で……慣れた感覚だ。

俺はコイツ等の手の平の上で踊っていたのだろう。近藤さんを殺して恥も外聞もなく妹に抱きついて泣いたことは笑い種。互いに笑い合う中でも、心の中では異質の笑いを含んでいたんだ。白の少女、エリシアだったか、彼女が俺に強力な魔法を打ち込もうとした時の記憶が浮かぶ。あの時も口では俺の力を信用しているなどと言ったが、本当は死んでも良いと思って送り出したんだろう。そうだ、現実的に考えて、学園の防備は安定で、反対属性をぶつけあうなんてギャンブルが打てたんだ。いやそもそもアイツ等は全部仲間で、俺は一人で滑稽に踊りまわっていただけなんだから最初から危険も安定もない。

村雲は犠牲になったんだ。俺に殺させることが目的だったんだ。あの程度の絆が出来てから殺させないとつまらないんだよね？ だから最初から彼の真の名を木室は知っていたにも関わらずあのタイミングだったんだろう？ ミリーは、いやミルフィリアはさぞ俺が地下室で見せた驚きの表情が可笑しかったろう。いや最初から図書の位置を把握していたのか。俺にその真実を知らせて反応を見るために。

祐君が死んで、放心していた時も、お前等は笑っていたんだろう？

最初からあの結末は見えていて、いや仕組んでいて。祐君は、父を殺した俺を赦す時まで言ってくれた彼に何も返すことが出来ないまま、死んでいったんだぞ？

俺が最後の心の安定にしていた、罪滅ぼしの労働すらお前等が邪魔したんだよね？ 俺が迷惑をかける構図にすれば、やめざるを得ないもんな。あれでヒメネスは怪我をしてんだぞ、わかっているのか。ぎちぎちと歯が鳴った。血の味がする。心地良くすらある。

本室が片膝をついて、後ろから合流した二人に首を垂れる。仲間だと思っていた少女達。元々彼女達を救済する為に動いていた俺はとんだピエロ。最初から窮状にはなかった。

「感謝すれば良いのか、怒れば良いのか、兎に角ウチのお姫様は貴方のせいで、おかげで、目覚めました」

片方の、俺が密かにタイプだと思っていた少女、ミルフィリア・A・高坂が言う。彼女は結局フロイラインの青の幹部だった。口元に嫌な笑みを浮かべていた。様になるなんてもう思わなかった。

「カエデ。畏まるな」

ミルフィリアの後ろ、俺を慕ってくれた少女、坂城遊案が言う。彼女は結局学園の長であり、フロイラインの長だった。平素の姉を真似たような無表情だった。坂城なんてもう呼べなかった。

坂城遊案は本当の名ではなく、彼女の本名は「平内涼子」といった。

終章 第二百三十六話：答え合わせ

「答え合わせをしましょう」と始まったミルフィリアの講釈は、既に知っているものだった。木室は俯いて、平内は興味なさげに、任せた。俺は何か、これから死に行く者に最後の慈悲をかけるような気持ちだった。丁度ラインハルトの最後に抱いたような気持ちだった。最後までいい好きに語らせてやろう、そう思った。

「フロイラインは元々そんなに大きな組織ではありませんでした。国連の暗部として、邪魔者を排除するために作られた組織です」ラインハルトが作ったものだ。ふと、ミルフィリアが教鞭を執る姿が浮かんできた。頭を振りたくなかった。そんな格好の悪いことが出来なかったものだから、段々と黒い感情が引いていく。胸が逆に苦しくなった。どうして、どうしてこうなるんだ？

「それが誰もが名前くらいは聞いたことのある犯罪組織になったのは、二年前です」

知ってる、知ってるよ。お前等の両親が死んだのと同じ時期だ。その後二人が加入して組織は大きく躍進する。

「飛行機の墜落事故でした。私も遊案もその事故で両親を亡くしました」

見たよ。行方に見せてもらった記事に載っていた。高坂夫妻と平内夫妻。一つは資産家、一つは学園経営と職業が載っていた。

「私の両親の新しい事業の関係で観光は二の次だったのですが、遊案の両親も、丁度どこかにたまには夫婦水入らずで、ということだったのです」

どうして、どうして、それから人を殺す道を歩むんだ。

「遊案が生まれたのはその事故の少し後でした」

「……」

「両親の死に耐え切れなくなった涼子が生み出した別人格に近いものですね」

どうして、どうして、そんなに淡々と話すんだ。

「現実を見ようとしないう、駄々っ子のようなそんな幼い性格です」よく泣いた。よく笑った。よく懐いた。俺のせいだというのか。俺が彼女を拒んだから。どうして、どうしてこうなるんだ。無神経に可愛がっても、どうせ俺が帰るときには…… 自己正当が止まらない。

「……知ってるよ」

振り返りたかった。奈々華が笑っていてくれるはずだ。だけどそんな情けないことがどうしても出来なかった。

「そうですか。大体わかってるみたいですね」

「わかるように仕向けたのはお前だろう」

「ええ。出来れば貴方には私達の仲間になって頂きたかったですから」

心の準備期間というわけか。じわじわと疑念を抱かせて、何が仲間だ。

「色仕掛けてわけか？」

コイツが少しでも気のあるフリをしていたのは。

「いえまあ。多少はそういう部分もありましたが、全く脈なしでもなかったですよ？」

それに、と妖艶に笑う。

「結局フったのは貴方でしょう？」

「……」

「何か疑問はありますか？」

俺は少し間を置いて、左手の親指を折って、差し出した。

「四つほど聞きたい」

「何でしょう？」

「お前等は俺を殺す気か？」

「はい。遊案はそのつもりでしょう。記憶も共有していますから一つ消えた。」

「どうして遊案と呼ぶんだ？ アレは平内涼子だろう？」

「どちらでも良いですよ。二人は一人ですから」

完全に多重人格者を思っていた。もしかすると本当は坂城遊案なんてなくて、全部平内涼子の夢なのかもしれない。幻想、ミルフィリアはそう表現した。

「白の幹部が攻めてきたとき、アレはマジだったように見えた」
どういふことだ。自身の主を殺しにかかる忠臣がどこに居る。

「……魔霊合激というのは貴方が思っているほど容易いものではないのです」

顔で詳細を促す。

「意識は飛んで、精霊の野生的な破壊衝動が全面に押し出されます。人と精霊なら精霊の方が強いですから。特に長く融合していると意識は持っていけません」

泣きたくなった。結局最後の望みのように、凶解の矛盾を見つけたように思っていた点は、近藤さんの強さを再認識させるに終わった。無意識にかぶりを振っていた。情けなくても何でもそうしないとやっていられなかった。

「お前は平内涼子をどう思っている？」

ミルフィリアが自分自身の質問になって、初めて表情を戸惑わせた。人間くさくて、俺は少し視線を外した。

「どうとは？」

「両親を蘇らせたり、それを俺に解除させたり……俺に頼んだってことは嫌だったんだろう？ あいつに頼むのが」

裏切りの呪い云々も嘘だったのか？ そもそもアレは両親ではないのか？

「……私はあそこで死んでもよかったと思っています」

それが答えだった。遊案の部分が大きかったから頼めなかったのではなく、そういうことだった。だから余計に虚しくなった。

「木室さんは違うようですが……私は遊案のまま暮らさせたい気持ちと、涼子に戻ってしまえばいいと思う背反した気持ちを持っています」

それは両親を実験台のようにされた怒り、それはしかし自身が同意をしたこと。やっぱり俺とコイツは少し似ている。どこまでも自分勝手に気配り上手で優しくて冷たい。俺の性格が手に取るようにわかったのは、コイツが俺に同じ匂いを感じ取っていたからか。

「すまない。もう一つ追加だ」

「……仕方ありませんね」

言葉通りふうと吐いた溜息が、いつも通りで胸の奥が熱くなる。

「どうして街を壊している？」

「さあ？ 命令通りに動いているだけですから。私は」
ただ、と付け加える。

「私達が勝ち取った街なんですよ、ここは」

それも何となくわかる。俺が刀を携帯していても警官に一度も呼び止められなかったのは、何らかの圧力がかかっているのだろうとは思っていた。一般人が知らないところで、きっと街はフロイラインに迎合していた。

「自棄になっているのか、或いは……」

そこまで言って、平内が瓦礫の山から下りてきた。話は終わり。瓦礫の影からミルフィリアの精霊、青い禍玉がふわふわと浮いて出てくる。木室が詠唱に入る。坂城が、平内が残忍に笑った。

「さようなら。私の愛しかった人」

彼女の口が確かにそう動いた。

終章 第二百三十七話：不毛

平内涼子の契約した精霊は強力だった。青い羽、赤い体、黒い目、白い嘴、緑の足、黄の爪。鳥の格好をしている。羽根を振るえば、吹雪のような風が起こり、体からは全てを溶かすような灼熱の炎が生まれた。その目で睨まれれば常人は竦み上がり、嘴で優しく主人を甘噛めば傷はたちどころに癒えた。その足は風に乗ったように地も宙も関係なくその体を運び、爪で搔けば雷電が相手を焦がした。仁は凍傷になりそうな氷を含んだ風をかわしながら、木室の雷馬の突進を刀で受ける。その瞬間には仁の指先は赤黒く変色する。帯電しているのはやはりラインハルトと同じように魔術師の恩恵か。それをいなすと、今度は距離を詰めていた巨鳥が爪を縦に振るう。それをバックステップでかわすと鳥はもう上空。入れ替わりにミルフィリアが詠唱していた魔法が結実。大きな氷の柱となって仁目掛けて飛んでくる。再び刀を腹の前に構えて、何とか先端の直撃はまぬかれるが、そのまま吹っ飛ばされる。避難を頑なに拒んだ奈々華がそれに駆け寄ると、仁はすぐさま抱き上げる。雷が落ちてくるからだ。

そのまま跳んで木室の魔法を避けた仁は、しばらく巨鳥の攻撃をかわしながら、離れた場所に奈々華をおく。その時には仁の両手の指は痛みがなくなっており、仁は奈々華に礼を言う。

「どうしたんですか？ 守っているだけでは勝てませんよ？」

ミルフィリアは不意にも思えるほど二人の近くに居た。鳥が猛然と距離を詰めてくるのがその向こうに見える。

「……闘わなければいけないのか？ 俺達だけ元居た世界に戻せば済むんじゃないのか？」

「あの子は手に入らないなら壊す性格です」

「……」

「あの子は誰にも愛されていないことをわかっているんです」

「それを俺に強要するのか。お前が愛してやればいいだろうが」
何かを言いかけたミルフィリアは、そのまま後ろに跳ぶ。丁度死角から鳥が嘴を向けてくる。静で受けるわけにもいかない仁は横っ飛び。シャツの袖口を掠めた。瞬く間に赤く染まる。この出血は止まらない。奈々華がすかさず詠唱にかかる。仁は再び奈々華を抱いて逃げ回る時間。

「カエデ、死体は？」

本室はズルズルと路地裏から粗悪な麻袋を引っ張り出してきたところだった。二つある。口を縛っていた紐を解くと、少女の体が出てくる。白いワンピースを着たものと、ダボついた服装のもの。

「あと、こちらも。白の魔術師が効果も高いでしょう」

瓦礫の傍から青年の体を引っ張り出す。微かに頷いた平内の体から湧き上がるように発生した黒い霧のようなものがそのまま体に巻きつく。

「志半ばで死に絶えた者共。生者に忠義を尽くす屈辱。其を我に向けることはあたわない。其は我が仇敵に向ける」

少女は昔読んでもらった絵本の内容を空で語るように、流麗に。かつてこの地でも中谷慎二が表情のない顔で語ったように、無慈悲に。禁忌を紡いだ。

終章 第二百三十八話…終わらぬ犠牲

鎮魂を与えられなかった死者はどこへ行くのだろう。仁の目の前を行くように、永劫彷徨うようにふらついた足取りで何里も歩くのだろうか。ただ今生ではなく死の世界をふらふらと。仁の胸に渦巻くのは純粹なる怒り。近藤すらそれらの列に加わっていたかもしれないのだ。そして仁が彼の姿を見止めたとき、彼の限界は訪れた。

「どうするんだよ？」

三つの死体が歩いてくる。必要以外の場所には力がこもっていないくて、手はブランとだらしなく垂れ下がって、目に生氣はなく、顔は青白くて。二つは仁が討ち取った敵の少女。エリシアと柿木。問題はもう一つ。二つと同じように足を引き摺るようにして近づいてくるその死体に、仁は悪夢のような眩暈を覚えていた。

「どうするんだよ？」

壊れたようにもう一度同じセリフを同じトーンで。熱にうかされているようでもあった。

「どうするんだよ！ そいつには！」

祖国に兄弟を残して出稼ぎに日本にやって来た青年の末路は、あまりに悲惨なものだった。思えば仁は彼に対して弟のような感情を抱いていた。しかし同時に尊敬の念も抱いていた。

「どうするんだよ……」

仁の首がガクリと落ちる。ヒメネスは答えない。何度見たかもわからない、口を利かない死体なのだ。ザリザリと粗い砂やコンクリートの粒が落ちた道を、元凶の少女が涼しい顔で歩いてくるのが、死体の列の向こうに見える。仁から数メートル離れた場所で死体たちは止まる。一斉に光りだす肉塊。奈々華が仁に悲痛な声で前を見るように促す。仁は夢破れた若者のように下を向いたきりだった。

悲しみと怒りは混在した。自身の不甲斐なさをまたも呪うことになった。ヒメネスは、精霊狩りの仕事に従事しているのだ。当然魔術師が街でその配下の精霊を暴れさせているとなれば、飛び出していくのが道理。携帯電話を確認した。着信もメールもなかった。胸が張り裂けそうな思いでそのディスプレイを眺めた。彼は己の職務を全うせんと殉職すら厭わず立ち向かったのだろう。俺に助けを求めないまま。水臭いなんて話しじゃなくて、俺は君に沢山の恩義を感じているのだから当然に助けに行くのに、どうして？ どうして何時も、どうして、守りたい者が手の平からすり抜けていく？ 俺の強さなんてそんなものか？ ラインハルトのことなんてこれっぽっちも笑えないじゃないか。どうして連絡をくれなかったんだ？ どうして気付かなかったんだ？ どうして、どうして、どうして、誰がやったんだ？ 誰が、誰が、誰が。

顔を上げたときには、既に何か沢山の光がこっちに飛んでくるところだった。どうでもいい。あいつは何処だ？ 居た。死体に、仲間に、俺の友達に戦わせてのうのと高みの見物をしていやがる。

体が宙を舞っている。いつ跳んだのかもわからない。何かに体を乗っ取られたような、それでいて意識は明確で、その意識の大半が殺意と憎悪。ああ、多分目が開いている。足から落下していく。近づいてくる景色の中心に坂城、平内、どっちでもいいか。そうだよ。コイツが策を弄さなければ、俺はあそこでずっと働いていて、ヒメネスは死ぬこともなくて、祐君の葬儀も、近藤さんの葬儀も、俺が働いた金だけで賄うことが出来た。イフの話で、確実でもなくて、後付に近いようなことでも、俺の胸を一層黒くする。左目がゴロゴロする。ゴミが入ったみたいな異物感、確かに俺の瞳。地面が近づいてくる。足から着地すると、対象の顔が間近に見えた。驚いた目。「ピース持ちだったのか」とかなんとか。黙ってる。俺の脳内ではそのキレイな顔が真っ二つに裂けている。どこに刀を入れて、どういう風に斬って、腕にかかるであろう負担すら鮮明にイメージできる。それは一秒も経たないくらい先の未来。予定通りに

刀を掲げて振るう。視界の端に何か動くものがあって、それが木室だとわかったが、当然刀を振るう速度は落ちなかった。確かな手ごたえ。命を奪った感触。袈裟に斬った刀の先から腹の真ん中くらいまで肉を斬り進む。頭から血が噴出す。白髪を染める。無駄なことを。どうせすぐにその庇った女も死ぬ。俺が殺す。

終章 第二百三十九話…摘みきれない黒の萌芽

背後に何かの気配を感じて、素早く刀を後ろ向きに振るう。何かを斬った。そのまま振りぬいて横向きに距離を取る。右前を確認すると、ミルフィリアの精霊、小さな竜。青い体色をした俊敏そうなそれが、首から噴水のような血を吹き上げながら倒れ込むところだった。動脈を斬りつけたようだった。その更に後ろにミルフィリアが苦い顔をしているのが見えた。左前には同じように、血溜りを作る老いた体。思考を意識的に止めていることを、頭のどこかは認識していた。彼女等は俺を殺すというのだから、仕方がないんだ、と。それだけを繰り返していないと、憎しみと迷いがどっちつかずで、どうしても体の自由を奪う。振り切った刀ほど俺の心は明瞭ではない。

介抱のように木室を看取って、坂城は立ち上がった。ミルフィリアがその横につく。二人とも能面のように表情がなかった。冷たくて他者を再認識させて、打ちひしがれたような気持ちになった。ダメだ、これ以上考えてはいけない。坂城の肩の上、宙に巨鳥がホバリング。ミルフィリアは双竜。片割れの竜が光る。ミルフィリアも光る。この光は知っている。終わりを告げる光。いいのか？ 朗らかに笑ったミルフィリアの顔、拗ねたように片頬を膨らませる歳相応の顔、まるで走馬灯のように俺の頭を巡る。そしてそれを塗りつぶす黒い感情。魔霊合激か。厄介だが、不用意に距離を詰めれば坂城の鳥が迎撃してくる。やらせるか。部下を平気で捨て駒にする戦場の指揮官もかくや、冷たくて吐き気がする。そしてそのなけなしの良心すら塗りつぶす黒い感情。坂城がその禁忌の完了を今か今かと待ちわびるように白い球体を手の平に浮かべた。いいのか？ 無垢に笑った坂城の顔、助けてくれと懇願する子供のような泣き顔、愛してくれと飢えた瞳、まるで走馬灯のように俺の頭を巡る。そしてそれを塗りつぶす黒い感情。白の魔法か。魔霊合激を得たミルフィ

リアと共闘の中で放たれたなら、避けるのは骨が折れそうだ。愛する者を裏切る人格破綻者もかくや、穏やかで胸が悪くなる。そしてそのなけなしの良心すら塗りつぶす黒い感情。

だってコイツ等は、俺の知らない顔をして、俺の知らない声で笑って、俺の知っている人間を平気で殺したんだぞ。ヒメネスの敵討ちなんて言わない。彼が、優しい彼がそれを望むとも思わない。奈々華を守るためだなんて言わない。俺が殺すんだ。憎いから殺すんだ。腹から何かを叫んでいた。自分の耳でも何を言っているのかわからない。きつとそれに言葉として意味はない。言葉になる前の感情。鱗の生えたミルフィリア。もうアレはミリーじゃない。静かに巨鳥に指示を出す坂城。もうアレは坂城じゃない。左目が痛い。ズキズキする。神経痛のようなそれは間違いなく俺の意思。後ろからは三つの死体が近づいてくる。俺には奪う力しか、壊す力しかない。もういいや。何でもいいや。スイッチが切り替わったみたいに、再び俺の心の中で黒い炎のようなものが燃え盛るイメージが湧き上がった。

終章 第二百四十話…傀儡

特殊な保存法のおかげか、原形を留めている二つの遺体が唇を動かして続ける。そこから音は出ないのに、契約した精霊もとつくにこの世界に居ないのに、二つの遺体は詠唱時特有の光を放つ。恐らく坂城の魔力、ひいては坂城が精霊である巨鳥の魔力が流れ込んでいるのではないか。仁が駆ける。翼を得たミルフィリアがばさばさと宙を舞ってそれを追う。彼女に残された時間は少ない。ヒメネス、元はヒメネスだった死体は、幽鬼にでも乗っ取られたように左右に振れながら、奈々華に近づいていた。詠唱の途中、少女達は回避もかなわないまま、仁の刀に斬り伏せられる。その目に恐怖も痛みもなくて、仁の目にもまた感情が窺えなかった。二つの遺体は、衝撃に倒れ、またのそのそと起き上がる。急所を突かないと、完全に動きを止めることは不可能だった。仁の胸の内に、微かに残る理性があるとするなら、死者をこれ以上死なせることへの罪悪感があるのかもしれない。若しくは動きを止められればそれで十分と言うことなのかもしれない。ヒメネスへと猛然と駆ける。やはりミルフィリアが追う。坂城はゆったりと瞳を閉じ、何かしら詠唱を始めていた。感傷を言えば、最悪の光景以外の何ものでもなかった。共に過ごした彼、彼女等が敵味方に分かれて雌雄を決する。少なからず好意を寄せていた相手に、形振り構わず美貌を捨て、命を捨て、牙を剥く二十歳にも満たない少女。愛し愛されることを望み、家族になろうと伸ばした手を振り払われた少女。愛はそのままひっくり返って憎しみや絶望に変わった。良かれと思って動いた青年は失望と悔恨を胸に刻み破壊に駆ける。交わっているようで彼らの道は最初から違えていたのかもしれない。

ヒメネスの心臓は一突きした。仁は先の少女二人に刀を振るった時と変わらず、感情を発露しないまま、動きを止めた体をそっと地面

に寝かせた。その手つきはとても優しくて穏やかだった。そつと瞼を閉じさせる。

「……奈々華。離れてろ」

そしてもう後数歩のところに居る奈々華に声をかけた。その声がいともより低くて、奈々華は仁の左目を見る。くると振り返った仁はその反動で刀を振るっていた。ミルフィリアのカギ爪と静がぶつかり金属音を奏でた。もうほとんど原形がわからないほど翼竜と融合していた。目元だけは涼しげに。翼のすぐ下にシミひとつない白い腕が生えていた。仁はそんなグロテスクな彼女から目を背けることは出来なかった。彼女を、彼女等をそうしたのは他ならぬ彼だった。背後からの攻撃が失敗に終わったミルフィリアはあっけなく体を退く。入れ替わりに小さな太陽のような発光体が飛んでくる。エリシアが詠唱を終えたのだ。仁にぶつかる前に、奈々華が同じものをそれにぶつける。皮肉にも、坂城の見立てどおり奈々華もかなり優秀な魔術師だった。時折教科書を片手に魔術の練習をしているのを仁は見ていたが、詠唱もなしに幾ら死したとしてもフロイラインの魔術師が長い詠唱を経て打ち出した魔法を打ち消すに足るものを放つほどに成長していたとは思っていなかったらしく、ほんの少し驚愕の色を目に浮かべる。しかし感謝や謙遜や驚嘆の言葉を交わす暇は二人にはなく、続けざまに突風が吹く。今度は柿木。だがそれは仁や奈々華を対象にはしておらず、ミルフィリアの体を横へ運ぶ。何事かと、仁がその翼竜の行き先まで目をやりかけて、真正面から強い光を見止める。数十メートル離れた場所の坂城。さっきのエリシアのものは比べ物にならないほど大きな、それこそ太陽が地上に降りてきたような光。とても直視できたものではない、眩い光。

「死ね」

坂城がそう呟いたと同時に、光は放たれた。軌道上に居た二つの死体が一瞬で消え去るのが微かに仁の目に留まった。

終章 第二百四十一話：プリズナー・オブ・ハー・オウン・ディヴァイス

仁はデジャヴのような光景に目を細めながら小さく苦笑した。彼の目から見える光景は、彼の妹が魔術を打ち消す光を放つ背中だった。カウンスペル。光の玉はみるみるその輝きを失い、やがて消えうせた。惑星を吸い込むブラックホールのようなだった。だけどそれは光っている。仁をいつも優しく照らす。奈々華がてこてこ戻ってくる。誉めて欲しそうに仁の傍まで。仁は自然に、ごく自然に手を出して奈々華の頭を撫でた。まるでそこだけ戦場から切り離されたような和やかさがあった。だけど実際には確実に当事者で、それは全く異様で、怖気を覚えたのは静だけだった。

「どうしてだ？」

坂城の声は戦場にあって通った。仁の耳まで届き、奈々華の耳まで届き、ミルフィリアの耳にはもう届かなかった。奈々華を突き飛ばすようにして距離を取らせた仁が襲い来るワイバーンに刀を振るう。ガキーンと小気味よい音を立てるカギ爪と刀。口先から凍てつく吹雪。仁は刀を引いて体も退げる。

「どうしていつも私の邪魔をする？」

坂城の瞳には、確実に憎悪の炎。それは奈々華に向けられている。剣戟の合間を縫うようにして本人にも聞こえたようだ。そして奈々華は笑う。鈴を転がしたように、何でもないことのように。

「兄を殺されそうになって守らない妹は居ません」

そういう狭い局面のことを言っているのではないことは明白だった。聞こえても聞こえなくてもいいような声量は、果たして坂城に聞こえた。坂城は既に無警戒に距離を詰めていた。

「お前さえ居なければ……」

「兄を幸せに出来ない人に託すことは出来ません」

「どうして幸せに出来ないかと断言できる？」

「貴方の愛は薄っぺらい。もらうことだけを前提にしている」

奈々華が勝ち誇ったように笑う。奇異に映ったのはやはり静の目にだけだった。

「だから誰も貴方を愛さないんですよ」

可哀想な子。近藤の言葉を奈々華は知らないのに、それは奇しくも同意見となった。

坂城の瞳に宿る怒りや憎悪、負の感情が強くなる。その底流は圧倒的な殺意。仁に向けるより強く。

「姉様。足止めを頼みます」

酷く冷たい声。もうそれもミルフィリアの耳には届いていないだろう。理性を失っているのは、対峙する仁が一番よくわかっている。攻撃も粗く、単調で、受ける場面も減り、段々と楽にかわされるようになっていく。終わりが近づいている。坂城が距離を取る。再び数十メートルは離れただろうか。詠唱に入った彼女の体は虹色に光っていた。

ヒュンと風を切る音がして、それは仁の体とは離れた明後日の方向を搔く。目が暗くなっているのかもしれない。それでも体だけが狂ったように爪を振るう。遅すぎて仁は優雅に踊るようだった。片翼が溶けるようになくなった。バランスを崩した体が宙で大きく傾く。そのまま翼を失った半身の方から地面に突っ込む。地面に墜ちたときにはもう片方もなくなっていて、腕だけが残っている。鱗がボロボロと剥げ落ちる。うつ伏せたミルフィリアに仁は瞳を閉じて首を振った。ザリザリと歩を進める音は、彼女には死神の足音だろうか、終わりを告げる福音だろうか。ピタリと彼女の頭の先で足を止めた仁は口を開く。

「君は…… 死に場所を探していたのか？」

「……さあ」

いつものように飄々と。

「誇っていいですよ。私が惚れたんですから」

「……すまない」

「謝ればいいってもんじゃないですよ」

「……すまない」

ミルフィリアはゼイゼイと荒く苦しい息を吐きながら小さく笑った。そして胸元から短刀を取り出し、安全のために巻かれていた白い布を解くと、白銀の刃が光った。仁はどんな顔を作って良いのかわからず、顔中の筋肉を意識的に強張らせて、ただミルフィリアの頭を見つめていた。

「ありがとうございました。私の両親を私のエゴから解放してくれて」

「……ああ」

「卵を落としたのは私です。貴方の反応を見て、刀を覚醒するように進言したのも私です」

「……ああ」

「私のこと…… 憎いですか？」

「……」

「……最低ですね。でも貴方のそういうところも嫌いじゃなかったですよ？」

また小さく笑って、

「……ユーアースイミラートゥーミー」

ミルフィリアが短刀を自分の首に突きたてた。

終章 第二百四十二話：終わり待つ少女

奈々華の体が吹き飛ぶ。死に至るような傷は負っていないが、倒壊したビルの残骸に強かに背中を打ちつけた。「うう」と小さく唸る。坂城の追撃は止まらない。虹色に光る体は詠唱もなしに魔法を打ち続ける。それが彼女の、全色使う虹の魔術師の、真骨頂だった。奈々華もまたいつの間に覚えたのか、薄ぼんやりと白く光るホログラムのような魔法の障壁を体の前に出して防御をしていたのだが、排気ガスのように黒い気体が球状を成して押し寄せれば相殺してしまった。

「もっと早くこうしていればよかった」

坂城の声は、奈々華までは届かなかった。再び手の平から霧のように黒が浮かぶ。シャルロットが駆け寄り、奈々華の目前に小さな肢体を放り出した。

「仁は私を頼るはずだったのに、慰め癒すのは私のはずだったのに……」

「……」

奈々華はのそのそと緩慢な動きで立ち上がる。ミルフィリアを看取った仁が駆けつけるのも見えて、それはきつとぎりぎりで黒い球体が奈々華に走る前に間に合うだろうという速度だったが奈々華は立ち上がった。同じ男を愛する者として、坂城に遅れを取るわけにはいかなかった。

「妹のくせに、お前こそ幸せには出来ないだろうに」

「私はたとえそれが茨の道であっても、お兄ちゃんと手を繋いで歩いききる覚悟を持っています。でなければ実の兄を愛したりしません」坂城の目が一際大きく輝く。今の今まで仁の心証を考えて手を下すことが出来なかった邪魔者に、怒りの鉄槌を下すその瞬間を思えばこそ、生涯でも最高に輝くのだった。

黒の魔術においては、坂城が仁を上回ることではなく、何か夕暮れの薄闇が夜の闇に包まれて消え去ったように見えるのと似ていた。仁の体は漆黒の闇に包まれていた。そこに飛んで来た黒い霧は吸い込まれるように同化した。

「ミルフィリアは死んだ。次はお前の番だ」

完全に脳内を凶暴が埋め尽くしたのか、はたまたラインハルトが見せたような虚勢か。顔も見えないほどに黒い霧は体を覆う。丸太鬼がかりそめを捨てて顕現した時を彷彿させるほど禍々しくて夜より暗かった。半端な色は全て塗りつぶして同化してしまいそうだった。黒の絵の具のチューブを全部パレットに出して、その上に何かを混ぜるというような無茶苦茶な濃さだった。

「……選択か」

しかし坂城が呟いたのは全く違うことだった。濁った目をしていた。「選択だ」

彼女が強いたものばかりだったけれど、仁の答えはいつだって決まっていた。

「私ではなく、そいつか」

「お前ではなく、奈々華だ」

背後でよろよろと立つ妹に、仁は振り返って小さく笑った。坂城は大きな声を出した。何と言っているのかわからない。悲鳴に近かった。丁度仁がさっき腹の底から捻り出したものと同質だった。四方に六色の魔法を撒き散らして、残った建物の壁にぶつかって抉り、地に伏す死者にぶつかって抉り、混乱の中の白い球体が仁に向かってきたが、それは仁の黒の装甲をほんの少し削るに留まった。

「全部中途半端なんだ！ 誰も！ 彼も！ 何もかも」

坂城の言葉の中で唯一意味が通るセンテンスは、悲痛だった。仁の圧倒的な黒に反対属性が効果を成さなかったことはきつと彼女の瞳には映っていない。映っていたとしてどうでもいい。中谷のようにはなりきれず、中途半端に人を求め、中途半端に賢いから木室の二面性を見破ってしまった。中途半端な優しさがミルフィリアの両親

を歪んだ姿にして、彼女のエゴから嫌われた。坂城の両親については推し量るしかないのだが、きっと全て木室に教育を任せていたところから見ると、また彼女の片思いだったのかもしれない。中途半端に慈しまれて育った彼女は本物の愛を求めて、中途半端な方法をした。奈々華を殺すほど冷酷にはついぞなれず、僥倖を待つようなやり方は、中途半端だった。

「……楽にしてくる」

そつと言った仁に、奈々華の返事は聞こえなかった。

「ごめんね」

彼女は確かにそう言った。

黒い刃は生命力を根こそぎ奪うようなえげつなさがあった。太陽を遮る厚い雲のように思った。どんな生命も生きてはいけない暗闇の世界。誰に言われたわけでもないのに、俺の体からは黒い霧が溢れ、思えば村雲の忘れ物なんじゃないかという気さえする、それを静に纏わせた。そしてそれを坂城の胸に突きたてた。ごふつと鈍くむせて、坂城の口から血が飛ぶ。顔にいくらかかかって、急に冬の寒さを思い出したように、頬にぬくもりを感じた。近藤さんの最期を思った。こんなに冷静ではいられなかったな、と思い出している。「人は慣れる生き物だから」

「……仁」

名を呼ばれた。いつからだだったか、奈々華と識別するために苗字で呼ぶのをやめたのだと思った彼女の瞳に特別な熱を感じはじめたのは。彼女の体はもう自重を支えきれず、俺に抱きかかえられるようにして凭もたれている。

「ああ」

俺だ。お前を選ばなかった男だ。はは、と小さく坂城は笑った。どんな感情から笑っているのか俺にはもう推測すら立たなかった。

「いつか君の腕の中で眠れる日が来ればいいと思っていたが……」
こんな形とは思わなかった。脳内で次の言葉を補完する。坂城はもう話すのも辛そうだったから。

「俺もお前と同じだよ。誰かに愛されるということを斜視して諦めて求めている」

「なら愛してくれてもよかったろう」

愛に飢えて、愛に憧れた男と女が、互いに探り探り、見よう見まねに、互いを愛し合ってみる。痛みや孤独を知る両者は、互いに仁を持って向き合って、いつしか本物の絆が出来上がる。ベタで面白みがなくて、きつと最高に幸せだ。夢想しなかったわけでもない。それでも……

「俺はもっと大きくてあったかいものを見つけた」

選択、選択、選択。見てきたろう？ 俺が奈々華を選ぶことなんてわかっていたろう？

「わかっていたさ。私じゃないことくらい。それでも欲しかったんだ」

何でだろう？ 普通は次の恋に向かっていくだけで、こんな殺し合い……

きつともう疲れたんだ。一方通行を走り続けるのに。いつだって寄りたい店は、楽しそうな場所は、反対車線にあって、Uターンも出来ないんだ。わかる、知っている。ああ、そうか。この子にも俺は似た匂いを感じ取っていたのか。エゴイステイックな面じゃなくて、厭世と諦観はとても似ている。強すぎる力に宿命づけられた孤独も。俺が望んだんじゃない、こんな力なんて要らない。何度も思ったぶつける先もわからない彷徨う呪いは、きつと彼女も心の中で何度も呟いた言葉なんだろう。

「君は…… 君は死に場所を探していたのか？」

「ああ」

きつと「君にフられるまでは」という但し書きは、彼女の胸の中だけなのだろう。いっそ人外なら、体が二つにわかれるような力なら

良かったのに。そうすれば奈々華の傍に居てやることも出来て、この子にも不器用で不恰好な愛を与えられたかもしれない。

「はあ。もう疲れたな。君の手で……」

静が水を得た魚のように妖しく光っているように見えた。じゃあ俺もこんな目をしているのか。右手を持ち上げた。左手はもう、価値のない同情を抱いた少女を支えているのか、獲物が逃げないように押さえ込んでいるのかわからなかった。

「終わらせてくれ」

ブシュツと鈍い音がして、目の前が真っ赤に染まった。

終章 最終話：極楽鳥が鳴く時

仁はずるずると落ちていく坂城の体をじっと見つめていた。それはついに、これまで屠ってきた誰ともそっくりに、地面に突っ伏して動かなくなっていた。仁はそうなってもしばらく、虚ろな瞳でそれを見ていたが、やがて頭を大きく振って、後ろを振り返った。奈々華はすぐ傍まで来ていて、仁の体を赦すように包んだ。

「なあ、奈々。俺おかしいんだ」

仁は焦点の定まらない瞳で遠くを見ながら言った。コンクリートの破片がポンポンと足元まで転がってきた。骨組みの大切な場所を壊された小さな雑居ビルが、ついに耐え切れなくなって今しがた倒壊したのだった。丁度奈々華がぶつかったビルの残骸がある、その隣だった。

「酷いことしたのに、涙が出ないんだ」

「……お兄ちゃん」

「胸が痛いのに、涙が出ないんだ」

数ヶ月時間を共有した人間を自ら殺めたのに、仁の瞳は乾いていた。「俺おかしくなっちゃったのかな？」

だけど奈々華が抱く仁の体は、小刻みに震えていた。恐怖なのか、怒りなのか、悲しみなのか、もう彼自身にもわからないのだろう。

「カティに挨拶してないや。行方に世話になりっぱなしだ。静が行ったら、吃驚するだろうな」

ぶつぶつと。二時間前に唱えた読経のようだった。遠くにキャンプファイアーのように火の手があがっていた。車が出火元だが、冬の夕暮れの乾いた空気の中では面白いように火は広がっていた。

「説明しておけばよかったな」

それは行方にか、カティにか。巨大な鬼が迎えに行くことになるかもしれない。戻って来ると言われてぐずらせることなく行方におとなしく預けられた子供に、もう自分は帰ってこないかもしれない

と。

「……あつしが何とか丸く収めれますよ」

静がおずおずと口を開いた。仁は「すまないな」と返した。

「お前にも世話になった。賭けは俺の負けだな。最後に俺は笑っていない」

「……いえ。あつしの負けっす」

仁は少し下を向いて静を見た。顔色は窺えないけれど、村雲亡き後名実共に相棒として共に過ごした相手が何を言わんとしているのか、何となくわかった。

「アンタはまた立ち直れるっす。一つ折れない魂を見つけたアンタは」

「そうだろうか？」

いや、そもそも彼は今、打ちひしがれているのかも自分でわかっていない。

「ええ。だって今だってこれからだってアンタはその折れない魂に、抱かれているじゃないすか？」

仁は半信半疑の目で静を見つめたが、返ってきたのは「もう行くっす」という力強い声だった。刀身はさっきまで仁が纏わせていたのと同じような漆黒に包まれて、仁は優しく地面に突き刺す。霧が晴れると青鬼が優しい目で笑っていた。

仁はメールを打った。曰く「ヒメネス含め四つの死体をどうにかして丁重に葬って欲しい」ということと「近藤の遺骨を代理に受け取って、墓に納骨されるのを見届けて欲しい」ということ。「自分が持つ大金を銀行から下ろして、ヒメネスの残された家族へ送って欲しい」ということ。口座に繋がる暗証番号も付記した。通話をして、声を聞くのは今の仁にとっては辛かった。広畠にメールを打つのは初めてで、これで終わりだった。最後に「無理ばかり言って申し訳ありませんが、何卒お願いします」とつけて送信した。

名を「極楽鳥」と名乗る坂城の精霊は、主との盟約を忠実に守る気概を持ち合わせていた。「私が死んだ場合、彼ら兄妹を元居た世界に帰して欲しい」それが坂城の最後の願いだった。

極楽鳥は、ついさっきまで刃を交えた男、主を殺した男によくすることに積極的ではないようだが、与えられた使命だと自分に言い聞かせることで何とかそれを遂行しようとしていた。

「早くしろ」

極楽鳥は冷たく言い放った。彼にはその権利がある。仁はそう思った。

虹色の、膨大な光が兄妹の周囲を包む。それは光の柱となってはるか遠方からでも見止められる。それは街を無くした人々の希望の光になって各々の目に届くのだろうか。はたまたまるで悪魔の儀式のように映って、更なる破壊をもたらす予感を与えるのだろうか。

「結局俺は何もかも人任せだな」

仁が目元を擦った。涙はやはり出ていないから、それは左目の長時間使用のせいで訪れた睡魔に抗うためだった。

「……」

「もっとやりようがあった筈だ」

最後の尻拭いを静や広畠に頼んだこと。殺したくない人間を多数殺める羽目になったこの場所での立ち回り。

「さっきの話だけどさ。お兄ちゃんは大丈夫だよ」

奈々華が両拳を作って対面に座る仁に元気な声をかけた。後光が差したように、六色に照らされる奈々華に仁は目を細めた。極楽鳥はそのサークルの外、瞳を閉じて囁いている。それは魔術師の詠唱にあたる。段々と囁りは大きくなり、光も強くなっている。いよいよこの異世界との別れは近づいている。名も知らぬ男が世界を救い、傷ついて帰る。

「どうしてそんなことが言える？」

奈々華は座ったまま仁の傍までにじり寄り、その顔を抱き締めた。

会ったこともなくて、これから先会うこともないだろう母すら投影している節があることを知るかのように、奈々華は優しく胸に抱く。

「壊れてるのはお兄ちゃんじゃなくて、世界の方だよ」

ほら、と奈々華が目元を拭ってやると、その指はじんわりと生暖かい湿気を帯びていた。

「……あくびだよ」

クスクスと奈々華。だけど現に仁は眠たそうで……

「そうだね。今は眠って。辛いことも悲しかったことも忘れて……」
奈々華が眠りを誘うように兄の前髪を撫で付けると、仁は意識を手放した。

「そう。私だけはずっと居るから、安心して」

光は輝きをいや増す。もうお互いの顔も見えないくらいの眩さの中で、兄妹は互いの体温を通わせていた。

極楽鳥が大きな声で一つ鳴いた。

終章 最終話：極楽鳥が鳴く時（後書き）

冗長だけが取り得のような拙作にお付き合い下さり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2720i/>

妹の異世界譚

2010年10月9日04時49分発行